
姦 ~ 霊能三姉妹の怪奇事件簿 ~

鬼之子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姦ゝ霊能三姉妹の怪奇事件簿ゝ

【Nコード】

N0221R

【作者名】

鬼之子

【あらすじ】

奇怪な事件の裏側に潜む人間の業。そして狂気染みた殺人。それは時として「人ならぬもの」がそのものの体を蝕んでの所業であった。

そんな「人」では対処出来ない事件を解決するは、ある神社に住まいし三姉妹であった。

彼女ら「人ならぬもの」を罰するものなり。

*HPで連載している本作をさらに推敲編集したものです。物語は

基本連作短編集。話自体はその話中で終わりますので、どこから読んでも大丈夫です。(多分)ですが、作品全体は続けて読まないといけないものが多いです。

巻：宵の口（前書き）

この物語はどうせ作り物です。実際の人物・風景・場所等は何ら一切の關係はございませぬ。また、作中差別的な表現が含まれております事を予め^{あらかじめ}ご了承下さい。

巻：宵の口

妙に肌寒い五月の初め。林道を歩いていて、中学生くらいの少女が空を見上げると、ゆっくりと入道雲が南側の位置から、東の方角へと流れていく。

その雲の厚さから、一雨来そうなほどであった。

それに気づいた少女が林道を急ぎ足で抜けようとした、その時だった。

ピンと糸を弾いたような音がするや、その場で跪き、前めりになるかのように倒れた。

少女が倒れるよりも先に、ゴロゴロと何かが転がる音を小さく響かせ、次第に道幅の段差に引っかかり止まった。

それが少女の頭部であることを表すかのように、首の切り口から間欠泉のように血が吹き出し、少女の遺体の前には、一真つ赤に染まった血溜まりと、色鮮やかな水の轍が出来上がっていた。

少女の変死体が発見されたのは、それから二、三時間ほど経ってからだった。

発見が遅れたのは、少女が殺されてすぐに雨が降り始めたため、誰も林道を通らなかつたからだ。

少女の死体を発見したのは、一人の老人である。ちょうど、犬の散歩中に発見したと、警官に説明する。

現場搜索の最中、何人かの警官が林から出て来た。

小一時間ほど搜索していたが、何もないと云った感じに、各々が納得のいかない表情を浮かべながら、首を傾げている。

そんな中、少女の死体を、懸命に見ていた警官が違和感を感じて

いた。

無残なまでに綺麗な切り口は、相当鋭利な刃物で切り落とされたと推測できる。が、その痕跡が死体以外、強いては切られた首と体の切断箇所以外からは見当たらなかった。

襲われたのならば、少なからずとも抵抗していたはずであり、背後から襲ったのならば、服に土や埃、砂利などが付着していたはずである。

そして抵抗のさい、犯人の皮膚が爪に挟まっていたのなら、それが事件解決の手掛かりになることが多々ある。

だが、それら全てがなかった。少女は、まったく抵抗せずに殺されているのだ。

少女の切り口には皮、無数の血管、骨、骨髄、全てがねじられたかのように切られている。

鋸で切り落とした場合、どこかに引つ掻き部分があるのだが、検死結果には、そのようなものはなかった。

何より、血溜まりの跡が、死体の前にしか残されていない。鋸で切ったのなら、刃に血がつき、どこかに垂れ落ちているはずだからだ。

警官はなお首を傾げた。ふと、自分のオカルト知識が頭に過った。

首なしライダー。

バイクに乗っている最中、悪戯で向かい合った電柱に結び張られたワイヤーに猛スピードのまま引つ掛かり、首が切られ、殺されたドライバーの怨念が、夜な夜な殺された場所で走っているという都市伝説がある。

考えてみれば、この死体の殺され方と類似していたからだ。しかし、だからといってこの考えを上にも報告するべきではないだろう。飽くまで都市伝説。噂に過ぎないからだ。

もし、彼が考えている様に、ワイヤーが何かで首が引つ掛けられ、殺されているのなら、その対象、つまり少女の歩くスピードにもよるだろう。

しかし人間の、ましてや中学生ほどの少女が走ったところで、引つ掛かる程度だったはずだ。

それなのに切断されているという事は、どれだけの速さで彼女は走っていたのか？ もしくは自転車で走っていたのか？

その自転車は見つからないどころか、木を一つ一つ調べても、ワイヤーを巻いたような痕跡すら見つかっていなかった。

遅れて、一台のパトカーが林道の中に入って来た。数十米ほど離れた場所に停まると、後部座席のドアが開いた。全員がそのパトカーに向かつて、敬礼をしている。

「ああ、いいよいよ。ご苦労だった」

降りて来たのは、麦藁帽子を深々と被った一人の男性だった。

見た目からして、四、五十歳をいったところか。

「で、被害者は？」

初老の警官が、近くにいた若い警官に尋ねた。

「あちらです。阿弥陀警部」

そう言うや、若い警官が阿弥陀警部を案内する。

阿弥陀警部は死体を見るや、手を合わせ、拝んだ。

「で、ガイシャの身元は？」

「近くに学校指定の鞆が落ちてました。その中に生徒手帳が入ってまして、ガイシャの名前は【対馬怜菜】つしまれいな 中学二年生。家はこの林道を抜けてすぐの住宅地のようですね。殺されてから、まだ間もないみたいですが、先程の夕立で血は流れてしまっているみたいです」

若い警官の報告を聞きながら、阿弥陀警部は少し考え、「つまり、その痕跡も？」と尋ねる。

「その可能性は有り得ますね。ワイヤーが何か首を絞められたにしても、ここまで綺麗に切られる事はまずないでしょう。つまり、被

害者は大きな鋏はみか何かで切られた……と考えますか？」

途端、阿弥陀警部は、ジツと少女の遺体を見つめている警官に目を遣った。

それはさきほど、奇怪なことを考えていた警官である。

「……………それなら、ガイシヤは逃げるでしょう。しかし、その様な痕跡どころか、強姦ごうかんされた形跡けいせきもない。ましてや、うしろから襲われれば、死体は仰向けあおむけではなく、うつ伏せぶせになって倒れているはずです」

そう言つと、阿弥陀警部は頷いた。

彼自身、これが人間による犯行なのかが疑問だった。途端ポツポツと雨が振り出し、それが次第に強い暴雨となった。

その場にいた全員が、突然の暴雨に慌てだす。

「水に流れましたな？」

阿弥陀警部がそう呟つぶやくと、苦虫を嚙かんだ様な表情を浮かべた。

き・宵の口（後書き）

文章訂正しました。指摘ありがとうございます。

式・稻妻神社

あれから一兩日、てんで捜査に進展はなかった。あの林道を通る人はごまんといるのだが、対馬怜菜が通った時には、偶然にも誰もいなかったからだ。

つまり、犯人はその場にいたのか、もしくはワイヤーをどこかに仕込んでいたのか……

ただし、それは人間が犯人として考えればの話だ。

しかし、その痕跡が見つからない以上、隠れて殺すどころか、ワイヤーを木と木の間に張り巡らして殺したとは考え難い。強いては被害者だけを殺す事は天文学的に近い。

対馬怜菜が一人で現場となった林道を通る事はわかっていたとしても、殺害された時間、彼女一人だけが林道から雨が降り出す事で焦り、走り出す事を誰が予想できようか？ たとえ天気予報で雨が降る事を知っていたとしても、いつから降り始めるのかというのは、天気予報士でさえ、ハッキリとした時間を言い当てるのは難しいものである。

その事を考えると、人間が出来ることではないかもしれないという警官が後を絶たず、強いてはオカルト的犯行だと述べる者まで現れる始末だった。

そんな中、阿弥陀警部と若い警官は町外れにある小さな神社に立ち寄っていた。

「大宮くん？ ちょっと御神籤でも引きますか？」

「警部？ 遊びに来たんじゃないんですよ？ 警部がどうしてもと言つから……」

若い警官 大宮巡査は不服そうにそう言うと、

「まあまあ、神社に来たら、お参りと御神籤でしょ？ これは常識

です」

「誰が決めたんですか？」

「私ですけど？」

そうお道化^{どけ}てみせる阿弥陀警部に大宮巡査は溜め息を吐く。

「せいっ！」

怒声にも近い、張りのある声の本堂の方から聞こえてきた。

勢いのあるその声は、遠くにいた二人に戦慄を走らせるほどである。

本堂の中を覗いた阿弥陀警部と大宮巡査は、ほっつと声を出した。少女の見た目は殺された被害者と然程変わらなかった。

袴を着てはいるが、防具は付けておらず、右手には長刀、左手には小刀を、それぞれ一本ずつ持ち、構えては振り下ろしている。

うしろに束ねた黒髪がまるで時間が止まったかの様に静かに宙に漂っている。

その動きは剣道の稽古をしているというよりかは、むしろ舞に近いものがあった。

それを見ていた大宮巡査が首を傾げた。

「警部、彼女は どうして竹刀を二つも？ 普通、反則になるのでは？」

少女の持つ二本の竹刀に疑問を持つや、大宮巡査は阿弥陀警部に訊ねる。

「いや、反則ではないみたいですよ。まあ、一本でも難しいんですけどね？ 彼女、実力だったら、有段者なんですけどね」

阿弥陀警部が含み笑いを浮かべていると……

「そんなところにいらっしやなくても、こちらに来て見てくれてもいいんじゃないんですか？ 阿弥陀警部」

本堂の方から少女が阿弥陀警部らに声をかけて来た。

「おや？ 臯月ちゃん？ 今日もまた一段と汗をかいてませんか？」
「遣り始めてまだ2時間ですよ？ ちょうど体が暖まったところなんです。どうですか、一勝負……」

そう言うと、少女……臯月は持っていた長刀の竹刀を阿弥陀警部に放り投げ、自分はそのまま、靴を履かずに足袋のまま境内へと降りた。

「け、警部？」

「大宮くん？ 少し離れた方がいいですよ？」

そう云われ、大宮巡査がキョトンとした時だった

竹刀同士がぶつかりあう音が境内に響き渡り、激しい攻め合いを繰り返す。両者一步も譲ろうとしない。

阿弥陀警部が持っているのは平均的な長さ（三尺七寸＝百十二糎）
の竹刀であるにも拘らず、臯月は小刀である。傍目から見れば、臯月の方が不利に感じるが、全く引けを取っていない。

「へえ？ 全然衰えてませんか？」

臯月は攻め合いながらも、まるで楽しんでるような声を出す。

「がははっ！ 青二才にまだまだ負けるほど、落ちてませんよ！！」
阿弥陀警部が大きく笑みを浮かべる。

「それじゃ、私も……」

そう言うと、臯月はうしろへと飛び下がり、阿弥陀警部との間合いを大きく広げた。その刹那、まるで彼女が意図するかのように風がやんだ。

3人の周りにただならぬ空気が流れる。阿弥陀警部が一際険しい表情を臯月に向けた。

臯月は左手に持った竹刀を逆手に持ち変え、腰を低く構えた。右手を手前に出し、まるで忍者のように見える。

「閃ッ！！」

皐月が叫んだ時には既に、阿弥陀警部との間合いは縮まっていた。阿弥陀警部が小さくうめき声を挙げるが、皐月の竹刀は阿弥陀警部の竹刀に当たっていた。

その刹那

「はああああああああああつ！！」

皐月の鬼気迫るその覇気は、まるでそうなる事を予想していたかのように、受け止めている阿弥陀警部の表情はより一層険しくさせていた。

ふと、大宮巡査は皐月の竹刀に疑問視していた。さつきから右手から左手へ、左手から右手へと交互に持ち変えられている。それどころか、さつきだつて、逆手に持っていたはずの竹刀が何時の間にかきちんと持ち変えられている。

「皐月っ！」

途端、社務所の方から女性の声が聞こえてきた。その言葉が合図になったのか、皐月と阿弥陀警部はピタリと動きを止めた。

「や、弥生姉さん？」

皐月はゆつくりと声をかけた女性を見遣った。表情は先程見せた、夜叉のような鬼気迫る雰囲気は皆無に等しく、まるで叱られている小犬のようだった。

「阿弥陀警部も…… すみません。この子また出鱈目な竹刀の使い方…… ほらっ！ 竹刀は一本を両手で持つものだって言われたでしょうが」

「がははっ！ いやいや！ 弥生さん？ 皐月さんの物怖じしない姿勢は、優位に値しますからね？」

「そうでしょうか？ 私から見たら、ただ振り回しているとしか？」

女性 弥生は、見た目からして高校生くらいか、それも3年生くらいだろう。丁度大人の女性というところまでだが、どこか少女のような雰囲気もあった。

着ている服が巫女装束で、持っているものは 矢である。

「 警部、彼女は？」

大宮巡査が阿弥陀警部に耳打ちをするように訊ねた。

「ああ、彼女はこの稲妻神社いなずまの長女ですよ。名前は弥生さん。で、私に勝負を挑んで来たのはその妹さんで、次女の皐月さん」

阿弥陀警部がそう説明し、大宮巡査は二人を見た。弥生と皐月は軽く会釈する。

「 ところで？ 弥生さんの持っているあの矢は？」

「破魔矢はまやですよ？ よく正月に買いに行くでしょ？」

そう言われたが、今の今までそんなものを買った記憶のない大宮巡査は首を傾げた。

「まあたっ！ 足袋の俣またで降りたみたいね？ 裏が泥塗どろまみれになるの

わかっているの？ それで足袋だけ別に洗わなきゃいけないから水道代しろが……」

愚痴ぐち々と弥生から小言を言われ、皐月はその場に正座させられていた。

「 弥生さん？ 神主は御在宅かな？」

阿弥陀警部が尋ねると、弥生は小さく頷く。そして、少し嫌そうな表情を浮かべ、

「 何か事件でも？」

「 まあ、ちよつと……」

歯切れの悪い返答に、弥生と皐月は互いを見遣った。

弥生が神主を呼びに行っている間、皐月に本道へと案内された阿弥陀警部と大宮巡査は、丁度中央のあたりに座った。

大宮巡査は物珍しいのか、キョロキョロと本堂の中を見渡している。

ふと天井を見上げると、黄金色こがねいろに輝く稲穂が描かれていた。

「警部？ 不思議に思っていたのですが、どうしてここは【稻妻神社】っていうんですか？」

「稻妻はその言葉通り、『稻の妻』を意味しています。古く稻妻によつて、稲が実ると信じられていたからだそうです」

そう聞くと、再び大宮巡査は天井を仰いだ。

「この【稻妻神社】は稻荷神社いなりでもあつて、五穀ごこくの神【倉稻魂神】うかのみたまのかみを祭っているんですよ」

稻荷という言葉を聞くと、大宮巡査はお腹を鳴らした。恐らく、稻荷寿司を連想したのだろう。

「はははっ。丁度夕餉ゆづげ前ですからな？ どうですか警部」

本堂へと入つて来た老人が、酒を飲む仕草を見せる。

「おっ、いいですね？ 話がてら」

「け、警部？」

大笑いしながら本堂を後にする二人に、呆れながらも、大宮巡査は後を追つた。

参・三姉妹

本堂の裏側に庭園が見える。そこからほんの数米先に母屋おもやがあり、そこが神主と姉妹が暮らしている一軒家となっている。

阿弥陀警部と大宮巡査は、皐月と神主に案内され、部屋の障子襖を開けるや、美味しそうな匂いが漂って来た。

和室には長方形の卓袱台ちゃぶだいがあり、その上には色取々の野菜や“肉”などで作られた料理が配列されていた。

肉？と大宮巡査は首を傾げる。確か、神主とかは肉を食べてはいけないんじゃないかとそれを近くにいた皐月に訊いてみると、

「あつ！ それお寺の住職だけの話。別に神社は仏様を扱ってるんじゃないくて、あくまで神様を祭ってるだけだから…… それに爺様は大の酒豪で、阿弥陀警部と飲み比べするくらいだから」

そう云うと、皐月は視線を阿弥陀警部と神主に向けた。何時の間にはじめたのだろうか、既に一升瓶リットル（約1・8立）を軽々と飲み終えている。

「がははっ！ 今日はまた度数が低いですな？ これくらいじゃいくら飲んでも酔いませんよっ！」

「弥生っ！ まだ酒倉さかやにおいてあったじゃろっつ！」

厨房から酒の肴さかなを持って来た弥生は、騒ぎ立てる二人に呆れた顔で見やった。

「それ、今度御神酒おみきに使おうと思つてた清酒なんだけど？」

「構わん構わんっ！ 少しアルコールを入れた水で十分じゃ！ どうせ三三九度とか！ ちびちびとしか飲まんじゃろっつからなあっ！」

「そうだっ！ そうだっ！ 酒は一気に飲むのが一番うまいっ！ ほれっ！ 神主も一気に入……」

阿弥陀警部が酒をコップに注ぎそそ、神主に薦めた。

「あ、阿弥陀警部！ それって強要罪じゃなかったですかね？」

「大宮くん？ これは同意の上で遣ってるんですよ！」

ニヤツと不敵な笑みを浮かべる阿弥陀警部が大宮巡査を一瞥いちべつした。
「はあ………」

呆れ返った大宮巡査の足元をスツと小さな影が横切った。

「あら？ 葉月はづき、おかえり」

「臯月お姉様…… この人は？」

そう言うや、ランドセルを背負った小さな少女は、気怠けたるそうに大宮巡査を指差した。

「ああ、この人は、阿弥陀警部が連れて来た警察の人……」
そう言いながらも、臯月も大宮巡査を翼々と見つめた。

「あ、紹介がまだでしたね？ 彼は阿宮忠治巡査おおみやただはる。まあ今日皆さんに訊こうと思っっている事を、私と一緒に捜査してくれている青年です」

阿弥陀警部がそう言うや、大宮巡査はさっきまで明るかった場の空気が途端に静まるのを、肌で感じた。

「まあ、話は食事の最中にでも…… ささっ！ 警部も巡査殿も……」

神主にそう言われ、大宮巡査は臯月の隣すわに坐った。

「で、私達に訊きたい事とは？」

神主が酒を飲みながら、阿弥陀警部と大宮巡査を交互に見遣った。
「実は先日、近くの林道で、臯月さんと同じくらいの少女が、死体となって発見されました。その殺し方が どうも人間がした事とは考え難いのです」

そう言うや、阿弥陀警部は懐ふしろから一枚の写真を神主の前に差し出した。
その写真は有るう事か、少女の首が断裁されたものだった。

「け、警部っ！？」

大宮巡査が小さく腰を上げると、

「ああ、大丈夫！ たぶん、皆さんはそれ以上のものを見てるでしょうから」

阿弥陀警部の言葉に大宮巡査は首を傾げた。

「葉月、何か感じるか？」

先程から葉月がジツと写真を凝視していた。神主が葉月に写真を渡そうとすると、

「な、こんな小さな子供に！ そんな残酷な写真を！」

大宮巡査が止めようとするが、既に写真は葉月の手元にある。大宮巡査は「何時の間に？」と驚いた表情で葉月を見遣った。

葉月は写真を卓袱台の上に起き、手を翳すや、何かを探る様に写真を摩ひすりはじめた。

「……………」

「何かわかった？」

隣に座っていた弥生がそう訊くと

「音……………」という、葉月の小さな呟きに、全員が息を飲んだ。

「ピンって音が聞こえた。……………それから、首が落ちて……………」
「つまり、缺くつじゃないってことですか？」

そう阿弥陀警部が問い掛けると、葉月は答えるように頷いた。

「ピンって 糸や弦を弾はじいたような音が聞こえたの？」

弥生がそう訊くと、葉月は少し考えながら頷いた。

「音が聞こえて、首が落ちた それから血が一杯吹き出してい

て……………でも、すぐに雨が降ってきて……………」

「私達が現場に駆けつけた時は、既に死後二、三時間は経っていたようです」

「それくらいなら、すでに雨で血は流れてしまってますな？」

「それって、何時いつくらいですか？」

「通報を受けたのは、夕方ゆふの6時くらいでしたな」

「それじゃ、逆算して、被害者が下校していたのは午後2時から3

時前後の間……でも、その時間だったら、学校はまだやってるはずじゃ…… 臯月、ここ最近、学校が早く終わるって事はあった？」「テスト勉強期間だったら、部活が休みになるから、早めに帰れるけど？」

「葉月さん？ 被害者が殺された後、すぐに雨が降り出したんですね？ 大宮くん、発見時に周りに水溜まりが出来てましたね？」

阿弥陀警部にそう言われ、大宮巡査は頷いた。

途端、葉月が仰向けになって、倒れた。

「大丈夫、葉月？」

「大丈夫。でも、その死体以外にも誰かいた」

それを聞いた大宮巡査は写真を手に取り、凝視したが、写っているのは被害者だけで、他は何も写っていない。

「け、警部？ 彼女は何を……」

大宮巡査は顔を引き攣つったまま、阿弥陀警部に問い掛けた。

「 神主、あの林道には何が？」

「別に何もないよ？ あそこが昔火葬場で、死体をそのまま野焼のやきにしていた事以外は……」

それを聞くや、大宮巡査は吐き気を催おこした。サラリと凄い事を言い放った神主の神経はどうかしている。と思ったのと、自分が勝手に想像したのが悪いのだが。

「でも爺様？ だからといって、その野焼きされた人達がこれをしたとは考え難いのですが？ 第一、ピアノ線の様な固い糸でなければ骨を切る事も俣はならないはず……」

「確かにわしの言った事はもう60年以上前の話じゃし、その時に彼らにピアノ線を知る事は俣はならないじゃろうな？ 第一、ピアノなんぞ敵対国の物じゃし……」

若い大宮巡査は首を傾げた。「 敵対国？」

「ピアノは元を辿れば、イタリアの楽器じゃからな。他にも禁止さ

れた野球も言う間でもなくアメリカの競技じゃろ？」

「でも、それなら琴の糸とか使わない？」

皐月がそう言うや、神主は首を横に振った。

「林道の長さは人が横に並んで五、六人通れる幅じゃったから……最低でも、20メートルはあるじゃろうな？ そんな長い糸を作るくらいなら、軍事に当ててたじやろう。 警部？ 木にそのよ
うな痕跡は？」

神主がそう訊くが、阿弥陀警部は首を横に振った。

「ちょ、ちよつと待って下さい？ それじゃ…… 勝手に首が落ちたつて事ですか？」

大宮巡査が誰彼構わずに尋ねる。

「……………」

「弥生姉さん？」

弥生が考え込んでいるのに気付いた皐月が声をかける。

「あの、大宮巡査でしたっけ？ その写真には頭が写ってませんが、首はありましたか？」

「えっ？ あ、頭はありましたよ？ 首ですか？」

答えようとした矢先、大宮巡査の首元を阿弥陀警部が触れた。

「頭と胴を繋いでいるのが首ですよ？」

それを聞くや、大宮巡査が……

「あっ！ 確か、鑑識の話だと首だけがなくなっていると報告が！」

「どうしてそういう大事な事を！」

「いやっ！ だって！ 首がなくなっているって事は！ どう考えても“二回切断された”って事になるんじゃないんですか？」

「葉月、音は一回だけだったの？」

弥生の膝を枕にし、天井を見上げている葉月は、答えるように小さく頷いた。

「突然、首がなくなった死体。強いては殺された時に首だけを切られた……………」

神主が考え込んだ時だった。

「首なし？」

臯月がそう呟くと、大宮巡査は「首なし？ 首なしライダーの事ですか？」と尋ねる。

「巡査の言っている首なしライダーは、頭がないやつでしょ？ 私の言っている首なしは、首だけがないの」

そう言われ、大宮巡査は首を傾げた。

「それから林道で被害はこれだけですか？」

「そうです。あれから皆さんには廻り道をしてもらってます。まあ、警察も隅くまな無く木の一つ一つを調べてますからね」

「多分…… 見つからないと思います。臯月の考えた通りなら、音は恐らく風の音。殺された被害者は知らない内に首だけを盗まれた」
弥生が静かに述べた。

「く、首だけを？」

「爺様？ 今夜あたり行きたいんだけど？」

臯月がそう神主に願い出ると「良いですか？ 阿弥陀警部？」

先程の酔いかけた老人ではなく、険しい表情を浮かべた神主が訊ねるや、阿弥陀警部はコクリと小さく頷いた。

「け、警部！ 仮にもまだ……」

「大丈夫ですよ。で、臯月さん？ 何か考えでも？」

「別に考えはないですけど？ でも、葉月の言っているもう一人っていうのが気になって…… 野焼きにされた人達がした事なら、一人じゃなく、一杯っていうだろうし…… それに、もうお払いしてあそこには霊はいないはず」

「れ、霊？ それじゃ、これは霊がした事だつて言うんですか？

馬鹿ばかばからしい！ それが本当だったらどうやって捕まえるんですか？

これは人間がした事ですょ？ 人間がしないで！ 誰が人間を殺せるんですか？」

大宮巡査の言葉は尤もつともであるが、誰一人反論しなかった。

「臯月？ 霊の见えない貴女がどうやって退治する訳？」

「见えなくても…… 感じる事は出来るから…… それに、まだ妖
がしたとは限らないでしょ？」

二人の会話に大宮巡查はてんでついていけない。それどころ
か、世迷言よまいごとをと考える始末だった。

しかし、臯月と弥生のまるで何かに気付いたような、愁うれいのある
表情は神主の柏手かしわて一つで普段の表情へと変わっていた。

参・三姉妹（後書き）

【追記：11/05/23】文章直しました。
一応補足として、「琴の弦でもいいんじゃない？」と臯月が訊ねていますが、弦の長さは切られていない場合、百八十糎センチほどしかないようです。また、弦は長いと邪魔になりますから必然的に切られますので、それ以上に短くなります。

肆・二つ目の死体

丁度、阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社で談話していた頃だった。「よしっ！ 今日これで引き上げるぞ！ また明日、近辺を捜索だ」

『鑑識』と書かれた腕章を着けた男がそう言うと、周りにいた数名が了解の声を挙げる。

「湖西主任？ 一日中調べて、ワイヤー痕なんかありませんでしたか？」

「しかし、鉄で殺すには相当な腕力がいらいますからな？ それくらいの事が出来る大柄な男は目撃されてないでしょ？」

湖西鑑識長がそう言うや、訊ねられた若い鑑識員が頷いた。

「それに切った時に出る返り血を浴びたまま、徘徊する訳でもあるまいに……」

「ところで、首がないという報告がありましたけど？」

「あ、はい！ 被害者の顎の骨と胴体の付根部分に至って、一切合財なかったそうです」

「2度切った訳ですかね？」

「否、それだったら、被害者の服に血がこびりついているはずですけど？ 発見当時、被害者の服は雨で濡れていて、血の痕は見つからなかつたんですね？」

「殺されたときはまだ、血が出ていなかったと言う事でしょうか？」

「うーん、そう考えるのが妥当でしょうな？ 胴体が倒れて来た時に吹き出した と言う事もあるでしょうから……」

「そんな事が有り得るんですか？」

「胴体の傷口に何かが塞がっていれば、そうなるでしょうけど……そんな形跡はなかったですし…… あーっ！ もう！ 頭の中が混乱して来ましたよ！」

湖西鑑識長が頭をもみくちやにしている時だった。

突然、車に取り付けられた無線から音が聞こえて来た。

「こちら、本部っ!!!」

西鑑識長、湖西鑑識長」

「こちら! 鑑識班っ! どうぞ!」

『先程、そちらから5キロ程離れた川で、変死体を発見したとの通報が』

「こ、湖西主任!」

「あーっ! 聞こえてますよ? それで? 被害者の身元は?」

『通報があつたのは先程ですから、まだ…… ただ、一連の殺人と関係性がある可能性が……』

「わかりました。皆さん! 聞いての通り、このままその現場にいきます!」

湖西鑑識長がそう言うや、全員が急いで後片付けをし、車に乗り込んだ。

阿弥陀警部に連絡が入ったのも、丁度同じくらいだった。

「さあ! パーツといきましょうか? パーツと」

神主が阿弥陀警部のコップにビールを注ぎ入れている。

「じっ! 爺様? 警部はまだ仕事中じゃ?」

弥生が止めようとするが、「ああっ! 良いんですよ! もう5時も回ってますしね?」

神主は元より、阿弥陀警部も既に出来上がっている。

葉月は先程の霊視の疲れが出ているのか、ジューズを少し口にしかたくらいで、今は部屋の隅っこで寝息を立てていた。

そんな中、大宮巡査はジッと三姉妹を見ていた。

「どうかしましたか?」

臯月がそう尋ねると、「否、どうもさっきの事が気になってしまつて……」

「首なしの事ですか？」

「それもあるんだけど、君達が一体何者なのかっていう事だ」

「別に、普通だと思えますよ？ 一つを除けば……」

弥生が自分のコップにお茶を注ぎながら言った。

「元々、私達姉妹は、生まれつき霊や妖あやしが見えるだけです。先程葉月がしたのは霊視。所謂心霊検査いわゆるみたいなやつですね。心霊写真は本来、現像中に起きる事故が殆どですが、極偶ごくまれに力の強い霊が写っている場合があるんです。昔、写真は人を閉じ込めると言われていましたから」

「あつ！ 聞いた事があります。確か、三人で撮った時、真ん中の人が消えているとかってやつですかね？」

大宮巡査がそう言うのと弥生は首を傾げながら、

「少し違うと思いますが、まあ、写真が日本に伝来して来た江戸時代末期、殆どの人は、写真を忌み嫌っていたそうです。自分の姿が紙に写し出されている訳ですから……」

弥生の説明は写真のみならず、ラジオやテレビの説明としても値あたする。

ラジオや電話なら誰もいないのに人の声が聞こえ、テレビなら箱の中に人がいることをどう説明出来るかである。これらは電気信号によるものという説明が出来る。

「自分の魂を吸い込まれたんじゃないかって勘違いしていた。まあ、有り得ないことじゃないんだけど……それが本当の心霊写真の謂いわれとされています」

「つまり、葉月ちゃんはその霊を見たと？」

「見たっていうより、声を聞いたって感じですね？ 自分で死ぬとわかっている霊は何も言わないらしいけど……」

大宮巡査は首を傾げながら、続きを聞いていた。

「思いの強い霊は成仏されない以上、その場に居座り続けます。一般的に云われている地縛霊じはくれいとかがそうですね」

「それじゃ、糸を弾くような音が聞こえたのは？」

「恐らく殺された少女が最後に聞いた音かと？」

「しかし、あそこに糸は張られていませんでしたよ？」

大宮巡査がそう言った時だった。突然彼の携帯が鳴った。

「はいっ！ 大宮ですが？ はい…… えっ！」

大宮巡査の驚いた声に、全員の動きが止まった。

「場所は？ はいっ！ ここからなら近くに……」

「大宮くん、事件ですか？」

阿弥陀警部はお尻を滑らせながら、大宮巡査の横へと移動する。

「はいっ！ 川で変死体が発見されたみたいです。ただ、今度は頭も……」

大宮巡査がそう言うや、「警部っ！ 先に殺された人と今回殺された人の共通点は！」

神主がそう訊ねるが、阿弥陀警部は首を横に振った。

「否、それはまだわかりませんが……」

「すみません？ 被害者の身元は？」

『被害者は「大石誠二」 中学三年生。警部達が捜査している被害者と同じ学校に通っています』

「殺された人間が同じ学校に？」

「でも、それだけじゃ共通点は」

「もじゃ？ 共通点じゃなくて……」

臯月がそう云うや、阿弥陀警部も同じ考えを述べた。

「最初に殺された遺体には首はなかった。でも、今報告された遺体には頭がなかった」

「身元がわかるものがあるかないかということですね？ 確かに、

最初殺された、対馬怜菜の遺体には首がなかった。葉月さんの話だと、音は一度だけ。つまり、最初の音とは違う何か」

二人の会話に大宮巡査はついていけなくなっていた。

「でも、それがどうふたりに共通点がないって言うんですか？」

「仮に犯人が被害者の首を隠すために切ったのなら、二回も切りま

すか？」

臯月にそう云われ、大宮巡査は目を大きく開いた。首を切るという行為自体は、一回でも十分だからである。

「少女が殺されるようなことは？」

そう訊ねられると、阿弥陀警部は首を横に振った。

「いや、特に恨みを買っていたわけではないようですよ」

「何か事件に巻き込まれるとか……」

そう訊くが、答えるように阿弥陀警部は再び首を横に振る。

「そういえば、あの近くで強盗がありませんでした？」

「それを被害者が目撃していた と？ また突拍子もない話ですね」

それで殺されるどころか、現実では強盗事件は速やかに行うものであり、ドラマやアニメ等々の描写で見られる、豪快なものではないと阿弥陀警部は鼻で笑った。

「だいたい、強盗をする人間が、顔を隠さないとは思えませんし、見られたとしても、殺すとまではいかないでしょ？ 頭隠してなんとやらじゃないんですから」

そう云われ、大宮巡査は落ち込んだ。

「さてと 、ちょっと部屋で休んでるわ」

そう云うや、臯月は立ち上がり、居間を出ていった。

それを見ていた大宮巡査の携帯から、声が漏れていたのに気づいた弥生が、対応しないのかと尋ねる。

「あ、阿弥陀警部、早く合流しろと言ってます」

そう云われ、阿弥陀警部は少しばかり、顔を歪めると、「神主。私たちはこれで失礼します」

阿弥陀警部と大宮巡査は神主に頭を下げ、神社を出るや、急ぎ現場へと車を走らせた。

「臯月のやつ……出ていったみたいじゃない？」

「何か気になることでもあるんじゃない？」

拓蔵の言葉に、弥生は答えながら、阿弥陀警部と大宮巡査が飲んでいたコップを片付けていた。

肆・二つ目の死体（後書き）

【追記：11/05/23】
文章直しました。

伍・靈道（前書き）

【聾】つんばい耳が聞こえないこと。また、その人。よく啞おし（口がしゃべれない人）と一緒にの意味と取られそうですが、聾の人は多少なりとも喋れますし、啞の人は音に反応します。

伍・靈道

丁度、西の方角から月が見えて来た時だった。病院から悲鳴のよ
うな声が聞こえたが、周りはいんとしている。

それもそのはずで、その病院は殆ど機能しておらず、第一、声が
する事自体が有り得ない事だった。

それを知っている皐月は静かに何かを待っていた。

「逢魔刻には、もう遅いんじゃないの？」

林道の方に向かって、そう告げると、周りから「ピンツ」という
糸を弾くような音が聞こえた。

これが、少女の聞いた音？と思った刹那、皐月は手に持って
いた竹刀を、自分の顔付近に上げた途端、キリキリと糸で擦る音が
耳元でこだまします。

「これを使って、少女と男性を殺した…… 違う？」

皐月はまるでこうなる事を予想していたのように、余裕ある声を
挙げた。

「一瞬だからね？ それに交差していれば、簡単に鉄を使わないで
斬り殺す事も出来る」

バナナの皮を向くと既に輪切りされているという手品がある。

あれは皮の角の部分から糸をつけた針を入れ、隣の角から針を出
し、また同じところから針を入れて隣の角へ通していく。

これを繰り返してバナナのまわりを一周したところで糸の両端を
持って引き抜くと、中のバナナが輪切りになっているという手品で
ある。

つまり、物理的に両方の力が働き、絞める事によって力が集中さ
れる。そうすれば、例えば人間の骨でも、ワイヤーのような固いもの
なら簡単に切れる可能性があるという事だ。

「木にワイヤーの痕が見つからなかったのは、もともと使ってなん

かいなかったから！ 被害者が来る時間帯を計算して、大きな輪っかを林道の中心で作る。そして、その上に被害者が来るのを見計らって、一気にワイヤーを両方から引つ張る。そうすれば、骨諸共、首を切り落とす事が出来る。多分、首が落ちてしまったのは、ワイヤーを両方とも振り上げた時に、丁度首の位置に来たからでしょうね？」

臯月がそう言うのと、一層締め付ける力が強くなっていく。

「少女と同様、私も絞め殺そうっていうの？ でも、お生憎様？」

臯月はそう言うや、クスリと嗤った。その刹那、竹刀を降り下ろすと、両方から人が倒れる音が聞こえた。月に照らされた細いワイヤーがゆらりと宙に漂っている。

「同じ方法で殺すって事は、糸は結局は一本だけ。切ってしまえば、輪っかにはなくなる！」

臯月が視線を暗闇に向けると、「さあ？ 相手が人間じゃなかったら、どうしようかと思っただけど？」

ゆっくりと犯人の方へと近づくと、

「もう一人を忘れてもらっちゃ、困るぜ？」

その声が発せられた刹那だった。二人分の男性のうめき声が拳がった。

「人間相手じゃ本気出す気もしないって事…… 今日午後3時前後…… 近くの川で男性を同じ方法で殺さなかった？」

臯月は竹刀を向けながら、倒れている二人の男に問い質す。

「いや！ 俺達が殺したのは女だけだ！ それに、俺達はこの病院から一步も出てないんだぜ？」

「一步も？」

「ああっ！ 一步もだ！ 警察が林道から出て行ってくれないからな？ それに、此処は余り人が来ようとしていなかったからな！」

臯月は男二人の話を聞きながら、

「ふーんっ。まあ、別にどこに隠れていようがいまいがいんだけどね？ それじゃ、本当にここから一步も出ていなかったって事？」
『ああっ！』と二人の男がそう告げた。

「兄貴い？ だから止めようって言ったんですよ？」

「はあ？ 仕様がねえだろ？ あの小娘に俺達が宝石店に強盗に入つたのを目撃されたんだからよ？」

「それが殺人の動機？」

「まあな？ しかし、完璧な俺様のトリックをいとも簡単に解いちまうとはな？」

少し大柄の男が声を挙げて笑うと、

「糸だけにね？」

小太りな男がそうボケると、大柄の男が「るっさい！」と声を荒げながら、小太りの男を小突いた。

臯月は二人の会話に、若干呆れながら、「それじゃ、私は川の方に行くから……」とその場を立ち去ろうとする。

「おいっ！ 俺達を見逃すのか？」

「別に見逃さないわよ？」

その言葉に二人の男は首を傾げた。

「でもよ？ そんなじゃ、誰が俺達を？ 嬢ちゃんじゃなけりゃ、一体？」

大柄の男がそう訊くと、病院の方から小さな悲鳴が聞こえた。

「あ、兄貴？」

小太りの男が身震いを起こす。

「お、おい？ ああああっ！ あんたっ！ 何かやばいんじゃないか？ さつさと警察を呼んだ方が？」

動揺している二人組の男に対して、臯月は妙にあっけらかんとしている。

「呼んだら、自分達も捕まるわよ？」

「か、かかかつ！ かまわねえ！」

「そう？」

そう言うや、皐月は二人を見捨てるように、川の方へと歩き出した。

「おっ！ おいつ！ どこに行くんだよ？」

「どこって？ 川の方…… って、あんたたちじぶん聾とか、耳が悪いわけじゃないんだから、さつきと同じ事訊かないでよ？」

「いや、それよりも！ 病院の方に！」

「だって、あそこに人なんて入れないし……」

「で、でもよ！ 現に今も悲鳴が」

大柄の男が言葉を止めた。

「ここって確か……」

大柄の男が何かに気付き、その場へたりこんだ。

「覚悟もなしに心霊スポットに入るとね？ 怒った霊に取り憑かれ易くなるのよ？」

皐月は振り向かず小さくそう告げた。 病院の敷地から出る

と、うしろから二人組の悲鳴が聞こえた。

言わずもかな、あの病院は現在使われておらず、使われている病院は別の場所に移されている。昔この病院で死んだ人の霊がそこに住み着いている事を皐月は知っていたからだ。

霊感の強い彼女が殺される思いをここでしたのは、恐らくその霊による仕業だろうが、彼女の守護神である大黒天がそれを鎮めた。

ただし、その大黒天は【田の神】でなければ【厨の神】でもないが……

数分後、皐月の連絡により、二人組は身柄を確保された。

その際、大柄の男は讒言てんげんのように「いたいよおっ！ いたいよおっ！ いたいよおっ！ いたいよおっ！」と、発していたが、外傷と思われる場所は

何処にもなかった。

伍・靈道（後書き）

【追記：111/05/23】

少し文章を直しました。

うめき声『呻き声』になるのですが、平仮名なのは変換ミス（読み間違い）によるものですが（・ー・ー・） 平仮名のままにしたほうがいいかなと思いますそのままにしました。

また、皐月が男二人に対して『聾』と云っていますが、それに対してはそのままにしています。

陸・大黒天（前書き）

【乾^{いぬい}】 十二支による方位で示した場合の北西を意味する。

陸・大黒天

「どう、姉さん。何か感じる？」

川に入っている臯月が、川岸でただ静かに座っている弥生に声を掛けた。しかし、何か集中している弥生は、反応しなかった。

「け、警部？ 彼女達は何を？」

周りには阿弥陀警部と大宮巡査、その他の警官諸々が、臯月と弥生をただただ見ているだけだ。

「まあ、見てればわかりますよ」

阿弥陀警部があっけらかんと言う。いや、わからないから大宮巡査は訊いたのだが

途端、水飛沫が一線を牽くように臯月へと向かっていく。周りの警察官（一人を除いて）は何が起きたのかまるでわかっていない。

刹那、高々と飛沫が上がり、真っ白なカーテンと化した。

「さっ！」

大宮巡査が駆け寄ろうとしたさい、弥生を一瞥した。こんな状況でも、何かを呟いている。

「彼女達の邪魔をしない方がいいですよ？」

阿弥陀警部がそう大宮巡査に言った瞬間、先ほどよりも高々と上がった水飛沫が、自分達に掛かっていた。

「臯月！ 乾の方角！」

さっきまで静かだった弥生が俯いたままそう叫んだ刹那、大宮巡査の頬を何かか掠り、彼は頬が熱くなっていくのを感じた。

そつと頬を手で触れると、ツツと痛みが走った。まるで剃刀で切ったかのような痕が出来、そこから血が垂れてきている。

それは周りの警官たちも同様だった。

「あー、もう！ 君達！ ここは彼女達に任せていいですから！」

私達は早く此処から立ち去りますよ！」

それが合図になったのかどうかは定かではないが、殆どの警察官が川から一目散に離れていった。

ただ一人、大宮巡査だけがその場に立っていた。

それを見逃す訳がないと言わんばかりに、大宮巡査の目の前で旋風じかぜが起きた。

砂埃すなほこじが目に入り、大宮巡査は眸めを瞑つむった。

自分は死んだのか？ だが、先刻傷を付けられた意外、何も痛みがなかった。

大宮巡査はゆっくりと目を開くと……

「…… たく？ 阿弥陀警部と同じ事しないでくれませんか？」

眼前には皐月が竹刀を十字にし、何かを止めている。

「ここは警部に言われた通り！ 私達に任せたほうが得策なんですよ。」

「し、しかし！ 市民の平和を守るのが私達警察の役目！ 君達を守るのも……」

大宮巡査がそう啖呵たんかを切ると、皐月はクスリと笑った。

「それじゃ、そこで大人しくしててください。 死にたくなかつたら！」

そう言うや否や、皐月は組み合っていた竹刀を弾はじいた。途端、向こう側の雑木林で何かがぶつかる音が聞こえた。

「吾わが神殿に祭られし大黒の業しゅよ！ 今ばかり我に剛の許しを！」

皐月がそう天に叫ぶと…… 両手に持っていた二本の竹刀が次第に刀へと変わっていく。

はて？と大宮巡査が首を傾げたのも無理はない。

普通だったなら、大黒天と聞いて、思い浮かぶ武器、もとい、道具といえれば小槌こづちだろう。

しかし、皐月が両手に持っているのはどう見ても刀である。

実は大黒天、もとい七福神は、日本の神ではない。実際日本の神なのは恵比寿だけであり、ようは寄せ集めである。

大黒天・毘沙門天・弁天は印度インドの神。布袋・福祿寿・寿老人は中国の神である。さらに言えば、優しいイメージの福の神とは到底考えられない力を持っている。

印度で恐れられていたヒンドゥー教三神の一つ破壊神シヴァの別名、摩訶迦羅ハーカーラこそ、他ならぬ大黒である。その力は破壊神という名の如く、凄まじい戦闘鬼神といわれている。

さらに云うと、毘沙門の新的姿である多聞天ヴァイシュノラヴァナ、弁天の新的姿であるサラスヴァデーは元は一つの神と言われている。

「閃ッ!!」

横一文字に切り放った刀の先に砂煙とその間に水飛沫が起きた。

再度、向こう側の雑木林から、何かがぶつかる音が聞こえたかと思えば、皐月は韋駄天いだてんの如き速さで、そちらへと駆け出した。

この常識外れな状況に、大宮巡査は困惑していた。むしろ、夢を見ているのか?と思ってしまうが、己の頬に切り刻まれた痕の痛みが現実である事を物語っていた。

途端、皐月が何かから弾き飛ばされるのを見た。

「皐月ちゃん?」

「くっ!!」

皐月は翻筋斗もんどりゅう打ちながら体勢を整えようとした刹那、それを見計らったように、旋風むむしかぜが皐月を襲った。

体勢を崩された皐月は、背中から木にぶつかり、ズルズルと凭もたれ崩れた。よく見ると、右腕が見るも無残に切り刻まれている。

「くうぎやははははっ!!」

何所からともなく、気味の悪い嗤い声が聞こえてくる。

「首無し？」

大宮巡査がそう呟くが

「少し違いますね？ 首無しと言うのは、体と頭があっても首がない妖あやかし。でも、目の前にいるのは……」

弥生がそう言った時だった。

周りが真つ暗になり、薄らと青白い光が形をなしていく。それが徐々に人の顔へと変貌していった。

それを見るや、大宮巡査は腰を抜かした。

「そんな？ あれは殺された……」

阿弥陀警部がそう叫んだ。

妖あやかしの正体は他でもない。殺された男性【大石誠二】そのものだったのだ。

阿弥陀警部と大宮巡査は被害者の資料を見ていた為、すぐに正体がわかった。

「しかし？ どうして殺された【大石誠二】がこんな姿に？」

「川で発見された死体は、本当に【大石誠二】本人だったんですか？」

弥生がそう訊くと、大宮巡査は首を傾げた。

「確かに【大石誠二】本人でしたよ？ その証拠に、学校の制服だったし、鞆だつて【大石誠二】本人のもの……」

そう言うが、当の本人も釈然としていなかった。

考えてみたら、それだけで【大石誠二】本人だという証拠にはならない。頭が見つかっていないのだ。

徹底的証拠である【大石誠二】の頭が

「よほど、死にたくなかったんでしょうね？」

皇月がふらふらと立ち上がる。

「皇月ちゃん？」

ただけで吐き気がするものが零れ落ちていた。

しかし、【大石誠二】の頭は何かを言おうとしていた。

「なぜあ？ 何故だあ？ 二刀流っていうのは？ 二刀流っていうのは、二刀だから強いんじゃない？」

「根本的なところを勘違いしてるようだけど？ 元々は【片手でも刀が使えるようにする為】に生み出された流儀よ？」

そう言うや、皐月は刀を片手で振り回している。その動きに一切の無駄はなかった。

「それに、どっちかって言うとな私は左利きだからね？」

皐月はそう言いながら、小さく舌を出した。

「それじゃ、あの死体はいつたい誰なのか？ それだけ教えてもらいましようか？ どうせ、阿弥陀警部も上にどう報告すればいいのか、わからないでしょうけど」

皐月はそう言いながら、向こう側で呆然としている阿弥陀警部と大宮巡査を一瞥した。

「あいつは、あいつはな？ オレの兄貴だよ？ 容姿が似ているから、わからねえと思っただよ？」

「殺した理由は？ ついでに、あんたがどうしてそんな姿になったのかもね？」

「兄貴を殺した理由は、オレが受けようと思っていた高校に兄貴が通っていたんだ。でも、成績が悪い俺はどんだけ頑張っても到底そこには入れそうになかった。でも、よく考えたら、オレと対して変わらないくせに兄貴は入学出来たんだ。それで、兄貴に聞いてみたら『知り合いに頼んで、入学テストの答えを少しだけ教えてもらった』ってさ？ それを聞いて、オレは兄貴と同じ事をしないって思って、我武者羅がむしゃやらいに頑張ったんだよ。学校の先生からは推薦ももらった。後は受験まで頑張れば兄貴と同じ学校にいけると思っただ。でも、兄貴はそれが気に食わなかったんだろうな？ オレの部屋に

勝手に入って、俺の教科書やノートを捨てやがったんだ！」

【大石誠二】の崩れた頭が泣き叫んでいるようだった。

「それが殺した理由？」

「そうさ！ おれは兄貴とは違う！ おれは兄貴と違って自分の実力で」

「殺さなくても！ 見返してやればいいでしょうがっ！」

臯月がそう怒声を放すと

「それじゃ！ あんたがどうして舞首になったのか教えてくれない？」

「これになったのはつい最近さ？ オレがずっとどうやって兄貴を殺そうかって思ってたさ……」

そう言うや、【大石誠二】の頭は言葉を止めた。

「自分がどうしてそんな姿になったのかわからないって言いたいんでしょ？ 答え教えてあげようか？ 自分が知らないうち

に自分を殺してたのよ？ じゃなければ、こんな醜い姿にはならなかったでしょうけど」

静かにそう言うと【大石誠二】の顔が次第に淡い水色に変わっていく。

「……………」

弥生が小さく経文を呟いていた。その周りには薄らと後光が輝いていた。

「露世に迷いし魑魅魍魎よ。汝が場所は此処になし 罪を償い、地藏菩薩の下す罰を速やかに受けよ！」

そう言うと、手前におかれていたお札が一直線に【大石誠二】のところへと飛んでいった。

「自分の見勝手な行動で人を殺めた者は『等活地獄・極苦処』へと連行する」

弥生がそう言うと、お札は消えていく【大石誠二】の額に附けら

れた。

「あつちでお兄さんに逢ったら、自分の言いたいことを言うことね？ 言わないと…… すっきりしないでしょ？」

皐月はそう言うが、消えていく【大石誠二】の姿を見ようとはしなかった。

陸・大黒天（後書き）

【追記：11/05/23】

少しばかり文章を直しました。

【大石誠二】の首がではなく、
く頭が正しので修正しました。

漆・神獄

事件解決から三日後、神社の本堂では、皐月の気合の入った声がこだましていた。

「精がでますな？」

阿弥陀警部が土産に買って来たタイヤキの入った紙袋を持って、本堂へと入ってきた。

「しかし、あれだけ傷ついていた右腕がたった数日で治るとは……

いやはや、大黒天の力は伊達じゃないですね？」

「別にあつちが勘違いしてくれたからですよ？」

その言葉に阿弥陀警部は首を傾げた。

「あつちが、二天一刀の意味を知っていたら、どうなっていたか……」

そう言うつと皐月は、完治した右手に持っていた竹刀を大黒の力で刀に変え、用意された巻き藁を切り落とす。ぼとぼと崩れ落とされていく藁の塊の切り口は、研ぎ澄まされた真剣で斬ったよう。刃先には刃毀れはるか、藁の引掛かりも何もなかった。

「うんっ！ 完治している」

そう言うつや、皐月は阿弥陀警部を一瞥した。

「おや？ 私、今日は皆さんに事件協力の礼に来ただけなんですけど？」

そうは言うつが、阿弥陀警部は足の指先で床を踏みしめていた。

「本物の刀は駄目ですよ？ 銃刀法違反ですから……」

阿弥陀警部はそう言うつと、壁に掛けられた竹刀を一本取り、構えた刹那……竹刀の乾いた音が本堂に響いた。

「それで？ 【大石誠二】の死体は？」

「臯月さんの推理通りでしたよ? 【大石誠二】本人の死体はご本人の部屋にありました。それも綺麗な姿でね?」

「舞首は生霊の類たぐいですからね? 自分がその人を憎悪にくみしていたら、意思とは関係無しに変貌へんぼうしますから……」

「【大石誠二】の死因は心臓発作…… もともと体が弱かったようです」

「それじゃ…… 無理むりが集たかったって事ですか?」

「そうですね? 臯月さんが聞いた理由を考えると……」

そう会話していくうちに、二人の竹刀の音が小さくなっていく。

「何が考え事でも?」

阿弥陀警部がそう訊ねると、

「伝えたいなら、自分の口で言えばいいのになって思っ」

そう言いながら臯月は複雑な表情を浮かべた。

その後、弥生に呼ばれた二人は、居間みやげで土産のタイヤキを、もの数分たひで平たいらげてしまった。

周りから水が落ちる音が聞こえてくる。その中を手枷てかせをはめた一人の囚人が、獄卒ごくそつに引き摺りまわされていた。

「御苦労」

天まで届くほどの高い扉で立っている番つがいの鬼がそう言つと

「弥生殿と臯月殿からの伝令だ……」

そう言つと大きな扉はゆっくりと開いていく。

「兄弟二人で同じ罪を与えてほしいとな?」

大石誠二は動揺を隠せないでいた。扉の先には自らが殺した兄誠の姿があつたからだ。

「兄貴?」

「誠二 か?」

静かに誠がそう言うと、誠二はその場にひざまず跪いた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

誠二が大粒の涙をかっかく赫々に染まった地面へと落としていく。

「謝らなければいけないのはオレの方なのにな。お前は自分の実力で受けようとしていたのに……」

誠は静かに天を仰いだ。

「あんなに頑張ったのに、無駄にしてしまっ……」

「兄貴……」

兄弟の会話に二人の獄卒が小さく微笑んだ。

「彼女達に感謝するんだな？ 本当だったら巡り逢う事など出来ないのだから……」

獄卒がそう言うと兄弟は頷いた。

兄弟がその後互いの罪を償い、露世に転生したのかは定かではない。

漆・神獄（後書き）

はい。第一話終了です。

巻・十ヶ月

ちょうど太陽が西へと沈もうとしている午後七時頃、眩暈めまいがするほどに長い坂道を、見るからに重たく膨らんだお腹なかを抱えた女性が歩いていた。女性は160ほどの小柄である。

彼女は坂の上にある神社へとお参りに行った帰りである。ふと女性は周りを見渡した。道端には杜若かきつばたが咲いている。女性がそつと杜若に触れた瞬間、突然胃液が逆流するような感覚に陥り、吐き気を催した。

その悲惨とさえみえる嘔吐おうとは五、六分ほど続いた。咳せきが治まるや女性はその場にガクリと倒れ込んだ時である。女性の股から赫々《かっかく》とした液体がダラダラと流れだした。

殺した？と女性がそう思ったのも無理はなかった。女性が妊婦なのは言うまでもないが、その胎児たいていが普通とは一際違ひとけっていた。

彼女が身籠ったのは今から十ヶ月ほど前だった。普通だったら、すでに生まれてきて、女性の胸で抱かれながらも、荒々しい泣き声を挙げているはずだった。

女性の胎内にいるという事は、出産が予定日より遅くなっているとか、色々と考えられるが、すでに十ヶ月目を迎えている。その事を踏ふまえて、女性は少しばかりこの胎内たいていの胎児たいていを気味悪がっていた。

ああ、これで……と、女性がいき絶えたのはそう思った時だった。

女性の膨らんだ腹部に一本の赫い線がひかれていくと、膣口から鳩尾へとまるで柘榴のようにお腹が半分に分れた。

そこにはすでに姿形が整い、自分の親指をいとおしく口に啜えている嬰兒が寝息をたてていた。

『おいで 私の可愛い子』

誰かがそう云う。が、周りにはいき絶えた女性しかいない。

嬰兒はまだ座っていない首を右往左往させながら、声を頼りに探していた。

あまり見えないその眸、薄らと影が見えるや、両手を天に伸ばした。

嬰兒はゆっくりと自分が抱き上げられていくのがわかった。

「さあ、逝きましよう？ 私の坊や……」

姿の見えない声がそう言つと 周りには灰色の羽根と女性の死体が転がっているだけだった。

阿弥陀警部、並びに大宮巡査が現場に到着したのは、それから一日経ってからだだった。元々人が通らなかつた山道だっただけに通報が遅かつたのだ。

「警部？ どう思いますか？」

大宮巡査はなるべく死体を見ないようにしながら阿弥陀警部に問い掛けた。

「帝王切開……ですかね？」

阿弥陀警部が開かれた腹部を見ながら言つ。

帝王切開とは、母体が膣口から子を出さない、余りにも胎児が大きくなり成長していると膣口は裂けてしまい、それが大量出血痛みによるヤシヨック死などに繋がる。そうならない為に苦肉の策として用いられるのが帝王切開である。

しかし、普通それをする際、お腹の膨らみにそって切るのだが。だが女性の死体は【膣口から鳩尾まで】を切られている。

「ガイシャの女性は妊娠十ヶ月目で、この山に建っている子安神社までお宮参りに行った帰りにに殺されたとみられているみたいですよ」
「お宮参り？」

阿弥陀警部が納得いかない表情で聞き返した。別にお宮参りに対してではなかった。

現に、この眩暈坂めまいさかを越えると『玉依姫神たまよりひめのかみ』という子安神が祭られている神社が建てられているからだ。

「ガイシャの女性は十ヶ月目といいましたよね？ でも死体はまるで帝王切開されているし、よく見たら嬰兒がいらないじゃないですか？」

その言葉に若い大宮巡査は首を傾げた。

「警部？ ミドリゴと云うのは？」

「産まれてから3歳までの赤ん坊の事を云うんですよ」

そう言われ、大宮巡査は漸く阿弥陀警部の納得のいかない表情を浮かべていたのかが理解出来た。

「そう言えば、その赤ん坊が未だに発見されていないそうです」

「でしようね？」

そう言いながら、阿弥陀警部は周りに落ちていた灰色の羽根を手にとった。

「ここを通った人はさほどいないという報告でしたけど…… 本当に誰も通っていないんですか？」

そう言うと一緒に来ていた鑑識課の湖西主任に問い掛けると……

「さあなあ？ それはあんたら刑事課の仕事だろうが？」

その口調から好い加減さつさと行ってくれと言われている感じだと、阿弥陀警部は思った。

「それじゃ…… この羽根を調べといてください」

そう言われ、阿弥陀警部から渡された灰色の羽根を湖西主任は訝いぶかしく見ていた。

巻・十ヶ月 (後書き)

文章直ししました(11-06-18)

式・腹痛

稲妻神社いなずまの境内けいだいに観光客用に設けられたトイレがある。
広さはそれほどではないが、男女それぞれ其々に3つの個室がある。

「はあ……」

女性用の方から小さな溜息が漏れた。

その声の主は 皐月さつきであった。

彼女はこの稲妻神社に住む三姉妹の次女で、もちろん家にもトイレはある。

が、何故彼女が態々わざわざ境内の方を使っているのかというと

事の発端はつたんはトイレの水漏れが酷く、三日ほど使えなくなったせいである。

男である神主は立ちシヨンで小を済ませられるが、女性である三姉妹はそうは云ってられなかった。

元々このトイレ、特に女子トイレの方はあまり使いたくなかったのが、三姉妹の言い分である。その理由は

『出ませんように…… 出ませんように……』

まるで祈るように用を足すと、皐月は急いで下ろしていたシヨーツとジーンズを上げた。

水を流し、ドアノブに手を掛けた時だった。うしろから何かが動く気配を感じるや、皐月は声のない悲鳴を挙げた。

彼女は大黒天の力、いや破壊神シツアの化身である摩訶迦羅マハーカアラの力が使える。それは妖怪に対しての力であって、霊には何の意味もなかった。もとい、このトイレに住み着いているのも、妖怪と云えば妖怪なのだが、皐月は小さい頃からこの正体の見えない音が怖かった。

皐月は逃げるように個室から出て行った。音を鳴らしていた妖の正体は【屋鳴やなり】という悪戯いたずら好きの小鬼であった。

慌てて出てきたせいで手を洗っていない事に気付くと、少し考えながらも、家で洗えばいいかと好い加減な自問自答をした直後だった。

皐月はお腹に違和感を感じ、お腹を摩った。【女性特有】と云えばそうなのだが、それが来たのはつい先日の話だった。

普通だったら、少なくとも一ヶ月くらい後の話で、それが妙に不快感を与えていた。

痛みがある訳でもなく、吐き気を催している訳でもなかった。ただ、妙に腹回りが押されているような感触だった。

それも、中から……

再びトイレに入ろうか悩んだが、別に催もよおしている訳でもなく、少し休めばどうにかなるだろうと、皐月はあっけらかんと結論を出した。

その後、夕食を済ませ、二天一流の稽古も終え、深い眠りに落ちていた時だった。

水が落ちる音が耳元からこだましている。部屋の窓側に頭を向けて寝ているので、外で雨が降っていると最初は思った。

が、普通だったら、耳元ではなく、枕元から音がしてくるはずである。

自分が寝返りを打って、横を向いている訳でもなく、少し眼を開けると天井が見える。自分が仰向けになって寝ていると云う事の証

扱である。

そもそも臯月は耳が悪く、本来ならば雨の音自体が聞こえない。

それなら、この音は？と思いながら、臯月は起き上がろうとしたが、金縛りにあったかのように、身動きが取れなくなっていた。

声を出そうにも、首を絞められているかのように出せなかったが、幸い眼だけは動いた。ゆっくりと音がする方を見ると……

身が焼け爛れた^{ただ}嬰兒を抱いた女性がじつと臯月を見下ろしていた。が、臯月はなぜか彼女が殺意を持っているようには感じられなかった。

スーツと女性が消えると、首を絞めていた苦しみも消えたと同時に、臯月を抑えつけていた何かも消えていた。

臯月は一、二度ほど深呼吸すると机の上においてある時計を見た。時間は午前二時四三分……丑三つ時である。

さきほどの事ですっかり目が覚めてしまった臯月は本堂へと行き、静かに座禅を組んでいたが、あの女性がどうも気になってしまい、坐禅に集中できなかった。

参・帝王切開

阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社に來たのは、事件が発生してから一両日過ぎた頃である。出迎えた弥生に居間へと案内された二人は、すぐに神主と三姉妹に事の件くだりを説明した。

「と云う事件なんです」

「目撃者はなし……あの坂で妊婦は殺されたという事でよいかかな？」

神主はワンカップ酒を口にしながら、阿弥陀警部の説明を聞いていた。卓袱台ちゃぶだいの上には、既に2本空あけられていた。

言葉からして、場所の詳細を知っている口調である。

「被害者に怨みを持っている人はいなかったんですか？」

弥生がそう訊ねると、阿弥陀警部は首を横に振った。

「それが、襲われたガイシャは人付き合いは良かったそうです。ただ……」

その齒切れの悪い言葉に、弥生と臯月は首を傾げた。

「好よかったのは奥さんだけで、夫は悪かったみたいですね。特に女性関係では……」

阿弥陀警部の代わりに、大宮巡査が警察手帳を見ながら言う。

「殺された女性は【間宮理恵まみやりえ】。死因は恐らく帝王切開の際に起きた大量出血によるショック死ではないかと……」

「ただ、湖西主任の見解は少し違うんですね？」

「と言いますと？」

「帝王切開した際、血は切られた場所に残るはずですよね？」

そうは云われても、そんな事をされた事がない弥生と臯月は想像

くらいしか出来ない。しかも、まだ九歳の葉月に至っては、キョトンとした顔で何の事だか解かっていなかった。

「ただ、出血は腹部あたりよりも、膣あたりが酷かったそうです」「それじゃ、転んで?」

「可能性はありますが、ただあれから1週間、行方を探しているんですよ」

「犯人 ですか? 目星がついているとでも?」

「いいえ、犯人は目星すらついていません。見つからないのは、子宮にいるはずの胎児が未だに見つからないということなんです」

その言葉に周りの空気が固まるのを誰もがわかった。

「見つからないって? どういう事ですか? それじゃ、犯人はその【間宮理恵】さんを殺害した後、お腹の子供を誘拐したって事ですか?」

弥生がそう言うと阿弥陀警部が

「警察は二通り考えています。……ひとつは今、弥生さんが云った通り、『【間宮理恵】さんを殺害した後、お腹の子供を連れ去った事……』」

「もう一つは?」

弥生が聞き返すと「嬰兒自らが子宮を割き、出て来たか」と、阿弥陀警部が言い切った時だった。

「 どうしたの? 臯月お姉さま? 」

葉月がそういうや、全員が臯月を見た。さきほどから臯月はお腹を摩っている。

「 どうしたの? お腹痛い? 」

弥生がそう訊くが、臯月は首を横に振った。

「 いや、一昨日くらいからね、どうも調子が悪いのよ? 別に変な物を食った訳でも、増してや月役って訳でもなさそうだし 」

それを聞いて、大宮巡査は不思議そうな顔を浮かべた。

「失礼ですけど、月役って？」

「大宮君？ それを彼女達に訊きますか？ 君、携帯持つてるんだから、それで調べなさいよ！ 辞書サイトかどこかで」

阿弥陀警部が訝しく言った。云われた本人は何の事だかさっぱりわからず、言われた通りに携帯で調べてみるや、2分後には臍月に土下座をしていた。

月役は月経げっけい。云うなれば生理の事である。

「しかし、臍月……前にきていたのはつい一週間くらい前だろう？ そんな早くくるものでもなかるうて？」

神主がそう言つと臍月は頷いた。

「確かに生理は一ヶ月に必ず来るけど」

臍月は言葉を濁らせた。生理はその日に必ず来る訳ではなく、その周期に来るシステムになっている。

これは女性が子供を産む為の準備をしている為で、どうする事も出来ない。むしろ喜ばしい事である。

「ただ、生理が来ている時は激しい運動出来ないのよね？ 体育の日とか特に」

弥生がそう言う。彼女も経験者である。

「しかし、男の僕が言うのもなんですけど……生理ってそんなに苦しいんですか？」

大宮巡査の言葉に臍月と弥生は目を点にした。

「まあ個人差はありますが、腹痛・頭痛がする人もいれば、立つ事すら尻成らない人。症状は人々々ですし、平気な人もいますよ」

弥生が淡々と説明する。

「まあ、男性には一生味わう事はないですけどね？」

「私は男性特有の痛みの方がわかりませんか？」

売り言葉に買い言葉か、阿弥陀警部の言葉に皐月は直様反論した。

途端、柏手が一、二度鳴らされた。

「して、阿弥陀警部？ どうして嬰兒がお腹を割いて出て来た
と？」

神主が鋭い眼光で阿弥陀警部に問い掛ける。

「先程も言ったとおり、被害者である【間宮理恵】のお腹は鳩
尾からではなく、膣から割かれたものなんです。普通だったら、そ
んなところから切らないでしょ？」

「まあ、異常者だったら解かりませんが」
神主も今回ばかりはお手上げに近かった。

「それで写真は？」

葉月がごく当たり前に訊ねたが、阿弥陀警部と大宮巡査は互いを
見遣った。

「それが今回ばかりは 写真を持って来てはいるんですけど、
お腹が切られていると説明しましたよね？ そのせいで実は私たち
も見るのが少しばかり億劫おっくうって感じなんですよ」
そう阿弥陀警部が説明するや、神主が笑い出した。

「なああにいつ！ 写真を裏返しにしてくればいいですよ。

葉月？ 出来るか？」

神主にそう云われ、葉月は頷いた。

大宮巡査は躊躇ためらいながらも写真を裏返しにしたまま、葉月の目の
前に差し出した。

葉月は小さな手を写真に乗せ、ゆっくりと摩っていく。

葉月の能力は写真に写った被害者が最後に聞いた音を聞く事が出来る。

サイコメトリーに近いものがあるが、そうではない。

あれは【物の記憶を読み取る】力であり、葉月の能力は写真に写った被害者の声を聞く力だ。

「かきつばた……」

「そう言えば、あそこには結構杜若が咲いてましたね？」

「」

しかし、それ以外見つからないのか、葉月は不服そうな表情を浮かべた。

「葉月？ 杜若しか見えなかったのか？」

「うん、その人が触った途端、お腹が痛くなったみたい」

「」

「それじゃ、その時に殺されたと言う事でしょうか？」

「しかし、お腹が痛くなるというのは如何せん可笑しいですな？」

「……といえますと？」

「いや、その時殺されたという事は、犯人と一緒にたつて事になるでしょ？ しかし、犯人の指紋も何も、被害者の持ち物から検出されなかった。近くを散策しても、殺害に使われたと思わしきものは何一つ見つかってません。湖西主任の話だと、切り傷はまるでメスのようなもので綺麗に切られていたと」

阿弥陀警部が説明している間も、葉月は必死に写真を摩っていた。

途端、その手を止めた。

「どうしたの？」

弥生が葉月に声を掛けた途端、葉月は弥生に抱きついた。身を震わせ、力強く弥生にしがみついて離れようとしない。

「何か聞いたの？」

弥生がそう訊ねると、葉月は激しく拒絶する。

「　　ねえ？　お腹の子供って勝手に出てくるの？」
その不可解な言葉に全員が絶句した。

葉月の説明によると、被害者が倒れた後、お腹が割き、そこには既に形の出来ている嬰兒が何者かに連れていかれた　との事だった。

阿弥陀警部の一つの仮説が有ろう事が成立していた。

それから三日後、特別悪い訳でもなく、気にはしていなかったものの、さすがに気分が優れない為、皐月は神主の知り合いである田原医師に相談をするため病院へと訪れていた。

田原医師は産婦人科医であり、神主の娘であり三姉妹の母親である【遼子】が三姉妹を出産した際、主治医として、その出産に携わっている。

「で、覚えとらんと？」

のほほんとした口調で田原医師は訊いた。

「ですから、する相手はいないんですって！ 大体、月役が来たのはここ一週間前でしたし…… そもそも！ 男性と付き合った事なんて一回もないんですから！」

「知らない内になったって事かい？」

そう言われ、皐月は少し考えるや頷いた。

診察室のベットに寝かせられ、お腹を晒している皐月に、田原医師は手で摩りながら、色々と質問をしていた。

田原医師は齢80を疾うに超えており、長年の経験からか最新技術を使わなくとも、触診だけで、腹の違和感を調べることが出来る。

「別に可笑しな部分はないのよね？」

老婆特有ののほほんとした口調では有るが、田原医師は真剣な表情で少しばかり考えていた。

「どうかしたんですか？」

「うーん、月役が来ないって事は可能性としては、生理不順になっているか、出来ているかのどちらかなんだけど」

「取り敢えず一週間前に来てますから、前者の方だと思えますよ」
「あつ……臯月ちゃんはどちらでもないわよ。薬を飲めば『三日』
くらいでよくなると思うけど……」

要するにどちらにも当てはまらないということなのだが、何やら物言いそんな表情で田原医師は机の引出しを見ていた。

「最近ね？ 妙な事があったのよ。今日の臯月ちゃんと同じ感じの患者さんなんだけど」

「同じくらいって？ 私と同じ年って事ですか？」

「いいえ。年は25歳で、月役が三ヶ月ほど来るのが遅いからって、うちに相談しに来たのよ」

「それくらいだったら、出来てるって可能性が有ったって事じゃないんですか？」

臯月がそう訊ねると、田原医師は答えるように首を横に振った。

「彼女の診断結果はただの生理不順。恐らく彼女は出来たと勘違いして、生理周期をつけなかつたんでしょね？ もちろん、医師としてはそれ以上患者の情報を言えないけど」

「それをその女性には言つたんですか？」

「ええ、でも彼女は聞き入れなかつたわ」

「どういう……」

臯月がそう訊くと、田原医師は少しばかり俯くや、

「臯月ちゃん？ 想像妊娠って言葉聞いた事ある？ 実際は妊娠していないのに、恰も^{あたか}しているように錯覚してしまう事。もちろん、これはストレスや思い込みでなるものだし、第^{こじんこじん}一人々に生理の周期があるから……」

「でも、その人は妊娠してなかつたんですよね？」

「ええ、精神安定剤を処方して、患者には気分が優^{すぐ}れない時に飲むようにって伝えて…… そしたらね、それから一週間もしないうちに、女性が病院に怒鳴り込んできたの…… 私の子を返してっ！！

私の子を返してっ!!っつて
田原医師が話をしていると、診察室のドアが開いた。

「田原先生。警察の方が……」

若い女性の看護士がそう言つと、田原医師は一言一言返事をした。その直後にその警察官が診察室へと入ってきた。

「おや、臯月さん？」

案の定、その警官は阿弥陀警部だった。そのうしろでは大宮巡査が看護士達に聞き込みをしている。

臯月は上げていたシャツを元に戻すと、小さく会釈した。

「それで、何か進展はあつたんですか？」

臯月がそう訊ねると、阿弥陀警部は苦笑いを浮かべた。

「いやいや、面目ない。何せ殺された女性の交友関係を調べると殺されるとは到底思えないですからね…… あ、田原先生？ お願いしていた事わかりましたか？」

そう言われ、田原医師は部屋を出て行った。

「……でっ？ どうしてここに？ もしかして……」

「そんな訳ないですよ！ 至って健康。三日くらい休めば“治る”
つて云つてました」

「そうでしたか？ イヤイヤ、失敬、失敬」

釈然としない阿弥陀警部の言い回しに、臯月は不服な表情を浮かべながら、阿弥陀警部を睨みつけた。それから数十秒して、田原医師が診察室に戻ってきた。

「女性の腹部になかったものを見ると、やはり臍帯がなかった事になりますね？」

それを聞いて、臯月と阿弥陀警部は互いの顔を見やった。因みに

臍帯とは臍の緒を医学的に云った言葉なのだが、それに関してではなかった。

「なかった？ なかったって、どうして？」

臯月が驚くのも当然である。被害者である間宮理恵が殺された大本の原因は、奇怪な帝王切開のさいに起きた大量出血によるショック死だと思っていた。

臍の緒というのは母と子を繋げるもので、それから母親が採取した栄養を子に行き渡らせて育てる。出産の際、子についての臍の緒を切るのだが、本来自然に切れるものではない。

哺乳類特有ともいえるこの臍の緒は、人間でなら出産直後に^{はのみ}鋏で切られ、猫や犬だと噛み切る事が殆どである。

「その女性を診察していたのがうちですから。そもそも先月には既に生まれているはずなんですよ」

「確か、女性が妊娠していた時期って……十ヶ月？」

「十月十日という言葉がありますが、如何せん私の見聞では……」

そう言つと、田原医師は臯月を見ていた。その視線に臯月は首を傾げた。

「妖怪の仕業って事ですか？」

阿弥陀警部がそう訊ねると、

「そう考えると納得するんだけどね？」

田原医師はそう言いながらも、何か釈然としていなかった。

「子を奪う妖怪…… そんなものもいるんですか？」

「そもそも、妖怪は悪戯をする方が多いですけど…… 子を奪う妖

怪は

途端、臯月の表情が曇った。

あの晩、自分の部屋で見た女性の胸に抱えられた嬰兒はどんな風だった？

身が爛れていて、骨と筋肉が剥き出しになっていた。そして、その女性には異様な何かがあった。

「姑獲鳥？」

そう口走ると、阿弥陀警部がどういう妖怪なのだと訊いてきた。

「姑獲鳥は難産で子を産んだものの、死んでしまった女性の妖あやかしなんです。一説によると、子を奪い、自分の子供にしてしまうとか……

旅人に百キ口はあると言われていてる赤ん坊を抱かせたまま殺したりとあるんですけど……ただ、悪い妖怪とは思えないんです……」

「といますと？」

阿弥陀警部の質問に、田原医師が代わりに答えた。

「子を思う余り、そのような事をしている。だから悪い妖怪とは思えないといたいんですね？」

そう言われ、皐月は頷いた。

「私達姉妹は、母と父のことを知りませんから……逆に子の面影を探している姑獲鳥がどうしても悪い妖怪だなんて思えないし、思いたくないんです。それに、八百万の中に鬼子母神という似たような神様もいますから」

「で、どういった姿で？」

「上半身裸で、両腕がまるで鳥のような……」

それを聞いた途端、阿弥陀警部は立ち上がった。

「と、鳥ですか？」

詰め寄ってきた阿弥陀警部に圧倒されたのが、皐月は頷くのが精一杯だった。

「殺された女性の近くに、鳥の羽根らしきものがあっただんですけど

…… どの鳥類にも当てはまらない羽根だったのでまさかとは思いましたか……」

「で、でも！ その女性が発見された場所の近くには『玉依姫神』たまよりひめのかみが祭られていて、姑獲鳥は彼処を嫌ってるんです……」

「と言いますと？」

「どうしてなのかはわかりませんが…… 多分、『玉依姫神』たまよりひめのかみ……

…… 強いては子安神こやすがみだからじゃないでしょうか？ 子を抱く事すら出来なかった姑獲鳥には、それが耐えられなかった」

皐月は俯きながら言った。

途端、診察室に大宮巡査が入ってきた。

「け、けけけ警部？」

「どうしたんですか？ そんなに慌てて……」

「さ、先刻、無線で連絡があつて…… そ、そそそそその！」

狼狽するように、呂律が回っていない大宮巡査に阿弥陀警部は「いや、だから落ち着きなさいって！ ほら、ゆっくり深呼吸」

そう促されうなが、大宮巡査は一二度ほど深呼吸した。

「で、どうしたんですか？」

阿弥陀警部が呆れた表情でそう言つと、

「こ、殺されたんです…… 【間宮理恵】の夫である、【間宮雄太】が変死体で……」

それを聞いて、阿弥陀警部は啞然としていた。

ふと、皐月は窓の方を見遣った。それは小さく羽音が耳に入ったからだ。

窓を開け、外を覗いたが、そこには何もなかった。

伍・水子

阿弥陀警部らが血相を変え、病院を出て行った後、皐月は院内の新生児室をガラス越しに眺めていた。

自分の隣りには夫婦と思われる、何組かの男女が自分の子供を幸せそうに眺めていた。

そんな中、皐月は寂しそうな表情を浮かべた。

自分もそうだが、弥生や葉月も父と母の“記憶”がない。自分よりも幼い葉月ならまだしも、葉月を小さい頃から見ている皐月が覚えていないどころか、それよりも姉である弥生ですら記憶にないのが不思議でしようがなかった。

一度、両親の事を祖父である神主に訊ねた事があるのだが、やりとりと返され、その事は禁句タブーとなっている。

故ゆえに祖父が彼女たちにとっては父親代わりであり、弥生が自然と母親代わりとなっている。

（玉依姫の近くで姑獲鳥が出て来ることはまずない。だけど、被害者はその参拝に行っていた）

犯人はその後を追い、人目のない場所で 殺した。と推測出来る。

（だけど、それじゃ、腹を割さいてまで子供を奪った理由がわからない）

方法よりも、どうして帝王切開まが紛まがいな事をしてまで、嬰兒を奪ったのかということが気になっていた。被害者、間宮理恵を殺す事よりも、むしろ、その胎内にいた嬰兒を奪う事が目的だという事になる。

それから数十分後、皐月は被害者が殺された子安神社への山道を歩いていった。周りでは横に捌けてはいるが、事件を解決しようとしている警官たちが何かないか探していた。

「おや、あんた稲妻んとこの娘さんやないかあ？」

声をかけて来たのは、袴姿の老人だった。

「いつも祖父がお世話になってます。咲川のおじいちゃん」

皐月がそう云いながら、頭を深々と下げると、老人はケラケラと笑った。

咲川源蔵。さきがわけんぞう先にある玉依姫命を祭っている小安神社の神主であり、皐月たちの祖父である稲妻神社の神主とは飲み仲間である。皐月は小さい頃からよく遊んでもらっていた。

「皐月ちゃんが此処にきたということは、阿弥陀警部が何か頼りに来たということかいな？」

「あ、いや……」

確かに阿弥陀警部が事件に関して頼りにきたのは確かなのだが、此処に来たのはあくまで皐月個人の理由だった。

「ねえ、咲川のおじいちゃん？ 妖怪が神様に恐れない…… 何てことあるの？」

「何か引つ掛かることがあるみたいだねえ？」

「うん。被害者の近くにどの鳥にも見られない羽根が落ちていたって……」

「それで皐月ちゃんは姑獲鳥の仕業ではないかと思った」
「そう云われ、皐月はギョツとしたが、隠すわけでもないため頷いた。」

「それはわからん。妖怪も人間と同様に、欲望によって作られた権化じゃからなあ。姑獲鳥も“産女”^{うづいぬめ}”という俗称故に、子を思う余りに人ならぬ事をする場合がある」

つまり殺した犯人は女性を殺すよりも、その嬰兒を奪い取ることが目的だったのではないかと咲川は告げる。自分の考えだった推理が、他の人も同感だと感じ、皐月は複雑な表情を浮かべた。

皐月の心情……自分の考えを、出来れば否定して欲しかったのだ。

「人間の出産は大凡九ヶ月といわれているが、被害者はそれを疾うに過ぎていた」

「それは周りの人も知ってるんじゃない……」
途端、皐月の携帯が鳴り響く。

「もしもし」「あ、皐月？」
声の主は弥生だった。

「弥生姉さん？ どうしたの？」『あんだ、今何処にいるの？』
「何処について、子安神社に」『って事は咲川のおじいさまのところ
にいつてるって事？』

皐月は行ってるというよりも、途中の坂で偶々《たまたま》会ったと説明する。

『あんだ、田原先生のところにも行ってるわよね？ 先生から家
に電話が来てるのよ？』

「へっ？ なんで家に？ 私の携帯番号、受付の時に書いてたはず
だけど？」

元々弥生が生まれた時どころか、母親である【遼子】が生まれた
時から利用しているため、家の電話を知っていたとしても不思議で

はない。

携帯番号は頻繁に変わったとしても、固定である家の電話番号がそんなに変わることはない。

「それで田原先生はなんて……」『阿弥陀警部が後から来て、その後には何かあったって』

「それじゃ、その後連絡はあったのかってこと？」

そう訊くと、弥生はそうだと答える。もちろんその後には連絡は来ていない。

その後いくつか会話をし、最終的には帰りに牛乳とニンジンを買ってきてほしいと催促された。

「それじゃ、失礼します。咲川のおじいちゃん」

「おう、元気でなあ…… あ、そうじゃ」
帰ろうとした時、ふと咲川が何かを思い出し、臯月を呼び止めた。

「臯月ちゃん。あなたのお母さんとお父さんに関して、拓蔵に何が聞いておらんのか？」

拓蔵というのは、臯月たちの祖父の事だ。

「いや、爺様からは何も」

そう答えると、咲川は少しばかり苦虫を噛むような仕草をし、

「そうか…… ならええんじゃ。いつか話すじやろうし、わしが関与することでもないじゃ。すまんな、弥生ちゃんや葉月ちゃんにもよろしくいっておいてくれ」

そう云いながら、咲川はクルリと踵かかひを返し、先にある子安神社の方へと歩いていった。

臯月は咲川が何を云いたかったのかが気になりながらも、頼まれた買物を済ませ、家路に着いた頃には雨が降り始め、何時しか土

砂降りへとかわっていった。

陸・執念

現場検証をしている最中^{さなか}、ポツポツと雨が降り始め、小一時間後には暴雨と化していた。

そんな中、阿弥陀警部は口を押さえながら、遺体を見下ろしていた。

長年の経験と死体を見続けているという職業病からか、死体を見たとしても吐き気を催すことはまずない。

しかし、それでも口だけは抑えさせてくれと懇願^{こんがん}したくもなっていた。

それもそうだろう。遺体の形状は見るに無残の他ないのだから。

「　　」

阿弥陀警部は人目を憚^{はばか}らずに舌打ちをし、何もここまでしなくてもという憤^{いらい}りを感じていた。

遺体が身につけていた上着から見つかった財布から、先の被害者である間宮理恵の夫、間宮雄太と判明したが、身元が判明するものがなければ、病院で報告を受けたさいに被害者の名前は出てこなかっただろう。

被害者の左肩近くの首下^{くびもと}から腰までを赤い線がひかれ、その切り口から内臓^はが食み出ている。さらに胃の中も切られており、中のもので取り除かれていた。

被害者の死亡推定時刻を推測するさい、胃の中にある食べ物の消化傾向により死亡推定時刻を割り出すことが出来る。もちろんこれは被害者が何時食事をしたのかということを知る必要があるが、基本的に三時間もあれば胃の中の食べ物消化されると言われている。よく三時のおやつというものがあるが、それが言い得て妙なことから面白い。

「警えにその事を知っていたとしても、これほどまでに非人間的な事が出来るのだろうか……」

間宮理恵の件もそうだが、犯人は何故このような殺害をしたのだろうか　と阿弥陀警部は考えていた。

「大宮くん？　被害者が最後に連絡を取り合っていたのは何時頃かわかりますかね？」

阿弥陀警部はそう云いながら、大宮巡査を見遣るが、大宮巡査は期待を裏切るように首を横に振った。

間宮雄太の携帯が見つかったのだが、キーロックされており、すぐには解明出来ない。

無論、そのパスワードを知っている人間はもういない。

「被害者が今日何をしていたのか、その聞き込み。ならびに勤めている会社と女性関係も」

「はっ！」

阿弥陀警部の号令とともに、警官たちが敬礼をした。

場所を変えて、稲妻神社。皐月が弥生に頼まれた買い物が牛乳とニンジンだったことから、夕食はシチューだった。買い物に頼んだ

材料は足りないものであった。

その食事を済ませるや、弥生は夕食の後片付け、葉月は卓袱台の上で宿題、神主である拓蔵は社務所で事務の整理をしている。

そんな中、遅く帰ってきた皐月は湯船に浸かりながら、湯気で曇った天井を眺めていた。

皐月はどうして被害者が子安神社への山道で杜若に触れたのかを確認したかった。杜若は野草なので屈まなければ触れる事は出来ない。屈むということは必然的にお腹を背中で覆い隠す形になる。

つまり、帝王切開紛いな事をして殺したのなら、被害者を仰向けにする以外に方法はない。

どう殺したかはさておき、想像したくないものを想像したものだから、皐月は顔半分をお湯の中に沈めた。

阿弥陀警部の話だと、女性は膣から鳩尾までを一線に切られていたと云っていた。そして、中にいた胎児を連れ去っている。その胎児と被害者をつないでいたはずの臍の緒もどこかへと消えてしまっている。

姑獲鳥は確かに子を奪う妖怪と云われている。しかし、子宮を裂いてまで子を奪うのだろうか……

違和感を感じたお腹を診てもらったために病院へと行っていた丁度、阿弥陀警部が田原医師に被害者の事を訊ねに来ていた。その時、皐月は自分の口から“鬼子母神”の話をしている。

元々鬼女である鬼子母神がどうして安産の神となりえたのか、それは彼女が人間の子をさらっていた理由として、自分の子に食べさせていた事にある。

その戒めとして釈迦が鬼子母神の子供一人をさらうと、彼女は慟哭し、血眼になって子を捜したという。そのことから、子をさらわ

れていた母親たちの気持ち、今の自分と同様だった事を知り、彼女は改心したといわれている。

予断であるが、釈迦が二度と彼女に子をさらわせない様に与えたものが柘榴ざくろと云われており、一説によると人肉に似た味とされている。

考えてみたら都合のいい話ではあるが、姑獲鳥も難産のために子を抱けなかった悲しさを権化としたものだといわれている。

そう考えながら、皐月は姑獲鳥が母親と父親の面影を知らない自分と重なっていた。

どちらも“母子”おちい というものを知らないのだから

「皐月いつ！ 携帯鳴ってるわよ？」

脱衣所の方から弥生の“大きな声”が聞こえ、皐月は返事をしながら、浴室を出た。

脱衣所を見るや、すでに弥生の姿はなく、どうやら通り過ぎようとした時に電話が鳴ったようだ。

脱いだ衣服の下敷きになった携帯が騒がしく鳴り響く。

「はい。もしもし……」『あ、皐月ちゃん？』

声の主は田原医師だった。

「先生？ あ、そう云えば家に電話したって、弥生姉さんから」

そう伝えると、田原医師がまるで躊躇ためらうような口調で話し始めた。

『皐月ちゃんがどうしてあの時、姑獲鳥を疑わなかったのか

憎悪によって妖怪となった人間を罰する事があるあなたたち姉妹の役目だって事は知ってるけど、でも皐月ちゃんは姑獲鳥自体を疑っ

ていなかった。その理由を訊きたいの』

そう云われても、皐月自身どうしてそう思ったのかという確信が
出来ていない。

ただあの夜、爛れた赤子を抱いた女性が“姑獲鳥”のように見え
たことと、診療室にいた時、外で鳥が羽ばたくような音が聞こえた
ことを説明しようと思ったが、皐月はそのことを話さなかった。

『 それじゃ、薬はちゃんと飲むこと。体はちゃんと休ませ
ること』

「はい。わかりました」

そう云うや、電話は切れた。

皐月は音のしない携帯に耳を傾けながら、違和感を感じるお腹を
摩っていた。

短い針が午後十時をまわった警視庁捜査本部。その部屋に設けら
れている長テーブルの上には、大量の書類が乗せられていた。

それら全てが殺された間宮雄太の女性関係によるものなのだから
呆れる。

女性関係がよくなかったのは前々からわかっていたのだが、これ
ほどだったとはと警官たちは呆れていた。

間宮雄太が女性と付き合っていた時期なんて変わり変わりの入れ
替えて、とても結婚していたとは思えない。

二股ならまだしも、5股なんてのはざらで、酷いものなら孕めた
子をおろさせるなんてこともあった。これでは女性関係で考えたと
しても、誰に殺されても可笑しくはない。

「これ全部のアリバイを調べるんですか？」
少なくとも二十人以上の関係を持つている間宮雄太を殺したのは一人だとしても、それら全員のアリバイを調べるのは苦難である。しかも間宮雄太が殺された時間帯は今日の午後2時前後として、その周期でのアリバイがないことを確定しないと任意同行できない。

「打つ手はないですかねえ？」

そう云いながらも、阿弥陀警部は若い警官たちに発破をかける。

容疑者が二十人もいるとしたら、捌ける方法として、その時間以前に被害者が殺された周辺にいたのかということにある。いくらなんでも全員が同じ町にいるとは限らない。

「二十人全員の勤め先、ならびに学生でしたら学校も……」

そう云うと警官たちは翌日明朝から各自のアリバイを調べる事にした。

その中で間宮雄太が殺された時間帯で同じ町にいた女性が二人ほど上がったが、彼女たちにはそれぞれのホテルに泊まっており、チェックアウトをしなければホテルに出られないため、アリバイがあった。

漆・鳴き声

夜中の土砂降りがすっかり晴れた朝方、薄暗い本堂にふたつの影があった。

そのひとつは皐月であり、彼女は座禅を組んでいる。そしてもうひとつの影は拓蔵であり、警策きょうさくを持ったまま、皐月のうしろをゆっくりと左右に歩いていった。

『神社』なので本来お寺の修行をイメージさせる座禅をするのはいかんせん可笑しいと思うが、精神を集中させるという意味では、別にどこだろうと構わないというのが拓蔵の考えてあった。

皐月が少しばかり体を動かすと、拓蔵はその警策を皐月の肩に当て、そして力強く叩き付けた。

ビシンという、耳を劈つく音が本堂にこだまする。

「つつうつつ」

何回もされている事とはいえ、やはりこの痛みは慣れるものではない。

「どうした皐月、昨夜から気が乱れておるぞ？」

拓蔵にそう云われるが、心当たりが多過ぎる。

昨夜寝る前、阿弥陀警部から連絡が入り、先の被害者である間宮理恵の夫、間宮雄太が変死体で発見された事と、殺人の疑いがある女性二人は、間宮雄太が殺された時間にはホテルにおり、出て行った形跡がない。つまりその二人には徹底的なアリバイがあった。

もう一つ、間宮理恵の遺体の傍には、姑獲鳥のものとされる羽

根が見付かっている。だが、田原医師の病院周辺を探してみたが、似たような羽根は見付かっていない。

そして、臯月が一番気にしていたのは、田原医師から訊かれた、自分たちの両親に関することだった。

「今日の昼過ぎに阿弥陀君たちが来るかもしれんから、無駄な迷いは捨てた方がいいぞ」

拓蔵はそう云うや、襟元を整えながら、本堂を出ようとしたところを臯月は呼び止めた。

「ねえ、爺様？ 私たちのお父さんとお母さんは……」

言葉を言い切るよりも先に、警策を床に叩き付ける音がけたたましく本堂に響き渡った。

その音に驚き、少しばかり顔を俯けた臯月は、恐る恐る顔を上げて、拓蔵を見遣るや、ゾクツと背筋に悪寒が走ったのを感じた。

拓蔵の表情はいつも飄々《ひょうひょう》としたものとは思えず、警えるなら阿修羅あしゅらのように、恐ろしい形相かたちと化していた。

「何度云えばわかる？ お前たちの両親は事故で亡くなったといったはずだ」

「だ、だけど、それじゃあつ！ それじゃ、どうして私たち姉妹は、お母さんやお父さんのことをひとつも……」

まるで聞く耳を持たないといった感じに、拓蔵はふたたび警策を床に叩き付けた。

「何度も言わすなあつ！ お前たちはショックで二人のことを思いだせただけだ」

「何、それ？ 理由になって」

臯月が叫ぶよりも先に、拓蔵は臯月の眼前に顔を覗かせていた。

その余りの速さに臯月の目は追いつく事が出来ず、それどころか何時の間にといった感じだった。

そして、臯月の頬に衝撃が走り、気がついた時には本堂にある大黒像の下に転がっていた。

本堂には臯月しかおらず、打ち付けた背中中の痛みを感じながら、ふらふらと本堂を出た。

阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社にやって来るや、すぐに葉月に写真を見せた。葉月の能力によって、殺された間宮雄太の近くには一人の女性しかおらず、そのものが犯人だと特定出来た。

そして、そのまま女性は犯行を認め、任意同行した。

間宮雄太を殺した凶器はホテルの部屋で見つかり、女性がホテルのチェックインで偽名を使っていたことも明らかにされた。

あまりのテンポよさに姉妹たちはもちろん、拓蔵と阿弥陀警部はまるで仕組まれている感がして否めなかった。

「ど、どうしたんですか、皆さん？ 事件は無事に解決したんですよ？」

大宮巡査があたふたとそう云う。

「大宮君？ 可笑しいとは思わんかね？ 確かに任意同行していた女性は間宮雄太の犯行に関しての供述（きょうじゆん）をしてはいるが、最初に殺された妻の間宮理恵に関しては何も云ってないんですよ？」

阿弥陀警部が云うように、連行された女性の供述には不自然な点が多い。

夫婦殺害を目的にしていたとしたら、その妻を殺したのも同一人

物という可能性がある。

しかし、先日葉月が感じたものは腹の中の胎児が自ら出て行ったようなものだった。

ましてやその時間帯に対して、女性は実家にいたと供述しているし、それを裏付けるように第3者の他人が女性を見ていると云っているため、アリバイが成立している。

「それで、その女性はどう云ってるのかな？」

「確かに間宮雄太を殺したのは自分だと」

阿弥陀警部の言葉を待たず、スツと臯月は立ち上がる。

「どうした？」

「えっと…… ちょっとトイレ……」

そう言いながら、臯月はお腹を摩っていた。

「そうか……」

と一言云うや、拓蔵は阿弥陀警部と話を進めていた。

臯月が腹部に違和感を感じはじめたのは、間宮理恵が殺された頃からだ。

そしてどういいうわけか、間宮理恵の話を聞くと、まるで反応するようにお腹の中から違和感を感じていた。

「それでは、私たちはこれで」

居間のほうで阿弥陀警部が別れの挨拶しているのが聞こえる。

「今回も捜査のご協力、ありがとうございました」

そう云うや、玄関の方へと去っていく。

途端、臯月は腹部に今まで感じたことがないほどの激痛が走った。その痛みで臯月は何かに気付く

(間宮理恵は確かに誰かに殺された。だけど、それはどうやって？ 刺殺だったとしたら、中の子供は？ 刺した場所が運悪く、子宮を貫いていたら？ 子供はさらわれたんじゃないかと、もともからいなかったんじゃない？)

「阿弥陀警部っ！ 間宮理恵が殺された現場は隈なく探したんですか？」

「えっ？ えっと、はい。鑑識の話だと……それがどうかしましたか？」

「杜若というのは野草なんです。つまり、間宮理恵は殺された時、屈まないと触れる事なんて出来ないんです。妊婦が屈むってのそれだけでもは相当疲れるみたいで、その場に杜若があるからって、いくらなんでも触らない」

「つまり、間宮理恵は殺された後、帝王切開されたというのか？」

「それに……間宮理恵の胎内に子供はもう」

皇月がその先を言おうとした時だった。

捌・世迷言

突然神社の大鈴が鳴る音がした。耳の悪い皐月でもその音が聞こえるほどの大きな音だ。

「誰か参拝客でも来たのかしら？」

弥生がそそくさと様子を疑いに出た。

一二分ほどして、弥生が戻ってくるや、

「皐月。あなたにお客様…… なんか返してほしいって」

その言葉に皐月は首を傾げた。

云われたまま、皐月は境内に出るや、その客人を探すが、夕暮れになっていくにつれ、周りは薄暗くなっていく。

「弥生姉さん？ 客なんて何処にも」

そう弥生を呼ぼうとした時だった。

皐月の上空だけが異様なほどに真っ暗になるや、途端に腹部に痛みが走った。その痛みには耐え切れず、皐月は跪いた。

皐月はゆっくりと上空を見上げるや、そこにいたのは“人”だった。その形状は両腕が羽根のようで、鳥といってもいい。

「皐月っ！」

異常を感じたのか、外に飛び出してきた弥生を見るや、鳥人間は片腕を振るうと羽根は投げ付けられ、弥生を衣服もろとも壁に貼り付けにされた。

「な、なによ？ これえ？」

じたばたと足搔あかくが、羽根に強力な妖気が纏まとわれており、身動きが取れないでいる。

「弥生姉さん！」

皐月が弥生に近付こうとした時だった。

「かえして
」

鳥人間が皐月にそう告げた。

「かえして？ なにを？ 私はあなたなんかにものを借りた覚えは
」

「くうかあええしいてええええええええええええつ！！」

怒声を挙げるや、鳥人間は皐月に襲い掛かった。

「だからあつ！ あなたなんかにものを借りた覚えは」

皐月は痛みが走る腹部を庇いながら、襲い掛かる羽根の群れを避け続ける。

「
っ
」

その痛みが激しくなり、皐月は転倒し、その衝撃で嘔吐する。

「かえして…… 私の子供…… わたしの……」

鳥人間はふらふらと飛びながら、皐月に近付いていく。

「皐月っ！ あんた、この人に恨みでも買ってるんじゃないの？」

「買ってるわけないでしょ？ でも、なに？ 子供って……」

皐月がそういった時だった。

腹部に走っていた痛みが和やわらぎ、間一髪、皐月は体勢を整え、鳥人間から間合いを離れた。

しかし、再び痛みが走り、耐え切れずに屈むや、羽根の群れはまるで避けるように逸それていった。

まるでお腹に感じる違和感が自分を守っている事に気付き、皐月

は腹部の痛みが何を意味していたのかを知る。

「臯月お姉さま！ これっ！」

本堂の方からは葉月が大声で叫ぶや、二本の竹刀を空へと放り投げた。

鳥人間の狙いが臯月から葉月へと移り、羽根の大群を葉月へと仕向けた。

その群れに隙間はなく避けきれないとわかるや、葉月は思わず目を瞑った。

「吾^{わが}神殿に祭られし大黒の業^{しゅつ}よ！ 今ばかり我に剛の許しを！ 護^ご形^{けい}・護光^{ごこう}の袋」

葉月の眼前には二本の刀を×字に構えた臯月が立っており、ふたりの周りには柔らかな光が、まるで袋のように二人を降り注ぐ羽根から護っていた。

「臯月お姉さま」

「葉月！ 危ないから爺様のところに逃げて」

葉月はそう云われるや、素直に拓蔵の下へと逃げていく。

それを見るや、臯月は鳥人間を睨みつけ、

「あんたは私があんたの子供を奪った。そう思ってるだろうけど…」

… そもそも！ あんたの子供なんてしらない！」

ゆっくりと剣先を鳥人間に向け、言い放った。 その言葉に鳥

人間は怒号を挙げた。

「間宮理恵が殺された時、彼女は杜若に触れようとした。だけど、今さっきまでその痛みを体験した私なら理解できる！ 殺された間宮理恵は死ぬ間際に杜若に触れている」

そう云うや、鳥人間は含み笑いを浮かべる。

「人間が子を孕み、産むまでの期間は精々九ヶ月前後。十ヶ月なんて掛かっていなかった」

「ちよつと待つてください。確か、田原医師から間宮理恵の妊娠期間は十ヶ月だと。そのことはその場にいた臯月さんだって」

「通院した形跡は？」

「え？」

「間宮理恵が妊娠十ヶ月の間、田原先生のところに通院したのかって訊いてるんです。幾らなんでも十ヶ月も子を孕んでいたら、田原先生はおるか、当の本人だって違和感を感じる。この子は生きてるのかって……」

臯月はあの晩に見た赤く爛れた赤ん坊を思い出していた。

「間宮理恵は中にいた子供が“死んでいた事”に気付いていた……」

だから子安神社に行つて子安神にお参りに行つていた」

「うそよ…… 理恵のお腹をかつ裂いて！ 中を見た！ その子は元気に動いてたわ」

鳥人間は目の視点をあわせずに話す。

「間宮雄太がどれだけ酷い男だったとしても、それはあんた達が決める事でしょ？」

「あんたになにがわかるのよ？ 捨てられた女の！」

「ええ！ 全然つわかんないわよお！ そんなことをしてまで子供を得ようとする気持ちなんてっ！」

臯月は怒号を挙げ、鳥人間を睨みつけた。

「あんたのその歪な形状は“姑獲鳥”といつて、他人の赤子を奪う妖怪。でも、それは生まれてきた子供に対してで、決して胎児を奪う事はない！ あんたのやっっている事は難産で子を抱けなかった姑獲鳥への、そして間宮理恵に対しての冒瀆なのよ！」

皐月はうつすらと涙を流しながら、咆哮した。

死んだ妊婦をそのまま埋葬すると“姑獲鳥”へと変貌してしまうため、呪い^{まじな}として、帝王切開をし、まだ“人間としてなっていない”胎児を取り出す。そしてその胎児を抱かせ、埋葬する。

「それがなあに？ 私の恋人をうばおうとする女狐どもが、雄太の子を孕めば、殺すのが当たり前でしょ？ だって、彼はわたしのもの！ 私のものなんだからあ！」

鳥人間はそう叫ぶや、羽根を大きく広げ、皐月を覆い隠す。

「ぎがあ？」

途端、姑獲鳥の表情が崩れる。

「私はまだ、他人^{ひと}を好きになつた事がないから深くは考えられないけど、あなたの気持ちがわからないわけじゃない。……でもね

皐月は血に染まった二本の刀を振るい、血払いをする。

「大切な人を“もの”だと云ってる時点で、あなたはその人に必要とされてない」

「な、何を？」

鳥人間の骸^{むくむく}はふたつに分かれ、左右に倒れ落ちた。

「閻獄^{えんごく}第二条 人のものを奪い、あまつさえ苦しめ殺したものは『黒縄地獄・畏鷲^{いじゆ}処』へと連行する」

そう皐月が言うや、何処からともなくお札が落ちてきては鳥人間の額についた。

「待って、ねえ？ 待って！」

鳥人間が赦しを請うが、皐月は見向きもしなかった。

玖・僥倖

数日後、阿弥陀警部から連絡が入った。

最初に任意同行していた女性は確かに間宮雄太を殺した事には素直に供述したが、間宮理恵に関しては全く以て接点すらなかったのだ。

逆にもう一人、皐月によって罰せられた女性《姑獲鳥》には、間宮雄太と間宮理恵それぞれにも接点があり、間宮理恵が妊娠していた事も知っていた。そして、それが間宮雄太の子である事も……

「だけど奇妙な話ですよね？」

弥生がそう云うと、大宮巡査は首を傾げた。

「だってもし間宮理恵の胎児が死んでいた事を知っていたら、彼女は殺されなかったことにはなるんじゃないんですか？」

「それに関してはまだ事情聴取中ですが、いやはや、精神が壊れたのか、全然此方の話をきいてくれないんですよ」

阿弥陀警部が団扇うちわで体を扇あおぎながら言う。

「しかし、ビックリしましたよ。てっきり妖怪と化した人は地獄に送られるとばかり」

「彼女は死んでませんからすぐに送られませんか。でも当然、死ねば地獄に堕ちます。人を殺してるんですから。そもそも生き物が地獄に堕ちないなんて事はないんです」

「どうしてですか？」

皐月の説明に大宮巡査が首を傾げる。

「例えば夏場に蚊がいるとしますよね？ 誰だって刺されたら嫌だから、叩き殺してしまう。だけど、蚊だって生きてるんですから、殺した事になるんです」

「一寸の虫にも五分の魂。生きている以上、それぞれに必ず生きている理由があるんですよ。それに血を吸う蚊は雌で、子供に栄養を与えるためなんです」

そう話されても、やっぱり刺されるのはつらいと大宮巡査は言った。

それに関しては弥生と皐月、そして阿弥陀警部も同意だった。

「それで逮捕された二人は」

「ああ、一人は死刑。もう一人は懲役20年くらいでしょうね」

それを聴くや、皐月はゆっくりと立ち上がった。

「人間は必ず地獄に落ちる。すぐに天国にいけるなんて無理なのよ。それが何千年、何万年、いや何兆年もの間、死んでは生まれ変わり、死んでは生まれ変わりの繰り返し。それに天国で誰かと再会するなんて無理な話。現世での記憶なんてないんだから」

皐月は既に違和感がなくなったお腹を、まるで愛おしく摩っていた。

確かに間宮雄太には、女性を騙したという罪状があるため、地獄に落ちる。

そして間宮理恵とその子供には二度と会う事はない。

皐月はあの晩、自分の目の前に現れた女性は、間宮理恵が姑獲鳥へと成り果てた姿で、爛れた赤ん坊はその胎児だったのではないだろうか……そして、水の音だと思ったのは、彼女の涙だったのではないだろうか……

皐月はやはりあの姑獲鳥（間宮理恵）が、自分たちと同じに思えて仕方がなかった。

後日談だが、この事件解決以降、皐月の腹部の違和感は日に日に

柔らかいていった。ただ、本元の原因は便秘であり、生理は予定通りの周期で来ていた。

玖・僥倖（後書き）

第二話終了です。

壱・通り魔

「うん、そうそう。スカートを二重にじゅうにしたら、裾そでにフリルを縫い付けて……」

弥生は重たそうな学生鞆を背負せおいながら、駅の改札口を通り抜けていた。

「でさ、カチューシャはどうする？ ボトムスと合わせて、縞にするとか」

「うーん。色柄にもよるんじゃない？ 合わなかったら、もともこうもないでしょ？」

という話をしながら、弥生は友人二人と一緒に帰っていた。

一人は『片桐千夏』といい、背格好は百六十あるかというくらいである。

もう一人は『横山麻実』といい、ボブカットである。

「あ、弥生。今度の土曜、わかってるわよね？」

片桐千夏がそう云うと、弥生は頷いた。今日が火曜日なので、四日後となる。

「弥生は巫女さんやってるから、和装のイメージかな。今度、カタログ持ってくるよ」

「あ、前とうしろの写真だけでいいよ。後は自分でやれるから」

弥生がそう云うと、友人二人は「おー」と声を出して感心した。

弥生もそうだが、皐月、葉月の三姉妹には母親がいない。云ってしまえば弥生が母親代わりとなっている。炊事洗濯もさることながら、裁縫もやっているの、自然とそういうことが得意になっていた。

自分の寸法と、写真に写った服のデザインを見れば、大抵は出来るのだが、さすがにキヤラクターや文字がプリントされた服は作れない。

ちなみに神社で着ている巫女服だが、あれは弥生の手製である。

「それじゃ、また明日ね」

そう云いながら、友人二人は手を振りながら、去っていった。

「うわ、寒い」

肩を震わせ、弥生は路地裏を見た。神社までの道程には何故か街灯が設置されていない。

神社近くまで行けば、街灯はあるのだが、それまでがまた長い。

しかもここ最近、この近辺で女性を襲う通り魔事件が多発しており、住民の多くが、その道に街灯を設置しろという働きを持ち掛けているが、どういうわけか、町は行動を示そうとしない。

少しうしろを見れば、駅の周辺という事もあってか、灯りが点々と輝いている。

弥生は携帯を手に取り、電話をしようとする。が、数分もしないうちに携帯を閉じた。

その表情は何とも云い難いものだった。そして液晶の時間表記を一瞥するや溜め息を吐いた。

時間は午後6時。電話しようとした相手は臯月で、この時間、臯月は本堂で座禅を組んでいるか、二刀流の訓練をしていて、集中するがために携帯の電源を切っている。

そもそも耳が若干聞こえないので、期待は余りしていなかった。

少しどころか、だいぶ嫌な顔を浮かべながら、弥生は闇路へと消えた。

今日に限って月が雲に隠れているため、家の灯りが何よりの道標となっていた。

真つ直ぐ歩けば神社なのだが、その距離が嫌になるほど長い。

一キロメートルほど離れているため、自転車で行きたかったのだが、先日工事現場の近くを通りかかった時、古釘を踏んだのか、空気が抜け、タイヤのチューブに穴を開けてしまった。

なおせるものがおらず、また修理に出すのも、それはそれで勿体無い気がするというわけで、歩きになっている。

駅を出てから既に三十分が過ぎたころだった。

突然ピューという冷たい風の音が寂しく鳴るや、弥生は周りを警戒した。

その時だった。

『っ？』

突然、腕はひびく脹脛に痛みが走り、弥生はその場で崩れるように転倒した。

「つつうつつ」

弥生はちらりと脹脛の方を見やるが、真つ暗でよく見えない。

鞆から携帯を取り出し、液晶の光でそこを照らすや、ゾツとした。

左足の脹脛をざっくりとななめ一線に、まるで鎌か何かの刃物で切りつけたような傷痕があった。

だが、弥生が驚いたのはその事ではなく、一体何時切りつけられたのかという事にあった。

自分は周りを警戒しながら歩いていた。だから普通は誰かが通り抜けていくことに気付いていたはずだ。

それなのに、全くもってそんな“気配”はなかった。

前の方から車のクラクションが鳴ったと思いきや、そのまま弥生の隣りに停った。

そして、窓がゆっくりと開けられると、見知った顔が覗きこんできた。

「あれまあ、弥生さん？ どうしたんですかなあ？」

「あ、阿弥陀警部？」

弥生は阿弥陀警部を見やるや、

「そうだ！ あの、さっき変な人が通っていきませんでしたか？」

「んっ？ いや、別にそんな人はいませんでしたよ。ねえ？ 岡崎くん」

阿弥陀警部が隣りで運転席にいる岡崎巡査に訊ねるや、彼は頷いていた。

「それで、一体どうしたんですかな？」

阿弥陀警部は既に弥生の怪我に気付いていたが、その理由がわからない。

「とにかく手当てしましょう。岡崎君、手伝ってください」

そう云うや、阿弥陀警部と岡崎巡査はパトカーから降りると、阿弥陀警部が弥生に肩をかし、車に乗せた。

岡崎巡査は落ちていた弥生の鞆を拾っている。

「そう云えば、阿弥陀警部はどうして？」

「いやね。最近通り魔事件が多発してるでしょ？ それで神主からちよつとばっかしお願いされたんですよ」

いくら阿弥陀警部が知り合いとはいえ、高が神社の神主たかにそんな事が出来るのかと弥生は思った。

「それで、切りつけた犯人は見てないんですね？」
「見ていないというよりも、そもそも“気配”がなく、それどころか足音すらしなかった
いくらなんでも人間なら気配の一つはするものだ。」

「そうそう。これも通り魔事件に関する事なんですけどね。どうも襲われた人たちに共通するのが、脹脛を鋭利な刃物でやられている事なんですよ。弥生さんと同様に
阿弥陀警部が助手席から話す。」

「ちょっと気になるんでね、神主に相談しに行ってたんですよ」
なるほど、と弥生は頭の中にあつた疑問が解決した。つまり帰る途中、自分に会ったら、送ってくれと頼んだのだろうと弥生は思った
実際、車は稲妻神社近くへときていた。

「一回家に戻ってから、病院に行きますか？」
「はい、そうします。遅くなって、心配させるのもあれですし」
もちろんこれから病院に行くのだから、心配させてしまう事には
変わらない。

車は稲妻神社の鳥居前で停まった、
阿弥陀警部の肩をかりながら、弥生が家に戻ると、臯月が出迎えていた。

「ど、どうしたの？」
「臯月？ あんたご飯作れたっけ？」
帰ってきて、開口一番がこれである。
「うん。まあ、簡単なのしか作れないけど……
ってか、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ？」

「ちょっとやられちゃってね。これから病院に行って治療してもらうから、大丈夫すぐに戻ってくるから」

そう云うと、弥生は家上がり、阿弥陀警部に自分の部屋の前まで送ってもらう。そして5分くらいで戻ってきた。

「傷は大丈夫か？」

拓蔵が玄関先で弥生に傷の具合を訊ねた。

「うん。最初は結構血が出てたんだけど、今は大丈夫。でも、大事をとって診てもらってきます」

弥生は左足の脹脛を一瞥する。

傷痕からは既に血が止まっており、赤い線がひいてあるだけとなっている。

三姉妹は神仏の力で護られており、多少の傷くらいなら一日くらいで治る。

切り傷ならどんなに深い傷でも、ものの数分で治るのだが、痛みがまだあった。

念のために診てもらうと、脹脛の傷とは別に、捻挫を患っていた。どうやら痛みが走ったときに、無理な体勢で体を崩してしまったためらしい。

捻挫は全治一週間だが、脹脛を傷つけられた事もあり、大事をとって半日の入院と担当医に云われた。

吉・通り魔（後書き）

弥生の友人名を入れてみました。とつかちよい役なので、そんなに深くは考えてません。

式・顔無

阿弥陀警部や大宮巡査を含んだ、警視庁捜査一課に連絡が入ったのは、現場に着く五分ほど前だった。

一応大事をとって半日入院となった事を稲妻神社に報告しようとした矢先の事だ。

無線から連絡が入り、内容は駅近辺で変死体が発見されたとの事だった。

阿弥陀警部は電話に出た拓蔵に要件だけを云い済ませると、急ぎ現場へと駆けつけたのだった。

そして、死体を見るや、否応なしに目を背けた。

被害者は見た目からして、40から60くらいの、少しぽっちゃりとしたな中年女性だった。が、その顔面は無残な事に切り刻まれており、顔の判別は先ず不可能に近かった。

「被害者の身元判明は？」

「はい。被害者は沢口一希さわぐちのぞみ、52歳の専業主婦、パートの帰りに襲われたようですな」

「襲われたで済みますかね？」

その問い掛けに、大宮巡査は少し考え込み、

「済まないでしょうね？ 被害者に対して加害者がどれほどの怨みを持っていたのかわかりませんが」

大宮巡査の言うとおり、阿弥陀警部も同様の答えだった。

「被害者の勤め先は？」

「駅前にあるスーパーマーケットのようですね。勤務時間は朝8時から夕方5時までで、仕事が終わった後、いつも夕飯の買い物をし

ていたようです」

まあ、パートも兼ねた専業主婦なら妥当な時間だろうと、阿弥陀警部は思った。

「最後に見たのは？」

「見た人はいませんでしたが、防犯カメラに彼女が店を出て行くのが映っていたそうです」

「つまり、被害者が襲われる以前のもは見えていないということですね」

阿弥陀警部はそう云うや、少しばかり考え込んだ。

夕方くらいだったら、ちょうど弥生が駅を出ていた頃だ。

スーパーマーケットの入口はちょうど駅の出入口と向かい合わせになっている。

つまり、弥生が被害者を見ていた可能性があるが、訊こうにも顔がこれではどうしようもない。

「阿弥陀警部。同店員に訊きましたところ、被害者の沢口希はうわさですと、夫が多額の借金を抱えていたようです」

「つまり、そのお金を夫婦でかえしてるってわけですか？」

「いえ、それが　主な理由が被害者にあるそうなんです。借金まの主な理由が宝石関係にあるそうなんですよ。まあ、夫が小さな町工場ちこうばをやっていたみたいですね」

「社長婦人というわけですか。大きく見せたいという気持ちはわからないわけでもないですが……　ところで、やっていたということは、今はやっていないということですかね？」

「借金と今の不況が重なって、差し押さえをくらったようです」

「町工場って、今結構注目されてますけどね。人工衛星を作った大阪の町工場とか、痛くない注射針を作ったところとか……」

「でもそれってかなりの技術が必要じゃないですかね？　それに当

たり外れがあるそうですし、被害者の会社はそういう波にのれなかつたようです」

大宮巡査の話聞きながら、阿弥陀警部は被害者の顔を見ていた。

「ここ最近起きている通り魔事件とは……もしかすると関係ないのかも知れませんね」

阿弥陀警部の言葉に大宮巡査は首を傾げた。

「どうしてですか？ 発見されたのは通り魔事件が起きている近辺なんですよ？」

「今まで起きた事件に共通したものは覚えてますかな？」

「えっと、被害者の殆どは脹脛を鎌か何かで切られている」

「稲妻神社の弥生さんもつい先ほど被害にあつてましてね。彼女も脹脛に傷をつけられてましたよ」

阿弥陀警部の言いたい事がわかったのか、大宮巡査は被害者の顔を一瞥した。

そして、運び行く鑑識官を呼び止め、遺体を降ろさせた。

「阿弥陀警部、傷がありますが、今までと違いますね」

大宮巡査が確認したのは、被害者の脹脛に傷痕があることだったのだが、それは脹脛の上内側から下外側にかけてだった。しかも、片方には傷が入っていない。

今まで通り魔にあつた被害者に共通するものは、多少なりとももう片方の脹脛に傷痕があつた。それは共通して冷たい風の音が聞こえ、立ち止まつた事にある。

人間立ち止まれば、足は少なからずとも揃えてしまう。

「殺した後につけたんでしょうかね？ 通り魔事件の犯人がしたとみせかけて」

「だったとしても、こんな事はしないでしょうね？」

阿弥陀警部は被害者の潰れた顔を見る。

「詳しい事は検死結果を待ちましょう」

「検死でわからなかったら…… 彼女たちに訊くんですか？」

「そうなりますね。ただ、もう遅いですし、検死結果が出てからに
しましょう」

阿弥陀警部にそう云われ、大宮巡査は頷いた。

参・凧

病室の一角いっかくにベッドがあり、それを囲むようにカーテンが締められている。時間は既に夜の十時を過ぎており、消灯時間である九時を疾うに過ぎていた。

弥生はベッドに腰をかけた状態で、ガラツと音を立てるように窓を開けると、月の光が暗い部屋の中に入ってきた。

「遊火あそびび、入ってきなさい」

弥生がそう云うと、スツと小さく風が吹いた。するとカーテンが少し靡なびくどころか、拳大くらいの大きさにへこんだ。

「弥生さま、お呼びでしょうか？」
ボウと無数の火の玉が現れ、それらが一箇所に集まるや、人の形へと成っていく。

その姿は10から12くらいの少女で、髪型はストレート。いわゆる一抹人形などに見られる純和風を思わせる髪形だった。少しばかり違うのは服装が洋風で、頭と腰にフリルのついた大きなリボンを着けている。

少女……遊火は鬼火の一種といわれており、高知や三谷山で城下や海上に見られる鬼火である。鬼火といっても人に害がない大人しい妖怪である。

「弥生さまに云われ、調べましたところ、襲われた道に妖気もその残り香さえ漂っていませんでした」

「あの時、私は警戒してたのよ？ それなのに人の気配は感じられ

なかった」

遊火の言葉が信じられないわけではない。が、現に弥生は警戒していた上で脹脛に傷をつけられている。

「あの道には何かあるわけ？」

「いえ、特には……」

そう遊火が云うと、ハツとした表情で、

「そう云えば、確かあの近くの家で惨殺事件があったとか」

「それ、五年以上も前の事件でしょ？」

弥生がそう云いながら、嫌そうな顔を浮かべた。

「で、それと私が襲われたのに何の関係があるのよ？」

「それが…… あの家には珍しい生き物を飼っていたようで」

「珍しい生き物？」

そう聞き返すと、遊火はスツと左手の人差し指を虚空に突き刺した。

すると何も無いところから点々と火の粉が集まり、それらが形を成していく。

遊火自体がひとつではなく、無数の火の玉が集まったものと云われているため、こういった芸当が出来る。

平たく云えば、小魚が群れを成して大きな魚に見せていることと同様と想像していただければいい。

集まり形を成していく火の玉はなにやらひよる長い動物の形になった。

「いたち？」

「「フェレット」というものみたいですね。弥生さまの云うとおり、^{いたち}鼬の一種です」

確かに珍しいといえは珍しいが、今の時代を考えるとフレットを飼っている家はそう珍しいものではない。

「5年前に起きた惨殺事件の被害者は“沢口 修造” 45歳の男性。死因は体中を切り刻まれた出血死によるものといわれています。犯人は未だに見つかっていません」

「当時は強盗事件とかって云われてなかった？ 死体が見つかった部屋の中は荒らされていたって」

「ですが…… 金目のものはひとつも盗まれていません。それどころか切り刻まれていたようです」

強盗目的による殺人だったら、当の目的である金目のものをそんな風にするとは思えない。

「それと調べていた時、警察の方々が何か集まっていましたか？」

「あそこは最近通り魔事件が起きてるから、パトロールじゃない？ 今の時間だったら、まだ人が通っている可能性がある。」

「いえ、それだったら周辺を巡回するんじゃないでしょうか？」

そう云われ、弥生は阿弥陀警部が呼び出されていたことを思い出す。

「何か事件が起きたって事？ 警察が集まるほどの」

「それはわかりませんが」

「わからないって？ あなた鬼火の一種なんだから、靈感がある人にしか見えないでしょ？」

そう怒鳴るように云われ、遊火は泣き出しそんな表情を浮かべた。

「ひやって、ちいかずこおうとしいたときい、かぜえが急に止まったあんでえすよあ？ 怖いじゃないですかあ？ いきなりかぜえが止まったりなんかしたらあ」

愚図り出し、ワンワンと泣き喚き始める。

「ちよ、泣かなくてもいいでしょ？ あなた一応妖怪なんだから」
「でもお、わあたし妖怪ですけど、皐月しゃまにはふえんふえんき
いずういてもらふえまふえんしいくつ」

「それは ほんら皐月は幽霊が見えないでしょ？ それに力
の弱い妖怪も見えないって云うし」

「ほおらあ、わあたし妖怪じゃないんだあ」

そりやまあ、鬼火とはいえ、人に害をなさない遊火である。力が
弱いといわれても否定出来ない。

先ほどもカーテンが拳大にへこんだ時も、本来なら燃えていたはず
である。が、実際は燃えるどころか焦げさえもない。

「それにしても、急に風が止まったって事は、少なくともそこに何
かがいたって事よね？」

弥生は出来る限り穏便に話を元に戻していく。

「でも、何も見えませんでしたよ？」

「何かがあったって云うのはそう云う意味じゃないの。遊火が近付こ
うとした時に風なまになったということよね？」

“風”というのは風を意味する凡かぜがまえに“止”まるといふ字が入って
いる事から、風が止まった状態の事を指す。

「今日の天気予報は北東の風で、夜になると強さを増すって云って
いたから、少なくとも風が止まるということは考え難にくいでしょ」

「ということは私が見えていた……という事でしようか？」

「それはわからないけど…… 妖怪である遊火が感知出来なかった

妖気…… もしかすると妖怪じゃないのかも」

弥生が深く考え始めると、遊火がポンツと手を鳴らした。

「そう云えば、あの道って六年前までは狭かったんですね」

恐らく遊火は特に何も考えないで云ったのだらう。

「狭かったって…… 二車線道路だから、そんなに狭くないでしょ

？」

弥生はそう云うが、何故か六年以上前の記憶が曖昧だった。

「違いますよ。昔、あそこは車一台に歩行者がやっと通れる道だったんですよ。道が狭いから車の行き来も出来ないし、何より歩行者に事故の危険性があった。本来あの道は弥生さまや皐月さま、葉月さまが学校に行き来する時間帯は車が通れないようにしていたのに、近道だからって車が無断で通っていたんです。道を広げる際、立ち退きともしていたそうですよ。私、拓蔵さまの手助けをしている時から、この近所の事知ってますし」

遊火は七年前に拓蔵が助けた妖怪で、その恩をかえしている。

「そう云えば、あそこって祠があったような……」

「祠？ 初めて聞いたけど」

遊火の言葉に聞き返すと、

「そりゃそうですよ。だって以前事件があった公園の林にある祠がそれですから」

そう遊火が云うや、何かを思い出した。

「確かあそこって、昔は魃が住んでたんですよ」

「いたちかぁ…… それだったら“かまいたち”が出てくるんだけど」

「でも“かまいたち”は妖怪ですよ？」

弥生が遊火と会話しているなか、ふとコツコツと机を叩いたような音が聞こえてきた。

「ちよいとあんた…… 独り言にしちゃ、でか過ぎるんでねえかええ？」

隣りで寝ていた老婆にそう云われ、二人は互いを見遣った。

「す、すみません。ちよっと演劇の練習をしていたもので」

「ほうかい、たいへんだあねえ。あんまり根気詰めると体に悪いからねえ」

「はい。すみませんでした」

弥生はそう云いながらも、視線は遊火の方に向けていた。

「一度爺様にお話して、もう一度あの周辺を調べてみて」

そう云われ、遊火は嫌そうな顔を浮かべるや、

「そのストレートの髪を両側のみつまみかウエーブをかけて……」

弥生がそう云うと、遊火は髪を抑えながらたじろぐ。

遊火の奇妙な服装は弥生の手製であり、云ってしまえば着せ替え人形と成っている。

弥生のゴスロリ趣味は家族と趣味仲間くらいしか知らず、新作を作る際も先ずは遊火のサイズで作ってみている。

遊火が嫌そうな顔をしているのは、本来日本の妖怪である遊火がそんな中世ヨーロッパ調の服装を好んで着ている訳ではないし、弥生以外の目の前では先に述べたとおり、一抹人形のような服装で現れている。

その最後の髻である長くスラツとした綺麗な長髪を訳もわからな
いへんな髪型に弄られては、と考えるとやはり命令を聞くしかなか
った。

「わかりました。でも危険だと感じたら逃げますからね」

「わかってる。何も危険な目にあわせる訳じゃないでしょ？ あくまで偵察なんだから」

弥生にそう云われ、遊火は一つ溜め息を吐くや、ペアと、まるで蒲公英タンポポの綿毛に息を吹きかけたかのような無数の小さな火の玉となつて、開けられたままの窓から出ていった。

参・凧（後書き）

遊火の振り仮名がしつこいくらいあったので、最初のところだけを
残して、後は削除しました。

肆・未遂

「臯月いつ！ ちょっと霊視してくれない？」

昼休み前の給食の時間、友人の『飯塚萌寝』いづか もねに突然そう言われた臯月は、口に含んでいたお茶を吹き出してしまう。

「ちょ、変な事云わないでよ！」

臯月はあたふたと汚れた机の上を拭いたり、何事かと思って臯月の方を見る他の生徒たちに謝りを言ったりしている。

「いやね？ 昨日さあ、ちょっと怪我しちゃって、脹脛を何かで引っ掻いちゃったみたいでさ？」

「脹脛？」

臯月は飯塚萌音の脹脛を一瞥するが、何ともなっておらず、疑うように萌音の目を見た。

「いや、本当だって、気付いたときには血がドバドバって」

「ご飯食べてるときにする話じゃないでしょ？」

他の生徒にそう云われ、萌音は話をやめた。

「昼休みに話すから、教室に残ってて」

そう云われ、臯月は頷いた。

それから昼休みに入るチャイムが鳴り、教室に残っているもの、校庭や他のところへ出て行くものと教室内は疎らまばらになっていった。

「それで話って？」

「だから脹脛に何か取り憑いてないかなって」

そういわれても、皐月は霊視が出来る訳ではない。

以前の話を説明しているため細かいところは割愛するが、皐月は霊というものが見えない。そもそも萌音の脹脛からは妖気すら感じられないでいた。

「何処で怪我したの？」

「えっと、確か駅前の」

皐月が通り魔が起きている場所と言っや、萌音はそうそうと相槌を打った。

「それって昨日の話よね？」

「うん。学校に帰ってから、駅前のスーパーに買い物に行ったその帰り」

「それで誰か近くにいた？」

その問いに答えるように、萌音は首を横に振った。

「近くに花壇があったりとか」

そう訊ねるが否定するように萌音は手を振った。

「でさあ？ 実際のところどうなのかなって」

「怪我をしたのは確かなのよね？ それなのに起きたときには既に治っていた」

皐月は何かを考えながら、マジマジと萌音の脹脛を見ていた。

「まさかねえ……」

「え？ 何？ なんかわかったの？」

「白昼夢とか？」「つなわないでしょ？」

皐月がボケるや、萌音はツッコミを入れる。

「ごめんごめん。大体うちは神社だから、霊とか見えないのよ」

「そうなの？ それじゃ無駄骨だったかなあ…… あっ！」

萌音が自分の席に戻ろうとした時、何かを思い出したのか、慌ててこちらを見遣る。

「昨日の夜さあ、あそこで殺人事件が起きたって…… 恐いよねえ？ 全く町の役人は何してるんだか……」

そう云うや、萌音は自分の席に戻っていった。

その姿を見ながら、皐月は確定してはいないがあるひとつの考えが浮かんでいた。

それは“かまいたち”の存在である。

しかしそれは弥生も感じていた疑問であり、弥生が襲われたのも“かまいたち”というのなら、萌音を襲ったのも“かまいたち”という事になる。

かまいたちは“鎌鼬”とかかれる事から鎌を持った鼬と考えられている。

科学的に云えば“旋風つむじかぜによる負圧が人の肌を裂く現象”とも云われている。

余談だが、某有名医者漫画に森の中でロケットを発射する施設があり、その発射による風圧によって一時的に科学証明でのかまいたちが引き起こされるといふ描写がある。

またかまいたちの伝承が東北地方に多い事から、皫あかぎれ（急激な寒さによって皮膚が裂ける事）ではないかという説もある。

が、皐月がそんな小難しく面倒な考えがある訳ではなく、もうひとつの方を考えていた。

それは一匹でのかまいたちではなく、三匹でのかまいたちだった。

一匹目が獲物の足取りを止め、二匹目が皮膚を鎌で切り裂く。

が、三匹目が持っている傷薬によって、その傷はなかった事になれるという。

皇月は今さっきまで相談していた萌音の話を聞く限りではそう考えてしまっていた。

だがそれなら昨日の夕方、弥生を襲ったのは一体なんだったのだろうか……

そう考えていると何時の間にか昼休みは終わりを迎えようとしていた。

肆・未遂（後書き）

皇月の友人に名前を入れてみました。

伍・立ち退き

「リストラですか？」

阿弥陀警部が大宮巡査とともに、殺された沢口希の近辺を調べていると、町工場自体も結構な借金を抱えていた事がわかり、夫である芳信よしのぶは二重の苦しみを受けていたようだ。

社員を養うにも、工場を運営するにも金は必要になってくる。増してや工場というのは作るのは大前提に、研究費も必要になる場合がある。

「その事を妻である沢口希は知らなかったんでしょうかね？」

「どうやら夫は物作り以外はてんで興味がなかったみたいなんですよ。会社と言ったって、父親がやっていたのをそのままもらったらしいですね」

そう二人が話している間、工場の前に来ていた。

「それで…… こうなっちゃってるわけですか？」

沢口希が住んでいるところを探してみると、なんともまあ見事にぼろく、月とスッポンといった感じである。

借金がだいぶあったらしく、その返済に工場全体や、住まいである一軒家とその土地、家具やら金目になるものは全て差し押さえられたらしいが、それでも足りなかったようだ。

「自分の持つてる宝石でも売ればいいのにねえ」

阿弥陀警部が呆れ顔で大宮巡査を見る。考えてみれば、沢口希が作った借金は、自分を大きく見せようとしたことで招いてしまっている。

「それにしても、工場に一軒家、家具やら何やら…… 売っても足りないって、どれだけ借りてたんでしょうかね？」

「確か10億とか何とか」

それを聞くや、阿弥陀警部は飲み始めていた缶コーヒーを吹き出してしまい、車内のインスタアップパントリーの上が^{まみ}コーヒ塗れになった。

「10億って…… まあ足りないといえは足りないでしょうね」

「いや、それがまともなところなら、幾らか話がつくんでしょうけど」

その言葉に阿弥陀警部は首を傾げた。が、即座に借金が闇金だったことに気付く。

「利息は？」

「まあ、オーソドックスにトイチみたいですね」

借金していた金融会社に連絡をするが、まあ当然と言えば当然ですでに使われてはいなかった。

「皆さんもお金を借りる時は先ずフリーダイヤルかどうかを確認してからかけましょう」

「警部、何処に向かって云ってるんですか？」

大宮警部にツッコまれ、阿弥陀警部は咳払いをする。

「ほら、ちゃんとしたところは大抵フリーダイヤルじゃないですか、でもヤミ金は携帯ですからねえ」

「逃げれる可能性があるって事ですか？ 携帯だから捨てればいいですね」

そう云うこと と話しながら、車は工場があつた更地に着いた時だった。

阿弥陀警部は「あれ？」と思い、窓を開けると気配を消した。

「警部、どうしました？」

大宮巡査が声をかけるが、阿弥陀警部は人差し指を唇に添え、言

葉を遮った。

そして視線でそれを示した。

「なんですかね？ あれ……」

「いたちみたいですねえ？」

「何でこんなところにいたちが？」

それはこつちが聞きたいと、阿弥陀警部は目で訴えた。

目の前には薄茶色のいたちが一匹、更地に現れては、ぽつんと立ち尽くしている。

都会とまでは云わないが、それでもいたちが出てくることは珍しい。

遠目だったせいか、確認は出来ないが、どうやら首輪は付けられていないようだった。

「あっ！」

大宮巡査が声を出す。その声に吃驚してではなかったが、いたちは何処かへと去っていった。

二人は車から降り、先程までいたちがいたところを探していると

……

「なるほど、こんなところから出てきてたんですね」

それはコンクリートの壁に小さな穴がポツカリと空いており、いたちや子猫くらいの細長かったり、小さい動物なら簡単に出入りできる大きさだったが、成長した猫では入れない大きさでもあった。

「このうしろに家がありますけど、そこで飼ってるんですかね？」

そう大宮巡査が訊ねるが、阿弥陀警部はその答えに気付いていた。

「いや、飼えないはずですよ。だって其処、5年前に事件があつて

から、誰も住んでいないはずですから」

そう話す阿弥陀警部の表情は険しかった。

5年前に起きた惨殺事件の被害者である沢口修造は、殺された沢口希の夫、芳信の兄である。

一つ溜め息を吐くや、阿弥陀警部は大宮巡査とともに車でそちらに回り込む。

そして、玄関前に来て、嫌な物を見た。

「借金返せっ！ この泥棒っ！」

阿弥陀警部は壁一面に書かれている文字を読んでいるだけだった。「ヤミ金業者はこんな事もしていたんですかね？」

壁の文字はペンキで書かれており、簡単には落ちそうにない。

「おや？ 見ない顔だねえ」

隣りの家から声がし、二人はそちらを見る。

「これはこんにちわ。あの、一つ訊ねてもいいですかね？」

「ああ、ええよ、ええよ。何でも訊きなされ」

物腰の低い好々爺だなあと考えながら、阿弥陀警部は質問内容を考えていた。

「実は裏側にある町工場があつた更地を見てましたら、いたちが出てきましたね。で、こつちの方に逃げていったんで、確認しに来てたんですよ」

「ほうかい。お前さんたちもあん子らに化かされたんかねえ」

何か話がずれている気がするが、その事を確認すると、老人はクスクスと笑った。

「昔はなあ、いたちは狐や狸と一緒に、人を化かすって云われておつたんじゃよ」

そう話しながら、老人は沢口修造宅を眺めていた。

「あん子らとは？」

「あそこに住んちよったいたちじゃよ。主人が殺されて、野生に戻る事も出来んかったからなあ…… わしが育てておったんじゃよ」

そう云えば、事件当時どういふ訳か沢口修造が飼っているフェレットが見つからなかったと昔聞いたことがあったことを阿弥陀警部は思い出す。

「そのフェレットは今も貴方が？」

「うんにゃ、ネズミ捕りにはいいんじゃがなあ、やっぱりもといた場所が恋しんじやろうな」

老人の家から電話が鳴る音がし、老人は慌てて家に入ってしまった。

「そう云えば、あの事件も今回と似てるんですよ」

「どう云った事件だったんですか？」と大宮巡査が訊ねるが、後で聞かなかった方がよかったと口にした。

その晩の事だった。何時ものように阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社に訪れ、葉月に写真の靈視をお願いしていたのだが　　葉月は目を瞑り難しそうな表情を浮かべていた。

「大丈夫？　葉月」

　　臯月が声をかけるが、葉月にはその言葉が聞こえていないかのよう
　　に反応しない。　　数分以上、費ついやしたが何も聞きえなかつたと
　　皆に伝えた。

　　神主である拓蔵が殺された沢口希の遺体写真を翼々眺めている。

「殺されたのは何時なんじゃ？」

「はい。殺されたのは昨夜の夕方6時半から7時となっていますね」

「えっと、ちよっと待って下さい。確かその時間って」

　　弥生が驚いた声を上げる。

「ええ。ちよつど弥生さんが道端で血を流していたところを発見した時間帯なんですよ」

「つまりその時に殺されたという事でしょうか？」

　　そう臯月が訊ねると、大宮巡査はなにやら黒いものを取り出した。それを拓蔵が受け取り、電灯に翳かきした。

「レントゲンですか？」

「本当は持ち出し禁止なんですけどね。何枚も撮ってますし、一枚くすねて来ました」

「くすねてどうするんですか、くすねて」

　　大宮巡査が阿弥陀警部に文句を言っている中、拓蔵はそんなこと
　　はお構い無しにジツとレントゲンを見ていた。

「爺様、何かわかったの？」

「こりゃ灯台下暗しじゃなあ…… 実際の死因は脳挫傷のうそしょうによる出血多量じゃろ？」

遺体の写真を見る限りでは無残に刻まれた顔が死因だと思われたが、阿弥陀警部もレントゲンを見て初めて本当の死因を知ったようだった。

「脳挫傷って、よくわかりましたね？」

「頭蓋骨と脳の間が変に空洞になっておるじゃろ？ これは脳の血管が切れて、頭蓋骨に血が溜まって脳を圧縮してるからなんじゃよ。脳挫傷の原因は頭部の強打じゃからな」

「どうやら顔を切り刻んでいたのは、身元を判明させないためでしょうね」

「でも、財布の中にスーパーの社員証が入っていたって」
犯人が見落としたのかと考えていたらしいがそうではなかったらしい。

「触れてなかったって、それじゃ強盗殺人じゃないって事ですか？」
「怨みを持った人間の犯行と考えた方がいいでしょうな」

まあ元々顔をここまでしている以上、そう考えられなくもなかったが……

「似てますよね？ あの事件と」

阿弥陀警部が拓蔵に訊ねる。拓蔵は険しい顔を浮かべながら、弥生を見た。

「遊火あそびびを呼んでくれんか？」

そう云われ、弥生は重い腰を上げると、顔を歪める。どうやらまだ捻挫の痛みが完治していないようだ。

襖をスツと開けると、ポツポツと小さな火の玉が集まり、形を成していく。

「お呼びでしょうか？ 弥生さま」

少女の姿をした遊火が、弥生や拓蔵たちに軽く頭を下げる。

「遊火、昨日云ってたことやってくれた？」

「弥生さまが襲われた近辺はやはり霊力も妖気も感じられませんでした」

「それって、今回の事件は妖怪の仕業ではないと言うことですか？」

阿弥陀警部がそう云うが、大宮巡査はキョトンとした表情で首を傾げていた。

「あの、阿弥陀警部？ 一体誰と話してるんですか？」

大宮巡査の眼前には、三姉妹と拓蔵、そして阿弥陀警部“しか”いない。

「まあ、靈感のない人には遊火あそびびは見えんじやろうなあ？」

そう云いながら、拓蔵は臯月を見遣った。その臯月は阿弥陀警部の視線を追ってそちらを見ていたが、実際のところ見えてはいなかった。

ただそこに何かがいると言う微々たるものは感じていた。

「それと事件が起きてから、通り魔事件が起きなくなっているのも妙ですね」

遊火の報告を聞き、阿弥陀警部が少しばかり考えながら、「確かに今日は、通り魔があつたという報告は聞きませぬ。事件があつたのは大抵夕方5時から夜の8時くらいでしたから」

「遊火？ あんた昨日病室で風が止まつたって云ってたけど、今日はどうだったの？」

弥生の問いに答えるように、遊火は首を横に振った。

「被害者の殆どが夕方から夜にかけての時間帯に襲われている。今回の殺人事件もその時間帯に当たりますから」

「最初は通り魔事件に見せかけた殺人。だけど、その通り魔事件の犯人も、未だ特定されていない」

皐月が阿弥陀警部を見ながら、葉月の容態を窺っていた。

「皐月、どうかした？」

「いや、今日友達から云われたんだけど、その友達も昨日通り魔に襲われたって」

「どうしてそんな大事なことを言わなかったんですか？」

皐月の言葉を待たずに、阿弥陀警部が寄りかかってきた。

「いや、その友達の脹脛を見ましたけど、何処も怪我してなかったんですよ」

嘘を吐いてるという可能性は？と訊かれたが、皐月は首を横に振った。

「だから通り魔事件の犯人は“かまいたち”じゃないかって」

「それは襲われた私も思っ、遊火に調べてもらったけど、何も感じなかったって」

「そこなのよ。かまいたちなら妖怪だから、同じ妖怪である遊火が気付かない訳がない」

そう云われ、遊火は困ったような、申し訳ないような複雑な表情を浮かべた。皐月は見えてはいないが、自分が発した言葉が彼女を傷付けていたことに気付く。

「別に遊火が悪いわけじゃないわよ」

が、抉られた傷が簡単に治るわけもなく、遊火は無言で部屋の片隅に座った。

「かまいたちであって、かまいたちではない……」

拓蔵がスツと立ち上がり、部屋を出て行ったが、数分ほどして戻ってきた。

「それはこれではないか？」

持ってきた一冊の古い書物をテーブルの上に乗せ、その頁を捲つた。

『窮奇』と書かれたその妖怪の絵には、いたちではなく、牛のよな姿をしている。

「これは中国の妖怪で、名を窮奇きゅうきというんじやがな。別の読み方で“かまいたち”とも云われているんじや。妖怪図で有名な鳥山石燕の画図百鬼夜行でもそう書かれておるしな」

「こんなに違うのに？」

「昔、日本の知識人は中国にいるものは日本にもいると考えておつたらしくてな、窮奇きゅうきとかまいたちを同一視しておつたらしんじやが……」

拓蔵は遊火を一瞥する。その視線に気付いたのか、遊火もそちらを見遣った。

「窮奇は風神ふうしんであったことから、同じ風の妖怪であるかまいたちと重ねておつたそうじやよ」

「つまり遊火が何も感じなかったって事は、妖怪以上の力があつたって事？」

恐らくそうであろうと拓蔵は皆に告げた。

「じゃが、今回の事件に窮奇きゅうきは関係ないじやろう。問題は脹脛セリチメートルに傷を付けられていた事じや。かまいたちは地上五十糎までしか飛べなかつたと云われておつてな、襲われた婦女子の殆どが脹脛に傷を付けられていたことにも納得がいくじやろ。そして、臯月の友人が襲われたにも拘らず、傷が治っていたことにも説明がつく」

「3匹でのかまいたちなら……という結論って事ですか？」
阿弥陀警部と拓蔵は納得いくようないかないようなといった感じだ。

「そう云えば、今日妙なことがありましたね」

大宮巡査が思い出したように言う。

「いや殺された沢口希の近辺を調べて、夫が運営していた町工場に行ってきたんですけど、そこに一匹のいたちがいたんですよ。で、そのいたちが壁の穴を潜^くって裏の家。 沢口修造の家に行っただですけど、その家の隣に老人が住んでましてね。 沢口修造の家に住んで住んでいることを云ってたんですけど」

「何か納得いってないって感じですね」

そう臯月に言われ、大宮巡査は頷いた。

「私たちは“いたち”を見たと言っただけで、その老人は『あん子“ら”』と云ったんですよ。つまり何匹かがその家に住み着いている事を知っている」

「まあ、いたちはねずみとかを食べるから、食べ物に困ることはないでしょうけど」

「でも、可笑しくありませんか？ その老人、自分が飼っているような言い回しもしてましたし」

そう聞かされ、拓蔵は阿弥陀警部を見遣った。

「その老人。少しばかり調べてくれんかのう。後5年前の事件も徹底的に洗い直しておいてくれ」

そう告げられ、阿弥陀警部は頷いた。

そんな阿弥陀警部と拓蔵の遣り取りを横で見ていた弥生が、

「そう云えばさあ、どうして爺様って、阿弥陀警部にああも命令が出来るのかしら？ 昨日、私が襲われた時も阿弥陀警部を私の迎えによこしていたらしいし」

弥生の問い掛けに皋月も奇妙に思っていたが、何もわからず首を傾げていた。

漆・終選る

阿弥陀警部が老人の家に行ってから、皐月は弥生と遊火を連れ、通り魔事件が起きている場所へと来ていた。

目を瞑り、神経を集中して、警戒しているが、何も感じない。

「やっぱり妙よね？」

皐月は弥生を一瞥する。両手には既に刀へと変化した竹刀を持っており、既に戦闘態勢だった。

「やっぱり遊火の云うとおり、もうかまいたちはいなくなってるのかしら？」

弥生は隣にいる遊火を見る。

「わかりませんが……」

そう遊火が云った時だった。

ゾクツとするような冷たい風が地面から吹き荒んだ途端、皐月の袴は奇妙なまでに切り刻まれ、ボロボロになった。

体勢を整え、見えない何かとの間合いを保ちながらも、皐月は防戦一方だった。

「護形・護光の袋っ！」

刀を×印に構えると、周りには光の布が現れ、皐月を護るように包み込むが

「えっ？」

光の布は切り刻まれ、その名の通り布切れとなり、消滅した。

そして、零れ弾に当たったかのように、皐月は吹き飛ばされ、コンクリートの壁に背中を打った。

「皐月い！」

弥生が呼びかけるが、皐月の意識は朦朧もろろとしていた。

冷たい風が皐月の周りに吹き荒れ、彼女を殺そうとした時だった。皐月が死力を尽くして上げた一本の刀の刃が、何か別の刃とぶつかる音がした。そして、その先を見るや、小さな動物のようなものが見えた。

「いたち……」

「それじゃ、やっぱり通り通り魔事件の犯人って……」

かまいたちだったと3人は思ったが、妙だった。

「でもそれならどうして何も感じなかったんですか？」

「若しかして、妖怪になりかけていた？　そしてその力のコントロールが出来なかった」

皐月と弥生、そして遊火の話を待たず、いたちはその爪で皐月の脛脛に切り刻んだ。

痛みが走り、崩れるように倒れた皐月は、さすがにヤバイ思ったが、妙だった。

「いたちは皐月から離れていく。そして何処から出てきたのか、もう一匹が姿を見せていた。そして何かを探しているようにも見えた。若しかして……　もう一匹を探してる？」

それは言い得て妙だった。二匹のいたちは耳を澄まさないと聞こえないほどの可細い鳴き声が聞こえた。

しかし耳が悪い皐月でさえ聞こえるほどの音にも拘らず、弥生と遊火は耳を塞いでいないため、騒がしくはない。

途端、弥生の携帯がけたたましく鳴り響いた。その音に吃驚したのか、二匹のいたちはそそくさと逃げていく。

「まっ……!!」

皐月は追いかけてしようとしたが、足に痛みが走り、思うように立て

ない。

その後、大宮巡査が車でやって来て、二人を乗せた。その先は沢口修造の家だった。

そして開けられた部屋の中には奇妙なものがあつた。

「ゲージ？」

それは動物を入れる籠が3匹分あり、ご丁寧に名前までつけられている。

「何もかも腐つてますね」

近付けば近付くほど、鼻を曲げるほどの異臭を放っている。

そして動物と思われる白骨死体がそこにあつた。

「これをあの子達は探していたってこと？」

それを答えるように何処から入ってきたのか、スーと2匹のいたちが現れ、その死体に寄り添う。

「かまいたちは一匹でもあり、三匹でもある。でも、それじゃどうして臯月の友達は怪我をしたのに怪我が治つてたのかしら？」

弥生の言葉がわかつたのか、一匹のいたちが弥生の足元に寄り付く。弥生は驚いて除けようとするが、

「大丈夫。その子たち、元々から敵意はなかつたみたい。ううん、私が敵意を見せていたのが駄目だったみたいね」

大宮巡査に肩を貸してもらっている臯月がそう云う。

「だって、若しその子達に敵意があつたなら、あの時私の顔を切り刻んでいたはずだから」

その問いに答えるように、いたちは何時の間に開けられたのか、違う部屋へと案内する。

その部屋は壁一面が切られており、おかれている家具や衣服も同様だった。

「これが5年前に起きた事件の現場って事ですか？」

大宮巡査が入ってきた阿弥陀警部を一瞥し、問い掛ける。

「大宮くん。急いで鑑識班を、ちよつと嫌な事になりましたね。自殺してるんですよ。隣に住んでいた老人が……」

「自殺って、一体どういう？」

弥生にそう訊かれ、阿弥陀警部は煙草を啜えるや、一服する。

「首吊り自殺。遺書には沢口希を通り魔事件に見せかけて、背後から金槌で頭を強打した」

「それじゃ、顔を切り刻んだことは？」

そう訊ねるが、阿弥陀警部は首を横に振った。つまり顔を切り刻んだのは別にいるという事だ。が、それが何なのかはすぐにわかった。

「若しかして、この子たちが？」

大宮巡査がそう云うが、信じられなかった。

「それと調べてみて、妙な事があったですね。死体が少しばかり変色してたんです。私たちが老人と会ったのは今日の午後5時くらい。死体は変色していた事から死後一日以上は経っていたという事になるんです」

「ちよ、ちよつと待って下さいよ？ 一日？ だって僕と阿弥陀警部がそのおじいさんにあつたのって」

大宮巡査の言うとおり、計算が合うはずもない。

「沢口希を殺した後に自殺したものと考えたら……、ご丁寧に遺書の横には、血がついた金槌がありましたからね。老人が殺したと考えてもいいでしょう」

しかし昨日死んでいたとしたら、阿弥陀警部と大宮巡査が今日の昼頃、老人を見る事は不可能になる。

「そう云えば、老人が妙な事を言っていましたなあ。いや、そう考え
てもいいですかね？」

それはあの時老人が言った言葉だった。

『私たちは狐や狸と一緒に、人を化かすって云われている』

それが妙に当たっていた。するとあの老人はいたちが見せていた
幻だろうか……

「臯月、どうする？ 今回に限っては罰するのモ」

弥生はそう訊ねるが、臯月は2匹のいたちがどうして、自分を殺
さなかったのが気になっていた。気配を消し、あまつさえ臯月を
倒しており、少なくとも臯月よりかは強い。

「あなたたちは老人が沢口希を殺す事に気付いていたって事？」

二匹のいたちは白骨死体に寄り添い、臯月と弥生を見ていた。
それを見て、臯月は最初から覚悟しての事だったと悟る。

「閻獄第三条、己が力で人を騙した罪により、そのものら“3名”
を大叫喚へと連行し」

臯月は振り上げた刀を2匹のいたちに振り下ろした。

「その前に閻魔さまにお願いして、あなたたちの大好きな飼い主に
逢いなさい」

臯月が少しばかり微笑み、そして横一文字に切った。がいたちの
影はそこにはなかった。

「また大雑把な連行ね？ 十六小地獄の何処なのかも云わないで」
弥生が呆れたように云う。大叫喚地獄に限らず、全ての地獄には
16の小さな地獄を纏めたものである。

罪状によって、その深さは異なり、また条件によっても連行され
る場所も変わっていく。

臯月は本心ならば、それよりも罪の軽い地獄にしようとしたが、少なくとも人を傷つけている以上、そうは出来なかった。

「でも瑠璃さんがどうにかするかでしょ？　運良く逢えればいいけど」

そう云いながら臯月は気を失うようにその場に倒れた。

捌・家族

事件解決の報告が来てから一週間後だった。稲妻神社の境内には、見るからに重そうな胸を持っているにも拘らず、華奢な体系をした女性が、なにやら拓蔵と楽しそうに話し込んでいる。

「あれ？ おばあさん来てたんだ？」

皐月と葉月がその女性を老婆と云った雰囲気で声をかけた。が、女性の見た目はどう見繕みつくろつても20代にしか見えない。

その女性が二人に気付くや、皐月に対して少しばかり睨みつけた。

「皐月？ あんた閻魔さまが呆あきれてたわよ？ よくもまあとんでもない罪状を叩き付けたわねって」

「いや、だって、結局あの子達は阿弥陀警部にヒントを与えていたし、そもそも通り魔事件だって、沢口芳信を騙していた妻の希を、飼い主の沢口芳信が殺す前に切り離そうとしていたんでしょ？」

老人が住んでいたあの家は沢口夫妻の家で、売り払われてはいたが、隣の家が殺人事件があったことから、買うものがいなかった。

そしてあのいたちたちは、5年前に沢口修造が亡くなった後、弟の芳信が引き取っていた。

「私を負かすほどの力を持っていたにも拘らず、“誰も殺してない” んだから、少しは大目に見なさいよ」

皐月の云うとおり、かまいたちは最終的には誰も殺してなどいない。通り魔事件もそうだし、沢口希の顔を切り刻んだ時も既に息絶えた後にやっている。

「そうは云ってもねえ？ こっちは小さな罪でも罰しないとイケないのよ」

女性は呆れながら云う。

「それはおばあちゃんの仕事でもあるんじゃないの？ 脱衣婆だっえはなんだし」

葉月にそう云われるや、女性、脱衣婆は溜め息を吐く。

「最近では死ぬ人間が昔より多くて、天手古舞てんてこまいなんだから、余計な仕事増やさないでよね？」

「愚痴らない愚痴らない。それであのいたちと飼い主は逢えたんかな？」

拓蔵がそう訊ねると、脱衣婆は頷いた。

「幸せそうだったわよ。先に死んでいたいたちも……そして沢口芳信も」

結局は離されるが、それでも一時の安らぎではあった。

「それと妻の沢口希にはあわせていないわ。そもその元凶はあの女だからね」

「それはあのいたちたちが一番わかっているんじゃないかしら。微妙にあの家には誰かに対しての怨みの念があったから」

飼い主である沢口修造はもちろん、弟である芳信に向けられたものではない。ならば消去法で残った希に対してのものだったのだらう。

「浄玻璃鏡じょうはりのかがみに映った沢口希がいたちをいじめ殺していたのが映ってね、それがあの子達の怨みの原因だった。でも、動物である自分たちではどうする事も出来なかった。だから“かまいたち”の力で婦女子を襲っていた」

「それじゃ、あの子達はもともと妖怪だったって事？」

道理で強いはずだと、臯月は納得した。

「何かに傷を付けられていた時に沢口修造に看病してもらっていたらしいわね」

それは恐らく5年前に起きた事件よりも前の事だろう。

「遊火が妖気を感じられなかったのは、妖怪としてではなく、普段はただのいたちとして生きていたからだ」と閻魔さまは云ってたわ」
それがもし本当だったとしたら、敵にまわさなくてよかったと臯月は心から思った。

「話が長くなつたし、お暇しゅまするわ。“こつち”に長くいると閻魔さまに怒られるしね」

そう云つて、脱衣婆はスツと立ち上がり、何処から出したのか、死神が持つような大きな鎌で虚空を切つた。そこには裂け目が出ており、その先に赤い川が見える。それが俗に言う三途の川である。

「少しお茶をしていけばいいのに」

弥生が誘うが、脱衣婆は首を横に振つて苦笑いを浮かべる。

「今日は報告だけ。それに仕事しないと恐いからね、うちの“旦那”は」

脱衣婆は閻魔大王の妻だという説がある。脱衣婆はその裂け目に入るや、裂け目はスツと消えていった。

事件以降、あの場所での通り魔事件は起きなくなり、加えて前から望まれていた街灯設置の工事が始まった。

ただ臯月と弥生には、その場を通る度に聞こえる、小さくて可細い風の音が、人に助けてもらい、そしてその人の怨みを晴らしたかまいたちの鳴き声のように聞こえていた。

捌・家族（後書き）

第3話終了です。

杏・聖夜

雪が深々と降り頻っている街中で、いくつものカップルが肩を寄せ合いながら歩いている。

そんな中を「はあ」と溜め息交じりに白い息を吐きながら、大宮巡査は人込みの中を歩いていた。

「取り敢えず彼の名誉のためにも云っておくが、全くもてないわけでもない。」

高校時代に彼女はいたが、まあ自然消滅と云った感じに別れている。

さらに云えば、現在の職業である警察は主に不規則な生活のため、出会いが余らないといわれている。

頭や肩に積もった雪が何とも物悲しく思えてしまう。

そんな彼に追い討ちをかけるように、街中では“ジングルベル”の音色が鳴り響いていた。

「くうっそー、なあにがクリスマスだよ？ 日本はいつからキリスト教の国になったんだあ？」

と愚痴を零すが、自分が惨めになるのは目に見えており、さらには叫んだ事で、周りのカップルが面白がって囁きあっている。

その声は街中の騒音に掻き消され、大宮巡査の耳には入らなかつたが、場の空気を感じ取り、先程コンビニで買ってきたおでんを片手に、急ぎ足で警視庁へと戻っていった。

年末ということもあってか、どこの警察も遽しいものである。道路の凍結による車の事故や宴会などの酔っ払い。それに便乗した痴

漢に置き引き等々、猫の手も借りたいほどに忙しい。

「おー、やっと戻ってきましたか？」

阿弥陀警部とその同僚たちが刑事課に戻ってきた大宮巡査に声をかけた。

「雪の中大変でしたでしょ？」

阿弥陀警部が侘びを入れてはいるが、視線は既にテーブルの上においたおでんに向けられている。

「あれ、卵は？」 「売り切れてました」

「餅巾着は？」 「同じく売り切れてました」

この時期になると、暖かい料理はすぐに売り切れる。

「おはぎは？」 「パックでならありましたけど、どうしておでんを買ってくるのに、おはぎなんですか？」

と大宮巡査がツツコミを入れるが、そう発した西戸崎刑事さいとけいは指を振りながら、

「甘いな坊主、おいの地元じゃおでんと一緒に買ってくるってのが常識ったい」

「いや、それ貴方の地元だけだと思いますよ」

阿弥陀警部がそう云うや、西戸崎刑事は分の悪い表情を浮かべた。因みに西戸崎刑事の地元は福岡の小倉こくらである。

「さあ、腹拵はらごしらえ。これからもつと忙しくなりますよ」

阿弥陀警部の号令を聞いた時だった。課内の電話機がけたたましく鳴り響いた。

「はい。警視庁捜査一課……」

阿弥陀警部を含む刑事課の人間たちがその電話に耳を傾けた。

「場所は……」

そして電話は終え、すぐさま対応していた女性警官が皆に件を伝えた。

「浅葱橋の近くで男女の変死体が発見されたとの通報です。両遺体の左小指には赤い糸が付けられていたとの模様。恐らく心中による飛び降り自殺ではないかと」

そう告げられ、阿弥陀警部や西戸崎刑事は口に含んでいたものを喉に無理矢理通した。

「心中　ですかね？」

西戸崎刑事は阿弥陀警部の問いに「うーむ、どうかなあ？」と答える。

「ただどこで死んだかだな。橋の上から落ちたってという報告じゃねえんだろ？」

電話の対応をしていた女刑事にそう訊ねると、彼女は頷いた。

「つまり、運良く浅葱橋の近くで見つかったんだ。運が悪けりゃ東京湾でどざえもんだらうよ？」

確かにと、阿弥陀警部はコートを羽織り、警視庁を出た。

現場に到着すると、既に野次馬が死体の周りを囲んでいた。

「ああ、すみませんねえ。ちよつと通りますよ。大宮くん、ちよつとこの人たち退かしてくれませんか？」

大宮巡査が野次馬の整理をしている間、阿弥陀警部と西戸崎刑事は既に水死体の様子を窺っていた。

「やっぱり心中ですかね？」

「報告だと、左手の小指に赤い糸が結ばれていたようだな」

なんともまあ、時代劇にありそうな心中だ。と阿弥陀警部は思った。

「しかし問題は本当に飛び降り自殺なのかだが……」

西戸崎刑事は浅葱橋を見上げた。橋にも野次馬が集まっている。

「全く見世物じゃないんじゃないぞ?」

「まあ仕方ないでしょ? 他人の命なんて知ったこつちやないんでしょうから」

「TPOを弁えんか…… 時代の流れというのは、便利であって残酷じゃな」

西戸崎刑事には、煌々と輝く繁華街の中で、さらに携帯のフラッシュが死んだ二人を嘲っているように感じていた。

職業柄、命というものを感じているからこそ、その光景が理解出来ない。

カメラを撮っている彼らからすれば“珍しいから”という理由だけで片付けられるだろう。

それは橋の上からではなく、周りを囲んでいる興味本位の野次馬たちもちらほらとだが遣っている。整理をしている警官が止めに入っただけはいるが効果はないに等しかった。

「髪に血がついておるから、やはり転落死かのう?」

「いや、それだったら他の部分にもついているはずですから、撲殺した後流したんじゃないですかね?」

「上流からか? それじゃったら、どっかで引っ掛かっておるじゃろっよ?」

阿弥陀警部は西戸崎刑事の言葉を耳に入れながら、ふたつの死体を調べていた。

両方の死体にはご丁寧に財布があり、身元は直ぐにわかった。

ふと左手をみると、両者の薬指には指輪が付けられている。

「結婚指輪でしょうかね?」

阿弥陀警部はそう考えながらも、財布の中身を確認する。

男性の名前は『堂本 鋼』、24歳 OX社社員と判明した。

女性の名前は『梨元 美亜』、22歳 OX社社員と判明した。

確認を取ると、梨元美亜は今年入ったばかりの新入社員だったことがわかった。男の方、堂本鋼はその梨元美亜と同じ大学の先輩に当たるようだ。

「えっと……」

自分の考えはお門違いかどちがだったのかと自問する。

「若しかしたら、結婚じゃのうて、婚約かもしれんな」

西戸崎刑事がそう呟く、それに対して、阿弥陀警部は訊ねた。

「まあ後は確認じゃが、仏さんは携帯を持ってはおらん…… 犯人もそこまで馬鹿ではないという事か」

「そうになると、やはり転落ではなく、撲殺。殺した後に両者の左手小指に赤い糸を結んで流した」

死体は冷水に晒されていたせいか、既に硬直状態が始まっていた。

「川に投げ捨てたのも、死亡推定を紛まぎらわすためでしょうかね？」

「まあ発見が早かったのが、何よりの救いじゃろうなあ」

そう呟きながら、西戸崎刑事は女性、梨元美亜を見た。

皮膚はふにやけてはいたが、その美貌は少なからずとも保たれていた。

もしこのまま海の藻屑もくずとなっていれば、時間が経もつにつれ、腐敗によって変わり果ていただろう。

深々と降り頻る雪がふたつの死体に降り積もっていく。

それはまるで、何かを隠しているかのよう……

吉・聖夜（後書き）

第四話開始です。今回は少し毛色が違います。

式・虚飾

「真つ赤なお鼻のトナカイさんはあゝ、いつもみんなあのわあらいもの」

と、鼻歌交じりに歌っているのは葉月だった。

三姉妹の中では一番小さく、ドライな雰囲気とする彼女ではあるが、やはり年相応にクリスマスは楽しみにしている。

神社の娘なので、一応場違いではないし、そもそも12月は祭っている倉稻魂神への感謝の気持ちを含めての催しも行おこなっている。五穀の神へのお供え物も用意し、ケーキは弥生が毎年手作りしている。小麦や作物は農家の人たちが感謝の形として、この時期に無料でくれるので、経済的にも助かっている。

稲妻神社の稲妻の語源は雷光が稲を実らせるという意味もあるし、もう一つ祭っている大黒天も田の神として信仰されている。

ただ、その大黒天は違う形だが……

「くうらいよおみいちいはあゝ」

葉月は楽しそうにクリスマスツリーの飾り付けをする。そんな葉月を見ながら、風呂上がりの皐月は長い髪を櫛くしで梳とかしていた。

「皐月い？ 爺様見なかった？」

廊下から弥生の声が聞こえ、皐月は出かけたと答える。

「何か、用があるからって…… なにそれ？」

皐月は半ば諦めたような感じに訊ねた。

弥生は片手に紙袋を持っており、ニコニコ顔でこちらを見ている。
「葉月いっ！ ちょっとおいでえ」

弥生は葉月を手招きした。葉月は作業を止め、なんだろうと思いつながら、弥生の元へと駆け寄っていった。

「さつき、やっと葉月のが出来たからね」

弥生は紙袋を下ろすや、ゴソゴソと中身を出した。

「はい。クリスマスはやっぱりこれでしよう?」

そう言いながら、パツと広げた服はサンタクロースのコスチュームだった。

「年に一度のクリスマスなんだし、羽目を外さないよ」

弥生は葉月に服の上からでいいからと、サンタのコスプレをさせる。

女の子用という事もあってか、下はスカートになっている。

綿が入っている事もあってか暖かく、首元を縛る紐の先には綿帽子が着けられている。

「ありがとう。弥生お姉様」

笑顔でそう言いながら、葉月はツリーの飾り付けに戻った。

「うん。やっぱり子供はあじやないとねえ」

「んぐう…… な、なに?」

皐月は弥生のただならぬ視線にピクツとした。

それから少しばかり経つての事だった。

「うん。私の目分量に間違いはない」

そうキツパリと言いながら、弥生は皐月を見やった。が、その皐月は、今にも湯気が出そうなほどに顔を真っ赤にしている。

「なあんで、私のまで作ってるの? しかも、スカート短いし……」

皐月は座り込み、両手でスカートの裾を押さえている。

彼女も弥生が作ったサンタのコスプレを半ば強引にさせられていた。

葉月と少し違つところを云えば、葉月のスカートは悠々と足元まであるにも拘らず、皐月はミニスカートである。

「それはただ単にあんたの足が長いからでしょうが」

「狙つてやったでしょ？ 絶対狙つてやったでしょ？」

皐月は立ち上がる事が出来ないでいる。というのも、スカートの裾は彼女の膝上十糎じゅうセンチまでしかなく、立つた状態だと油断すればショートが見えるほどだった。

「だったら、スパッツかズボン履いてきなさいよ」

弥生は呆れながら言うが、本心はしてやつたりである。

風呂上がりということもあつてか、皐月はズボンを履いていなかった。

弥生はそのタイミングを見計らつて持つてきていたのを、皐月は後で気付いた。

そんな二人の遣り取りを知つてか知らずか、葉月は楽しそうにクリスマスクリスマスの歌を口遊くちずまびながら、飾り付けをしていた。

「おう、今戻つたぞ」

玄関先から神主である拓蔵の声が聞こえ、皐月はドキツと肩を震わせた。

「ちよ、何か上にかけるやつない？」

「なに慌ててんのよ？ 別に見られたつて減るもんじゃないでしょ？」

「減るわよ！ 何か色々！」

皐月は頭が混乱していて、何を云っているのか自分でもわからなくなっている。

「ほら、そこに爺様の丹前たんぜんがあるから、それ着たら？」

皐月はそう云われて、壁にかけてあった拓蔵の丹前を取り、それを羽織ったちようど、拓蔵が居間の障子を開けた。

「なあにをやつとんじゃ？ 皐月い。人の丹前なんぞ着よつてからに」

「あ？ えつと…… お帰りなさい……」

首を傾げる拓蔵に対して、皐月は引き攣った笑みを浮かべる以外に選択肢がなかった。

「あれ？ 誰か来たみたい」

玄関のチャイムが鳴り、それに気付いた弥生がスツと立ち上がった。

時間は既に夜8時を過ぎており、皐月と葉月は夫々《それぞれ》の自室に、拓蔵は社務所で整理をしている。

皐月は耳が少しばかり不便で、微かなチャイムの音は聞こえていないし、葉月は帰ってくるなり学校の宿題を終わらせてから遊びに行ったりしているので、今は部屋で明日の予習をしている。

拓蔵に関しては、まあ人任せに近い感じで、無視を決め込んでいた。

ガラスと玄関の引き戸を開けると、そこには笠を被った少女が立っていた。

「こんな時間に？と弥生は思ったが、そのうしろには脱衣婆だっえは（*窮奇参照）の姿があった。

「おこんばんわ」

陽気な声で挨拶をしてくる脱衣婆に対して、少女は挨拶もせず家の中へと入ってくるや、「拓蔵！ 拓蔵はおるかえ！」と叫んだ。

「おやまあ？ 珍しい客人じゃな？」

拓蔵が社務所から玄關にやって来るなり、少女を見るや顎を摩つた。

「その癖はわたしに逢おつてから四十年あまり経つても、まったく変わりませんね。自分に都合が悪くなるといつもそうでしたから」

拓蔵と少女の遣り取りを聞きながら、弥生は脱衣婆の方を見やつた。

「にしても、あなたほどの人が直々にこちらに来られるとは、いはら何を考えているのやら」

「久し振りに逢つたので無駄話もしたいところですが、わたしも五七日つなかの地獄裁判を控えておりますし、脱衣婆も年末特有の事故などで亡くなつた死人の整理をしないといけませんしね」

年末特有というのは、宴会などで羽目を外した結果の飲酒運転や、凍死などが多い。

「ですから余りない時間を割いてあなたたちのところに来ました。

そう云うことですから時間もないので早速本題に入ります。あなたたち、浅葱橋は知っていますでしょ？」

少女がそう訊ねると、神主は少しばかり考える。

「浅葱橋つて云つたら、ここより少し離れた繁華街と民宿街で挟まれた川に掛かつてる橋の事ですか？」

そう訊ねると、少女はコクリと頷き、話を続けようとしたが、

「にしても、極寒地獄じゃあるまいし、何時までも客人をこんなところにいさせないで、中に案内しなさいよ」

脱衣婆の一言で、弥生と拓蔵は少女と脱衣婆を居間のほうへと案内した。

少女の話だと、先ほど奇妙な話を橋の両端に建てられた地蔵を通して知つたという。

「奇妙な話って？」

何時の間にかきていた皐月と葉月が少女にそう訊ねる。
そんな二人を見ながら、少女は目の前に出されたお茶を飲み干した。

「ええ。わたしはそこらに建てられた地蔵を通して、露世のありとあらゆる出来事を見てきています。さすがにそのことは知っているでしょ？」

そう云われ、皐月たちは頷く。

「ですが？ 先日から浅葱橋にいるはずの橋姫の姿が見えないのです」

橋姫とはその名の通り、橋に纏わる守護神である。元々は橋から進入してくる外敵から護るため、橋に祭られた神とされているが、「まあ、この時期だからね？ あの生娘が、あの日を思い出していなくなっただんじやないのかって、最初は思ってたんだけどね……」

脱衣婆が呆れながら云う。

「それなら別に二人が来る理由にならないんじゃない？ 時期が過ぎれば勝手に帰って来るでしょ？」

「浅葱橋で殺人事件が起きたから、余計に気に掛けてるのよ？」

脱衣婆の言葉にその場の空気は凍りついた。

式・虚飾（後書き）

瑠璃（この時は少女ですが）の口調を変えました。後々凄い丁寧な感じに描いているので、統一させました。

参・原因不明

ふたつの死体の検死結果が出たのが事件から一両日経ってからだった。

死因は阿弥陀警部と西戸崎刑事の見分通り、撲殺と判明されているが、どうも男性“堂本鋼”のほうは違うようだった。

「絞殺痕？」

阿弥陀警部が鑑識の湖西主任にそう訊くと、

「あんたらが発見した時はわからなかったのか？」と逆に聞き返された。

「縄の痕あとじゃよな？ でも浅葱橋で見た時はそんなのなかったぞ」

西戸崎刑事の言葉に阿弥陀警部と大宮巡査は頷いた。

「つまり後から出たともいいたそうじゃな？」

「堂本鋼の死亡原因は絞殺による窒息死なんですか？」

「いや、一緒に発見された梨元美亜と同様、脳髓まで達したさいの出血多量が致命傷じゃが、彼女には絞殺痕がなかった」

つまり犯人は二人を絞め殺そうとしたが、予定をかえて撲殺しようとした事になる。が、それなら梨元美亜の方にも絞殺痕が出来るはずである。

「睡眠薬などによる可能性は？」

「そう思って血液検査もしたがな、薬物反応はなかったよ。あと、奇妙な事もわかった」

「奇妙な……こと？」

湖西主任はホワイトボードに二本の棒を描き、その間に“浅葱橋”と書いた。次にその上下に川の簡略図を描いた。

「発見された場所は繁華街側の川岸じゃったな。で、死亡推定時刻から見て、その時間橋の上は賑わっておる」

死亡推定時刻は、二人とも同時に殺されたものと考えて、夕方5時から6時前後と見られている。その時間だと繁華街と民宿街を挟んだ浅葱橋の上は否応なしに賑わっている。

「じゃから“橋の上から落とす”なんて事は出来んなあ?」

「えっと? 湖西のじいさんよお? 全然話が見えんちゃけど?」

西戸崎刑事が湖西主任に訊ねるや、

「女性の方の仏さん…… 指と指の間が膠着しておらんかったんじやよ」

膠着とは物と物がくっつく事を指す。つまり、湖西主任の話では浅葱橋より上から流れ着いたのなら、その間に体が固まり、さらに言えば冷水と化した川だと体が凍りついたという現象が起きても不思議ではない。

しかし、梨元美亜に関してもそうだが、堂本鋼にもそのようなものが見られなかった。

「ようするに湖西主任の話だと、通報された時にはまだ生きていたということですか?」

大宮巡査がとんでもない発言をした。

撲殺された死体が岸に這い上がったとでもいうのか?と阿弥陀警部と西戸崎刑事は思った。

「いや、それはありえんじやろう。何せ撲殺された人間が生き返るといふことは先ずない。じゃが、ありえん事ではないじやろうな」
そう云うと、湖西主任は4枚の写真をホワイトボードに貼った。
写真は殺された二人の全身写真が前後二枚ずつである。二人とも裸で撮られているが、違和感はずくにわかった。

「 擦り傷がない？」

川の水が1米前後の深さがあるため、川底には上からでは見えな
い岩などがあっても不思議ではない。つまり本来なら流されている
間に打つかつて出来た痕があるはずなのだ。

しかし4枚の写真からでは、その痕が見つからなかった。それど
ころか、橋から落としたのならばそれに伴って出来る大きな傷痕す
ら見当たらなかった。

「解剖して骨やら内臓破裂等々も確認したが、その様な痕もなかつ
た」

「つまり犯人は発見された場所に死体を置いたと？」

「現実的に考えればそうなるな」

現実的に……と湖西主任は口走った。

「現実的じゃないとすれば？」

西戸崎刑事がそう云うや、湖西主任は分が悪そうな顔を浮かべた。
「現実的でないとすれば、流れている間に岩にぶつからなかったと
いうことじゃよ。ありえんじやろ？ 死んだ人間が“意図的に避け
る”なんてこと」

確かに意識のない人間にそんな芸当は出来ない。

「人間は死ぬ死なない関係なしに水に入れば浮かぶもんなんじゃよ。
それは体内の空気が浮き袋となつておるからな」

そう話す湖西主任の口調が、いかんせん納得していないようだつ
た。

「どうかしたんですか？」と阿弥陀警部が訊くや、

「あの川は水深1mもないんじゃよ？」

「それがどうし……」

西戸崎刑事が言葉を止め、阿弥陀警部を見やった。阿弥陀警部も

西戸崎刑事が何を感じたのか、直ぐにとはいわなかったが、理解出来た。

「発見された浅葱橋の両側は昼夜問わず人で賑わっている。水深1mもない川で、死体が流れてなんてしたら、気付かない訳がない。必ず誰かが気付くはず！ それなのに、通報が来たのは、死体が浅葱橋の川岸に打ち上げられてから……」

「それじゃ、死体は川に流されたのではなく、矢張り運び込まれ……」

西戸崎刑事が机を力強く叩き、大きな音を出した。

「それはないだろ！ 人で溢れてる中、どうやって大人二人もの死体運び込む？ 誰にも見付からずにだ！」

云われてみれば確かにそうだ。さつきも云った通り、浅葱橋は人で賑わっているため、台風などで天候が悪くなるか、余程の事が無い限りは周辺に人がいなくなる事はない。

「水に浮かんでもばれない方法…… 若しかして、浮かばなかったというのとは？」

「足に錘おもりか何かを付けてか…… 無理じゃろ？ 川が氾濫はんらんでもしな以上、人が流れることはない」

「それじゃ、どうやって……」

西戸崎警部と阿弥陀警部が途方に暮れていると、湖西主任は少し溜め息を吐くや、椅子から立ち上がった。

そして、壁にかけられていたコートの内ポケットから手帳らしきものを取り出した。

「あんたら…… 稲妻神社って知つとるか？」

そう云われ、二人は少しばかり考えてから頷いた。

「名前くらいなら……」

「其処の神主に頼るといいじゃろ？」

「なっ？ 一般市民に頼るってのか？ それは幾らなんでも駄目だろ？」

西戸崎刑事が狼狽するのも無理はない。警察が“自分たちではわかりませんから答えを教えてください”と自ら白旗を上げているようなものだ。

本来殺人事件ともなれば、先ず目撃情報が必要になり、次に犯人の特定と繋がっていく。

目撃情報がなければ、周辺に事件と関わりのあるものがないかを探し出す。それがなければ被害者周辺の聞き込みから犯人の特定へと繋がる場合もあるが……

そもそも、被害者が殺されてから発見されるまで……僅か半日もない。

しかも、その間に人がいなくなる事が、先ずありえない時間帯でもあった。

「行ってみますかね？」

「おい？ 本気かよ？」

否定する西戸崎刑事とは違い、阿弥陀警部はまるで藁をも掴む思いだった。

「殺された男女は既に結婚していました」

二杯目のお茶を飲みながら話しをしている少女の言葉に、三姉妹はキョトンとした表情を浮かべながら聞いていた。

少女の発言が何とも脈絡のない言葉だったからだ。

「ですが、どちらの両親にも賛成されておらず、結果的に駆け落ちという形になりました。それがばれないように、あえて夫婦別姓にしていたようです」

（話が見えてこないんだけど？）と皐月と弥生は脱衣婆を見遣った。

「つまり今日の夕方、浅葱橋が掛かっている川岸で男女の変死体が発見されたの。左手の薬指には指輪がはめられていて、それが両者に見られた」

「でも、閻魔…… あ、いや…… 瑠璃^{るじ}さんは駆け落ちって云ってるから、別に可笑しな点はないんじゃない？」

「どうして婚約や結婚の際、薬指に指輪をするか知っていますか？」

そう聞き返され、弥生は返事に戸惑った。

「これは古代ギリシャで「左手薬指の血管は心臓と直接結ばれている」という説があるからです。指輪にしたのは、千切れないからという理由でもありますけどね。結婚は左手に、その前提である婚約は右手にするものとされている」

「でも、結婚しているってのは……」

途中まで云うが、皐月は言葉を濁らせた。今の時代を考えると、そんな事まで考えているとは云い難かったからだ。

しかし、少女……瑠璃は閻魔王である。

閻魔王は別名“地蔵菩薩”と云われており、道で見かける地蔵を通して現世を監視している。

だからこそ、嘘を付ける相手ではないし、真実のみしか知らない。

「ついでに言うと、二人は心中ではなく、他殺です。しかし、その方法が奇怪なものでした」

「確かあの橋には奇怪な伝承があったのう」

拓蔵がそう云うと、瑠璃は頷いた。

「どんな話？」と臯月が訊ねる。

「あの橋に橋姫が祭られておるのは知っておろう。そこで男女が別れる話や、別の橋の話をするとか祟りが起きる……というのが一般的な橋姫の話なんじゃよ」

「それとどう違うの？」

葉月がキョトンとした表情で訊くや、

「あの橋に祭られている橋姫は昔……江戸時代、遊郭におった娘なんです」

「実在してたってこと？」

臯月がそう訊ねると、瑠璃は答えるように頷いた。

「名を浅葱あさあじと云って。それはまことに美しい女子おんなでした。禿かむろの頃から楼主ろうしゅや姉女郎あねぢやうららに可愛がられていたんです。十四の頃に新造しんぞう……つまり、遊女になる一つ前の頃に、彼女にとっては幸せの、またあるものにとっては不幸な出来事が起きたんです」

話の内容を知っている拓蔵の表情に曇りが掛かった。

「その時に民宿街と繁華街を繋げる橋が作られようとしておったん
じゃよ」

拓蔵は思い出しながら云う。

「今は考えられないけど、橋を掛ける際にはどうしても避けられないものがあつた」

「今は考えられないって…… 確か橋姫って……」

「橋姫の語源“愛姫”は人柱として橋に縛り付けられ橋姫となつた。それは橋に災いが起きないようにという意味がありますが、浅葱橋を建てるさい、浅葱が人柱になつた理由には別の意味がありました。それは『外の人間と交わり、災いを孕んだ』という理由からなんです」

それを知っている瑠璃だからこそ断言出来た言葉だつた。

「災いつて？」と葉月が訊ねると、脱衣婆は少しばかり躊躇う。

葉月の年を考えての事だが、瑠璃は「性病」と淡々と言い放つた。

「性病つて、でも新造は確かまだ遊女として見世に出される前の位でしょ？ 性行為なんて禁止されてるはずじゃ？」

「新造が遊女の代わりとして客に酌をすることはあつても、それに手を出す事はご法度じゃ…… じゃが、その禁句を破る者もおつた」

それに関しては鳥居清長の春画絵に“振袖新造と客”という作品がある。

また新造が見世に出される前には、水揚げという儀式があり、それはその新造がいる店の常連である年をとつた男がするものと定められている。

「じゃが、浅葱はそれを破つたんじゃ…… 民宿街で小さな宿の若

頭をしておつた“喜平”になあ……」

「それじゃ…… 今回殺された二人と同様だつたってこと？」

「結果は違つていても、大体は一緒ですね」

「何か曖昧な言い方ね？」

臯月にそう云われ、瑠璃は溜め息を吐いた。

「喜平は浅葱が遊女だということを知らなかつたんです……　そもそも、二人が出会った頃はまだ橋は掛けられていませんでしたからね」

「つまり喜平は遊女がこんなところにいるはずがないと思っていたと」

「芸能人がこんな田舎にいるはずがないとか、そんなのと一緒になのかしら」

「それはただ単にオーラがないからでしょ？」

脱衣婆がそう云うや、弥生と皐月は納得したように手を叩いた。

「だからこそ二人は本当に相思相愛だつたんでしょうね」

「もし喜平が、浅葱が遊女であると知っておつたら、違った結末になつておつたかもしれぬし、そもそも先に好きになつたのは　浅葱の方じゃつた」

「　何かすごい事になつてない？」

「両方とも相思相愛だと知つたからこそ、わたしはそのことに関しては何も云いませんし、関与もしません……　ですが、それが浅葱を殺すことになつたんです」

瑠璃の話す声のトーンが段々と落ちていく。

「爺様？　浅葱は一体……」

葉月がそう云うと、拓蔵は少しばかり瑠璃を見やった。

「さつき閻魔さまが申した通り、浅葱は殺された。それも何人にも」
「それってどういう事？」

「遊女になる前の新造が水揚げ以外で処女膜を破ることは禁止されている。それを破つた浅葱が待つてゐる結末は云わなくてもわかるでしょ？」

「わからないわよ……」

皐月はそう答えたが、頭の中では既に最悪の結末しか思い浮かばなかつた。

何ら変わらない。陶芸家が自分の納得がいかない作品が焼きあがった時に、迷う事なく地面に叩き割るのと同様だ。

自分が手塩に掛けた禿かむろが知らない男に、何処の馬の骨かもわからない人間に少女から女にされたのだ…… 店の評判に傷がついてしまつと桜主は思ったのだらう。と皐月は考えていた。

「それじゃ人柱になったのは、浅葱の意思じゃないってこと？」

皐月はそう瑠璃に訊ねるが、瑠璃は答えるように首を横に振った。

「それは浅葱の意思です。むしろ浅葱だったからかもしれません」

「浅葱だったから……」

「橋が出来れば何が便利になるかしら？」

「人の行き来が楽になる」

脱衣婆の問い掛けに葉月が答える。

「それもあるんだけど、浅葱が人柱になった理由は…… 民宿街と繁華街を繋がることにあつたからなのよ」

脱衣婆はそう言いながら、瑠璃を見た。

「閻魔様。そろそろお暇いそましましょう」

そう促され、瑠璃は少しばかり表情を暗くするが、スツと立ち上がり、障子を開け、そして去り際に皐月たちを見やった。

「わたしは確かに地蔵を通して露世を監視しています ですが、人の心までは関与できません」

と、言い残していった。

その言葉を発していた瑠璃の表情が、まるで悲しんでいたり、申し訳なさそうな感じだったのを三姉妹は気になっていた。

肆・愛姫（後書き）

挿絵入れてみた。もっと絵の勉強します。
（ ; ; ）

伍・同様

阿弥陀警部と西戸崎刑事が稲妻神社に来たのは、湖西主任から紹介された翌日の午後だった。12月という事もあってか、境内はところどころ雪が積もっている。

その景色を見てかどうかは定かではないが、「寒いなあ」と西戸崎刑事は愚痴を零していた。

阿弥陀警部は湖西主任が何故此処を教えたのかが気になっていた。

「確か黒川拓蔵という方でしたね」

「ああ……その人に相談してみると云っていたが、あのじいさんが人を紹介するとなると、よほどの人物なんだろうな」

そう話しながら二人は神社の境内を歩いていた。

もちろん、目的があつての事なのだが、社務所が何処なのかわかっていなかった。

そもそも、この稲妻神社で祭られているのは倉稻魂神と大黒天なのだが、学問やら安産やらのお守りや破魔矢が売っているわけではない。どちらも人に対してではなく、自然、特に稲穂に対しての神だからである。

売店なら人はいるかもしれないが、それがない以上、誰かに遭遇するしかない。

が、今は平日の午後であり、三姉妹はもちろん学校に行っており、拓蔵に関しては町内会に出ている。

しかもこの時期では田を耕すことや土の状態を調べることはあつても、神の御加護を受けに来る百姓はあまりいない。

そのことに気付いたのは、少しばかり日が沈んできた時だった。

「あれ？」

突然少女の声が聞こえ、阿弥陀警部はそちらに振り向いた。
少女…… 臯月は二人を訝しく見遣っている。

「失礼ですが、此方の方で？」

そう訊かれ、臯月は頷いた。が、不審そうに見かえした。

「これは失礼。実は私たちこういうものでして……」

阿弥陀警部は胸の内ポケットから警察手帳を出し、それを見せた。

「こちらに黒川拓蔵さんという方がいらっしやるとお聞きしたのですが？」

「黒川拓蔵は私の祖父ですが？ その……何か御用ですか？」

そう聞き返され、阿弥陀警部は西戸崎刑事を見た。

「実はある事件の調査をしていてね。うちの鑑識課の人間が、黒川拓蔵に会ってみてはと紹介されてねえ」

「そう……なんですか？ でも、祖父に警察の知り合いがいたなんて」

臯月の言葉に阿弥陀警部と西戸崎刑事は互いを見やった。

警察の人間が人を紹介するとなると、少なからずともそれに関係している人間になる。

あの湖西主任が紹介したのだから、そうなのだろうと二人は思っていた。

「祖父ならもうそろそろ帰ってくると思います」

「そうですね？ では待たせてもらっても結構ですか？」

「いいですけど……」

そう臯月が言った時だった。

突然、周りの空気が著しく淀み、木々がまるで強風に煽られているかのようにざわめきだした。

その光景に阿弥陀警部と西戸崎刑事は何も言えず、ただただ立ち尽くすしかなかった。

少しずつその空気が元に戻っていくや、臯月は既に本堂の方へと入ろうとしていた。

「えっ？」

阿弥陀警部は言葉が出なかった。

自分が立っている場所から、本堂まで少なくとも五十メートル以上はある。

更に言えば、自分は臯月を見ていたはずにも拘らず、彼女が動いたことすら気付いていなかった。

それは西戸崎刑事も同様で、彼もまた阿弥陀警部と同様に、まるで狐につままれたような表情を浮かべていた。

そんな二人を見ながら、臯月は小さく笑みを浮かべていた。

拓蔵が帰ってきたのは既に6時を過ぎた頃だった。

「爺様？ お客さん」

玄関で出迎えた葉月がそう伝えると、拓蔵は首を傾げた。

居間の方へと入ると、阿弥陀警部と西戸崎刑事が炬燵で寛いでいる。

その二人を見ながら、「知らんなあ……」と拓蔵は三姉妹を見渡

しながら言った。

「黒川拓蔵さんですね。私たち、警視庁のもですが」
そう言われ、拓蔵は少しばかり驚くかと思えば、平然としていた。

が、それは最初に二人に会った皐月でも同じことだった。
警察が突然家にやってきて、自分の知っている人間が何か事件を
起こしたのかと心配するか、動揺するものである。

しかし、皐月はもちろん、弥生と葉月に関しても同じような反応
だった。

「実は湖西主任からの紹介です」

「あの死に損ないか？ 主任と云っておるが、出世しよったみたい
じゃな？」

その言動から、知り合いであることには間違いないようだ。

「知り合いだったんですか？」

「なんじゃ、知らんでここに来たのか？ また酔狂なお人じゃな」
その言葉に阿弥陀警部は笑うしかなかった。

「弥生、確か麦焼酎があつたはずじゃが？」

「爺様、確か今日は町内会に行つてたと思つただけど……」
弥生は拓蔵の顔を見ながら言う。拓蔵の顔は少しばかり赤くなっ

ていた。

「あんなのはまだまだ序の口じゃ。一升瓶一本くらいで根を上げよ
つてからに」

「また飲み比べ？ 少しは手加減してあげたら？ 爺様みたいに蟒
蛇ばみじゃないんだから」

蟒蛇とは大蛇のことを指すが、大蛇は物をたくさん飲み込むとこ

るから、酒豪も意味している。

弥生が説教したところで、意味の無いことなのは分かっているが、愚痴の一つは言いたくなるものである。

「わかったわよ…… もう今日はそれだけだからね」

呆れた表情を浮かべながら、弥生は冷蔵庫からワンカップ酒を取り出した。

「それであんたらはわしに何を訊きに来たんじゃない？」

そう訊かれ、阿弥陀警部と西戸崎刑事は背筋を伸ばした。

いや、伸ばさすにはいられなかったのだ。

さっきまでの明るい空気が突然、まるで上司が目の前にいるような空気が漂いはじめたからである。

「じ、実は、せ、先日、あ、浅葱橋で殺人事件が起きてまして……」

「少しは落ち着きなさい。被害者は確か、堂本鋼と梨元美亜じゃったかな？」

「え、ええ…… よ、よくご存知で」

存じるも何も、先日、瑠璃から聞いていただけである。

「それで湖西主任があなたに聞いてみてはと」

「被害者に関しては何か調べましたかな？」

「ええ。二人は別姓であるが結婚していた……」

「それも普通にではなく、駆け落ちという形でなあ」

自分たちの質問はもちろん、自分たち警察しか知り得ないことである。

が、拓蔵はその上を言っている。

その後、彼らが訊いた質問の全ては、瑠璃から聞いた話と同様だった。

「被害者が殺されるような条件は？」

「条件ですか？ いえ、特にどちらも友人関係に問題はなかったようですし、借金や人に怨みを買っような行為はしていないようでした」

「ならば、どうして死体を川なんぞに遺棄したんじゃないかな？」

その言葉に西戸崎刑事は何かを考えるや、

「どうして……遺棄と言いつけるんですか？」

「確か湖西君の検視結果を聞く限りでは、死体が凍りついておらんかったということじゃろ？ こんな寒い季節に川なんぞ入ってみろ。凍えて体が凍りつくじゃろ？」

つまり犯人は川に流していないということになる。

「で、でも待つてください！ 被害者の死亡推定時刻は夕方5時から6時の間なんですよ？ いくらなんでも賑わっているあの場所で、死体を遺棄するなんてこと」

「被害者が生きておつたら？」

「えっ？」

「川上の岸で殺されたと推測して、被害者のどちらかが生きておつたらどうする？ あの川の流れは普段穏やかじゃからな。立つことくらいできろっ」

なんとも滑稽な話だが……

「そんな事出来るんですか？」

「人間は気を失っている状態だと、息自体をしとらんよ。ただしタイムリミットは十分もないが……」

「つまり…… 被害者はそのタイムリミットの間に目を覚まして、川岸に上がったと？」

可能性としてはあるだろうが、そんな事本当に出来るのだろうか
と、阿弥陀警部はもちろん、西戸崎刑事も思った。

「あの橋が出来てからは一度も水難事故は起きておらんのかな？」

そう拓蔵が言うや、阿弥陀警部はハツとする。

「そう言えば、あの橋って…… 橋姫が祭られていましたね？」

「おいおい、正気か？ 神様が人を助けるなんてこと」

西戸崎刑事が呆れた口調でそう言った。

「質問はこれで終わりかな？」

「え、ええ…… 大体のところは」

阿弥陀警部の声がしどろもどろになる。自分のポケットには被害者の死体写真が入っている。

これは湖西主任が持つて行けと言われたのだが、どうしてこんなものをと内心疑っていた。

「へえ、結構綺麗な死体じゃない。女性なんて陶磁器みたいに白いし……」

うしろから声が聞こえ、阿弥陀警部と西戸崎刑事は振り向くと、そこには皐月と弥生が立っており、二人は一枚の写真を見ていた。

それを見るや、阿弥陀警部は自分のポケットを探ると、入っていたはずの写真が入っていないことに気付いた。

「……………」

声が出るはずがなかった。それどころか、いつ自分のうしろにいたのかと、逆に訊きたくなっていた。

「おいおい、嬢ちゃんたち？ それはちょっと刺激が強すぎるんじゃないのかあ？」

西戸崎刑事がそう言いながら、写真を取り上げようとする。

「まあまあ、少し待ってくれんかのお？ 葉月……」

拓蔵に呼ばれ、葉月は食事の手を止めた。

「出来るか？」

そう言われ、葉月は小さく頷いた。

「お、おい待てよ！　いくらなんでもそれは！」

西戸崎刑事が怒鳴り声を挙げた。確かに綺麗な状態とはいえ、人の死体が写った写真である。幼い葉月に見せるのを止めるのが道理であろう。

しかし、まるでそれを遮るかのように、阿弥陀警部は西戸崎警部を宥めた。

その意外な行動に、西戸崎警部は訝しい表情を浮かべていた。

陸・愛憎

葉月の目の前には一枚の写真がある。言わずもかな、浅葱橋で見つかった男女の死体が写っている写真だ。

葉月は目を瞑り、一二度深呼吸をすると、写真の上に手を置き、そっと撫で始めた。

「女の人の悲鳴……」

葉月がそう口走った。

「なっ？ い、今なんて？」

阿弥陀警部と西戸崎刑事の驚いた声が偶然にも重なった。

「でも…… 写真に写ってる人の声じゃない…… もっと違う人……」

「 違う人？ それは一体……」

西戸崎刑事がそう訊ねようとしたが、阿弥陀警部がそれを制止した。

「おい？ どうしたんだよ？」

「まだ続きがありそうなんで……」

阿弥陀警部の言葉通り、葉月の力が終わったわけではなかった。

「美亜さん…… すごく嬉しそう…… 大好きな人と一緒になれて……」

「 え？」

さっきまで少しばかり難しそうな顔をしていた葉月の表情が綻んでいる。

まるで…… 写真を通して、死者と話しているのかと思ってしまう

うような光景だった。

「それで葉月や？ 美亜さんと鋼さんは何と云っておったんじゃ？」
そう拓蔵に訊かれ、葉月は少しばかり申し訳ないような表情を浮かべた。

「彼女を恨んでなんていない……」
「ちょ、ちよつと待ってくれよ？ 殺されたんだぞ？ 殺されたのに、怨んでねえって、いうのかよ？」

西戸崎刑事が声を張り上げ、葉月に詰め寄る。

「好い加減にしろよ！ さっきから変なことばかり言いやがって…… これはなあ、捜査を混乱させたことによる公務執行妨害になるんだぞ？」

西戸崎刑事を拓蔵と弥生が宥めようとする。が、それとは裏腹に阿弥陀警部は神妙な面持ちで何かを考えていた。

「どうかしたんですか？」

「いや、君に最初あつた時も感じたんだが、君たちは一体何ものなんだ？ まるで私たちとは一線をひいたような……」

そう訊かれ、皇月は少しばかり考えると……

「わかりません。でも葉月の力は霊の声を聞くことが出来るんです」「霊の声？」

「私たち姉妹は、生まれた時から人には見えないものが見えたり、感じたりすることがあるんです。特に葉月はまだ幼いから、その力が強くて、よく何かを憑つれて帰ってきたりするんですが、その殆どが、自分の声を聞いてほしいと願っている霊あやかしや妖あやかしなんですよ」

そう聞かされるが、阿弥陀警部は信じられないと言わんばかりの表情を浮かべた。

「別に信じて欲しいなんて思ってますよ」

臯月は笑みを浮かべながら云ったが、阿弥陀警部はそう話す臯月の表情が、まるで無理して笑みを浮かべているように感じていた。

「それに女性の恨み……特に男女関係において、本来どちらに矛盾が向けられているか……」

そう言われ、阿弥陀警部は何か気付いた。

「西戸崎刑事。一度本部に戻って、被害者の友人関係……特に堂本鋼の女性関係を洗い直しましょう」

「はあ？ お前なにいつとーと？」

西戸崎刑事がそう言うが、有無を言わずに阿弥陀警部は神社を出ようとしたり、居間を出ようとしたりした時、こちらを振り向くや、「貴重な情報提供をしていただき、ありがとうございます」と敬礼し、去っていった。

「面白いお人じゃな？」

「阿弥陀警部だっけ？ 五道ごどう転輪王てんりんおうと同じ名前みただけど」

そう弥生は臯月を見ながら云った。

「あの人、いの一いっ番に私がうしろにいたことに気付いてた」

それは境内で初めて会った時の事である。

臯月は元々から二人が神社に来ていたことも、人がいないことに困っていたことも見ていた。

臯月は気配を消していたのだ。声を出しても気付かれないほどに

……

そして試しに声をかけてみるや、阿弥陀警部のみが振り向いたのだ。

いやその仕草は何度もあったが、臯月だと気付いたのは自分が声をかけた時が初めてだと、臯月は話した。

「それにしても…… 加害者を恨んでない……か」
確かに奇妙な話である。西戸崎刑事の言つとおり、殺されたのだから、怨むのが道理というものだ。

「でも、美亜さんはすごく嬉しそうな声してたよ」

「それ…… 梨元美亜さんだけ…… よね？」

そう臯月に訊かれ、葉月は首を傾げたが、すぐさま頷いた。

「どういうこと？ 梨元美亜は加害者を怨んでいないけど、堂本鋼は怨んでいるってこと？」

「わからないけど、でも堂本鋼が梨元美亜さんを岸まで上げた可能性が……」

臯月は拓蔵を見やった。

「浅葱なら出来るかもしれんな」

「でも、浅葱は被害者が殺される以前からいなくなってるし」

つまり拓蔵が話したとおり、川に流れている間に気がつき、梨元美亜を岸まで運んだということになる。可能性としては天文学的に低い、断じて不可能とは言い難い。

「臯月、今日の晩、浅葱橋に行ってみてはくれんかの？ 弥生、共を頼めるか？」

拓蔵がそう訊くや、臯月と弥生は頷いた。

「よし、ならば腹拵えじゃ！」

そう言うや、拓蔵は柏手をひとつ鳴らした。

漆・後妻打ち

「阿弥陀警部、堂本鋼の女性関係を調べましたら、二年前まで付き合っていた女性がいたようです」

稲妻神社から警視庁へと戻る前、阿弥陀警部は携帯で、大宮巡査に被害者二人の 特に堂本鋼について、調べ直してくれと頼んでいた。

「すみませんね、大宮くん。折角の非番だったのに、呼んでしまった」

阿弥陀警部がそういうや、大宮巡査は笑って済ませた。

「堂本鋼はどうやら、大学時代にとある女性と付き合っていました」
「が、卒業と同時に別れたようです。その後会社で梨元美亜と出会い、結婚……」

「駆け落ちという形ですけどね。その両親はどうなんですかね？」
阿弥陀警部と西戸崎刑事が稲妻神社に来ていた頃、遺体を引き取りに来ていたことを大宮巡査は説明した。

「その時、妙なことがあったんですよ。ほら、被害者の二人は互いの両親から結婚を反対された末での駆け落ちになっていたじゃないですか？ でも、その両親とも喧嘩にならなかったんですよ」

「そりゃ遺体を前に喧嘩なんて出来ないでしょうね？」
「そうじゃなくて、例えば堂本鋼側の母親が泣き崩れるじゃないですか？ するとその夫が寄り添うのが普通ですよ？ でも、今日見ていたんですが、梨元美亜の両親が泣き崩れていた時、堂本鋼の両親が二人を宥めていたんですよ。どちらかに罪を擦り付け^{なす}るみたいなこともせずに」

確かに結婚を反対していたのなら妙な話である。

「……なあ、もしかしたら結婚が赦された直後に殺されたってことじゃないのか？ 殺された時間を考えると、二人は役場に婚姻届を出して、本当の夫婦になれた直後に殺された」

「確かに、殺された時間が夕方5時から6時の間だとすれば、役場は大概夕方5時前に閉めますからね。そうなると、犯人は二人を何処かに呼び出した」

それが浅葱橋の上流だということになるが、二人のケータイの着信データにその時間帯電話が入っていないかった。

「親御さんに訪ねに行くのは駄目ですかね？」

「ああ。そうしたほうがいいじゃろうな。どうして被害者は殺されたのか、それも教えんといかんじゃろうし……」

ドアの方から声が聞こえ、部屋にいた全員が其方へと見やった。

「湖西主任…… そうしたほうがいいとはどういう？」

「さつき拓蔵から電話があつてのお。阿弥陀くんと西戸崎くんに、被害者の両親を浅葱橋まで連れてきて欲しいと云われたんじゃよ」

そう言われたが、その理由を訪ねようとすると、行ってみればわかると云われた。

「あの、一体何が？」

堂本鋼の母親が阿弥陀警部に訊ねる。が、聞かれた本人も答えを知らない以上、応える事が出来ない。

「ここであの子達は殺されたんですね。くそおっ！ いったい…… いったいどうして……」

梨元美亜の父親が浅葱橋の上から川を眺めながら、慟哭する。それを見ていた阿弥陀警部は何故か違和感を感じた。

「あれ？ 阿弥陀警部に…… 西戸崎刑事？」

民宿街の方から声が聞こえ、阿弥陀警部はそちらを見ると、

「さ、臯月さん？ それと弥生さんも……」

そう言うや、阿弥陀警部は首を傾げた。

「あの神主は？」

「爺様は来ませんよ。家で晩酌してます」

弥生が呆れた顔で言う。

「では、いったいどうして私たちをここに？」

と、阿弥陀警部がそう言った時だった。

ふと周りを見渡してみると、臯月と弥生、被害者二人の両親4人、西戸崎警部、そして自分を含めた計8人……以外の姿が見えない。

時間は既に夜9時を過ぎているのだが、この時間でも橋の上は賑わっている。それがまるで伽藍堂がらんどうと言わんばかりに人の気配がないのだ。

「さてと…… 出てきていいわよ！ 浅葱！」

臯月がそう言うや、繁華街の方から少女が姿を表した。

見た目の背格好は臯月と何ら変わらない。ただ違うところをいえば、頭は禿かむろ、白粉おしろいを塗ったように肌は白く、下唇にのみ紅を塗っている。そして服は赤い布を着物に拵えたようなものだった。

浅葱と呼ばれた少女は全員に小さく会釈した。その仕草一つ一つが綺麗と云えた。

「えっと…… 臯月さん？ 今なんと……」

阿弥陀警部がそう訊ねる。

「彼女がこの浅葱橋に祀られている橋姫です」
そう言われても、信じられるものではない。

「お、おい？ 何を言ってるんだ？」

「そ、そうよ！ ここにくれば息子がどうして殺されたのかわかるって聞いて来たのよ？」

堂本鋼の両親が声を張り上げる。

すると臯月はそちらにはなく、もう一人の方に目をやった。

「何も言わないんですか？ 突然こんな訳のわからないことをされて」

声をやった先にいたのは……梨元美亜の父親だった。

「い、いや、吃驚はしているよ」

梨元美亜の父親は冷静を保とうとしているが、口調に落ち着きがない。

「あなた！ 夫が何かしたというのですか？」

梨元美亜の母親が臯月に詰め寄ろうとしたが、足取りを止めた。

「私が見守る橋の上で……つまらん喧嘩をするでないわ」

そう口走ったのは 浅葱だった。

周りには、さきほどまでの落ち着いた空気とは一変し、誰もが凍りつくほどに冷たい空気が漂っている。

「浅葱、無理に脅さなくてもいいわよ？ そもそもあんたそういう性格じゃないでしょ？」

臯月がそう言うと、冷たい空気が穏やかになっていく。

「そもそも、被害者の二人が殺されたのがこの橋の上でもなければ、上流でもない」

そう浅葱が言つや、阿弥陀警部が食い下がった。

「被害者の二人が殺された場所が此処でなければ、上流でもない？」

それじゃ、何処で殺されたと言っんですか？」
それに答えるように、浅葱は“橋の下”を指差した。

「おい、もしかして犯人は橋の下で殺したのかよ？ そんな事出来るわけなかるうも？ だって、殺された時間、人はごまんといたとぞ？」

西戸崎警部はそう言うが、阿弥陀警部は何か気付いた。

「確か…… 橋が出来る前、この両側に渡し船があったと……」

「それは今もあります。川の掃除をするために」

「掃除船ですか？」

阿弥陀警部がそう言うのと、浅葱は頷いた。

「でもよ、この中でそんな事が出来る人間なんて」

「そうよ？ 掃除船なんて乗れるわけないでしょ？ あれは区が掃除をするために……」

西戸崎刑事と阿弥陀警部はある一人を見やった。

「梨元宗一さんでしたっけ？ 確かあなた…… この町の役場で働いてましたよね？」

「そ、そうだ。だが！ 掃除船が使えるのは生活環境課で、許可が下りなければ使うことはできない。それに私が務めている部署は企画課だ」

そう梨元宗一は云うが、浅葱と皐月は疑いの目を止めなかった。

「なんだ？ なんだその目は？」

「企画課ってことは、色んな催しを考えるのよね？」

「あ、ああ…… そうだ！」

「たとえば…… 『みなさんで川の掃除をしませんか？』みたいな企画を考えたりとか、掃除船に乗って、どのように掃除されるのか

を間近で見られますみたいなことを考えたりとか……」

そう云うと、梨元宗一は皐月の口を塞ぎ、言葉を遮った。

「あ、あなた？」

「この餓鬼、さつきから訳のわからないことを……」

梨元宗一は皐月の口を抑えている……はずだった。

「掃除船は機械ではなく、手漕ぎによって進む昔のもの。だからこそ、誰にも気付かれなかった。誰も好き好んで橋の下なんて見ないからね」

梨元宗一が声の方に振り返るや、腰をぬかした。

「さ、皐月さん？ い、何時の間に？」

「そんなに驚くことじゃないでしょ？ 一回見てるんだから」

皐月はさぞ当たり前のように言うが、阿弥陀警部にとっては当たり前前ではない。

さきほど梨元宗一に口を抑えられていた皐月が、今自分の目の前にいるのだ。これで驚くなど言われる方が難しい。

「さて…… 人の橋で殺人を犯し、あまつな刺え、私に罪を擦りつけようとした罪を」

浅葱の言葉を待たずに、皐月が頭を小突いた。

「な、なにをするのお？ あんたねえ、仮にも神様よ？ 神様にそんな態度とっていいわけ？」

そう浅葱は涙目で訴えるが、皐月の目を見るや先が言えなかった。「そもそも、あんたが祠を抜け出して、喜平のところに行つてたのが悪いんでしょうが？ そりゃ、あんたの大好きな人だから、行くなどはいえないけど」

「皐月？ 浅葱も反省してるんだし、そのへんにしたら？」

そう弥生に云われ、皐月は視線を梨元宗一に向き直した。

「西戸崎警部？ 上流から流れたにも拘らず、どうして死体は二つとも凍っていなかったのか…… その理由が分かりました？」

「な、なんとなくな。やけど、それでも遺体が発見されなかったことに関する説明にはなつちよらんよ？」

確かに遺体を運んでいる時、当然だが川を渡る。その間、人に見られても可笑しくはない。

「だからこそその掃除船なんです。掃除をしているということとは、ビニールが必要ですよ？ それに風が強くなるかもしれないから、それを抑える何かも必要……」

「まさか？ 死体をビニールの下に隠して？ 阿弥陀！ 大宮たちに連絡だ！ 至急役場に連絡を取って、掃除船で使ったビニールはないかの確認だ。もしかしたら、ビニールに被害者二人の血痕が残ってるかもしれねえ」

西戸崎刑事がそう叫ぶや、ガクリと跪いた。

「 なっ？ 」

とたん、他の人間も倒れている。が、唯一倒れていないのは皐月と弥生、浅葱…… そして阿弥陀警部だった。

「返さぬう…… 返さぬう……」

梨元宗一の口からまるで女性のよような声が聞こえる。

「時代遅れも甚だしいな…… 六条御息所よ……」

浅葱がその目の前の何かに告げる。

「いや…… “父親”に取り憑き、二人を殺したことには…… 賛美を与えよう」

浅葱は一瞬笑みを浮かべ、人差し指で星を一筆書きした。

「じゃがなあ？ 私はただ、人柱として生贄に捧げられた。誰かを恨んでいるわけでも、男女の別れ話や、他の橋に対して妬みなんぞ、ひとつももっておらんよ？」

そう喋りながら、虚空にいくつかの星を描いた。

「　　っが？」

途端、梨元宗一が小さな悲鳴を挙げた。両腕はまるで吊るされているように、天へと挙げられていく。

そして次第に悲痛な表情へと変わっていく。

「西戸崎警部と云うたなあ？ 主の考え、面白いが　　少し捻ってみよ？」

「　　考えを捻る？」

「そうじゃ。被害者は絞殺に見せかけた撲殺である。そして、薬物によるものではない。これは睡眠薬も薬同様であるため、眠らせて殺すことは不可能」

そう浅葱が言うと、西戸崎警部は……

「いや、さてよ？ 可笑しいだろ？ そんなの出来る訳が　　」
何かに気付き、啞然とする。

「おい、もしそれが本当だったとしたら、どうして梨元美亜は殺されたんだ？」

「どうしたんですか？ 一体何に気づいたんですか？」
阿弥陀警部がそう訪ねると

「犯人は梨元美亜本人だったのかよ？」
その言葉に阿弥陀警部はもちろん、堂本鋼の両親、そして梨元美亜の母親は絶句した。

「そ、そんな…… どうして？ 結婚が決まっている相手を、どうして殺す必要があるんですか？」

確かにそのとおりだ。と西戸崎刑事は思った。

が、今日の晩、遺体の写真を摩っていた葉月の言葉が引っかかっていたのだ。

「女の人の悲鳴……」

だが、それは被害者とは違う人間だと云っていた。だから殺人を犯したのは別の女性になる。

がどうだろう？ 堂本鋼にあつて、梨元美亜にはなかったもの……

「絞殺痕…… 絞殺痕が何よりの証拠だ！ 梨元美亜は堂本鋼を絞殺した」

「でも、それじゃ梨元美亜は誰に殺されたんですか？」

確かにそうだ…… しかし、浅葱がいった言葉がそれを裏付ける。

「六条御息所…… 確か葵上に出てくる悪霊」

「正しくいえば恨みや妬みから生まれた生き霊なんじゃが、まあ正解としておこうかの？」

浅葱はそう言つと、梨元宗一を見やつた。

「しかし奇妙じゃな？ 自分で自分を殺めるとは」

その時、ふと浮かべた浅葱の表情がもの悲しく見えた。

「夫が何をしたと言つんですか？」

「いや…… この者も、もう生きとらんじゃろ？ 何せ無意識のうちに取り憑かれ、知らぬうちに殺されたんじゃないからな。さて、人ならぬものを罰するのがお前たちの仕事じゃったな？」

浅葱がそう言つや、皇月は長さの異なる二本の竹刀を両手に持った。

「吾^{わが}神殿に祭られし大黒の業^{いづ}よ！ 今ばかり我に剛の許しを！」
そう天に叫ぶや、竹刀は刀へと変貌していく。

(み、宮本武蔵？)

そう阿弥陀警部が感じた一瞬だった。

「閻獄第八条 父に取り憑き殺し、剩え自分の罪を被^{かぶ}せたものは
阿鼻地獄』へと連行する」

そう云うや、臯月は梨元宗一を切り付けようとしたが……

「邪魔ですから、退いてくれませんか？」

「君は一体何をしているんだ？」

阿弥陀警部が臯月を止めようとする。

その行動に、まるで呆れたように小さく溜息を吐くや、臯月は有無を言わずに、阿弥陀警部もろとも梨元宗一を切りつけた。

「うっ……」

阿弥陀警部はその場に跪いた。が、何か違和感があった。
そう感じた時だった。

「あああああああああああああああああああつ」

まるで断末魔のような悲鳴がうしろから聞こえ、そちらに振り向くと、梨元宗一が悲鳴を挙げていた。

「弥生姉さん！」

臯月がそう言つと、弥生は御札を梨元宗一目掛けて投げつけた。

御札は梨元宗一の額に付くや、青白い炎を発した。

そして梨元宗一と一緒に消滅した。

「い、一体何が起きて？」

「阿弥陀警部が見上げた時だった。突然臯月が刀で切り付けたのだ……
……
が、何ともない。それどころか、まるで竹刀で叩かれているような痛みしかなかった。」

「い、いったいどういう？ あでえ？」

「あ、やっぱり何ともないや？ まあこれが“刀”に見えてるってことは、少しばかり靈感があるって事なのかな？」

臯月は首を傾げながら、また二三度、刀で切り付けた。

「い、痛いですって……」

阿弥陀警部はそう言いながら、臯月の手を止めた。

「お、おい？ 阿弥陀…… 一体、何やってるんだ？」

西戸崎刑事の声が聞こえ、阿弥陀警部はそちらを見やった。

「西戸崎刑事？ ご無事でしたか？」

「無事？ 何を…… っていつかここは何処だ？」

その言葉に阿弥陀警部は首を傾げた。

「普通の人間に私の姿は見えんよ」

そう浅葱が言うや、トコトコと西戸崎刑事のところへと歩み寄り、思いつき足元を蹴った。

が、西戸崎刑事はまるで何もなかったかのように、阿弥陀警部へと歩み寄っていた。

「おい、なんだ？ 変な顔して」

「い、いや…… 何でもないですよ。なんでも……」

阿弥陀警部は何がなんだかさっぱりわからなくなり、ただ笑うことしかできなかった。

漆・後妻打ち（後書き）

*指摘された部分を訂正しました。

×「ビニールに被害者二人の結婚が残ってるかもしれない」

「ビニールに被害者二人の血痕が残ってるかもしれない」

捌・理由

「ごめんください」

稲妻神社の社務所の入口から声が聞こえ、弥生が出ると、「これは阿弥陀警部に大宮巡査。また事件か何かですか？」と若干諦めたような口調で言った。

「いえ、ちょっと近くを通ったんでね。それに今日は二人とも珍しく非番なんですよ」

阿弥陀警部は暑そうに団扇で扇ぎながら言った。

「だったら、中へどうぞ。阿弥陀警部とは長い付き合いですから」

「そうですね？ それじゃお言葉に甘えて……」

そう言いながら、阿弥陀警部と大宮巡査は居間へと案内された。

「それにしても、暑いですね？ 弥生さんも大変でしょ？ 日中巫女服を着てないといけないんですから？」

「そうでもないですよ？ それに好きで着ているようなものですし、そう言いながら、クルリとその場で一回転した。

「あはは、似合ってますよ」

大宮巡査がそう言うのと、弥生は笑みを浮かべた。

「おやおや？ 阿弥陀警部じゃないか？」

拓蔵が居間に入ってくると、阿弥陀警部と大宮巡査に気付く。

「お邪魔してます」と阿弥陀警部と大宮巡査は頭を下げた。

「弥生？ 酒はないのか？」

そう訊ねると、厨房にいた弥生はちょうど魚を下ろしている時だった。

そして振り向かず、刺身包丁をまな板に突き刺した。

「あのね？ 今家計は勿論、神社自体も火の車なんだから…… 今度の結婚式で御神酒として使う清酒しかないの……」
振り向いてはいないが、その口調から、誰がどう見ても怒っているとしか感じられなかった。

「くくく……」

突然阿弥陀警部が含み笑いをした。

「ふ、不謹慎ですよ、警部」

「いや、前も同じ事があつたなあと……」

そう言いながら、阿弥陀警部は拓蔵を見やった。

「大宮くんが来た時じゃったかな？」

「ええ。それもあります、私が初めてこの神社に来たときも、似たようなものでしたよ」

そう…… あの時もそうだった。

酒の催促をしようとした拓蔵を弥生が渋々ながらも了承していた。

が、今回はかりは本当に辛いようだ……

まいくび舞頸で拓蔵は御神酒につかう清酒を水で薄めればいいという暴挙を提案している。が、酒が薄くなれば違和感を感じる。要するにそれに対しての苦情が来たのだ。その時に行なった夫婦から。

それ以降、御神酒に使う清酒は弥生の部屋に重々保管されることになった。

「もうあれから半年以上も経ってるんですかね？」

そう言いながら、阿弥陀警部は麦茶を飲み干した。

「もうそんなに経つのか……」

拓蔵は自分で買ってきたワンカップ酒をちびちびと飲んでる。

「それで梨元宗一の死体は供養されたのか？」

「ええ。浅葱さん…… いや、橋姫さまの云う通り、死体が発見された場所で、被害者二人とは全く別のレミノール反応がありました」
つまりその場で殺されたという事だ。そしてもう一つの反応とは、他ならぬ梨元宗一のものだった。

「父親に取り憑いて、自分を殺した…… 生き霊だったからこそ出来た荒業じゃろうな」

「ですが…… あの晩、葉月さんが云った言葉、『好きな人と一緒になれた』というのが今でも気になるんですよ」

「恐らくそのままの意味じゃろうな…… 葵上は能舞台の話じゃが、決して題名の葵上が、妖怪ではないんじゃないよ」

そう言うつや、酒を飲み、口を潤すや、話を続けた。

「『葵上』は光源氏の正妻の名でな、それに取り憑いた六条御息所が葵上を苦しめるが、最後には法力によって退治される話なんじゃないよ」

そう話しながら、再び酒を飲むと、

「まああの事件、自分が堂本綱に愛されていると信じなかった本人が一番悪いじゃろうな……」

梨元美亜は確かに愛するものと一緒に死ねて幸せだろう。

だが、それは独り善がりの幸せでしかない。

『葵上』での六条御息所は、葵上が光源氏の正妻であることから、恋慕と妬みによって鬼と化し、呪い殺そうとした。

もし、彼女に新しい恋なり何かをしていれば、鬼にはならなかっただろう。

たとえ葵上を呪い殺し、光源氏を手に入れたとしても、それは結

局、梨元美亜同様、独り善がりの幸せでしかないのだ。

あの晩、葉月が霊の声を聞いた時、二人は全く別の事を云っている。

そして何より、梨元美亜が犯人を怨んでいないと云っている。

それもそうだろう。殺人を犯したのは梨元美亜本人なのだから……

「しかし、今でも不思議なんですよ。あの時どうして、皐月さんに切られたにも拘らず、ただ竹刀で叩かれたような痛みしか感じなかったのか」

「そりゃそうですよ？ だって、私の刀は生きている人や幽霊を切ることなんて出来ませんから」

何時の間にいたのか、皐月が阿弥陀警部にそう云った。それが本当なら、道理で血が出ていないはずだ。と阿弥陀警部は思った。

「あれ？ お客さんですか？」

皐月のうしろに誰かがいることに阿弥陀警部は気付く。

その姿は大宮巡査にも見えていた。

「久しぶりですね。阿弥陀警部」

小さく頭を下げ、浅葱は阿弥陀警部と大宮巡査に挨拶をした。

（あれ？ そう云えば、確か大宮くんって、遊火さんが見えませんか、霊感はないと思ってたんですけど？）

阿弥陀警部が小声で浅葱に訊ねる。

（ああ、あんな未熟者と一緒にしないでください、そもそも私は神ですから、自分の姿が人の目に見えるようにするのは容易いことです）

要するに権化ごんげというものだ。あの晩も靈感の有無を問わず、全員に彼女が見えたのは、それが理由だった。

(それじゃ西戸崎刑事が推理したのも?)

(あれは当の本人じゃよ? まあ少しばかり違うがな…… あの父親も悔やんでおったんじゃないやろうな)

それはつまり…… 西戸崎刑事に一瞬だけ、梨元宗一の霊が乗り移っていたということになる。

「そう言えば、今日浅葱橋の近くでお祭りがあるそうですね? 花火とか」

「あ、生活安全課が警備を担当するそうですね、今晚みなさんでどうですかね?」

大宮巡査と阿弥陀警部がそう言つと、皐月は弥生を見た。

「あ、お金は私が出しますよ。いつもお世話になってますからね」
阿弥陀警部がそう皐月や弥生に言った。

「いいんですか?」

「人の更衣は甘えるに越したことはないぞ、皐月。私が禿の時、姉女郎たちがようしよったわ」

浅葱がそう言うや、全員が笑った。

浅葱がどうして自ら人柱になったのか……

それは喜平を好きになった自分と同様、遊郭の中でしか生きられない遊女に、特に自分と同様、幼い禿や新造が見世に来る客とは違う。

金ではない、本当に自分を好きでいてくれる人を見つけて欲しいがために、人柱になったのだ。

本来、遊郭には大門というものがあり、それが開かない以上入る

ことはもちろん出ることもできない。

だが浅葱橋が掛かっている繁華街と民宿街は川を隔てて別れていたのだ。

そしてそれは渡し船でしか行き来できなかった。

つまり繁華街はひとつの小さな孤島でもあった。

ただ、今は埋め立てなどがされており、その面影は全くない。

浅葱が橋姫となった理由は、自分は叶わなかった夢を、橋を歩き交う恋人たちに委ねた事にあつた。

他の橋姫と違うところは、他の橋を褒めたり、女の嫉妬をテーマとした『葵上』や『野宮』などをうたつても、てんで気にしない。

それは生まれて死ぬまで、一途の恋だけをした橋姫だったから。

あの日、浅葱が橋を離れたのは、その日が喜平と初めて逢った日であり、彼の子孫を見ていたからである。

その晩、臯月たちは全員で浅葱橋の上で花火を見上げた。

その時、ふと見せた浅葱のいや……橋姫の綻はらんだ笑みは、自分の周りで同じように花火を見ている恋人たちへの笑みだった。

捌・理由（後書き）

第4話終了です。今回は過去の話でしたが、浅葱はまた出す予定です。

吉・通夜

「それじゃ、帰りは遅くなる。わしがいないからといって、夜ふかしはしないよう。後、戸締まりはしっかりとな」

そう拓蔵が言つや、三姉妹は頷いた。

時間はちょうど夕方5時になるうとしている。が、初夏の時期と
いうこともあり、未だに空は青々としている。

拓蔵は重苦しい表情を浮かべながら、黒のスーツを着用し、髪を整えている。

小一時間前、知り合いの訃報ふほうを電話で知り、その御通夜に出席するためだった。

「まったく…… あの人も歳には勝てんか……」

そう呟くと、顎を摩った。

「爺様、そろそろ行かないと電車に間に合わないんじゃない？ その人の家、この町からだとだいぶ離れてるんでしょ？」

弥生にそう言われ、拓蔵は慌てる。

いつもなら飄々としていても、しっかりしている拓蔵が慌てるなどということは本当になくことである。

それを見ながら、三姉妹は余程の知り合いなのだろうと感じた。

大きな一軒家の外壁には鯨幕けいまくが貼られており、玄関前には長テールブルが置かれ、そこか受付となっていた。

「このたびの訃報、まことに残念でなりません」

「自分は京本警視長にはよくしてもらって」

という涙声を受付で聞こえてくる。

「黒川さん…… 来てくださったんですね？」

パイプ椅子に座り、受付をしている初老の女性がそう拓蔵に呼びかけた。

「りつさんから連絡を受けた時は驚きましたよ。先輩が亡くなるなんて……」

拓蔵はしんみりとした表情で云う。

「死因は？ あ、いや…… すみません」

拓蔵は極々当たり前の仕草で訊ねようとしたが、言葉を止めた。

「いえ、いいんです。黒川さんは夫と同じ職場にいたんですもの。よく夫も、TVで流れる殺人事件の死因はとか」

女性……京本りつは思い出したのか、うつすらと涙を浮かべ、それを指で拭ぬぐった。

「これ、少ないですが」

そう云うや、拓蔵は香典を差し出した。

「 神社の方、大変でしょうに……」

「いやいや、孫が何も言わずに渡してくれたんですよ。いつもは財布の紐が硬いくせに……」

無理に笑い話に持つていこうとしているのが目に見える。拓蔵にとって、この空気は嫌でしょうがなかった。

仏である京本福介は警視庁捜査一課に長年勤めていた。長年ということもあってか、新人指導もやっていたため、人望があつかった人間である。

そして、拓蔵もまた刑事として警視庁に努めていた。

会場は客間で、広さは大凡十畳おおよそほどの広さだ。

部屋の壁にも外と同様に鯨幕が貼られており、大小様々な弔花が飾られている。

ここでも別れを惜しんでいる人たちの噺り泣く声が所々から聞こえていた。

拓蔵は棺の前にやってくるや、手を合わせ拝んだ。

そして棺に付けられている小窓を開け、仏の死に化粧を見た。

『まったく…… どうしてそんな……』

仏は想像していたものよりも、透き通るほどに綺麗な肌色だった。拓蔵と同様に、歳をとった皺くちなや老人のわりには、本当に綺麗な顔をしている。拓蔵は何も云わず、小窓を閉めた。

連絡を受けた弔問客はこれで終わりだろうと、拓蔵は仕事関係者のところに座った。

御通夜での座り場所を説明すると、棺を中心として、その前にお経を読む僧侶が座り、そのうしろには焼香台が置かれる。

そしてその三つを前にして左側から世話役・葬儀委員長が座り、人が通る間を空けて喪主・遺族と座る。そのうしろに知人・友人、間を空けて親族が座る。

そしてそのうしろに仕事関係者、間を空けて近親者が座っていく。

僧侶が入ってきたことで、いよいよ通夜が始まると、拓蔵は数珠を片手に握った。

僧侶がお経を読んでいる間に焼香が行われていく。

そして拓蔵の番になると、焼香台の前に立ち、喪主である京本りつに軽く頭を下げた。

そして、再び焼香台に体を向け、右手の親指・人指し指・中指、の三本の指で抹香まっこうを掴み、頭を垂れるようにしたまま、目を閉じながら額のあたりの高さまで捧げた。

『先輩…… 先輩はどうして急に亡くなったんですか？ この前会った時は、全然元気そうだったじゃないですか？』
そう頭の中で云いながら、拓蔵は焼香を終えた。

自分の座っている場所に帰ろうとしていた時だった。

「でも、本当急でしたよね？」

若い警官らがぼそりと私語をしている。

京本福介が最後に世話をしていた警官で、彼もまた、この急な訃報に違和感を感じていた。

それは仕事関係者の殆どが思っていることだった。

京本福介は定年退職し、警視庁を去った後も、心配なのか自分が世話をしていた警官によく会っていた。

拓蔵は警察を辞めた6年前までしか知らないため、来ている警官達の顔を知らなかった。

お経が終わり、僧侶が立ち上がり退場していく。

その時、ふと京本りつと何か一言一言会話を交わしていた。

僧侶が部屋からいなくなるや、京本りつがスツと立ち上がり、涙を浮かべた。

「本日は大変お忙しい中、夫のために来てくださり…… 本当にありがとうございます。夫も大変嬉しく思ってくださいていることで

しょう」

その言葉が引き金となったのかはさて置き、周りから再び啜り泣く声がこだまする。

「それで皆さんにひとつずつ弔花を渡し、夫の棺に入れようと思いません」

その言葉に拓蔵は違和感を感じた。

本来別れ花は通夜の次に行われる告別式にするものであるが、最近では一緒にすることも多いらしい。

娘である京本雨音あまねが弔花の入った籠を持ち、それを弔問客に渡していく。

拓蔵もそうだが、老兵たちは違和感を感じていた。　　が年代もそうだが、経験の違いだろう、若い警官たちは首を傾げる素振りすらしなかった。

「皆さん、花は行き渡りましたね。それでは……」

京本りつがそう言った時だった。

突然家の中が真っ暗になり、また何処から風が入ってきたのか、蝋燭の炎が消え、部屋の中は闇へと化した。

「みなさん落ち着いてください。雨音、ブレーカーの場所わかるわね？」

そう云うが、視界は闇の中だ。

「わしが行こう。りつさん？　ブレーカーの場所は何処じゃ？」

拓蔵は横に座っていた警官からライターを借り、火を灯すや、ぼんやりとその周りだけが照らされた。

「お風呂場の近くです。雨音、案内して差し上げて」

そう云われ、雨音は頷く素振りを見せた。

「こつち……」

袴の裾を引つ張る雨音に案内されながら、拓蔵はブレーカーの下へとやってくる。

ライターでその辺りを照らし、場所を確認するや、落ちたブレーカーのスイッチを上げた。

すると家の中の電気は点けられていき、明るさを取り戻していった。

「あつっ……」

親指で擦り火を点けるタイプのライターだったため、頭の方は熱で熱くなっていた。

「大丈夫……？」

「んっ？ ああ、大丈夫じゃよ。さあ、みんなのところに戻るっ……」

拓蔵と雨音が客間に戻るうとした時だった。

突然女性の悲鳴が聞こえ、二人は急いで戻るや、客間の中は騒然としていた。

「ないっ！ ないっ！ ないっ！ ないっ！」

京本りつが棺の中を半狂乱になりながら、何かを探している。

「い、一体何が？」

拓蔵は近くにいた弔問客に訪ねた。

「わ、わかりませんが…… 電気が点いたから、別れ花を入れようと棺の蓋を開けたら…… そ、その……」

弔問客はガクガクと震え、声がしどろもどろになっている。

拓蔵は意を決して、棺の前へとやってくるや、その光景に唾然とした。

本来、棺の中には何がある？

十中八九、死体が入っているはずだ。だが、その死体が綺麗になくなっていた。

拓蔵は振り返り、弔問客を見渡した。

通夜の最中、棺を扱った人間はいない。寧ろそんな罰当たりなことをする人間などいないだろう。

だが一瞬停電が起き、人の目に隠れるようになった状態がある。が、誰が特をする？ 死体を盗み出して……何の特が？

拓蔵はただならぬ空気にただただ呆然としていた。

吉・通夜（後書き）

使用した単語についての説明／鯨幕^{けいまく}・葬儀に使用される白と黒が交互になっている幕のこと。

式・嘯く

「警察に連絡はせんのか？」

そう拓蔵が云った時だった。横にいた雨音がキョトンとした表情とすべきか、不思議そうな目をして首を傾げている。

この家に来ている人間の何人かが警察の人間である。だからこそ不思議に思ったのだらう。

「この中に鑑識班はおるか？」

拓蔵がそう言うと、疎らであるが、一人、二人と手を挙げていく。

「よし。君たちは厨房から片栗粉を取ってきてくれ。雨音ちゃん、筆とセロハンテープはあるか？」

云われた三人はそれぞれ云われたものを取りに客間を出た。

ただ警官二人は場所が分からないため、雨音と一緒に行動するこ
とにした。

「誰かあの二人と雨音ちゃん以外、勿論わしがブレイカーを上げに行っている時と今の人数は合っているか確認出来るか？」

「ここに弔問客の帳簿があります」

そう云って、帳簿を手渡したのは世話役の人間だ。

「僧侶にも連絡を…… 彼にも疑いがあるからな。鑑識の手伝いをする者以外は他の弔問客への聞き込みと出入口の警備。並びに不審な人物がいなかったのかを外で訊きに行ってくれ！」

拓蔵は帳簿に書かれている弔問客の名を呼びながら、確認を取った。

「……何なんですか？ 一般人が……」

一人の若い警官が拓蔵に食ってかかった。先ほど福介の死に違和

感を持つていた青年だ。

「あなた、一般人ですよ？ それなのに、どうしてそんなに冷静でいられるんですか？ それに私たちはあなたに命令される筋合いはありません！」

確かにそうだと、他の若い警官たちが頻りに言い出す。

「やめんかあつ！」

その声を張り上げ、若い警官たちを制止したのは、ライターを貸してくれた老刑事だった。

彼と同じくらいか、少し歳が低い警官も、若い警官たちをジッと睨んでいた。

「で、ですが……」

「お前たちは目の前のことしか頭に入っておらんのか？ この人はわしらと一緒にの場所に座っておつたじゃろ？」

云われてみれば確かに……しかし若い警官が通夜の座り場所に詳しいわけではない。

「それに、いの一歩で行動しなければいかんお前たちが、まるで独活の大木と言わんばかりに動かんとは、これでは京本警視長に示がつかんじゃろ！」

老刑事がそう言うのと、若い警官たちは口を閉ざした。

「さあ彼に云われたことをせんかあつ！」

そう言われ、各々が行動をし始めた。

「助かりました」

拓蔵はそう言いながら、敬礼した。

「いやいや、お止めください。私目には勿体ない」

先ほどとは打って変わって老刑事は腰の低い返事をした。

「しかし、さすが黒川警視どの。プランクを感じさせない指示でし

た」

老刑事は拓蔵に対して敬礼をする。他の初老とまではいかないか、それくらい警官たちも同様だった。

「もう辞めて6年以上経つんじゃないかな…… それと、ひとつ調べて欲しいことがあるんじゃないかな？」

そう訊かれ、老刑事や周りの何人かが頷いた。

「先輩の死因を調べてくれんか？ 先輩とはつい先日おに会うとるんじゃない、その時の先輩を思い出しても、まったく死ぬとは思わんかったよ」

「黒川警視どのの仰るとおり、警視長の死について、私達も不審に思っていたんです。ですが……」

「分かっておる。わしはこれ以上首を突っ込まんよ」

拓蔵が諦めた声でそう云う。いくら元同僚とはいえ、辞めた人間にこれ以上事件に関わってほしくないのだ。

が、老刑事は出来れば参加して欲しいと思っていた。

本来ならば自分たちが指示をしなければいけないのだが、いの一
番に拓蔵がしてくれている。それも的確に……

先ほど片栗粉と筆を持つてくるようにいったのも、指紋を取るためである。

指紋検出には、主にアルミニウム粉末を刷毛はけで塗布して検出する粉末法や、エチルアルコールにニヒドリンを微量ふんむに混ぜて噴霧し、それをドライヤーやアイロンなどで加熱させて反応を出す液体法などがある。

弔問に来ている何人かが警察だと知っていた拓蔵は、指紋検出に使うため、取りに行かせたのだ。

「持ってきました」

「佐々木刑事。阿弥陀警部や湖西主任が来る前に……」

拓蔵にそう云われ、老刑事……佐々木刑事は頷いた。

持ってきた片栗粉を筆に少量つけ、棺の蓋の裏上下それぞれに付ける。

手に持つ場所がちょうどその部分になるからである。

棺を開ける際、その部分に指紋は強く残ることを拓蔵は知っていた。

勿論、徹底的にするために、他の部分にも付けるのだが、この方法では強く指紋を押し込んだ部分しか検出されない。

それから数分後、通報を受けた阿弥陀警部ら捜査一課は現場状況に呆然としていた。

「こりゃ、私たちの出番はないでしょうねえ？」

阿弥陀警部が啞然としているのも無理はない。

拓蔵の指示によって、聞き込みや実況見聞などは既に済ませているからだ。

喪主である京本りつと遺族である娘の雨音。

葬儀実行委員長と世話役の女性が2名の3人。

親族は弟である京本萩助と妻、その子供の兄妹のみで4人。

知人、友人が5人来ており、近親者は従姉弟いとこの京本巨輝1人の計15人。

そして残った仕事関係者。つまり警官となっている。

「湖西は来ておらんみたいじゃな？」

周りを見渡しながら、拓蔵が阿弥陀警部に訊ねる。

「あれ？ 神主さん……？」

阿弥陀警部と大宮巡査が首を傾げた。ここにいるとは思っていなかったのだろう。

「阿弥陀警部。今回の事件……　もしかするとあの子らの力が必要かもしれないぞ？」

拓蔵にそう言われ、阿弥陀警部は訝しげな表情を浮かべた。

「どういうことですか？」

「棺の中に入っていたはずの京本福介の死体が無くなっていました。しかも全員が見ている通夜の中でじゃ。一回だけ部屋の中が停電で真っ暗になったが、その間かん5分とない」

「さらに言えば、その間あいだ、黒川元刑事が京本警視長の娘さんである雨音さんと一緒に行っていた間、全員その場を動かないようにしていたし、家から出たものはおらんかったよ」

佐々木刑事が付け加えるようにそう言った。

「つまり……　全員が全員のアリバイを証言しているというわけですか？」

「一瞬の空きがあつたとしても、まあそうなるわな……」

阿弥陀警部はそう聞きながらも、どうして拓蔵が皐月たちの力が必要なのが気になっていた。

「何か……　妖あやかしに関するものがあつたんですね？」

そう言われ、拓蔵は阿弥陀警部と大宮巡査を棺の前まで連れてきた。

そしてある場所を指さした。

「じ、これは……　爪痕？」

そこには本来あるはずがない爪痕があつた。

「りっさん？　確か京本福介は猫アレルギーじゃありませんでしたか？」

「えっ？　え、ええ……　夫は猫に触ると蕁麻疹じんましんや吐き気を催すんです。それでなくても近くに來ただけで追い払いますから」

「つまり……　この家に猫はいないということでしょうか？」

阿弥陀警部はそう云いながら、拓蔵を見やった。

「それじゃ、わしは失礼するよ。明日もあるのだから……」
「送っていきましようか？　もう電車もないでしょ？」
佐々木刑事にそう云われ、拓蔵は頷いた。
それを見ながら、阿弥陀警部は首を傾げていた。

「どうしたんですか？」

「いや……　佐々木刑事の言葉がすこし気になりましてね……」
そう呟きながら、阿弥陀警部は考えていた。

『　黒川……　元刑事？』と……

「よかつたのですか？」

闇夜を走る車の中、佐々木刑事が拓蔵に訊ねた。

「何かじゃ？」

「……弥陀警部にはまだ話してないんですよ？ 先輩が警察を辞められた理由を……」

そう云われ、拓蔵は顔を歪めた。

「わしが警察を辞めたのは、わし自身の問題じゃ。あんたら組織が責任を負わんでもよい」

「ですが…… あの事故、6年前に起きた転落事故は健介さんの運転ミスでは……」

「もうその話はするな…… わしだけが覚えておればいいんじゃないよ」
佐々木刑事は云われたとおり、それ以上その話をせず、逆に新しく入ってきた警官や、京本福介が最後に世話をしていた警官達の話をした。

そんなことを話しながら1時間ほど経つと、車は稲妻神社の鳥居前で停った。

「それでは失礼します。私はまだやるべきことがありますので」

「わかつておる。済まん、忙しいのに」

「いえ、恐らくあの時あそこを離れなければ、弥陀は余計なことも訊いていたでしょうからね」

佐々木刑事はそう云いながら、車をウターンさせ、事件現場へと戻っていった。

ふと拓蔵が神社の方へと見やると、ぼんやりと明かりが灯っているのが見えた。それを見るや首を傾げた。時刻はとつくに午前様だ。

ガラスと玄関の引き戸を開けると、廊下の中は暗い。が、居間の方はどうしてか灯りが点いていた。

「誰か起きておるのか？」

小さくそう云いながら、拓蔵は居間の障子を開けた。

卓袱台ちゃぶだいの上には一人分の食事一式が用意されており、その近くでは弥生と皐月、そして葉月がうたた寝をしていた。

今日は遅くなるので、気にせずに寝ておけとは云っておいたのだが、何ともまあずっと待つててくれていたのだろう。

それを見渡しながら、拓蔵は「土産くらい買ってきてやればよかったな」と肩を落としながら呟いた。

「爺様…… なにそれ？」

翌朝、三姉妹は拓蔵が居間に持ってきた一冊の本に目を遣っていた。

「これか？ これはな、昨日行ってきた人の写真じゃよ」

拓蔵がそう言って説明しているが、三姉妹は頻りに肩を震わせている。

それもそうだろう。昨夜はずっと拓蔵を待つていたため、微熱を患つていた。

「亡くなった人って、警察の人？」

葉月が一枚の写真を指さしながら言う。セピア色の古びた写真だ。それに写っている男性二人は同じ警察官の制服を着ている。

「あれ？ ねえ、隣に写ってるのって……」

そう云いながら、皋月は拓蔵を見やった。どうやら弥生もそれに違和感を感じたのか、拓蔵を見ている。

「はははっ！ そうじゃよ！ わしじゃ！ これでもなあ、神社の経営をする前は警察官をしておったんじゃよ」

と、豪快に言うや、三姉妹は驚かず、ただただ呆然としていた。どうにも無理に明るく話している気がしたからだ。

「それじゃ、昨日行ってきた人って」

「わしの先輩じゃよ。本当に世話になった」

「どんな人だったの？」

葉月にそう訊かれ、拓蔵は一度深呼吸した。

「京本福介警視長…… 今から40年ほど前じゃったかな。わしがまだ新人の頃じゃ、右も左もわからず、ただ我武者羅がむしゃらに責務を真つ当した。田舎の小さな交番勤務から頑張っておった時にな、警視庁刑事課にわしが異動されると聞かされたときはビックリしたよ。警視庁なんて上のまた上じゃからな…… そこで、京本福介刑事と会ったんじゃ。まだ警部の時じゃったけどな」

拓蔵は写真を見ながら話す。

三姉妹たちはその話よりも、拓蔵が昔話を話してくれることが不思議だった。いつも曖昧に返されたり、話をまるで捏造されているのが、若干ではあるがそう感じていたのだ。

しかし、今話している拓蔵の目に嘘がないことが痛いほどわかっていた。と同時に、拓蔵にとって、京本福介はそれほどまでの人物なのだろうと……

「先輩にはこっ酷く叱られたよ。警察は犯人を徹底的に調べること。そしてその証拠があったとしても、犯行を実証できなければ意味が

ないということも…… 色々と教えてもらったよ」

「でも、どうして爺様は警察官を辞めたの？」

確かに拓蔵の年齢が54歳だと考えると、まだ現役でやっ
ても可笑しくはない年齢である。

警察の定年は基本的には60歳なので、拓蔵の歳ならばまだやっ
ている。

が、曖昧なのは三姉妹がその実の年齢を聞いていないからである。

「わしはな、ある事件で警察を辞めたんじゃよ」

「ある事件？」

そう聞き返したが、拓蔵はしんみりしてきたのか、話を途中で切
り上げ、アルバムを手に取った時だった。

ヒラリとまるで意図的に落ちたかのように、一枚の写真が本の間
から卓袱台の上に落ち、それを葉月が拾い取った。

「……………」

何も言わず、ただただジツとその写真を見つめている。

「どうしたの？ 何か写って……………」

弥生が覗き込むや、声を失う。皐月もそんな二人を見て、首を傾
げながらも、写真を覗くや……………」

「なっ…………… なんで？」

「こ、これ…………… 私たちだよね？」

皐月と弥生が驚いたのも無理はない。その写真に写っていたのは、
幼い自分たちだったからだ。

が、三姉妹が驚いたのはそこではなく、一緒に写っている大人二
人だった。

まるで夫婦のような…………… そんな気にすらしている。

「爺様…… この二人って、もしかして」

「遠い親戚じゃよ……」

拓蔵はそう云うや、目を合わせようとはしない。

「どうして、どうしてそんな嘘が云えるの？ どう見ても！ どう見たって……」

皐月は『私たちのお父さんとお母さんなんじゃ』と喉の奥まで出かけた言葉をグッと堪えた。

確証がないし、自分たちの思い込みかもしれないと感じたからだ。

だが、その蟠りわたかまが解消される訳がない。

弥生と葉月も皐月と同じ考えなのだろう。ジッと拓蔵を睨みつけている。

「もう良いじゃろ…… 弥生、わしは少し出かけるからな」

そう言って、拓蔵は葉月の手から写真を半ば強引に取り上げ、アルバムに挟むや、居間を出ていった。

「全部処分したと思ってたんじゃが…… わし自身が吹っ切れておらんのだじゃろうな？」
のう、遼子りょうこや……」

そうだとしても、三姉妹あの子達に真実を話すことはないだろうと、拓蔵は写真を胸ポケットに仕舞った。

肆・鼓膜

まだ日が昇ろうとしていた頃だった。

「……………」
阿弥陀警部が訝しい表情で、それを見ている。

お寺の梵鐘ぼんしやうの下で横たわっている遺体が発見され、それがその寺で住職をしている人間だということがわかった。

が、阿弥陀警部が気になったのはそこではなく、遺体の両耳から血が垂れ流れていることであつた。

「阿弥陀警部。ガイシャの身元がわかりました。被害者の名は金成知信、62歳。この寺に戻つてから、発見されるまで誰も見ていないようです」

「寺に戻つたという証言が出来る方は？」

そう訊かれ、大宮巡査は視線を小坊主たちの方へと向けた。

「彼らはまだ修業の身だそうで、ガイシャの世話役をやっていたそうです」

阿弥陀警部は翼々よくよくと小坊主たちを見やった。

全員が頭を剃っているとはいへ、顔付きがキリリと整つたものがいれば、少し幼い感じのするものもあり、坊主と言うよりかはホストと云つてもいいほどの美男子ばかりである。

「稚児ちしとは限りませんが、一応あなた達が昨晚から今朝にかけての行動を聞かせてくれませんかね？」

そう訊ねるが、全員が全員、住職が戻ってきた後に寝たと口を揃えて云つた。

「昨晚、住職は何処へ？」

「京本福介警視長の御通夜に参加しておったよ。お経が終わった後、退場なんだ」

佐々木刑事がそう阿弥陀警部に告げる。

「そうなんですか？ それじゃっぱり……」

そう云いながら、阿弥陀警部は小坊主たちを見やった。

「ちょっと待つてください。私たちがそんなことをする訳がないでしょ？」

しかしアリバイがないのだ。全員が全員同じ事を云っている。

アリバイ証言で最も大事なのは第三者、つまり赤の他人からの証言である。

小坊主たちはどう見繕っても赤の他人とは云えない。

ひとつ屋根の下で共に修行に励んでいる。だからこそ、アリバイは成立しない。

「取り敢えず、あなた達は大人しくしてください…… 湖西主任、どう思います？」

阿弥陀警部は遺体の状況を調べている湖西主任に声をかけた。

「ああ。こりゃ…… 脳がやられておるな」

「 脳？ 鼓膜が破れてるんじゃないんですか？」

「鼓膜が破れているだけなら、こんなに血はでらんよ。今も流れておるといふことは、鼓膜を突き破って脳を損傷しておるからじゃろうな。詳しいことは検死せんとわからんがな」

そう云うや、湖西主任は梵鐘を見上げた。

「間接的な方法ではないかもしれんが……」

湖西主任は遺体の写真を一枚撮り、それを阿弥陀警部に渡した。

「どうせ、稲妻神社に行くんじゃない？ 少しは自分たちで動いたらどうじゃ？」

「できれば、そうしたいんですけどね……」

阿弥陀警部は苦笑いを浮かべた。

「それにしても、今日はやけに写真を見る機会が多いよね？」

皐月が弥生と葉月に言う。

「アルバムが何か見てたんですかな？」

阿弥陀警部にそう訊ねられ、皐月は咄嗟に苦笑いを浮かべた。

「それで、この写真を霊視すればいいんですね？」

葉月がそう訊ねるや、阿弥陀警部と大宮巡査は頷いた。

「ところで神主は？」

「今朝出掛けたつきり帰ってきてないんです。多分どこかで飲んでいるんだと」

何ともまあ自由奔放な神主だと、阿弥陀警部は呆れたような表情を浮かべた。

葉月は目を瞑り、一二度ほど深呼吸をし、ゆっくりと写真の上手を置いた。

何かを感じたのか、徐々に顔を歪めていく。

が、それが苦痛ともいえるほどの表情を浮かべた時だった。

ガタツと体全身を倒し、空いている手で耳を抑えた。

「葉月っ！」

皐月が止めようとするが、葉月はまるでそれを拒むように必死に写真から手を放そうとはしない。

それがどれだけ苦しいのか、歪んだ顔と大量の冷や汗を見れば、誰もが嫌というほどわかった。

写真から手を離すや、まるで長時間潜水していたかのように、ゼ

エゼエと葉月は荒い息継ぎをする。そして、近くにいた大宮巡査の膝下に凭れかかるようにして倒れた。

「だ、大丈夫かい？」

大丈夫じゃないのは訊かなくても目に見えている。

「それで何か聞こえたの？」

弥生がそう訊ねると、葉月はまるで拒むように両耳を手で塞いだ。

「聞こえなかった……」

「えっ？」

「周りの音がうるさくって、その人の声全然聞こえなかった……」

葉月の能力は死者の声を聞くことだ。だがそれは死者が死ぬ直前の音が混ざっている場合もある。

「周りがうるさいって……でも発見された現場はお寺の梵鐘の下ですよ？」

「まさか……被害者は梵鐘の中で殺された？」

梵鐘の平均的な大きさを考えれば、人を吊るして殺すくらい訳がない。

「でも、どうしてそんな七面倒なことするわけ？」

云われてみれば確かにと、皐月は葉月の容態を窺っていた。

「葉月、ちょっと待ってて、今冷やすの持ってくるから」

そう云うや、皐月は居間を出ていった。

「葉月ちゃん、どうして無茶なんてしたんだい？ 耳を塞ぐという

ことは、それだけ君の聞こえている音が音量だということだろ？」

大宮巡査は責めているわけではないが、それでも葉月に訊きたかった。下手をすれば、難聴になりかねないからだ。

それをぼんやりとした表情で、葉月はジッと大宮巡査を見つめた。

「これしかできないから……」

「これしか…… できない？」

葉月は可細いというよりも、まるでかすれた声で口を動かした。

「臯月お姉ちゃんみたいに、黒天さまの力を使って、妖怪を退治する力があるわけでも 弥生お姉ちゃんみたいに御札を使って靈を成仏させてあげられない……」

大宮巡査はできる限り気付かないふりをしていた。

葉月が話すたびに涙を溢れ出していることが、まるで悔しいと云っているのが痛いほど感じていたからだ。

「だから私には靈の声を聞いてあげることしかできない。それに、私に助けてもらおうと思つて、取り憑いてくる人もいるけど、結局私一人じゃ助けてあげられない」

「立派じゃないか……」

大宮巡査がそう云うや、葉月はキョトンとする。

「僕たち警察は証言がなければ、犯人逮捕はおろか、もしかしたら永久に事件が解決できなくなるかもしれない。でも、君の力は被害者の声を聞いてあげられることだろ？ それはどの証言にも上回ることだ。だって、被害者の声なんだから」

大宮巡査はそう思つたから云つたまでで、深くは考えていない。

確かに被害者自身の声が聞けたのならば、それはどの証言よりもハッキリとした証言とも言える。

しかし、殺人事件においては、死んだ人間の証言など夢のまた夢である。

「だから…… 君の力は僕たちに、強いてはお姉ちゃんたちに十分に役に立っているんだよ」

「ほんと？」

それは今まで感じたことないほどに幼い声だった。

「ああ。君に声を聞いて欲しいという霊は、君だから取り憑いたのかもしれないし、君が必死になって声を聞いてあげたから、被害者は鐘の中で殺されたということがわかったんだから」

「よかった……」

そう云うや、葉月は気を失うように目を閉じた。

「一度耳鼻科じびかに行つて診みせたほうがいいかもしれませんね。さっきの様子だと余程の大音量だったでしょうから、鼓膜が破れている可能性も」

大宮巡査にそう云われ、弥生は翌日学校を早退し、葉月を耳鼻科へと連れていった。

診察結果はなんともなく、それを電話で聞いた大宮巡査は安堵な声を上げた。

伍・猫

「あれ？」と一人の警官が言った。警官の手には一欠片ひとかけらの何かに乗っている。

それを周りで鑑識をしていた同僚たちも気づき、ワラワラと集まり出した。

「おつかしいな…… 確か猫は飼ってないと云っていたはずなんだけど」

それを持っている警官が不思議そうに云う。別に誰かに訊ねているわけではなく、自問していると云った感じだ。

しかし彼が疑問に持ったのは、彼自身が未だ実家暮らしをしていた頃に猫を飼っていたからである。

だからこそ、それが何なのかが一目で理解出来た。

「すみません？ どうしてキャットフードが落ちてるんですか？」

そう訊ねられ、りつと雨音は何も言わず、声の方へと目をやった。

「キャットフードですか？」

りつが警官の方へと近付き、それを見た。

「確かに…… キャットフードのようなものですが、如何せん夫がアレルギーですから」

確かにアレルギーのある人間が家にいる以上、猫を飼うことは出来ない。

「一応鑑識に回して……」

そう言っつて、キャットフードの欠片を、小さな袋に入れた。

「雨音？ 何か隠してないかい？」

りつにそう訊かれ、雨音は少しばかり顔を歪めたが、首を横に振

った。

「それじゃ一体どうしてこんなのが家にあるんだろうね？」
独り言のようにりつは呟いた。

「ごめんなさい……」

ばつが悪そうに雨音は小さくそう云うや、深々と頭を下げた。

「一週間くらい前から、隠れて飼ってたの。凄く小さくて、弱々しくてほっとけなかった。でも、キャットフードとかミルクとかは自分のお小遣いから……」

言い訳にも近い説明をしている間、りつは溜息を吐いた。

「それで……その猫は今何処にいるの？」

「えっ？ っと……家の近くに空き地があるでしょ？ そこで見つけたの」

そう聞かや、警官の一人が確認するようと、他の警官に視線を送った。

「その猫が家に上がり込んだことは？」

「ううん。お父さんがアレルギーだから、絶対入れられない」

しかし、あの棺に付けられている爪痕はどう説明がつくだろうか？と何人かの警官が思っていた。

棺から採取された指紋はひとつしかなかった。

そのひとつはほかでもない、喪主である京本りつのものだ。

葬儀実行委員長や世話役は手袋をしているため、指紋が検出されない。

しかしあの状況で棺を開けるということは、余程の空間認識が必要になつてくる。

増ましてや死体を運び込んでいるのだ。暗闇とかしていた短時間に

……

「雨音ちゃん？ 本当に猫を空き地の方で飼っていたのかい？」

戻ってきた警官がそう訊ねると、雨音は少しばかり驚いた表情で頷いた。

「可笑しいな。いやね？ 小父さんが見てきたんだけど、ダンボールにはキャットフード、水が入っている小皿以外、何も入ってなかったよ？」

「えっ？」

雨音はそう云うや、一目散に外へと出た。それを警官二人が追った。

それを見ながら、りつは少しばかり笑みを浮かべた。

「みいーちゃん！ みいーちゃんっ！」

雨音が大声で呼び掛けるが、一向に反応がない。

「雨音ちゃんの言っていることは嘘じゃないですね？ 飼っていたという証拠があります」

「だが、肝心の猫がいなのではなあ…… 確か飼っていたのは一週間ほど前からと、猫の方はまだ弱々しいということは、小猫ということになる」

そうなると、それほど遠くまで行っていないということになる。

「雨音ちゃん、そのみいーちゃんの世話をしたのが最後なのは何時頃だい？」

「えっと…… 今日の朝です」

つまり昨夜の時点ではまだ生きていたということになる。

「本当に家に持ってきてはないんだね？」

「雨音は激しく首を横に振った。」

「ただ鑑識で直にわかるけど、棺についていたあの爪痕は猫のものに間違いはないんだ」

「でも……」

雨音が嘘を吐いているとは思えないし、警官の二人も小一時間一緒にあって子猫の探索にあたった。

が、それでも発見されず、雨音と警官二人は何も言わず、家へと戻っていった。

陸・小窓

「おつきいーっ」

遊火が啞然とした表情で見上げている。

「確かに大きいわね。一体何坪くらいあるのかしら？」

弥生が遊火の言葉に相槌を打った。

京本福介の家は大凡70坪だと拓蔵が説明する。

「確か被害者って、三人家族だったはずだよな？ どうしてこんな大きな家に住んでるんだろ？」

葉月の云う通り、別に大きな家じゃなくてもいいのではと言いたくなってくる。

「すみません。阿弥陀ですが、開けてもらえますかね？」

インターホンでそう伝えるや、門が自動的に開いた。

「これって、中から開けてるんだよね？」

「当たり前でしょ？ そうじゃなかったら……」

葉月の何気ない質問が、臯月と弥生に何かヒントを与えたようだが、当の本人はそれに気付いていなかった。

「中からってことは…… 犯人は中の人間。しかも逃げることは出来ない」

「云われてみれば確かに…… でも、どうやって犯人は死体を？」

拓蔵は蓋をされた棺の小窓から京本福介を見ている。

いや それが可《 》笑《 》し《 》い《 》のだ。

普通、棺に蓋をする時は告別式で別れ花を入れてから、火葬場へ投函するまでは“蓋をされない”。

御通夜の晩、“夜伽”という、棺を寝ずの番で監視するというものがある。

しかし昨晚、そのようなことをせず、そのまま別れ花をしようとりつは云っている。そして突然の停電である。

「さすがにそれはないじゃろ？ りつさん…… あんた、確か仏門の家柄じゃったはずじゃろ？」

「どうかしたの？」

臯月がそう云うや、拓蔵は一二度咳をした。

家に入るや、外からでも大きいのに、中を見るや三姉妹と遊火は再び啞然とする。

「これって、うちの本堂より大きくない？」

客間を見て臯月がそう云う。それほど大きな広さだった。

「現場はそのままみたいじゃが、何かわかったことは？」

そう拓蔵が云うや、阿弥陀警部と大宮巡査がそれぞれ状況を訊きに行った。

一二分ほどして戻ってくると、雨音が猫を飼っていたが、その猫が行方不明になっていると説明した。

「猫かあ…… うちにも一匹くらい欲しいわね？」

弥生は臯月の方を見ながら云う。

「あ、あのね？ 私が飼ってるのってハムスターなだけけど？ それに鼠ネズミは大黒天の神使しんしだから……」

「はいはい。でも見張るときなさいよ。あの子達たま、偶たまに他の部屋に入ってくることもあるから」

そう云われ、臯月は気をつけると一言言った時だった。

「あれ？ 猫……？」

葉月がキョロキョロとあた辺りを見渡した。

「どうかした？」

皐月がそう訊ねると、葉月は猫の鳴き声がしたと説明する。

「聞こえませんでしたけど、ねえ大宮くん？」

「ええ。聞き間違いじゃないのかい？」

そう訊くが、葉月は首を横に振った。

「私は耳が悪いから、聞こえないかもしれないけど、他のみんなが聞こえてないんじゃない？」

「でも、猫の声聞こえた。まだ凄く小さい……」

そう葉月が云った時だった。

近くにいた警官が近付いてきて、どんな感じだったのかと葉月に訊ねた。

「えっと、まだ小さくって、なんか脆弱かろうじやくしてて……」

「雨音ちゃん？ 確か君が隠れて飼っていた猫も最初はそんな感じだったって言ってたね？」

雨音は答えるように首を縦に振った。

「それじゃみいーちゃんは家の中にいるの？」

「……………」

葉月は小さく首を横に振った。

「いないってこと？ それじゃ葉月が聞いた声って……」

「いないということは、こ《》の《》世《》にということになる。」

「弥生姉さん、何か感じる？」

「さつきから遊火と一緒にやってるんだけどね、全然……」

「寧ろ、もういないといった感じですね。部屋の中には残り香すら残ってません。ただ、棺に付けられていた爪痕わづから僅かにですが妖気のようなものを感じました」

臯月には遊火の声が聞こえない。かわりに葉月が説明していた。

「死体を持ち出す妖怪……もしかして火車^{かしゃ}？」

「御通夜を狙つての犯行と棺に残った猫の爪痕……間違ひなく、火車じゃろつが……先輩は盗まれるようなことはしておらんはずじゃぞ？」

火車は生前悪行を積み重ねた末に死んだ者の死体を盗むと言われている。が、拓蔵は京本福介がそんなことをしないと考えていた。

「阿弥陀警部？ 済まないが皆の作業を止めてもらえんかの？」

拓蔵がそう云うや、阿弥陀警部は少しばかり首を傾げた。

「一つ確認を取りたいんじゃない？ お前たちもいいいな？」

そう訊かれ、三姉妹も首を傾げた。

「えっと……全員定位置に座りました」

警官の一人がそういう。

「それで何を始めるんですかな？」

「一応、昨晚の御通夜から引き続きこの家にいる警官諸君ならすでに気付いていると思うが、今座っているのは昨晚と同じ状況だ」

拓蔵はそう云いながら、座った位置を説明していく。

先ずは棺の前に座っている僧侶、金成知信を湖西主任が代役を務め、そのうしろには焼香台が置かれている。

そしてそれらを前にして、左から世話役と葬儀実行委員長が座る。それを三姉妹が代役する。

人が通れる間を挟んで、喪主である京本りつを拓蔵。遺族である雨音を大宮巡査が代役を務める。

友人・知人が五人、親族が四人、近親者が一人、そして残りは仕

事関係者、つまり警官である。

棺には遺体の代わりにボールが入れている。それを全員が棺の小窓から確認を取った。

「僧侶である金成知信がお経を読んでいる間、わしらは焼香を行なっていた。そして、僧侶はお経を読み終えた後、りつさんと一言会話をした後、この家を出た。そして、りつさんが別れ花をしようと切り出し、籠に入った弔花を雨音ちゃんが皆に配った……　そして、みんなに行き渡り、棺を開けようとした時じゃった」

そう拓蔵が云うや、部屋の中は真つ暗になった。

「ちよつと？　何も見えないんだけど？」

「　　つ？　ちよつと待って……　今なんか音がしなかった？」

弥生は警戒するように辺りの気配を探った。

「そして、わしが雨音ちゃんと一緒に落ちたブレーカーを上げに行った。その間は大凡一二分じやろう。みんなが慌てておったからそれよりも少し間隔を広げて五分前後としよう。そして部屋の中に明かりが灯り始める」

拓蔵の云うとおり、それくらい感覚で部屋に明かりが灯される。全員が定位置とは言わないが、殆ど動いていない。

いや、動けないのだ。密集された間隔では容易に動くことは困難である。しかもお経を読んでいる間に全員が長時間正座しており、足を痺れさせるには十分なほどである。

だからこそ犯人は楽にことを運べた人間がいるということになる。

「あれ……　入ってない？」

葉月が確認するように小窓を開けるや、そこには何も入っていない

かった。

「でも、棺には京本福介の死体が……」
いや、死体と云えば死体である。

「い、急いで葬儀を担当した会社に問い合わせてください。葬儀の前、死体を見てから蓋をしたのかと！」

阿弥陀警部がそう命令する。

「じ、爺様？ これって……」

皐月と弥生も気付いたのだろう。どうして全員に小窓からボールを確認させたのかという真意を

「犯人は最初から遺体を盗んでおったんじゃないよ。棺の蓋をしていたのは、それが中に入っていると錯覚させるためじゃろうな。じゃが、それでは説得力がない。だから全員に確認させたんじゃないよ。首だけの遺体を小窓からのう」

その言葉に全員がゾツとする。

「そんなこと可能なんですか？」

「小窓からでは肩ほどまでしか見えん。しかも何も態々そこまで見る人はおらんじゃろ？ 犯人はその盲点をついたんじゃないよ」

云われてみれば確かにと大宮巡査は頷いた。

「でも、さつき蓋を開ける音がしたから、気付いてる人も……」

「みんなには事前に説明しておるから、弥生と同じく気付いたものもおったじゃろうが、突然真つ暗になって、冷静でおられるものはおったか？」

各々が互いの目を見やりながら、首を横に振った。

「つまり、犯人は最初から停電するように仕向けてたんじゃないよ。全部の部屋のエアコンをタイマー予約して、お経が読み終わり、別れ花を配り終えるタイミングを見計らったのう」

拓蔵がそう云つちや、隅っここで何かを抱えているりつを見やった。

漆・屍体

「お母さん？」

雨音がその声を掛けながら、ゆっくりとりつへと近づいていく。

「雨音ちゃん…… ちよつと待って」

臯月は持つてきていた二本の竹刀の内、一本を片手に持つや、呪まじないを唱えた。

「吾わが神殿に祭られし大黒の業いごよ！ 今ばかり我に剛の許しを！」

そう云うや、竹刀は真剣へと変わっていき、臯月は身を構えた。

「……なぜじゃ？ どうしてこんなことを？」

拓蔵はトリックを説明しても、りつが犯人であることが信じられなかった。

「ちよつと待って！ 小父さんはお母さんが犯人だって言うんですか？」

雨音が必死な表情でそういった時だった。

「えっ？」

背中に痛みが走り、そちらを見やった。

そこにはりつが歪むほどの笑みを浮かべている。

「か、か…… あ、さ……？」

ドクドクと背中から血が流れ、雨音はドタツと倒れる。

「雨音ちゃん？」

警官の一人が駆け寄るや、りつはそれを切り裂いた。

雨音と警官が死屍累々と言わんばかりに折り重なった。

「かあさん？ どうしてえ？ どうして？」

雨音の息が残ってることに気付くや、拓蔵は二人に駆け寄った。

「雨音ちゃん？ ええいくそつ！ お前たち、ポーとしとらんで助けんか！」

そつ怒鳴りながら、視線は臯月へと向けられていた。

りつが逃げるようにその場を立ち去っていく。

「まちなさいっ！」

臯月はりつを追い掛けた。

「遊火！ 壁になって食い止めることか出来ないわけ？」

「無理ですつて、火の玉が集まる数や大きさにも限度がありますから。人間の姿でも結構ギリギリなんですよ？」

遊火はそうじゃなくても、塗壁ぬりかべじゃないんだからと駄々を捏ねた。それを見て、弥生は溜息を吐ついた。

「ああもう！ どんだけすばしっこいのよ？」

りつを追っている臯月が愚痴こぼを零こぼした。

追い掛け始めた頃から、韋駄天いだてんの力で動きを速くしているのだが、それでも追い付ける気配きはいすらない。

屋根から屋根へと飛び越えながら、追い掛けていく。

その動きは神速に近く、人が目を追いやることは不可能に近い。

「好いい加減かげんに止まりなさいよ！」

臯月は一気に加速し、りつへと切り掛った。

「へっ？」

りつはまるで紙のようにひらりと一閃をよけ、逆に臯月を切り付けた。

臯月は屋根の上から落ち、地面に体を打ち付ける。

「いったあ……」

ボンヤリと意識を保ちながら、皐月はりつを見やった。

りつは皐月が追い掛けられないと確信したのか、一向に動こうとしない。

「なんか…… ムカついてきた」

皐月がそういつた時だった。

シャランという鈴が鳴る音がし、りつと皐月はそちらを見やった。耳が悪い皐月でさえ、耳鳴りと言えるほどに大きな音だ。

「一刀・破魔理」
はまのこつわら

そう誰かが言った時だった。

りつの体が横一文字に切られ、ズルズルとズレるや、下半身はその場に倒れ、上半身は高い屋根の上から落ちるや、グチャグチャに潰れた。

影を見やるや、皐月は絶句する。

「あ、あんた……」

影が皐月の方を見やり、スツと消えた。

「皐月？ だいじょう……」

追い掛けてきた弥生と遊火が皐月に追い付くや、凄惨な状況に絶句した。

「い、いったい誰が？」

そう皐月に訊ねたが、ワナワナと肩を震わしている。

「ああの馬鹿…… 一体何考えてるのよ？」

今の皐月には怒りが先駆けており、二人の言葉が聞こえていない。

「私たちの仕事は妖怪を退治することが第一じゃない。罪を償わせ
ることでしょうが？ ねえ…… 信乃おおおおおおおっ！」

そう絶叫するや、皋月は崩れるように気を失った。

「阿弥陀警部。葬儀担当の会社を調べましたところ、連絡先はまったくの出鱈目でした」

恐らく用意した3人はその場凌ぎのアルバイトだろう。しかし、それを知る人物はもういない。

「雨音ちゃん？ どうして君はあの晩、お母さんを止めなかったんじゃない？」

拓蔵が衰弱している雨音にそう訊ねた。

「お父さん…… 悪いこといっぱいしたから…… お母さんが殺したの……」

「い、一体どういうことじゃ？」

佐々木刑事がそう雨音に問い掛ける。

「お父さん、警視庁に入ってから人が変わった。昔は正義感に溢れてて、みんなに慕われるカッコイイお父さんだった…… でも、犯人が捕まらなかつたら、成績に影響するっていつて……」

「まさか、冤罪をしていたというのか？」

「お父さん、犯人逮捕には限度があるって、ヤクザを使って、要らない組員を犯人にしたの。勿論抵抗はする。でもヤクザというだけで犯人にされていた」

雨音は弱々しく説明する。

「でもそんな事したら…… いや、先輩だから出来たんじゃ」

「私たちは組織という仕組みだからでしょうかね？ 京本警視長だから出来たんでしょうな……」

「そんなにまでして、何を得たかったんじゃ？」

拓蔵は顔を歪めた。頭の中では今までであった京本福介との思い出が走馬灯のように蘇ってくる。

「雨音ちゃんは死体が棺の中に入っていたことを知らなかったのか？」

「停電した時、お母さんが動かないでっついていって」
「なんとも純粹な子だと拓蔵と阿弥陀警部は苦笑いを浮かべた。

「阿弥陀警部っ！」

一人の警官がそう言いながら客間へと入ってきた。ダンボールを抱えている。

「きよ、京本りつの部屋から、こ、こんなものが」
「そう云うや、警官は雨音を見やった。その表情はまるで拒んでい
るようにも見える。」

「一体何が？」

阿弥陀警部が中を確認するや、顔を歪ませた。

「何が入って……」

「見るなああああああつ！ 見ちゃダメだ！」
警官がそう云うや、雨音に中を見せない。

「こりゃ…… 確かに見せれんなあ」

拓蔵が中を見るや、拜む。
「どうして？ どうして見せてくれないの？ みいーちゃんなんで
しょっ？」

その言葉に拓蔵はおろか、その場にいた全員が凍りついた。

「雨音ちゃん？」

葉月がそう問い掛ける。誰一人、中に入っているのは猫だと云っ

ていない。が、まるで雨音は聞く耳を持たないようにダンボールの中を見た。

「なあんだ…… ここにいた？ ほら…… ご飯だよ……」
そう云いながら、それを抱きかかえるや、ボロボロと屍体は毀れ落ちていく。

腐り崩れた顔、爪さえ残っていない足。折られた骨は皮を突き刺している。それは誰もが恐怖するには十分なほどだった。

「みいーちゃん…… みいーちゃん……」

雨音はまるでただ撫でているだけ。が、その眼はまるで暗く、精気を感じることは出来なかった。

事件が解決してから、一両日経った後だった。

「拓蔵？」

縁側に座っている拓蔵に瑠璃が声を掛ける。が、拓蔵は何か考え込んでいるのか、それに気付いていない。

「深々と何を考えているんです？」

痺れを切らした瑠璃が上がり込み、うしろからそれを見るや、

「なるほど…… さすがにそれは捨てられませんね？」

そう云いながら、瑠璃は目を細めた。それはまるで、子供を見守る母親のような暖かい目だった。

「瑠璃さんや、二人は…… 本当に死んだんじやろうかね？」

拓蔵がそう尋ねる。が、瑠璃はその返答に途惑っていた。

そして、物悲しそうに片腕を握り締める。

「地藏菩薩であるわたしですらわからないんです…… 健介と、あなたの娘である遼子が生きているのか、はたまた死んでいるのか……」

瑠璃が申し訳ないように顔を歪ませた。

「あの事故は車に乗っていた全員が死んでいたと云われても、そうなのかと納得してしまうほどの大惨事だった。が、弥生たちはわしのもとに帰ってきた…… あなたの力で」

「あの子らを賽の河原で見掛けた時、どうして死んでいないのに、あそこにいたのかと思っただので。死んでいない人間を露世に戻すのは道理だと思いますが？」

「でも、あの子達が賽の河原にいたということは、親であるふたりが死んでいない何よりの証拠じゃないんですか？」

そう拓蔵が瑠璃に訊ねた。

賽の河原とは三途の川の川原を云う。

親より先に死んだ子供が石を積み上げ、その罪を償う場所。

そして瑠璃　閻魔王は、その場にいる子供を助けると伝えられている。

「そのことを皐月は覚えていないのでしょうか？」

「覚えてないほうがいいでしょ。これはわしらだけが覚えておればいいんです」

ほんとうにそうなのだろうかと瑠璃は考えていた。

拓蔵の意思とは関係なしに、まるでそんな遠くない未来、皐月がすべての記憶を思い出す。

瑠璃はそんな気がしてならなかった。

それから一週間経ち、阿弥陀警部と大宮巡査が報告に来ていた。

「雨音ちゃんは？」

葉月がそう尋ねると、大宮巡査は入院後、施設に預けられると説明した。

母親と飼い猫であるみを一辺に失い、その精神状態は危険と判断してのことである。

「京本りつは金成知信と不倫していたようです」

「不倫？」

「ええ。京本福介を殺したのも、恐らく彼が邪魔になったんでしょ
うね」

そう聞かされ、拓蔵は少しばかり顔を歪ませた。

「それと金成知信の死体の検死結果ですが、死因は毒殺。梵鐘の中に死体を隠していたものと推測されます。その犯人は小坊主ら全員でした…… まあ、彼らの気持ちを考えれば、わからないわけでもないですが」

阿弥陀警部がそう云うや、大宮巡査を見やった。

「彼らは金成知信によく肢体しだいを求められていたようです。拒んでも、拒んでも……」

「さすがに、三次元でそつちの趣味はないんだけど？」

弥生がそう云う。

「“稚児”というのは武家や寺などにおいて、主の男色だんじきの相手として囲われる少年という意味もあるからのう」

「まったく、あれだけの美男子を揃えていたのもそれが理由でしょうな」

阿弥陀警部も弥生と同じく、金成知信の心境には理解できなかった。

「ねえ、爺様？　今回は何も出来なかつたけど……」

恐らくあの晩のことだろう。

「そう云えば、臯月さんの姿がないですね？」

大宮巡査が居間を見渡しながら訊ねた。

「よほど齒痒いんでしょうね。どうしてあんなことをしたのかという理由を知ってる以上、口を出すことができない」

弥生は今日に限ってはあまり臯月に話しかけないでほしいと、阿弥陀警部と大宮巡査に釘を刺した。

薄暗い本堂の中、臯月は袴姿のまま、大の字になって横たわっていた。

天井には金色に輝く稲穂の絵があり、三姉妹たちはその絵が幼い頃から好きだった。

皇月は何かを考えるとき、決まってジッと見つめながら、答えを探っていた。

出てくるはずのない答えを延々と……

「閻獄第三條、自らの位を悪用し、男色をしたものは『衆合地獄・多苦惱処』へと連行し」

これは金成知信への罪状……

「閻獄第二條、己が欲望で、夫を殺し、その死体を隠し盗んだものは『黒縄地獄』へと連行する」

これは京本りつへの罪状である。

本来ならば、あの晩するはずだったのだが、京本りつを切り殺した影のせいで出来なくなった。

「あんたが、どうして妖を怨んでいるのかを知ってるけど……私たちが執行人にとって、公私混同は御法度でしょ？」

皇月はそのものの思いに、ただただ齒痒さだけが残っていた。

捌・餓鬼（後書き）

第五話終了です。今回は色々と伏線を貼ってます。

【番外編】三姉妹の極当たり前の一日【前編】（前書き）

場繋ぎのおまけシナリオですw

【番外編】三姉妹の極当たり前の一日【前編】

朝顔の葉っぱの先に朝露がたまり、雨上がりの水溜まりに落ちる。夏という事もあってか、朝の6時には既に日が昇っている。

そんな中、稲妻神社の本堂には、長襦袢姿の皐月が正座をしていた。

「掛巻も恐き稻荷大神の大前に
恐み恐みも白く
朝に夕に勤み務る家の産業を
緩事無く怠事無く 彌奨め奨め賜ひ
彌助に助賜ひて 家門高く令吹興賜ひ
堅磐に常磐に命長く 子孫の八十連屬に至まで
茂し八桑枝の如く 令立槃賜ひ
家にも身にも枉神の枉事不令有
過犯す事の有むをば
神直日大直日に見直聞直座て
夜の守日の守に守幸へ賜へと
恐み恐みも白す」

稲妻神社に祭られている倉稻魂神、通称「稻荷神」の祝詞をうたいながら、皐月は精神を集中させていた。
皐月の護神は大黒天、といっても七福神で連想される温厚なものではなく、元々のインドの神としての摩訶迦羅である。

スツと立ち上がり、両手に竹刀を持ち、呪詛を謳う。

「吾神殿に祭られし大黒の業よ！ 今ばかり我に剛の許しを！」
すると竹刀は何時の間にか、真剣へと変わっていき、皐月は巻き藁を×字に切り刻む。

「うん。今日も調子いいわ」と満足気な表情を浮かべながら、その切り口を見た。切り口の何と綺麗なものか、バラバラになった藁の切り口は修復出来るのではないかと云いたくなるほどに微塵もズレがなかった。

「今日は気持ちよく起きれたし、これで事件とかがなかったらもつといいんだけどね」

「皐月？ 朝ご飯できたわよ？」

力を解き、背伸びをしている皐月に、裏口から弥生の声が聞こえた。

稲妻神社の朝は基本的に朝6時半だった。先に起きている皐月と弥生に比べて、葉月と神主である拓蔵が眠そうに目を擦っていた。未だ八歳の葉月はまあまだわかるとして、問題は拓蔵の方だった。

「爺様？ 昨日は一体何時くらいまで飲んでたんですか？」

弥生が“笑顔”でそう問い質すと、拓蔵は軽く咳払いをした。

「さて、今日もこうやって、皆が揃って朝餉あさけを食べられるのも、偏ひとえに稲荷神いなりのかみの御加護があつての賜物。弥生、皐月、葉月……」

拓蔵がそう云うや、三姉妹は少しばかり座る位置を後ろにずらすや、手を合わせ黙祷した。

『 たなつもの 百ももの木草きぐさも天照あまてらす 日ひの大神おおがみの恵めぐみえてこそ』

そう云うや、さっきまでの静けさは何処へやら、本来静かに食べるものなのだが、そんなの知った事かと云わんばかりに朝っぱらから喧しい。

『 朝宵に物くふごとに豊受の 神の恵みを思へ世の人』
と食事を終える短歌を詠い、三姉妹はそれぞれの部屋へと戻っていく。

「それじゃ行ってくるねえ！」

「おう、確り勉強してこい！」
拓蔵に見送られながら、三姉妹は神社を後にした。

駅前に差し掛かると、弥生と別れ、皐月が通っている中学と葉月が通っている小学校までは殆ど途中まで一緒のため、皐月の友人たちは弥生に会うことよりも、寧ろ葉月に会うことの方が多い。

「あ、葉月ちゃん、おはよお！」

皐月の友人である飯塚萌音が二人に気付き、近付いていく。

「おはようございます」

「いやあ、もう、可愛い」

葉月は極々当たり前に挨拶しているだけなのだが、深々と頭を下げたのが可愛かったのだらう。萌音は悶えるように、顔を紅潮させる。

「ほんと、皐月とは大違いだわ」

「それ、どういう意味よ？」

と云いながらも、云ったところでもどうにもならないので、それ以上は云わなかった。

葉月が通っている小学校が見えてくると、皐月と葉月はその近くで別れた。

そして皐月も自分の通っている中学の校門を潜っていった。

「おはようございます」

時間が朝の8時くらいになると、次々と稲妻神社で働いている社員数名が社務所の方へと入っていく。

タイムカードにカードが押されていき、女性と男性別れて更衣室へ

と入っていく。
女性は基本的に巫女と事務職に分かれ、男性は拓蔵の手伝いに扮する。

本堂に全員が集まったのを確認して、神主である拓蔵が稻荷神への祝詞を謳う。

「それじゃ、今日も一日よろしくお願いします」

拓蔵が深々と頭を下げると、職員たちも頭を下げた。

平日の朝は決まって暇なのだが、台風が季節が近付くと、お参りに来る百姓が多い。

それもそうだろう。せっかく作った農作物をボロボロにされたんでは、たまったものじゃない。

この稻妻神社は五穀の神が祭られているため、そう云った願い事が殆どだった。

後はまあ 巫女の写真を撮りにくるのが来るくらいだ。

丁度、お昼前のことだった。

「神主さんはご在宅かな？」

境内に落ちていたゴミを拾っている巫女に阿弥陀警部が拓蔵の所在を訊ねにきた。

「神主さまでしたら、社務所の方に」

巫女も阿弥陀警部が警察の人間だと知っており、何の躊躇いもなく教えた。

阿弥陀警部は帽子を脱ぎ、頭を下げた。そして、そのまま社務所の方へと歩こうとした時だった。

「あ、頭は下げて行ってくださいね。神様の通り道ですから」

ちようど本堂と鳥居を繋ぐ道を跨ぐ形またで通ろうとしていた阿弥陀警部を巫女が止めた。

「あ、はははっ！　そうですね」
笑いながら、阿弥陀警部は巫女に言われたとおり、頭を下げながら、社務所へと向かった。

【番外編】三姉妹の極当たり前の一日【後編】

社務所の応対室に案内された阿弥陀警部の正面に、拓蔵が座っている。阿弥陀警部の横には大宮巡查の姿があつた。

大宮巡查は今まで居間の方に案内されていた為、社務所はおるか、応対室に入ったことは無い。

さつきから部屋の中をキョロキョロと落ち着きのない様子だった。

「で？ 君が此処に来たということは、また事件かね？」

「ええ。梅原という男性が自室で死んでいるのが妻によって発見されましたね。死因は過労死なんですけどね。ただその梅原というのが為体ていたいな男で、よく遅刻や仕事をサボったりしてたらしいんですよ。阿弥陀警部の違和感は仕事を真面目にやっていない人間が、過労死をしたとは考え難いことだろう。」

「それで、わしのところに来たと？」

「……はい。真面目でもない人間が、過労死で死ぬとは思えませんしね。それに妻の話ですと、熱中するほどの趣味も無かつたそうです」

過労死とはその言葉どおり、長時間働いたり、不規則な勤務等々によつて蓄積された疲れやストレスからなる、脳疾患や心臓疾患を起こし死亡することである。

本来働いている人間にさす言葉ではあるが、たとえにマラソンなどのスポーツでも無理を通して行つていたとしても、なる可能性がある。

「会社はその事に対して何を？」

「いえ、会社は特に強いことはしていませんよ。休憩も入れていたようです。ただ、その休憩時間ですら、梅原は働い

ていたようです」

「それを止める人間はいなかったのかね？」

「何人かは止めていたようですが、止めたと思った数秒後には忙しく動き回っていたようですよ」

「動き回る？」

「梅原が勤めているのが運搬会社なんですよ。作業2時間置きに30分の休憩を挟んでいたようです」

運搬会社ということは、荷物等を運んだりして疲れも余程のものだろう。それにも拘らず、梅原という男は休みなしに働いての死亡ということになる。

「犯人は……いないでしょうね？」

「どういう事ですか？」

「人間の犯人はいないと思いますよ。梅原という男性が過剰に働いていたことを止めている人間が数人いると阿弥陀君はいいましたよね？ つまり、止めている人間がいたことや会社自体が休憩時間を入れていたということは……」

拓蔵の言葉に阿弥陀警部は、少しばかり考え、

「そういう妖怪がいるという事ですか？」

「じゃから、君はわしのところに来たんじゃろ？」

何でもお見通しと言われたような気がし、阿弥陀警部は苦笑いを浮かべた。

「人を過労死させる妖怪なんているんですか？」

大宮巡査の問い掛けに、拓蔵は本棚から一冊の本を取り出した。

「いそがし……」人間がこの妖怪に憑依されると、やたらに落ち着きがなくなるとされる。しかし不快な気分ではなく、忙しく動き回ることで、なぜか安心感に浸ることができ、逆におとなしくしていると、何か悪さをしているような気持ちになってしまうという”。

傍迷惑な妖怪じゃよ」

「つまり梅原はこの妖怪に表意されていたと？」

「可能性としてはおおいにあるじやろうな。特に今はお中元の時期で、運搬会社は書き入れ時じやる？」

要するに忙しい時期という事だ。

「問題はいそがしを退治する事より、会社から労災保険が妻に入るかということじやろうなあ」

「えっと？ それってどういう事ですか？」

「いそがしの仕業だったとしても、人から見れば会社が起こした過労死じやるう？」

云われてみれば確かに……と、阿弥陀警部と大宮巡査は思った。

「では退治はしてくれないと？」

「いや退治はするよ。君はそれをお願いに来たんじやるう？ 弥生たちが帰ってきたら、すぐに会社の方に行かせる。まあ、そんな無理な仕事じゃないじやるうな」

そう云われ、阿弥陀警部と大宮巡査は首を傾げた。

夕刻、帰ってきた三姉妹は阿弥陀警部の案内で、梅原が勤めている会社へとやってきた。

妖怪がいると聞かされたので、皐月は会社内、特に倉庫の方を警戒していた。

運搬会社で一番労を催すのは、云うまでもなく倉庫の方にある。

「何か感じる？」

弥生の問いに皐月は首を振った。実際には微かに感じてはいるのだが、余りにも幽かすかで、幽霊なのか、いそがしなのかという判断が誤りそうになっていた。

「消えかけるといったほうがいいかしらね？」

そう云った時、皐月の視線は非常口の方へと向けられていた。

「吾神殿に祭られし大黒の業よ！ 今ばかり我に剛の許しを！」
手に持っていた竹刀は真剣へと変わっていく。

「えつと…… 一応過労死で殺してるから…… 閻獄第3条、意図的に相手に労を強いたものは、等活地獄、衆病処へと連行する」
そう言い放ち、切っ先は微かに揺れた布へと放たれた。すぐさま弥生はお札をその布に投げるつけるや、布は見る見るうちに燃え尽き、幽かに断末魔が聞こえた。

「はい。お仕事完了。さあてと、さっさと帰ってご飯食べよう」
皐月は背伸びするや、阿弥陀警部の車に乗った。

「えつと？ 私は彼女たちを送りますから、大宮君は後のことをお願いしますね」
後のこととは、会社や遺族に対しての説明だろう。

後日、いそがしの仕業だったとしても、結局は会社から労災保険が妻に渡された。

【番外編】三姉妹の極当たり前の一日【後編】（後書き）

元ネタは鬼太郎（たしか第5期）に出てきたいそがしです。

杏・恋文

「えつと……和訳が『私たちはバレーボールをして楽しんだ』だから、『We enjoyed (playing) volleyball.』?」

物静かな図書室の中で、ノートにシャーペンを書き走らせる音が小さく響きわたる。日曜日の昼下がりに、皐月は友人たちと金曜に出ていた宿題を済ませている最中だった。

一人は飯塚萌音、もう一人は『大野まどか』という。

今神社では拓蔵の知り合いである百姓の娘夫婦が神前結婚式を行なっており、拓蔵は神への祝詞のりとを誦うたい、弥生は新郎新婦への御神酒おみきを捧げる巫女としてそれに参加している。葉月はその会場の隅っこで大人しくしていた。

普通ならば三、四十分くらいで式は終わるのだが、そこはやはり蟒蛇うわばみである拓蔵の知り合いである。式が終わったら終わったで、他に予定もないしと、祝賀会を始めたらしいと、先ほど弥生からのメールで知った。

「それで弥生さんなんて？」

「結納ゆいのうを済ませた途端、新婦側の親族が持参してきた酒で宴会してらっつて」

皐月は呆れた表情で云う。

「弥生さんと葉月ちゃん大丈夫かしらね？」

「二人ともしっかりしてるから大丈夫でしょ？」

「皐月は……宿題残ってたから参加しなかったんだっけ？」

それもあるのだが、結婚式を行なった娘の家が酒蔵であることを

三姉妹は知っていた。

そして拓蔵が二つ返事で神前結婚式を了承したのは、酒が飲みただけだと勘づいていた。

「まあ、爺様も少しばかり手加減するでしょ？」

そう言いながら臯月は席を外した。

「どこ行くの？」

「ん？ ちょっとトイレ」

そう伝えるや、臯月は図書室を出た。

ものの5分もしないうちに用を済ませ、臯月は友人のところへと戻ろうとした時だった。

ラウンジに髪の毛の長い女性が立っており、ジッと電子掲示板を眺めている。

施設は図書室の他に、会議室や大小のホール。楽器の練習ブースなどといった総合貸スペースがあり、電子掲示板にはその部屋が使用中か否かと使用時間が掲示されている。

女性は手紙のようなものをジッと見つめると同時に、自分の腕時計と掲示板を交互に見やっている。

一二分ほど女性を観察していると、女性はその場を立ち去って行き、図書室の方へと入っていった。

少しばかり首を傾げながら、臯月は友人たちのもとへと戻っていった。

「おそいよっ？」

遅いと言われても、十分も経っていない。

「んじゃ、続きしよ……ってあれ？」

まどかが鞆の中を探りながら、不満そうな表情を浮かべた。

「どうかした？」

「いや、数学のノートはあるんだけど、教科書忘れてるみたいなのよ？」

まどかが鞆をひっくり返すかのように、中を探っている。「宿題どこだったっけ？」と尋ねながら、

「確か一次関数だったと思うけど　あ、やっぱり私も忘れてるわ」と萌音も同様に鞆の中を探る。

友人二人がそう言っている間、皐月は席を外し、数学の解説書が置かれている本棚の方へと行った。つまり皐月も教科書を忘れていた。

そもそも急に勉強会を始めることにしたので、忘れ物が結構多い。まあ図書館にしたのは、教科書が無くても解説書があるので大丈夫だろうという理由だった。

「あれ？」

解説書を取りに行く途中、ほかにも個別した机で勉強しているのがちらほらといるのだが、その中に先ほど見かけた女性が本を読んでいるのが見えた。

女性が呼んでいるのが一目で恋愛小説だとわかるや、皐月は少しばかり嫌な表情を浮かべた。

別に小説自体が嫌いというわけではなく、甘ったるい話はあまり好きじゃないだけである。

気にしないで戻ろうとしたとき、ふと女性の手元に大量の手紙が

置いてあるのが目に見えた。

可愛らしいハートのシールで封を閉じられており、それらすべて開かれていない状態だった。

そうになると、自分にはなく相手に送るものなのだろうか？と臆月は少しばかり考えながらも、友人たちのもとへと戻っていった。

「あ…… あの小説って」

勉強を再開しようとしたとき、臆月は何かを思い出すように呟いた。

「ん？ どうかした？」

「いや、なんでもない……」

臆月はそう友人二人に言った。

臆月は先程の女性が読んでいた本の内容を、うつすらとではあるがTVで話題になっていたのを思い出したのだ。

内容は現代の高校生がメールではなく、手紙だけで交際するというもので、まあ在り来たりと言えは在り来たりなのだが、今はメールで告白をするという反発からか、そういうアナログなところが逆に小さなブームを与えているという。

臆月も一度だけだが、その小説を立ち読みとはいえ興味本位で、パラパラっと読んだことがあった。

そもそも臆月は異性を本気で好きになつたことがないので、本当の恋愛というものは知らない。

だいたい恋愛というのは十人十色千差万別である。

物語の主人公である高校生の女の子が、顔も知らない男と手紙だけでやりとりをしている。

当然途中から直接会わないかという件くだりになるのだが、男はそれを頑なに拒んだ。

痺れを切らした主人公は住所を頼りに男性のもとへと出向いた。しかし男性は既に結婚しており、しかも自分の担任教師だったというオチである。

メールで連絡を取り合うきょうこん昨今、相手の住所なんて覚えてないものであり、年賀の挨拶なんてメールひとつで十分といっている人間までいるものだ。

「うし、終わった」

皐月たちは宿題を終え、机の上に出していたノートなどを片付け始めた。

「んじゃ、解説書戻してくるわね」

皐月は本棚からとってきていた本を束ね、本棚へと持っていく。

その途中、先程の女性をもう一度一瞥する。あれから1時間ほど経っているのだが、女性はなんどもその小説を読んでいた。

それならいっそのこと借りればいいのにと、皐月はそう頭の中で呟いた。

式・傍観者

「眠そうですね？ 阿弥陀警部」

「んっ？ ふああ、そりゃそうですね。いきなり電話で起こされたんですから。君はまだ若いからいいですけど、年寄りには目覚めが遅いんですよ？」

阿弥陀警部はそう話しながらも頻りに欠伸あぐひをしている。

今現在、時刻は午前2時を過ぎており、すっかり草木も眠る丑三つ時である。

阿弥陀警部、もとい大宮巡査が自分たち警察以外に人気がない駅のホームに来たのは、駅員が車内で眠っている乗客を確認し起こしていた最中、不審な乗客があり、声をかけたところ、コロンと倒れたという。

最初は寝ているのだらうと思い、体を揺さぶったらしいが、それでも反応せず、あたりを見るや、乗客の腹部から血が溢れていたという通報があったのだ。

「被害者は笹川直介ささかわなおすけ、21歳。職業は大学生ですね」

被害者の財布から学生証が出てくるや、物取りの犯行ではないとわかる。終電で最も多い犯罪が物取りだからである。

「車掌が点検をしていた最中のことみたいですよ」

「そりゃ、誰だって寝てると思いますよね。一見だけじゃ……」

阿弥陀警部はそう言いながら、被害者の腹部を見やった。

「鑑識で調べるしかないでしょうけど、凶器はナイフで間違いないでしょうね。それと容疑者は既にそれを処分している」

それはどうしてかと大宮巡査は訊ねた。

「降りた後、ゴミと一緒に捨てればいいでしょ？ 始発から終電までの大凡20時間のうちに、何人の人がゴミ箱に捨てたかわかりませんが、逆に言えば、持って帰るより処分する方を私は選びますよ」

阿弥陀警部はそう云うや、辺りを調べていた警官を手招きし、ゴミ箱を調べるように伝えた。

ホーム内には3つのゴミ箱がある。

それこそ自動販売機のアキカン入れも徹底的に調べた。

燃えるゴミの蓋を開けると、鼻を曲げるほどの悪臭が漂ってきた。どうやら酔っ払いがそこで吐いたようだ。

「これも調べるんですか？」

「私だって嫌ですけど ああ……自分で言っというてなんですけど、言わなきゃよかったと後悔してますよ」

そう云いながら、阿弥陀警部は肩を落とした。

黒いビニールの上に、ホームにあったゴミ箱すべてをひっくり返し、その中から凶器をさがすわけだが、それよりも悪臭の方に気が散りそうになっている。

「っいつて……」

探し始めて20分頃、警官の一人が小さな悲鳴を挙げ、指先を啜えた。

「どうした？」

「いや、なんか指切ったみたいだ」

ということは凶器が入っているということになる。

「皆さん気を付けてくださいよ。刃が剥き出し状態みたいですからね」

そう忠告し、警官らは再度調べ始めた。

小一時間ほど調べると、漸く血が付着したナイフが見つかった。先ほど警官が怪我をしたが、咄嗟に離していたので付着はしていないようだ。

「鑑識に回しといて、それと監視カメラで不審な人物はいないかも確認しないといけませんね」

阿弥陀警部はそう云うや、少しばかり考え込んだ。

「どうかしたんですか？」

「いや、今回は彼女たちの力を借りなくてもいいんじゃないかと思えますね。今んところ人間で出来ることですから」

大宮巡査はその言葉に首を傾げた。

「いや、今までだって人間でも出来た犯行なんですよ。ただ、それが狂気の沙汰と云えるものが多かったですからね」

帝王切開やら、首切りやらという事だろう。

確かに人間に出来ないことではないが、刺殺に比べるととなると、狂気の沙汰というのは理にかなっている。

「ただ…… 証言する人間がいないでしょうね？」

「どうしてですか？ 確か被害者が乗っていた車両には二三人ほど乗客がいたと思いますが？」

「終電だからですよ。真面目なサラリーマンがこんな午前様までいるとは思えませんし、大抵スナックやキャバクラで呑んだくれて帰ってくるパターンでしょ？ 睡魔に負けて眠りこけるのがオチですよ？」

云われてみれば確かに。車掌も被害者を発見した時、眠っている乗客を起こし廻っていたとも言っている。

つまり駅に着いた際、車掌に会わずに降りた人物ということになる。

それも監視カメラでわかるものなのだが……

それから小一時間ほど監視カメラに映ったホールを隈なく、そこそ穴が空くほど見て調べたが、

「可笑的いですよね？」

阿弥陀警部がボソリと呟いた。

映像は終電がホームに着いてからを流しているのだが、被害者が乗っていた車両から人っ子一人出てきやしない。

「殺した後、ほかの車両から出てきたということじゃないですか？」
言われれば確かにそうなるのだが、それでも20分以上見ても、その車両からは誰も出てこないことに違和感を感じる。

「阿弥陀警部、自分で言ってたじゃないですか。乗客が乗っていても眠っていて気付いていない可能性があるって」

つまり犯人は被害者を殺害した後、他の車両に移っていたとしても気付かれなかったということになる。

「逆にそこが怪しいんですよ。殺されようとしている人間が悲鳴のひとつも挙げないってのが」

被害者は俯いた状態で車掌に声を掛けられている。

「それに車両内に血溜まりがあったようですしね」

「そうになると、犯人は被害者を眠らせた状態で殺したということになりますかね？」

一応鑑識と検死の結果を見なければわからないが、一応明日、念のために葉月に霊視してもらおうと、阿弥陀警部は被害者の写真を一枚くすねた。

参・咳気(前書き)

がいき 咳気【

「がいけ」とも〕せきをすること。また、せきが出る症状。風邪。

参・咳気

翌日、阿弥陀警部と大宮巡査は稲妻神社へと訪れていた。用件は葉月に被害者の写真を霊視してもらうことである。

「えっと…… 大丈夫ですか？」

大宮巡査が申し訳ないのと心配しているといった感じの複雑な表情を浮かべ、葉月に訊ねた。

「ぜえ…… ぜえ……」

葉月は夏も近いというのに丹前を着ており、眼はトローンとし、顔は紅潮していた。息も荒く、額には冷却ジェルシートを貼っている。

どこからどう見ても健康とは言い難い。

「すみません。葉月、昨夜ゆうぐからちよつと熱出してて、最初は三十七度四分だったんですけど、今朝になって急に熱が上がったんですよ」
弥生はそう云いながら、葉月の襟元から脇に挟んでいた体温計を取り出した。ちょうど電子音が鳴っていたからだ。

「失礼ですけど、いま熱は？」

「三十九度七分ですね」

それを聞くや、阿弥陀警部と大宮巡査は冷や汗を垂らした。

「一応後で病院に行って診てもらいますけど、この子一度熱を出す
と一週間くらい拗こじらせるんですよ。多分インフルエンザではない
と思いますけどね」

「あれ？ インフルエンザって冬になるんじゃないんですか？」

「多いのがその時期なだけで、インフルエンザウイルス自体に季節

はないんですよ。風邪と違うのはウイルスや症状の違いみたいですね」

インフルエンザウイルスの活動条件は温度20度前後、湿度20%前後が最も生存に適した環境と言われている。つまりそれを適しているのが冬というだけである。

閉め切った大きな箱の中を湿度20%、温度20度に設定して、インフルエンザウイルスを吹き込み、六時間後に調べると70%近くのウイルスが生き残っているが、温度は変えず、湿度を50%以上に上げるや、3%のウイルスしか生き残らない。次に湿度は20%にして温度を32度にするると17%に減っているという研究報告まである。

つまり大気中にいるインフルエンザウイルスにとって、冬の時期が一番活動しやすいということだ。

また風邪は熱が三十八度以上にはならないのと、インフルエンザは急激に高熱になるので、以外にも見分けが付けやすい。

「すまんな阿弥陀警部。見ての通り、葉月がこの状態じゃ、碌ろくに靈視も出来まいて」

拓蔵にそう云われ、阿弥陀警部は苦笑いを浮かべ、肩を落とした。

「だけど、犯人は被害者を殺した後、堂々《どうどう》と車両から降りてるんですよ？」

弥生の云う通り、不審な人物がいない。つまり犯人はこれ見よがしに堂々と電車から降りたということになる。

「乗客の殆どが眠っていたので、覚えていないというのが大抵でしたね」

「そうになると、やっぱり犯人は被害者を眠らせたあとに殺したとい

うことに」

大宮巡査がそう言うと、葉月が何処かに行こうと思ひ、立ち上がろうとしたのだろう。クラッと立ち眩^{くら}みをし、その場に倒れた。

「葉月ちゃん？」

葉月は意識を保ちながら、大宮巡査の方を見やった。

「やっぱり…… 可笑しいわね？」

そう云いながら、弥生は一度深く深呼吸をし、^{まぶた}瞼を閉じた。

その行動に大宮巡査は首を傾げる。

「大丈夫よ…… 怖くないからね…… あなたはもうここにはいけないの…… ね？ いい子だから妹を解放してくれる？」

まるで子供に言い聞かせているような口調で話し始める。

そしてどこからともなく御札を取り出し、葉月の喉元に付けた。

すると徐々にはあるが、先ほど辛そうだった息遣いが落ち着いていく。

「一体何を？」

「大宮巡査はこの子がよく幽霊に取り憑かれやすいことはご存知ですよね？」

そう云われ、大宮巡査は頷いた。

「この子昨日、神前結婚式に参加したあと、遊びに行つて、多分その時に連れて来ちゃったんだと思います」

「つまり、その幽霊がインフルエンザで死んでいたということですか？」

「確証はないですけど、恐らくそうだと思います。葉月は死者の死ぬ前後の声や症状を自分の体に取り込まされることがありますから、こまされるということは、自分の意思と関係なしということになる。」

「弥生さんたち三姉妹の中で辛い思いしてるのって、葉月ちゃんな

のかな？」

「どうでしょうね？　だけど臯月の方が一番辛いと思いますよ」
その言葉に大宮巡査は小さく声を挙げた。

「臯月は幽霊や力の弱い妖怪に対して、それこそ何も見えませんし、何も感じないんです」

「　感じない？」

「私の式神である、遊火は鬼火の一種なんですけど、人に危害を与えない大人しい妖怪なんです。力もそんなにないし、私たちに敵意があるわけじゃない。だから臯月には見えません」

「えっと？　どういうことですか？」

「つまり、どんなに凶暴な妖怪でも力が霞かすみ奪かかっていたら、気付くものも気付かないんですよ……」

弥生は自分にも妖怪を退治するほどの力があればと続けた。

「阿弥陀警部。今日は失礼しましょう」

「おや、どうかしたんですかな？」

「もう一度、ホームの防犯カメラに不審な人物が映っていないか調べらるんですよ」

阿弥陀警部がどうしてと訊く前に、大宮巡査は居間を出た。阿弥陀警部も慌てて後を追った。

「お兄ちゃん、何か気が付いたのかな？」

葉月が意識を朦朧とさせながら、弥生に問いかける。

「わからないけど……　でも、今度来るときのために今日は早く休もうね」

「うん。あの男の子……　どうして死んだのかわからなかったみたい」

そう云いながら、葉月は安心したのか、弥生の膝を枕に深い眠り

についた。

葉月に取り憑いていたのは、インフルエンザが原因で亡くなった少年だった。

一昔前に処方薬であるタミフルをのんだ副作用で少年が奇っ怪な行動をとり自殺したというニュースが話題になった。その事故で死んだ少年とは違うが、同様なことが何件もあり、そのうちの一人だったのだろう。

肆・戯(前書き)

そばえ そばへ 【戯へ】

〔動詞「そばふ」の連用形から〕

(1) たわむれること。あまえること。

(2) 「日照雨」とも書く「ある所だけに降っている雨。かたしぐれ。

「嵐吹く時雨の雨の にはせきの雄波の立つ空もなしノ万代集」

肆・戯

翌々日。稲妻神社に阿弥陀警部と大宮巡查が顔を出した。

そして居間に通されるや、書類の入ったバツクから2枚の写真を取り出した。

「これが先日被害者が乗った終電がホームに着いた直後の写真、もう一枚は着いてから10分ほど経って、車掌や駅員が寝ている乗客を起こし廻っていた時の写真です」

二枚の写真はどちらも乗客が疎らではあるが降りている。

「だけど、映像には被害者が乗っていた車両にだけ人は降りてこなかった。まだその車両だけ人が乗っていて、駅員に起こされた直後、被害者の死体が発見されています」

「で、念のため被害者が乗っていた電車の出発から終着までの駅全部にある防犯カメラを隈なく見たら面白いことが分かったんですよ」

と云うと？と拓蔵は訊ねた。

「被害者が降り出した駅が終電の三つ前だったんですよ。その間、一度だけ車両から降りた人間がいたんです」

そう云うや、阿弥陀警部は写真を一枚取り出した。

「媛坂^{ひめさか}円香、二十歳。職業は大学生……奇しくも被害者と同じ大学に通っています。調べてみたら、降りた駅の近くに住んでいるみたいですね。その日サークル仲間と呑んだくれていたようです」

「それを証言する人は？」

「一応サークルの人達に確認を取ったら、最後までいたようです。それと彼女が座席に座っていたのを目撃している人物もいますし、

被害者からだいぶ離れた場所だったようです」

大宮巡査はそう云うや、もう一枚取り出した。

「もう一枚はその次の駅で降りた女性です」

「彼女が何を？」

写真を見るや、弥生が訊ねた。

「河瀬瞳美、二十歳。職業大学生……彼女も被害者と同じ大学に通っているみたいなんですよ」

同じ大学の人間が同じ電車線に乗っていること自体には珍しいことではないが、同じ時間帯を走っており、それが終電ともなれば、偶然とはいえ珍しいことである。

「ただ彼女は終着駅の前で降りてますし、被害者が乗っていた車両とは違うところから出ていますから、一応容疑からは外していいという上の見解なんですけどね……」

なんとも不満そうな表情で阿弥陀警部は言った。

「彼女たちがどこから乗り出しのかというのがわからないんですよ。終電ということもあってか、乗り出す人が多かったというのもありましてね」

「つまり、その中に紛れていた可能性もあれば、それより前に乗っていたということですか？」

弥生の問いに、大宮巡査は答えるように頷いた。

「被害者が乗り出したのは終着駅の三つ前。当然同じ駅から乗り出した人間が犯人と言えるでしょ？」

「ただ二人はどちらともその前の駅で降りてるんです。媛坂円香に至っては被害者が乗り出してから次の駅で降りているんです」

つまりはこういうことになる。

先ず被害者が乗り出した場所を視点Aとする。

そして終着駅までが三つなので、B・C・Dとなる。

Dが死体が発見された終着駅とする。

媛坂円香が降りた駅は被害者が乗り出して次の駅なのでB。

河瀬瞳美が降りた駅は終着駅より前になるのでCとなる。

被害者が乗っていた車両には二三人ほど乗客がいたが、その殆どは酔いや疲れで意識が朦朧としており、中の様子をはっきりと覚えていない。また違う車両にいた河瀬瞳美に対しても、同様の事が云えた。

つまりふたりがいつから乗っていたのかという根本的なものがないのだ。

「一応死亡推定時刻は午前1時前後。被害者が電車に乗り出してすぐみたいなんですよ……」

そうなると犯人は被害者がいつ乗ってくるのかということから知っていたということになる。

「その日、被害者は何を？」

「飲み会に参加してみたいですね。一応念の為に云っておきますが、媛坂円香とは違う店で飲んでいますし、それを証言する人もいましたよ」

そう話していると、剣道着を着た臯月が居間へと入ってくるや、阿弥陀警部と大宮巡査に会釈をし、厨房へと入っていく。冷蔵庫が開く音がし、コップに何かを注いでいる音がしだした。

「そういえば、被害者が殺された日って、雨降ってなかった？」

コップを持ったまま居間へと入ってきた臯月がそう云うや、

「でもそれ夜中のことだから……云われてみれば外に干してたあなたの剣道着、取り込んでたとき濡れてたわね？」

二人がそう会話すると、阿弥陀警部は違和感を感じていた。

「雨合羽ですか？ それに被ってたら顔なんてわかりませんね」

「媛坂円香が乗り出したのは、飲み会をした場所の近くからというのは間違いないんじゃないかな？」

そう拓蔵に言われ、阿弥陀警部は頷いた。

「ええ。被害者が乗り始めた駅よりひとつ前……」

「若い女子が、それこそ酔いが回り始めている状態で、一人電車に乗るかのう？ それに降りたのは被害者が乗り始めた次の駅じゃない？ 事実、駅は二つしか乗り合わせておらん。距離からしてそんなに離れておらんじゃろよ？ わしじゃったら電車ではなく、安全を考えてタクシーに乗るがな」

拓蔵にそう言われ、阿弥陀警部はすぐさま携帯で他の警官に確認を取るようにと命じた。

「あれ？ この人何処かで……」

皐月が一枚の写真を手取るや呟いた。その写真に写っているのは河瀬瞳美である。

「皐月ちゃん？ 思い出せない？」

「いや、そんなに前のことじゃないんですけど…… えっと……」

昨日は学校だったから違うし、一昨日は残ってた宿題を家でやってたし…… その前…… あっ！」

何かを思い出し、皐月は声を荒らげた。

「この人、日曜日に図書館で見かけた人だ」

「そう言えば、あんた宿題があるとか言って友達と図書館に行ってたわね？」

何処の図書館ですか？と大宮巡査は訊ねた。

「この町の町民図書館というか、総合施設なんですけど、そのときその人電子掲示板の前でジッと何かを見てたんです。時計も見てたから何か待ち合わせをしていたんだと」

阿弥陀警部は再び携帯を取り出し、一応その日、施設で何が催されてきたのかを調べさせた。

「そういえば、その人、妙な持ってました」

「妙なもの……ですか？」

「はい。封が切られていない手紙を何通か手元にもっていたんですが、手紙自体は珍しいものではないが、それが何通ともなり、それ全てが封を切られていないとなると、確かに妙である。」

「手紙かあ…… 臯月、今度図書館でその人を見かけたら、少しばかり謎解きを試してみてもどうかの？」

拓蔵の提案に臯月は首を傾げた。

「なあに、深くは考えんていい。わしはどちらかというところの方が嬉しいがの？」

臯月はどういふことなのかと疑問に思いながら、コップに入ったお茶を飲み干した。

伍・痴話

「大丈夫なんですか？ まだ病み上がりじゃ」

大宮巡査がそう云うが、葉月は小さく笑った。

そして、目を閉じ、一二度深呼吸するや、被害者の写った写真に手を乗せ、ゆっくりと摩った。

「喧嘩してる……」

その言葉に、阿弥陀警部と大宮巡査は驚いた声を挙げた。

「女の人が一方的に言ってる、男の人は何も言おうとしない。むしろ早く寝かせてくれって言ってる感じ」

「どういうことですか？ だって喧嘩していたということは車両に乗っていたほかの乗客が気にしないわけが……」

言葉を止め、阿弥陀警部は苦々しい表情を浮かべた。

乗客の誰一人それに気にならなかったのは、被害者と同様だったからである。他人事ひたひたはあくまで他人の事。自分のこと以外に関心はない。だからこそ誰一人気にも留めなかったということになる。

「それから……あれ？」

葉月は一二分ほど声を聞くことに集中したが、何も聞こえなかったと皆に伝えた。

「意識が途中でなくなっただ？」

臯月がそう訊くや、葉月は頷いた。死ぬより前に意識がなくなっただということは、眠った状態で殺されたということになる。

人間たとえ生きていても、寝ているとなれば意識は闇の中である。たとえるなら、起きたり起こされたりというのは、その闇からこちらへと意識が連れ戻されるということである。

「それで媛坂円香、河瀬瞳美のどちらかわかりますか？」

そう訊かれ、葉月は頭を振った。声は聞こえても姿までは見えな
い。

「ただ女の人は声を囁^からしてた」

「余程大きな声で喧嘩してたんでしょいな」

そう頭で整理する阿弥陀警部を尻目に、葉月は薄れる意識の中、
もう一度写真の霊視をする。

「どうかしたのかい？」

「さつき女の人がもう一人いたような気がしたから」

そう云うや、葉月は写真の上に掌を乗せた。

が、十秒もしないうちに卓袱台の上に凭れ倒れた。

大宮巡査が驚いて、葉月の様子を見やるが、葉月は寝息を立てて
いた。

「大宮くん？ さつき葉月さんが云ってた言葉……」

「もう一人いた……と云ってましたね」

「その、疑いがある女性二人と被害者は同じ大学という以外に接点
はないんですか？」

弥生にそう訊ねられ、大宮巡査は特に接点というものはないと説
明した。

被害者である笹川直介の家を搜索していた時だった。

机の下にゴミ箱があり、その中に大量の封書が無造作に捨てられ
ている。

一人暮らしということもあってか、携帯料金の他に、電気代・ガ
ス代・水道代など、支払いを済ませ必要なくなった請求書が入れら
れている。

「おや？」と阿弥陀警部はゴミ箱を漁り、一通の封筒を取り出した。

「手紙…… みたいですね」

そう誰に聞いているわけでもなく言った。

「中身は確認しないんですか？」

「いや、したいのは山々なんですけど、人としてプライベートに関わることはあまりねえ？ それに破れてますけど、結構可愛いシールで封を閉じてありますしね」

阿弥陀警部はそう云いながら、封筒の裏を見せた。確かに敗れてはいるが、可愛いクマやハートのシールが貼られている。

「えっと…… あれ？ 媛坂円香？」

手紙の送り主を確認すると、疑いが掛けられている媛坂円香が被害者に送ったものだった。

「警部、こちらには河瀬瞳美が送った封書が」

警官の一人がゴミ箱の中身を整理していた際に見つけたのだろう。それらは消印が殆ど交互に一日おきとなっている。

「ラブレターですかね？」

「さあ、中身はまだ確認してませんからまだなんとも……」
それにしても古風な方法だと阿弥陀警部は思った。

中身を確認してみると、予想通りラブレターのようだ。それこそ付き合ってくださいというものではなかったが、近況報告といった感じである。

「何か昔の人が恋人に送るような感じですね？」

しかし妙である。一応被害者や疑いのある二人を知っている学生に訊ねたが、付き合っていたどころか接点すらない。

彼らが知らないだけのかというところでもない。そもそもその三人は別々の学校から大学入学している。つまりどこかで会っていたというわけでもない。

一応同じ高校や予備校の学生にも訊ねたが接点はなかった。

陸・千尋（前書き）

ちひろ 1 【千尋】

「千尋」は、両手を左右に広げた長さ。中世には「ちひろ」「非常に深さ・長さという語。

阿弥陀警部と大宮巡査が三度稻妻神社に訪ねにきた。みたひ

被害者の家に疑いのある一人から手紙が届いていたことや、皐月が河瀬瞳美を見掛けたとき、施設で何を催されていたのかという報告だった。

「その日、施設は会社説明会で小ホールを、調理室や会議室も貸していたのですが、その殆どは予約参加だったようです」

「そうになると、皐月が見た河瀬瞳美は、参加するために掲示板を見ていたわけじゃないってことになるんじゃない？」

「それと念の為、図書館で彼女が読んでいた本ですが、図書館では貸出はしていないそうなんです」

大宮巡査にそう云われ、皐月は少しばかり驚く。

「ちょっと待って、態々図書館に持ってきて読んでたってことですか？」

「河瀬瞳美《本人》に確認を取ると、最近家の近くで行なっている工事の音が酷く、集中出来ないからだそうです」

用心のため河瀬瞳美の近辺を調べると、確かに家の近くで工事を行なっており、騒音の苦情が絶えないようだ。

「それに彼女が読んでいた本を見せてもらったんですけど、結構読んでるんでしょうね。ところどころ古くなってました」

それを聞いた皐月は首を傾げた。

自分はパラパラツとしかその本を読んではいないが、そんな何回も読むほどの名作だっただろうか、と疑問に思ったのだ。

甘ったるい恋愛小説というよりも、手紙を通じて互いを意識しあ

うという内容とベタではあるが、報われない恋愛なのだ。

一応改めて読んでみようと思えば古本屋に行ってみると、なんともまあ1年も経たない内に出版された本だったにも拘らず、ワゴンで売られていたのだ。ワゴンということは云ってしまえば売り捌いても利益がでないものである。要するに在庫処分だ。

ブームになったのは発売して一ヶ月の間だけ、火付け役は女子高生だったのだが、あきるのもまた早い。

アナログな手紙よりも近代的なメールの方が楽なのだろう。

「だけど、疑いのある二人が被害者に手紙を送ってたなんてね？」

「まあもらうだけで返してはいなかったようです。それと何通か封を切っていないものもありましたし、真ん中で乱暴に破り捨ててるものさえありました」

送る側としては聞きたくない扱いだ、もらう側としてはそこまですぐ執拗に届くと異常なほどである。

請求などの催促ならまだしも、他愛もない手紙である。嫌気がさして破り捨てたくもなろう。

「その事を二人には？」

「報告しました。が、そうですか……とあっけらかに返されましてね。恐らく彼女たちもそのことに気付いていたんでしょうな」

それこそ最初の方は返事をもらっていたようだ。が、ここ最近手紙の返事をもらっていないと云っていたという。

「それと手紙の内容ですが、おどろおどろしいものでしたよ」

そう云うや、大宮巡査が手紙を取り出し、卓袱台の上に置いた。

「うわっ……」

臯月と弥生が手紙を一瞥するやいなや、顔を歪め目を背けた。

手紙には赤い指紋がところどころに付着しており、さらには紙の端に血のようなものがついていた。

「紙で指を切るってのはよくあることだけど、こんなに血出ないでしょ？」

「……ってか、それより内容の方が……」

皐月は手紙の内容を目で追っていたが、途中から嫌気がさし始めていた。

『今日、直介さんを学内で見かけました。今日の昼食はカレーなんですね。いつも学食のカレーばかり食べてますが、体は大丈夫なんですか？ 学食のカレーなんて美味しくないですよ？ もっと美味しく、栄養のあるお弁当を毎日作りますよ。直介さんは唐揚げが好きでしたね？ 胡瓜は嫌いかな？ 好き嫌いしちやダメですよ。それと部屋の掃除もしないと、勉強するのはいいですけど、一人暮らしなんですから、下着変えられたんですね。前はトランクスタだったのに、ボクサーパンツを履いてらっしゃるなんて』

弥生は手紙の内容に違和感を感じる。それは阿弥陀警部や大宮巡查も同様だった。皐月もうつすらとではあるがそれに気付いた。

「これ…… 可笑しいですよ？ いつも学食でカレーを頼んでいるといのは、同じ大学だから知っていても可笑しくない。でも…… 好き嫌いとか直接言われないとわからないし、なにしろ！ 下着を変えたなんて第三者がわかるわけない！」

弥生がそう言うや、阿弥陀警部は小さく深呼吸した。

「弥生さんの云う通り、被害者の下着を彼女たちが知っている訳がない。いや、付き合ってもいない異性に下着の話なんてしないでしょ？」

「付き合っていないかと思えますけど？」

「そうじゃなくて、どちらにしても変えたなんて、見せていない以

上わからないでしょ？」

「ちよつと待つて…… それじゃ二人つて……」

臯月がそう云うや、大宮巡査が手帳を取り出し、臯月と弥生に挟んでいた写真を見せた。

それはマンシヨンのペランダが写されており、制服を着た警官が手を振っている。

「これは外から被害者の部屋を写した写真なんですよ。で、最近不審な人物がいないか調べたらですね？ 媛坂円香と河瀬瞳美が、一日交代でその場に立っていたんですよ。雨の日もずっとね……」

「しかもそれは朝早くから、一度大学に行き、大学が終わった後もその場にいたようです」

そう聞くや、拓蔵はボソリと呟いた。

「爺様、何？」

「ストーリーということか？」

「ええ。これだけ異常だと相当重症でしょうね？」

「でも、ストーリーって、相手を思うが余りに」

「その人にトラウマを植え付けてまで振り向かせますかね？」

阿弥陀警部にそう言われ、臯月は黙り込んだ。

「確かに二人が被害者に対して、意識を向けさせていたのなら、それはそれで宜しいことでしょう？ ですが、それが狂気ともなれば、話は別ですよ？」

「でも、人の恋愛って……」

「先程も言いましたが、意識を向けさせることに関しては関与しません。だけど二人は……被害者を殺してるんです」

それを聞くや、拓蔵は湖西主任に聞いたのかと訊ねた。

「ええ。ナイフに二人の指紋が付けられていました」

「ちょっと待って、単独による犯行じゃないってことですか？」
そう云われ、大宮巡査は手帳を見せた。

そこには腹部の絵が描かれており、ふたつ線がつけられていた。

「どちらも致命傷となった切り口です」

「傷口が二つって、それじゃやっぱり……でも、確か二人は終着
より前の駅に降りてるって」

「いや被害者は寝ていたのだ。そして葉月が聞いたのは被害者に対してではない。」

「痴話喧嘩と見せるため？」

「そもそも『痴話』とは愛しあう者どうしがたわむれてする話である。そこから内容が纏れ、『喧嘩』という助動詞に似た単語が付けられる。」

「だから、被害者は何も言わなかった……それとどの車両に乗るのかというのも分かっていましたようです。被害者は座席に座るとすぐに眠っていたと乗客が証言しましたし、その目の前で女二人が揉めているのも見たそうですよ」

それでも殺したとは言い難い。が、次の言葉に拓蔵は目を背けた。

「殺した時の状況を見ていないということじゃな？」

「ええ。被害者は眠っていましたからね。必然的に俯いていたことになる。それから、いつも壁際に座っていたらしいですから、刺されたのを誰も気付かなかったようですよ」

悲鳴すら挙げていないのだから、誰一人気付く訳がない。そして服の上だったことで、血が大量に吹き出すことがなかったのだ。

「それと被害者の部屋にこんなのも出てきましたよ」

「そう云うや、阿弥陀警部は消印の押されていない封筒を取り出し、その中身を出した。」

手紙なのだから、音はしない。だが、金属が当たる音が嫌なほど響きわたった。

「これって…… 剃刀？」

「もうひとつ、今度はカッターの折れた刃とか……」

それがいくつもあり、被害者は警察に通報しなかったのかと問うや、阿弥陀警部は首を横に降った。

「でも、犯罪でしょ？ 本人たちはそれくらい好きだって言ってるんだらうけど、被害者にとっては脅迫じゃないですか？」

臯月がそう云うや、大宮巡査は首を傾げた。

「臯月？ あんたどうかした？」

弥生も臯月の表情に理解出来なかった。

「わからないよ…… でも、好きな人にそれだけのことをするって、一歩間違えれば、自分の人生犠牲にしてるってことじゃない？」

臯月もどうして泣いているのかわからなかった。

「似てるんじゃない？ 姑獲鳥こぼりめの時と」

云われてみれば、あれも男女の纏れから殺人を犯している。そして臯月は、その原因となった間宮理恵の胎児に取り憑かれていたのだ。

だからこそ杜若のこともわかったし、戦闘時に助けてもらった恩がある。

「しかし、今回は違いますよ？ どちらも付き合ってますからね。そう云った時、阿弥陀警部の携帯が鳴った。

「はい。 つえ？ そうですか？」

一言二言話すと、携帯を切り、周りを見渡した。

「さきほど二人が自首したそうです。まあもともと深い事情聴取するつもりでしたしね」

阿弥陀警部がそう云うや、ポンツと手を鳴らした。

「これで事件は一件落着。みなさん嫌なことはすぐに忘れたないと身が持ちませんよ」

そう云うや、阿弥陀警部は拓蔵と三姉妹に一礼するや神社を出ていった。

取り残された大宮巡査は皐月の暗い表情が気になっていた。

「人を好きになるのって……人を傷つけてまで成立させるものなのかな？」

「っえ？」

「姑獲鳥となつた間宮理恵が、どうして私のお腹なかに子供を入れたのか、今となつてはわからない。でも、彼女がそうしたからこそ、私は田原先生のところまで診てもらった。彼女が先生に診てもらったこともそこで分かった。だけど彼女はそれが怖かった」

間宮理恵は妊娠十ヶ月とされていたが、実際は既に胎児は亡くなっていた。しかし、その現実を医師の口から言われるのが怖かったのだ。

「確かに怖いかもしれない……でも、怖いからこそ人を好きになるんじゃないかな？ 確かに容疑者の二人がしたことは理解出来ないし、行き過ぎていて。でも、人を好きになること自体を怖がっていたんじゃない。何も始まらない。一步踏み出すだけでもさうとう勇氣がいるんだよ」

大宮巡査がそう云うや、皐月の頭を撫でた。

「僕は最初君たちに会って、あの力を見たとき、正直怖かった。だけど、僕は君たちが人とは違う不思議な力をもつていようと、それは君たち個人の特徴だ。それを受け入れるし、これからも頼りにしている」

そう云われ、頭を押さえられている皐月は、上目遣いで大宮巡査

を睨んだ。 いや、睨みたくて睨んだのではない。どんな表情を浮かべればいいのかわからなかったのだ。

「怖くないんですか？」

「怖いさ。でも…… 僕なんかより君たちの方がもつと辛いことがわかったからね。相手の気持ちを知らないで、一方的な考えじゃ、相手に失礼だろ？」

大宮巡査が弥生の問いにそう答えた。

「ほんと不思議な人ですよ。 阿弥陀警部だって、今は普通に私たちに調査のお願いをしますけど、はじめのうちは遠避けてたんですよ？」

そう云われ、大宮巡査は首を傾げた。

「私たちの力が非現実すぎて、ついていけなかったんでしょうね。それと理解しようとしなかった。たぶん今も理解しようとしてませんよ」

「でも、警部は君たちの助けがあったから」

「力を利用するのと、助けてもらうのは違いますよ？」

そう弥生が云うや、大宮巡査は悪寒を感じた。

「今日は遅いですし、早くいかないと警部が待ってるんじゃないんですか？」

「あ、そうですね。それじゃ失礼します」

そう告げるや、大宮巡査は神社を出ていった。

漆・手紙

「臯月？ あんたに手紙届いてるわよ？」

学校から帰ってきた臯月に弥生が大声でそう言った。

「弥生お姉さま？ ちょっと」

うるさいと言おうとしたが、葉月は言葉を止めた。臯月は若干ではあるが耳が悪い。だからこそ居間の方から玄関に声をかける時、普通の声では聞こえないのだ。

「あ、手紙は部屋に置いてあるから」

そう云われ、臯月はそのまま自分の部屋へと入っていった。机を見やるや、その上に封筒が置かれている。

それを手に取り、消印と送り主が書かれていないことに違和感を感じる。が、宛名が臯月となっている。

意を決して、臯月は封筒を開けようとした時だった。

「あれ？ このシールって……」

封を閉じる部分に、くまのシールが貼られている。臯月は少しばかり思い出すや、そして半ば乱暴に封を切った。

「そうか、ずっと待ってたんだ…… だけど、笹川直介は姿を現さなかった」

臯月は手紙を何度も読み直した。

手紙にはこう記されている。

『拝啓、黒川臯月様。』

貴方のことは前々から存じておりました。いえ、この手紙を書いている本人はあなたの事を知りません。

ですが、閻魔様に私のような妖怪が悪いことをすれば罰するよう命をうけていることは知っております。

あの日、図書館であなたが私を見かけたとき、彼女はずっと手紙を送っていた笹川直介と初めて直接会える約束をしたんです。

ですが、笹川直介との待ち合わせである朝11時をすぎても来ず、また緊張していたこともあり、頭を冷やそうと図書室に入りました。そのとき、私はずっとあの本を読んでいた。他愛もない恋愛小説でしたが、文の妖^{ふみ}である私としては、大変面白いものでした。稚拙なものでしたが心温まるものでしたよ。

それと、この子が犯した罪は罰せられなければいけません。けど、この子は自らの意思で人を殺しました。それは何用にも変えられないただ一つの真実です。だけど、自分がせっかく作ったものを目の前で捨てられたら……」

今まで丁寧だった字が、途端乱暴になっていく。

『彼女がせっかく一生懸命作ったバレンタインデーのチョコを、何の躊躇いもなくゴミ箱に捨てたのです。

いいえ、笹川直介は他にも色々な子からもらっていましたが、彼女らのも同様でした。一緒に容疑にかけられておりました媛坂円香が送ったものも同様の扱い。

でも、彼女を絶望させたのはそれにございません。

笹川直介は彼女の目の前で、お弁当箱を溝^{トナ}に捨てたのです。

それが彼女の犯行理由。姫坂円香との共犯でなくとも、いつの日か彼女は笹川直介を殺していたでしょう」

手紙はそこで終わっていた。

「結局、聞けずじまいか」

皇月はベッドの上に寝転がり、先日拓蔵に言われたことを思い出

した。

「でも、聞くまでもないか…… 私だってメールでもらうより、遠回しても手紙をもらったほうが嬉しいしね」

皐月は手紙の主が何なのかに気付いた。

恐らく文車妖妃ぶんぐるまようびという妖であろう。

そして彼女に文車妖妃が取り憑いていたことも、手紙の内容を見れば納得が出来る。

江戸時代の怪談集に『諸国百物語しよこくひゃくものがたり』というものがある。

その中の話に、ある寺の稚児ちごが恋文を受け取り、それを捨てていたところ、恋文に込められた執念が鬼と化して人を襲ったという話があるが、同様に手紙の執念が妖怪化したものが文車妖妃ともいわれている。手紙の内容がこれと似ているのだ。

事件解決後、一応分かったこととして、阿弥陀警部から告げられたが、剃刀やカッターの刃が入った手紙を送っていたのは殆ど姫坂円香で、河瀬瞳美だけはずっと丁寧に手紙を送っていたようだ。

だけど返事をもらえないことや、目の前で捨てられたことを根にもっていたことは確かで、殆ど食べ物の話になっていたようだ。

相手がどんなものが好きか、何が嫌いなのか、ただそれだけが聞きたかっただけらしい。

皐月は起き上がり、部屋を出ていった。が、一二分ほどで戻ってきた。手には長短二本の竹刀を持っている。

「いつもの癖で竹刀持って来ちゃった」

皐月は机の横に二本の竹刀を掛けかけた。

気を取り直して、皐月は手紙を床に置くや、

「閻獄第一条、人に取り憑き、その身で他人を刺殺したものは『等

活地獄・刀輪刃』へと連行する」

そう告げるや、どこかから御札が現れ、手紙に貼り付いた。

そして、青白い炎と共に消えた。

「本人にはこっちの世界で罪を償ってもらいましょ？ 大丈夫よ。

あなたが私に手紙を送ったんだから」

臯月はそう云うや、少しばかり背伸びをし、机へと向かった。

そして引き出しから便箋を取り出し、手紙を綴った。

それは誰に当てたものなのかは決めていなかったが、少なくとも文車妖妃に対しての感謝の礼文であった。

漆・手紙（後書き）

第六話終了です。因みに手紙は脱衣婆にお願いして、渡してもらっています。

巻・土砂降り

『夜目遠目笠の中』という言葉がある。

本来、夜見るとき、遠くから見るとき、笠に隠れた顔の一部をのぞいて見るときは、はっきり見えないので実際より美しく見えるものである。という、専ら女性に向けられた言葉である。

しかしこの状況……土砂降りの中でも同様の事が云えた。

まるで緞帳のように雨は降り頻り、まったくと云っていいほど周りが見えない状態となっていた。

聞こえてくるのは荒々しい雨音。そんな中をひとりの少女が佇んでいる。少女は目を瞑り、神経を集中させ、『何か』を探していた。

そんな中、「ギギギ……」と奇つ怪な声が幽かに響いた。

それはひとつといわず、2、3と、まるで潜んでいたかのように、ジワジワと少女に歩み寄っていく。

「キシヤアアアアアッ!!!」

はつきりと聞こえるほどの咆哮を挙げるや、死霊たちはいっせいに少女へと襲いかかった。

はずであった。

「ぐっ? ギギ? げえがあ?」

なぜ? どうして、こうなった?と言わんばかりに、死霊たちは啞然とした表情を浮かべた。

その顔は爛れ腐って、もはやその表情は理解できないが、たとえばならそういう心情であろう。

「一刀・亡情轉」
むじょうのまがすまじ

少女がそう呟くや、死霊たちの体はバラバラになっていく。そして赤黒い炎となって　消滅した。

ふと少女の背後うしろから女性の溜息混じりの声が聞こえてきた。

「あなた……　どうして彼等に令状を言い渡さなかったの？」

女性……脱衣婆が鎌を担いだ状態でそう問い掛ける。が、少女はその問いに答えようとしない。

それを見るや、脱衣婆ははつきりとわかるほど顔を歪ませた。

「あんたねえっ！　執行人が公私混同することはルール違反だっ
ことくらいわかってるでしょ？」

「なら……　どうして妖怪なんかに、人間と同じことをする？」

「……っ！」

「人間は罪を償い、その償いによって後々のちのちに生きる権利を与えられる。だけど、生きてもない妖怪にそんなことをする理由なんてないんじゃないの？」

そう訊かれ、脱衣婆はその問い掛けに戸惑った。

少女の言い分はもつともである。

裁判における判決は被告人にとって、無罪、有罪、死刑と、どちらにしても今後の人生に大きくかわってくる。

しかし妖怪に関しては、もともと“存在”すらしていないのだ。

そんな存在にどうして人間と同じようなことをするのか……とい
うのが、少女の考えだった。

「私たち執行人に令状を伝えさせるのは……　ただ単にあなたたち
地獄裁判官たちがめんどくさがっているからでしょ？」

少女の言葉に、脱衣婆は戸惑った。

「そりゃそうよね？ 意味も無く死ぬ人間なんてごまんというし、
いったいどうして死んだのか、なんの罪もないのに自殺をする人間
だっている。要するに……弱いだけでしょ？」

「そういう…… あなたはどうなの？」

「私も…… 同じようなものよ…… 結局守られた借りを返してな
いんだから」

少女はそう言うと、長刀を振り下ろした。

「まだ…… 探してるの？」

「ええ…… あれを殺すまでは、私のやり方で妖怪を殺すっ！」

少女が二つ目の『殺す』という言葉を発した一瞬、まるでその夕
イミングを見計らったかのように雷鳴が轟いた。

「……っ」と脱衣婆は舌打ちをする。雷鳴に紛れるように、少女は
突然と姿を消したのだ。そして暴雨の中、はつきりと鈴の音だけは
確かに響いていた。

「もちろん、あなたのやり方は間違っていない。そういう方法だっ
てあるし、殺された被害者にとって、怨みを持っているでしょ……
でも、人間も妖怪も、元をたどればどっちも同じなのよ…… ど
っちも必ず罪を持ち、どちらもそれを償う権利を持つてるんだから」
脱衣婆は、どうしてここまで少女が妖怪を忌み嫌っているのか、
その理由を知っている。

いや、知っているからこそ、令状を伝えてやって欲しいのだ。

三姉妹や少女といった、迷える魂を成仏させ、その罪を言い渡し
ている執行人たちの令状は、その死者や亡霊に対する罪を伝えると
いう意味がある。

元々なら脱衣婆が三途の川で、死者の衣服を剥ぎ取り、それを傍らにある木の枝にかける。その撓り具合しなによって、罪の重さはかを測っている。

しかし戦国時代や、戦中、昨今の残虐非道な事件によって、罪のない死者が異常なほどに増えているのだ。

人間世界において、何百年もの間に、何千、何万、何億もの命がこの世を去っていったとしても、地獄からしてみれば一朝一夕の流れでしかない。

だからこそ、死者の数は多く、その重みは計り知れないものとなっている。

皇月たち三姉妹が死者や妖怪に対して令状を伝えることは、十王の長ごとうてんりんおう『五道転輪王』が作った方法であり、地獄裁判をスムーズに運べるというメリットがあるが、言い換えれば苦し紛れのものでもあった。

「一応閻魔さまに報告しておかないと…… まったく、変成王へんせいおうさまはどうして信乃を執行人にしたのかしら…… あの子がやっていることはただの憂さ晴らしにしか見えないわよ」

脱衣婆はそう呟きながら、鎌で景色を切り裂いた。

その切り目から赤い川が流れており、その隙間に入るや、スーと姿を消した。

式・三悪道（前書き）

三悪道さんあくどう・仏教用語の1つ。六道のうち、地獄道、餓鬼道、畜生道の3つの世界のこと。三悪趣。三趣。悪行を重ねた人間が死後に行く世界だとされる。

貳・三悪道

「何も聞こえないんですか？」と大宮巡査が葉月に訊ねた。

葉月の手元には身元不明の白骨死体が写し出された写真がある。

何度か声を聞こうと葉月は試み^{しる}ているのだが、まったくもって聞こえないという。

「湖西主任に遺体の状況は訊いておるんじゃない？」

「ええ。遺体は恐らく4年前のものではないかという見解だそうです」

「行方不明者……という可能性は？」

「一応、その線でも調べていますが、行方不明届けがあつたとしても……」

阿弥陀警部が言葉を止めた。

「別にいいじゃろ？ わしが警察におつた時、それが一番の蟠^{わだかま}りだつたからのう」

拓蔵がカップ酒を一口飲むやそう云つた。

遺族が警察に行方不明届けを出したからといって、すぐに見つかるものではない。

それどころか優先順位は、はっきり言つて下^げの下^げである。

行方不明。強いては家出とほかならないからだ。

事件に巻き込まれての行方不明ならばまだしも、そういう雰囲気
でなければ、やはり優先順位はないに等しいのだ。

届けを出した遺族にとっては、信じ難いものであるが、現実とは
そういうものである。

写真に写っている白骨死体の身元がわからない以上、行方不明届

けを出されているのかすらわからないのだ。
そしてそれを判断するDNA鑑定の結果はまだ出ていなかった。

「発見者は？ 見たところ山の中みたいですけど……」

臯月がそう大宮巡査に訊ねた。

「臯月ちゃんの言うとおり、遺体が発見されたのは山の中。近くでコテージを所有している人の飼い犬が見つけたそうだよ」

「……犬？」

臯月は小さくそう呟いた。

別に犬が骨の臭いに嗅ぎ付けて、地面を掘り起こしたのならば、別におかしなところではない。

しかしどうも犬という部分が引っかかっていた。

「でも可笑しなところがあるんだよね」

大宮巡査がそう言うと、「可笑しなところって？」と臯月が訪ねた。

葉月は霊視をした後、疲れてしまい眠りこけてしまうのだが、疲れを見せないところから見て、まったく力を使っていない。

霊視はあくまで霊魂を感じることで、感じなければ、その力が消費されることがない。

「いやね？ その飼い犬は普段敷地内で放し飼いにしているんだけど…… 発見される前、部分的な土砂降りがあったらしくて、足場は最悪だったそうなんだよ」

「確かに可笑しいですね。いくら人間よりも嗅覚が発達している犬だからって、ピンポイントに死体を発見できるなんて」

弥生がそう云いながら、臯月を見やった。

「ふたりとも、どうかしたのかい？」

大宮巡査はそんな弥生と臯月を見ながら声をかけた。

が、二

人はその問いに答えなかった。

「阿弥陀警部？ あんたら警察は現場に行つとるんじゃよな？」

「ええ。一応通報を受けましたからね、それが何か？」

「そのコテージに住んでいる人間の身元や近辺は調べておるんじやろ？」

そう訊かれ、阿弥陀警部は頷いた。そして、3枚の写真を見せた。

「コテージのオーナーである瀧瀬晋平、65歳。その妻である瀧瀬

愛美、63歳。そして、その孫である瀧原希空、13歳の三人です」

「それだけですか？」

弥生がそう聞き返した。オーナーである瀧瀬夫婦ならまだ分かるのだが、その孫である瀧原希空の両親がいないことに違和感があった。

「瀧原希空の両親ですが、長期の海外出張しているそうなんですよ

…… 愛娘を祖父のもとに置いてね」

「一体何の仕事を？」

臯月がそう訊くと、大宮巡査が「二人とも外資系の仕事をしている」と答えた。

「葉月さんの様子から見て、今回は貴方達の力を借りなくてもいいみたいですね。妖怪とかそういう類のものではないようですし」

阿弥陀警部がそう云うや、立ち上がると居間を出ていった。

それを葉月がジツと見つめているのを大宮巡査は気にかけるや、問いかけた。

「今日の阿弥陀警部、何か焦ってない？」

それに関しては弥生と臯月、拓蔵も薄々とだが感付いていた。

最初に割愛したが、阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社に訪れ、葉月に霊視をお願いしてから、実は小一時間以上は経っている。

声が聞こえていたのならば、そのままのことを伝えるのが葉月の役目であるのだが、その声が聞こえないのではどうすることも出来ない。

だからこそ葉月は何度も声を聴こうとしていたのだ。

「確かに…… 大宮くん。その瀧瀬夫婦は何をしておるのかは調べておるんじゃない？」

「え、ええ。コテージ……強いていえば別荘のオーナー。どうやら大会社の社長だったそうですが、引退して後世を静かなところで満喫しているそうです」

大会社の社長ともなれば、別荘の一つや二つ持っていてても可笑しくはないだろう。と拓蔵は言葉を続けた。

「だけど、その山自体もオーナーの所有物なんですよね？」

「 どういうことですか？」と弥生が訊ねた。

別に所有物であるのなら可笑しくはないのだが、大宮巡査はそれが納得いかない様子だったのだ。

「いやね？ 自分の敷地の中で人間の白骨死体が発見されたとしたら、そりゃ驚くだろうし、警察に通報だってする」

「まあ、それが普通だと思いますし、極当たり前だと思いますけど？」

「そうじゃなくて、自分の家に死体が…… ましてや人間の白骨死体が発見されたんじゃ、それを隠すのが道理じゃないかな？ 世間体とかを気にしてさ？」

確かに云われてみれば、犬や猫といったペットの死体ではない。

ペットの死体ならば、埋めて埋葬することなどままあるため、可笑しな点ではないのだ。

日本の法律に『墓地埋葬法』というものがあり“墓地、納骨、または火葬場の管理及び埋葬などが、国民の宗教的感情に適合し、且つ公衆衛生その他公共の福祉の見地けんちから、支障なく行われることを目的とする”というものである。勿論この法律は死亡届を役所に届け、死体を火葬、埋葬などを済ませるものに適合される。

しかしそれはあくまで身元が分かっているものに限られる。

今回の件は『地中に埋められていた、人間の白骨死体が発見された』ことが発端なのだ。

「臯月ちゃんと弥生さん…… おふたりがよろしければ、コテージに来てみませんか？」

そう云われ、二人は目を丸くした。

「いや、皆さん納得できないご様子ですし、どうせだったら現場に来てもらったほうがいいんじゃないかなって」

大宮巡査はそう言うが、階級の低い巡査でしかない大宮巡査にそのような権限はないのだ。

「でも、何も声が聞こえなかった……」

葉月が申し訳なさそうに言う。が、大宮巡査はそうじゃないと説明する。

「葉月ちゃんの力は“霊の声を聞いてあげること”だよな？ その場で死んだ霊体つてのは成仏されない以上、その場に留まるものだから聞いていただけ？」

そう云われ、葉月はハツとする。

成仏とは、仏がこの世に未練を亡くすことを意味する。

が、果たして地中に埋められた白骨死体が、未練なくこの世を去るだろうか？

「誰かが私たちより先に成仏させた？」

「それは僕にはわからない。だけど、君たちの力を信じているからこそ、弥生さんと臯月ちゃんのふたりに、現場で確認して欲しいんだ」

大宮巡査は拓蔵を見遣った。その表情は何か決意あるものだった。

参・経路

「臯月、どうかした？」

軽く着替えを見繕って入れたバックを背負いながら、弥生は臯月に声を掛けるが、臯月は反応しない。

もう一度、さっきよりも大きな声で呼び掛けるが、やはり反応しない。

「臯月さま、どうかしたんでしょうか？」

遊火がそう弥生に訊ねる。

「もしかして、今回の件…… 信乃さんが絡んでるって考えてる？」

そう訊かれ、臯月は少しばかり反応する。

「信乃の先天的能力…… 鳴狗家の異常なほどの嗅覚なら、犬が発見する前に白骨死体を見つけてることが出来る」

「しかもあなたと違って霊が見える」

臯月はその言葉に対して、特に何も言わなかった。

「でも、そうだとしたら、脱衣婆さんか、瑠璃さんかが報せに来るんじゃないんですか？」

阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社に遺体の報告をしたのは、水曜日である。今は金曜日の夕方、臯月と弥生は大宮巡査に頼まれて、現場となったコテージへと向かっている最中である。

少なくとも今回のことは、閻魔王である瑠璃が知らないはずも無く、またそれに関して脱衣婆が何か言いに来ていたはずである。

「それがないからこうやって、実際に現場に向かっているんでしょう？」
弥生は臯月を見やる。

「あの子には、あの子のやり方がある。私たちが口出すことじゃないな

いでしょ？」

その言葉に対して、皐月は「わかってる」と小さく云った。

山の頂上に一軒のコテージがある。その周りには疎らではあるが警察の人間が何人かいた。

「大宮巡査は…… あ、いた！」

皐月が大宮巡査を見つけ、声を掛ける。大宮巡査は他の警官に一言声を交わすや、皐月たちのもとへと駆け寄ってきた。

「ごめんね。迎えに行こうと思ったんだけど、忙しくなっちゃって」「別に気にしなくていいですよ。私も弥生姉さんもいい運動になりましたから」

「でも喉ぐらいは渴いてるだろ？ コテージのオーナーに話は通してあるし、二人の部屋も用意してもらってる……」

大宮巡査の話聞いてる最中、なにやら遊火がキョロキョロと辺りを見渡していた。

「どうかしたの？」

「阿弥陀警部の姿が見えませんか？」

云われてみれば確かに……と、弥生も辺りを見渡した。が、阿弥陀警部の姿がどこにも見当たらない。

「大宮巡査？ 阿弥陀警部は……」

「阿弥陀警部は他の事件を担当してますよ」

そう聞かされ、弥生と皐月、遊火は首を傾げた。

「今回の事件はあくまで、身元不明の白骨死体ですし、何よりそれを判断するものがひとつもない」

「ひとつもないって…… DNA鑑定の結果は？」

そう訊かれ、大宮巡査は一枚の書類を二人に見せた。

遺体の名前は書いておらず、また死亡推定時刻は10年以上前のものとなっていた。

「えつと…… 確か湖西主任の見解では、白骨死体は4年前に埋められたモノだつて云つてませんでした?」

「うん。だけど、骨髄を調べたところ、まったくスカスカの状態だつたんだ」

「骨の中が? そう言えば、写真を見たとき、変なところあったわね?」

弥生が何かを思い出そうとしている時だった。

「おつ、そん子らかあ? あんたが呼んだつてのは?」

軽快な声やし、其方を見やるとサングラスを掛けた老人が此方へとやってくる。

「オーナー、この二人がさきほど話した、黒川弥生さんとその妹さんの臯月さんです」

大宮巡査がそう紹介し、二人はコテージのオーナーである瀧瀬晋平に会釈した。

「険しい山道、ご苦労じゃったなあ。ささ、立ち話もなんじゃから、コテージに入られてはどうじゃ?」

何ともまあ、絵に描いたような好々爺じいじやだと、弥生と臯月は思った。二人は大宮巡査と瀧瀬晋平に案内されるようにコテージへと入るうとした。

「遊火、一応あた辺りを調べておいて」

そう弥生に命じられ、遊火は頷くや、無数の火の玉となって散った。

「そう言えば、弥生さん？ さつき遺体の写真に違和感があったって言ってたけど？」

「普通…… 屍体から白骨になるには、環境にもよりますが、早くて夏場だったら一週間から十日。冬場は数ヶ月以上かかると言われているんです。だけど、それは地上に放置された屍体にいえること。今回の事件は地中に埋められた遺体でしたよね？」

そう訊かれ、大宮巡査は頷いた。

「遺体は 男女関係なしに、大人だと七年から八年はかかると言われているんです」

二人の話を聞きながら、皐月は弥生の違和感に気付いた。

「骨が 綺麗過ぎたってこと？」

「ええ。地中に埋められた死体が白骨化するには相当な時間がかかる。しかも土に塗れていたはずなのに、ところどころ綺麗だった」
弥生は大宮巡査に「遺体発見後、地上に上げ、埃を落としたのか」と訊ねた。

「一応身元確認のためにね。でも、云われてみれば、確かに泥がこびり付いてなかったなあ……」

地中に埋められていたのなら、泥やら何かが骨にこびり付いているはずである。

「もしかしたら、遺体は殺された後、どこかに隠してから埋めたんじゃない……」

そういう考えに至るのだろうか……と、大宮巡査は少しばかり考え込んだ。

皐月と弥生が、大宮巡査と瀧瀬晋平に案内され、コテージの中を見渡していた時だった。

突然、犬の鳴き声が聞こえ、弥生と大宮巡査は其方を見やった。が、耳があまり聞こえない皐月は1テンポ遅れて反応する。

「あら、あなたは驚かないのかしら？」

犬を抱えている女性が奥の部屋から出てくる。

「ははは……妻の愛美じゃ」と瀧瀬晋平が紹介するや、瀧瀬愛美は皐月と弥生に会釈する。二人も慌てて返した。

「あなたたちが大宮巡査の云っていた子達ね？」

そう瀧瀬愛美が話した時だった。抱えていた犬が突然暴れ出し、腕から飛び出してしまった。

そして皐月と弥生の周りをグルグルとまわりだす。

後々聞いたことだが、犬種は「トイ・マンチエスター・テリア」というもので、どうやら皐月と弥生がコテージの前に来てから、少々落ち着きがなかった。

「この子が遺体の第一発見者ってことになるんですか？」

皐月が中腰になり、犬を触ろうとした時だった。

「トーマツ！ トーマツ！」と外の方から女の子の声が聞こえるや、犬は皐月の手を素通りし、ドアの方へと駆けていった。

そして、ドアの前で吠えた。

「あ、家の中にいた。駄目だよ！勝手に居なくなったら」

そうコテージの中に入ってきた女の子が犬を抱えながら、叱っているが、当の本人は尻尾しっぽを左右に振っており、どう見ても反省しているようには見えない。

「あれ、お客さん？」

女の子が皐月と弥生を見ながら、そう訊ねる。

「彼女がオーナーの孫である瀧原希空さん」

大宮巡査が弥生と皐月に耳打ちをする。

「トーマって云うんだ？」

「うん」

瀧原希空の様子に、皐月は首を傾げた。

(大宮巡査、この子…… もしかして……)

皐月はその違和感を隣にいた大宮巡査に訊ねた。瀧原希空は確かに『皐月たちの方を見ている』。

(ああ、察しの通り…… 彼女は目が見えてない)

そう大宮巡査は云った。

瀧原希空は確かに自分たちを見ているが、話している人間の方を見していない。今でも声の主がどこにいるのか、首を動かして探している。

「でも、さっき…… トーマだっけ？ 犬の方は見てたじゃないの？」

「声が聞こえてれば、そっちに振り向くでしょ？ さっきの弥生姉さんと大宮巡査みたいに」

云われてみれば確かに…… と弥生と大宮巡査は納得する。見えていようがいまいが、耳が聞こえているのなら、声がする方に向くものである。

「希空、今は警察の人がいるんだから、部屋で大人しくしてなさい」
瀧瀬晋平にそう云われ、瀧原希空は犬を片手に抱え、壁に触れながら、階段を上っていく。

そんな希空を見ていた皐月がぼんやりしていたのを気になったのか、大宮巡査が声をかけた。

「いや…… 多分気のせいだと思う」

「気のせいって、何かあの子から感じたの？」

弥生にもそう訊かれたが、皐月は答えなかった。

（あの子…… 一瞬だったけど、段差を一つ抜かしてた）

目が悪いのならば、安全のために段差一つ一つ確認するのだが、瀧原希空はそれを一つ抜かして上がっていたことに、皐月は違和感を感じた。

コテージで働いている女性から、自分たちが泊まる部屋へと案内された皐月と弥生は、それぞれのバックをベッドの上に置いた。そして女性が居なくなつたことを確認するやドアを閉め、窓を開けると、弥生は遊火を呼んだ。

窓に掛かっているカーテンが拳大いさだぐらいの大きさに凹へこんだのを見て、皐月は遊火が入ってきたことを認識した。

「弥生さまと皐月さまが歩いていた山道以外にきちんとした道はありませんでした。また、遺体が発見された場所は竹林の中で、人が通れる道幅はありましたが、そちらは険しい獣道でした」

遊火は弥生に頼まれていた、コテージの周りを調べていたことの報告を弥生に伝え、それを遊火の声が聞こえない皐月に弥生が伝える。

臯月は遊火の気配は感じることは出来ても、声が聞こえなければ、姿を見ることも出来ない。

「それと、第一発見者となっているのは、瀧原希空だそうです」
そう云われ、弥生は臯月を見た。先ほど臯月が瀧原希空に関して違和感を持っていたことを思い出したのだ。

「弥生姉さん？ 今回の事件…… 瀧原希空あの子がひとつ絡んでるのか
もしれない」

「どういうことですか？」と遊火が訊ねるが、訊いたところで臯月には声が聞こえていない。代わりに弥生が訊ねる。

「先ず第一に、遺体が発見された場所は竹林で、それこそ獣道だったのよね？ そんなところを目が見えないあの子が近付くと思う？」

「言われてみれば確かにね…… ここに住んでいたのならうっすらと地形は覚えているだろうけど、危険な場所に自分から入ると思えない」

「さつきも犬ドッグがドアの方に吠えてから、瀧原希空はドアを開けた。それからすぐに犬ドッグを抱えていた」

その言葉に、弥生は臯月が感じていた違和感がなんなのかに気付いた。

「可笑しいわよね？ 目が見えてないなら、それに触れるまで手探りするはずじゃない？」

あの時、弥生も一緒にいたため覚えていた。瀧原希空はコテージに入ってくるや、吠えていた犬をすぐに抱きかかえていたのだ。

「ええ、声が聞こえたからといって、場所はわかってても、その位置まではわからないでしょ？」

「でも…… どうしてそんな嘘を？」と遊火の言葉を弥生が代弁する。

「もしかしたら……　もしかしたらだけど、何かを隠してるんじゃないかなって」

「　何かを？」と弥生と遊火は首を傾げた。

皇月がその次を言おうとした時、廊下側から部屋のドアを叩く音がした。

「二人とも……　ちょっといいかな？」

声の主は大宮巡査だった。

弥生がドアを開けると、ドアの隙間から黒い何かが入ってきた。

「っ！！」

遊火が驚き、それを見ないようにしている。

「あ、そういえば遊火って、犬が駄目なんだっけ？」

弥生が呆れてそういう。が、遊火はそれどころではない。

「ちよつと！　弥生さまあつ！　助けてくださいしい……」

泣きじゃくりながら、遊火は助けを請う。

入ってきた犬……　トーマは“何もないところ”を向いており、舌をだらしなく出しながら、尻尾を振っている。

特別吠えるわけでもなく、ジツとその虚空を眺めているのだ。

（　もしかして、遊火が見えてる？）

本来妖怪である遊火はふつつ見えるものではない。が、稀まれに人間が持たない不思議な力を、逆に動物が持っている場合がある。

皇月はトーマを背後うしろから抱えた。特別暴れるわけでもないが、一瞬だけ舌を伸ばした。

「ひいっ！」と遊火が小さく悲鳴を挙げる。が、実体がないため舌はそのまま頬を通り抜けた。

そのため、当てた感触がなかったのか、トーマは少しばかり不思議そうな声を挙げた。

伍・隠蔽

薄暗い部屋の中で、ボンヤリと頼りない明かりが灯^{とも}っている。

「　　どうして嘘を吐^ついてるんじや？　お前さんは……」

その人物を見やるや、警視庁鑑識課主任である湖西がひとつ溜息混じりに愚痴^{こぼ}を零した。

「人が態々訪ねに来てやったというに、なんじや、そのモノの言い草は」

「部外者は入ってこれんはずなんじやがな？　のう　拓蔵や……」
湖西主任がそう拓蔵に云う。

その拓蔵はいつもの飄々とした雰囲気とはまるで別人の、キリッとした面影を持ち、服装は黒のスーツを着ている。

「弥生ちゃんと皐月ちゃんは例のコテージか……　葉月ちゃんはどうした？」

「一階のロビーで待たせておるよ。そんなに遅くならないと云っておる」

というよりも、要件だけという意味だと湖西主任に伝えた。

「　　で、遺体の形状はどんなだったんじや？」

「それよりも先ず……　どうして警察を辞めたなんて嘘を吐いておるんじや？」

「嘘ではない。辞めたのは本当じゃ……　ただそれを上が処理したらんだけじゃろ？」

その言葉に湖西主任は呆れた表情を浮かべた。

「田舎出のノンキャリアが警視庁にくるどころか、剩^{あま}え警視にまで昇格しておきながら　　どうして自分から辞めたんじや？」

「その話はいいじゃろ？」と拓蔵は云うが、湖西主任の目を見るや、それは許されないと悟ったのだ。

「6年前に、三姉妹あの子らが事故に遭あったことは覚えておるじゃろ？」

「ああ……覚えておるよ。そんな時のお前さんの慌てっぷりは、警視庁の中でも、鬼神オニガミとまで云われていた人間とは思えんかったがな」
拓蔵は警視庁にいた頃、公安部に属していた。

特に自身が神仏しんぶつを扱っている家柄であることもあってか、宗教紛いの団体に厳しかった。

「神仏を信じる信じないは別として、それで人を騙し強請ゆわつておつたのが赦ゆるせんかっただけじゃよ。結局決めるのは生きている人間じゃろ？」

「お前さんの考えもわからんわけじゃないがな？ 人は何かに絶すがらんと生きていけんじゃろ？」

しかし、拓蔵が警視庁を辞めた理由はこれではない。

「6年前の転落事故。運転しておつたのは確か健介くんじゃったろ？」

「だから未だに信じられんだ。一流のF1レーサーであつた健介くんが、30キロも出しておらん車で運転ミスを起こしたことがな」
転落事故があつた現場は緩やかなカーブがあるくらいで、それほど険しい山道ではなかつた。小石が散りばつた道ではあつたが、落ち着いて走れば、事故に遭あつたことはないほどの山である。

ワゴン車であつたことと、葉月がまだ4つの幼子であつたこと、キャンプの帰りだったためか、疲れて眠っている弥生と臯月に気を使っていたため、スピードを出していなかつた。

「しかし…… お前さんが気にしておつたのはそこじゃないじゃろ

「？」

「あの転落事故で　　発見されたのは弥生たちだけだったんじゃないよ……」

転落事故ならば、運転していた初瀬神健介と、その妻であり、拓蔵の娘である遼子の姿がなければいけない。

しかし当時発見された車からは弥生ら三姉妹だけだった。

「じゃが、健介くんが車から抜け出し、助けを求めた可能性も　　湖西主任がそう云うや、突然拓蔵は机を両手で叩き、耳を劈くほどの大きな音を部屋中に響かせた。」

「車は3m以上の崖から転落しておるんじゃないぞ？　　しかも運転席のドアは地面に付いておって、出ることは先ず不可能。助手席の方もドアが壊れておった　　そんな状態で出られるわけがなからうし、運が良くて気を失っておったじゃろうが、普通じゃったら全員が即死じゃろうが！」

だからこそ、拓蔵は三姉妹が賽の河原にいた事に違和感を感じている。そこは親より先に死んだ親不孝ものを罰するための場所であり、親と一緒に死んだのなら、そこに行くことはない。

「それが信じられんのじゃろ？　　閻魔王……瑠璃がその子らであんたのところに来てきたんじゃないからな」

湖西主任はそう云いながら、部屋の奥を見やった。

「いつから気付いてました？」

真つ暗な部屋の奥から凜とした声が響いた。そしてボンヤリと輪郭が見えるや、それが瑠璃であることに拓蔵は気付く。

湖西主任は瑠璃の問いに、拓蔵が机を叩いた時だと答えた。

「拓蔵……　　確か火車が出てきた時、佐々木刑事に自分だけが覚えておればいいと言っておったではないですか？　　それを湖西主任に話すとはどうい風吹き回しですか？」

瑠璃は浄玻璃の鏡を通して、車内での会話を聞いていたことを話した。

「今回の事件…… 大宮くん個人があの子らをコテージに呼んだ。高々巡査が捜査に関係のない人間を呼んだんじゃ…… それなりの覚悟があると思っとったがな」

拓蔵は湖西主任を見やった。

「大宮くんは警官を辞める覚悟じゃろうな……」

あの晩、大宮巡査が見せた表情を、拓蔵は同業者であったこともあり、直ぐに悟っていた。

「昔のお前さんと似ておるからか？」

そう湖西主任が云うや、拓蔵は苦笑いをした。

「湖西さん、私からもお願いします。あの白骨死体…… 被害者の名前はもう分かっておられるんでしょ？」

瑠璃にそう云われ、湖西主任は机の引き出しを開け、書類を出すや、それを机の上に広げた。

「被害者は瀧原俊平、40歳…… コテージのオーナー瀧瀬晋平の孫である瀧原希空の父親じゃよ」

「……どういふことじゃ？ 確か海外出張をしておったと聞いておったが」

拓蔵の問い掛けに、瑠璃が答える。

「海外出張自体が嘘だった」

「結論から言っただけじゃな？ 白骨の進み具合から見て、死後4年は過ぎておる」

地中に埋まった死体が白骨化するまでの過程は、弥生が説明しているため省略するが、死後4年では完全な白骨化はしていない。つまり地中に埋められたのは白骨になってからということになる。

「 4年か…… 骨になってから埋めたということになるんじゃない？ 」

「じゃが、それでは海外出張に行つてからの計算が合わん。いや、寧ろ行つてなかつたというのがわしの考えなんじゃがな」

その言葉に瑠璃が聞き返した。

「経緯がないんじゃないよ…… 飛行機の乗客リストに瀧原俊平の名前はあつたが、それを見た人間がおらん。しかも、あちらさんは瀧原俊平の顔すら知らんかつたからな」

それを誰がしたのかは言わずとも拓蔵と瑠璃は理解できた。

「それをあなたたち警察は問い質さなかつたんですか？」

「閻魔さまに言われると、ちつとばっかしキツいか、金で口を防ぐくらい動作もないじゃろ？ 地獄の沙汰もなんとやらというしな？」

そう云われ、瑠璃は顔を歪めた。

死んだ人間は脱衣婆に衣服を剥ぎ取られ、その重みから罪の重さを計られる。 が、六文銭というものを棺の中に入れ、それをもつて三途の川に來た死者は衣服を剥ぎ取られないと言われている。

そのことから「地獄の沙汰も金次第」という言葉が出来たとされている。

今は火葬が主なため、金属を入れることが問題視されているので、六文銭を描いた札を棺に入れて、燃やしている。

「いや失敬。あれは死者を思つてしておることじゃが、こればかりは眞実を隠蔽しておるからのう」

「それで阿弥陀警部を上が他の事件に回したということか？」

拓蔵の言葉に湖西主任は頷いた。

「あいつはへんなところに気がつくからのう、昔のお前さんと佐々木刑事みたいじゃと思つておるよ」

実を言つと、拓蔵が刑事課から公安部に異動させられたときも似

たような理由だった。

公安部は基本秘密裏に動く部署であるため、刑事課に所属している阿弥陀警部は会ったことがなかったのだ。

（今回の事件…… 大宮巡査には荷が重過ぎたか）と拓蔵は申し訳ないといった複雑な表情を浮かべたが、瑠璃が大宮巡査が決めたこと、自分たちはただそれを見守るだけと悟らせた。

陸・価値

「うわっ……」

皐月がその場景に啞然とする。コテージの壁には暖炉が設置されており、そこから大凡2米メートルほど離れて、背の低い長テーブルが置かれている。

それを挟むように大きなソファがあり、そこに灌原希空が座っている。その膝には、飼い犬のトーマがチヨコンと陣取っていた。

しかし皐月が驚いているのはそこではなく、テーブルの上に置かれた色とりどりの料理にだった。

元々は現場を調べている警官たちに対しての賄いまかなである。

因みに料理は愛美本人が作るのだが、疎らとはいえ警官8人という大所帯である。そのため人手が足りないと判断し、先日手伝いを呼んだと云う。

つまり、その中に皐月と弥生が入ってきたところで、特に大差はないと滝瀬愛美から説明された。

「さ、遠慮なく食べてください」

そう滝瀬愛美に云われ、警官たちは我先にと料理をつまんでいった。テーブルの上に置かれた料理は、どれもバイキング形式のレストランのように大皿に盛られており、各々が自由おののに自分のお皿に盛れるというものだった。

そんな中、弥生はコテージの中を見渡していた。

「オーナーの姿がないわね？」

ちようと横にいた大宮巡查も一緒になって周りを見渡した。

「奥さんにちょっと訊いてみようか？」

大宮巡査はキッチンの方にいる滝瀬愛美に訊ねに行った。そして3分ほどで戻ってくる。

「オーナーは部屋で休まれているそうだよ」

そう云うが、大宮巡査は首を傾げている。

「コテージの一階って、このリビングとくりや厨、奥の方にある浴場と倉庫以外で人が入れる場所は？」

「いや、一応中を全部見せてもらっているけど、一階で人が寢床にするところと叫びたら、このリビング以外はないよ」

つまりオーナーは2階で休んでいるということになるが

「可笑しい……よね？ 僕たちはオーナーを見ていない」

大宮巡査がそう云うや、弥生は頷いた。

弥生は大宮巡査が部屋に訪ねに来るまで、皐月と一緒にいた。

そして大宮巡査が部屋に来た時、トーマが部屋の中に紛れ込み、遊火をジツと眺めていた。その間、部屋のドアは開いたままになっており、その近くには大宮巡査が立っている。

その大宮巡査が気付いてないということは、耳が悪い皐月に訊ねる事自体、はつきり言って、お門違いである。

大宮巡査は二階に上がる時、廊下には誰もいなかったと説明した。

「大宮巡査たちはどこで休んでるんですか？」

いくら白骨死体が発見された現場だと言っても、すでに日は暮れている。それどころか調べたら、さっさと帰って欲しいのが、地主の本音である。

「一度部署に戻って、報告書を書いてるよ」

つまりこの食事が終わると、警官たちは山から下りおっていると云うことになる。

弥生と大宮巡査が話している間、皐月は瀧原希空の隣で食事を取っていた。皐月は左利きであるため、箸を持つ手がぶつからないよう、瀧原希空から50糶センチほど間を空あけている。その間にはトーマが、文字通りおとなしく寝転んでいた。

瀧原希空の皿には、少量の料理が盛られている。目が見えない彼女を配慮してのことだろうが、ものの数分で平らげられるほどしかない。

そのため、彼女はお手伝いに「どの料理はどこにあるのか」を訊ねながら、迷い箸はしになりつつも、料理を啄はじんでいた。

そんな瀧原希空を見ながら、皐月は（私の思い違いかな？）と自問していた。

「あ、皐月さん。そこにある料理凄く美味おいしいんですよ。早く食べないと無くなりますよ」

瀧原希空が指先でそれを示す。そこにはマカロニサラダがあり、よほど美味しいのだろう。すでにボールのそこが見えようとしていた。

「へえ…… そんなに美味しんだ」

当たり前に話しかけられたためか、皐月は一瞬気が付かなかった。

「の、希空さん？ なんで私だつてわかったの？」

料理は動かされていないため、どこに何があるのかはわかる。

しかし、隣にいる人間が自ら自己紹介してなければ、誰なのかはわからない。

目が見えない人は相手の口調や話し方から、それが誰なのかを判断しているものであるが、皐月は勿論、弥生すら瀧原希空と話していない。

名前は大宮巡査が説明していたとしても、それが誰の事なのかわからないのだ。

だからこそ、コテージに入ってきた瀧原希空を見た時、皐月が感じた違和感が説明出来る。

あの時、瀧原希空は客人が来たのかと訊ねている。景色が見えてもいない彼女にそんな質問自体が出来ないのだ。

「えっと……あつ」

瀧原希空は不味いと云わんばかりに表情を歪めた。皐月は瀧原希空を思っただけか、彼女の手を掴み、少し場を外した。

というよりも、耳が悪い皐月が内緒話が出来ないだけなのだが……瀧原希空はそれに従った。

皐月は自分と弥生が泊まる部屋に入るや、ベッドに瀧原希空を座らせた。

瀧原希空は首を右往左往するように辺りを警戒している。

「大丈夫。この部屋には私とトーマしかないから」

皐月の言葉通り、部屋に入ってきたトーマが瀧原希空を見つけたや、その膝に座った。

よほど居心地がいいのだろう。食事会の時も、殆ど動かなかったし、吠えもしなかった。

「希空さん。正直に云って……本当は目が見えてるんでしょ？」

皐月はそう訊ねるが、瀧原希空は首を横に振った。

「それじゃ、どうして私が皐月だってわかったの？ 私はあなたと一度も話していない」

「そ、それは……あなたたちがここに来ることを、大宮巡査がお祖父ちゃんたちと話してましたから」

「ええ。それに関しては目が見えていようがいまいが、知ることができる。だけど、それが誰なのか、当の本人が自ら言わない限

り、知ることはできない」

瀧原希空は視線を逸した。その仕草こそ、瀧原希空は見えていることを自ら証明した。

「 やっぱり見えてる」

「み、見えてなんて……」と反論するが、瀧原希空の表情が徐々に曇っていく。

「まあ、どうしてそんな嘘を言うのかに関しては追求はしないけど、発見された白骨死体に関しては聞かせてもらおうよ？」

臯月がそう云うや、瀧原希空はスツと立ち上がり、窓と扉を閉め切った。

「臯月さんの言うとおり、私は目が見えています」

ジツと臯月の目を見ながら、瀧原希空は口を開けた。

「多分、何人かの人は気づいてると思います。 ダメですね、全然演技が出来てない」

「どうして盲者の真似事なんてしてたの？」

臯月がそう訊ねると、瀧原希空はトーマを撫でながら、「そのほうが便利だったからです……」と申し訳なさそうに言う。

「発見された白骨死体は…… 4年前、祖父に殺された、私の父なんです」

「 えっ？」

「そもそも父が殺されたこと自体は知っていました。その犯人が誰なのかも…… だけど、その遺体が発見されなかった」

瀧原希空はずつと探していたのだ。祖父母に目が見えていないとバレバレの嘘を吐きながらも、泳がせられていることに気付いていながらも必死に探していた。

「腐っていない死体を地中に埋めた場合、白骨死体になるには7年

から8年掛かってしまう。だけど地上ならば早くて一週間で済む。あなたの言ってることが本当だとすれば、瀧瀬晋平はあなたのお父さんの遺体を白骨にしたあと、どこかに埋めた……」

そしてそれを発見したのは、最も発見して欲しくない人物である。

「それにしても妙よね？ どうしてそんなバレバレな嘘を、4年間もほったらかしにしたのかしら？」

確かに妙である。瀧瀬夫妻にとって、瀧原希空は自分たちの首を絞めるほどの邪魔な存在にほかならない。

「それは恐らく…… 私だけが知っている暗証番号を知りたいからだと思います」

「暗証番号？ もしかして遺産ってこと？」

そう訊ねるが、瀧原希空は首を横に振った。

「お金ではないです。ううん、お金と言えばお金ですが、私からしてみたらまったく価値のないもの」

「あなたからしたら、まったく価値のないもの？」

お金ならば誰にでも価値はある。が、暗証番号を娘に教えるほどに大切なものである。

「今はなんの役にも立っていないようで、紙切れ同然なんです」

「それって、もしかして 株券とか？」

臯月がそう訊ねると、瀧原希空は小さく頷いた。

確かに金と言えば金なのだが、お金よりも両親の方がいいと思っている彼女からしてみれば、まったく価値のないものである。

また二千九年一月五日から株券は完全電子化されているため、紙の株券は意味をなくしている。が、名義が本人であれば換金できる。しかし元々の持ち主である瀧原俊平がすでに死んでいるため、や

はり紙でしかない。

漆・鼠と犬

「どう弥生姉さん？ 何か感じる？」

皇月は部屋に弥生と大宮巡査を呼び、弥生に瀧原希空を見せた。

「ええ。うつすらとだけど、彼女から人とは違う気配を感じる」

弥生はそう云いながら、少しばかり怯えている瀧原希空を見やっ
た。

「大丈夫よ。四年間、稚拙な嘘ですら誰も気にしなかった理由が分
かったから」

そう云われ、瀧原希空は首を傾げた。

「彼女に取り憑いているのは『以津真天』^{いっまで}という妖なんだけど、そ
れが誰なのか、娘であるあなたならわかるはずよ？」

「お、お父さん……ですか？」

そうなのははつきり言えないが、そう思ってもいいだろう。と
弥生は説明した。

「以津真天は死体遺棄によって発見されない亡者の成りの果て。『
いつまで、いつまで』といって、亡骸を見つけて欲しいと願ってい
る妖怪なの。だけど人々は恐れをなして、探そうとしないから、ず
っと鳴いている」

「でも、白骨死体が希空さんの父親なら、発見された時点でもう成
仏してもいいんじゃないかな？」

大宮巡査の言うとおり、未だに娘に取り付いている以津真天の説
明が出来ない。

「葉月が写真から何も声が聞こえなかったって言っていたの覚えて
ます？」

臯月がそう大宮巡査に訊ねる。

「葉月の力は死んだ霊の声が聞けること。だけどそれは写真に写っていけばの話なんです」

「それじゃ、希空さんや僕たちが発見したときには、既に成仏していたということかい？」

それを聞いて、瀧原希空がワナワナと震えながら、

「ちよつと待つてください！ トーマが最初に発見したとき、遺体が埋められた地面には草が生えていて、誰かが掘り起こしたのなら、その痕跡あとが残っているはずですよ？」

「希空さんの云う通りだ！ 僕たち警察が来たときには、既に白骨は露あつわにされていたけど、最後まで掘り起こしたのは僕たちが来てから！ それより前にそこに遺体があることを知っているのはそれを埋めた本人…… 瀧瀬夫妻しかないじゃないか？」

大宮巡査と瀧原希空の言葉をジツと聞いていた臯月が二人を見つめた。

大宮巡査と瀧原希空は言葉を止めた。その双眸が先ほどと雰囲気
が違っていたからである。

「出来るのよ。あの馬鹿が持っている力なら、トーマと同じことが

「……トーマと？」

瀧原希空は膝下に座っているトーマを見やった。

「でも、トーマは骨の臭いで遺体がどこにあるのか知ったんだと思うんですが、そんなことが人間に出来るんですか？」

「あなたの言う通り、普通の人間には出来ない。犬の嗅覚は人間の数千倍だからね。でもあいつには出来るのよ」

臯月は握り拳を作り、辺りを見渡した。

瀧原希空の膝で眠っていたトーマが突然起き上がり、喉を鳴らした。

「ど、どうしたの？」

瀧原希空の驚きからして、トーマがここまで歯を剥き出しにするほど警戒している姿を見るのははじめてのことだった。

「き、君は？ 何時の間に？」

大宮巡査が窓を見やり、驚いた。

そこには窓縁まどぐらちに座る少女が部屋を見ている。だがそれではなく、窓は臯月が閉め切っていた。が、近くにいたはずの大宮巡査が気付かなかつたのだ。

「臯月…… あなたをつまらない詭弁きへんは終わったの？」

少女はジツと臯月を見ながら、平然とした表情で云った。

「信乃……！ もうあなたの役目は終わってるんでしょ？ もういいじゃないの、父親が妖怪になっても、娘を思っでやる事がどうしてそんなに甚はなはだしいのよ？」

臯月は憤りいらだを露あらわにし、少女に食くってかかる。

が、そんな臯月を見ながらも、少女…… 信乃はなおも平然としている。

「大宮巡査と言いましたね？ 警察が犯人を捕まえるのに理由がいりますか？」

突然そう訊かれ、大宮巡査は言葉を返せなかった。

「殺人を犯せば殺人犯。盗みを働けば強盗。嘘を広めれば詐欺となり、人を脅おそせば恐喝…… なんにせよ、罪を冒した人間を罰すること自体に理由なんていらんじゃありませんか？」

「それじゃあ…… 希空さんのお父さんを成仏させたことも理由なんてないって言いたいわけ？」

臯月がそう言うと、信乃は小さく頷いた。

「巫山戯ふざけないでえ！ あんた、葉月の力がなんなのか、本来の役割

はなんなのかを知ってるでしょ？」

「知ってるわよ？ だからって……居りゃしない人間そんざいに、惑わされるようじゃ、人間はそれこそ塵芥ちりあくたでしょ？」

「あんた……鳴狗家みよこの一人娘のくせに、お寺の娘のくせに仏を侮辱するわけ？」

皐月は傍らに持っていた竹刀を手に取り構えた。

「信乃おっ！ あんたがどうして妖怪を怨んでるのか知ってる！

でもね、もういいでしょ？ 今回の事件の犯人は、希空さんのお父さんじゃない！ 祖父である瀧瀬夫妻なのよ？」

「ええ。知ってるし……もうそれは終わってる」

その言葉を聞くと、皐月は啞然とする。

それとほぼ同時に風が靡なびくや、信乃は窓縁まどぐしからおり、何かを通した。

「あ、遊火？」

「や、弥生さまあ、大変です？ コテージの一階が……」

遊火と会話している弥生の表情が尋常じゃない。

「信乃…… あんた何したの？」

「すこし眠ってらっただけ…… 大丈夫よ峰打ちだし、私が

殺したいのは 妖怪だけだから……」

「だからって、無差別に退治することは執行人がすることじゃないでしょ？ あんたのやってることは、残酷卑劣な快樂殺人者と一緒じゃない！」

皐月は志乃を睨みつける。

「わかってないわね、皐月…… 私をそんな気遣いどもと一緒にしないで…… 私が殺しているのは妖怪だけ、存在してはならないものだけ」

そう云うや、信乃はどこから出したのか、一刀を振り下ろした。

が、金属同士がぶつかる音だけが響きわたった。

「さ、皐月さま……」

遊火が呆然とする。

「あなた…… 遊火が近づいてたの気付いて、態々窓から退いたでしょ？」

皐月は既に真剣へと変わった二本の刀を×印にし、信乃の刀を受け止めた。皐月のうしろには遊火があり、突然のことにただただ怯えている。

「あなた、確か遊火が見えないんじゃないっけ？」

「ええ、気配はわかるけど、姿は見えないし、声も聞こえりゃしない…… でもね、あの子がどんな顔なのか、どんな声なのか…… いつか見てあげたいって思うのが家族でしょ？」

皐月は信乃の刀を振り払い、横一文字に切りかかった。が、スレスレのところどうしるに飛ばれ、切っ先は当たらなかった。

「変なことを言うわね？ 家族……？ 妖怪を？」

「遊火はね、私たちと一緒に暮らしてるようなものなの。いつでも離れることができるのに、ずっと律儀に居てくれる…… そんなあの子を家族だって思うのが悪い？」

その言葉を聞くと、遊火は弥生を見やった。少しばかり涙ぐんでいる彼女を見てか、弥生は小さく微笑んだ。

「理解出来ないわ…… どうしてこう滅ぼせばいいだけの存在に、そこまで優しく出来るのよ？」

「少なくとも全部に優しくなんてないわよ？ それに 妖怪も人間と一緒にでしょ？」

「違う！ あいつらは心がない！ 心が存在しない」

そう信乃が言った時だった。

「キャンキャン」とトーマが吠えるや、信乃の右足に噛み付いた。
「……っ！ こんのお」

信乃はトーマを振り払い、刀で切り殺そうとするが

「……………っ！」

一瞬寂しそうな表情を浮かべ、刀を鞘に戻した。

「興奮めよ……………」と小さく呟くや、鈴の音を鳴らすと、信乃は姿を消した。

開け放たれた窓は、ガタガタと寂しそうに音を鳴らしていた。

翌朝、応援の警官らがコテージに到着し、瀧瀬夫妻を死体遺棄、および会社の金を横領していたことについて問い質すため、任意同行が求めた。

後日、取り調べによって、瀧瀬夫妻は発見された白骨死体を埋めたことを認めた。

犯行理由は瀧瀬晋平が会社の金を横領していたことや、金を使って犯罪をさせていたこと。自分の犯罪を金で隠蔽したことなどを、瀧原俊平が警察に密告していたためであった。

当然今まで通り、金でものをいわせればいいのだが、瀧原俊平が密告していた警官が他にもない、阿弥陀警部だったのだ。

だからこそ、今回の事件において、阿弥陀警部が捜査班から外されたのはそういう理由があり、阿弥陀警部が多少焦っていたのもこれがあつたからである。

瀧瀬夫妻は彼らを見ている瀧原希空に対して、「こんのお裏切りもんめがあ！」と喚き散らしたが、当の希空はまったく聞く耳を持っていなかった。

「希空さんはこれからどうなるんですか？」

「話を聞くと、父親側の両親が引き取ってくれるそうだ」

それを聞いて、臯月はホッと胸を撫で下ろした。

昨晚、信乃が去った後、臯月は瀧原希空にこれからどうするのかを訊ねると、殺された瀧原俊平の両親が、北海道で農業をやっているのだ、そこを訪ねようと云っていたのだ。

「それと今回の事件、やはり組織は秘密裏にするそうじゃよ？」

「 爺様、どうしてここに？」

パトカーの助手席から降りてきた拓蔵を見るや、皐月と弥生は呆然とする。

「ちよつと、知り合いを呼んだのでな。では和尚さん、よろしくお願ひします」

拓蔵がそう云うや、後部座席から僧侶がおりてきた。

それを見るや皐月は複雑な表情を浮かべた。

「 信乃のお爺さん？」

「孫が大変迷惑をかけたようじゃな。まったく、あの子の思いを知つておると、戦いにくいじゃろ？ のう、皐月ちゃんや」

そう云われ、皐月は頭を垂れた。

鳴狗寺の和尚は瀧原希空を見やり、会釈する。

「瀧原希空さんじゃったな。あんたが望めば、そのままにしておくが、どうする？」

鳴狗寺の和尚は瀧原希空に取り憑いているのが、彼女の父親だということ、皐月たちから事前に聞かされている。

本来、守護霊が先祖であることが殆どのため、成仏はしないのである。しかし、それが妖怪ともなれば、たとえ父親でも成仏させなければいけない。

「いえ、父をこのまま天国まで成仏させてあげてください」

はつきりと瀧原希空は云った。

「ええんじゃな？」と鳴狗寺の和尚は確認を取ると、瀧原希空は迷いのない表情を浮かべ、頷いた。

お被いはほんの数分で終わった。瀧原希空には、特別なの変貌もなく、体の異変もなかった。

「それにしても、どうしてあの時、あの人はトーマを切らなかつたんでしょうか？」

瀧原希空が皐月に訊ねる。昨晚、信乃に飛びかかったトーマを切り殺そうとしていた信乃が躊躇ためらっていたことが気になっていたのだ。

「似てたからよ。あなたを守ろうと、無茶なことをしたトーマがね……」

そう云われ、瀧原希空は首を傾げた。

「さてと、事件も無事に終わったし、私たちは帰ろうかしらね？」

弥生がそう云うや、皐月は頷いた。

「なんじゃ？ もう帰るのか？ すこしばかりのんびりしてもいいんじゃないのか？」

拓蔵が不満そうに言う。

「爺様？ そもそも私たちは事件の手伝いに来てたのよ？ 終わったら帰るのが道理ってものでしょ？」

皐月がそう言つと、弥生も同意見だった。田原医師のところにあずけている葉月のことも心配だった。

「いやなあ、ここ最近、腰痛が酷くてのお……調べてみたら、このコテージから少し離れたところに、それに効く秘湯があると聞いてな……しかも女湯の方は、お肌が肌理きめ細かくなるとか」
それを聞くや、皐月と弥生は互いを見やった。

「そんなところがあったの？」

「え、ええ……温泉はありますけど」

瀧原希空にそう説明され、弥生は地面においていたバックから着替え一式を取り出す。

「それ何処？ 案内して！」

「や、弥生姉さん？」

皐月は弥生を見ながら、啞然とする。というよりも、むしろ引いている。

「皐月！ 女の肌つてのはねえ、いつ見窄らしくなるかわからないのよ？」

弥生は瀧原希空に温泉までの道順を教えてもらい、一目散に走っていった。

「皐月さまはどうするのかな？」

遊火が思っていたことを口にした時だった。

「そうね…… 私は別にいいかな？ 耳が聞こえるようになるっていう効能があるなら、話は……」

皐月がまるで聞こえていたかのように返答したため、遊火と皐月は一瞬その違和感に気付かなかった。

「い、今…… 誰か私に話しかけなかった？」

皐月にそう訊ねられ、拓蔵と大宮巡査、そして瀧原希空は首を横に振った。

「それじゃ…… 今のって」

「遊火じゃろおうなあ」と拓蔵は笑みを浮かべた。

（そっか…… あれが遊火あの子の声だったんだ）

皐月は遊火の気配を探し、そちらを見やった。姿は見えず、声を聞くこともできない。遊火は色々と言葉を発しているが、皐月には微塵みじんも聞こえてはいない。聞こえたのはほんの一瞬。それこそ無意識の内だった。

だけど何時の日か、二人でいろんなことが話せるようになる事を

皇月は願っていた。

捌・蟠（後書き）

第七話終了です。

「お嬢さん…… どうしたんだい？」

雨の中、おもちゃ屋の前で、男が女の子に声をかけている。

男は見た目からして、20代から30代くらいといったところか、スーツを着ており、髪型が七三分けという、典型的なサラリーマンに見える。

女の子は年端としはもいかに幼く、どこかあどけない雰囲気がある。

可愛らしいうさぎの絵がプリントされた赤い靴を履いており、手には折り畳まれた傘を持っている。

「あのね？ お母さん待ってるの……」

女の子は男性の問いかけに、素直に答えた。

「そうかい。実はね 小父おじさん、君のお母さんから頼まれてるんだ……」

そう云われ、女の子は首をひねる。それを見て、男性は少しばかり苦笑いを浮かべた。

「ははは、大丈夫だよ。小父さんは、君のお母さんと知り合いだからね。ちょっと遅くなるって云ってたから、よかつたら小父さんの家で」

男性が言い切る前に、女の子は駆け出した。

女の子は母親から強く言い聴かせられていたのだ。

『知らない人の言うことは絶対に信じてはいけない』と……

男性は女の子が自分から逃げる姿を見て、当然そう出るだろうと、余裕のある表情と同時に、歪んだ笑みを浮かべた。

「ダメだよ？ 子供は大人の言うことをきかないと」
あくまで優しい口調で女の子を諭していく。

しかし、女の子は母親との約束を頑なに守ろうと、男性から逃げようとする。

「駄目だよ…… 子供が大人に勝てるわけがないんだからね？」

男性は一瞬にして、女の子に追いつき、背後から抱きかかえた。当然のごとく、女の子は男の腕の中で、ジタバタと暴れだす。

「た、たすけ……」

女の子が小さく悲鳴を挙げた。

「大人しくしてれば……」

男性がそう口にし、女の子の耳元で何かを囁いた。

それを聞くや、女の子は言葉を発することが出来なかった。

しとしとと雨が降り頻り、商店街の人通りも疎らになっていた。

「結華っ！ 結華っ！」

女性が雨の中だというのに、傘もささず、辺り構わずに叫んでいる。

「由梨香っ！ 結華は見つかったか？」

路地裏の方から男性が女性に声を掛ける。

「あ、あなた…… いえ、まだ」

女性 由梨香は、夫である輝昭に状況を説明する。

「ああ…… あの子に！ あの子にもしものことがあったら」

由梨香は跪き、泣きじゃくる。

「バカっ！ 変なことを言うな！ 大丈夫だ、結華はきっと無事だ」
輝昭はそつと由梨香の肩を抱きしめる。

「これだけ探しても見つからないんだ。警察に連絡しよう」

「そ、それだけは…… まだ、誘拐と決まったわけでは」

照明の言葉に、由梨香は拒絶するように云う。

「た、確かに 結華が家から出てから、まだ2時間しか経っていない。あの子の事だ、お前との約束を忘れて、どこかで遊び呆けているんだろう」

しかし、そんな考えは夢幻泡影むげたほつようそのものである。

少女 結華が家を出てから、ボツボツと雨が降り始めていた。

由梨香は結華に「おもちゃ屋の前で待っているように」と言っていたのだ。その時に傘も持たせている。

結華の誕生日だったので、おもちゃ屋で何か買ってあげようと思っていたのだ。

先に行かせたのも、由梨香の仕事が滞っていたという理由だった。由梨香はどうして、一人で行かせたのかと自分を呪う。

それから午前様になるまで、二人は衰弱してもなお、結華を探したが、とうとう見付からず、渋々と家へと戻った。

「あら？」

由梨香が何かに気付く。家の前にポストがあり、その中に封筒のようなものが入っていた。

ポストの蓋を開け、封筒を出す。異様な形に膨らんでおり、裏側が濡れている。

「 どうした？」と輝昭が尋ねる。

「あなた。これが郵便受けに」

由梨香は封筒を輝昭に見せた。

「差出人はなしか……っ！」

由梨香の手から、封筒を半ば強引に奪い取った輝昭は、封筒を破

った。

「ど、どうしたんですか？ あなた……」

輝昭の行動に、由梨香は目を疑った。

「由梨香…… 警察に連絡だっ！」

「い、一体なにが入って……」

由梨香は輝昭が手に持っているものを見やった。

「あ、ああ、ああああ……」

ガタガタと歯を震わせ、その場にへたれ込む。

輝昭が手に持っていたのは、泥で汚れた靴であった。

そして、汚れた部分には、うさぎの絵が隠れていた。

翌朝、通報を受けた警察官が、輝昭と由梨香から、何時頃から結華が居なくなっただのかを尋ねていた。

「娘を最後に見たのは、昨日の昼です。あの子の誕生日でしたから、おもちゃを買ってあげよう…… ただ、その時、少しばかり仕事^{ひんじ}が滞^おっていました、先に行くようにと……」

「失礼ですか、奥さんは何か仕事をしてるんですか？」

「妻は会計事務の仕事をしていてね。その締切があっただんなるほど…… と、警官はメモをしていく。確かに会計の仕事ならば、家でもできる。」

「これが郵便受けに入っていた靴ですか？」

西戸崎刑事にそう訊かれ、由梨香と輝昭は頷いた。

「少しお借りできますかね？ これも大事な証拠品ですから」

「ええ。あの子が助かるのなら……」

西戸崎刑事はそれを聞くや、靴をビニールの中に入れた。

「一応鑑識に持って行って、泥の成分を調べといてくれ」
そう云われ、一緒に来ていた鑑識課の警官が、足早に渡された靴を持っていった。

泥の成分や性質から、どこの砂なのかを調べるためである。

「大丈夫ですよ。お子さんはきつと私たちが見つけます」

西戸崎刑事はそう由梨香と輝昭に云った。力強いその言葉に、夫婦は不安と安堵が混ざった、複雑な表情を浮かべた。

だが、それが果たせぬ約束だったと西戸崎刑事が知るのに、
そう時間は掛からなかった。

吉・賽の河原（後書き）

第八話スタートです。今回は少しばかり色合いが違いますよ。

貳・旧校舎

誘拐事件が起きてから、一両日経った昼下がりである。

「葉月ちゃんっ！ そっち行ったよおっ！」

学校の昼休み、黒川三姉妹の三女である葉月は、友人たちと校庭でミニサッカーをしていた。

「黒川っ！ こっちこっち！」

素通りする男の子 大山にこそ云われ、葉月は素直にパスをしようとした時だった。

「甘いぜえ、大山っ！」

「くそおっ！ 前野っ……」

大山は、大柄な体型をした前野から、道を遮られてしまう。そのせいで葉月はパスが出せないでいる。

「葉月ちゃん。こっち……」

うしろから声が聞こえ、葉月は踵でボールを蹴った。

「ナイスパスっ！」

ボールを受け取った市宮は、加速するようにドリブルし、そのままシュートするや、ボールはゴールネットを貫いた。

「すっげえっ！ さすが市宮」

男の子たちがボケとした表情で、先ほどゴールを決めた市宮を見ていた。

「ありがとう。よかったよ葉月ちゃん」

市宮にこそ云われ、葉月は笑みを浮かべた。

そうこうしていく内に、昼休みの終わりを告げるチャイムが校舎に備えられているスピーカーから校庭へと鳴り響き、試合は市宮が決めたゴールだけとなった。

「今日の片付け！ 最初はグウ　っ！」

『じゃん・けん・ぽん！』

子供たちの声が響く。ボールを片付ける役を選ぶじゃんけんである。

「今日は葉月ちゃんかあ……………」

「黒川、急げよあ！」

そう云いながら、友人たちは急いで教室へと戻っていく。

実を言うと葉月はじゃんけんが弱い。自分を置いていく友人たちが去っていくのを見ながら、ボールを片付けようと、ボールが置いてあるうしろを振り向いた時だった。

「あれ？」と、葉月は小首を傾げる。

ボーン、ボーンつと、ボールを弾く音が校庭に響きわたる。

そこには、おかつぱ頭で、黄色のカッターシャツに赤いもんぺを着た女の子が、ボールで遊んでいた。

葉月はその女の子を見たことがなく、また自分よりも小さく感じたことから、下の学年の子だと最初は思った。

「あ、あのね……………　チャイムが鳴ったから、ボール片付けないと」
女の子にそう言いながら近付くや、葉月は違和感を感じた。

今は昼である。昼ということは、極々当たり前であるが日が出ている。　にも拘らず、女の子の足元には、本来伸びているはずのものがなかった。

「あ、あなた……………誰なの？」

葉月がそう尋ねると、女の子はある方向を指差した。葉月はその指の先を一瞥する。

そこには古ぼけた校舎があり、今にも壊れそうなほどにボロい。

「　旧校舎？　あそこがどうかし……………」

葉月が女の子に尋ねようと、もう一度振り向いた時だった。ボールが落ちた音がし、そのままボールは転がっていく。そして、そこにいたはずの女の子の姿はなかった。

「黒川さん？」

ボールを手に取り、呆然としている葉月を、うしろから先生らしき女性が声を掛ける。メガネをかけてはいるが、少し幼い雰囲気がある。

「鶴見先生？ さっき女の子見なかった？」

「いいえ？ 見てませんよ。さ、みんな心配してるから、早くボールを片付けて」

葉月は鶴見先生にそう云われ、倉庫にボールを片付けに行く。

「先生、旧校舎って、誰も入れなかったよね？」

「ええ。もう入れなくなつて結構経つよ。でも、それがどうかしたの？」

そう聞き返され、葉月は女の子のことを素直に云つた方がいいだろうかと考え直した。

「ううん。ちよつと気になつたから」と笑顔で云つた。

鶴見先生はそれ以上何もきかなかった。

（あの女の子、どうして旧校舎なんか指差したんだろ…… それに、あの子もしかしたら）

葉月は女の子の足元に影《 》が《 》な《 》い《 》《 》ことに気が付いていた。

葉月は三姉妹の中で、人には見えないものが一番濃く視える。

特に女の子が指差した旧校舎の方を見れば、白い靄もやや、赤黒い手窓に映る人の顔…… それら全てが旧校舎に住み憑よいている地縛霊じばくれいであることを知っており、また、そこにいる霊たちも、自分たちが

葉月に見えていることを知っている。

にも拘らず、校庭に現れたおかつぱ頭の女の子に関して、葉月は何も知らなかった。

「葉月ちゃん。一緒に帰るお？」

市宮が葉月を誘う。彼女は既にランドセルを背負っていた。

「うん。美耶ちゃん。一緒に帰る……」

葉月は帰り支度を早々と済ませ、市宮と一緒に帰ろうとした時だった。

『聞いた？ この前、近所で誘拐事件があったって……』

上級生の女子ふたりが、葉月のクラスの前を通りかかったさい、誘拐事件があったという噂話をしていたのが、葉月の耳に入った。

『聞いた聞いた、まだ女の子見つかってないんでしょ？』

他人事のようにそう話す。実際に他人事なのだが……

「怖いよねえ。私たちも気を付けないとね？」

市宮にそう云われ、葉月は頷いた。

校庭に出ると、旧校舎の方で、大山と前野が何かをしているのが、葉月と市宮の目に入った。

「おい、止めようぜ？」

「ばあか、幽霊なんているわけねえだろ？」

「で、でもさあ？ ここって出るって噂だぜ？」

「それを今から確かめるんだろが？」

向う見ずなのは大山であり、見かけによらず、怯えているのは前野である。

「ちょっと、何やってるの？」

市宮がコソコソと話をしている大山と前野に声を掛けるや、二人はビクツと、硬直するように背筋を伸ばした。

「……って、なんだよ？ 市宮と黒川かあ？」

声をかけた相手がわかるや、大山は強がりを見せた。

「で？ 何やってるの、こんなところで」

「へへ、それは言えねえなあ…… なんせ俺たちはこれから……」

「ちょ、ちょっと待って？ 俺たちって、俺も入ってるわけ？」

大山のセリフに前野がツツコミを入れた。確かに『俺たち』だと複数系である。つまりは前野も含まれていると言っことだ。

「なんだよお？ 怖気付おしげっいたのか？ お前、見かけによらず臆病だよな？」

「しょうがねえだろ？ 人間怖いもの一つや二つ」

大山と前野の会話を見ながら、葉月はジツと旧校舎を見ていた。

入口の両側には窓があるのだが、サッシが錆びており、開けることが出来ない。使わなくなってから、何も手をつけていないからである。

その窓から子供がジツとこちらを見ている。

「どうかしたの？ 葉月ちゃん」

「えっ？ ううん、何でもない……」

市宮に声をかけられ、葉月は大山たちの方に振り返った。

旧校舎に住み憑いている地縛霊たちが、特別悪い幽霊ではないことを葉月は知っている。

先ほどからこちらを見ている子供が葉月を見るや、ニコツと微笑んでいた。

「ダメだよ。あそこって怖いといっぱいいるって、爺様が言った」

葉月の言葉に大山は目を輝かせる。予想していない反応だったため、葉月は首を傾げた。

「お前んとこって、たしか神社だったよなあ？　ってことは、あそこ何がいるっていう証拠じゃないか？」

大山の頭の中では、神社とお寺が混同していた。

「よし、黒川！　お前リーダーなあ！」

そう云われ、葉月は目を点にした。

「ちよつと、大山君？　どうして葉月ちゃんが一緒になるわけ？」

「なんだよお？　嫌なら来なきゃいいだろ？」

大山と市宮が口喧嘩を始めた時だった。

旧校舎の方から、何かが割れる音がし、全員がそちらを見やった。

「お、おい……　だ、誰がいるんじゃないのか？」

前野が怯えた声で云う。大山と市宮も少しばかり怯えた表情を浮かべた。

そんな中、一人葉月だけは、旧校舎の窓に映る子供の表情を見ていた。

窓に映る子供の霊も何が起きたのか、不思議そうな表情を浮かべている。それを見るや、葉月は首を傾げた。

旧校舎に住み憑いている地縛霊が自分たちを怖がらせ、帰らせようと、ポルターガイスト（勝手にものが動いたり、音がる現象の事）を起こしたのではと、葉月は思っていた。

しかし、葉月の視野に映っている旧校舎の幽霊たちも不思議そうな顔をしていることから、それ以外の何かがあったということになる。

「よおおおおし、こうなったら、何の音かみんな確かめにいこうぜ？」

大山の一声に、前野と市宮が唾然とする。

「ちよつと、なんでそんな危険なことするわけ？」

そう市宮が止めたとしても、バカみたいに向う見ずな大山である。

人の話を聞かず、我先にと音がした方へと走っていった。
市宮と前野は慌ててその後を追っていく。

葉月は再び、窓に映る子供の霊や、周りで漂っている浮遊霊を見るが、やはり彼らの仕業ではないと察すると、先に行った三人の後を追った。

参・聲音

旧校舎の側面の壁両方に小さなドアがある。その横に窓があり、そこが割られていたため、先ほど葉月たちが聞いた音は窓が割れた音だと知る。

「ねえ？ これって……足跡じゃない？」

市宮が地面を指差ししながら、葉月たちに言った。

窓の下は先日の雨で泥^{ぬかる}んだ跡があり、そこに足跡がつけられている。

「誰かが旧校舎に入っていたのかな？」

前野がそう言うが、葉月は何か可笑しいと泥濘を見ていた。

「黒川？ どうかしたのか？」

大山にそう言われ、葉月は大山の足元を指差した。

「俺の足がどうかしたのか？」

「うっん。雨が降ったのって、今日の朝までだったよね？ それだともう地面が乾いてて、泥濘なんて出来ないはずだよ？」

そう葉月が云うと、市宮が確認するように、泥濘に触れた。

「乾いてる……」

「ってことは、この足跡は雨が降っていた時に付いたってことか？」
しかしそうだとすれば、葉月たちが聞いた音はなんだったのかと
いうことになる。

「ま、まさか……幽霊の仕業？」

前野が青冷めた表情で云う。

「旧校舎の中だったりしてな？」

大山がそう云うが、火に油を注ぐようなものである。

前野が先程よりも酷い悲鳴を挙げた。

「大山君の云うとおりかもしれない」と葉月が云うや、
「ちよつとまてよ？ 黒川までそんなこと言うのかよ？」

と前野にそう云われるが、葉月は首を横に振った。

「そうじゃないよ。靴の跡があるってことは、少なくとも、旧校舎に誰かが入ろうとしていた。それに、靴先が校舎の方を向いていて、その逆を向いたのがない」

葉月に云われ、三人は泥濘を見た。その言葉通り、自分たちの方を向いた足跡がなければ、周りに足跡すらない。

「それじゃ…… やっぱり誰かが校舎にいるってこと？」

市宮がそう云うや、葉月は小さく頷いた。

「窓を割って、鍵を開けたんだと思う」

「それじゃ、やっぱり誰かがいるってことか？」

大山は目を輝かせる。葉月と市宮はそれを見るや呆れた表情をする。

「ねえ？ 本当はどうなの？ 旧校舎にいる幽霊の仕業とかじゃないの？」

そう市宮は葉月に耳打ちをする。

彼女は葉月が自分とは違う何かが視えていることを知っている。

「ううん。みんな不思議そうな顔してる。それに、もし彼らの仕業だったら、私たちを近付けないために、もっと怖いことしてるだろうし」

葉月は一度、旧校舎にいる幽霊たちに悪戯をされたことがある。

幽霊たちは自分たちが見えていないと思つてのことであつたが、葉月は最初から最後まで、視えていたことを黙つたまま、態とはまつてやつていた。

その悪戯というのは、急に足元を掬すくわれ転ばされたり、耳元で冷たい息を吐かれたり、後ろから押されたりなどである。

「おい二人とも、何話してるんだよ？」

前野に声をかけられ、葉月と市宮はそちらを見やるや、大山の姿がどこにも見当たらないことに気付く。

「あれ？ 大山君は？」

葉月がそう訊ねると、前野は溜息を吐いた。

「あいつ…… 旧校舎に入ってた」

葉月と市宮がその言葉を理解するのに、数秒ほど掛かった。

「ただいま……」

皐月が学校から帰ってくるや、居間の方から阿弥陀警部と大宮巡查が出迎えるように出てくる。

「あれ、阿弥陀警部に大宮巡查？ なんか事件があったんですか？」

皐月がそう尋ねるや、大宮巡查が答えるように頷いた。

「ああ、皐月おかえり。葉月と一緒にじゃないの？」

二階から降りてきた弥生にそう尋ねられたが、皐月は首を横に振った。

「ううん。一緒じゃないけど 遊びに行っただんじじゃないの？」

「それが…… 爺様や、うちで働いている職員の人達にも訊いたんだけど、誰も葉月が家に帰ってきたのを見てないって」

皐月は手首に着けている腕時計を見た。時刻は午後6時になろうとしている。

「葉月って、遊びに行く、行かない関係なしに、一回帰ってきて、宿題してから出かけるよね？」

「だから、こうやって心配してるんでしょ？ 遊火にもお願いして探してもらってる」

そんな話を聞いているあいだ、皐月は玄関に葉月以外の靴があることに気付いた。

「阿弥陀警部と大宮巡査以外に誰か来てるの？」

「ええ。ちよつと葉月さんに霊視してもらおうと思ひましてね」

阿弥陀警部がそう言つと、皐月は首を傾げた。

(西戸崎刑事？)

居間から出てきた西戸崎刑事に皐月は驚きを隠せないでいた。

(あれ？ でも、どうして西戸崎刑事が？ たしか浅葱の力で記憶を消去していたはずなんだけど)

皐月は弥生に目をやったが、弥生もどうしてうちに来たのかという感じである。

「ここに不思議な力を持つてるつてのがいるつて聞いてなあ。阿弥陀に紹介されたんだよ」

西戸崎刑事がそう説明する。それを聞くや、以前自分たちに会っていたことについての記憶は消えていることがわかるや、皐月と弥生は阿弥陀警部を睨んだ。

「あ、ははは…… まあ、まだ死んだとは決まってるんですけどね？」

阿弥陀警部が不謹慎なことを云うや、西戸崎刑事が胸倉むなぐらを掴んだ。「や、やめてください二人とも」

その二人を大宮巡査が止めに入った。

「誘拐事件？ それつて、この前起きたやつですか？」

弥生が居間にお茶を持ってきて、全員に渡しながら、阿弥陀警部に尋ねた。

「察しの通り、先日起きたやつです。被害者は新村結華むいむいさん、7歳。小学2年生…… 母親とおもちやを買う約束をし、おもちや屋の前

で待っていたところを誘拐された」

阿弥陀警部が手にもっている手帳を読みながら、一件の詳細を伝える。

「でも、誘拐だと」

臯月がそう言おうとするが、言葉を止めた。

「実は、誘拐された日の夜。被害者宅の郵便受けに泥が付いた靴が封筒に入れられた状態で投函とうかんされていたそうです。その靴が結華さんのものだと言御さんから証言があったようです」

実際は阿弥陀警部ではなく、西戸崎刑事が事件を担当しており、詳しい話はあまり聞いていない。

「土の成分は調べたのか？」

拓蔵がそう訊くと、大宮巡査がそれに答えた。

「靴に付着した泥を分析したところ、特殊な肥料と木片が付着していました」

「肥料と木片？」

臯月が鸚鵡返おつむがえしするように聞き返す。

「肥料は特別なもので、オーダーメイドだそうです。製造しているところはまだわかりませんが、おそらく福祠北ふくし小学校で使用しているものだ」と

『ちよ、ちよっと待って？ それって……』

臯月と弥生が同時に同じことを言う。

「ええ。お二人が気付いた通り、福祠北小は葉月さんが通っている学校です」

「でも、そうだったとして、学校に犯人がいるとは……」

弥生は拓蔵を見遣った。

「そう言えば、爺様って、暇なときは庭いじりしてるよね？」

弥生はその後に（いつも暇そうだけど）とは云わず、心の中で咳いた。

「ああ。肥料と木片はよく使うが、木片はウッドチップといって、土壌に混ぜるときは、よく腐熟させてから使うんじゃない」

「ええ。ですが、発見された靴に付着していた木片は腐ってはいなかった」

「そうになると、肥料用と一緒に付着したか、その近くに細かい木片が散らばっていたかである。」

「なあ、阿弥陀。本当に大丈夫なのか？」

西戸崎刑事が阿弥陀警部に訊ねる。

「ええ。大丈夫ですよ。ただ、最悪な方も視野に入れたいほうがいいかもしれませんけどね」

阿弥陀警部が釘を刺すと、西戸崎刑事は臯月と弥生、拓蔵を見やっただ。

「阿弥陀警部、あんたの口調からして、電話は来てないということじゃない？」

拓蔵にそう言われ、阿弥陀警部は分が悪そうな表情を浮かべた。

「誘拐事件なら、身代金欲しさに電話するじゃろうが、犯人は突発的にやっている。誘拐はその連絡先を知っているということになるが……」

拓蔵も阿弥陀警部が考えている最悪の方を想像していた。

「もし誘拐だけなら 犯人は電話をするでしょ。非常用に連絡先を書いてますからね。名札の裏とかに…… ですが、誘拐されて三日ほど経ってもその連絡がない」

大宮巡査がそう言うと、拓蔵は少しばかり考え込んだ。

「泥は葉月が通っている学校が使用している肥料が混ざった土じゃったな…… 仮にそうだったとして、どうして犯人は靴なんかを被害者宅の郵便受けに入れたんじゃない？」

確かに奇妙である。いくら誘拐したことを証明するものだったとしても、それを入れ、泥の成分等を調べられれば、自分の居場所や、

少女を何処に連れ回しているのかがわかってしまふ。

いふなれば、自分で自分の首を絞めているようなものだ。

「それがどうかしたんですか？」と西戸崎刑事が尋ねる。

「いや、ちよつとあの学校の七不思議を思い出したんでな」

それを聞くや、警官たちは首を傾げた。

「臯月、遊火が戻ってきたら、葉月を探しに行ってくれんかの？」

そう云われ、臯月は頷いた。それと同時に遊火が帰ってきた。

葉月の行きそうな場所全てを探したが、見付からなかったと、遊火は弥生と拓蔵に伝えた。

肆・七不思議

「ねえ？ 誰か懐中電灯持ってない？」

前野が窓から旧校舎へと先に入り、市宮と葉月を校舎へと入れ終わった後に市宮が云った。

外はまだ明るいのだが、旧校舎の窓は一部を除くと、殆どが壁うちされているため、光が入ってきていない。そのため、数米^{メートル}先までしか見えなかった。

「それより大山を探そうぜ？」

「そうね、さつさと見つけて、こんなところ早く出ましょ？」

懐中電灯を諦めた市宮は、前野に同意し、ゆっくりと歩き出した。

（ねえ？ あなたたちは知らないの？）

先に行く市宮と前野からはぐれないようにしながら、葉月は自分の周りで漂っている浮遊霊たちに訊ねた。

旧校舎は今から百年以上前、それこそ明治くらいからあったと言われている。

老朽化が進み、危険ということもあってか、既に使用されることはなくなっている。

利用価値がないにも拘らず、この校舎だけはどどういうわけか、建て壊しを町役場に出していない。

葉月はそういうことを知っているわけではないが、浮遊霊の数はそれだけ、この校舎が彼らにとって居心地のいい場所だということに薄々と感じていた。

人が集まるところには霊気も集まりやすく、浮遊霊を呼びやすい。また長年建ち続けられているため、いいことも悪いことも起きている。

「どうしたの？ 葉月ちゃん」

市宮にそう云われ、葉月はそちらを見やった。

「だんだん暗くなってきたね？」

夏なので日暮れまでまだ時間はあるとしても、やはり旧校舎特有の怖さがあるせいか、窓から微かに洩れ込んでいる光がなんとも頼りない。

「さ、さっさと大山見つけようぜ」

前野が突然立ち止まり、それに気づかなかった市宮と葉月は大山の背中にぶつかった。

「いった…… ちよつと、急に立ち止まらないでよ？」

市宮がぶつけた鼻を指で摩りながら、文句を言う。

「ちよつと、前野君？」

何か一言言いなさい、と言おうとするが、市宮は前野の顔から血の気が引くのに気付いた。

「あ、あのさあ？ ここつてあれじゃないか？」

前野はそう云いながら、教室の部屋名が書かれた看板を指差した。

「えつと…… 2-3つて…… あれのこと？」

市宮も前野が震えている理由に気付いた。

「確か、この教室でいまだに勉強している子供がいるって噂があったわね？」

葉月はそうなの？と浮遊霊に尋ねる。すると浮遊霊はスーと締められたドアから中へと入っていった。

葉月はジツと教室のドアを見ていたが、自分の周りで漂っている浮遊霊かれら以外の靈気を感じなかったので、尋ねたのだ。

「ち、違うところいこうぜ？」

そう言うや前野は足並み早く先へと進んでいった。

「ねえ？ 噂って他に何かあるの？」

下駄箱で一度休憩しているとき、葉月が前野と市宮に尋ねた。

1階を一周してはみたが、教室などに入れるところがなく、これから2階に上がろうと考えていた時だった。

「そうね。さつきあった2・3の教室に出てくる居残り幽霊以外だと…… 音楽室のピアノ弾きかな？」

（なんともまあ、古典的）と葉月は思った。

「夜中、誰もいない音楽室にあるピアノがひとりでに鳴るんだって…… で、それを聞いた人は夜な夜な苦しめられるとか」

「他には？」

これだけ古い旧校舎であり、歴史も古い。怖い話が一つや二つとは言わないだろう。と葉月は考えていた。

「校長室の写真。歴代の校長先生が写された写真があるんだけど……」

「でも、それって今使っている校舎の方にあるんじゃないの？」

「それがね？ なぜか3代目のだけないんだって で、その校

長先生は、学校の行事で防災訓練をした時、被災にあって亡くなっただって…… 写真も何も残ってないとかなんとか……」

葉月は先日、鶴見先生と一緒に校長室の掃除をしていたため、歴代の校長が写された写真を見ていた。

その中にひとつだけ間が空けられた額縁があったが、新しい校舎にもっていく際、紛失したという。

実はその写真に写っている校長が亡くなった際、葬式の遺影として使用された。

もともと写真に写るのを嫌っていた校長だったせいもあって、唯一写真が写っていたのがそれだけだったのだ。

当然、その遺影は校長先生縁ゆかりの人物が今も所有している。

「後、3階と4階の踊り場にいる女の子。階段で転倒死した女の子

が夜な夜なそこで踊ってるんだって」

「お、俺もひとついいか？ 理科室の人体模型と白骨模型。夜な夜な動き出して、学校中を徘徊するんだってさ」

前野も少し話したほうが気が紛れるのか、自分の知っている怖い話を語り始めた。

「それと図書室の女の子。夜な夜な誰もいない図書室で本を読んでいるんだって」

これで市宮と前野が話した噂話は6つである。それらを語り終えてから数秒ほど経った時だった。

「あれ？」と葉月は首を傾げた。

「どうかしたの？ 葉月ちゃん」

何か腑に落ちていない葉月を見ながら、市宮は尋ねる。

「学校の噂って、だいたい7つだよな？」

葉月にそう言われ、市宮と前野は互いを見やった。

「ねえ？ 他に何か知らないの？」

「知らねえよ？ 俺も聞いたことある噂は全部言ったぜ？」

「でも、確かに学校の怖い噂って、だいたい7つなんだけど……」

「それになんか一つ忘れてない？」

葉月がそう云うや、市宮と前野が「どういうやつ？」と尋ねた。

「ほら、学校の怖い噂で、一番多い話」

そう葉月が云うや、市宮が俯いた。その仕草に葉月と前野は首を傾げた。

「どうかしたのか？ 市宮……」

前野がそう訊ねると、市宮は上目遣いで睨みつけた。

「あ、もしかして……」と葉月は途中まで言うと、

「でも、さつき一周したけど、入れる場所なかっただろ？」

前野も市宮がどうしたのか気が付いた。

「壊してでもする！」と市宮は物騒なことを呟いた。

「そこで出来ねえのかよ？」

「出来るかあっ！」

前野の一言にツツコミを入れたせい、市宮の表情はトイレを我慢しているせいか、強ばこわっている。

「美耶ちゃんの云うとおりにしよ。トイレを探して」

そう葉月が云った時だった。葉月の目の前に女の子がスーと現れ、曲がり角の先を指差している。

その女の子が昼休みが終わる頃見た女の子だと葉月は気付く。

(むこうに何かあるの?)

そう尋ねようとしたが、視野に入っているはずである前野がそれに気付いていない。

つまり自分にしか見えていないことを直感的に葉月は理解した。

「美耶ちゃん。まだ見てないところがあるかもしれない。そこ行ってみよ？」

葉月はそう云いながら、先ほど女の子が指差した方へと、市宮と前野を案内した。

女の子が指差した方にドアがないトイレがある。

長年使用されていなかったせいもあり、異臭を放っている。

「うげえ、すんげえきもちわりい」

前野が鼻を抑える。葉月と市宮も同様だった。

「こんなところしかないんだね？」と市宮は葉月を見やるが、せつかく見つけてもらったこともあり、文句は言えない。

それどころか、そろそろ我慢の限界でもあった。

背に腹は変えられないと、市宮は葉月と一緒にトイレの中へと入り、個室の前で葉月を立たせ、市宮は用を足す。

「葉月ちゃんいる？」

「いるよー」

「前野君は？」

「いるぞー」

一人になった心細さもあるせいか、すぐ近くにいるというのに、市宮は五秒に一度は誰かいるかの確認を取っていた。

市宮が用を済ませ、下ろしていたショーツを上げようとした時だった。

「あれ？」と便器の中に何かが落ちているのに気づくや

いいやあああああああああああああああああ！！！！

突然、甲高い声が聞こえ、近くにいた葉月は耳を塞ぐ。

「美耶ちゃん、どうしたの？」

葉月は個室のドアを開け、中を覗いた。

トイレの中には尻餅をついている市宮が、ガクガクと体を震わせ、視点を合わせようとしなない。

「美耶ちゃん、どうしたの？」

もう一度声をかけると、市宮は葉月を見やった。

「は、はははは…… 葉月…… ちゃ、葉月ちゃん？」

何か怖いものを見たのか、市宮は呂律が回っていない。

「どうした？ 何かあったのか？」

廊下の方にいた前野が心配になって、葉月と市宮のところへと駆け寄ってくる。

「ま、ままま…… 前野…… ふうんうっ！」

市宮が前野を見やる。

そして……市宮は便器の奥を指差した。それと同時にトイレの電球が灯り始めた。

「ど、どういうこと？ だってここ使ってないんじゃない？」

葉月がそう市宮と前野に訊ねる。が、訊いたところで二人が知っているはずもない。

「それにしても、美耶ちゃんが見たのって……」

葉月はなおも一それを指差している市宮を一瞥し、そのまま指さした方を見た。

「んぐうっ！」

それを見るや、葉月は込み上げてきた胃液を押さえ込むように口を抑えた。

「んだよ？ 黒川まで、一体何が……」

前野は何があるのかと便器の中を覗くや、

「うげええええええっ」

その場に膝き、胃液を吐き零した。

便器の中に放置されていたのは……髪の毛の長い女の子の死体だった。それが無造作に捨てられていて、便器の中に捨てるため、細かくしようとしたのだろう。関節がありえない方向に折り畳まれている。髪が長いせいか、それがうじゃうじゃと顔にまとわりついており、しっかりと見えるわけではないが、顔がグチャグチャで血塗れになっていることだけは確認できた。

その周りには腐ったものを餌とする蠅が集^{たか}まっている。

葉月は冷静になって、死体を見るや、違和感を感じた。

（白骨化してない？ それに……まだ殺されてそんなに経ってないんじゃない？）

もし使われなくなった時のものだったとすれば、すでに白骨死体
になっている。

しかし、生身の躰のままだとすると、そう昔ではないことになる。

「は、早く出ようぜ？」

前野がそう言つと、葉月は頷き、腰を抜かしている市宮を前野と
二人で廊下へと運んだ。

五・閻引

死体から逃げるように、トイレから出た三人は、息を整えるのに必死だった。

「な、なんだよあれ？」

前野が涙目になって、葉月と市宮を一瞥する。

「わ、わからないわよ…… 私に訊かれても」

市宮は上げ忘れていたシューズを上げ直し、トイレの方を見やる。

「でもよあ、なんであんなところに死体があるんだ？」

確かに、誰も入ることができない旧校舎に、真新しい死体があるのは、如何せん可笑しい。

どこか別の入口があるのかというと、そうではない。

下駄箱の他には側面にある二つのドアだけで、そのふたつとも頑丈に閉めきられている。

唯一入れるとすれば、葉月たちが入ってきた窓からしかない。

「もしかして、あの足跡って…… 犯人の……」

窓の下にあつた足跡は、葉月たちよりも明らかに大きい靴跡だった。

「でもよ？ それだったら、どうして逃げようとしらないんだ？ あの足跡のやつが、あの死体を捨てたんだろ？」

前野が云うとおり、死体を遺棄したのなら、さっさと逃げればいい。

「みんなが逃がそうとしないからじゃないかな……」

葉月はスツと立ち上がり、目を瞑った。

「おい、黒川、何やって」

「しっ！ 黙ってて！」

前野が尋ねようとしたのを市宮が止めた。

「2・3で意残りをしている女の子……」

音楽室のピアノ弾き……

居なくなつた校長先生……

踊り場の女の子……

理科室の動く人体と白骨模型……

図書室の女の子……

7つ目の話を知ってる人は……」

葉月は呟くように誰かに訊ねた。

それは、自分の周りで漂っている浮遊霊かれらの声を聞くため……
もし知っているのなら、教えて欲しいと考えていた。

「7つ目のお話は……　　っ、ない？　　ないって　　どういふこと？」

葉月はそう呟くや、ゆっくりと目を開いた。

「葉月ちゃん、どういふこと？」

市宮が尋ねると、前野は不思議なものを見たといった感じに、すこしばかり驚いている。

「二人が話した6つの内、いくつかは確証があるって　　」

葉月は浮遊霊かれらから聞いたことを説明した。

まず一つ目の『2・3で意残りをしている女の子』。

これは教室に女の子がいることに気付かず、用務員が校舎の入口を閉めたことが原因とされている。

しかも、その翌日から連休に入っていたため、学校に来るものは殆どいなかった。

二つ目の『音楽室のピアノ弾き』。
これに関しては、要するに浮遊霊かれらがいたずらに遊んでいたせいであつた。云つてしまえば、ポルターガイストと大差ない。
そういうことであれば、5つ目の『理科室で動く人体と白骨模型』も同様である。

三つ目の『居なくなった校長先生』は既に説明しているので割愛する。

四つ目の『踊り場の女の子』。
階段から転落したさいに、頭を打ち付け、女の子は気を失い、そのまま亡くなつた。

死者は成仏しなければ、死亡した場所をさまよい続ける。
踊り場で踊っているのは、その女の子が舞踊を習っていただけのことである。

六つ目の『図書室の女の子』。
こちらは一つ目の話と類似しているが、地震で崩れた本棚の下敷きになつたことが死因となっている。

以上が旧校舎に伝わる六つの話の真相であつた。

「だけど、七つ目の話は誰も知らないって」「
なあ、一体何云つてんだ?」

前野が葉月にそう尋ねるが、市宮はそれを無視する。

「知らないって……でもこれだけ古いと、怖い話の七つくらい余裕で出来るんじゃないの?」

「七不思議は誰かが噂を作らなければ不思議にはならない」

「誰かが語り始めたから、それが俺たちの耳に入って、噂になつて

いくつてことか？」

前野がそう言つと、葉月は頷いた。

極論ではあるが、結局は誰かに伝えない以上、噂話はなかったことになる。

だからこそ学校の七不思議に留まらず、すべての怖い話は、長年誰かが誰かに伝え、それが数珠繋ぎのように伝え続けられているからこそ、今に至るのだ。

「そうだ。大山君は？」

市宮が思い出したように言う。それを言われるまで、葉月たちは校舎に入った大山を探していたことを漸く思い出した。

先程トイレで見た、女の子の変死体が余りにも印象強かつたため、薄れていたのだ。

「黒川？ お前のその訳わかんねえので訊けねえのか？」

そう云われ、葉月は再び目を瞑る。

「大山君、大丈夫みたい。今2階にいるって　　ご要望があれば、怖がらせて立ち止まらせるけどって云つてる」

そうしてもらえると探す手間が省けるね。と市宮が云つた。

「でも、私たち自身も危険だって……」

そう言つと、市宮と前野は表情を強ばらせた。

そんな二人を見ながら、葉月は複雑な表情を浮かべた。

どうして校舎に入った犯人を逃がそうとしないのか、浮遊霊かれらにとっては葉月たちも含めて、さっさと帰って欲しいはずである。

そんな葉月の疑問に答えるように、三人の足元を冷たい風が通り抜けた。

「なんだよ……」

教室の隅すみで、大山は肩を震わせている。

先程葉月にお願ねがいされた浮遊霊たちが、大山をその場から動かさないようにしていた。

外側と廊下側の窓をガタガタと震わせたり、突然机が動いたり、ポルターガイストを起こしている。

「南無阿弥陀仏…… 南無阿弥陀仏……」と、大山が念仏を唱えたところで、浮遊霊たちは何ともない。

そもそも『南無阿弥陀仏』は、（阿弥陀如来に帰依します）という意味があり、阿弥陀如来が「自分の名前を唱える者はだれであっても、即座にその者のところへ行って、極楽浄土に導く」と云ったことから由来している。

自分の名前を『唱えたものは……』という意味では、浮遊霊自身が唱えているわけではないので、何の意味もなかった。

また成仏してほしいという意味合いでも使われるが、そんな簡単な方法だったら、浮遊霊かれらもさっさと成仏したいものである。

ガタンツ！と、今までで一番大きな物音がした。

（ひっ！）と大山が小さな悲鳴を挙げる。

途端先程まで浮遊霊たちが行なっていたポルターガイストがピタリと止まった。

「な、なんだよ？ なんなんだよ？」

大山は顔を強ばらせ、音がした方を見やると、

廊下の方に人影が見え、それに声をかけようとした。

「だめ……ここから動いじやだめ……」

小さな声が聞こえ、大山はそちらを見た。

「き、きみは？」

そこにはおかつぱ頭で、黄色のカッターシャツに赤いもんぺを着た女の子がジツと大山を見ていた。

大山はいつからいたのかと訊ねたかったが、今はこの女の子の言うとおりにしようと思感的に思った。

大山は廊下から見えないように、出来る限り死角になるよう、体を低くしながら、こちら側から見える位置まで移動する。

そしてゆっくりと廊下を見やった。

（大人の？）

廊下には知らない大人の男性が、何かを探すように、首を動かしている。

見た目は20から30くらいで、上着を脱いでいるが、スーツを着ている。

何かを喋っているようだが、ここからでは聞こえない。

（学校の先生じゃなさそうだし、どうしてこんなところ？）

大山は自分たちを探しているわけでもなさそうだと、子供ながらに直感する。

即座に危険だと察知したのだ。

「ああ、くうそお、いったい何処に行きやかったア……」

そう男性が叫ぶと、ドアを蹴った。

「あんのくうそがきいやあつ！ 人の指噛みよってかんにい！ すうげえいつてええ……」

呻き声を挙げるように、男は何処かに行く。

大山はそつと廊下側の窓へと匍匐ほふくぜんしん前進する。
廊下側の窓をそつと覗くと、男は居なくなっていた。

(くうそお…… おれがこんなことしなきゃ……)

大山は自分がしたことに後悔していた。校舎に入らず、そのまま家に帰ればよかったんだと……

「なあ、どうして声出しちゃいけないんだよ？」

階段をゆつくり上がっていく葉月に、前野が声をかける。

「ばかつ！ この校舎の中に、私たち以外の人がいるのよ……それにもその人が、あの女の子を殺した犯人かもしれないじゃない」
市宮が声を殺しながら、捲まくし立たてる。

「それに、さつき葉月ちゃんがこの校舎にいる幽霊たちに、大山君を動かさないようにしてもらってるから、安心だと思っ」

信用できるのか？と前野は云った。

市宮も葉月のことを信じているとはいえ、本当に浮遊霊なんかを信用していいのだろうかと考えていた。

「大丈夫。この校舎で悪い怨念は感じないから……」

「怨念？ 怨念にも善し悪しがあるのか？」

葉月が二階にさしかかろうとした時だった。突然、三階の踊り場へと駆け上がっていく。

それに驚いた前野と市宮は慌てて後を追った。

葉月は、ちょうど二階からこちらに見えないように隠れ、廊下を一瞥する。

前野と市宮も、葉月のマネをした。

「なあ、どうした」

前野が声をかけると、葉月は普段見せない真剣な目で睨みつけた。廊下の方から足音が聞こえ、葉月たちに近づいてくる。

「大山じゃないのか？」

前野がそう呟くが、葉月は違う意味で警戒していた。

「さつき、前野君が怨念に善し悪しがあるのかって訊いたよね？」

葉月にそう言われ、前野は頷いた。

「怨念つていうのは、この世に未練がある人や、誰かに怨みがある人がもっている想いなの。突然死んだ人は当然、やり残したことがあるから、この世に未練がある。だけど、それは人に対しての怨みじゃなくて、自分に対しての想い」

「それじゃ、それがいい方の怨念つてこと？」

市宮にそう言われ、葉月は頷く。

「それじゃ、悪い方は？」

「誰かに殺されたり、逆に誰かを殺そうとしたり…… 言い換えれば、地獄すら恐ろしくないと思っている人がもつ想い……」

葉月は今まで色々な死者を見たり、その声を聴いたりしてきた。

その殆どは、誰かに忘れられている存在だった。

かれらが成仏できないのは、死んだ事をほったらかしにされているからである。

勿論、遺族はかれらの死に悔いている。どうして死んだのかと慟哭する。

しかし、そんなのは上辺だけの事である。

葬式や火葬などにかかる費用。

老人や金持ちならば、遺産相続など、泥沼なことが先立ってしまい、死者に対する哀れみなど、一瞬で消えてしまう。

それに結局は生き物は地獄に落ちるものだ。

天国にすぐに行けることはない。それを悔いり、懺悔すれば多少罪は軽くなる。

永い永い六道輪廻を繰り返し、初めて天国を意味する天道へと繋がっていく。

それは気が遠くなるほどの時間。云ってしまえば、終わることのない拷問そのものである。

それならばいっそのこと、成仏しないほうがいいんじゃないかと、

葉月は感じていた。

「……でも、みんな本当は旅立ちたいんだよ」

『えっ？』

葉月の言葉に、前野と市宮は目を疑った。

「どうして想いがそこにとどまるか…… ここには校舎にいる幽霊たちの思い出がいつぱい詰まってるから…… 良いことも悪いことも全部ひっくりかえして、思い出が詰まった場所だから」

葉月が呟くようにそう言うと、先程聞こえた足音が一階へと降りていく。

「行ったのか？」

「どうかな？ 葉月ちゃん、お願いできない？」

市宮は葉月を通して、幽霊に確認をしてもらおうと考えていた。

「おれ、確かめるわ……」

前野はそう言うや、階段を見下ろした時だった。

「パアッ！」

突然男が前野の前に現れ、顔を掴まれる。

「こおんなところであんなにしてんだあ？ があきいどもおおおっ
！？」

「んっ！ んぐうっ！」

ジタバタと掴まれた手を解ほどこうとするが、まったく歯が立たない。「子供はもう帰る時間だろ？ だったら早く帰って、ママのおっぱいでもすってるおっ！」

そう云うや、男は力任せに前野を投げた。背中を教室の壁にぶつけ、前野は気を失いかける。

「前野君っ！」

市宮が前野に近づこうと、階段を駆け下りる。

「おっと、行かせねえぞっ
！」

市宮の前に立ちふさがる男が突然悶絶する。

「こ、こんのくうそがきや　　げえほおっ！」

男は股間を抑えながら、崩れるように四つん這いになっていく。

葉月が男の股間を思いつき蹴ったのだ。

「い、痛そうだね？」

「今はそんなこと言ってる場合じゃない！　前野君、大丈夫っ？」

葉月がその声を掛けると、前野は頭をフラフラさせながらも意識を保っていた。

「くうそお、首がいてえ……」

（よかった……　前野くんの守護霊が護ってくれたんだ）

葉月は前野のうしろに誰かがいるのが視えた。

それは兵隊姿の男性で、葉月たちより一回り大きい風格をしている。

葉月は、彼が前野の守護霊であると、感じていた。

「動ける？」

「な、なんとかなあ……」

「大山君のところに早く行こう」

三人は未だに体を震わしている男に目もやらず、葉月の案内で大山がいる教室へと向かった。

「大山君っ！　大山君っ！」

市宮が教室のドアを叩きながら声を掛ける。

「い、市宮か？」

教室の方から知っている声が聞こえ、葉月と市宮、前野は安堵の表情を浮かべた。

「ちよ、ちよっと待っていてくれ、今開けるから」

大山がそう言うと、窓のサッシに置いていたつつかえ棒を取り外した。

「ここからなら入れるだろ？ この窓、鍵が壊れてるみたいなんだ」
大山自身もその窓から、この教室に入ったと説明した。

「ごめん、みんな…… 怖い思いさせて」

大山は深々と頭を下げ、葉月たちに謝った。

「ほんと、そうだよな？ こっちは色々大変な目にあってるんだぜ？」

前野がそう言うのと、大山は葉月と市宮を一瞥した。

「大山君、どうしてこの教室に？」

「それが、誰かにこの教室が一番安全だからって言われて、だけど、突然窓がガタガタってなったり、ものが動いたりして、どこか安全だったの？」

それを聞くや、葉月は前野と市宮を見た。その二人も思いあたりがあった。

「な、なんだよ、みんなしてえ…… なんか知ってるんだろ？」

大山にそう言われるが、

「い、いや…… お前も苦労したんだなあと思ってさ」

「そ、そそ…… こうやってみんな再会できたんだから、ねっ？」

前野と市宮にそう云われ、大山は複雑な表情を浮かべた。

「それでどうやって帰る？ もう外が真っ暗になってきてるぞ？」

「それにさっきいた男の人がいるかもしれないし」

危険なのはわかってるが、家に帰らない訳にもいかない。

「美耶ちゃん。今何時かわかる？」

葉月にそう言われ、市宮はポケットの中に入れていた時計を見た。

「えっと…… 夜の7時になるくらい」

「み、みんな心配してるだろうな……」

前野がそう言った時だった。葉月は教室の隅で自分たちを見ている女の子に気づく。

「あなた…… 確か昼間の……」

「んっ？ 何か見えるのか？ って、誰だよ、お前っ！」

前野が驚き、市宮は声を出さないように口を抑えている。どうやら全員に見ているのだと、葉月は感じた。

「あなた…… 誰なの？」

「……………」

葉月の問いに女の子は答える仕草をするが、何を言っているのかわからない。

「何言ってるんだ？」

大山がそう云う。前野と市宮も同じだった。

「もしかして、大山君をこの教室に連れてきたのって、あなたなの？」

市宮がそう女の子に尋ねると、女の子は頷いた。

「やつぱり…… っ！ ねえ、わたしが校庭でああなたの事を探ねた時、旧校舎を指差したのって、一階のトイレに死体があることを教えなかったから？」

「し、死体？」

葉月の言葉に、大山は驚く。

「お、お前ら、そんなの見てるのかよ？」

「見たくて見たわけじゃないわよ？」

市宮が大山を睨みつける。

「その死体を見つけて、私たちを通じて、警察に知らせてほしかった。だから犯人が逃走しないように、この校舎から出そうとしなかった…… っってこと？」

市宮がそう訊ねると、女の子は頷いた。

「んだよそれ？ だったらさっさと校舎から出せばいいじゃねえか？」

「窓の泥濘にあった靴だけじゃ証拠にならないってことか？」

大山がそう云うと、女の子は答えるように頷いた時だった。

「あああああああああああああああああっ！！」
突然、前野が大声を挙げる。

「な、なんだよ？」

「ちよつと、前野君、静かにして！ 犯人に見つかったらどうするの？」

大山と市宮に睨まれ、前野は頭を下げる。

「それでどうかしたの？」

「今思い出したんだけど、あの窓って、この前、大山と野球やって、割ったんじゃないかってっけ？」

そう云われ、大山は「あっ！」と声を挙げ、啞然とする。

「ちよつと、それどういう意味？」

市宮が大山と前野を睨みつける。

「つまり、窓は最初から割られていて、犯人はそこから窓を開けて中に入った」

そういうことなら説明がつく。しかし、自分たちが聞いたあの音はなんだったのか

その答えに気付くや、葉月は吹き出した。

まだ理解できてない他の三人は首を傾げている。

「みんな……演技うまいなあって」

そう云われ、市宮と前野は理解した。どうやら、校舎に漂っている幽霊が、どこかの窓を割ったのだと、葉月は説明した。

その証拠に、3階の窓がひとつ割られていた。

「本当に大丈夫なの？」

市宮が、自分たちの頭上で漂っている女の子に訊く。

「俺たちをこの校舎に入れたのは、あの死体を発見して欲しかったのが理由だったしな」

大山がそう云う。前野も納得はいつていないが、女の子が悪いやつとは考えていなかった。

「さ、さっさと帰ろうぜ？」

前野がそう言うと、教室のドアがひとりでに開いた。ちょうど、廊下側を見ていた大山が先に気付き、少し声を挙げる。

「もう、そういうのはいいって……」

前野が女の子を睨みつける。当の本人は面白いのか、小さな笑みを浮かべている。

「誰もいないな…… よし、みんな…… 犯人に見つからないよう、慎重に行こう」

大山を先頭にし、市宮、前野、葉月と並んでいく。

ちょうど階段の方に差し掛かり、4人の歩みはより慎重になっていく。

「もう、いないよな？」

前野がそう言うと、女の子が先へと行く。

「見に行ってくれたのかな？」

「俺たちを危険な目に合わせた責任でも感じてるんだろ？」

市宮と前野がそう言うと、女の子はすぐに戻ってきた。

「大丈夫なのか？」

大山の問いかけに、女の子は頷いた。

女の子の言葉通り、階段を見渡すと、男はおらず、4人はゆっくり

りと1階へと降りていく。

それから何事も無く、女の子の案内によって、4人は自分たちが入ってきた窓へと辿り着いた。

「うわ、外真つ暗だぜ？」

前野が窓から外を眺め、声を挙げた。その言葉通り、外は既に真つ暗になっている。

「早く帰らねえとな……」

大山と前野が先に外に出る。続いて、市宮が外に出た。

葉月は少し気になりながらも、校舎の外へと出ようとした時だった。

（ えっ？ ）

窓の外に手をやろうとすると、パシッと、何かが弾かれる音がする。

「えっ？ ど、どういうこと？ みんなあ」

声を挙げ、呼び掛けるが、返事がない。

「まだ…… まだあなたは出ちゃダメ……」

女の子が、葉月に声をかける。

「私は駄目って…… どういうこと？」

葉月はそう訊ねるが、女の子はスツとどこかへと行ってしまふ。

しかし、人がその場にいたことを証明する残り香があるように、女の子は気配を、まるで糸のように漂わせていた。

葉月はその気配を探りながら、女の子の後を追った。

その先は、死体があったトイレである。

その前で女の子は寂しそうな顔を葉月に向けた。

「あなた…… 誰なの？ トイレで見つけた女の子とは違う」

トイレの中で見つけた死体の女の子は髪が長い。しかし、葉月の

目の前にいる女の子は、おかつぱである。

「私は…… この学校に来たかった…… みんなと遊びたかった」

「 えっと、この学校に来れなかったってこと？」

女の子はその問いに答えるように頷いた。

「学校に来れなかった…… あなた、もしかして別の場所で死んだの？」

それも自分よりも小さな時に……と葉月は続けた。

葉月の問い掛けに女の子は少し首を横に振った。その反応を見て、葉月は首を傾げた時だった。

「みいつけえたあ……」

突然男の声が聞こえ、葉月がそちらを振り向くや、

「げえほおっ！」

男に顔を殴られ、ぶっ飛ばされる。

「さつあきいはいたかあぞおっ！」

男は讒言のように云うや、痛みでフラフラしている葉月を蹴り上げた。

「がはあっ！ げえほおっ！」

お腹を深々と蹴られ、込み上げてきた胃液をドバドバと床に撒き散らし、葉月は痛みと気持ち悪さで訳が分からなくなっていた。

「くうそお、あのくそがきい…… おれが寝てる間に居なくなりやがって……」

よく見ると、男はフラフラと今にも倒れそうになっている。

「あ、あなたが殺したんじゃないの？」

葉月がそう訊ねると、男は睨みつけながら、葉月の髪の毛をつかみあげる。

顔を近づけられ、息がかかる。若干ではあるがアルコールの臭いがした。

「ふうさげたこといつてんじゃねえぞ、がきい？ おれがいつこと

もをころしたってえ？」

男は葉月を床に叩きつけ、背中を踏みつけた。

「あがあっ！」

「いいかあ？　がきいってのはなあ？　大人の言うことを聞きゃあいいんだよ？　自己表現なんて必要ねえんだ？」

男がそう云うや、葉月の横腹を思いつきり蹴った。

メキメキと、聞きたくもない音が葉月の耳元で大きく響いた。

「……………っ！」

葉月は気を失いかける。が、男はそれを許そうとはしない……

「なあ、俺の考えは間違ってるかあ？　間違ってるやないよなあ？　がきいは大人の言うことを聞きゃいいんだよお？」

男が葉月の頭を蹴ろうとした時だった。

パシインと何かが当たる音が、廊下中に響きわたった。

「ってえ……　なんだよ？　なあんだってんだよお？　って、

てめえっ！　一体どこから入ってきやがった……？」

男は狼狽するように声を挙げ、それを見た。

「さ、皐月……　おねえちゃん？」

葉月の目の前には皐月が立っており、静かに男を睨みつけている。

「大丈夫？　葉月」

皐月がそう尋ねるが、葉月は訊くまでもない重症である。

「あいつがやったの？　あの女の子も……」

その言葉を聞き、葉月は皐月もトイレにいる女の子を見ていることを知る。

「わ、わからな……い、けど……　みんなが云ってる。『あの男が女の子を殺した』って」

葉月は虚ろな目をしながら、ゆっくりと男を指差した。

「さつきから呂律が回っていない…… おそらく、アルコール依存症による。記憶障害　あの女の子を殺したこと自体、覚えていないってことね」

皐月は男の方へと振り返る。

「なんだよお？　おまえもかあ？　おまえもおれえのいうことをきかないってのかあ？」

男はそう云うや、皐月に襲いかかるが、

「どおおおおおおおおおおっ！」

鬼気迫る咆哮を挙げるや、皐月は男の腹部に竹刀を入れる。

「げえ、げえほお？　がはあっ」

男はお腹を抑えながら跪いた。

「なあにいしやが……　がつ？」

男のお腹を竹刀の先が深く入り込み、男は胃液を吐き散らかした。その後も皐月の一方的な責めで、男はフラフラになり、その場に倒れた。

「ゆ、許してくれえ……　もうやめるから……　謝るからあ……」
男は讒言を挙げた時だった。ガタガタと顔を震わせ、男を見下ろしている皐月に恐怖を覚えていた。

そこには普段見せることのない形相をし、それこそ『鬼』と云っていいほどの獰猛な目付きをした皐月がいた。

「　赦す？　赦すわけないでしょ？　自分の都合勝手に女の子を殺し……　剩え。私の妹をこんな目に遭わせておいて……　自分だけ助かるうなんて虫のいい考え……　捨てたほうがいいわよ？」
もはや怒りが先立っている皐月に、悲鳴を挙げた男の声など届く

はずがなかった。

皇月の折檻せつかんが終わり、校舎を出た数時間後。家に戻っていた大山たちが警察に通報し、警官たちが駆けつけたところ、ボロボロになった男の姿だけが廊下に残されていた。

捌・七つ目

「こんのおばかあつ!!」

月に照らされた旧校舎の入り口で、人目もはばからず、皐月は葉月を怒鳴りつけている。

「まあ、無事だったんだから、いいじゃないか」

大宮巡査が皐月を宥める。が、皐月は大宮巡査を睨みつけた。その目にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「皆がどれだけ心配してたかわかってるの？　今回は無事だったからよかったけど、もし誰も助けに来なかったらどうするつもりだったの？」

「う、ごめんなさい……」

葉月は譫言のように謝る。

皐月は葉月が重症を負っていることを重々わかっている。

しかし、生きていただけでも嬉しいのだ。もし、死んでいたら……と思うと、怒鳴らずにはいられなかった。

「でもよかった……　無事で……」

皐月はそつと葉月を抱き締める。その力は強く、葉月は「痛い」と言おうとしたが、どれだけ心配したのかを理解し、何も言えなかった。

「葉月……」

拓蔵が葉月に声を掛ける。

「みんなに迷惑をかけたんじゃ。謝りくらいは云わんとな」
「うん……　ごめんなさい」

葉月は深々と頭を下げ、謝りを述べる。弥生や周りの警官たちは安堵の表情を浮かべた。

「さてと…… 西戸崎刑事、残念だけど」

「んっ？ ああ…… まあ、こうなることは頭の中に入れちよったけど、現実になると辛いな」

西戸崎刑事が頭を抱えた。

「親御さんたちにどう説明すればいいっちゃろ……」

トイレで発見された女の子の死体は、誘拐事件の被害者である新村結華と判明した。

死体の胸には名札が付いており、それから身元がわかったのだ。

「男は美作秀英、みまさか しゅうへい32歳。サラリーマン…… 昔子供を持っていたそうです」

「子供？ 葉月や、その友達に怖い思いさせてたのが？」

臯月と葉月は驚きを隠せないでいた。

「ええ。まあ、もう10年ほど前の話でしてね。一度虐待で、児童相談所から通告を受けてたようです。まったく、親に反抗したりもするでしょうに、それが許せなかったらしいですよ」

「そうだったんですか……」

葉月はそう云うや、旧校舎の方を見ると、「あれ？」と小さく声を挙げた。

「あの子がいない……」

「あの子って…… 葉月たちを助けてくれた幽霊のこと？」

葉月だけは助かったとは言いが、もし女の子が助けてくれなかったら、全員美作秀英に殺されていたのだ。

「それなんじゃがな…… やっと思いだしたわい」

「爺様？ 思い出したって 何を？」

「この旧校舎に伝わる、七つ目の話じゃよ」

そう云うや、拓蔵はベンチに座った。

「昔、昔…… 今からもう60年以上前の話じゃ。」

世の中は第二次世界大戦の渦中でな、日本は死ぬか生きるかの状況じゃった。子供たちは勉強もままならなかったんじゃ……

そんなある晴れた日に、ひとりの女の子がこの校舎に転入してきてな、すぐにみんなと仲良くなったんじゃ。

じゃが、ある日、その女の子は不治の病にかかってしもつてな、家が貧乏じゃったから、外に出ることを許されなかったんじゃ……そんなある日、突然家から女の子が居なくなってもうてな。みんなでいろいろなところを探したんじゃよ。

そしたらな…… 見つかったんじゃよ。幸せそうな顔を浮かべたまま…… トイレで死んでおったのがな……

その後からじゃった。トイレで誰かが話をしていると、個室から楽しそうな笑い声が聞こえてくるようになったのは……

女の子の名前は『おはな』…… それから転じて『花さん』……

『花子さん』になったんじゃよ」

拓蔵がまるで見てきたかのように話す。

「それって、もしかして実話？」

「さあ、どうじゃるな？」

弥生の問い掛けを、拓蔵は曖昧に答えた。

「おはなさん…… 本当に学校に行きたかったんだね」

「おはなちゃんにとっては、学校に行くというより、みんなと遊びたかったと云ったほうがいいかもしれんな」

拓蔵は旧校舎を見上げ、目を瞑った。少しだけがツーツと涙が溢れていた。

それから数週間後のことであった。

旧校舎が学校の夏休み中に建て壊しが決定したのだ。事件が発生し、子供たちがまたいたずらに校舎へと入らないようにするためだったが、実際は違っていた。

「爺様？ どうして、おはなさん…… うっん、花子さんの話が七つ目のお話にならなかったの？」

葉月が拓蔵にそう尋ねる。

「お前は、おはなちゃんの話聞いて、怖いと思ったか？」

そう聞き返され、葉月は首を横に振った。

「学校の七不思議は怖いから噂するじゃろ？ じゃが、おはなちゃんだけは誰も怖がらんかった。むしろ、色々な事をおはなちゃんに話してたんじゃよ……それが新しい校舎が出来、徐々に誰も旧校舎の方に入らなくなるまでずっとな」

「おはなさんにとっては、子供たちの話を聞いていたことが楽しかったってこと？」

皇月がそう訊くと、拓蔵は少し間をおいてから頷いた。

「旧校舎の建て壊しが決定したのも、おはなちゃんを知ってるわしからすれば、この世に未練がなくなっただからじゃろうな」

拓蔵の言葉に三姉妹は首を傾げた。

後日、建て壊し前に除霊式が行われた。

それを見に来た老人たちの殆どは旧校舎で女の子……おはなと一緒に遊んだり、お話を聞いてもらったりしていた子供たちであった。三姉妹は後で聞かされるが、旧校舎を壊さないようにと運動をしていたのは彼らで、どうやら、彼ら自身がおはなを束縛していた。

が、拓蔵の一言で、全員考え直し、旧校舎の建て壊しを決心した。

二学期を迎えた頃には、旧校舎があった場所は更地となり、そこ

を小さな運動場として、利用されることになった。

その日から、その運動場に大勢で遊んでいると、『誰も知らない女の子が混ざっている』という怪奇現象が頻繁に起きるようになって、子供たちの誰一人、それを怖がるものはいなかったという。

その女の子がなんなのかは、ご想像にお任せしたい。

夕日が差し掛かってきた山中で、ガチャンツ！という、耳障りな音がこだました。

その音が発せられた場所には子狐が横たわっており、左後ろ足に罾が掛かっている。

その罾から逃れようと、子狐は悲鳴を挙げながら、じたばたと足搔あいでいた。

「こつちから音がしたが」

茂みの方から人間の声が聞こえ、子狐はその場から離れようと、さらに体を激しくする。

まだ幼い子狐は、親狐と一緒に狩りの練習をしていたのだが、獲物を捕るのに夢中となってしまう、子狐は母狐と逸はくれてしまった。

子狐は足の痛みと、人間に殺されてしまのではないかという恐怖心から、その場を逃げようと必死だった。

足搔けば足搔くほど、歯が足に食い込み、激痛が走る。

「よし、狩猟の許可は役所から出ているんだ。今夜はどんな鍋にする？」

男の一人が猟銃をギュツと握り、息を潜めながら言った。

「今の時期は猪だからな。牡丹鍋なんてどうだ？ ちょうどいい味噌が手に入ったんだ」

先程声をかけた男性よりかは若干若い男性が云う。

「しかし、樹里いづみ、今夜は妙に寒いな……」

「まったくだ。早く獲物を狩って、暖かい飯でも食いたいもんだ」

そう話しながら、二人は獲物が見える距離まで、静かに近寄った。茂みの中で樹里と昌平マサヒラは気配を殺し、罾の方へと銃口を向けた。

その距離はおおよそ五十米メートルといったところか、子狐は罾から逃げ

ようと必死のため、男二人が近付いている事に気がついて、逃げる事が出来ない。

「んっ？」と樹里が声を挙げた。

「どうした？ 見失ったか？」

「いや…… 確か罨をかけたのは、猪が頻繁に通る道だったはずだが？ 兄さんの予想は大幅に外れていたようだ」

樹里は銃に取り付けられた弾倉マガジンを取り外し、薬室に残った最後の一発を天に向けて発射した。

二人の勝手なルールとして、何も当たらない空発は、今日の獵はこれで終えるという、山に住む獣たちへの合図でもあった。

それがわかっている昌平は啞然とする。

「お、おい…… 何やってるんだ？」

「獣に効く傷薬はないか？」

「そ、そんなことしてどうするんだ？」

樹里の言葉に昌平は狼狽する。

「みてわからんか？ 助けるんだよ」

そう言われても、全く理解できない。といった表情で昌平は首を傾げる。

そんな昌平を尻目に、樹里は迷うことなく子狐のところへと歩み寄っていく。

その足音が近付いてくるのを感じ、子狐は逃げようと必死だった。もはや足の痛みは麻痺して、感覚すらない。

「大丈夫…… 俺たちは何もしない」

樹里はそう云いながら、罨の仕掛けを外していく。

その間、子狐は少しずつ暴れる体を落ち着かせていった。

彼が自分を殺すのではないと、野性的な本能で察し、子狐は「くうん……」と、まるで犬のような声を発した。

「おお、痛かっただろ？　すぐにとつてやるからな」

樹里は狐の足に食い込んでいた罌を取り外した。

外すやいなや、我にかえったかのように、子狐は樹里から逃げるように、フラフラと奥の茂みへと姿を消した。

山小屋に戻って分かったことだが、齒は子狐の足に深々と食い込んでおり、真つ赤に染まっていた。

「少し、この山の生態や、行動範囲を把握しておかないといかな
「ああ。まあ、お前のやったことは仕方がない。　今日はきのこ

鍋とするか」

昌平は樹里がしたことは、単純にあの子狐を助けることにほかに
いだらうと理解した。

その晩のことである。

山小屋の中では庵いおひに火が灯されている。

外は視界が遮られるほどの猛吹雪と化しており、ガタガタと小屋
の壁が歪む音をこだまさせる。

「さて、夕食にしよう……」

そう昌平が鍋を運んでいた時、小屋の扉を叩く音がした。

こんな時に誰だろう？と、樹里と昌平は互いの目を見やった。

「すみません、この山を下ったところまでいこうとしていたのです
が、道に迷ってしまいました……　日も落ちてしまい、出来れば一
晩泊めていただけないでしょうか？」

女性の声が聞こえ、樹里は昌平を見やった。

「入れてやれ。家の前で変死体があったんじゃ、化けてでられてし
まうわ」

そう云われ、樹里は小屋の扉を開けた。

戸を開けるやいなや、吹雪と見間違うほどの強風が、雪と一緒に小屋の中に入ってきた。

樹里は腕で顔を覆いながら外を見ると、そこには笠を被った女性と、その手に捕まえられた少女が立っていた。

笠に被った雪の量は相当なもので、だいぶ道に迷っていたのだろうと樹里は思った。

「これは大変だ。急いでお入りなさい」

そう云われ、母娘は云われた通り、小屋へと入った。薄暗くてわからなかったが、母娘は二人とも着物を着ている。

こんな山奥に着物か……と母娘に尋ねると、普段から着慣れているので大丈夫ですとかえされた。

庵を間に挟み、樹里と昌平を前に座った母と娘の二人は、被っていた笠を外した。

二人の素顔を見るや、樹里と昌平は「ほおっ」と声を挙げた。

母親の顔立ちはキリツとしたもので、まるで雪のように白い肌をしている。

朱色の口紅を付けているが、それを思わせないほどにやんわりとし、艶があつた。

娘も母親に負けず劣らず、美しい白い肌色だ。

母親と少し違つところをあげるとすれば、眼はくりりと大きく、幼い雰囲気がある。

「しかし、どうしてこの山に？」

「実はきのこ狩りをしておりましたら、娘が夢中になってしまひまして、危険な場所に入ってしまったのです。母一人、子一人の状態だったため、助けるのに苦労しました」

母親は娘を見ながら話す。当の本人は反省しているのか、俯いている。

「しかも、その時に足を滑らせてしまひまして、娘は足を怪我して

しまったのです」

そう云われ、樹里と昌平は娘の足を見た。母親の云う通り、娘の左足には布が巻かれている。

「失礼ですが、包帯は？」

「襦袢を切れ端にし、それを巻きました」

母親はそう云うや、着物の襟元を緩め、肌着を見せた。

肌襦袢の襟元に切れ込みがあり、それを包帯にしたのだろうと、樹里と昌平は理解した。

「今日は冷えるからな、温まっていきなさい」

昌平にそう云われ、母娘は頭を深々と下げた。

ふと樹里は娘の方から視線を感じ、そちらを見ると、娘がジッと樹里を見つめていた。

「どうかしたのかい？」

「い、いいえ…… なにも……」

娘は俯いてしまい、その晩は何もなかった。

翌日の事だった。庵の火は完全に消沈しており、寒さだけが小屋に漂っている。

その寒さで起きたのか、昌平は小屋の中を見渡した。

そして、違和感を感じるように首を傾げたが、数秒後には慌てふためくのだった。

「おい、樹里…… 起きろ！」

そう云われ、樹里は起きた。まだ眠気眼で意識は覚醒していない。

「どうした？ 何かあったのか？」

「何かあったのかじゃない。いないんだ…… あの母娘が……」

樹里がそれを理解するのに、数秒ほどかかったが、昌平の云う通り、母娘が眠っていたはずの布団は敷かれたままで、その痕跡があ

るだけである。

「ま、まさか物取りか？」

そう言うやいなや、二人は小屋をひっくり返すと云わんばかりに、
箆笥の中やらを手当り次第確認するが、盗られたものは何一つなかつた。

「うーむ、物取りではないとすると、挨拶もなしに帰ってしまった
ということか？」

「別にいいじゃないか。特に期待していたわけでもないし……少し
惜しい気もするがな」

樹里がそう云うや、昌平は「違いない」と苦笑いを浮かべた。

吉・足枷（後書き）

大変長らくお待たせしました。第九話です。

式・笄迫（前書き）

笄迫^{はこせこ}：女性和装の正装、打掛を着る際の用いる小物入れ。胸元の合
わせに差し込まれる箱状の装飾品で、金襴^{きんらん}、緞子^{どんす}、羅紗^{らしゃ}などの華や
かな刺繍を施し、飾り房がついている。

式・管迫

「ねえ、弥生姉さん？ カラ、見かけなかった？」

皐月が慌てた表情で弥生に訊ねるや、質問に答えるように、弥生は首を横に振った。

「ちゃんと寝る前にゲージの中に入れといたの？」

「入れてたけど、あの子ズル賢いところがあるから、ゲージの扉開けて脱走してるのよ」

「秘密基地とかは確認したの？」

そう訊かれ、皐月は頷いた。

「急ぎなさいよ。今日は大事な用があるんだからね」

「わかってる。私はもう準備は出来てるし…… ああ、もう！ どこ行っただかなあっ？」

皐月は弥生の部屋を出て、自分の部屋の中を探し回った。因みにカラとは皐月が飼っているハムスターの名前である。

「あ、やっといた……」

5分後、皐月はそう云いながら、ハムスターの前に手を差し伸べ、^{うづら}掌に乗せた。

ハムスターは神経質な動物で、突然うしろから捕まえようものなら、鋭い歯で噛まれてしまうからである。

皐月はカラをゲージの中に入れ、今度は逃げないようにとゲージの入口を洗濯バサミで止めた。

「んっ、どうかした？ 葉月……」

居間で招待状を眺めていた皐月が葉月の視線に気付き、訊ねた。

その葉月は、臯月をブーツと見ている。

「臯月お姉さまカツコイイなって」

そう云われて嫌なものではないが、臯月は苦笑いを浮かべた。

臯月の服装はシックな黒のスーツでしめており、普段束ねている髪は解かれ、前髪をカチューシャで上げている。

「それで下がパンツじゃなくて、スカートだったらもっといいんだけどね？」

「あたしがスカート嫌いなもの知ってるでしょ？ 動きにくいったらありゃしないし」

臯月は弥生を見ながら、文句を言った。

執行人として巫女服を着る場合もあるが、普段は男女関係なしの服装を好んで着ているため、スカートを履かない。履くとすれば学校の制服くらいなものである。

「弥生お姉さまは可愛いかな？」

そんな二人を知ってか知らずか、葉月は弥生の服装の感想を言った。

「歳をわきまえなさいよ？ 歳を……」

まるで違うことを臯月に言われたが、弥生は気にしていなかった。弥生の服装は、趣味であるゴスロリをすこし抑えたと云ったところか、ドレスには変わりないが、スカートの裾にはフリルが付いており、腰にはリボンが付けられている。

胸元が少し開けられており、両腕には肘辺りから手の甲まで布の手袋をはめている。

「葉月も可愛いわよ」

そう云われ、葉月は笑みを浮かべる。

葉月は子供らしい服装で、赤と黒のチェック模様のドレスを着ている。

三姉妹が普段しないほどの豪華な服装をしているのかというと、今日は拓蔵の知り合いが結婚式を迎えるとのことで、三姉妹共々招待されていた。

「さて、三人とも準備は出来たか？」

拓蔵にそう云われ、三姉妹はそちらを見るや、首を傾げた。

三姉妹たちはおめかししているというのに、拓蔵の服装は普段と対してかわりないからだった。一応礼服を着てはいるが、どこか抜けたところがある。

「じ、爺様？ もう少しビシツとしたほうが……」

弥生はそう云いながら、拓蔵の襟元のボタンを止めた。

「うーむ、あつちに着いてからでもいいじゃろ？ あんまり首をしめられるのはなあ」

文句を言いながらも、拓蔵は鏡の前で身形みなりを整えていた。

「さてと…… そろそろ本当にいかない」と

弥生がケータイの液晶を見ながら云った。時刻は午前11時である。

「阿弥陀くんに連絡して、車を持ってきてもらうかのう？ そうすれば、渋滞しても道を通してもらえるぞ？」

「爺様？ それ、職権乱用。 つか、そんな権利ないでしょ？」

既に拓蔵が元刑事であることを知っている皐月たちであるが、拓蔵が阿弥陀警部よりも階級が上だということは未だに知らない。

拓蔵はそんな彼女たちを見ながら、苦笑いを浮かべた。

数分後、稲妻神社の鳥居前に一台の車が停った。

「こんにちわ。 迎えにきました」

玄関先から声が聞こえ、弥生はそちらへと向かう。玄関にはスー

ツ姿の男性が立っており、手袋をはめている。

「三人とも迎えきたわよ！」

そう呼ばれ、皇月と葉月、拓蔵は戸締まりの確認をし、稲妻神社を後にした。

「綺麗だ……」

その言葉を云うや、男は照れるように女性から目を背けた。頭の中で呟くのは簡単なことだが、いざ口になるとなると難しいものである。言葉をかけられた女性は綿帽子に隠れた顔で、静かに笑みを浮かべた。

「しかし、お前がこうやって結婚できるとはなあ」

昌平がそう云うや、男……樹里は苦笑いを浮かべる。

「兄さんも早く出来るといいな」

「るっせえ、この幸せもんが」

昌平はうしろから樹里の肩に手をかけ、頭を拳でグリグリとする。そんな二人を見ながら、新婦は笑みを零した。

「さあ、新郎と男たちは部屋を出ていってもらいましょうか？」

黒の留袖を着た歳をとった女性にそう云われ、樹里と昌平は控え室を出ていった。

「母様……」

新婦は不安な表情を浮かべながら、女性を見た。

「大丈夫ですよ。今日のあなたはとても素晴らしいほど美しいです
そう云われ、新婦は天井を仰いだ。

「……このまま、樹里さんを騙していいんでしょうか？」

その言葉に女性は目を細める。

「あなたがあの方を選んだのです。また樹里さんがあなたを選んだのも、彼が決めたこと…… 私がとやかく口を出すことではありません」

女性は鏡に映る新婦の表情を見た。

「私たちが…… 人間と交わることは本来許されないこと…… ですが、そのルールを破るのもまたあなたが決めること」

「母様は怒らないのですか？」

そう新婦が云うや、女性は静かに目を閉じた。

「先程も云いましたよね？ 美咲…… 誰かを好きになることに、誰かと付き合うことに、そしてその人と結婚することを決めるのはあなただと…… 娘の結婚を許さない親がいますか？ それがたとえ赦されないことであっても あなたの運命を私が決められるわけがありません」

女性は新婦…… 美咲の肩を軽く叩いた。

「不安なのはわかります。ですがそれを見せないのもあなたの役目なのですよ」

そう云われ、美咲は深く深呼吸をした。

鏡に映る母娘の顔には、本来人間にはないものがあつた……

参・嫁入

稲妻神社から車で30分ほどかかる場所に結婚式場がある。

和洋どちらとも可能という式場で、最近では神前式を終えたのち、洋風の結婚式を行う新郎新婦も少なくない。どちらも神に誓うという意味では同じことに変わりないからだ。

また、どちらかというところ、洋風はパーティーとして利用するという形でもある。

神前結婚式を新郎新婦それぞれの家族のみで行い、拓蔵や三姉妹はその後のパーティーまで時間があるため、式場の外をぐるり一周していた。

「やっぱり、ウエディングドレスは純白よね？」

弥生がそう云うや、皐月はキョトンとする。

「なんか文句ある？」

「いや、別にないけど……姉さんのことだから、てっきりゴスロリに改造するやつと思って……ねえ？」

皐月に話をふられた葉月は咄嗟に外方そっぽを向いた。

「そういう皐月はどうなのよ？」

「私は……まだ考えたことないな……そもそも結婚って、相手がいないけりゃしたくても出来ないでしょ？」

皐月がそう云うや、弥生は呆れた表情を浮かべた。

それを見て、皐月は首を傾げる。

「あのね……夢見るのも女の子の特権でしょ？なに現実主義なコト云ってるのよ？」

（そう言われても、異性を好きになったことって、一回もないんだけどなあ……）

臯月は弥生の言葉を記憶の片隅に置くことにした。

「爺様、何見てるの？」

葉月に声をかけられた拓蔵が見ていたのは、式場の屋根にある十字架だった。

「三人とも、十字架は何を意味しているか知っておるか？」

「たしか、イエス・キリストが磔刑たくけいに処されたときの刑具と伝えられていて、主要なキリスト教教派が、最も重要な宗教的象徴とするもの……だったっけ？」

弥生がそう説明する。

「まあ、結婚するのに神様の許可なんぞ必要ないし、役所で婚姻届を処理されてしまえば、形式上夫婦になるからのう」

拓蔵がそう云うや、（それじゃ、なぜ訊いた？）と臯月と弥生は心の中でツツコミを入れた。

「じゃが、神に誓いを立てて、自分たちを戒めるためにも必要じゃいな」

そう拓蔵が云うや、ポツポツと小雨が降り始め、四人は屋根のある方へと避難した。

そんな四人をひとりの男性がうしろから声をかけた。

「黒川さん、来てたんですね」

昌平が拓蔵に声を掛ける。

「これはこれは細川さん。弟さんが先に結婚とは……」

「なはははは…… 数分ほど前に同じことを言われましたよ」
二人はケラケラと大笑いする。

「おや、弥生ちゃんたちも来てくれたんだね？」

「お、小父さん…… その弥生『ちゃん』は止めてくれないかな？」
弥生は照れながら言う。

「何を云ってるんだ？ 小父さんは君たちを小さい時から知ってる

んだ。それくらいの時から云ってるのに、今更変えるのは無理というものだ」

そう云われ、弥生は諦めたのか、それ以上文句を言わなかった。それは皇月と葉月も同様であった。

「それで、新婦さんは一体どういう方なんでしょうか？」

「もう凄い可愛い娘さんでね？ あのバカ弟には勿体ないくらいなんですよ」

へえ……と三姉妹は感心する。

「弟がしつこく口説いて、漸く手に入れたのかというと、そうじゃないんです」

「とうとうと？」

「新婦である孤祭美咲こまつさんの方から、弟に付き合ってくださいって云つたらしくてね。いやはや、どう見ても月とスッポン、雲泥の差、美女と野獣ってな感じなんですよ……」

いくら兄弟とはいえ、少しばかり言い過ぎである。

話を聞くと、新婦である孤祭美咲は、新郎である細川樹里が働いている会社に去年新入社員として入社した。

入社するやいなや、愛嬌のある雰囲気と誰にでも優しいということから、男性陣から非常にモテた。

当然、そうなつてくると女性陣から妬まれる……ということがなく、相談相手としても重視されていた。

誰もが新郎である細川樹里と孤祭美咲が結婚することに驚きを隠せないでいた。

が、彼女が選んだという事を聞くや、掌を返したように祝福した。

「おっと、そろそろパーティーが始まりますね、案内しますからこ

ちらへどうぞ」

昌平が腕時計を見ながら云うと、拓蔵と三姉妹を会場へと案内した。

ゾロゾロと案内されている中、皐月はふと視線を感じ、そちらを一瞥した。

物陰から小太りの男性がこちらを見ている……と言っよりかは睨んでいるといったほうが正しい。

「皐月？ 早くっ！」

既に入口前で待っている弥生に呼ばれ、皐月は会場内へと入っていった。

「火車」で通夜の座り順を説明したことがあったが、結婚式場でも同様に決められた席がある。

新郎の友人として招かれている拓蔵と三姉妹は新郎側から見て、一番うしろの方に席があり、近いところから時計回りに1・3・4・5・7・8・6・4・2と席がある。新婦側はその逆周りに1・3……となっている。

1番の席に拓蔵が座り、皐月は左利きということもあってか、2番の席に座る。葉月は皐月の隣である4番に座り、弥生はその正面である3番に座った。

弥生の横には葉月と同じくらいの少女が座っており、その隣には胸の谷間を強調したドレス姿の女性が座っている。

横のテーブルは新郎の親戚。前のテーブルは会社や恩師、斜め前のテーブルでは拓蔵たちと同様、同僚や友人らが座る席になっている。

会場にいる人間は、新郎新婦を今か今かと待ち構えている。結婚式場特有の空気とでもいったところである。

突然会場内が薄暗くなり、全員が息を潜めた。結婚行進曲がゆっくりとフェードインしていき、会場の扉が開いた。

スポットライトと歓声が、会場へと入っていく二人を祝福する。新婦である美咲が着ている純白なドレスは、誰もがうっとりするほどに美しく、「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」を描いたようなものだった。

新郎である樹里もぎこちないながらも、ゆっくりと新婦ともども足取り揃え、来客人に会釈していく。

そんな二人を三姉妹はボーと惚けた^{ほう}ような表情で眺めており、それを拓蔵はつまらなさそうに見ていた。

「どうしたんですか？ 拓蔵…… 場に似合わぬ表情を浮かべて、その声をかけられ、拓蔵はそちらを見た。

「え、閻魔さま？ それと脱衣婆も……」

拓蔵に声をかけたのは、弥生の隣に座っている少女……瑠璃だった。

その隣に座っているのは脱衣婆である。

三姉妹も『何時の間？』と云った感じに驚いている。

「えっと…… 確か、私の隣に座ってた子って？」

「ええ、実は本来来るはずの家族は、今日が葬儀と重なったらしくて、急遽家族全員欠席しておる。まあ、少しばかり新郎の記憶をいじったがな…… 式が終われば、私と脱衣婆の記憶は消えておるじ

やるつよ」

「そ、そんな事するほどの理由があるの？」

皐月の質問を脱衣婆が答える。

「そうじゃなかったら、私と閻魔さまがこんなところにいないですよ？」

そう云われたところで、三姉妹と拓蔵には理由が見当たらない。

「実は九尾から知り合いが結婚するからって、連絡を受けてね。自分分は忙しいからいけないって……」

「九尾って…… 白面金毛九尾はくめんこんもつきゅうびのこと？ また凄いとこからって、妖怪でしょそれ？」

「まあね…… でも妖狐は人を騙し、自分たちの縄張りから追い出すのが主だから、罪にはならない。それに金毛九尾に力で適うやつは妖怪でもそうそういないわよ？」

そう云われ、漸く三姉妹は瑠璃と脱衣婆がここに来たことを理解した。

「新婦が化け狐ということ？ そうは見えないけど……」

「白狐びやくこともなれば、力を抑え、人を化かす事くらい容易いこと。留袖を着ているのは、新婦の母親ですね。彼女も同様に白狐でしょう」
そうなると、新婦側の友人や親族は一部を除けば全て妖狐が化けていることになる。

「集中して見ないと全然気付かないや……」

皐月は目を細めながら云った。三姉妹と拓蔵が気付かないとなれば、普通の人間は誰一人気付くものはいない。

「それとさつき小雨が降ってたでしょ？」

脱衣婆にそう云われ、三姉妹は頷いた。

「晴れた日に突然雨が降るのを「狐の嫁入り」って言わない？」

そう云われ、なるほど……と納得した。

『狐の嫁入り』は日照り雨の事をさすが、山野で狐火が連なつて、嫁入り行列の提灯のように見えるという意味もある。

意味が日照り雨と生じたのは、突然の天候の変化が怪奇と見られていたからと伝えられている。

肆・末広（前書き）

末広^{すえひろ}：結納品や和装の際に使用する扇子。末の方が広がっていることから、「こつ呼ぶ」。

肆・末広

「美味しい」

葉月が直感的に感想を述べた。

「うん。鳥肉が柔らかいし、舌の上で溶けるから全然噛まなくてもいいわね」

「ポタージュもピュレで且かつフロアだというのに、スーと喉を通っていきますし、パンとの相性もいいですね」

各々用意された料理を堪能している。

「皆さん、楽しんでおられるようで何よりです」

声をかけられ、皐月はそちらを見ると、樹里と美咲がキャンドルサービスとして、来客への挨拶回りをしていた最中で、ちょうど皐月たちの席へと来たところだった。

「ご結婚おめでとございます」

皐月は美咲が妖怪であることを知っていたが、水を差すような言葉は言わなかった。

たとえ赦されないことだと知っていても、傷を抉るような事はない。

それは拓蔵や弥生、葉月も同じく、瑠璃と脱衣婆も祝福の言葉を述べた。

「しかし、本当にお綺麗なお方ですな。樹里君には勿体ない」

拓蔵が笑いながら言う。

「ええ。本当に僕なんかでよかったのかなって」

「樹里さんは素晴らしい方です」

美咲がそう言うと、樹里は照れてしまった。

「それに…… 私は樹里さんでよかったと思っています」

「……………っ？」

ぼんやりとした蝋燭の灯りに照らされている美咲の表情が、幸せな時だというのに曇っていたのを皐月は不思議そうに眺めた。

「……………どうかしたんですか？」

美咲に声をかけられ、皐月は目を点にする。

「いや、何か狐に抓まれたような目をしてらしたので」

「ははは…………… 美咲さんが余りにも綺麗だから見とれてただけですよ」

拓蔵がそう言うと、美咲はクスッと笑を零した。

「……………どうしたのよ？」

樹里と美咲が去った後、弥生がそう皐月に訊ねた。

「いや、いくら樹里さんを騙している……………としても、白狐ほどの妖狐が自分自身で決めた人なのに 全然幸せそうな表情じゃなかったから」

「それなんですけどね…………… 美咲は一度、樹里と昌平に殺されかけていたことがあります」

瑠璃がそう話し出すと、拓蔵と三姉妹は瑠璃の方を向いた。

「今から4年ほど前の話ですが、樹里と昌平がある山で狩りをしていました。その時仕掛けていた罠に掛かったのが子狐の美咲でした。昌平は狐の美咲を撃ち殺そうとしましたが、あくまで猪狩りをしていた樹里は、美咲を罠から逃がしたんです」

「そしてその日の晩。母狐である花梅あやめと共に樹里と昌平が寢床にしている山小屋へと訪れ…………… 怨みをもって樹里と昌平を殺そうとした」

脱衣婆はそう云うが、呆れたような表情を浮かべた。

「だけど、美咲は助けてもらった樹里だけは殺すことができなかつた。花梅は殺せと命じたけど、頑なにそれだけは出来なかつた」

「それで幸せそうな顔じゃなかったってこと？」
弥生がそう云うと、瑠璃は少しばかり考えるが、返答に困っていた。

「私は地蔵菩薩として露世の事を見てきています。だけど、上辺だけのことしかわからないこともありますし、あの子がどういう気持ちなのかもわかりません」

だから、彼女が幸せかどうかは、これから彼女自身が知ることでしょう」

「今段階ではなんとも言えないということじゃろうが……人間と妖怪、種族の違うものが幸せというのは難しいと思うぞ？」

「それこそ一昔前の異国同士の結婚みたいだね」
脱衣婆そう言うと、三姉妹は首を傾げた。

今ではさほど珍しいものではない違う国どうしの結婚であるが、一昔前だと結婚自体難しく、また言葉や風習の違いから、結婚どころではなかった。

結婚というのは自分たちだけの問題ではない。自分の周りで関係のある人間さえも巻き込んでしまう。

「だけど……白面金毛九尾はそれを赦した……美咲が樹里に白狐であることがバレない以上は幸せなんだということだね」

「ただひとつだけ、九尾は花梅と美咲に条件を出しています」

瑠璃の言葉を葉月が鸚鵡返しする。

「自分たちが白狐であることがバレてしまえば……消滅すること」
その言葉を聞くや、拓蔵と三姉妹は驚きを隠せないでいた。

「自分が妖狐であることを知られるというのは、それくらいのリスクを背負うということですよ」

「でも……バレたとしても……樹里さんから美咲さんの思い出

が……」

皐月がそう言うと、脱衣婆は視線を逸らした。

「消滅するというのは…… 全てが亡くなるということですよ」

「記憶も何もかも消えてしまっただけのこと？」

瑠璃は俯きながら、小さく頷いた。

「それくらいのリスクを背負っていながらも、なお樹里を選んだ美咲を…… 金毛九尾は結婚を赦した……」

瑠璃と脱衣婆の話聴きながら、皐月は新郎側のキャンドルサーブスを終え、新婦側へと移っている樹里と美咲を見るや、その光景にゾツとした。

人間である会社の同僚たちは樹里と美咲を心から祝福している。

しかし、人の姿に化した妖狐たちは、まるで二人を嘲笑するかのように、眼を真っ赤にし、耳まで裂けた笑みを浮かべている。

靈感すらない人間から見れば、彼らも結婚を祝福しているように見えるが、皐月たちからすれば、嘲罵ちやうば、薄笑い、揶揄ちやうばなど…… 樹里と美咲の結婚を心から祝福していないことが、その言葉通り『目に見えた』。

妖狐たちはおろか白面金毛九尾自身も二人の結婚に祝福などしてない。

彼らからすれば、この余興はただの馬鹿な子狐の遊び事であり、見世物でしかない。

人間よりも何十倍も生きる彼らからすれば、本当につまらない余興の一つでしかないのだ。

「人を騙すことは彼らからすれば極々当たり前のこと…… ましてや、人を好きになることなど烏滸しほがましいことではありません」
瑠璃はスプーンを持つ手を震わせ、言葉を発した。

「だけど…… 一時の…… ほんの刹那だけでも、幸せだと思っただけだ……」

「だって罰はないはずだ」
怒りを押さえ込んでいる瑠璃を見ながら、皐月は本当に幸せそうな樹里と、幸せを望むことを赦されていない美咲の表情を見ていると、瑠璃の怒りが理解できた。

「幸せだと思うことに罪はない。誰かに幸せだと思えと言われて、はいそうですね」と同意するものでもない。
「幸せとは自分が決めることである。」

「たとえそれが許されないことだとしても……
今その瞬間だけ幸せだと思ってもいいのだ。」

伍・寿留女（前書き）

寿留女：するめいかの干物。不時に備える保存食であり、長持ちする
という事から、「花嫁が永く、その家に留まっていられますように」、「幾久しく幸せな家庭を築くように」という願いが込められています。結納時には、奇数枚を包みます。

伍・寿留女

披露宴も終わりに近付き、ゾロゾロと来客たちは会場の外へと出ていく。

拓蔵と三姉妹、瑠璃と脱衣婆は、外で待っている使用人から、一掴みの米が包まれた袋を渡された。

それを手に取るや、瑠璃と脱衣婆は不思議そうに袋を見つめていた。

そんなふたりに弥生がライスシャワーにつかうものだと説明する。

ライスシャワーはその言葉通り、「お米」を新郎新婦に目掛けて上空から降らす演出である。

「お米には繁栄と豊穡の意味があり、ふたりが末永く豊かに暮らし、子宝にも恵まれるように……」という意味があるんじゃないよ」

葉月が不思議そうに『ライスシャワー』の意味を訊くので、それを拓蔵が答える。

「まあ、白狐は稲荷神とも言われていますからね。農業の神としての習わしでしょう」

瑠璃は白狐として説明したのだろうが、人間がそこまで深く考えているはずがない。

「どうかしたんですか？」

弥生にそう訊ねられ、瑠璃はそちらへと振り返る。

「このまま…… 何事もなければいいんですけどね」

その言葉に、三姉妹は首を傾げた。

「お、出てきた」

誰かがそう言うや、全員が入口の方を見た。

出てきた樹里と美咲がゆつくりと皆のところへと歩いていく。

ふと見た二人の表情が幸せそうだったことから、（未永く幸せであって欲しい）と臯月は心から祝った。

何時の日か、自分たち姉妹にも好きな人が出来て、やがては結婚し、子供が出来る。

当たり前ではないが、それくらいちつぽけな夢を想像してもいい。にも拘らず、何故かそれが叶わないと脳裏をかすった。

「どうかしたのですか？」

隣にいた瑠璃にそう云われ、臯月はそちらを見た。

「いいえ…… 樹里さんと美咲さんには、たとえどんな形であっても、幸せでいて欲しいなって」

瑠璃もそれに関しては同意だった。

突然拓蔵のケータイが鳴り出した。

「爺様。マナーモードにしようとって……」

「ああ、すまんな 阿弥陀くんから？」

ケータイの受信を見るや、拓蔵は首を傾げる。

「はいもしもし？ ああ……」

電話に出た拓蔵の表情は、徐々に強ばっていく。

「うむ、わかった…… そっちも細心の注意をはらっておいてくれ」
そう云うや、拓蔵は電話を終えた。

「阿弥陀警部が…… なんて？」

弥生がそう訊ねると、拓蔵は来客を見渡した。

「阿弥陀くんからの連絡では、一時間前にこの近くにある宝石店で、強盗殺人があつたそうなんじゃよ。その犯人は現在逃亡中。近くに潜んでいる危険性もあるので重々注意するようにとのことじゃ」

「殺害方法は？」と瑠璃が訊ねる。

「拳銃で一発、頭を……」
つまりは即死である。

「にしてはこういう場所って、結構入り込みやすいんじゃない？」
脱衣婆の言葉に瑠璃が真意を訊ねる。

「だって、気持ちが高ぶっている絶好の瞬間に『誰が増えている』
なんて考えないでしょ？」

そう云われ、瑠璃と三姉妹は来客たちを見渡した。

「わっかんないや……」

葉月が愚痴をこぼす。

「あたしたちを入れて一応40人ほどの来客らしいけど、増減の確
認は難しいわね」

弥生も愚痴をこぼしたくてそう言った。薄暗い披露宴の中では、
誰が誰なのかわからないし、何より今ここで水を差すようなことを
するのは、樹里と美咲に失礼だと判断した。

「それじゃ、犯人が近くに潜んでいるかもしれないってのは、自分
たちだけのことでいいですね」

瑠璃にそう言われ、三姉妹と拓蔵は頷いた。

「狐たちはさっさと終われって顔してるけどね」

「云われてみれば確かに…… 飽きたみたいですね」

瑠璃と脱衣婆が言うように、人に化けた妖狐たちは頻りに欠伸を
している。

二人の門出を見送るのも、結婚式のしきたりと云えばそうなるの
だが、もともと祝ってなどいない彼らからすれば、小一時間で十分
飽きが来ていた。

そんなことを露知らずか、樹里と美咲は来客たちの間をゆっくり

と通っていき、来客らはその時にライスシャワーをする。

態々袋に包んでいるのは、片付けやすくするためである。

二人の門出を祝う声が彼方あちこち此方こちから聞こえ、式を終えようとしていた時だった。

「お、お待ちくださいお客様っ！」

式場の方から声が聞こえ、何人かが其方へと視線を送った。

「ええい、あんの馬鹿息子は何処をほつつき歩いておるのだ？」

少しばかり歳をとった男性の苛立った声が聞こえてくる。

「今日は大切な結婚式だというに、花嫁を待たせるとは、何たる無礼だ」

気になった拓蔵が男性の方へと歩み寄り、内容を訪ねた。

「ああ、すみません。少しばかり倅が遅れておりまして」

話してみるや、案外人当たりのいい男性である。苛立つてはいるものの、周りに怒りを撒き散らそうとはしていない。

「息子さんがですか？ それはおめでたいことで」

「ええ。めでたいんですけどね？ 倅が来ないものですから、式の開始が滞っているんですよ。他に結婚式をあげる方々もいらっしやるだろうし、これ以上時間を遅らせることは出来ないんです」

拓蔵が式の開始時間とは訊ねるや、男性は午後1時からと答えた。
「午後1時からって　もう遅刻とかで済まされるような時間じゃないんじゃない？」

臯月が腕時計を見ながら、そう云う。時刻は現在午後4時になるうとしている。

「ええ。だからこうやって電話で連絡を取ろうとしてるんですが、捕まらないんです」

「息子さんの特徴は？ 知り合いに訊ねてみましょうか？」

拓蔵がそう言うと、男性はキョトンとする。

「じ、爺様…… 別に事件に巻き込まれているとかはまだわからないんですよ?」

「そうですね。人探しとはいえ、私用で警察を使うのは御法度では?」

葉月と瑠璃にそう云われ、拓蔵は少しばかりケータイを睨みつけた。

「け、警察の方なんですか?」

「え? ええ、元、ですけどね……」

男性が異様に焦った表情を浮かべたので、拓蔵は首を傾げた。

「警察に知られたくないことでもあるんですか?」

臯月がそう訊ねると、男性は頭を赤くする。

「こ、この子は一体何を聞いているんだ? そ、そんなことはない……」

語尾が少しばかりトーンダウンしていたのを、拓蔵らが聞き逃す訳がない。

「知られたくないことがあるのなら、それで結構。ですが、これだけ来るのが遅れているとなると、遅刻どころの問題ではないのでは?」

拓蔵の云う通り、四季の開始予定時間を3時間も遅れている。準備等を視野に入れると、午後1時から少なくとも1、2時間前には式場に来ていなければいけない。

「すみません。倅を探してみてくださいませんか?」

男性は説得に折れ、拓蔵にお願いをした。

「ええ。ちよつと待っていてください。今かけてみますから」

そう云いながら、拓蔵はケータイで阿弥陀警部に連絡をした。

「ああ、もしもし、工作中すまん? 阿弥陀くん? あんた今何処におるんじゃ?」

(先程連絡したとおり、襲われた宝石店の現場をみてますが?)

「そうか? 調べるのは若いモンに頼んで、少しばかり席外せんかのう?」

(いくら神主さんのお願いでも、公私混同は駄目だと思えますが?)

「まあ、そこは少しばかり折れてくれんかの?」

拓蔵が少しばかり猫撫で声を挙げた。

(はあ……一応訪ねますが、一体何ですか?)

「実はな、人を探して欲しいんじゃないよ?」

拓蔵はそう云うや、男性の方を見た。

「そういえば、息子さんの特徴を訊いておりませんでしたな?」

そう云われ、男性は、

「息子は26歳でして、身長は百七十いってませんし、少しばかり太ってます。髪はさっぱりとしております。ただ、目が非常に悪く、眼鏡をかけてまして、左手に小さな痣があるんです」と説明した。

(あれ?)

臯月は男性から聞いた話に思いあたりがあった。

「臯月お姉さま、どうかしたの?」

「いや、小太りの男性なら、式場に入る前に物陰でこっちを見てたのが……でも、小太りなんて探せばいくらでもいるし、息子さんは眼鏡をかけているんですよ?」

そう訊ねられ、男性は頷いた。

「コンタクトレンズとかは?」

「その線もありますけど、とんでもない。息子は先端恐怖症なんです。そうになると、コンタクトレンズを入れるなど以ての外と言うことになる。」

「弥生、遊火を呼んで、探してもらっては?」

瑠璃にそう云われ、弥生は遊火を呼び寄せた。

遣ってきた遊火を見るや、姿が見えない皐月と男性以外は、目を点にした。

「や、弥生…… いくら自分の使い魔とはいえ、なんてものを着せとるんじゃ？」

拓蔵がそう弥生に訊ねる。

遊火の服装は巫女服の袖が離れており、腋が出ている。

裾の方にはフリルが付けれられており、緋袴ひばかまも足元までどころか、膝小僧が悠悠見えているほどの長さである。

皆に凝視されているせいもあってか、遊火は俯いている。

「だって…… 今日着る服、控えめにしなさいって爺様から言われたし、衝動的にもう一着デザインを思いついたから」

弥生が愚痴を零すように呟いた。

「だからって、豊宇とよみ気毘けひ売からいただいた羽衣を、そのような衝動的なことに使うのは、どうにもいただけませんね。皐月やあなたたちを妖怪から身を守ってくれているものでもありますし、布一枚作るのにも相当神力を使うのですよ？」

瑠璃にそう云われ、弥生は頭を下げた。

「さて遊火、少しばかりお願いを聞いてくれませんか？」

その言葉に遊火は首を傾げた。来たばかりで状況を説明されていないからだ。

「実は人を探して欲しいのよ？ 26歳くらいの男性で、身長は低く小太り。眼鏡を掛けていて、手には痣がある」

弥生は説明しながら、男性に確認を取るや、男性はそれに頷くが、首を傾げる。

遊火が見えない彼からすれば、何も無いところに向かって話をしている変人にしか見えない。

遊火は要件を聞かや、無数の火の玉となって、空へと消えた。

陸・子生婦（前書き）

子生婦こんぶ：昆布のこと。昆布は成長が早く繁殖力が強いことから、「子宝に恵まる」、「子孫繁栄」という願いが込められています。「よるこぶ」ということから、祝い事によく使用されています。「子生夫」「幸運夫」とも言います。

陸・子生婦

拓蔵に連絡を受けた阿弥陀警部は溜息を吐いた。

「まったく、人使いの荒い神主だことで」

「神主さんはなんて云ってたんですか？」

大宮巡査がそう訊ねるや、阿弥陀警部は呆れた表情で電話の内容を伝えた。

「人探しですか？」

「ええ。今知り合いの結婚式に呼ばれていて、同じ会場で式を行うはずだった新郎が行方不明……とはいかないが、あまりにも遅すぎるため、席を外して捜索してくれないか」

大宮巡査は捜索人の特徴を訊ねた。

「26歳くらいの男性で、背丈は小さく、小太り。特徴といえは眼鏡と手に痣がある」

阿弥陀警部は少しばかり首を傾げながら言う。

「それでどうするんですか？」

「一応捜索にはあたってみますが、こちらとしては、こっちの方が優先したいんですけどね」

言葉を発するや、阿弥陀警部の目が険しくなっていく。

「犯人は未だに逃走中。捜索を頼まれた人間は背丈が低くて小太り……まさかとは思いますがね」

阿弥陀警部は防犯カメラに写っていた犯人をビデオで確認していた。

ビデオに移された犯人と思われる人物は、背丈が小さく、また小

太りであった。

しかも犯行を及んだ時間は、午後1時ほどであること。

「木を隠すなら森の中、人を隠すなら人込みの中……というわけですか？」

「たまにいますよね。結婚式の練習かそんなので、サクラになる人って」

つまりはそれに紛れ込んでいる可能性を否定できないというわけだ。

結局のところ、強盗犯の特徴と多少なりとも一致していることもあり、阿弥陀警部と大宮巡査を含んだ数名で搜索に乗り出した。

時同じく、遊火が戻ってきた頃だった。

だいぶ火の粉を散らばらせていたのか、少女の姿になった時にはへとへとになっていた。

「それで、見つかったのですか？」

瑠璃が訊ねるが、遊火は申し訳ない表情で首を横に振った。

「すでに町を出ている可能性もありますし、なにより情報が少なすぎますよ」

「息子さんが行きそうな場所はないんですか？」

拓蔵が男性にそう訊ねると、男性は少しばかり考え込み、

「いや、今日は結婚式ですからね。他に行くなんてことはないですよ？」

しかし既に3時間も遅れていて、他に行くところがないというのは説得力がない。

「遊火っ？ 阿弥陀警部が言っていた強盗意外に事件や……事故が

なかったかわかる？」

皐月は見えている人間の視線の先に向かっていった。恐らくその先に遊火がいるのだと考えたからだ。

「……いえ、特には」

遊火の言葉を瑠璃が代弁する。結局皐月には遊火の姿と声が聞こえていないからだ。

(やっぱり、あの時の声って 私の聞き間違いなのかな?)

皐月は寂しそうな表情を浮かべた。

あの時、コテージで聞こえた声は確かに遊火の声だと拓蔵が皐月に説明した。が、その一瞬を最後に、数日ほど経った今なお、皐月は遊火の声を聞いていない。

皆には見えているし声が聞こえている……にも拘らず、自分だけが見えていないということがなんとも歯痒かったからである。

「皐月、気にすることはないわよ。遊火は幽霊じゃなくて妖怪なんだから、いつか必ず見える日がくるわ」

脱衣婆がそう皐月に声をかける。

「それに、あなたの霊視は弱いものには通じないようになってい。より凶悪な妖怪に、心の隙間に入り込まれ、狂気と化した人間に対してのものでもあるんだから」

「それって、どういう意味？」

「要するに、弱い人間ほど妖怪に取り憑かれやすい。人を怨んでいるということは、それだけに余裕が出来なくなっている。そんな隙間に悠悠入ることが出来るのは力が強い妖怪くらい。」

弱い妖怪は人を化かすか、露世でただただのんびり暮らしているかくらいよ」

脱衣婆はそう云いながら、狐たちの群れを見た。

「見なさいな？ 人間は樹里と美咲を祝福しているというのに、狐どもはケラケラ嗤ってる。」

本当に強い妖怪つてのは、決して誰かを嗤わないのよ。

知ってる？ チャンピオンが最も恐れているのは自分よりも弱い選手だって……」

その言葉に皐月は首を傾げた。どこをどう考えたらそんなことになるのだろうかと……

「チャンピオンってというのは、一番上でいなければいけない。その責任感もあるし、なにより下に落ちれば落ちるほど、誰かに貶される恐怖があるからなのよ。」

某野球チームなんて、今じゃシーズンで言うAクラス（6チーム中上位3チーム内）の常連だけど、最初の頃は負ける度に生卵を移動バスに投げられたくらいに貶されていたんだからね。

期待されているほど、裏切られた感があるから、ファンはそういうことをする。

そうならないためにも、チャンピオンは上にいなければいけない、常勝でなければいけないという責任感ができてしまう」

脱衣婆は瑠璃を見やる。

「閻魔さまだって、ずっと十王で有り続けなければいけない。けど、あなたたちと一緒に居る時の方が、地獄にいる時よりもよく喋るのよ」

意外な話に皐月はキョトンとした。瑠璃はイメージ的にキャリアウーマンのようなものと感じていたからだ。

「二人とも、何を話しているんですか？」

瑠璃に声をかけられ、皐月と脱衣婆はそちらへと振り向く。

「い、いや、特になにも……ねえ？」

脱衣婆がそう云うや、皐月は少しばかり不思議そうな目をするが、表情から察し、頷いた。

瑠璃はそれ以上のことは訊こうとはしなかったが、

「脱衣婆……人の心配をする前に自分の心配をしなさい」

そう告げられ、脱衣婆はキョトンとした。

「な、なんかあったの？」

脱衣婆は少しばかり考えるや、思い出したようにポンスと手を叩いた。

「あー、多分あれだ。以前、信乃が灌原希空の父親を成仏しなかったことに対しての処罰を、本人に伝えてなかったからだろうなあ」
臯月と信乃は執行人である以上、成仏という形で妖怪と化した人間に罪状を言い渡さなければいけない。

それが執行人の役目であり、義務であるので文句は言えない。

「ただ、信乃はきちんとした理由がある……それはあなたも知っているはずよ」

「まだそれを見つけてもいないの？」

「見つけていないし、退治したところで、あの子が変わると思っていないわ、むしろ今まで以上に見境なく妖怪を退治するでしょうね」

脱衣婆は少しばかり空を仰ぎ、一瞬だけ口を動かした。

その言葉は、耳があまり聞こえない臯月に聞こえることはなかった。

漆・優美和（前書き）

優美和ゆびわ：指輪のこと

漆・優美和

「こんにちわ…… もう時間的にこんばんわですかね？」

式場に阿弥陀警部と大宮巡査が遣ってくるや、拓蔵らに挨拶をする。

「ああ、阿弥陀くん。こちらが捜索をお願いされた…… 幸宮甚平さんじゃ」

拓蔵が状況説明をする。

「あれ？ そういえば式は？」

弥生がそう云いながら、人込みの方を見る。自分たちは蚊帳の外だったため、すっかり終わっていたのか気付いていなかった。

「式が終わり、指輪交換も終えた。今は家族だけで団欒としてるみたいですね」

瑠璃がそう言うので、そちらを見ると、樹里と昌平にその両親、美咲と花梅が話をしていた。

友人や、人に化けた狐たちも何人が残って、式の余韻を楽しんでいる。

「お知り合いなんですか？」

「はい。爺様の親戚の方『らしくて』、私たちも小さいとき、よく遊んでもらって……」

皐月は大宮巡査に説明していくうちに、ふと可笑しな部分に引っかかった。

「小さいときに？ なんて だって…… 一昨日、爺様から初めて樹里さんのことを聞いたの？」

皐月はまるで怯えた表情で、自分の記憶を辿っていく。

だが、遊んでもらったという徹底的な記憶どころか、思い出

すら浮かんでこない。それがもどかしくなっていた。

「皇月？ 樹里と美咲から目を離さないでいてください」

瑠璃にそう云われ、皇月は頷くが、

「瑠璃さん…… どうかしたんですか？」

「そろそろ、帰らなければいけないですね。これ以上露世に滞在しておくときつくなってきましたし」

その言葉に大宮巡査は首を傾げる。

「そう云えば、大宮巡査に会うのはこれが初めてでしたっけ？」

瑠璃からそう云われ、大宮巡査は頷く。

「まあ、すぐに忘れるでしょうから、名乗りはしませんが、悪いこととはしないほうがいいですよ。何時でも……」

瑠璃がクスツと幼い笑みを浮かべた時だった。

何処からか悲鳴が聞こえたのだ。

全員がそちらを見ると、式場の方から、人が溢れ出し、窓の方から煙が出ている。

「か、火事？」

「いや、あの窓は……わしらがいた時に使っていた式場の近くじゃないか？」

拓蔵がそう云うや、弥生は遊火をそちらへと向かわせた。火の妖怪である遊火ならば、なんでもないからだ。

数秒後、遊火が戻ってくるや、状況を説明した。

「火元は拓蔵さまや弥生さまたちが使われていた式場で、ところどころにビンに詰め込んだ紙に火が点けられています」

「点けられてるって…… もう使ってないでしょ？ スプリンクラ

ーとかは？」

「恐らく、式が終わってから、そのままだと思います」

式をしている最中はスプリングクラーの運転を停止している。そうしないと、折角の晴れ着は水に濡れて台無しになるし、式自体がお粗末なものになってしまうからである。

「犯人はそのことを知っていたのか？」

「いえ、それが…… 火元はわかりましたが、それをした犯人までは……」

要するに式場にいないということになる。

「ビンに入れられてるってことは、ビンの中身はガソリンかな？」

「でも、まだ燃えてるから、灯油と考えてもいいでしょう」

「いや、それよりも先ず、火を消さないといけないでしょ？ まだ燃えていますし」

脱衣婆の言う通り、火元を消さない以上、元もこうもない。

「大宮くん。至急消防車と、会場の人たちを避難させてください」

阿弥陀警部の支持どおり、大宮巡査と一緒に来ていた警官たちが会場で慌てている来場客らを避難させていく。

「美咲さん。幸せそうで何よりですよ……」

誰かがそう云うや、拳銃の音がこだまする。耳を劈くほどの大音量は、耳が悪い臯月ですら、気づかせるほどである。

突然の拳銃の音と、家事が起きている状況が相重なって、避難している来場客らは混乱し、避難させている警官達の声に耳を傾けようとはしない。

「……雄平さん？」

美咲がそう云うや、拳銃を持った男は笑みを浮かべた。男 雄平は身長が低く、小太りである。

「今日は僕と結婚式を挙げる予定じゃなかったんですか？ それなのに、どうしてこんな男と」

雄平は空に向けた銃を放った。

「さあ、早くそんな男と離婚して、僕と結婚しましょう」
美咲は樹里に寄り添い、キツと鋭い眼光で雄平を睨んだ。

「どうしたんですか？ さあ、そんな怖い目をしないで、ボクと結婚を……」

「巫山戯ないでください！ 私は樹里さんと結婚すると 夫婦になる」と決めたんです。大体、あなたと結婚すると誰が云ったのですか？ 誰が決めたのですか？ 少なくとも、私はあなたとは結婚する気は毛頭ありませんし、有り得ないことです！」

美咲がキツパリとそう云うや、雄平は顔を真っ赤にした。

「ゆ、雄平…… やめるんじゃない」

「幸宮さん…… もしかして、彼が？」

「こ、んの馬鹿息子があ！ なに人様に迷惑をかけおるんじゃない？」
幸宮甚平が怒号を挙げる。

「お、おやじい！ この人が俺の婚約者だア！」

「なあにが婚約者じゃあ！ どうせお前がまた勝手に決めたんじゃない？」

「いや、違うって、今度のは違う！ おれは確かに彼女から美咲さんから告白されたんだ！」

その言葉に樹里は美咲を疑った。が、美咲は怯えるように首を横に振った。

「なあ、どうしたら結婚してくれるんだア？ どうしたら、そんな男と離婚してくれるんだア？」

雄平はそう云いながら、ふと何か思いついたのか、にやりと嗤った。

「そつだ…… 殺してしまえばいいんだ…… そつしたら、僕の奥さんになってくれるんだア？」

言つが早く、雄平は拳銃を樹里に向けた。

「な、何を馬鹿なことをしてるんじゃ？」

幸宮甚平の言葉虚しく、雄平は引き金を引いた。

劈くほどの音が辺り一帯にこだまする。

「さあ、早くその男から……」

雄平は言葉を止めた。

「ど、どうして？ どうして…… どうして美咲さんが撃たれて
いるんだ？」

雄平は確かに樹里を狙い撃った。その距離は大凡20米メートルもない。
にも拘らず、美咲は樹里に重なり、背中で弾に撃たれていた。

「こおおんっ」

美咲が小さく悲鳴を挙げた。その声は人間のものではなかった。

「み、美咲さん？」

樹里が美咲を抱えようとすると、スーツと手から美咲の体が抜け
ていく。

いや、美咲が本来の姿を表したからだった。

その姿は狐であった。が、打たれた場所は今もドクドクと血
が流れ落ちているため、橙色の体毛は赤く濁っている。

「き、君は…… まさか……」

樹里がそう云うや、美咲は震えた体で、樹里を見上げた。

「ご、めん…… な、さい……」

はつきりと美咲はそう云うや、それを最後に美咲はぴくりとも動
かなかった。

「あ、ああ、ああ…… 美咲い？ 美咲いいいいっ？」

花梅が美咲に寄り添い、慟哭する。

ただ呆然と立ち尽くしている樹里は何が何だかわからない表情である。

「な、なんだよ？　なんだってんだよ？　なんだあ？　化けギツネだつてのによ？」

「化けギツネでもなんでも……　あなたは幸せな時間を壊した責任がありますよ？」

阿弥陀警部が険しい表情で雄平を睨みつけ、手首に重たい感触を与えた。

「銃刀法違反。並びに放火の容疑……　もう一つ　強盗の疑いもあるんで、一緒に来てもらいましょつか？」

阿弥陀警部はそう云うや、雄平を半ば強引にパトカーにぶち込んだ。

「何処へ行くこうとしてるのですか？」

帰ろうとする狐たちを瑠璃が呼び止める。

「一体……　誰がこんなことをしたんでしょうかね？　少なくとも……　一途な美咲がこんな自分をおとし貶めるようなことはしない。ならば誰かが美咲に化けてこの結婚式を滅茶苦茶にしようとした」

瑠璃の言葉を聞かず、狐たちは帰ろうとする。

「金毛九尾による差し向けですか？　それとも普通の結婚式じゃつまらないから、余興のひとつにでもしようとしたのですか？」

狐たちは立ち止まり、瑠璃を見るや、咄嗟に術を解いた。

いや、術を解かざるおえない。そうしないと人の足では逃げられないと察したからだ。

「白面金毛九尾に伝えておきなさい。浄瑠璃の鏡であなたがしたことを全て見てから、厳しい処罰を言い渡すと！」

瑠璃は、少女と見間違うほどの容姿からは信じられないほどに恐ろしい形相を、狐たちだけに向けた。

ボツンと立っている樹里と昌平、その両親が不思議そうに首を傾げている。

その近くには既に狐に戻った美咲と花梅の姿はなかった。

「い、樹里さん？」

皐月がそう声を掛けると、

「ああ、皐月ちゃん？ 君もここにいたのか？」

「ここにいたのかって？」

「いや、俺たちもどうしてこんなところにいるのかって思ってね？」

「どうしてって、だって樹里さんは結婚式を……」

皐月の言葉に樹里と昌平は笑った。

「この馬鹿が結婚？ 皐月ちゃん、本気で云ってるのか？ ありえないだろ？」

昌平がそう言うと、樹里は苦笑いを浮かべた。

「そういうことだ、皐月ちゃん。おれが結婚できるとしたら、それこそ夢のまた夢なんだよ？」

「でも、今さっきまで美咲さんと……」

「美咲…… 誰だい？ それは」

皐月はその言葉に驚き、声を挙げる事が出来なかった。

拓哉、三姉妹、瑠璃と脱衣婆以外…… その場にいる誰一人、美咲と花梅の事を何一つ覚えていないものはいなかった。

捌・友白髪（前書き）

友白髪ともしろが：結納品のひとつで、白い麻糸のこと。ともに白髪の生えるまで、未永く幸せにという願いがこめられている。

捌・友白髪

式が終わってから数日経ったある日。梅雨の時期だというのに、雲ひとつない晴れ晴れとした空が広がっている。

賽銭箱の方から、パンパンと手を叩く音が聞こえ、巫女の手伝いをしていた弥生がそちらを見やると、

「閻魔さま？」

「仏がほかの神仏に頼るのは烏滸おしがましいことですかね？」

瑠璃は苦笑いを浮かべ、弥生を見つめた。

「拓蔵と他の子達はいますか？」

「えっと…… はい。いますけど」

そう聞かや、瑠璃は社務所の方へと歩いていった。

「弥生さん？ 彼女は」

社員である巫女にそう訊ねられ、弥生は咄嗟に葉月の友達と説明した。容姿からしてそれくらいが妥当だと判断したからである。

神社の人間で、瑠璃が閻魔王であることを知っているのは拓蔵と三姉妹だけであるし、正体を教えてはいけないことになっている。

居間でお茶を渡され、一服するや、瑠璃は険しい表情を浮かべた。「先ず、幸宮雄平を騙した狐ですが、やはり金毛九尾による差し向けでした。結局、彼らはつまらなかつたんでしょうね…… 人間を好きになった美咲と、それを許した花梅が」

その言葉はあまりに小さく、ハッキリとした口調ではなかった。

「それと…… 樹里ですが ただひとつだけ、美咲の面影が残っ

ていたことがわかりました」

「美咲さんの面影？」

葉月がそう訊ねると、瑠璃は写真のようなものを一枚、卓袱台の上に置いた。

その紙に写っているのは樹里である。

「煙々羅えんえんらにお願いして、数日ほど監察してもらいました」

瑠璃はそう云いながら、樹里の手元を指さした。樹里の右手薬指には指輪のようなものがつけられている。

「だいぶ昔に、結婚指輪と婚約指輪に関する違いを言いましたよね？」

そう訊かれ、三姉妹は少しばかり思い出すと、答えるように頷いた。

結婚指輪は左手薬指にする。そして婚約指輪はその逆である。

「しかし、樹里くんが婚約とは…… そんな話聞いたことないんじゃないかな？」

拓蔵が腕を組み、うーんと唸った。

「ええ。拓蔵の云うとおり、樹里に婚約者はいませんよ」

「でも、それじゃ、どうして右手薬指に指輪なんて？ 樹里さんそんなに着飾る人じゃないし」

弥生がそう言うのと、瑠璃は少しばかり写真を見た。

「それだけ、美咲のことが…… 美咲との思い出が心の底から消えていないということでしょうね」

瑠璃は寂しそうで、それでいてどこかホツとしたような表情を浮かべた。

「訊き難いことなんだけど、美咲さんと花梅さんに対する処罰は？」

「当然、二人は樹里や周りの人たちを騙した結果になりますからね。」

閻獄第12条、人を騙したものは【大叫喚地獄・吼々くっく処よ】へと連行しようと思っただんですけど、当人は深く反省していますし、人を殺したわけでもありませんから、多少なりとも罪は軽くなるでしょう」

地獄において、殺生が一番低く見られている。美咲は樹里を騙してはいたが、誰一人殺してはいない。

「以上で、私が現状で伝えられることをあなたたちに言いましたが、何か質問はありますか？」

そう訊ねられたが、拓蔵と三姉妹は何も訊かなかった。

「では、私はこれで……」

瑠璃はスツと立ち上がり、居間を出ていった。

そのまま玄関が開く音がするや、瑠璃は声を挙げた。

「どうかしたんですか？」

その声で駆けつけた拓蔵と三姉妹は、瑠璃を見た。

玄関から外を見るや、僅かだが、雨が降っている。

「先程まで晴れていたのに」

ボツボツと降り始めた雨を見ながら、瑠璃は苦笑いを浮かべた。

「予定を変更します。弥生、久しぶりにあなたの手料理が食いたくなりました」

それを聞くや、弥生は少しばかり表情を強ばらせた。

「えっと、優しくお願いします」

「ええ。厳しくいきませす」

瑠璃は楽しそうに、三姉妹たちと夕飯を共にした。

「ありがとうね…… 美咲、花梅」

空に浮かんだ三つの影が稲妻神社を見下ろしている。

「これくらいのことでしたら、いつでも云ってください」

「でも、いいんですか？ 地獄裁判で忙しいはずじゃ？」

花梅がそう訊ねると、脱衣婆は呆れたような表情を浮かべた。

「瑠璃は、あの場所にいる時が一番素直なのよ。この前の結婚式だって、どこかつまらなさそうだったし、本当は行く気なんてなかった……」

でも、拓蔵や皐月たちが来るってわかった途端、急いで休暇届けを出して、着ていく服をあーでもない、こーでもないって、選んで……」

「楽しそうですね」

「ええ。偶にはこういうのがあってもいい。勿論他の十王に迷惑はかけてしまったけど、みんなそれを理解してくれてると思う」

脱衣婆はそう云うや、鎌で虚空を切った。

「さあ、私たちは帰りましょ」

そう云われ、美咲と花梅は地獄へと帰っていく。

（大切な休暇を楽しんでください…… 閻魔さま）

脱衣婆が思ったとおり、その日瑠璃から笑顔が消えることはなかった。

捌・友白髪（後書き）

煙々羅【えんえんら】の部分がおかしくなっていたのを修正。

杏・秋桜（前書き）

秋桜：コスモスアキザクラ、あきざくら。メキシコ原産のキク科コスモス属の花「コスモス」（Cosmos）の和名。

日本には明治時代に渡来。「秋桜」は主に、秋に咲き花卉の形が桜に似ているところから名づけられたからだそうです。

「秋桜」と書いて「コスモス」と読ませるようになったのは、1977（昭和52）年、山口百恵の「秋桜」コスモス（作詞・作曲：さだまさし）がヒットしてからのことである。

杏・秋桜

うつすらと橙色に染まった空が広がっており、その中を赤トンボが飛び交っている。

夏の激しい猛暑から開放されたように、涼しい秋の夕暮れの中、少女は何かを探していた。

「ユズツ？ どこ行つたの？ ユズウツ！！」

大声を挙げながら公園内を歩いている少女は、飼っている犬の名前を叫んでいた。

数分前まで公園のポールに紐を結んでいたのだが、結び目が甘かったため、次第に外れてしまったのである。

多動癖があるその犬は、飼い主である少女の近くにいかず、どこかへ行ってしまっていた。

一体どれくらい公園を周回しただろうか、少女は次第に疲れ、足取りを重たくしていく。

「くーんっ」と、遠くから犬の鳴き声が聞こえ、少女はそちらへと駆け寄ると、ダックスフンドくらいの小さな犬がしっぽを振っていた。

「あ、いた。もう…… ほら、ユズ……」

犬の首には、秋桜コスモスの花が描かれた首輪が着けられている。

少女は首輪につながった紐を手取るや、腕時計を見た。時間は夕方6時になるうとしている。

「もうこんな時間だ…… ほら、帰るよ」

そう云うや、少女は紐を引っ張り、帰るように促す。

が、犬はユズピクリとも動こうとしない。

「ほら、帰るよっ！」

再度少女は紐を引っ張るが、犬はまったくきこえず、ジッと何かを見るような仕草をする。

そして、次第にグルルと唸り声に近い鳴き声を発し出した。

「ど、どうしたの？」

少女は犬の様子に怯えた声を挙げる。

少女は普段、犬がこんな鳴き声をしないことを重々知っている。知っているからこそ、この仕草に違和感があった。

人懐っこい犬が敵対心剥き出しの態度を取るとはまったくもって今までなかったのだ。

微かに悲鳴のような声が聞こえ、犬は少女の手を力強く引っ張る。

「いつ、痛い！ ユズツ！ 落ち着い……！」

輪っかになっている紐に手首を潜らせていなかったため、紐はスルリと手から抜けた。

勢いよく走っていく犬の後少女は追いかけていった。

少女がちょうど、住宅地の路地裏に入ったところだった。異様な空気を肌で感じるや、少女は足を止めた。

「ユズ…… そこにいるの？」

少女は曲がり角の先に犬がいるのではないかと感じていたが、その先をどうしてか見たくなかった。

が、その先に行かなければ犬がいることも確認できない。

意を決した少女は、曲がり角の先へと視界を移した。

少女の視界の先には、何かが無数に散らばっている。

それはまだ夕暮れ空だったせいもあり、目にはつきりと映し出されていった。

（なんかの本で読んだことがあったっけ？ あの長いのって……大腸？ それとも小腸？）

何かの周りには長い縄のようなものが散乱している。

（それに…… あのまるいのって…… 眼だよな？）

何かの周りには潰され、液体を出しているものと、きれいに取り除かれた丸いものが転がっている。

（人が倒れてる…… お腹の中、取り除かれて……）

倒れている遺体を呆然と見ている少女は、何かがうしろにいる気配を感じた。

少女はその気配が、目の前で殺されている遺体を殺した犯人ではないかと考えた。

そして、その死体を見た自分も同様に殺されるのではないかと、う恐怖心にもかられる。

「ひっ……」

悲鳴を挙げようとしたが、声がでない。

「ぐうるるるるっ」

犬が唸り声を鳴らしながら、少女のうしろにいる気配に向かって咆哮を挙げた。

「ユ……ズ…… にいげえて……」

少女は息苦しくなり、意識を朦朧とさせながらも、犬コエに声をかけた。

犬コエは少女を助けようと、駆け出し、少女のうしろにいる気配に襲いかかった。

キャンッ！

小さな悲鳴が聞こえたのを最後に、少女の意識も遠のいた。

真っ赤に染まった夕暮れ時の空の下、気を失い倒れた少女のうしろで、バキボキと気持ちの悪い音を立てながら、何かを食べている音が響きわたっていた。

「おい…… 君…… 大丈夫か？」

大人の男性が倒れていた少女に声を掛ける。

「おい…… しっかりしろ……」

その声で目を覚ました少女は、まだ意識は朦朧としている。

「よかった。おい、女の子は無事だ！」

警察官の制服を着ている男性が少女を抱えながら、周りにいる警官らに報告する。

それを聞くや、警官らは安堵の表情を浮かべてたが、少女は何のこともかてんでわからずキョトンとしている。

「くうそお…… もうこれで8件目かあ」

警官の一人が怒りを露にするように拳を強く握りしめる。

「犯人はいまだわからず、これだけのことをしているというのに、まだ犯人像もままならないのかよ？」

「仕方ないだろ？ 犯人の特徴がわからんだ！ 捜査のしようがない」

警官らは自分たちの非常なまでに弱い存在だと憤りを感じていた。

そんな中、少女は首を動かし、辺りを探した。

「どうかしたのかい？」

少女を抱えている警官がそう訊ねると、

「ユズ？」

「ユズ？ ゆず……って、果物のユズかい？」

警官がそう訊ねるが、少女は首を激しく横に振った。

「ユズは？ ねえ、ユズはどこに行ったの？」

半狂乱になりながら、少女は誰彼構わずに訊ねる。

「少し落ち着きなさい」と警官は少女をなだめる。が、少女はそれを振り切るように訊ねた。

「くうそお、重てえなあ……」

大きな黒い袋を警官二人が慎重に運んでいるのが少女の目に映った。

「ゆつくり運べよ…… 大事なものだからな」

「わかってるけど、もう調べようがないだろ？ まるで獣に食われたようにボロボロになってるんだぜ？」

二人の警官の話を目にした少女は、その袋を見せて欲しいと頼むが、警官らはそれを拒んだ。

「あれは君が見てはいけない。見ちゃいけないんだ」

その言葉がなにを意味するものなのか、少女は次第にわかってきた。

あれは…… 死体が入った袋なのだ

少女は半ば強引に警官の手を振り切り、運ばれていく袋を無理矢理破ろうとした。

「ばかあつ！ お前ら、その子を止める！」

そう云われ、警官たちは少女を止めようとする。

が、興奮し、ガムシヤラになっている子供の力は想像出来ないものである。言い換えれば『火事場のクソ力』とたとえるべきだろうか？

さらに警官たちは少女ということもあってか、力を無意識に押さえ込んでいたため、少女を止めることができなかった。

少女の爪が袋に引っかかり、その部分から次第に破れだし、中身がこぼれ落ちていく。

「……………」

それを見た警官たちは全員視線をそれから逸した。

が一人、少女だけはジツとその何かから目を離さなかった。

いや、目が離せなかったと云った方がいい。なぜならその中には自分の知っている何かがあったからだ。

ボロボロに食い荒らされたかのように、肉片の中に混じっている骨には、明らかに人間のものではない骨格が混じっていた。

鋭い牙や、伸びた鼻先など、人間のものとは到底思えないものだった。

「あ………… ああ…………」

少女は引き攣った表情を浮かべ、譫言のように悲鳴を挙げる。

少女は頑なに違うものだと………… 自分の知っているものとは違うのだと想いたかった。

「お前たち………… 早くそれを片付ける」

呆然とする警官たちは主任警官にそう促されハツとするや、肉片を再び新しい袋に入れ始めた。

その時、チリンという鈴の音がし、全員がその音の先を見た。

袋に入れようとしたときに溢れ落ちた肉片の中から、真っ赤に染まった首輪のようなものが、地面に落ちている。

少女はそれを見るや、ガクンと膝を落とし、目を大きくひらいた。目の前に落ちているのは、秋桜コスモスの花が描かれた首輪で、間違いなく犬コエのものだと少女は理解する。

「はは…… ゆずう…… どこいったのお？ ねえ？ どこ？ どこにいったのお？ ゆずううううううう？」

まるで壊れたモノラル仕様のラジカセのように、少女は悲鳴に近い声で、犬コエを呼び続けた。

少女自身理解していた。あの肉片の中にあつたのは犬コエなんだと……

だが、それで理解できるほど、当時の少女が持っている精神力は図太くない。

これは夢なんだと…… 夢であるはずなんだと…… そう願っていた。

しかし、翌日、一週間後…… 一ヶ月、そして4年以上経った今なお、少女はその失った気配を消した原因を探し求めている。

姿が見えないその影を、それこそ盲滅法と言わんばかりに探している。

そして今日も…… なんの罪も持たない妖怪を切り殺していた。

吉・秋桜（後書き）

第十話です。大変お待たせしてしまつてすみませんでした。

式・卑怯者

「一同、礼っ！」

皐月が通っている福^{ふくし}祠中学のとある一角に、剣道や柔道、空手等々の部活動が使用している特別教室がある。

赤で囲まれた四角形の中に五人二組の女生徒が向かい合い、頭を下げ、自分たちの場へと戻っていく。今から行われるのは、当校の剣道部と他校の剣道部による練習試合である。

「先鋒、前へ」

審判を務める剣道部所属の生徒がそう告げるや、両チームの先鋒が面を着け、それぞれ中心位置へと歩み寄った。

互いに礼をし、竹刀を手にとり構えた。一人は平均的な長さの竹刀。もう片方は規定ギリギリと云っていいほどに長い竹刀であった。

「ほらっ！ もう始まつてるわよ」

そう云いながら、飯塚萌音は皐月の左手を引つ張る。

皐月の右手には包帯が巻かれている。

「ちょ、ちよつと…… 急^せかさないでよ！ まだむこうが来てから10分も経ってないでしょ？ 防具とか、竹刀の手入れとか……」
皐月があーだこーだ云ったところで、友人の足取りが止まるわけがなく、剣道部が試合をしている部屋へと入った。

公開練習も兼ねた試合のため、ほかにも見学者が部屋の中に入っている。

「めえええええええええええええええええええええんっ！！」

バシンツッ！という劈く音が部屋の中に響きわたり、審判が「一本

っ！」と宣告するや、歓声が挙がる。

負けた選手は面を脱ぐや、自分のチームへと帰っていく。

(えっと…… 時間的にまだ先鋒か次鋒戦よね?)

臯月は壁に貼られた選手表を眺めた。

「はあっ?」

選手表には試合の勝敗が記されており、それを見るや、臯月は声を荒らげた。

以下がその経過表である。(先が他校の選手。後が福祠中学の剣道部)

先鋒	×	先鋒
	×	次鋒
	×	中堅
	×	副将

という結果である。本来、剣道におけるチーム戦では、それぞれに位置する選手同士が試合を行い、三勝以上した方の勝ちというルールである。

そのため、上記のような勝ち抜き戦という形にはならない。

臯月は他校側の方を見やるや、先鋒以外の選手たちは余裕綽々と云わんばかりにノンビリとしている。誰一人、試合に見向きもしていなかった。

「ねえ? 一体どういうことなの?」

臯月は近くにいた剣道部の部員に訊ねた。

「それがね? 先鋒の子が自分だけで十分だって云って…… それを聞いたみんな頭にきちゃって、その子の申し出を承諾しちゃった

のよ」

部員は呆れた顔でそういう。が、その先鋒の腕前を間近に見て、
実力はあると判断していた。

「それにしても、長い竹刀ね？ 前にあなたの竹刀持たせてもらっ
たことあるけど、長さが違うだけで、全然違うんでしょ？」

萌音がそう云うや、皐月は顔を歪める。それを見た萌音は、なに
ごとかと首を傾げた。

「っ！ 一本っ！」

審判がそう告げると、周りから歓声が挙がった。

「くうそおおおおっ！」

最後の砦である大将を務めた選手が悔しさを露にするように叫ん
だ。

「これにて、当校の全敗とします」

審判がそう云うや、福祠中学の剣道部員全員が、悔しさを露にし
ながら、中心へと歩み寄った。

「ちよつとまつて…… あと一人いるんじゃない？」

全勝した他校の先鋒がそう云うや、全員が目を点にした。

「な、何を云つてんの？ もう全員出たわよ？」

福祠中学の剣道部大将がそう云うが、少女は視線を違う方へと向
けていた。

「確か、剣道部にスカウトされてるくせに、未だに入ろうとしてな
い馬鹿がいたわね」

少女は面を脱ぎながら、皐月に言った。

「言つとくけど、私は剣道の基本を教えてもらっただけで、後は殆
ど我流同然なのよ？」

臯月が嫌そうな顔を浮かべる。他校の先鋒が信乃だったからである。

「でも、これより全然強いでしょ？」

「ちよ、ちよっと？ これって何よ？」

信乃から罵声を受けた福祠中学の剣道部員達は声を荒らげる。

「全員、秒殺されたくせに？」

事実を云われ、部員たちは口籠った。

「ちよっと待つて？ 私、常に竹刀を持つてるわけじゃないのよ？」

「それじゃ、借りればいいでしょ？ 私も防具脱ぐから」

そう云うや、信乃は道着を脱ぎ、袴姿になった。

「ほら、条件は一緒」

「わかった……でも、ルールも何もないわよ？」

臯月はそう云うや、中心へと歩み寄った。

「だ、大丈夫なの？ あなた」

福祠中学の剣道部員が臯月に声を掛ける。

「みなさんもこのバカには早く帰って欲しいって思ってるでしょう？」

臯月は呆れながら、竹刀を左手にもち構えた。

「りよ、両者前へ！」

審判がそう告げるや、臯月と信乃は中心の線へと歩み寄り、互いに礼をする。

信乃は竹刀を両手に持ち、上段に構え、臯月は左片手に竹刀を持ち、下段に構える。

「臯月？ 今日は二刀じゃなくて、一刀よね？ まさか二刀しかやらないから、持ちかた忘れた？」

信乃がそう訊ねると、臯月は右手を見せ、巻かれていた包帯を解

くと、右手小指が真っ赤に腫れあがっている。

「昨日、突き指しちゃってね…… 全治三日って云われた」

そう云うや、包帯を巻き直し、竹刀を再び左手で持った。

「そう。それは災難だったわね」

信乃は申し訳なさそうな声で云った。

「それでは、両者 はじめっ！」

審判が宣告すると同時に、竹刀どうしがぶつかる音が大きく響いた。

「いきなり相手の弱味につけこむのはどうかと思うわよ？ 信乃お

っ……」

臯月は顔を少し歪め、信乃に言った。

「それを悠々と受け止めといて、よく言うわ」

信乃の竹刀は臯月の右側に打ち込まれており、それを臯月は竹刀を一瞬のうちに逆手持ちにして受け止めていた。

「相手の弱味につけ込むのは 勝負としてもっとも必要なものですよ？」

信乃は竹刀を構え直すや、臯月の顔面めがけて、竹刀を突いた。

臯月はそれを顔面ギリギリで避け、竹刀を横一文字に振った。

が、臯月は顔を歪める。竹刀が掠っただけで、判定にはならなかった。

「あんたの規定ギリギリの竹刀…… 反則じゃないの？」

臯月は竹刀を間合いを保ちながら、信乃に訊ねた。

中学生の場合、長刀の長さの多くは三尺七寸さびなな（百十二糎センチ）とされている。

それよりも長くないように調整されているもののだが、規定では百十四糎以下までとなっており、信乃の長刀は規定ギリギリの長さであった。

規定ギリギリの長刀と信乃の足捌きによって、福祠中学の剣道部員は全員負けたのだ。

因みに皐月の二刀流はルール上存在するもので、反則にはならない。ただし、珍しいことなので、否応なしに注目されてしまうが

「せええっい！」

信乃が皐月の頭目掛けて竹刀を降り下ろすが、紙一重のところであつて、皐月はよけていく。

が、一方的に攻撃する信乃に対して、皐月は攻撃する姿勢を見せない。

「あつ」と皐月が声を挙げ、自分の踵を一瞥する。

踵は赤い線ギリギリのところまで踏み入れており、さらには角のところだつた。

要するに逃げ場がなくなったということである。

「もらったっ！」

信乃は一気に勝負をつけようと、皐月目掛けて、竹刀を横一文字に振った。

逃げ場のない皐月が負けた　と、誰もがそう思った。

が……

信乃が放った竹刀の軌道は、ただただ空を切っただけだつた。

「えっ？」

信乃がそう小さく呆気に取られた声を挙げるや、自分の視界を疑つた。

信乃の視線の先には赤いテープと床しか映っておらず、皐月の姿はどこにもなかった。それに気付くと同時に、背中から腹へと貫いたような痛みと同時に、視界はグワンと天井へと動き、背中に衝撃が走った。

「つつう……つつ！」

信乃は皐月が足払いを自分を転がしたのだと、瞬時に理解する。

「あんた…… 本当だったら許されないわよ？」

「先に云ったでしょ？ ルールなんてないって……」

信乃の眼前に竹刀を突きつけ、皐月は「はい、おしまい」と告げた。

「あ、試合は私の負けでいいから」

皐月は審判にそういうや、借りていた竹刀を元の持ち主に返した。あまりに一瞬だった出来事に呆気にとられている周りの生徒たちの視線を横に、皐月は部屋を出た。

「ちよ、ちよつと？ 皐月い？」

萌音は皐月の後を追うように部屋を出ていった。

「な、何よおあのコおおおおおおおっ！」

信乃が通っている中学の剣道部員が声を荒らげる。

「だ、大丈夫？ 鳴狗さん」

「ひどいことするわねえ？」

皐月が部屋を出たあと、彼女に対して剣道部員はブーイングする。

「やめて…… 結局負けたのは私だから」

「はあつ？ 何言ってるのよ？ あの子はズルしたのよ？ 本来足払いなんて許されることじゃないでしょ？」

「先にルールはないって言ってたし、私もそれに了承した。それで負けたんだから文句は言えない」

信乃はそう言つと、審判を務めた剣道部員と福祠中学の剣道部員に深々と頭を下げた。

「先生。私、バスに戻ってますね」

そう云うや、信乃は部屋を出ていった。

（あの時、角に追い込んで、勝負は決まったと思った。でも、皐月の足が動く音も、気配もしなかった）

信乃は自分でも、あの時が絶好の好機チャンスだと思っていた。だからこそ勝負に出たのだ。

横一文字ならば、逃げられないと思ったからである。にも拘らず、皐月にうしろを取られ、剩あまつさえ一刀を食らっている。

皐月は足払いをしたのではなく、信乃の背中を強く打って、宙に浮かせたのだ。態と足払いしたように見せかけて　あ
まりに一瞬だったため、信乃以外、誰もそのことに気付かなかった。

「くうそおっ！」

ドンツ！と大きな音が誰もいない廊下に響きわたった。信乃が廊下の壁を殴ったのだ。

信乃は勝負に勝ったとは夢にも思っていない。かと言って負けたとも思っていない。

ハッキリとしない自分の中での勝敗が齒痒かった。

（今日は皐月が不利だからこそ、勝てたはずなのに……）

皐月が万全の状態だったらと思えば思うほど、余計に信乃は苛立ちを隠せないでいた。

先程叩かれた廊下の壁には、小さなへコミが作られていた。

貳・卑怯者（後書き）

さて、皐月と信乃の関係上、どうしても入れたかった剣闘シーンです。なお、皐月は長刀よりもむしろ短刀の方が使い勝手がよかったです。（第一話参照）

参・梗塞

臯月と信乃が勝負をした三日後の朝である。

山奥にある小さな屋敷に、4台のパトカーが門前の前で停っていた。

「阿弥陀警部。被害者は『齋藤武』さいとうたけむ 72歳の男性。この屋敷の主人のようです」

大宮巡査が遺族に確認を取り、それを門の前で煙草を吸っていた阿弥陀警部に報告した。

「死体の第一発見者は？」

「この屋敷の使用人です。彼は昨晚主人と一緒に晩酌を交わし、その後、使用人は部屋を出ていき、自分の部屋で休んだそうです」

報告を聞くや、阿弥陀警部は携帯灰皿で煙草の火を押し消し、臭い消し用のガムを口に含んだ。

「んうにいいいてえもお……、めえんどおうでえすねえ、にいちにいちにいおいをお消さないとういげえなあいのあは」

グチャグチャとガムを噛みながら、阿弥陀警部は愚痴をこぼした。「それだったら、煙草吸わなきゃいいじゃないですか？ 年齢と後々のことを考えたら」

「まあ、それでも昔に比べて本数減らしたんですよ」

阿弥陀警部がそういうや、大宮巡査は「昔はどれくらい吸ってたんですか？」と訊ねた。

「たしか…… 一日に余裕で4箱くらいなくなっていましたっけかね？」

それを聞くや、大宮巡査は呆れてものが言えなかった。

ヘビースモーカーと言われている人の平均本数は約2箱（40本）

前後と言われているため、その倍は吸っているということである。それでよく肺癌にならないものだとか大宮巡査は思った。

「よし、臭いが消えてますかね？」

阿弥陀警部は口元を両手で隠し、息を吐き臭いをかいた。自分の鼻ではわかりにくいため、大宮巡査にも確認を取った。

「ええ。ちよつと違う臭いがしましたけど、まあ気にならない程度だと思えますよ」

大宮巡査にそう言われ、阿弥陀警部は門を潜り、屋敷の中へと入った。

主人の部屋に案内された二人は、死体に手を合わせた。

死体は白目を剥き出しており、息苦しくなったのか手を喉元に近づけている。

口は裂けるように大きく開かれており、舌が口から食み出でていた。

「奥さん。主人は何時頃から部屋に？」

阿弥陀警部がそう訊ねると、女性 斎藤千和ちよひは少しばかり考えるや、

「確か昨日の夜9時くらいだったと思います。使用人の堀内さんと一緒に部屋で晩酌をするといつて」

千和は視線を使用人の男性に向けた。

「ええ。だんな様が珍しい酒を手に入れたとおっしゃったので、ここで飲めばいいのですか？」と大宮巡査が訊ねる。

「主人は珍しい酒を手に入れますと、自分の部屋に直すんです。そして気分がいいときに、私や使用人の方々と一緒になって飲むようにしていました」

「そして昨晚、晩酌の相手をしたのが堀内さん……あなただったと

？」

阿弥陀警部がそう堀内に訊ねると、堀内は素直に頷いた。

「昨晚、私はだんな様の部屋で、晩酌を付き合っておりまして。気分が良くなったので、薬を飲んでから寝ると言いました。」

「薬？ どこか悪かったんですか？」

大宮巡査の問いかけに、持病の喘息持ちだったと千和は云った。

「一応担当医師に確認を取りますから、通院している病院の連絡先を教えてくださいませんか？」

阿弥陀警部がそうお願いすると、千和は視線を堀内に移すや、何も言わず、堀内はスツと部屋を出ていった。

「ほう、以心伝心ですか？」

「いいえ、話の内容を聞けば、何を持ってくるかわかるはずですよ。千和の言うとおり、戻ってきた堀内は小さな電話帳を持ってきた。その中に病院名が書かれており、それが被害者が通院していた病院だと阿弥陀警部らは教えられる。」

「あれ？」

大宮巡査が床の間に飾ってある掛け軸を見るや声を挙げた。

「どうかしたんですかな？」

「いや、狼ですかね？」

そう云われ、阿弥陀警部も掛け軸を見遣る。掛け軸には合計して八匹の狼が描かれていた。

「すみません、奥さん。この掛け軸は？」

「それは確か主人が購入したもので、有名な画家が描いたものらしいですわ。」

千和はそう云うが、大宮巡査は釈然としない表情を浮かべた。

「この絵がどうかしたんですかな？」

「いや、何かどこかで見た感じがするんですよね？」

阿弥陀警部が「どこで？」と訊ねるが、大宮巡査は場所ではなく、雰囲気だと答えた。

床の間に飾ってある掛け軸には、七匹の狼が屯たむろしており、見た感じには楽しそうな雰囲気があるが、その絵の奥に、一匹の狼が群れをジッと眺めているという構図である。

大宮巡査はその狼が『自分も仲間に入りたい』というよりも、『入りたくても入れない、いや入ってはいけない』といった、物悲しいものに見えていた。

「主人はこの絵をたいそう気に入ってまして、よく自慢話をしていましたですよ」

「ほう、一体どんな？」

阿弥陀警部が千和から掛け軸の話を知っている中、大宮巡査はジッとひとりぼっちの狼を見ていた。

「どうかしたんですか？」

堀内に声をかけられ、大宮巡査はそちらに振り返った。

「いや…… どうして一緒にいるのかなって、普通狼は一匹で行動するのに」

「それはだんな様も仰っていましたが、どうもその認識は違うようですよ。狼は団体行動がほとんどらしいですからね」

何故、狼が一匹で行動するものだと言われているのかは諸説あるが、仲間に危険や狩りの開始を知らせるためにする遠吠えが、どこか物悲しそうに聞こえるからという説がある。

「仲間はずれになっっている狼は見た目しっかりしてますけど、どこか表情が暗いでしょ？」

大宮巡査もそこに引っ掛かっていた。孤独な狼は群れをなしている狼たちとさほど変わらない。 が、ジッと遠くから、それこそ

近くにいるはずなのに、まるで手が届きそうに届かないところにいるような、そんな雰囲気があった。

「それじゃ、遺体はこのまま検死に回しますが？」

「ええ。主人がどうして死んでしまったのか、調べていただけないでしょうか？」

遺体は鑑識によって、警視庁へと運ばれていった。

「どうかしたんですか？」

屋敷から警視庁へと戻る道中、大宮巡査が運転する車の中で、阿弥陀警部は訊ねた。

「えっと？ 何がですか？」

「いや、あの掛け軸を見てから、何か様子が可笑しいと思ったんでね？」

そう訊ねられ、大宮巡査は少しばかり、遠くを眺めた。

「阿弥陀警部は……鳴狗信乃という、皐月ちゃんと同じくらいの子を知ってますか？」

「ええ。鳴狗というと、そこから見える鳴狗寺の事ですし、信乃さんはここらへんでも結構剣道の腕はいいことで有名ですからね。皐月さんと同じかそれ以上かと、で、どうしてそう思ったんですか？」

阿弥陀警部が聞き返すや、大宮巡査は車を一時停止させた。ちょうど信号が赤に変わっていたからである。

「似てたんですよね？ あの絵に描かれていた狼が、彼女に……」

阿弥陀警部は掛け軸を翼々見ていないのであまり覚えていないが、信乃が三姉妹と同様に執行人であることは知っており、三姉妹とは違うからかと訊くと、そうではないと大宮巡査は答えた。

「以前、瀧瀬晋平のコテージで彼女に会ったことがあるんです。その時、瀧原希空の飼い犬が、危険を察知して、信乃さんに噛み付こうとしたんですけど、彼女はそれを振り払って、刀で切るうとしたんです。でも　まるで拒んだかのように切らなかつた」

「大宮君は警察官になって、何年くらいになりますかね？」
話を变えるように阿弥陀警部がそう訊ねる。

「えっ？　っと……　3年くらいになります」

それを聞くや、阿弥陀警部はため息をついた。

「これは、警視庁の中でも限られた人間、特に警視以上の人間しか知らないことなんですけどね。　4年前、この街で通り魔事件があつたんですよ」

「通り魔？　でも、通り魔なんてありふれた事件じゃないですか？」

「いいえ、通り魔と言っても、すれ違いに包丁で相手を切ったり、暴行を与えたりする方じゃないんですよ」

釈然としない雰囲気の中、再び車は走り出した。

「　バラバラになつてゐるんですよ。まるで食い荒らされたかのようですね　」

大宮巡査はその言葉に驚き、危うくブレーキをかけそうになった。「しかもその殆どが住宅街の路地裏だつた。人は襲われれば否応なしに悲鳴や抵抗をするでしょう。ですがまったくもって誰も気付かなかつた。特に夕方なんて少なくとも、家に人がいても可笑しくない時間帯でしょ？　それなのに誰一人気付いた人間はいなかつたし、目撃証言も殆どなかつた。私たち警官は死体が発見されてから漸く事件を知るくらいなんですよ」

それが極秘とされ、恐怖となつていた。

「ただ4年前、ある日を堺にピタツとなくなつたんですよ。犯人が捕まらずにね」

つまりは未解決なのだが、まったく犯人を示す証拠が何一つ見つからなかった。そのため現在捜査は凍結状態になっていると阿弥陀警部は話した。

事件発生から一兩日経ったある日の午後。阿弥陀警部と大宮巡査は稲妻神社へとやってきていた。例によって、葉月に靈視をしてもらうためである。

ただ、今回に限っては死因も既に分かっているし、持病による心臓発作だろうと考えていたのだが、どうも突然死というのが納得いかなかったのだ。

斎藤武の遺体を検死した結果では、死因は「急性心筋梗塞」として受理されたのだが、湖西主任はそれに関して納得が言っていないと、阿弥陀警部と大宮巡査は部下を通して聞いた。つまり直接湖西主任本人から聞いていないのだ。

湖西主任はベテランの鑑識班主任である。その彼が納得していない死因ともなれば、さすがに訊くしかないと判断し、阿弥陀警部からは稲妻神社へとやって来たのだった。

「おや、葉月ちゃん…… また可愛らしいのを着てますね？」

居間へと通された阿弥陀警部が葉月を見るや、そう言った。葉月が着ているのは法被ハッピである。

「町内会長から、町の夏祭りに子供神輿をするからって、試しに着せてみたんじゃないかな？」

拓蔵がそう云いながら、葉月に目をやる。

「いやあ、凄く似合ってて、可愛いですよ」

大宮巡査がそう言うと、葉月は顔を背けた。

「あれ？ 僕なんか失礼なこと云いましたっけ？」
ちようど、軽く作った肴を持ってきた弥生にそう訊ねると、弥生は「それくらい自分で考えろ」と云わんばかりに小さく笑みを浮かべた。それを見て、大宮巡査は首を傾げた。

「それじゃ、お願いしますね」

阿弥陀警部は斎藤武の遺体が写った写真を葉月に渡した。

葉月は写真を卓袱台の上に置き、1、2回深呼吸するや、ゆっくりと目を閉じ、写真に手を翳し、摩り始めた。

ゆっくりと時間が進む中、葉月の口元が微かに動いた。

「犬……？」

葉月がそう云うや、阿弥陀警部と大宮巡査は互いを見遣った。

「えっと…… お酒を飲んで、それから寝る前に薬を飲んで……」
葉月は写真からゆっくりと手を離す。それと同時にボタンと仰向けになって倒れた。

「葉月ちゃん？ 犬ってどういうこと？」

大宮巡査が驚いた顔でそう訊ねる。

「 犬の鳴き声でした」

「確か、君の力は写真に写った死者が最後に聞いた音を聞けるんだつたよね？ でも、殺された斎藤武の家に犬はいなかったよ？」

それを聞くと、葉月は驚いた表情を浮かべるが、霊視による披露の方意識よりも勝っており、ゆっくりとまぶたを閉じながら眠りについた。

「犬がいなかったって？ でも、葉月が霊視で失敗するなんてこと

……」
皇月がそう訊ねると、大宮巡査は慌てて弁明した。

「僕だって、君たちの力を間近に見てる立場だから信じているけど……でも、本当に殺された斎藤武の家に犬はいなかったんだ」

「そういえば、前にも似たようなことなかった？」

弥生がそう訊ねると、皇月は少しばかり思い出すと、
「確か……京本福介だっけ？ でも、あれはちゃんとしたじゃないの？ 遺体がだけど」

皇月と弥生は、猫の遺体が発見される前に家を飛び出していたので、直接見てはいないが、後日、話として聞いていたのだ。

「犬…… そういえば少し気になるものがありましたね？」

「気になるもの？」

阿弥陀警部の言葉に拓蔵が問いかける。

「殺された斎藤武の部屋に狼が描かれた掛け軸が床の間に飾ってあったんですよ」

「確かに狼は犬種だけど……でも、葉月が犬と狼の鳴き声を間違えるとは思えないし」

皇月はそう言いながら、卓袱台に置かれている被害者の写真を手にとった。

「あれ？ ねえ、どうして被害者は舌を出してるの？」

皇月がそう訊ねると、

「それは私たちの方も訊きたいんですけど。検死結果では急性心筋梗塞と判断されたようです」

その言葉に拓蔵は少しばかり顔を歪めた。

「それは可笑的いじゃろ？ 心筋梗塞というのは、云ってしまえば血管のどこかが何らかの形で塞がってしまい、血の流れが悪くなつて、心臓が停止してしまうはずじゃが？」

「そうなんですよね。それだったら喉ではなく、心臓の方に手が行くはずですよ？」

阿弥陀警部もその部分に対して、納得が言っていないかった。

「湖西主任が判断ミスするとは思えんのじゃがな？」

拓蔵は現役時代のころから湖西主任の仕事っぷりを知っている。

「それなんですけど、私たちは直接本人から聞いたわけではないので、詳しくはわからないんですよ」

阿弥陀警部がそう説明する。

「被害者の遺体を発見したのは？」

「使用人の男性。堀内という人物です。朝、電話で起こそうとしたそうですが、すぐに反応がなく、心配になって部屋の前まで行って伺ったそうなんです」

「全く反応がなかった……と？」

弥生の質問に大宮巡査は答えるように頷いた。

「それで心配になって、鍵を開けようとしたそうなんですけど、鍵は誰も持っていないんですよ」

「つまり、死んだ本人しかその鍵を持っていない……？」

「それから死亡推定時間は午後11時か日付が変わる午前0時の間。その前の午後9時から使用人と一緒に晩酌をしていたそうです」

「使用人が部屋を出ていったのは？」

「死亡推定の大凡一時間前。恐らく午後10時前後かと…… まあ、それを証明する人間はいませんでしたけどね」

阿弥陀警部は余りに証拠物件がないことを表情で語った。

「その使用人怪しいわね？」

「まあ、最初私たちもそう思ったんですが、薬物反応はなかったそうなので、上はその線はないと判断したようですよ」

「納得いつとらんじゃろ？」

拓蔵がそう訊ねると、阿弥陀警部は頷いた。

「ええ。まったくもって…… 急性心筋梗塞は、何かしら前触れが

あるはずですし、持病もそれに伴ったものだと思っただけですけど……」

「心臓病ってことですか？」

皐月がそう訊くと、阿弥陀警部は否定するように頭を振った。

「いや、全く別の病気でした」

「殺された斎藤武は、幼い頃から喘息を患っていたそうなんです。先日、通院している病院で確認を取りました」

大宮巡査が説明する。

「今回の事件。警察側の判断はどうなんじゃ？」

「いやその部分は全く。殺人とも自殺とも断言できませんからね。心筋梗塞は前兆があるとはいえ、殆どが突然死に近いものですから。つまりそうなると自他殺の判断が出来ないということになる。」

「あれ？ 皐月ちゃん、どうかしたのかい？」

先程からジッと写真とにらめっこしている皐月に、大宮巡査が声をかける。

「あ、いや…… なんか似たような妖怪がいたような気がして」

「やっぱり妖怪の作業なのかい？」

「ううーんっと…… 人に取り憑いて殺す妖怪なんてごまんというし」

「なんでもいいです。何か気がついたことがあれば」

阿弥陀警部がそう急かすが、言われた早々に思い出せるものではない。

「もしかして、死んでから取り憑いたんじゃない？」

弥生がとんでもないことを言い出す。

「弥生姉さん。いくらなんでもそれは！」

皐月は何かに気付くや、ジッと遺体を、特に口元を重点的に見つめた。

「大宮巡查っ！ 阿弥陀警部っ！ やっぱり葉月が云ったことは間違つてなんかない！」

その言葉に言われた二人はキョトンとする。

「それは一体どういうことですか？ だって現に犬はいなかったんですよ？」

「でも、もし犬じゃなかったら？」

言葉のいみがわからず、阿弥陀警部と大宮巡查は首を傾げる。

「そりやそうですよ。だって犬の鳴き声をしたのは、殺された本人なんですから！」

「そりや一体どういう？」

拓蔵も皐月の言葉に理解できなかったが、写真を見るや、その理由に気付く。

「犬神……じゃな？」

「うん。心筋梗塞だと胸の痛みになるし、なにより鳴き声が聞こえたのは、それに取り憑かれたからだと思う」

拓蔵が云った『犬神』という妖怪は、狐の霊が取り憑く『狐憑き』と同様のものとされている。

取り憑かれた人間は、伝来されている場所によって異なるが、喜怒哀楽の激しい情緒不安定な人間に憑きやすい。これに憑かれると胸の痛み、足や手の痛みを訴え、急に肩をゆすったり、犬のように吠えたりすると言われている。

が、そう説明された阿弥陀警部と大宮巡查は顔を歪めた。

「しかし、訊いた話だと、そのような胸の痛みを訴える症状は今の今まで見られなかったそうですよ？ それに、殺された斎藤武は情緒不安定ではなく、どちらかというと気丈な人物だったようです」

それが本当だとすれば、犬神に憑かれるというのは考えられない。

「阿弥陀警部？ 今度臯月を現場に連れていってくれんかの？」

「ええ。別にそれは構いませんが……」

阿弥陀警部は拓蔵の申し立てを二つ返事で了解するが、

「どうかしたのか？」

余りにも早い決断に、拓蔵は違和感を感じ、それについて訊ねた。

「いや、実は先日、母方の伯父が亡くなってしまって、その通夜が今日の夜からなんですよ。で、色々と準備もあるので、夕方の便に乗らないと間に合わないんです」

それはいつたいどこで？と弥生が訊ねると、熊本の方だと阿弥陀警部は答えた。

「東京から熊本となると、二時間前後か……」

壁に掛けられた時計を見やると、時刻は午後4時になろうとしている。

「ええ。それに有給を二日ほど頂いているので、観光も兼ねていこうかなと。そういうことですから、大宮さんと一緒に行ってくださいませんか？」

臯月はそう云われ、了承するように頷いた。

「それじゃ、先方にはこちらから連絡しておきます。多分明日の朝、そちらに連絡しますから」

「あ、でも明日学校……」

「それじゃ学校が終わったら、僕の携帯に連絡しておいて。すぐに行きたいだろうから、校門前にするかい？」

そう云われ、臯月は携帯の番号とメモを交換した

「いや、学校の近くに小さな駄菓子屋があるから、そこで」

臯月が場所の指定をする。大宮巡査はわかったと、なんの疑いも持たずに了解し、そのまま阿弥陀警部を羽田空港まで送っていった。

送ったあと、大宮巡査が警視庁についたのは、ちょうど午後6時になる頃としていたころであった。

伍・容喙（前書き）

容喙^{ようかい}：「名」^{スル}くちばしを入れること。横から口出しをすること。差し出口。

伍・容喙

皐月が通っている福祠中学は、葉月が通っている小学校と目と鼻の先くらい場所にある。中学校と道路を挟んだところに小さな駄菓子屋がポツンと建てられている。

「おばあちゃん、これいくら？」

皐月は制服姿のまま、駄菓子屋へと入り、陣列されたお菓子から、まるく作られたカステラが3つほど串に刺さったお菓子を手に取り、店主のおっかおばあちゃんに見せた。

「ああ、つとお…… 30円じゃよ？」

おばあちゃんにそう言われ、皐月は財布から云われた料金を渡した。

「お茶はいるかい？」

「んっ？ いいよ。これから出かけるところだから……」

皐月はおばあちゃんに訊く前に、背中のうしろに置かれていたお茶一式が目に入っていた。

おばあちゃんの前で小学生たちが屯うため、駄菓子を買ってもらったお礼に、お茶を無償で飲ましてくれている。

今朝方、皐月のケータイに大宮巡査からのメールが入っており、斎藤武の屋敷に確認を取ったところ、了解を得たので、一緒に行けるといふ連絡を受けている。

「ほうかい、これからデートかい？」

「ち、違うって！ ちょっと用事があるだけだっ！」

真っ赤になりながら、皐月は否定する。が、亀の甲より年の功と言わんばかりに、おばあちゃんはクスクスと笑を零した。

それを見て、皐月は店の中だというのに、購入したお菓子を一口頬張った。

「んみゆう〜」と、皐月は普段なら決して口にしない綻んだ声を挙げた時だった。

店の前に見慣れない車が停まるや、運転手が降り、店の中に入ってきた。

「あれ、皐月ちゃん？」

声をかけられ、皐月はそちらを振り向いた。

「あ、大宮巡査？」

「確か、買い食いは禁止されてるはずだけど？」

「あれ？ なんでうちの校則知ってるの？」

「知ってるも何も、僕も同じ学校に通ってたからね。それに買い食いはどこの学校でも禁止にしてるでしょ？」

そう云うや、大宮巡査は陣列されたお菓子を選び、それを嫗に見せた。

「ほう？ 皐月ちゃんの待ち人はあんたじゃったか？」

「おばあちゃん、僕が最後に来た頃から全然変わってませんか？」

「当たり前じゃ？ お前さんがその学校を卒業してから、まだ十年も経つとらんじゃろうが？ 歳をとるとなあ、時間が止まったよ
うなもんになるんじやよ」

大宮巡査と話している嫗は、まるで昔馴染がきたかのように、楽しそうに話をする。

「えっと…… 確かおばあちゃんって、90歳超えてるんじやなかつたっけ？」

「へ？ 確か僕がこの店に来てた時も90歳って……」

互いにそう云うや、皐月と大宮巡査は嫗を見やった。

「ほお、ほほほっ！ 老耄おいほれの年齢なんぞ、誰も興味はないじやろう

よっ」

実を言うと、この嬸の実年齢を知っている人間は少なく、また歳を出鱈目に云うため、それ以上ではないかと言われている。ハツキリとしない謎があるため、この駄菓子屋は子供たちのあいだでは『妖怪駄菓子屋』をもじって『妖菓子屋』と云われていた。

「いらっしやいませ」

斎藤武の屋敷に着いた臯月と大宮巡査を、使用人である堀内が対応する。

「彼女が電話で云った、黒川臯月さんです」

大宮巡査にそう紹介され、臯月は堀内に頭を下げた。

「そうですか？ ささ、奥様がお待ちしております」

堀内が門を開けると、大宮巡査と臯月は屋敷の中へと入っていった。

「奥様？ 大宮巡査とお連れの方がご到着しました」

堀内は大広間の扉を二、三度叩き、ゆっくりとドアノブを引いた。

広さは大凡10畳ほどあり、ソファと背の低い大きなテーブルが設置されている。

「あはは」

その広さを見るや、臯月は呆氣にとられたような声を挙げた。

「……四十九日の件ですが、うちの僧侶が仏の為にお教を読みます。遺族の方々はその後、会食という形となり」

耳があまり聞こえないため、あまり会話の内容は聞こえなかったが、臯月は声の方へと振り向いた。

その声が余りに知っている人間の声だったからだ。

「し、信乃？　なんであんたがここにいるの？」

大声でそう云うや、千和と四十九日の事柄を決める段取りをしていた人物が気怠そうに臯月の方を見た。

「おじいちゃんが忙しいから、私が代わりに四十九日の段取りを訊きに来たの」

信乃の実家はお寺であるため、葬儀屋から依頼を受けることがある。が、鳴狗家自体がその事業をしており、鳴狗寺の和尚がそれを生業にしている。

臯月は大宮巡査を見やった。

「信乃と話してるのが、殺された被害者の妻だったっけ？」

そう訊ねられ、大宮巡査は頷いた。

「そう。どうする？　事件当時のことを訊いてみるかい？」

聞き返されたが、臯月は首を横に振った。

「今は話を聞けなさそうだし……」

そう云うや、臯月は堀内を見やった。

ふと、臯月はあることを思い出した。

「あ、アルコール反応はなかったの？」

亡くなった時間が晩酌していた一時間後だとすれば、アルコールが残っていた可能性がある。

「それは種類にもよるんじゃないかな？　すみませんがご主人が最後に飲んだお酒は？」

「確かワインでした。グラスで2杯ほど　　だんな様はちびちびと飲まれますので」

堀内はそう答える。被害者と最後に会っているのは、他でもない彼だけである。

「確か被害者は図体がデカかったから、大きく見積もって84キロくらいだから……　せいぜい2時間くらいでアルコールは抜けるん

じゃないかな？」

「被害者が発見されたのは朝方だから、アルコールはすでに抜けてるってこと？」

しかし被害者が亡くなった時間は、晩酌をしはじめてから2時間前後とされている。

その間、使用人である堀内が部屋を出ていったあとも、主人が酒を飲んでいた可能性だってあるのだ。

「一応アルコール反応はあったよ。でも微かに残っている程度で、殆どなくなりかけていたそうだし」

そうなることややはり薬殺なのだろうか、皐月は思い、それに関しても訊ねた。

「いやそれに関しては反応はなかったそうだよ。やっぱり死因は急性心筋梗塞なんじゃないかな？」

大宮巡査の言うとおり、確かに検死結果ではそう出ている。が、皐月はその部分がどうしても引っかかっていた。

「堀内さんが部屋を出ていったのは、確か亡くなった一時間前でしたよね？」

「ええ。明日も早く仕事をしなければいけないので、お先に失礼しました」

「その時、ご主人はどのような様子だったんですか？」

「だんな様は部屋に飾られている掛け軸のことについて色々酒の肴として話されておりました」

皐月はそれを聞くと、大宮巡査ではなく、信乃を見やった。

「信乃さんがどうかしたのかい？」

「いや、堀内さんは被害者を最後に見たとして、部屋を出たのを知ってる人はいないのかなって……」

「それでしたら、私たち使用人はそれぞれ二人ずつ部屋を設けられ

ていますから、同部屋のものに確認を取ってくださいでも構いません」

それを聞いて、大宮巡査は誰なのかを訊ね、1、2分ほど確認を取りに一度広間を出ていった。

「堀内さんと同部屋の使用人の話だと、彼が部屋に戻ってきたのは午後10時 あれ？」

報告に戻ってきた大宮巡査がそう云うや、首を傾げる。

「ちよつと待つて？ 確か昨日阿弥陀警部から聞いた話だと、証明する人はいなかったはずじゃ？」

困惑する二人を尻目に、束ねた紙をまとめるために、テーブルに落とす音が聞こえる。

信乃が千和との打ち合わせを終えていた。

「使えている人間の証言なんて、信用する価値はないと思いますよ？」

そう云われ、大宮巡査は信乃を見やった。

「それじゃ、私は一度祖父に連絡をしますから、一度席を外させていただきます」

信乃は千和にそう告げると、広間を出ていった。

「あ、そういえば、遺体が発見されたとき、扉の鍵は閉められていたんですよね？ ご主人は普段から？」

「ええ。主人は寝るときは部屋の鍵全てを閉めるんです。扉や窓の鍵はもちろん、机の引き出しや筆筒の引き出しやら……とにかくなんでも」

そのマスターキーは主人だけしか持っていないことは、昨日、神社で聞いたとおりだったが、その多さを訊くや、臯月は呆れてものが言えなかった。

「大宮巡査？ 被害者が自殺したという可能性は？」

「いや、それに関してはまったくもってないんだよ？」

部屋の鍵は事実主人の部屋で見つかっているため、そう考えるのも仕方がないことだが、死因が心筋梗塞だとすれば、自他殺の判断は出来ない。

「あの？ 失礼ですけど…… トイレは？」

皐月がそう訊ねると、堀内が廊下を出て、一つ先の曲がり角にあると告げるや、皐月は広間を出ていった。

「信乃？」

廊下に出るや、皐月は廊下ですれ違った信乃に声をかけた。

「千和だっけ？ あのひと…… 何かに取り憑かれてるわよ？」

「やっぱり、和尚さんが忙しいっていうのは妄言ぼっげんだったの？」

そう訊ねると、信乃は首を横に振った。

「おじいちゃんが忙しいのは本当のことよ。でもあんたの場合は依頼できたみたいだけどね？」

そう聞き返され、皐月は顔を歪める。

「信乃はこのあとどうするの？」

そう訊ねたが、信乃は答えず、大広間へと戻っていった。

「あ、おかえりなさいませ、葉月お嬢様……」

縁側でボンヤリと足をばたつかせていた遊火が、学校から帰ってきた葉月に声を掛ける。

「ただいま、遊火。爺様は？」

そう訊ねられ、遊火は少し考える仕草をする。

「確か船が一斉にスタートして……」

「もしかして競艇？」

葉月にそう云われ、遊火は頷く。それを見るや葉月は呆れたように頭を抱えた。

「どうかしたんですか？」

「今日の夜あたりから強い雨が降るって、予報で云ってたでしょ？」

それで弥生お姉ちゃんが爺様に洗濯物を取り込んでいてっていったんだけどなあ」

そういえばそんな話を今朝方してたっけ？と遊火は思い出ししていた。

二人が会話をしている中、ポツポツと雨が降り始め、葉月は慌てて洗濯物を取り込んだ。

取り込み終えた後、もの一時間もしないうちに豪雨と化していた。

ボンヤリと外が暗くなり、大宮巡査は臯月に帰宅を促す。

「うん。証拠はこれ以上見つかってないんじゃない、ここにいてもしよ

うがないか」

臯月は妖怪の気配を探していたが、てんで見つからないため、作業なのかどうかもわからなくなっていたのが本音であった。

一応殺された斎藤武が持病である喘息の薬が、スプレー式であるということくらいである。

「確か鳴狗寺って、稲妻神社までの道のりにあったはずだから
信乃さんも一緒にどうかかな？」

大宮巡査がそう声を掛けるが、信乃は全く見向きもしなかった時だった。

突然、パリーンと外で何かが割れた音が聞こえてきた。

「堀内さん？ 何が割れたのか確認してきてくれませんか？」

千和にそう云われ、堀内は仕事の手を休めるや、確認をしに広間を出ていった。

「だいぶ風が強くなってきましたね？」

臯月は外の木々が揺れているのが見えていたため、そう大宮巡査に訊ねた。

「外で待機してる人たちもいるから、ちょっと確認してくるよ」
そういっや大宮巡査も広間を出ていった。

5分後、堀内と大宮巡査が一緒になって広間に戻ってきた。

「奥様、先程部屋の一室に石が入っております。恐らく強風に煽られて飛んできたんだと思います」

堀内は屋敷の中にいたというのに全身ずぶ濡れで、その手には赤ん坊の拳大くらいある石が握られていた。

「ダメだね。強風で外に出るなどの命令だ」

大宮巡査のうしろには外で待機していた警官たちが、他の使用人からタオルを渡されており、大宮巡査の頭にもタオルが被せられて

いる。

「帰れないってこと？」

「いや、帰れないわけじゃないけど、あまりにも風が強いからね。安全をとって、風が止むまでは待機という支持が出たんだ」

そう聞かされ、皐月は信乃を見た。信乃は微動だにせず、ジッと外を眺めている。

「信乃さんと皐月さんでしたっけ？　もしよろしければお泊まりになつてはどうでしょう？」

「いいんですか？」

「ええ。もともと部屋の数に余るほどありますし」

千和からそう云われ、皐月は少しばかり考える。が、外が強風である以上、いつ止むのかわからない状況である。

「わかりました。お言葉に甘えて……　でもその前に家族に連絡してもいいですか？」

「ええ、よろしいですよ。ご家族の方々も心配してるでしょうし」

皐月は屋敷に厄介になることを連絡しようとケータイを取り出すや、

「あ、皐月様……　うちの周辺はケータイの電波が大変つながりにくくなっているんですよ」

堀内にそう言われ、皐月はケータイの液晶を見やった。

「ホントだ。圏外になつてる」

「ですから、屋敷の電話機をご使用ください」

皐月は電話機が置かれている場所を教えてもらい、その電話を使用することにした。

皐月は自分のケータイに登録されている弥生の携帯番号を表示させ、それを見ながら、電話機のボタンを押した。

十回ほど呼び鈴を鳴らすと、漸く弥生が電話にでた。

(もしもし……)

「あ、弥生姉さん？ 泉月だけど」

声を聞くや、弥生は驚いた声を挙げた。弥生のケータイには見知らぬ番号が表示されていたため、警戒していたのだ。

(どうしたのよ？ ケータイは？)

「それが…… こっちからだ圏外になるからって言われたから、屋敷の電話使わせてもらってる」

(そう。それでどうするの？ 外すごく荒れてるわよ)

弥生の云うとおり、外は土砂降りになっており、屋敷の中でもその騒音はよほどのもので、耳が悪い泉月は不快な表情を浮かべた。

「うん。そのことなんだけど、被害者の奥さんが泊まっていけって誘われて」

(要するに、その厚意を受け止めたほうがいいかって？ 別にこっちは構わないけど……)

弥生にそう云われ、泉月は屋敷に泊まっていくことに決めた。

電話を終え、広間に戻ろうとした時だった。なにか違和感を感じ、立ち止まった泉月は電話機を一瞥する。

そして電話の近くで仕事をしている使用人に声をかけた。

「あ、あの…… 一時間くらい前に私と同じくらいの子がここに来ませんでした？」

そう訊ねられ、使用人は答えるように首を横に振った。

(どういうこと？ だって屋敷の周辺は電波が悪くて圏外になる)

泉月は信乃が鳴狗寺の和尚に電話をしたと本人から聞いている。

だからこそ、ケータイが通じるものだと思っていたのだ。

泉月は広間に戻るや、信乃を廊下に呼び出し、何時和尚に電話を

したのかと訊ねたが、信乃はどうしてそんなことを言わなければいけないのかと逆に聞き返した。

その返答に困った臯月を尻目に、信乃は用意された部屋へと入っていった。

その晩のことである。拓蔵が湖西主任個人の携帯に連絡を入れていた。

「はあ？ 知らんって…… お前さん、それはないじゃろうよ？」

電話越しに拓蔵は呆れた表情で云った。

（いや、全くもって知らんのじゃよ。事件があつたのを聞いたのも今日出勤してからじゃからな）

話を聞くと、事件当時、湖西主任は他の事件で鑑識課を出払っていたという。

（一応連絡は受け取るが、死因は阿弥陀警部から聞いたとおり、急性心筋梗塞なんじゃろうよ？）

そう云うが、湖西主任がどうして自分の携帯に、拓蔵が連絡を入れたのか薄々わかつていた。

（心筋梗塞じゃないかもしれないってことじゃろ？）

「わしは専門ではないからな。詳しくはわからんが…… もしかしたら殺された斎藤武の死後に取り憑いた犬神は、何かを教えようとしてるんじゃないかと思つてな？」

（わしはそっちの知識はほとんどないからな。しかし考えれば考えるほど、心筋梗塞なら心の蔵を押さえるはずじゃよな？）

取り憑き殺すという意味でなら、生きているうちに取り憑かれるのだが、今回に至ってはその前兆が見当たらないと聞かされている。

犬神に取り憑かれた人間は、まるで犬のような仕草をすると伝え

られているのだが、斎藤武にはそのようなものは一切なかった。

葉月が霊視で聞いた犬の鳴き声にしたって、被害者宅にいないのだから、本来ならば聞こえる訳がないのだ。

（もし葉月ちゃんがその声に気付かなかつたら）

「間違いなく、心筋梗塞による突然死として、処理されておつたかもしれないな？」

そう聞くや、湖西主任は何かを思い出すように、声を挙げた。

（4年前の事件、覚えておるか？）

「一応あんたから聞いたから、うっすらとな……それがどうかしたのか？」

（いや……少しばかり噂になっておつたんじゃよ。あの時最後に起きた事件の被害者である少女が未遂だったとはいえ、傷一つなかったのがな）

4年前となると、拓蔵は既に警視庁公安部を自主的に辞めているため、ほとんど事件内容を知らない。だからこそ、事件の詳細自体は初めて聞く。

（殺された人間の残骸を調べるとな、奇妙なものが見つかったんじやよ。それに関して、ある保健所にガザ入れが入ったんじやよ……）
「死体の中に、何かがいたということか？」

（狂犬病を促す病原菌じゃよ。保健所では捨てられたり、捕まえられた野犬がいるからのう。その中の一匹が何らかの形で保健所から逃げだした。そして、それに感染した犬が人間を食らい殺した……）
なんともとってつけのない話である。

事件当時、保健所では殺処分をした犬の亡骸が突然なくなるという怪奇事件が起きていた。狂犬病による感染も相まって、その保健所にガザ入れがされたのだ。

(しかし、保健所は全くのシロ。そもそも狂犬病にかかった犬が、その保健所から逃げたのかという証拠すらなかったそうなんじゃよ) 「4年前の事件は、その犬による怨霊だったと?」

(それはわからんが…… 危険を察し、攻撃するのは生き物の防衛本能じゃろうよ? そこに関してはわしは否定せんがな?)

湖西主任がそう言っている中、拓蔵は阿弥陀警部から見せてもらった被害者の遺体写真を思い出し出していた。

「心筋梗塞で首元に手はいかんよな?」

(あの写真のことか? あんたの言つとおりいかんじゃろうな? 心筋梗塞は心臓の……)

湖西主任はハツとするように、慌てて机から遺体の写真を出した。

(拓蔵…… 犬が舌を出すのは体温調整をするためとされているじやろ? 今被害者の舌を見るとな、紫色に変色しておるんじゃよ)

「それがどうかしたのか?」

(そのサインとしてな、チアノーゼ。いくなれば心不全の疑いがあるサインなんじゃが、その中で肺に水が溜まって)

湖西主任の言葉を待たずに、拓蔵は口を動かした。

『心筋梗塞ではなく、呼吸困難による殺人だとしたら?』

二人の声が一致する。

(確かに呼吸困難なら胸を押さえるかもしれんな? 息を吸えば、肺やお腹は膨れるからのう)

「だが、それでは心筋梗塞と間違えられる。だからこそ取り憑いた犬神は、あえて喉のほうに手をやった。息ができなかつたら喉に触れるやもしれんと考えたんじゃないろうな」

そうなると被害者を殺したのはやはり犬神ではなく、人間という

ことになってくる。

もしかすると、犬神はこのことを誰かに伝えようとしているのだからかと拓蔵は考えた。

「被害者の家に臯月を行かせておるんじやが、もしかしたら臯月に對してではないかもしれんな」

（そういえば、屋敷で搜索している警官から聞いたんじやがな。鳴狗寺の娘が四十九日の打ち合わせに来てるそうなんじやよ）

それを聞くや、拓蔵はうっすらとだったが、犬神の正体がぼんやりと見えた。

「確か、4年前を最後に、被害はピタリと止まったんじやったよな？」

（ああ。警察内でも未解決事件とされているが、捜査をしようとする人間はいないそうだ）

いや、恐らく人間ができるものとは思えなくなり、一種の怪奇現象、いくなれば神隠しとして、不条理ではあるが、そう判断したのだろう。と拓蔵は考えた。

そして、脳裏で言葉を呟くや、ワナワナと手を震わせた。

（もしそうじゃとしたら　今の信乃とその犬神を邂逅させるは、互いにとってあまりにも危険じゃぞ？）

陸・携帯（後書き）

チアノーゼ（ドイツ語：Zyanose、英語：cyanosis）とは、皮膚や粘膜が青紫色である状態をいう。一般に、血液中の酸素濃度が低下した際に、爪床や口唇周囲に表れやすい。医学的には毛細血管血液中の還元ヘモグロビン（デオキシヘモグロビン）が5g/dL以上で出現する状態を指す。貧血患者には発生の量が多い（ヘモグロビンの絶対量が少ないために還元ヘモグロビンの量が5g/dL以上になり難いため）。

漆・幼馴染

夜の十時を疾うに過ぎ、屋敷内ではシンとした空気が漂っている。そんな中、皐月は部屋に常備されていた懐中電灯を照らしながら、トイレへと行こうとしていた。

「ううわぁ、さむう」

肩を震わせながら歩いていくたびに、静寂とした周りで自分の足音がしているのかどうかもわからない。それはただたんに皐月の耳が悪いだけなのだが……

用を済ませると、どこからともなく犬の鳴き声が聞こえた。

皐月は嵐になっているというのに、どこその野良犬が吠えていると最初は思った。

が、嵐の音が少し大きめな音量に聞こえている皐月が、犬の鳴き声に気づくのは如何せんその音量が嵐よりも勝っているということになる。

そうなるとこの屋敷のどこかにいることになるのだが、大宮巡査から屋敷に犬はいないと聞いているため、皐月は不思議そうに首を傾げた。

もう一度犬の鳴き声が聞こえ、皐月は声が出た方を見やる。

視線の先には、強風によって狂ったようにガタガタと鳴らしている窓があり、その奥でボンヤリとした青白い炎が見えるや、皐月は身を構えた。

しかし、その光は霊体ともつかず、また殺気たったものとも、どちらでもない曖昧な雰囲気があった。

皐月は警戒しながらも、ゆっくりとその光に近づいていく。
皐月が近づいていくと同時に、光も皐月の方へとゆっくりと近づいていく。

窓まで行くと、青白い光はジツと皐月を見ているという感じである。

そして視線をゆっくりと動かし、信乃がいる部屋の窓を一瞥するや、スーッと消えた。

(信乃？)

皐月は光が信乃の部屋を見ていた感じがし、そちらを見た。

一瞬だけ、光が視界から消えたとき、聞き覚えのある鈴の音が聞こえた。

それは信乃が持っている金切り声のような歪んだ音だった。

(ユズ？)

皐月はもう一度光がいた方へと振り返ったが、そこには青白い光はなかった。

その荒れ狂う外を見ながら、皐月は信乃がどうして妖怪を毛嫌いしているのかを思い出していた。

理由はただ単純である。4年前、得体のしれない何かに殺されたユズの復讐をするためだけである。

皐月はその理由を知っているからこそ、信乃が自分と同じ執行人であることが嫌であった。

執行人はあくまで妖怪に取り憑かれたり、妖怪と化した人間に罪状を渡すのが仕事である。警察が犯人を逮捕するのに、たとえば犯人が自首してきたのならば、何もせず手錠をはめるのと同じであり、また抵抗したならば、それ相応の対応をするものである。

どちらも公私混同することは許されていない。

だからこそ、信乃が執行人をしていること自体が間違っており、復讐自体に意味などない。

皐月は色々な人間や妖怪と関わっていくうちに、信乃がやっていることは間違っていると考えていた。

たとえユズを殺した得体のしれないものを滅したところで、ユズが戻ってくるわけでもない。だからこそ自分とは違い、キチンとした実力を持っている信乃にやめてほしかった。

ふと結婚式場で脱衣婆が云ったことを皐月は思い出す。

『退治したところで、あの子が変わるとは思っていないわ、むしろ今まで以上に見境なく妖怪を退治するでしょうね』

皐月もそのことが不安だった。

鳥はそのまま飛び続けているわけではない。必ずどこかで羽を休める場所を探しながら飛び続ける。そして疲れたときにその木の枝なり、羽を休める場所できつろぐ。

しかし、たとえば行く先々の周りが海しかなかったら、羽を休める場所なるどこにもない。そして飛び続けて体力がなくなれば、海へと落ちていき、羽が濡れて重たくなり浮かび上がることはない。

皐月自身も怒りが先立つこともあるが、それでも罪人は罰せられなければいけないし、たとえ赦せないことでも、赦す余裕がなければいけないと瑠璃から教えられている。だからこそ、罪を言い渡し、それを悔い改めさせる猶予を与えている。

逆に信乃はあくまで復讐のためだけに執行しているとしかいいなかつた。

皐月は光が信乃の部屋を見ていたことが気になり、そちらへと向かつた。

斎藤千和は屋敷内の戸締まり確認を終え、就寝しようとする。戻ろうとしていた。

彼女の部屋は殺された斎藤武の隣部屋で、その前を通ることになる。

ふと斎藤武の部屋から物音が聞こえ、千和は立ち止まった。そしてゆっくりとドアを開け、部屋の電気をつけた。

「な、何をしていますか？」

戦くような声を挙げながら、千和は部屋の奥にいる影に声をかけた。

影は箆笥の中を探っており、声をかけられるや千和の方を見やった。

「し、信乃……さん？ い、一体何をしていますか？」

千和にそう訊ねられた信乃だったが、その言葉を無視して、再び箆笥の中を探り出した。

「き、聞いているのですか？ 一体何をやって……」

千和は信乃が箆笥の中を探していることには、声をかける以前に気付いていた。しかし、主以外の人間が鍵を持っているわけもなく、また信乃は部屋を荒らしているわけでもなかった。

ピンポイントにあるものが入れられた引き出ししか開けていないのだ。

「な、何を探してるんですか？」

「薬…… あなたが殺された斎藤武に飲ませた毒薬が入ったやつをね」

その言葉を聞くや、千和は呆れた表情を浮かべる。

「な、何を馬鹿なことを？ それに…… 私が何時どうやって薬を飲ませたと言うんですか？」

信乃は諦めたのか、引き出しを閉じる。

「別にあなたが直接殺したとは言っていないでしょ？」

「あのですね？ 私がどうやって主人に薬を飲ませたと言うんですか？」

千和の言葉を遮るように、信乃は顔を千和の体に近づけ、鼻をひくつかせた。

「な、なにを？」

千和は逃げるように、信乃から離れた。

「やっぱり…… 最初にあつた時からわかっていただけ」

「一体何のこと……」

千和は言葉を止め、ゾツとした。

「ひとつ教えてあげましょうか？ 人間には体臭というものがあつて、汗や皮膚の汚れなどによって臭うもの。もちろんあなたは香水をつけているから、それをかき消している」

信乃は上目で千和を睨みつけるように言う。

「だけど臭いは別に体臭だけじゃない。薬の臭いや、血の臭いも混じっている場合だつてある。薬はとにかく…… 自分以外の血の臭いがしているのは可笑しいわよね？」

そう云われ、千和は顔を引き攣らせながら笑った。

「な、なにをふさげたことを！ 私はどこも怪我していませんし、薬なんて飲んでいません」

言葉を述べるが、千和は信乃からゆっくりと離れていく。

「それじゃ…… 何も知らないのなら…… どうして汗なんてかい

てるのかしらね？」

その言葉に、千和は自分が冷や汗をかいていることに気付く。

冷や汗は恐ろしいときや、緊張したときに発汗する汗のことである。もちろん今の状況では、信乃に恐怖を感じてのことだと説明はできる。

「私は別にあなたを貶めようなんて思っていない。ただたんに憶測を述べているだけ。それが間違っているのならば、汗をかくことなんてないと思うけど？」

「と、突然人殺しなんて云われて、気持ちのいい人間なんていません！」

信乃は千和が言った言葉を聞くや、少しばかり間を空けた。

「ひっ？」

千和は自分の鼻先に突きつけられたものを見るや、小さな悲鳴を挙げた。

「私は別にあなた自身が殺したとは言っていないわよ？ あなたが飲ませたとしか云っていない」

「それでは矛盾しているでしょ？ 私が飲ませたというのなら、私自身が主人に毒薬を……」

千和は信乃が発した言葉の意味を理解する。

“飲ませる”は被害者自らが飲むという意味であり、“飲まされた”のならば、被害者は何者かに無理矢理飲まされたということになる。

「あなたは被害者が殺された夜、古くなって中身がなくなった薬の中に、毒薬を溶かした水を入れた。スプレー式の薬の中身なんて、そうそう見るものじゃないしね？ それに遺体の第一発見者が堀内

とかいう、あんたの側近ならばもつと話は別になつてくる」

「い、一体何が言いたいんですか？」

千和はゆっくりと後退りするが、背中に冷たい感触が走る。千和のうしろには壁しかなく逃げ場がない。

「ひとつ確認したいんだけど、薬は必ずその引き出しに仕舞われるのよね？」

信乃の問いかけに「ええ。そうよ」と千和は答える。

「それじゃ……捨てた容器は誰が捨てるのかしら？」

「それは勿論主人が……」

千和は言葉の意味がわからなかった。

「当然、第一発見者の堀内でしょうね？　そもそも誰が、どうやって主人の部屋の鍵を開けたのか……それはね、それを証言する人間は存在しないから」

信乃の言葉には信憑性がないように感じられるが、実は裏付けがキチンとある。

まず堀内が電話をしたのかという証言である。

これは同室の使用者によって、遺体を発見する数分前、主人の部屋に電話をしたという証言があるのだが、その使用者が直接電話を聞いたわけではない。

そもそも電話の内容は耳を受話器に近付けない以上、話を聞くことはできない。

また、主人の部屋に電話をしたのかということ自体にも違和感がある。

そして斎藤武の遺体が発見される直前、部屋の鍵をどうやって開けたのか……

それはただ単純な話である。

妻である千和が隣部屋だからこそ出来ることであり、そして全て

の人間が口裏を合わせれば済むだけの話である。

死亡推定時刻は昨晚の午後11時から日付が変わる午前0時の間とされている。もちろんこれに関しては偽りはない。が、堀内が証言したとおりの時間に主人の部屋を出て、自室に戻った時の時間を偽っていたとしたら？

屋敷内の仕事はハードであり、疲れが重なって、心身ともに休みたくなる。

それが深い眠りであろうと、レム睡眠（体は眠っているが脳は活性している）状態であればなおのことであり、同室の使用人は、堀内が部屋に戻ってきたということだけで、何時戻ってきたのかまではわかっていないのだ。

朝電話したとして、それは『どこに電話をしたのか』ということになる。

先程も云ったように、電話をかけた堀内以外誰も内容を知らない。違和感を感じた堀内が慌てて斎藤武の部屋へと駆け出しただけである。

そして部屋の鍵を誰が開けたのか……これは千和の証言によって証明される。

『主人は“寝るときは”部屋の鍵全てを閉めるんです』
そもそも鍵を閉めていたこと自体が事実ではなかったのだ。

「あ、あなたの推理はわかりました。ですから……その刀を好い加減収めて」

千和はその言葉を云うや、カツと外が雷によって真っ白に光り、そして長刀を高々と上げた、信乃の表情が逆光をあびたのを見るや、顔が青ざめた。

それはまるで獲物を見つけた殺人者のような表情だったからだ。

「この刀は人間には決して見ることができないのよ!」
「そういうや、信乃は刀を振り下ろした。」

「っ?」

途端信乃は顔を歪めた。

「は、放しなさい…… があはあっ」

千和は片手で信乃の首を掴み、ギリギリと絞め上げていく。

その力は想像以上のもので、少女とはいえ、片手で持つのは難しいのに対して、千和はいとも容易く持ち上げている。

「一つ…… 抜けてるところがあるわよ? 堀内さんがどうやって主人に薬を飲ませたか…… そもそも主人の死因は心筋梗塞。薬物の反応は何一つなかった」

「そ、それこそ詭弁…… でしょ? 大体心筋梗塞の疑いがある人間が 酒を控えることはないのよ!」

信乃の言葉に千和は歪んでいた顔をより一層歪める。

酒は百薬の長という言葉があるように、アルコールを取ると血液が固まりにくくなるほか、血液中の善玉コレステロールを増やし、動脈硬化を予防する働きがある。

そのため、心筋梗塞、狭心症、不整脈、心不全といった心臓病、または全体の死亡率が減るといふ事が判明されている。

もちろんなんでもそうだが、効くからやりすぎるのは却って危険である。

「それに…… スプレー式のトリックは正直言って大嘘。酒を飲んでいる人間が薬と一緒に飲むなんてないしね」

それを聞くや信乃の首を絞めている千和の手がより強くなった。

「薬が肝臓で溶け出すのが飲んでから約二時間、堀内が主人の部屋

で酒を飲み始め、部屋を出るまでの一時の間…… 主人が酒を飲んだのかという証言自体がないでしょ？」

信乃はそう告げるや、千和を刺した。

「あがああああああああああつ！」

信乃が悲鳴を挙げるや、手から長刀が抜け落ちる。運悪く刀は千和の横つ腹を掠めただけだった。

「さあて…… どうしましようかね？」

千和がそう告げるや、部屋の扉が開いた。

「しのおおおおおおおつ！」

部屋に飛び込んできた皐月がそう叫ぶや、千和に体当たりをしようとしたが、先に気付いた千和が、片手で掴んでいた信乃を皐月にぶつけるように投げた。

「があはあつ！」「げえはあつ！」

重なるように皐月と信乃は廊下の壁にぶつかった。

二人を見るや千和は、逃げるように窓から飛び降りた。

「まつ…… げえほあつ！」

息を整えようとする信乃が睨むように皐月を見た。

「大丈夫……？」

皐月がかそつとした手を信乃は振り払う。

「どうしてここがわかったの？」

その問い掛けに皐月は答えるべきなのだろうかと考えた。

「それより…… 千和さんを追いかけましょ？ 信乃…… 立てる？」

信乃はその言葉を遮るように立ち上がるや、

「……………っ！」

信乃は何かを口走るが、余りにも小さかったため、皐月には聞こ

えなかつた。

漆・幼馴染（後書き）

今回の推理は本当に億足でしかありません。そもそも信乃は誰一人の証言を信じてはいません。仲間内の庇い合いでしかないわけです。

捌・邪推（前書き）

邪推^{じゃすい}：僻^{ひが}みから、悪い方に推測すること。

窓から飛び降りた千和とそれを追う信乃の後を皐月が追う。

雨は夕方から降り始めた時よりも激しくなり、仄かにぼやけた部屋の明かりは、何の頼りにもならない。

荒れ狂った空気が、まるで皐月だけを二人に近付けさせようとなないかのようだった。

それでも皐月はあくまで執行人として、信乃が云っていた推理が正しければ、千和を誘導殺人の主犯として、罪状を言い渡さなければいけない。

それは信乃よりも先に言い渡さなければ、取り返しのつかないことになる。

「信乃っ！」

皐月は雨にかき消されることを覚悟の上で、必死に叫んだ。

自分の声が小さく感じられるほどに雨音は大きく、それどころかより一層激しくなっていく。

視界の先に青白い炎が見え、皐月はその先に信乃がいると直感した。

いや、むしろ青白い炎が場所を教えているといったほうがいい。

「一刀……桜翼燕おつひくのさかもちっ！」

信乃がそう叫ぶや、飛び込むように長刀を千和目掛けて振り下ろした。

千和は肉を削ぎ落とされるが、致命傷とは言わず、一瞬のうちに

信乃の懐に入り、腹部を殴り、信乃を吹き飛ばした。

「我流一刀……紅破くれば」

臯月がうしろから千和に襲いかかるが、切っ先は悠々と避けられ、臯月は千和に蹴り飛ばされる。

「げえほっ！」

信乃は体勢を整え、千和との間合いを少しだけ離れた。

ふと、臯月の気配が消えているのに気づくが、実際は信乃の視界にいたので、目で確認はできた。

臯月は二刀を構え、精神を集中させるや、

「二刀……焰鼠えんそのわだち轍わだちっ！」

長刀を先に構え、その線に沿うように短刀を弓矢みたいに構え、千和に突っ込んだ。

長刀で相手の間合いを詰め、相手が刀を避ける一瞬に長刀を引き、その勢いで逆の短刀を相手に突き刺す……が、それすら避けられてしまう。

「一刀……戦風扇そよかぜのおうぎ」

臯月の切っ先を避けた千和に、すかさず信乃が片手で持った長刀を縦横無尽に切りつけた。　　が千和は全て避け、二人との間合いを離れた。

臯月と信乃、二人が次の攻撃をしようと構えた時だった。

一瞬のうちに千和は信乃の間合いに入り、爪で服を引き裂いた。

「っ！」

信乃は体勢を崩し、裂けた服を覆うように身を屈めた。

「信乃っ？」

臯月がそう叫ぶや、千和は信乃を集中的に襲いかかった。

「あああああああああああああつ！！」

ピチャピチャと体を引き裂かれた信乃は悲鳴を挙げる。

「信乃を放しなさい！」

皐月が間に入るが、千和は皐月を殴り飛ばした。

そして、信乃から離れるや、体勢を整えようとした皐月に飛びかかり、羽交い締めにする。

「は、放し……」

皐月がそう叫ぶや、千和は口を裂けるほどに大きく開けた。

その口は到底人間のものとは思えないもので、犬歯のような牙があった。

そして、皐月の腹部に噛み付き、裂いた。

「……………」

声のない悲鳴を挙げ、皐月は意識を朦朧とさせる。

即死じゃないのは、彼女が摩訶迦羅マハーカアラの加護を受けている以外にも理由があるが…… それでも瀕死の状態であることには変わらない。

「一刀……」

信乃がその空きについて、千和に攻撃をしようとしたが、逆に再び襲いかかられた。

皐月は朦朧とする意識の中、信乃に襲いかかっている千和に取り憑いた犬神の様子に、ふと疑問を浮かばせていた。

皐月には致命傷になるほどのことをしているにも拘らず、信乃に對してはまるでそれを拒んでいるように見えたのだ。

そして……千和の形相を見たとき、皐月は自分の目を疑った。

(泣いてる……?)

降り頻る雨で濡れているのだと、最初は思った。

しかし、千和の表情は、徐々に恐れるように強^{こわ}ばっていき、まるで攻撃すること自体を躊躇^{ちゆちゆ}っているようにも感じられる。

(まさか…… だけど…… もしそうだったとしたら……)

皐月は千和に取り憑^よいている青白い炎に心当たりがあった。が、どうしてそうなったのかがわからなかった。

そして、一瞬だけ聞こえた鈴の音で、皐月は確信した。

(信乃……！ その妖怪は…… その妖怪だけは)

皐月がそう思った時だった。

千和の一瞬をつき、信乃が刀を降り下ろすや、千和に取り憑^よいていた青白い炎は逃げるように離れた。

「逃がすかあああああっ！」

信乃がその炎を切り裂こうとしたとき、金属がぶつかる音が響いた。

「なあにやってんのおおおおおお？ 皐月いいいいいいいい？」

突然のことで混乱しているのと、せっかく殺せると思った矢先に遮られてしまった信乃は怒りを露にする。

「はあ…… はあ…… はあ……」

信乃の攻撃を受け止めている皐月は、立っているのがやっとといった感じだ。

「早く妖怪を殺さなければ…… 取り返しのつかないことになるのよ？」

それは尤もなことだが、皐月はそれを頑なに拒んだ。

その行動がより信乃を苛立たせる。

「一体何だつていうのよ？」

「殺しちゃダメ…… この子だけは…… 殺しちゃ……」

「何言ってるの？ 殺してはいけない妖怪なんて……」

「千和さんに取り憑いていた犬神は！ もしかしたら、あんたがずつと探していたユズかもしれないのよ？」

信乃がその言葉を押さえ込むように、皐月は叫んだ。

「な、何をふざけたことを云ってるのよ？ ユズが妖怪な訳がないでしょ？ だつて…… だつてあの時 ……………っ」

皐月の言葉を振り切るように、信乃は再び炎に切りかかろうとする。

「閻獄第十四条、人に取り憑き、執行人に事件のヒントを与えたものは、閻魔王が定めた猶予を与える！」

皐月がそう叫ぶや、どこからかおふだが現れ、青白い炎に貼り付いた。

が、そのおふだは燃えてしまい、灰とがしてしまった。

そして、炎は逃げるように消えた。

捌・邪推（後書き）

はい。必殺技（通常技含む）のオンパレードでしたが、全て実際に読める文字です。熟語ではなく、一つに対してのと思っつてください。
（二字熟語を改変したのもありますがw）燕つばめとかさかもりいて燕と読めないこともないw

玖・慟哭

今までの嵐が嘘のように雲間が裂き、月明かりが照りはじめた。

「臯月ちゃん！ 信乃さん！」

騒ぎを聞きつけた大宮巡査ら警官たちが、臯月と信乃のところへと駆け寄った。

「大丈夫……っ!？」

その惨状を見るや、大宮巡査は口元を抑えた。

臯月の腹部は噛みちぎられており、そこから血が大量に流れ出している。

「だ、誰か……！ 誰か救急車を……！」

大宮巡査がそう叫ぶと、臯月は大宮巡査の裾を握った。

「まって…… 私より…… 信乃を病院に……」

確かに二人とも重傷を負っている。しかし、傍から見れば、臯月の方が危険な状態である。

「な、何を云ってるんだい？ 先に君を病院に……」

大宮巡査がそう云うと、臯月は歪んだ表情を浮かべた。その表情は自分よりも信乃の方を助けて欲しいといった感じであった。

「信乃…… あの子は必ずまたあなたのところに現れるかもしれない…… でも……」

臯月がそう信乃に云うが、信乃は臯月が先程やった不条理が赦せないといった感じである。

「 執行人が妖怪を逃がすのは、大罪じゃないの？」

「そ、それはわかってる！ でも、あの子は誰も殺してなんかいない！ それにあの犬神を殺したら…… 信乃自身が後悔する！」

その言葉を聞くや、信乃は少しばかり臯月を見やる。

「後悔？ 妖怪を殺すことに後悔なんてしない。それに…… さつきからなに詭弁を述べてるのよ？」

信乃は目の前にいた妖怪を滅せなかつたことに、より苛立ちを感じていた。もちろんそれは臯月も重々感じている。

「それにね…… たとえユズだつたとしても 私を傷つけるようなことはしない」

「信乃…… あんた前に私に云つたわよね？ 妖怪には心が無いって…… でも、あんたを攻撃していたとき、千和さんは泣いてたのよ？ 妖怪に取り憑かれた人間は自意識を保てない。だつたら」

「っさい……！」

臯月の言葉を遮るように、信乃は言葉を述べた。

「さつきから、ユズ…… ユズ…… ユズ…… って 私があの子のことを聞けば、妖怪を殺すことをやめてくれると思つてるの？ それは無理よ…… あの子を殺した妖怪に復讐するまでは妖怪を殺し続ける。たとえばあの子が妖怪だつたとしても、その考えは変わらないわ」

「信乃…… わかつてるの？ たとえ殺し続けても、それはあんたがあんたを殺し」

臯月は信乃の表情を見るや、言葉を止めた。

その表情は目に輝きがなく、曇天の濁りがあつた。

「人間でもないくせに…… 人間でも、妖怪でもないくせに！ 私の何がわかるつていうのよっ！」

そう言い放つや、信乃は傷ついた体を引きずるように屋敷を出て

いこうとする。

「し、信乃さん……」

大宮巡査が後を追いかけてよとしたが、2、3歩歩くと足取りを止めた。

信乃の周りで様子を見ていた警官たちですら、信乃を呼び止める人間はいなかった。

それはまるで、信乃がそれを拒んでいて、誰一人それに手を貸そうとはしないと聞いた状況だった。

「お、大宮巡査…… 斎藤千和は」

警官が大宮巡査に声をかけ、大宮巡査はハツとする。

「そうだ！ 千和さんは？」

目の前で倒れている千和を見るや、大宮巡査は彼女に駆け寄った。

そしてその様子を見るや、言葉を失った。

臯月と信乃が一目見ただけでも重症だったにも拘らず、千和の体は雨で濡れ汚れているだけで、外傷は殆どなかったのだ。

「一体どういう……」

大宮巡査はそのことを訊ねようと、臯月を見やった。

しかし臯月の表情は、まるで心がここにはないといったように、目を大きく開き、口をワナワナと震わせている。

ずっと雨にさらされて、体が冷えているのかと、大宮巡査は最初そう思った。

「人間……じゃ……ない？ それって…… どういう……意味？」

臯月はそう呟くや、まるで操り人形の糸が一本ずつ切れるように、体を倒した。

「臯月ちゃんっ!？」

大宮巡査が皐月に駆け寄り、皐月を抱きかかえた。

ふと違和感を感じた大宮巡査は、皐月の腹部を見るや、ゾツとした。

さつきまで血が流れていた傷跡が徐々に痂カサブタになろうとしている。それも想像できないほどの速さで……

それを見ながら、大宮巡査は皐月に畏怖する。

が、それでも病院に連れていこうとすると、

「大宮巡査…… 皐月を神社までお願い」

突然目の前に現れた脱衣婆を見るや、大宮巡査は驚いた。

「ど、どうして？ 彼女は瀕死の状態なんだぞ？」

大宮巡査がその先を言おうとすると、脱衣婆がそれを止めた。

「お願い…… 今は私の言うとおりにして」

脱衣婆が寂しそうな表情を浮かべる。

「い、一体…… どういうことなんだい？ それだけは」

質問に答えてもらおうと思ったが、大宮巡査はそれ以上何も云わなかった。

自分よりも脱衣婆が云ったことを優先したほうがいいと思ったからだ。

皐月を抱きかかえ、自分の車の後部座席に横たわらせる。そして、ついていくように脱衣婆は皐月の横に座った。

「一つ聞かせてくれませんか？ あなたは皐月ちゃんたちや信乃さんの監視をしているんでよね？ それに 脱衣婆なんて固有名詞じゃなく、出来れば名前だけでも教えてくれませんか？」

「海雪…… 咲下海雪……」

意外にも素直に告げると、脱衣婆はスーと姿を消した。

大宮巡査は運転していたため、うしろを振り向けなかったが、バックミラーには横たわった皐月だけしかいなかった。

だが、その声は今まで聞いていた女性の声というよりかは、皐月や信乃と同じ年齢の少女といった感じであった。

車は稲妻神社の前で停まり、大宮巡査は携帯で連絡をし、拓蔵を呼び起こした。

電話受けた拓蔵は皐月の様子を見るや、皐月を抱え、急いで部屋へと運んでいった。

拾・撥無（前書き）

撥無^{はじむ}：払いのけて信じないこと。否定すること。

拾・撥無

翌日、斎藤武を殺害した容疑として、使用人の堀内と、それを指示した斎藤千和兩名を警視庁は書類送検した。

殺害方法はワインに仕込んだ睡眠薬を飲ませ、昏睡状態にさせる。一時的な擬死状態というわけだ。千和は睡眠薬を服薬していたと供述すれば、さほど危険視されないと考えていた。

次にチューブを喉から肺まで通し、そこに水を流し入れる。肺に水がたまると、肺呼吸である人間は生きられる訳がない。

その時、主人は既に亡くなっているため、何をしても反応はない。死んだ事を確認すると、今度は肺の中にたまっていた水を汲み取るために、もう一度チューブを通らせる。

あとは何食わぬ顔で堀内は使用人部屋に戻ればいい。

この時、部屋の鍵は閉められていたが、鍵を開け、死体を確認したとき、すきを見て、遺体のポケットに忍ばせておけばいい。

以上が後日行われた検死の結果と証言によって判明されたものである。

また死因は呼吸困難による心不全と改められた。

事件解決から一週間後。大宮巡査は皐月の見舞いに稲妻神社へとやってきていた。

自分の不注意で皐月に重症を負わせたことを悔やんで、毎日様子を見には来ていたが、実際対面させてもらえるのはこの日が初めてだった。

「そんなに責任を感じなくてもいいですよ。自分でやった結果ですから」

弥生がそう云うが、大宮巡査は申し訳ない表情を浮かべる。

「それに　もし、大宮巡査の責任だとしたら、真っ先に被害者である皐月が文句を言いますし、この一週間、皐月は信乃さんのことだけ心配してましたから」

「信乃さんの？」

大宮巡査がそのことに関して訊ねようとすると、弥生は皐月に訊いてほしいと断った。

「皐月？　大宮巡査が来たわよ！」

弥生は皐月の部屋の襖を開ける。居るか居ないかの確認もなしにだ……

「へっ？　ちょ、ちよつとまつ……」

皐月の慌てた声が聞こえ、大宮巡査は部屋を覗くと、皐月は着替え中で、パジャマの上下を脱ぎ終えたところだった。辛うじてショーツは履いていたが、ちよつとブラを外したばかりで、膨らんだ胸とその先が露になっている。

「きゃああああああああああああああああっ！」

皐月は悲鳴を上げるや、机の上にあった筆箱を大宮巡査の顔面目掛けて、投げつけた。

その衝撃で大宮巡査は廊下の壁に頭をぶつけた。

「ちよつと、せっかく来たのに、いきなりはひどいんじゃないの？」
「わかっててやったでしょ？　弥生姉さん！　絶対わかっててやつ

たでしょ？」

臯月は屈み込み、胸元を隠しながら、弥生を睨んだ。

「人の部屋に入るときはノックするのが礼儀つてもんでしょーに！」

「はいはい。わかったわかった…… それじゃね」

そう云うや、弥生は逃げるように廊下の奥へと消えた。

それから10分ほど経ち、大宮巡査は気がついた。

「だ、大丈夫ですか？」

サツキが申し訳ない表情でそう訊ねる。

「いや、大丈夫…… ちよつと頭がズキズキするけど」

よく見ると大宮巡査の額には瘤が出来ており、臯月はそれに触れた。

「いつ……!!」

「あ、ごめんなさい……」

大宮巡査の容態を見るや、臯月は部屋を出て、厨房から氷水が入ったビニール袋を持ってきた。それを大宮巡査の額につけた。

「あの絵……」

大宮巡査が部屋に飾られた一枚の絵に目をやった。

それは殺された斎藤武の部屋に飾られていた八匹の狼が描かれた掛け軸である。

金品目的だったとはいえ、遺品の貰い手が多かったが、この絵だけは誰ひとりもらうものがいなかったため、臯月がお願いして貰い受けた。

「そういえば、阿弥陀警部から聞きましたけど、この絵を最初見たとき、大宮巡査はどこかで見たことがあるって」

「うん。この絵自体を見たわけじゃないけど、雰囲気かね……似て

「ただ、最初あった時の彼女に」

「そう云われ、皐月はジツと絵を見た。」

「私と信乃って、4年前まで友達だったんです。ううん、今だって私は友達だって思ってる」

その言葉に大宮巡査は驚いた。ずっと敵対している二人だったので、どちらも友達だなんて思っていようとは微塵も考えていなかったのだ。

「私は我流だし、竹刀の使い方だって未だにこなせてない。でも、あの子は天賦の才能があるし、何より剣道を心から楽しんでる」

皐月はそう云うや、一匹だけの狼を見つめた。

「でも、4年前に起きた事件以降、信乃は人が変わったように剣道が続けて、へんじょうおう変成王に力を与えられたんです……私の力はこの神社に祭られている大黒天……ううん、マハーカアラ摩訶迦羅の力を使っているだけなんだけど 私たちはあくまで阿弥陀警部や大宮巡査に頼まれて動くようなものですけど、信乃は妖怪だとわかれば、見境なく執行してる……」

「もし彼女が君たちと違うとすれば？ 復讐のためだけに力を使っているということか？」

「そう云われ、答えるように皐月は頷いた。」

「変成王は別名『みろくぼん弥勒菩薩』と云われていて、私が宿している大黒天と同じ七福神の布袋は、その化身なんです」

布袋は唐末の明州（現在の中国浙江省寧波市）に実在したとされる伝説的な僧で、実を言うと鳴狗寺で崇められている。

七福神としては神として祀られるが、元々は僧侶なので、仏という立場になる。

「私も妖怪を懲らしめたいとは思ってる。でも殺したいとは思っていない。罪を償うのは当たり前だし、脱衣婆や遊火だって妖怪

だから…… 全部が全部そうじゃないってわかってるけど……」

それは人間に置き換えても同じことである。いい人間も入れれば悪い人間だっている。

「信乃は心の底では、きつと気づいてる。でもそれを止めてあげることが」

皐月の言葉を待たずに、大宮巡査は皐月を抱きしめた。

突然のことで、皐月は驚いた声を挙げるが、そのまま身を任せた。

「千和さんから聞いたんだ。あの時彼女は夢を見たと…… 一匹の小さな犬が自分をジツと見つめていて、何をするわけでもなく、ただジツと悲しそうに吠えていたって…… それは彼女に取り憑いていたユズ《犬神》が信乃さんに犯人を教えていたんじゃないかな……」

でも、彼女はそれに最後まで気付かなかった。いや気づいていたけどそれを信じてあげることが出来なかった」

「わたし…… 信乃を助けてあげなきゃいけないのに…… 友達として…… ううん、友達だから助けてあげなきゃいけないのに」

皐月は力強く、大宮巡査の腕を握り締めた。

声は挙げなかったが、皐月は泣き崩れていた。

それは犬神と化したユズと、それに気付かず、ずっと妖怪を殺し続けようとしている信乃に対して、どちらとも助けることができなかったことに対しての謝罪の悲鳴であった。

その時、チリンという錆び付いた鈴の音が響いた。

が、その音に気付いたものは誰一人いなかった。

【特別版】今までの罪状を纏めてみた【閻獄】

閻獄（地獄裁判における判決表）

死者が生前犯した罪によって、その罪状はまちまちである。

【殺生】・【盗み】・【邪淫】・【飲酒】・【妄語】・【邪見】・
【犯持戒人、父母殺害】・【阿羅漢（聖者）殺害】という8つの罪
に加えて、その方法（例えば、人を騙し殺した）によって落とされ
る場所も違ってくる。

ただし例外として、殺生はしていないが、嘘と盗みを犯したものは、
罪の重い方に落とされる。

殺生が一番低いのは、衆生皆平等という考えにあるからである。
が、その中でも聖人（お坊さん）や自身の親を殺した場合は罪が重
たいものでとされている。

閻獄は大きく分けて8つあり、罪状を言い渡すときはもっとも重
い罪を優先する。

- 【第一条】 等活地獄（殺生）
- 【第二条】 黒縄地獄（盗み）
- 【第三条】 衆合地獄（邪淫）
- 【第四条】 叫喚地獄（飲酒）
- 【第五条】 大叫喚地獄（妄語）
- 【第六条】 焦熱地獄（邪見）
- 【第七条】 大焦熱地獄（犯持戒人）

【第八条】 阿鼻地獄（父母殺害・阿羅漢（聖者）殺害）

その場所でも殺害相手や条件によって16に場所が分けられた小地獄に連行される。

ただし例外も含まれており、「正法念処経」において一黒縄地獄は三つ、大叫喚地獄は十八つ存在していると言われている。

妖怪に向けての罪状であり、死者（既に死んでいるもの）や妖怪と化した人間にのみ与えられる。

妖怪ではなく、単に自身の犯行の場合は言い渡さない。

* 今まで出てきた罪状*

第一話

『閻獄第一条！ 自分の見勝手な行動で人を殺めた者は』等活地獄・極苦処』へと連行する』

【極苦処】

生前にちよつとした事で腹を立ててすぐに怒り、暴れ回り、物を壊し、勝手気ままに殺生をした者が落ちる。

あらゆる場所で常に鉄火に焼かれ、獄卒に生き返らされて断崖絶壁に突き落とされる。

* 最初の殺人は人間によるものなので、閻獄は受けない。

第二話

『閻獄第二条。人のものを奪い、あまつさえ苦しめ殺したものは』黒縄地獄・畏驚処』へと連行する』

【畏驚処】

貪欲のために人を殺し、飲食物を奪って飢え渴かせた者が落ちる。鉄の棘が生えた地面を杖、火炎の鉄刀、弓矢などを持った獄卒に追い回され、休む間もなくいつまでも走らされる。転倒すると金棒で何度も殴られ、水をかけられる。

第三話

『閻獄第五条、己が力で人を騙した罪により、そのもら“3名”を大叫喚へと連行し』

【大叫喚地獄】

生前に殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄言の罪を犯したものが落とされる場所。窮奇かまいたちは阿弥陀警部に気付いて欲しいとばかりに騙しているのみで、殺人は犯していない。

第四話

『閻獄第八条 父に取り憑き殺し、剩え自分の罪を被かぶせたものは『阿鼻地獄』へと連行する』

【阿鼻地獄】

またの名を無間地獄という八大地獄の中でもっとも下にある場所。参考としている「正法念処經」において、父親を殺した場合の記述がなかったので、曖昧になっている。

第五話

『閻獄第二条、己が欲望で夫を殺し、その死体を隠し盗んだものは『黒繩地獄』へと連行する』

『閻獄第二條、自らの位くわいを悪用し、男色をしたものは『衆合地獄・多苦惱たくのうしよ処』へと連行し』

【多苦惱処】

男色者が落ちる。罪人が生前に愛した男（本人かどうかは不明）がいて、罪人がそれを抱くと相手の男から発する炎で焼き尽くされる。

しかし再び生き返り、同じことが繰り返される。

第六話

『閻獄第一條、人に取り憑き、その身で他人を刺殺したものは『等活地獄・刀輪とうりん処』へと連行する』

【刀輪処】

刀を使って殺生をした者が落ちる。10由旬の鉄の壁に囲まれており、地上からは猛火、天井から熱鉄の雨が亡者を襲う。

また、樹木から刀の生えた刀林処があり、両刃の剣が雨のように降り注ぐ。

第七話

該当者なし（そもそも以津真天（瀧原俊平しげへい）は娘である滝原希空のあを守っていた方である）

第八話

該当者なし（犯人は人間であり、花子さんはそれを葉月に教えていた）

第九話

該当者なし（美咲みさきと花梅あやめは樹里いつきを騙していたが実際は殺していない。また、閻魔王（瑠璃）が赦しているため、罪状は言い渡されていない）

第十話

該当者なし（犬神が信乃の飼犬であったユズであると考え、逃がしている）

『閻獄第十四条、人に取り憑き、執行人に事件のヒントを与えたものは、閻魔王が定めた猶予を与える！』と知っているが、実際は存在しないものである。

【特別版】 今までの罪状を纏めてみた【閻獄】 (後書き)

少しばかり整理してみました。

ツクツクボウシが忙しく鳴き喚いでいる。それだけでも暑苦しいというのに、火元で料理をしている遼子の肌には大粒の汗が流れているのだからたまったものじゃない。

その隣には小学六年の弥生が野菜を切ったりと手伝いをしていた。

「弥生、お父さんは？」

「川原の方で皐月と葉月と三人でカンケリしてたよ？」

それを聞いた遼子は少しばかり考える。キャンプに来てまでカンケリなんてするものだろうか？と……だが、健介がただのカンケリをするとは考えていなかった。

キャンプ場から少し下ったところに川が流れている。その近くで大人の男性と、子供二人がカンケリをしていた。

「ほら、いったぞ！ 皐月っ！」

健介にそう云われ、皐月は蹴り転がされた缶を足で止め、

「ほら、葉月、お父さんが思いつき蹴っていいってっ！」

そう云いながら、皐月はさほど力を込めず、まだ葉月が幼いことを考慮にいれて、缶を葉月の方へとゆっくり転がすように蹴った。

葉月は自分の方へと転がってきた缶を思いつき蹴ろうとしたが、振り上げた足はからぶつてしまい、体勢を崩すや、仰向けになって倒れた。

「うっう……」

愚図り出すと思った健介と皐月は、葉月を宥めようと近寄った。

「うえええええええええええええええええええええんっ！！」

案の定、葉月はワンワンと大泣きする。

「ああ、よしよし。痛かったなあ」

健介が落ち着かせるように葉月の頭を触ると、後頭部にぶつけた痕あとがあった。瘤ヨコにはなっていないが、健介はハンカチを臍月にわたし、川の水で濡らしてきてくれとお願いする。

臍月は急いでハンカチを濡らしては絞り、それを健介に渡す。ハンカチを受け取り、それを葉月の後頭部にそつと当てた。

葉月は冷たさと痛みから逃れようと体を窄める。

「ほうら…… いたいのいたいのとんでいけ……」

なんとも子供騙しだなあと臍月は思ったが、まだ幼く無垢な葉月にはそれだけでも充分効果があった。

子供にとって安心することがまず一番の治療でもあった。

「よし、そろそろご飯が出来た頃だろうし、お母さんのところに戻るか？」

健介は足元に転がっていた缶を手に取り、葉月をおんぶする。

「お父さん、その缶何なの？」

隣を歩く臍月がそう訊ねると、健介は少し笑みを浮かべながら、

「それはなあ、あとのお楽しみだ」と言った。

その言葉に臍月は首を傾げた。

「どうしたんですか？」

戻ってきた健介の背中から泣き顔を浮かべている葉月が目に入った

遼子は、健介に近寄りながら、事の発端を訊ねた。

「ちよつとな…… カンケリをしてたら転倒したんだよ」

それを聞いた遼子は母親なりに慌てるかと思えばそうではなく、

「痛かったでしょ？ ほら、ご飯できたから、臍月ねーねと一緒に手を洗ってきなさい」

そう云われ、健介の背中から下ろされた葉月は臍月に手をひかれ、キャンプ場に設けられた手洗い場へと歩いていった。

遼子は健介が手に持っている缶を渡されるや、

「健介さん？ これ何が入ってるんですか？」

カンケリをしていたのだから、中身はないと思っていたが、意外にも重たかったので訊ねるが、健介は妻である遼子に対しても秘密にしていた。

「その缶をクールボックスに直しておいてくれ…… 中身は食後のお楽しみだ」

そう言われ、遼子は首を傾げたが、特に気にも留めず、言われたとおり缶をクールボックスに直した。

食事を終えた遼子と三姉妹を見た健介は一言、「冷たいものでもほしくないか？」と訊ねる。

「お父さん？ ジュースはありませんよ？」

と遼子が言うと、健介はクククツと笑みを浮かべ、クールボックスから先程まで皐月と葉月と一緒に川原で蹴り合っていた缶を取り出した。

「お母さんお皿とスプーンを出してくれないか？」

そう言われた遼子は何事かと思いつながら、言われたとおりお皿とスプーンを健介に手渡した。咲夜カレーを食べたときに使ったお皿とスプーンである。目の前に出され、三姉妹は不思議そうにお皿を眺める。

缶は粉ミルクが入れているような大きなもので、蓋を閉めるようにテープが巻かれている。健介はポケットに忍ばせていたサバイバルナイフを取り出し、テープで巻かれた部分を切っていくと、閉じられていた缶の中身が見えてきた。

缶の中にはもう一つ、お茶の粉が入っているような小さな缶が入っていた。その小さな缶の周りには水が入れられており、氷が入っていたのか、まだ溶けきっていない氷がチラホラと見える。

もう一つの缶を取り出し、健介は缶を振ると笑みを浮かべ、小さな缶の蓋を開けると……

「アイスクリーム？」

皐月がそう健介に訊ねる。

「ああ。昨日テントを張ったとき、皐月や弥生と葉月が自分から手伝ってくれたからな……神様がご褒美を用意してくれていたんだ」
健介がそう言いながら、アイスを人数分わけていく。

実際は朝早く山を下り、コンビニでかちわり氷と塩を購入し、大きな缶と小さな缶の間に細かく砕いた氷と塩を敷き詰める。

氷に塩を加えることで、化学反応が起こり温度が急激に下がる。
小さな缶には、生クリーム・牛乳・砂糖・少量のバニラエッセンスとアイスの材料を入れ、それらを混ぜたら缶に蓋をする。そして大きな缶の蓋をする。

あとは料理ができる時間を見計らって、5分ほどカンケリをすれば、自ずとアイスが出来上がるというわけだ。

が、筆者同様、詳しい科学知識が乏しい三姉妹からすれば、ジューズ缶の中身がアイスだという不思議な現象に目をときめかせていた。

夏の日差しが眩しい太陽の下で食べるアイスはまた格別で、三姉妹は顔を綻ばせながら、アイスを平らげた。

「よし、それを食べたなら、片付けるぞ……」

健介にそう云われ、三姉妹は後片付けをする。

「来た時よりも綺麗に　それがキャンプに来た時の最低限なお礼だ」

そう言われ、弥生と葉月は遼子と一緒に食器の後片付けをし、臯月と健介は木々の間に張っていたロープなどを片付け始めた。

小一時間ほどし、全てを片付けると、ワゴン車に詰め込んでいく。

「よし……　楽しかったか？」

そう訊ねると、三姉妹は笑顔で、うんと答えた。

「それじゃ帰るぞ！」

そう言いながら、健介は運転席のドアを開ける。

臯月は助手席へと座り、弥生、葉月、遼子は中部座席に座った。

家族が乗り込んだワゴン車は、ゆっくりとキャンプ場から離れ、山を下っていく。

「くつつきむしましたやりたいね？」

葉月がそう云うと、弥生と臯月が同意する。くつつきむしとはオナモミのことで、それを姉妹たちは投げ合って遊んでいた。

「ねえねえ、お父さん。またキラキラやって」

助手席に座っている臯月がそう云う。キラキラとは、昨晚、晩飯を片付けていたとき、みかんの皮から飛び出した汁をコンロの火が燃やしていたのがそれなのだが、やはり科学知識のない臯月からすれば小難しい方法よりただ単純に綺麗だったという感想だったので、またやってほしいとおもっていた。

「でもなあ、あれお母さんに怒られるんだよなあ」

健介は苦笑いを浮かべる。

「ねえ、お母さんいいでしょ？」

「また来年……　キャンプに来たらね」

そう言われ、臯月は笑みを浮かべながら前を向き直すと、視界に小さな看板が見えた。

皐月は「なんて書いてあるんだろう」と小さく呟くや、
「何かあるのか？」

「うん。ほら……あそこに小さな看板が置いてある」

皐月は目の前にある小さな看板を指差しながら、健介に教えた。
「うーん。お父さんの目じゃ何が書いてあるかわからないな……」

皐月　わかるか？」

そう云われ、皐月は目を細めた。

「ば……」

「ば？」

皐月の言葉を健介たちが繰り返す。

「『ばかをみる』」

皐月がその言葉を発した時だった

「お、お父さん！ 前っ！」

真ん中に座っていた弥生が大声でそう叫んだ。車の目の前には拳
大ほどの石が道の真ん中に落ちている。

「心配するな！ あれくらい石どつてこと……」

健介がその先を言おうとした時だった。

フラフラと蛇行運転する車が目の前で猛スピードで走ってきた。

「くっ！」

健介は咄嗟にハンドルを切るや、横に重力が流れた。蛇行する車
とガードレールの間が一瞬だけ空き、そこを突いて、ワゴン車はす
り抜けた。

「ふう……んっ？」

健介はバックミラーに映った先程蛇行運転をしていた車を見るや

ギョツとする。

(まっすぐ走ってる?)

蛇行運転が飲酒によるものだと考えれば、車が避けたあとも続いているものだが、それが何事もなかったかのように、車はまっすぐ左側を走っていた。

途端ガクンと重力が急激に重たくなる感覚を健介たちは体験するや、車のうしろから悲鳴を挙げるようにギヤギヤギヤという音が聞こえてきた。

「パンクツ? どうして? 空気圧はきちんとしていたはずだ!」

健介は急ブレーキをかけようとするが……

「くうそあっ! みんなしっかり捕まっている!」

そう絶叫するや、ワゴン車はガードレールを突き破り、崖下へと転落していった。

うつすらと暗くなっていく外は涼しいだろうが、車の中はサウナのように熱かった。

「うう…… うう……ん……」

そんな中、皐月はうつすらと目を開けた。

「お、お父さん…… いやああああああっ!!」

自分の体で下敷きになっていた健介を見るや、皐月は悲鳴を挙げた。

エアバックに埋もれた健介の顔半分が、割れた窓ガラスで切り刻まれており、それは見るに無残なものであった。

「さ、皐月…… お母さんは? 弥生おねえちゃんや葉月は?」

健介にそう訊かれたが、皐月はそれどころではなかった。

気が動転し、体を震わせる。転落した衝撃で体のあちらこちらから痛みが走っている。

「お母さん？ 弥生おねえちゃん！ 葉月い！」

中部座席にいるはずの3人の姿が見えない。皐月はシートベルトを外そうとしたが、バックルが壊れてしまい、ストラップが外れない。

「さ、皐月…… お父さんのポケットにナイフがあるから、それで切りなさい」

そう云われ、皐月は健介のポケットからサバイバルナイフを取り出し、ストラップを切った。

皐月が中部座席へと身を乗り出すと、葉月と弥生は健介と同様、体をドアにぶつけており、遼子に至っては上半身を変な格好で後部座席へと乗り出していた。

「お母さん！ 弥生おねえちゃん！ 葉月いつ！」

皐月はもう一度三人に呼び掛けるが、まるで死んだように反応がなかった。

「皐月…… そっちのドアは開くか？」

そう云われ、皐月は確認する。重たいドアは辛うじて開いた。

「そ…… そこから外に出て、助けを呼ぶんだ」

「そんな…… お父さんは？」

オドオドと顔を震わせながら、皐月は健介に訊ねる。

「心配するな…… お父さんはお前が結婚するまで 死にはしないさ」

健介は折れ曲がった手を伸ばし、感覚のないまま皐月の頭を撫でた。

そしてグタツと崩れるように目を瞑った。

「お父さん…… お父さん！」

皐月が健介に声をかけた時だった。

ドスンと、横転した車に誰かが乗った音がし、皐月はそちらに振り向くや、ゆっくりと目蓋は閉じられ、崩れるように健介の上へと落ちた。

吉：夢魔（後書き）

大変長らくお待たせしました（待っててくれた人はいるんだろうか？） 第十一話です。

式・卒塔婆（前書き）

卒塔婆そとば：供養・追善のため、墓そとばなどに立てる細長い板

貳・卒塔婆

「神主はご在宅でしょうか？」

夏の照りつける太陽の下、稲妻神社の境内で掃除をしている職員
の巫女に、スーツ姿の大宮巡査が訊ねる。

「え、ええ。いらっしゃいますか？」

巫女は大宮巡査が警察の人間だということは知っているので特に
何も聞かず、社務所へと案内した。

「おや？ 大宮巡査…… 今日はまだ何用で？」

社務所へと入ってきた拓蔵が、大宮巡査にそう訊ねる。

「神主…… 実は今日来たのは、教えてもらいたいことがあってな
んです」

拓蔵は案内していた巫女に茶の用意をと伝えた。

「それで 訊きたいことは？」

お茶を一口のみ、拓蔵が訊ねると、

「先日、皇月ちゃんを斎藤武の屋敷に連れていき、あのような失態
をしてしまったことを」

「いやいや、そのことはもうイインじゃよ。わしは別に強要してい
たわけじゃないしな」

拓蔵は笑って言うが、大宮巡査の真剣な表情を見るや、声のトーン
を落としていく。

「その時、一緒に来ていた鳴狗信乃さんが去り際に云っていた言葉
が気になって、色々と皇月ちゃんたちのことを調べたんです。それ
と神主さんのことも」

それを聞くや、拓蔵は大宮巡査を睨みつけた。

大宮巡査は一瞬たじろぐが、すぐに姿勢を正しくし、ジツと拓蔵の目を見やった。

「神主は六年前、ある事件をきっかけに自ら辞表を出して警察を辞めていらつしやる。臯月ちゃんたちがこの稻妻神社に住み始めたのも、ちょうど同じ時期だった。」

誰に聞いた？と拓蔵が訊ねると、大宮巡査は佐々木刑事からと答えた。

「あの馬鹿が…… 余計なことを言いおつてからに。」

拓蔵は呆れたような、諦めたような複雑な表情を浮かべながら、頭をかいた。

「それで、聞きたいのはそのことについてか？ ならば、話すことなどひとつも。」

「いいえ。その時に起きた転落事故 どうして警察は詳しく捜査をしなかつたんですか？ それに、公安部に所属していたとはいえ、一概の警視であつたあなたが自ら警察をお辞めになっているのも、そのことに。」

「それだけじゃつたら、帰れえっ！」
拓蔵が大声を挙げ、コップをテーブルに叩きつけた。

「いえ 僕が神主に聞きたいのは、事故のこともありますが、本当に聞きたいのは臯月ちゃんたちのことなんです。彼女たちは一体何者なんですか？」

大宮巡査の質問を聞くや、拓蔵は逃げるように視線を逸らした。
「何こともない、ただ普通の。」

「先日、臯月ちゃんが大神に取り憑かれた斎藤千和に腹部を噛まれていました。僕は直接噛まれたのを見てはいませんが、相当深手だつたんです。それなのに腹部の回復が異常なまでに早かつた……」

今までだつて殆ど数日で全快していた。それに鳴狗信乃さんが臯月ちゃんに向かつて言つた言葉も。」

拓蔵は信乃が何を言ったのかと訊ねる。

『人間でも、妖怪でもない』

その言葉が大宮巡査は引っかけかかっていたのだ。

「彼にだったら教えてもいいんじゃないの？」

大宮巡査はうしろから声が聞こえ、そちらに振り向くと、そこには脱衣婆と瑠璃が立っていた。

「だっ……み、海雪^{みゆき}さん？ それと瑠璃さん」

大宮巡査に名を言われた瑠璃は、まるで相手を哀れむような表情を浮かべる。それ以降余り大宮巡査を見ようとはしていなかった。

「拓蔵……私は彼に、皐月と葉月が心を許している彼にだったら、全てを話してもいいと思っっています」

「それは……皐月たちに命令している立場としてですか？」

「いいえ、私個人の　あなたがこの六年間、密かに調べていた事を知っている身としてです」

拓蔵は難しい表情を浮かべながら、少しばかり考え込むと

「六年前……確かに転落事故が起き、その被害者は健介くんたち家族じゃった……」

「それじゃ」

「じゃが、健介君はプロのレーサーじゃったから、運転ミスもなければ、空気圧によるミスだったとも思えんかった。あの燃えるような太陽の下で、空気を入れすぎれば、タイヤの空気は熱によって膨らみ暴発する。そんな素人でもわかるような事はしなかったはずなんじゃ……　転落事故の原因は後輪のタイヤがパンクしたためと判断された……　わしはそのことに違和感を感じておったし、何より、横転した車の中には弥生たち三姉妹しかいなかったことが何より不思議でたまらんかったんじゃよ」

「運転席側のドアは地面でふさがっていましたし、なにより助手席に座っていた皐月のシートベルトが刃物で切られていました。そのことから、運転していた初瀬神健介が皐月を助けたと推測できるんです」

瑠璃の言葉に大宮巡査は少しばかり考えるや、

「ちょ、ちよつと待ってください？ 瑠璃さん？ あなたは確か閻魔王でしたよね？ 閻魔王って、この世の全てを知ることが出来るんじゃないんですか？ それなのに話を聞いてると、まるでわからないって言ってるのと同じじゃないですか？」

大宮巡査は先程瑠璃が云った『推測』という言葉に違和感があったからだ。

『推測』とはある事柄に基づいて、おしはかつて考えることであり、云つてしまえば想像と同じ意味である。

この世の全てを知ることができる閻魔王でさえわからないことが、大宮巡査は理解できなかった。

「私もこの六年間…… 彼女たちを執行人にしたという責任がありますから、初瀬神健介とその妻であり拓蔵の娘である遼子の行方を調べていましたが 未だに見つからないんです」

瑠璃は俯くように答えた。

「まるで 誰かが意図的に二人の行方を曇らされているって感じがしますね？」

「やっぱり大宮巡査もそう思いますか？ 本来ならば全ての事柄は浄玻璃鏡を通して知ることができます。でも二人の事柄についてはまったく云つていいほどぼやけてしまう」

今までの口調とは違い、丁寧な話し方をする脱衣婆に、大宮巡査は目を点にする。

「それに、転落事故で彼女たちは一度死んでいるんです」

「一度死んだって　人間は死ねば生き返らないのが自然の摂理なんじゃ？」

「臨死状態という言葉を知ってますか？　本当に死んでいたのなら生き返らせることはしません。ですが、弥生たちは露世側にある賽の河原にいましたから、死んではいけないことになるんです。だからこそ、私は彼女たちを生き返らせた。拓蔵にある一つを条件に」

「ある一つの条件？」

社務所にいる全員が拓蔵を見やる。

「執行人であることを条件に……　両親の記憶と、その原因となった事故の記憶全てをなかつたことにすること」

「一種の記憶喪失ってことですか？」

「簡単にいえばそうですね、でもいずれ時期が来れば彼女たち自らが思い出すかもしれないと思っていましたが……　姑獲鳥の時に皐月は自分の両親のことを拓蔵に訊ねていましたし、自分たち姉妹が健介と遼子と一緒に写っている写真を見てから、三姉妹は次第に違和感を持ち始めていた」

瑠璃の説明に大宮巡査は心当たりがあった。

「仮に瑠璃さんや海雪さんの云っていることが本当だとすれば

あ、いや……　二人が閻魔王と脱衣婆であることを前提に考えるところと……　皐月ちゃんたちが持っている力は執行人だったからってことですか？」

「いえ……　葉月が姉妹の中で霊感が強いのは先天的なものですし、皐月の耳が若干悪いのも、事故に遭う前からだったそうです」

脱衣婆……　海雪の話聞きながら、大宮巡査はあることを考えていた。

そして大宮巡査は重たい口を開いた。

「皐月ちゃんと弥生さんは期末テストを終えたんでしょうか？」

「確か昨日か、一昨日に終わってるはずじゃが？　それがどうかしたのか？」

拓蔵がそう訊ねると、瑠璃と海雪は大宮巡査の考えがわかるや、表情を変えた。

「まさか、そのキャンプ場に彼女たちを連れていくっていうんじゃないか？」

「何を馬鹿なことをほざいておる！　古傷を抉るようなものじゃないか！」

拓蔵が睨みつけながら、大宮巡査の胸倉を掴みかかる。

「僕だつて……　出来ればこんなことはしたくない。ただでさえ傷ついている彼女たちに……」

「それじゃ……　それじゃあどうして？」

海雪がそう訊ねると、大宮巡査はジツと海雪を見つめた。

「あなたたちが彼女たちのことを思って、両親のことや、事故のことを隠しているのなら、それもまた優しさなんだと思います。だけど！　さきほど瑠璃さんが云っていた、心の中にそういうモヤモヤがあるのなら！　それを晴らしてあげるのも、また優しさだと思います。どんなに残酷な現実だろうと、彼女たちはきつと受け取ってくれる！　僕はそう信じています」

「詭弁を論ずるな！　人間の心はそう簡単に強くはならんんじゃないよ？　青二才！」

拓蔵が睨みつけながら、暴言を吐く。

「何とでも言うてください。僕は彼女たちがどんな辛い思いをしてきたのか、想像することしかできない。だけど　隠すことが、隠されることがどれだけ辛いことか　」

大宮巡査の言葉を聞くや、瑠璃は少しばかり表情を曇らせた。

「閻魔さま？」と海雪が声を掛ける。

「拓蔵。大宮巡査の言うとおり、皐月たちの都合が良ければ……二週間後の週末、事故があったキャンプ場に連れていきましょー」
「え、閻魔さま？」

瑠璃の言葉に拓蔵は狼狽する。が一番驚いていたのは大宮巡査であつた。

「大丈夫。その時は私と脱衣婆も同行しますから」

瑠璃は海雪を見ながら言う。海雪は答えるように無言で頷いた。

「……………ちつ わかりました……………」

ひとつ舌打ちをするや、拓蔵は諦め、それを了承した。

社務所を出て、神社の鳥居を潜り、前に駐車場に停めていた車に乗り込もうとした大宮巡査を瑠璃が呼び止める。

「本当によろしいんですか？」

社務所にいたときは打って変わって、神だというのに遠慮している口調である。

「なにがですか？」

瑠璃の問いかけに、大宮巡査が聞き返す。

「今回は皐月たちの事を思つてのことでしょうが……………あなたのことでもあるんじゃないんですか？」

その言葉を聞くと、大宮巡査は少しばかり、瑠璃から目を逸らした。

「瑠璃さん……………謝罪しても……………数え切れないほど謝罪しても、罪が赦されないことだつてあるんです」

「でも……………あれはまだあなたが……………」

瑠璃がその先を言おうとしたとき、大宮巡査は車のクラクションを鳴らした。

その音に瑠璃はドキッとすする。

「あなたが僕を赦してくれたとしても、僕自身が僕を赦すことは絶対にない！」

そう言うや、大宮巡査は車を発進させた。

通り去っていく車を見送るや、瑠璃はスーッと姿を消した。

とあるお寺にある墓場。その一角に卒塔婆が立てられている場所がある。

そこには『大宮彩奈^{さな}』と書かれた卒塔婆があった。

式・卒塔婆（後書き）

瑠璃と大宮巡査の関係は今回（第十一話）では詳しく語られませんが、大宮巡査が三姉妹に会う前からの知り合いです。

参・弱虫

大宮巡査が稲妻神社にやってきた晩のことである。

「二週間後の週末？ それがどうかしたの？」

弥生が拓蔵にそう訊ねる。

「いやな。昼間大宮巡査が神社に来て、日頃の感謝にお前たち三人をキャンプに連れていきたいという申し出があつてな。当日お前たちの都合が良ければなんじゃが？」

拓蔵はワンカップ酒を飲みながら説明する。

「別にこれといって予定もないけど……でもねえ？ キャンプっていったら泊まるってことでしょ？」

弥生がそう言いながら、臯月と葉月を見やった。

臯月は気にも止めずに食事を進めているが、葉月に至っては目を爛々と輝かせている。

「葉月……行きたいの？」

臯月がそう訊ねると、葉月は頷いた。

「うーん。臯月はどうする？ 葉月だけじゃ大宮巡査に失礼でしょ？」

どうしてそういうことになるのだろうか？と臯月は思ったが、お世話になっていることにはかわりないため、行くことにした。

「それで、弥生姉さんはどうするの？」

「大宮巡査って料理できるのかしらね？」

要するに弥生も理由付けて行きたいんじゃないかと考えながらも、臯月たちはキャンプに行くことにした。

三姉妹が呆気なく決めていくのを見ながら、拓蔵は不機嫌極まり

ない表情を浮かべながら、酒を飲み干した。

それから二週間後のことである。その間事件はあったものの、大宮巡査と阿弥陀警部は臯月たちの力を借りずとも事件を解決していた。

稲妻神社の駐車場に黒の4WDが止められており、リュックザックを背負った臯月と葉月がそれに見入っていた。

「でっかい」

葉月は思ったことを素直に口に出した。臯月は口にこそ出さなかったが、葉月と同じ感想だった。

「忘れ物はないかな？」

大宮巡査が訊ねると、三姉妹は頷いた。

「それじゃ爺様……くれぐれもお酒は控えてよね？」

「わかっておる。道中気を付けてな　んっ？」

拓蔵が不思議そうに首を傾げる。

「あれ、臯月。昨日、助手席は葉月が乗るってことになったんじゃないかったっけ？」

弥生に言われ、既に助手席に乗っていた臯月がアッと声を挙げ、車から降りようとす。

「別にいいよ。早い者勝ちだし」

葉月はそう言うが、如何せん納得のいかない表情を浮かべている。

「なんか……前にも同じことなかったっけ？」

弥生がそう云うが、臯月と葉月は不思議そうに首を傾げる。

「ほら、三人とも、早くしないと一緒に行く人が怒るかもしれないよ」

大宮巡査がそう急ぎ立てられ、三姉妹は車に乗り込んだ。車はゆっくりと走り出した。

「大宮巡査、さっき一緒について…… 他にも誰か来るんですか？」
結局助手席に座ることになった皐月がそう訊ねる。

「ああ。今回のキャンプ、実は神主は反対していたんだ」
「どうして？」

弥生が最もな意見を言うが、三姉妹の記憶と両親に関わることだということとは話すべきではないと大宮巡査はわかっていった。

「いや、やつぱり若い男に孫をあずけるのは忍びないって思ったんじゃないかな？」

「大丈夫ですよ。大宮巡査って見た目からして弱そうですから」

「はは、『男は狼なのよ』って歌のフレーズがあるくらいだからね。いい人だからって信用しちゃいけないんじゃないかな？」

大宮巡査は口遊びながら、話をする。

「すっかり忘れてたけど、大宮巡査もれっきとした男性なんですよね？」

「や、弥生さん。それはちょっと酷いんじゃないかな？」

苦笑いを浮かべる大宮巡査を見ながら、皐月と葉月は笑みを浮かべていた。

大宮巡査は皐月たちと最初出会ったとき、とっつきにくいものだと思っていた。

しかし彼女たちに会ったたびに色々な顔が見えていたことも事実である。

捜査をお願いしている時の真剣な顔つきとは裏腹に、今こうして

車内でわけへだてなく会話をしているのを見ると、やっぱり普通の姉妹なんだなあ」と大宮巡査は考えながら車を運転していた。

車はちようどキャンプ場がある山の麓の前を通っている道路の脇に車を一時停止させた。

葉月は窓を開け、あたりを見渡したが、走る車はあっても、歩いている人は人つ子一人いなかった。

「大宮巡査、誰もいませんよ?」

「可笑しいなあ……二人とも約束を破るとは思えないんだけど」その言葉から大宮巡査と親しい人なのだろうか」と弥生と皐月は思った。

「あ、あれじゃないかな? 　　つて……えっ?」

顔を覗かせていた葉月が、道路の向こう側から走ってくる二つの影に目をやるや、声を挙げた。

「ちょ、ちよつと? あれつて瑠璃さんとおばあちゃん?」

皐月と弥生もその影に気付くや、声を荒らげた。

瑠璃はサマーセーターにジーンズ、小さなツバの麦藁帽子に赤色のスニーカーを履いており、海雪はカッターシャツにホットパンツ肩の上に薄手のスカーフを撒いている。足には膝元までのニーソックスにブーツという姿である。

「す、すみません大宮巡査…… 　　ちよつと準備に手間取ってしまった」

息を整えながら、瑠璃は大宮巡査に謝りを入れる。

「いや、いいですよ。僕たちの方がちよつと早く来ちゃったみたいですし」

そう云われ、瑠璃はホツと胸を撫で下ろした。

脱衣婆は中部座席のドアを開け、座椅子の背凭れを曲げると、自分たちの持ってきたバッグを乗せ始める。

「それじゃ、行きますか」

大宮巡査がそう云うや、再び車を発進させた。

「そういえば大宮巡査、彼は用意してるんですか？」

弥生の横に座っている瑠璃がそう訊ねる。

「ええ。ちゃんと用意しています」

「なにかあるんですか？」

皐月がそう訊ねると、瑠璃と大宮巡査は少しばかり笑みを浮かべた。その表情に三姉妹は首を傾げていた。

車が山を登っていく最中、瑠璃と海雪は外の景色を警戒するよう
に見ていた。

事故があった現場を通り過ぎるや、よりいっそう警戒心をむき出しにする。が、目的のものはどこにもなかった。

六年前、車がキャンプ場から下っていた時、皐月が気になった看板を探していたのだが、数年経っている以上、まだあるとは二人とも思っていなかった。

ふう……と、瑠璃と海雪が息を吐いた時だった。

開けっ放しになっていた窓から、何時の間にか蜂が車内に入ってきていたのだ。

「う、うわ……！」

「ちょ、危な……！」

蜂一匹入ってきただけでこの騒ぎである。

「落ち着きなさい。蜂はこちらから何もしなければ、攻撃すること

はありません」

瑠璃が落ち着いた口調で言うや、全員があまり騒がないようにした。

三、四分ほどして、蜂が開けられた窓から出ていったのがわかると、すぐさま開けられていた窓全てを閉め切った。

「び、びっくりしたア……」

「もう、心臓に悪い……」

弥生と葉月が息を整えている中、前の方でガタガタと震えている気配がした。

「さ、皐月ちゃん？ ちょっと離れてくれないかな？ 運転しずらいんだけど」

大宮巡査の言葉に、うしろに座っていた四人が前の方を覗き込むと、皐月が今にも泣きそうな表情を浮かべながら、大宮巡査の腕に抱きついていった。

「ちょっと、皐月？ あんた虫ってダメだったっけ？」

弥生が呆れた声でそう訊ねる。

「えっ？ っと……」

皐月は我にかえり顔を上げると、すぐ近くに大宮巡査の顔があったため、慌てて手を離し、体を正面に向けなおした。

「しっかし、今のは面白かったわね。虫がダメって」

海雪がクスクスと笑をこぼす。

「べ、別に可笑しくないでしょ？ 蜂に刺されたら死んじゃうかもしないじゃない？」

「大丈夫、大丈夫。さっきのはミツバチみたいだから、刺されても膨れるだけで、死ぬほどじゃないと思うよ」

大宮巡査にそう云われ、皐月は一度大宮巡査を睨んだが、すぐさま顔を俯かせた。

「大宮巡査、皐月は一度ミツバチに刺されていることがあるんです。一度目ならまだしも、何度も刺されてしまったては命の危険性があります。何事も馬鹿にはできないんですよ」

瑠璃がうしろから注意する。

「そ、そうなんですか？ 皐月ちゃんごめんね。知らなかったとはいえ酷いこといっちゃって」

大宮巡査は謝るが、皐月はキャンプ場につくまで、一言も会話には参加しなかった。

そんな皐月を瑠璃は物悲しそうに見ていた。それどころか自分自身が嘘を吐いてしまったことに対する罪悪感があった。

六年前、今と同じ状況の時、皐月は運転していた健介の腕にしがみついていた。

それは虫が怖かったというよりも、皐月が極度なまでの怖がりだったことにあった。

また皐月が蜂に刺されたことは一度たりともなかった。

「閻魔さま…… どうかしたんですか？」

違和感を感じた海雪が瑠璃に訊ねると、

「何事も起きなければ…… 当初の目的以外、何事もなければいいんですけどね」

瑠璃がそう言うと、海雪は何も言わず頷いた。

参・弱虫(後書き)

私にファッションセンスなんてございません。

肆・？耳

皐月たちが連れてこられたキャンプ場は基本的には無料である。その代わりコテージなどはなく、各々でテントを張らなければいけないし、スペースもさほどない。

川から二十米ほど離れた場所を、テントなどの設置場所に決めると、大宮巡査は駐車場に停めていた車から荷物を運び込み、テント張りの準備に取り掛かった。

「あ、手伝います」

そう言ったのは皐月と瑠璃である。

「それじゃ、まずは石を退けないと」

大宮巡査がそういう前に皐月が先にそれをやっていた。

「言われる前にやるなんて、今日の皐月どうかしてるわね？」
調理場の確保をしていた弥生にそう云われ、皐月はキョトンとする。

（もしかして、無意識にやっていたんでしょかね？）

（かもしれないね。皐月は俗に言うお父さんっ子でしたから）

大宮巡査と瑠璃が小声で会話しているとは知ってか知らずか、皐月は黙々と作業を進めていく。

石を取り除いた地面の上にブルーシートを二枚分広げ、その上にドーム型のテントをふたつ設置していく。

最初は大宮巡査がやっていたのだが、手際が悪く、見るに見かねた皐月が最終的にはほとんど済ませていた。

「あれ？ 皐月、あんたテントとか張れたんだ？」

竈かまどや火の元の設置をし終えた弥生にそう云われ、皐月は首を傾げ

る。

「えっと……ほら、説明書！説明書読んでやったから」

皇月はそう言いながら、大宮巡査を一瞥する。

「いや、すごいね。すぐに理解したんだから」と大宮巡査は笑っている。

それを見て弥生はあまり気に留めなかった。

「あれ？　そういえば葉月は」

皇月が近くにいると思っていた葉月の姿がないことに気づき、誰彼構わずに訊ねる。

「あ、おばあさんと一緒に落ちている木の枝とかを拾いに行ってもらってる」

そう弥生が説明していると、近くから子供の焦った声が聞こえてきた。

「ちょっとおばあちゃんよけないでえ！」

葉月が海雪に向かって何かを投げており、それを海雪は避けながら歩いている。

「葉月！　下手な鉄砲も数撃ちや当たるって、言葉知ってる？」

「知ってるけど、今それどころじゃない」

葉月が投げたものが弥生の服に当たり、それを手に取った。

「これって、オナモミ？」

「へえ、くつつきむしかあ……　葉月ちゃん？　これどこにあっただんだい？」

大宮巡査にそう訊かれ、葉月は川下にある茂みを指さした。

「おばあちゃん、意地悪なんだよ？　私が一生懸命木の枝を集めてるのに、うしろから投げるんだもの！」

葉月は履いているミニスカートをパタパタと扇ぎながら、引っ付

いていたオナモミを取ろうとする。下にジーンズを履いているとはいえ、傍から見ればみっともない。

「葉月ちゃん。オナモミははらっただけじゃ取れないんだよ」

そう云いながら、大宮巡査はひとつずつ、葉月のスカートに付いたオナモミを取っていく。

「ちょっとおっ！ マジありえねえんだけど？」

近くの方から男性のチャラけた声が聞こえ、臯月たちはそちらを見やった。

川岸の方で赤茶色の髪をした男とそれに二人の女性が引つ付いて釣りをしている。

女性の一人は黒髪で長さは腰まであり、服装はお嬢様をイメージさせる白桃色のワンピースで、靴は紅梅色のハイヒールと、正直舐めてるのかと言いたくなる格好である。

もう一人はみつあみで、ジャンパーを着ており、靴は赤と白のスイーカーである。

「ううわあっ！ まあたかよお！ つうかこの糸ダメダメじゃねえ？」

男はリールに絡まった糸を解ほぐしては巻き取って元に戻し、リリースする。

そして、数秒もしないうちに糸を巻き取っていく。

「健佑え？ マジヤバじゃねえ？ 全然昼飯取れねえんだけどお？」
彼らの会話を聞く限りでは、釣った川魚を昼食にしようとしていた。

「あんなに早く糸を巻いてたんじゃ、釣れるわけないでしょうに？」
海雪がそう云うや、三姉妹と瑠璃は同意するように頷く。

「ちよつとお？ あんたらなあにい？ うちのやり方にケチつけるわけ？」

釣りをしている男 健佑の横にいたみつあみの女性が臯月たちを睨みながら、文句をつける。

「いや、彼女たちの言い方が悪かったのなら、謝るよ。でも、釣りにていうのは時間をかけてやるものだど僕は思っけどね？」

大宮巡査が割って入って、弁論する。

「んな時間ねえつつうーの！ あたしらもうお腹ぺこぺこなのよ！」「舌足らず……」と瑠璃が呟く。その言葉が聞こえ、女性は顔を真っ赤にする。

「はあ？ マジありえねえ？ 年下のくせに、偉そうにしてんじやねえよあ？」

「なら訊きますが？ あなた達はこの山に何しにきたんですか？」

そう訊かれ、女性は、

「はあ、見てわかんねえ？ キャンプに決まってんつしょ？」

女性は呆れながらそう答える。

「キャンプって…… テントも何も見当たらないけど？」

弥生がそう言つと、

「うちらあ、若いしい。テント張るのマジ疲れるからあ、健佑の車に泊まるのよあ？」

「なるほど、だからテントがないのか」

そう云つや、大宮巡査は臯月と葉月を手招きする。

「車の中に網があるんだ。それをちよつと取ってきてくれないかな？」

そう云つや、大宮巡査は車の鍵を臯月に渡す。

臯月と葉月は何のことだかわからないまま、言われたとおり車から網を持ってきた。

「へえ、この川って、結構魚がいるんですね？」

大宮巡査はそう云いながら、川の中を覗き込む。水は透き通っており、大小様々な魚が優雅に泳いでいる。

「綺麗な水には、それだけ多くの生き物が住み着きますからね」
瑠璃がそう説明する。

「それでこの網をどうするの？」

「ああ、それじゃ臯月ちゃんと海雪さんとで網の両端を掴んで、川に沈めて。魚が逃げないように川を遮るようにね」

そう云われ、臯月と海雪は網の両端を持ち、海雪が川をわたっていく。

幸い川の水位はそれほど高くはなく、海雪の脛脛から下が濡れるだけだった。

「それじゃ、ちょっと濡れるかもしれないけど」

そう云いながら、大宮巡査は大きな岩を両手に担ぎ上げた。

「ちよ、ちよっと！」

臯月がそう言うより前に、岩は川へと投げ込まれ、水飛沫が高く上がった。

その余波は川岸にいた弥生・葉月・瑠璃、健佑、女性二人、大宮巡査に降り注いだ。

網を持っていた臯月と海雪にも当然のように水飛沫が当たった。

「ちよ、ちよっと大宮巡査あ？」

葉月が目を細めながら、川の方を見ると、瞳孔を大きくし、驚いた声を挙げた。

ひい、ふう、みい、よお……と五匹の川魚がぷかりと水面に浮かび上がってきた。

「ふう、けつこううまくとれたなあ」

「水面に石などで衝撃を与え、魚をシヨック死させる。臯月、脱衣婆。あなたたちの方にもびっくりして隠れていた魚が逃げ込んでるかもしませんよ」

瑠璃にそう云われ、臯月と海雪は川に仕掛けていた網の中を確認すると……

「えっと…… 鮎あゆに山女やまめ…… あ、鰻うなぎも入ってる」

網の中には数匹もの淡水魚が多く捕まっていた。

「すんげえ？ つうーか、ありえねえ？ 俺がやってたのってなんなんだア？」

健佑が悶えるように言う。

「あなたの場合は我慢が足りなかったただけでしょ？ あと川に対しての礼儀」

弥生がそういうと、

「川に礼儀なんていらないっしょ？ つうかなあに言ってるの？ 頭おかしんじゃねえ？」

（頭がおかしいのはあんたの方でしょ？）と弥生は思ったが、口に出すことはしなかった。

「さすがにうなぎは食べるにはもったいないから、逃がしてやろう。

どうする？ 君たちが良ければ夕食に川魚を追加するけど？」

「えっと、大宮巡查が料理出来ないだろうなって思ってたし、簡単なのでカレーの材料持ってきたんだけど？」

弥生がバッグから袋に入れたニンジンやら、じゃがいもやらを出してみせる。

「まあ、定番といえは定番ですし、無難と言えば無難ですね？」

「それだったらさあ？ シーフードにしたら？」

海雪の言葉に臯月が首を傾げる。

「あれ？ シーフードって海鮮って意味じゃなかった？」

「まあ、細かいことは気にしないの」と海雪は笑って誤魔化した。

日が暮れ始め、弥生と瑠璃が調理をし始める。先程の水飛沫で服が濡れてしまったため、着替えており、二人ともＴシャツにズボンというラフな格好である。

弥生が野菜や肉を切り、瑠璃は大宮巡査が用意していたアウトドア用のガスコンロで野菜を炒めていく。海雪はその横でとれた川魚を人数分焚き火で焼いていた。

「魚は殿様に焼かせろ、餅は貧乏な百姓に焼かせろってね」

「おばあちゃん、なにそれ？」

海雪の言葉に弥生が訊ねる。

「魚を焼くときは頻繁にひっくり返すと魚の表面が痛みダメになってしまうから、命令するだけであまり手を出さない殿様がいい。逆に餅は頻繁にひっくり返した方がいいから、もうできたかまだできないかと手を出す百姓がいろいろって意味」

「つまり、我慢強いかという意味です」

海雪の説明に瑠璃が付け足しをする。

串を口から刺された鮎や山女が背中から火に炙られ、脂が火の中に滴り落ちていく。その度に『ジュツ』という燃える音が聞こえ、火は勢いを増していった。

伍・心的外傷（前書き）

心的外傷^{トラウマ}：外的内的要因による衝撃的な肉体的、精神的ショックを受けた事で、長い間心の傷となってしまうことを指す

伍・心的外傷

大宮巡査と臯月、葉月の三人は川の水を使って、米を洗い、それを飯盒に入れていく。

Y字になっている二本の木の枝に飯盒の弦に潜らせた棒を引っ掛け、火にかけていく。

「ご飯を炊いている間、大宮巡査は臯月と葉月を草叢の方へと連れていき、あることをしていた。

「なにやってるの？」

葉月にそう訊かれた大宮巡査はナイフと先が細く削られた木の枝を持っていた。

「この枝を使って、そこに生えている葉っぱの裏に好きな言葉や絵をかいてみてごらん」

そう云われ、葉月と臯月は何のことかわからず、いわれたとおりに葉っぱの裏に各々好きなものをかいていく。

もちろん墨などついていているわけもなく、一応何をかいたのかは本人しかわからないが、傍から見ればただ傷を付けているだけにしか見えない。

「これって何か意味あるの？」

文字を書きながら、臯月は大宮巡査に訊ねる。

「それは秘密さ。それにしてもこんなところにモチノキがあるなんて、佐々木刑事に感謝しないとなあ」

「佐々木刑事？」

葉月が首を傾げ、そう訊ねる。

「先輩の刑事さんだよ」と大宮巡査は答えた。

「それで葉月ちゃんは何を聞いたんだい？」

大宮巡査が訊ねると、葉月は臯月を一瞥する。

「えっと？ 私がどうかしたの？」

「ううん。なんでもない」

そう云うや、葉月はそそくさと弥生たちのところへと戻っていった。

「変な子……」

「そういう臯月ちゃんは何を聞いたんだい？」

「特に何も……」

そっけなく云うや、臯月も弥生たちのところへと行く。

(出来る限り、彼女たちにはいい思い出として覚えていて欲しいな……
あの事故を塗り替えれるとは思えないけど……)

大宮巡査が三姉妹をキャンプに連れてきた主旨は、六年前の事故に関する何かを、このキャンプを通して知ることにある。

しかし、楽しそうにしている三姉妹を見ると、自分がやっていることは間違いではないだろうかと後悔している大宮巡査であった。

「あなたのやってることは間違いではありませんし、今回の主旨は六年前の事故で何があったのかを知ることにありますからね」

何時の間にか大宮巡査の横に立っていた瑠璃がそう話す。

「瑠璃さんも結構楽しんでいるじゃないですか？」

大宮巡査は笑いながら云った。瑠璃は焼けた鮎を手にもっており、それを小さな口で頬張っている。

「それにしても、この鮎、結構脂がのってますね。脂がのっている魚は海川関係なしに美味ですよ」

「えっと閻魔さまって、料理とかに詳しい妖怪でしたっけ？」

大宮巡査が首を傾げる。

「結婚式場では臯月たちの目の前でしたから他人行儀みたいなことをしましたか、やはり警察官の道を選びましたか」

「ええ。妹が犬のおまわりさんを好きだったので」

「本当だったら、車関係の仕事をしていただいでしょうに…… 辛いな
いですか？」

瑠璃は申し訳なさそうな顔を浮かべる。

「妹は 元気にしてるんですか？」

「元気に 死んだ人間にその言葉は当てはまらないと思いますが、
今も賽の河原で石積みをしていますよ」

「僕は地獄に落ちるんでしょうね」

「それは…… 私が言えることは 今もその罪を背負って生きて
いくのなら、罪は多少軽くなると思います。あなたはその罪を償っ
ているのですから」

「そう云ってもらえると、少し気が晴れました」

瑠璃と大宮巡査が会話している中、ゴトゴトと何かが音をします。

「そういえば、飯盒に火をかけていたんじゃないんですか？ そろ
そろ蒸したほうがいい頃合でしょう？」

瑠璃にそう云われ、大宮巡査は軍手をはめるや、飯盒を火から離
し、裏返した。

飯盒にかけていた火に水をかけると蒸気が夕闇の空にのぼってい
った。

「大宮巡査あつ！ ごはん炊けた？」

弥生が大声で呼びかける。

「少し待ってて、今蒸しているところだから」

「今、魚で小腹を満たしてるところだけど、早くしないと葉月怒り
ますよ！ この子結構食べますから」

「ちょよ、ちょつと弥生おねえちゃん？」

葉月は顔を真っ赤にしながら、弥生にパタパタと殴る。

「い、痛っ！ ご、ごめん！ ごめんって……」

そんな二人を見ながら、皐月と海雪は魚をくわえながら、笑を零していた。

「今はただ純粹に、このキャンプが楽しめればいいんじゃないですかね？」

瑠璃はそう云うや、飯盒を手に取り、弥生たちのところへと持っていた。

晩食を終え、少しばかり焚き火をしていた時のことである。

大宮巡査はバッグからグレープフルーツの皮が入ったビニール袋を取り出す。

「見てて、今面白いことしてみるから」

大宮巡査がそう云うや、後片付けをしていた弥生と皐月、釜戸にしていた場所を綺麗にしている瑠璃と海雪、大宮巡査の隣に座っている葉月が、大宮巡査が手にもっているグレープフルーツの皮を見やっした。

「今から花火が火の周りに上がるからね」

そう云うや、大宮巡査は皮に含まれている汁を火にめがけてかけた。

すると火の周りにパチパチっと音が鳴り、まるで花火のように見える。

「葉月ちゃんもやってみるかい？」

大宮巡査から皮を渡された葉月は、汁の出し方を教えてもらい、火に目掛けて、噴出させる。

「キラキラ……」

「臯月がそう眩くと、

「臯月、どうかした？」

「ねえ？ 私たちも前にあんなことしなかったっけ？」

「覚えてないけど、学校の実験とかでやったんじゃないの？」

「弥生は首を傾げながら聞き返す。

「う、ううん。私たち一回アレやってる　お父さんに教えても

らって……」

「臯月？ 私たちのお父さんは……」

「弥生が声を荒らげながら、その先を言おうとした時だった。

「ちよつとお、健佑えっ！ それってどういう意味？」

「るっせえなあ！ もういいだろ？」

「よくないわよ！ 歩夢あゆむとはもう終わったんじゃないの？」

「喧嘩をしているのは昼間川釣りをしていた健佑とその連れの女性である。」

「つたく、翔太もなんで急にドタキャンしてるんだよ」

「ちよつと、人のせいにしてんじゃないわよ！」

「女性は健佑に何かを投げぶつけるや、駐車場の方へと去っていった。」

「つたく、んっ？」

「苛立った健佑が大宮巡查たちをみやった。」

「あんたらあ！ なぁに見てんだよ？」

「と、イチヤモンつけながらも、健佑は駐車場の方へと去っていった。」

「臯月の威勢のいいハリのある声が山中に響きわたる。」

長短二本の竹刀を手に持ち、一糸乱れぬその形は舞であると言えよう。

「こんな時でも鍛錬は欠かさないんだね」

二つあるテントの内、ひとつは三姉妹用に、もうひとつを瑠璃と海雪のために設置しており、大宮巡査は駐車場に停めている車の中で寝ようとしていたのだが、瑠璃の提案で外で見張りをするようにと言われ、寝袋で寝ようと準備をしていた。

「えっと……今何時ですか？」

皐月は手を休め、大宮巡査に訊ねる。

「んつとね……十時を回ったくらいかな」

それを聞くと、皐月は自分が寝る予定のテントを見やった。

「葉月、今日のこと、すごく楽しみにしてたんですよ。あれしたいこれしたいって　いつもは寝つきが悪いのに、すんなり寝ちゃって　」

「それだけ今日のこと楽しかったんだろっね」

大宮巡査は笑いながら話す。

「今日は本当にありがとございました。また誘ってくれませんか？」

「別に構わないけど……」

大宮巡査はその先を言おうとしたが、少し躊躇う。

「どうかしたんですか？」

「い、いや……」

動揺を隠せていない大宮巡査の表情を見るや、皐月は顔を歪めた。

「いや……妹も生きていたら、君と同じくらいだったのかなと思つてね」

「妹？　大宮巡査って妹さんがいたんですか？」

「うん。いるというより、『いた』と言ったほうがいいね」

その言葉の意味に、皐月は少しばかり首を傾げた。『いた』というのは過去形だからである。

大宮巡査はテーブルのそばに置いていた折りたたみの椅子を二つ手に持ち、川辺近くに並べる。そのひとつに自分が座り、もうひとつに皐月を座らせた。

「実は今日、このキャンプに君たちを誘ったのは、君たちのお父さんとお母さんの事故について何かわかるんじゃないかと思ってね」

「お、お父さんと……お母さんの？」

事の真意を聞くと、皐月は声を荒らげる。

「ああ。だから今回のキャンプ、神主は大反対していたんだ」

「爺様なら仕方ないと思いますけど……でも どうして大宮巡査がお父さんとお母さんのことを知ってるんですか？」

皐月がそう訊ねると、大宮巡査は空を仰いだ。

「君のお父さんである初瀬神健介は、有名なF1レーサーでね。僕が小さい頃、もっとも尊敬していたレーサーだったんだ。それが六年前のある日、つまり君たち三姉妹が転落事故に遭ってから、まるで『存在そのものがなくなっていた』んだ」

「存在そのものが？」

「さつきも言ったとおり、君のお父さんは有名な選手でね、F1中継の番組で見ない日はないっていうくらいの人で、特に大きな大会にはほとんど出ていたんだ。そんな人が突然出場しないのは、誰だって不思議に思う。だけど、事故に遭ったという報道もなければ行方不明になった報道さえなかった」

皐月は大宮巡査の話聞きながら、自分の記憶を探っていた。

「が、まるでモヤがかかっているかのようには、両親の記憶がほとんど思い出せないでいる。」

「僕が思うに、君たちの記憶は二通りあると思っっているんだ」

「二通り？」

「ひとつは外傷的記憶障害。転落のさいに頭をぶつけてしまい、脳に異常をもたらした場合による記憶障害。そしてもうひとつは内傷的記憶障害。これは外傷ではなく内傷……。つまり心に対しての障害による記憶障害……。云ってしまえばトラウマを消すことによつて、なかったことにすることだ」

「でも、私たちはどこも……」

皐月は戸惑いを隠せず、ただアタフタとする。額には汗が流れている。

「皐月ちゃん……。君はあの事故があつた瞬間。本当は犯人を見てるんじゃないのか？」

「わ、私が？ どうして？ どうやって？」

皐月は体を震わせながら、顔を俯かせる。

「事故があつた車には君たち三姉妹しか乗っていなかった。最初は両親が助けを求めに麓の民家に行ったのだろうとされていたそうだけど、先ず両親の行方がわからなくなってしまった。一ヶ月ほど散策を続けたそうだけど、二人を示すものは何も見つからなかったそうだ……。そして、助手席に座っていた君を誰が助けたのかということも未だにわかっていない」

「わ、わたしが助手席に座っていたのを、誰かが知ってるんですか？」

「いや、それは僕の想像でしかないけど、恐らく今日、神社から出発するときに君がしたことであらうと少しばかり確信できたんだ」

「私の行動？」

皐月はそう云うや、少しばかり考える。

「君たち三姉妹は先日、車のどこに座るのかを話していたそうだね？」

「えっ？ はい…… 葉月は車に少し弱いから、前のほうがいいんじゃないかって あっ！」

皐月はハツとした表情で気付く。

「君は家族で出かける時、殆ど助手席に座っていたらしいね。だから六年前の事件の時も、お父さんの隣…… 助手席に座った」

大宮巡査にそう言われ、皐月は少しばかり、頭を揺り動かした。

「僕は無理に思い出さなくてもいいと思っている。だけど、一生このまま何も解決できないままなのは、いけないと思ってるんだ。今日ここに来た理由は君たちの記憶が…… お父さんとお母さんの記憶がひとつでも思い出してくれたのならと思っただ」

大宮巡査はスツと立ち上がり、テントの傍へと歩み寄る。

「迷惑なことしないでください！ なんの権利があつて？ 大宮巡査に何の権利があつてそんなことするんですか？」

皐月は怒号を挙げ、大宮巡査をジツと睨みつけた。

「皐月ちゃん…… 瑠璃さんから聞いたけど、君は姉妹の中でも一番の怖がりで…… 本当は執行人なんてしたくないと思ってるんだろ？」

「思ってます。だってそれが私に課せられた……」

皐月はその先を言おうとした時だった。

突然、大宮巡査が振り向き、皐月をギュツと抱きしめたからである。

「ちょ、ちょっと離してください！」

「すまない。ただ…… このままにさせてくれ……」

「お、大宮巡査？」

皐月は無理矢理にでも、大宮巡査から離れようとしたが、次の言葉を聞くや、それが出来なくなっていた。

「ごめん…… ごめん彩奈…… 僕があんなことしなかったら……
泳げない彩奈を沖に連れていこうなんてしなかったら 僕がお前
を見殺しになんてしなかったら……」

大宮巡査は力強く皐月を抱き締める。いや、彼からすれば十年前、
不慮の事故で亡くした、まだ四歳だった妹の彩奈を抱きしめている
だけである。

皐月は複雑な表情を浮かべながらも、目の前で大人気なく泣き崩
れている大宮巡査に言葉をかけることが出来なかった。

陸・断罪（前書き）

断罪・罪をさばくこと。罪に対して判決を下すこと。

陸・断罪

「大宮巡査……」

物静かな口調だが、言われたものにとってはドスの効いた低い声が朝焼けの空に響きわたる。

「昨夜は臯月と話していましたが、一体何の話？」

川の水で顔を洗っていた大宮巡査に瑠璃がうしろから声をかける。その手にはタオルがあり、それを大宮巡査に差し出す。

大宮巡査はそれを手に取り、顔を拭いた。

「聞いてたんですか？」

「すこしばかり……しかし、これまで二度も抱きしめているのは、臯月が彩奈妹に似ていたからですか？」

「冗談を　　彩奈は四歳よっの時に死んだんです。臯月ちゃんに聞かれたら、それこそ怒られますよ」

大宮巡査は微笑する。「そう思っていたからしたんでしょう」「と瑠璃は言葉を述べる。

「あ、おはようございます」

三姉妹用のテントから、弥生と葉月が出てくるや、大宮巡査と瑠璃に挨拶をする。

「おはよう。弥生さん、葉月ちゃん　　臯月ちゃんは？」

大宮巡査にそう訊かれ、弥生は自分たちのテントを見やりながら「ああ、まだ寝てますよ。結構疲れてるんじゃないんですかね？」

弥生はそう云うや、川に近付き、顔を洗いに行った。そのうしろを葉月がついていく。

「朝食はどうします？　味噌汁の材料を持ってきてますけど？」

瑠璃がそう訊ねると、「それじゃ、僕はご飯の準備をします」と大宮巡査はそう言っつて、飯盒を置いているところまで行こうとした時だった。

「のろし？」と川の水で顔を洗い、タオルで拭き取っていた葉月が言葉を発した。

「のろしって…… 戦国時代じゃあるまいし」

弥生は少しばかり笑いながら言っつたが、葉月の指さす方を見るや、徐々に顔を強ばらせていく。

「大宮巡査！ 火事！ 火事っ！」

弥生の慌てた声で、大宮巡査は弥生の指差す方を向いた。

そこには黒に近い灰色の煙が、延々と空に昇っつていくのが見えた。「き、君たちはここにいて！ 僕は管理の人と警察に連絡を入れるから」

そう言っつて、大宮巡査は急いで駐車場へと走っつていった。

「臯月っ！ 起きてっ！」

弥生は自分たちが寝ていたテントを覗きこみ、まだ寝ている臯月を起こす。

「んっ？ あ、弥生姉さん…… おはよう」

「おはようっつて、悠長なこと言っつてられないのよ？ 山火事！」

まだ覚醒していない臯月の頭に、弥生の言葉は理解できなかつたが、次第のその意味を理解していく。

「か、火事っつて？ どこで？」

「どこでっつて、この山で！」

臯月は起き上がるや、テントから出る。

「あれ？ 大宮巡査は？」

「今警察とこのキャンプ場の管理をしている人に連絡を入れるために、駐車場に行ってる。多分あそこなら電話があるから あれ？」
弥生は言葉を止め、首を傾げる。

「どうかしたの？」

「いや、なんで駐車場の近くに電話なんてあるって思ったのかしら」
弥生の言葉に皐月は少しばかり、顔を歪める。

「歩夢あゆむうつ！ 歩夢どこだア！」

上流の方から、男性の叫び声が聞こえてきた。

「あ、あなた昨日の……」

弥生がそう云うや、男 健佑はそちらに気づき、弥生たちに近寄る。

「あ、あんたら、歩夢知らねえか？」

そう訊ねられるが、名前を言われたところで、誰なのか三姉妹は知りようがない。

「閻魔さま……ご存知ですか？」

「たしか あなたの連れで、髪が長い方でしたね」

瑠璃は健佑にそう訊ねると、

「あ、ああ。そうだけど？ っーか、なんで知ってんの？ おたく、あいつの知り合い？」

健佑にそう云われ、瑠璃は少しばかり返答に困る。

「それで、その歩夢さんだけ？ その人は何時からいなくなってたの？」

海雪に訊ねられると、健佑は少しばかり考える素振りを見せる。

「えっと、昨日の夜中……二時くらいかなあ？ ちよっと涼子を山の近くまで連れていってたんだ……」

「そんな夜中に？ 星を眺めるとは思えないけど？」

「あんださあ？ カマトトぶってる？ 男と女が夜中にやることっていつたら……」

健介はそう云うや、人差し指と中指の間に親指を挟もうとすると、「それ以上言ったら、未成年の婦女子に対する、猥褻行為として、あんたの首を切り落とすけど？」

何時の間にか海雪が健佑のうしろに立ち、大鎌の刃を首元に近づけていた。

しかし、見えるものには見えないその鎌を健佑が気づくはずもなかったが、海雪のドスの効いた低い声が効いたのか、健佑はアタフタと弥生たちから後退りしていく。

「わ、悪かったよ。でも、歩夢を見かけたら、教えてくれ……」

「ちょ、ちょっと待って？ 確かあなたたちって、車で寝てるのよね？」

「あ、ああ。だけどその車もないんだよ」

「車がない？ 歩夢さんが運転してるんじゃないの？」

「いや、あいつは免許持ってねえよ。それじゃ、何かあったら教えてくれ。俺と涼子は駐車場にいるから」

健佑はそう言い残し、駐車場へと走っていった。

そのすれ違い様に大宮巡査が戻ってきた。

「やっぱり、あの煙は車が転落したさいによるものだとわかったよ。車が崖から落ちて、その周りで火が激しく燃えている。今、消防にも連絡を入れて、消化と救命活動してもらっている」

「転落……？」

皇月はその報告を聴くや、その場に跪き、頭を抱え、体を震わせた。

「皇月おねえちゃん？ どうかしたの？」

葉月が皇月に声を掛けるが、微動だにしない。

最初は声が小さくて、聞こえなかったのだらうと、葉月は思っていたが……

「いいやあ…… いやあ…… おとうさん…… おとうさん……
死んじや…… あだあ…… 死んじやあだあ……」

謔言のように呟き、瞳孔を大きくする。

「臯月、どうかした？」

弥生もその様子に違和感を持ち、臯月に声を掛けるが、

「弥生、葉月…… あなた達は大宮巡査と一緒に火事の現場に行つてきてくれませんか？」

瑠璃にそう言われ、弥生と葉月は困惑した表情を浮かべる。

「で、でも」

「臯月の事は私たちがなんとかします。葉月、霊がいたらその声を聞いてあげてください」

弥生と葉月は少しばかり躊躇うが、瑠璃から「仕事です」と言われ、渋々大宮巡査と共に転落事故のあった現場へと歩いていった。

「あ…… ああ…… やだあ…… おとうさん…… とつさあ……」

「ほら臯月、水飲んで」

海雪が川の水をコップで汲み取り、それを臯月に飲ませる。

「落ち着きましたか」

瑠璃がそう訊ねるが、臯月は体を震わせ、唇を震わせる。

「閻魔さまあ？ どうしてこんな事を許したんですか？」

「今さらそのことでもめても、こうなることはあなたもうすつとわかっていたことでしょう？ それに今後のことも考えると、臯月には早く思い出して欲しかったんですよ。自分がしたことに對する事を……」

「臯月がしたこと？」

海雪がそう訊ねると、瑠璃は臯月を一瞥する。

「臯月…… あなたは転落事故があった時、車の中に入った蜂にビックリして、健介にしがみつきましたね」

「ちょ、ちょっとまってください！ そりゃ、昨日、車の中に蜂が入ってきて、その時の臯月の様子を見ればそうなるかもしれないけど…… それって偶然にも程がありませんか？」

海雪が瑠璃に聞き返すと、

「偶然ではなく、必然だとすれば？ 事故があったのはセミが鳴き喚くほどの夏日ですよ。そんな暑い日の車の中は四十度以上と言われています。帰る時だって、車内の温度を下げるために窓を開けていたかもしれない」

「それじゃ、その時に蜂が入り込んだってことですか？」

「いいえ、入り込んだというよりも、入れられたと云ったほうがいいでしょうね。自然に入ってきたのなら、再び出ていくでしょうし、もっとも蜂は暑い場所は苦手とする昆虫ですからね。だから、本来いるはずがないんです」

瑠璃はそう云うや、臯月を見やった。

「私はその当時の事を知りませんし、知ることできません…… 十王は死んだ人間しか罰せられませんから」

瑠璃はそう云うや、煙管と取り出し、それをくわえた。

瑠璃の容姿は葉月と同年齢ほどの見た目なので、傍から見れば奇つ怪な光景である。

頬を膨らませた瑠璃は、可細い口から紫煙しえんを吹き出した。

「煙々羅、大宮巡査たちのところに行き、状況確認を。それと車の状態と中を調べられたら、折入ってお願ひします」

瑠璃にそう云われた紫煙は、まるで意思があるかのように、いまだ灰色の煙が昇っている事故現場へと、スーッと風に乗るように流れていった。

「げえほおっ！ げはあっ！ げほおっ！」

瑠璃は激しく咳き込み、その場に座り込んだ。

「煙々羅も人間の姿で連れてくればよかったんじゃない？」

海雪が瑠璃の背中を摩りながら言った。

陸・断罪（後書き）

煙々羅^{えんえんら}を現世に呼ぶ場合、煙管^{キセル}を使って呼び出します。因みに瑠璃はタバコの煙が大嫌いです。

昨夜のことである。

大宮巡査と別れ、テントの中で眠っていた皐月は、大宮巡査から自分の父親である、初瀬神健介の話聞いたことで、奥底に眠っていた記憶が夢という形で現れていた。

それは昔の 皐月がまだ小さい頃の秋頃であった。

秋の涼しい風が優しく吹いている中、そこだけはまさしく興奮の増埒るつぼと云わんばかりに熱気で満たされていた。

一定の間隔に空けられたスタートライン（グリッド）でエンジンを蒸かしているF1マシンから伝わってくる振動と緊張感。エンジンによって熱せられたアスファルトからのぼってくる塵気楼。そして何よりも、それを見守っている観客たちの興奮が、より一層、この固定された世界を際立たせていた。

スタートシグナルが赤に変わるや、ブレーキを押したまま、アクセルを踏み込んだかのように、先程とは打って変わって、エンジンの音が激しくなっていく。

ゆっくりと赤が増えていき、そしてランプが消えるや、マシンは一斉にスタートした。

「お父さん、頑張れえ！」

観客用スペースのフェンスをよじ登るかのように身を乗り出し、まだ小学校に上がったばかりの皐月が必死になって応援していた。そのうしろでは弥生と葉月、そして母親である遼子が並んで椅子

に座っている。遼子の隣が皐月の座る場所なのだが、終始興奮していたため、レース中は殆ど座っていなかった。

レースも終盤に差し掛かる最終周回^{ファイナルラップ}。そのトップを走っているF1マシンが最終コーナーに差し掛かるうとしていた。そのうしろにはおよそ百米離れて、二台のF1マシンが追尾しており、その一台が初瀬神健介の乗るF1マシンであった。

「さて、今日もこれで終わりかあ…… ったく、初瀬神も期待させんなよなあ、いつつも二位どまりじゃねえかよ」

うしろで野次を飛ばす男性を皐月はキツと睨みつけた。

言葉の意味はわからなくとも、ただ単純に大好きな父親が馬鹿にされたことを幼心に感じてのことだった。

「なんだあ、このくうそがきい」

先程野次を飛ばした男が皐月を睨みつけた。

が、それを遼子が割って入って男性を宥め始める。

「うちの娘が失礼なことを云って申し訳ございません」

「あ、あんたの娘だったんかい？ 誰の応援かは知らねえけどよお？ 少しは賤たほうがいいぜ？」

「ええ…… ですが、あなたみたいに他の方が応援している選手を馬鹿にする事をなんとも思わない子に育てた覚えはありませんよ」
遼子の声はそれこそ物静かな口調であったが、聞いた人間にとっ
ては喧嘩を売っているとしか言いようのないものであった。

「くっ……」

男性はその言葉に少したじろいた時だった。

周りの歓声がそれこそレース中とは比べ物にならないほどの騒々しいもの変わったのだ。

「いつけえっ！ お父さんっ！！」
臯月の応援する声が最高点に達した時だった。

健介のマシンが唸りを挙げるようにスピードをあげながらコーナーへと入ろうとしていた。

目の前は緩やかなカーブではあるが、それでもトップを走っているマシンが内側を攻めているため、感覚的にはスピードを落とさなければ、曲がるときに重力が掛かり、横に流されてしまう。

下手をすればコースから外れるが、運が良ければクッション代わりに積まれたタイヤの壁にぶつかってしまふ。

そして運が悪ければそれは即死を意味する。まさに自殺行為である。

トップを走っているF1マシンがコーナーを曲がりきった時だった。そのマシンに乗るレーサーは突然背筋が凍るものを感じたのだ。まるで自分のレースはその一瞬の奇跡への序章であり、そして噛ませ犬だったのかと……

うしろからまるで獣のような唸り声が聞こえ、それは一瞬に遠く前方へと消えていった。

チェッカーフラッグが激しく振られ、観客は最高潮の歓声を挙げた。

「わ、私たちは夢を見ているのでしょうか？ 最終コーナーを本日最高速スピードで曲がりきった選手を…… 私たちは目撃したのです」

実況アナウンスの声が興奮を抑えようとしている。

「た、ただいま入りました情報によりますと、初瀬神健介選手のマシンが、最終コーナー付近から入るまでのスピードは380キロ。」

そしてコーナーを曲がり切り、最後の直線では　　370キロと…
… 殆どスピードを落とさずにコーナーを曲がりきっています』
アナウンスが終わるや、その結果を聞いた観客たちが歓声を挙げた。

レースが終わり、授賞式。一位の場所には健介の姿があった。

「それでは優勝の初瀬神選手。今日はすごいレースでしたね」
会場アナウンサーが健介にマイクを差し出す。

「ええ。もしいつものとおり、あのまま安全に運転していたら、いつもと同じよくても二位止まりだったかもしれません。でも、今日は家族が見に来てくれていましたし、何より娘の応援が聞こえていたんです」

アナウンスを聞いた皐月はキョトンとする。確かに応援はしていたが、この騒音の中間こえていたとは思っていなかった。

勿論、実際に健介の耳に届いていたわけではない。

が届いていたのだ。皐月が必死になって応援しているその熱意がそしてそれがあの最終コーナーに置ける暴走を奇跡へと繋げたのだから……

『だから僕は勇気が出たんです』

ゆっくりと夢から現実へと意識が引き上げられていく。

大宮巡査から父親の話聞いた皐月は、先程の夢が現実に起きたことであることだと気付いてはいなかった。しかし、まだ幼い皐月《自分》が必死に父親を応援していたことだけは、そして父親が最後に云った言葉だけは薄らと思いついていた。

その夢から覚め、起き上がるうとしたとき、弥生から山火事だと教えられ、それが車の転落事故であることを知り、皐月はトラウマに首を絞められるかのように、恐怖に戦おのいでいた。

皐月を心配しながらも、大宮巡査・弥生・葉月の三人は転落事故があつた峠へと来ていた。

事故の事を聞きつけた他のキャンプ客がそれこそ野次馬のように群がっている。

「すみません。警察のものです。道を開けてください」

大宮巡査が警察手帳を取り出し、野次馬たちに見せる。

消防車と救急車が峠近くで停まっており、消化活動と救命活動を行っていた。

車の周りは炎とかしており、それを消そうと消防車から放出される消化剤の含んだ水によって周りが蒸気で見えなくなっていく。

「あれ？ あの煙……」と葉月が大宮巡査の袖を引っ張って教える。

その先には紫色した煙が意思があるかのように、火の車に入っていた。

それから数分後のことである。海雪から戻るようにと言われ、弥生と葉月は何事かと首を傾げながら、テントに戻った。

そこには瑠璃といまだに膝を抱え、ガタガタと震えている皐月の姿があつた。

そして瑠璃の隣には紫色の長髪をした死装束を着た少女の姿があった。

その容姿は皐月よりも幼く、十一、十二ほどの印象があった。

「煙々羅？ それじゃさっきの煙って……」

葉月がそう言うつと、煙々羅は小さく会釈し、瑠璃から頼まれた事を皆に報告した。

「車の中に女性の遺体がありました。恐らく昨日皆さんがお会いした朽田健佑とその連れである政所涼子まことろと一緒にいた女性と考えて間違いないでしょ」

「車はその健佑のものと考えて間違いないでしょうね」

煙々羅と海雪の話を聞くや、

「それじゃ、被害者歩夢さんが自分で運転したつてこと？ でも健佑さんの話だと免許持っていないつて」

弥生はそう云うが、実際その証言を信じているわけではなかった。

「それとひとつ気になったことがあります」

「気になること？」

「些細なことかもしれませんが……」と煙々羅は先を言うのを躊躇う。

「自分が気になったことは、どんな些細なことでも話さない。それが事件解決になる切っ掛けになるかもしれないのですから」

瑠璃にそう云われ、煙々羅は少し深呼吸をするような仕草をする。

「殺された被害者ですが、皆さんとお会いしたとき、ハイヒールを履いてましたよね？ いくらキャンプにハイヒールを履いてくる馬鹿だったとしても、まさか車を運転するというのは、躊躇いもなくハイヒールを履くものでしょうかね？」

煙々羅が顔を歪めながら言う。

「つまり、運転していたんじゃないかと、座らされていた。そして何かしらの方法で車を崖から落としたということでしょうかね？」

瑠璃は葉月を見遣る。先程お願いした霊視が出来たのかという訊ねたかったのだ。

しかし葉月は何も感じなかったと説明する。

「若しかしたら、眠らされていた……と考えるのが自然じゃない？」

葉月の力は霊が最後に聞いた音を聞くことだから」

「だとしても、どうやって車を発進させるの？」と弥生が訊ねる。

「うーん。私あんまり詳しくないからね。まあそういうのに一番詳しいのがあの状態だし」

海雪が隅っこで座っている臯月を見遣った。

臯月は皆の会話に参加せず、ただただ震えているだけだった。

捌・可能性

太陽が真上に上がるうとしていた頃、車の中で燻^{くすぶ}っていた火が全て消え、漸く救命活動が行われた。

事故現場を見ていた野次馬の誰一人、車の中にいる人間が助かっているとは思っていなかった。

あれだけ長時間炎の中に閉じ込められていたのだ。助かっていたらそれこそ奇跡である。

当然その期待は裏切らなかった。救命士が車の扉をバールでこじ開け、中から出したのは、髪が燃えてなくなった頭皮を晒した焼け爛れた女性の遺体であった。そして今にも腐り落ちそうにボロボロになった足が晴天にさらされたのだ。

女性の遺体と直ぐに判明したのは、女性特有の大らかな胸のふくらみがあつたからである。

「私、警視庁の大宮と言うものですが、少し遺体を見せてくれませんか？」

大宮巡査は遺体を運び込む救命士たちを呼び止め、死体の確認をさせてほしいとお願いする。

救命士も相手が警官という事で、躊躇なく遺体確認をさせた。

「被害者の持ち物は車の中に？」

「いえ、それはまだわかりません。なにせ今調べ始めたところですから」

救命士はそう云いながら、頻^{しき}りに死体の足元を見ていた。「どうかしたんですか？」と大宮巡査が訊ねると、

「いえ、私たちは交通事故の現場に出動することも度々あるのです

が、ハイヒールを履いての運転は特に危険視されているはずなんです」

「まあ、僕も車を運転しますから、危険性は知っています」

「ええ。本来は足全体を使って踏み込むんですが、ハイヒールの場合、踵のヒールによって支えられているとはいえ、実際は爪先立ちで、運転する場合も爪先に力が集中されるんです。それによって力が均等に入らず、ブレーキが踏まれていなかったと見解しているのですが」

救命士の言葉に大宮巡査は首を傾げた。

「ただ、車が走ったと思われる道はゆつたりとした坂道でして、余程のスピードを出さない以上、ここまで飛ぶとは考えられないんです」

そう云われ、大宮巡査はうしろの崖を見上げた。その距離はおよそ十米ほどであった。

ゆっくり落ちたのなら飛び越える力がなく、ましてやガードレールにぶつかり、その場で止まっていた可能性がある。

つまりここまで飛び出すには余程のスピードで降くだらなければいけないのだ。

そしてそうするには踏み込みが必要となる。

「被害者が自殺したとは考え難いですね」

大宮巡査の言葉に救命士の二人は首を傾げるが、直ぐにその真意に気付く。

「ええ。確かに車を運転できる人なら、事故の危険性のあるハイヒールを履くとは考え難いですし、運転する際、履き替えるものなんですから」

車の中を探していた監察員が出てくるや、大宮巡査は何か見つかったのかと訊ねる。

「いえ、特に何も…… CDやカセットなどはありましたが、事故

の原因になるものは何も」

発見されたものは全て車の中に入っけていても可笑しくないものばかりであった。

「大宮巡査？」

「こらっ！ 危ないじゃないか？ 一般人が入ってきては」

うしろの方で大宮巡査を呼ぶ声が聞こえ、それを警備していた警官が止めている。

「あ、いいんです。その子は知り合いですから」

そう云うや、大宮巡査は警官に説明し、臯月を現場へと入れた。

「臯月ちゃん？ 体の方は大丈夫なのかい？」

大宮巡査はそう訊ねる。臯月は今にも倒れそうなほどにフラフラであった。

「うん。ごめんなさい…… それでやつぱり自殺なんですか？」

「いや、僕は自殺ではなく他殺と見ている。先ず、車を運転しているからこそわかるんだけど、自分が事故に遇う原因を作るものは極力下げると思うんだ。女性の場合、ハイヒールなんか特にね。男性だとサンダルかな」

「要するに力が前進にいきわたらないのと、厚底ブーツの場合は引っ掛かってしまって、そのまま猛スピードになってしまっから…… ですか？」

臯月の言葉に大宮巡査は少しばかり驚く。

「それって、お父さんから聞いたのかい？」

その問いに臯月は首を横に振る。実際は事件にもなっているのでニュースで知った程度である。

「車の中は調べたんですか？」

「僕はただけど、丁度今見ようと思っっていたんだ」

それに同行させてほしいと臯月はお願いすると、大宮巡査は無

を云わずに了承した。

車の中は全て燃えており、あるのは鉄の残骸であった。

「これじゃ、証拠があっても見つからないかな」

大宮巡査は半ば諦めムードであった。

「大宮巡査？ 被害者は車に乗せられて、あのゆったりとした坂をブレーキも踏まずに突っ込んだでいいんですよね？」

「えっ？ あ、うん。一応そう考えられるけど。何か気になる事があつたのかい？」

皐月はその言葉に答えるように、運転席と助手席の間を指差した。

「サイドブレーキがかかってない」

「つまりブレーキ自体が掛かっていなかった。だけどそれだとスピードは出ても、ガードレールのところまで止まっているはずだよ」

それは皐月も違和感を感じたときに気付いていた。しかし、気になっていたものはもうひとつあつたのだ。

それは自身が体験しているからこそわかるものであつた。

「被害者の体に異変はありましたか？」

「うーん。殺された女性の体に異変ねえ…… 特になかったけど」

「それじゃ、どうしてシートベルトがバックルに刺さっていないんですか？」

「それは…… 確かにストラップがリトラクターに戻っているままだ。でも、自殺しようとしているのなら付けないんじゃない？」

「確かにそうかもしれませんけど…… でも、まだ可笑しいところはもうひとつあるんです」

それは何かと大宮巡査が訊ねようとしたが、己で気付いた。

「エアバッグが出ていない？ 確かエアバッグの仕組みは車がぶつかった衝撃で出てくるはずだけど」

「犯人は車の炎上に便乗して、被害者を身元不明にしようとしていた。だからこそ、車を炎上させるほどの距離を飛ばす必要があった」
「だったとしたら、ここまでの距離を飛ばすとうスピードを上げなければいけない。サイドブレーキを元に戻した状態なら、坂道だから転げるかもしれないけど、ガードレールに引っ掛かるのがオチだ」

ガードレールは歩道を歩いている人を庇ったり、その先の崖などに落ちないようにするための役目がある。スピードが出ている車が突っ込むとガードレールがへこむということはあっても、突き破るというのは考え難い。

「それをした方法がわかればいいんですけど」

皐月はそう言いながら灰皿の方に目をやる。そこだけ妙に他の場所よりも燃えていた形跡があった。

「もしかすると、火事の原因はこれじゃないんですかね？」

そう言いながら、皐月は灰皿を取り出そうとするが、熱で変形してしまったのか引っ付いている。

「ちよつと退いてください。今パールで取り外しますので」

外で覗き込んでいた救命士の一人がそう言いながら、パールで取り外した。

「やっぱり衝突で火が燃えなかった時のために、あらかじめ潜ませていたんだ」

「でも、これだけじゃ他殺とはいえないんじゃないかな？」

大宮巡査の問い掛けに、皐月はどうしてと聞き返す。

「イヤだって、若しかしたら被害者が吸っていたかもしれないし、女性が煙草を吸うのは珍しいことじゃないしね」

そうなのだろうか……と皐月は思った。まだ皐月がテントで震えていた頃、煙々羅が瑠璃たちにしていた話では、被害者の女性は昨日川で釣りをしていた朽田健佑の連れの一人だと云っていた。

「大宮巡查。昨日馬鹿みたいなのが川釣りをしていたの覚えてますか？」

「っ？ あ、覚えてるよ。それがどうかしたのかい？」

「その人の連れが一人行方不明になっているんです」

「行方不明…… それじゃ、あの死体は」

「多分その行方不明者だと思っんですけど」

皐月はそう言いながら、車から降りた。

「身元を確認しようにも燃えてしまっているからね。犯人はそうするのために車を燃やしたと考えるのが自然だね」

「後はどうやって、あのゆったりとした坂から、ここまで飛ばせるほどのスピードを出したのか……」

その方法としてアクセルを踏み続けたという考えは二人とも一緒だった。

「車の種類はMTマニュアルだったけど…… これって最初っから殺すつもりで選んだんじゃない？」

川沿いにあるテントに戻ろうとしたとき、ふと皐月が言葉を漏らす。

「つまり車は所有物ではなく、レンタカーだったということかい？」

まあ、確かにATオートマだったら、Pパーキングにギアを入れておけば坂道を転がる事はないだろうし、そうなるとMTならギアを1にした状態でもアクセルを踏めば、でも被害者は運転席で見つかったそうだよ」

「被害者自らが車のアクセルを踏んだ…… その方法が」

その時、同じくキャンプに来ていた親子の声が聞こえた。

「アイスクリームおいしい」

「ほら零さないの。それに日陰にいなさい。アイスが溶けちゃうで

しよ……」

小さな男の子がソフトクリームを頬張りながら、母親らしき女性の手に引かれている。

「アイス？」

「アイスがどうかしたのかい？」

大宮巡査がそう訊くや、皐月は大宮巡査にあるお願いをした。

「そ、そんな方法が？ でも、もしそれが可能だとすれば……」

「私、甘い物が大好きだからよくケーキ屋とか、アイスクリーム屋でみんなの分を買うときにそれをもらうんです。あれはお客が家に着くまでの時間を計算して入れている。もしそれをずっとクーラーボックスに入れていたら？」

「でも、相当な量だと思うよ」

「時間なんて適当に云ってしまえばいいんです。要はそれが必要なんですから」

「それじゃ被害者は焼け死んだのではなく……それが溶け切った際に車内で満たされたそれで死んだということかい？」

大宮巡査は皐月の考えに少しばかり違和感があった。

「夏とはいえ、ここは山だから町よりも涼しいはずなんです。それにクーラーをかけていた可能性だってあるし、犯人が被害者を眠らせて、運転席に乗せた可能性だってある」

「そして犯人は降りるときにサイドブレーキをかけなかった。MTだからこそ出来る方法と言うわけか……」

大宮巡査がそう云っている中、皐月は少しばかり頭を抱える。

大宮巡査はそれを見るや、近くにあったベンチに皐月を座らせた。

「大宮巡査からお父さんの話を聞いて、少しだけ思い出したんです。あの時…… みんなでキャンプに行ったときの帰り、目の前から蛇

行運転している車が来て、その時はお父さんは難なく避けたんですけど、今度はブレーキが効かなくなってる。」

「それじゃ転落した理由って、ブレーキが効かなかったからなのかい？」

「車はATだったから、多分そうだと思います。MTならサイドブレーキをかければいいわけですし。だからこそお父さんは町に下って大災害を起こすよりも、崖の下に落ちる方を選んだ」

ギアをPにしたとしても、ブレーキ自体が壊れていればそれは意味がないことになる。アクセルから踏み外していても、車は何処まで走り続けるかわかったものではない。健介の判断は何とも無鉄砲な話である。

「それが原因で、君たち三姉妹は半死の状態で生き返ったということか？」

「それを知ってるのは私だけなんです。あの時転落した車の中で気がついたのは私とお父さんだけでしたし……」

皐月がその先を言おうとしたときだった。

「あの時、誰か車の上に乗ったような音が聞こえて……」

「誰かが車に気付いて、君たちを助けようとしたんじゃない？」

大宮巡査の質問に皐月はわからないと答える。

（それはないと思う。もし助けようとしていたのなら、私に睡眠薬みたいなものを吹きかけない。それに私や弥生姉さん、葉月を残して、お父さんとお母さんだけを車の中に出した理由も）

皐月は心の中で呟いた。

玖・凍解

大宮巡査は湖西主任に連絡を入れ、臯月の考えは正しいのかを訊ねていた。

臯月は携帯の裏側に耳を近づける。

かすかではあるが電話の内容が聞こえていた。

『面白い発想じゃが、それは無理じゃな。ドライアイスは氷点下七八・九度の極低温物質でな。保存するにもそれ以上低いところでないで熱で溶けてしまうから保存できん。クーラーボックスどころか、一般家庭の冷凍庫にだって保存する事は先ず無理なんじゃよ』
それを聞くや、臯月は申し訳ない表情を浮かべた。

『じゃが、普通の氷はどうじゃ？ これくらい葉月ちゃんでもしつとると思うがね？』

「普通の氷？ あっ……！」

臯月は何かに気付き、自分の携帯を開いた。

「昨夜の気温　　夜中の気温は十六度だから、車の中はそれよりも下……　クーラーをかけていたとしたら、車の中の気温はそれよりも下になるんじゃない？」

臯月の言葉が聞こえたのか、湖西主任が『普通の氷ならクーラーボックスに入れることも、かちわりじゃったら、買いに行く事も可能じゃろうな』と伝える。

「後はそれをどう証明するかだけ……　さすがに僕のカじゃ」
犯人がどうやって殺害したのかと言うトリックがわかったとしても、それを照明するためのものを準備する事は難しいことである。

『わしもそれは無理じゃな。上の許可をもらわんといかんし、何より犯人の目星はついてても、証拠がなければ何も出来まいよ?』

皇月もそのことはわかってた。

「でも、あの人たち、一泊で帰るだろうし、私たちも今日帰る予定だから」

それまでに犯人を捕まえたいと思っていた。

「でも、あの車が彼らの乗っていたものなのかという証明も出来ないし…… ナンバープレートも燃えて変色してしまっているからね」
レンタカーのみならず、ナンバープレートは所有者証明書という意味があるため、誰のものかというのは調べればわかる。

「一応車種はわかるんですね? ワゴン車くらいの大きさだったから」

「それはね。でもワゴン車といっても多種多様だから細かいところまでは。それにそれを半日で調べようと思うのも……」

大宮巡査はその先を口にしなかった。無理だとわかっているのは皇月だつてわかっていると感じたからだ。

「皇月ちゃんの考えが証明できればいいんだよね?」

「えっ? あ、はい。でもそれをするには」

皇月は躊躇う仕草をする。

「僕が借りて来た車は4WDだけど、MTなのは覚えてる?」

それを聞くや、皇月は小さく声を挙げると同時に……

「やめてっ! 下手すると死ぬかもしれないですよ?」

皇月はこのトリックを実験するのは危険極まりない事だと言う事は想像できていた。もちろんそれは大宮巡査自身もわかっている事である。

しかし証明する方法はそれしかないのだ。

大宮巡査は皇月の頭を撫でながら、「大丈夫だよ」と一言いった。

「あんだ、警察の人間だったんだな？」

ふと大宮巡査に声をかけてくる男性がおり、大宮巡査と梶月はそちらに振り向いた。

そこに立っていたのは朽田健佑と政所涼子であった。

「警察がこんなところで油売ってていいのかよ？ こっちは人捜してるっていうのに」

健佑が愚痴を零す。

「ああ。貴方たちにひとつ訊きたい事があつたんです。昨夜不信な車が山を下っていったという目撃証言がありましてね。その車は貴方たちのものかもしれないというらしいんですが？」

大宮巡査がそう健佑と涼子に訊ねる。もちろんそんな証言はなかった。

「不信な？」と涼子が聞き返す。

「ええ。ワゴン車のようでしたので、所有されている各家庭に訊いて回っていたんです。そうしたら、貴方たちの車だけ駐車場にないことがわかつたんですよ」

「不審な車は俺たちが乗ってきたやつだったのか？」

「ええ。まあ、そうなりますね」

大宮巡査の言葉を聞くや、健佑は少しばかり考える。

「それって、さつきから騒いでる転落事故と関係あるのか？」

「いやそれはまだ。所有物でしたら、現場に連れていきますが」

大宮巡査がそう訊ねると、健佑はお願いしますと答えた。

それから小一時間経つての事だった。大宮巡査は鑑識ポロイドにお願いして、遺体の写真を一枚もらい、それを葉月に霊視してもらっていた。

葉月は何度も写真を手で摩り、死者の声を聞こうとするが

「だめ……全然聞こえない」

「聞こえないって……そのままの意味？」

弥生がそう訊ねると葉月は答えるように頷いた。

「つまり被害者は死ぬ直前、臯月ちゃんのとえと同じ状況だったってことかい？」

「臯月おねえちゃんの考えだと、被害者は眠らされた後、サイドブレーキをかけておらず、そのトリックを使えばって事になるからそうなのかもしれない」

葉月は何度も霊視をしながら、問答する。

「でも、もしそれが可能だとしたら、計画以外のなにものでもないわよね？」

「ええ。だからこそそのMTだろうし、だからこそその殺害方法なんだろうと思う。だって、素人じゃアクセルとブレーキの場所は知っていたとしても、対処は出来ないでしょ？」

臯月はそう云うや、煙々羅を見やった。

「煙々羅、被害者の周りに不信なものはなかったのよね？」

「ええ。まず被害者はシートベルトをしていなかった。首を絞められたり、刺された形跡もない。それに臯月さんの考えがあっていたとしても、それを証明するものは、文字通り蒸発してしまっている」

「打つ手はなしということですか？」と瑠璃が訊ねる。

「いえ、転落したさい、遺体が運転席から離れていなかった事が不自然なんです」

煙々羅の言葉を聞くと、臯月と大宮巡査は互いを見やった。

「それって、動かなかったんじゃないかって、動けなかったってことになるんじゃない？」

「眠っていた状態でも転落し、車が横転してしまえば、少なくとも動いているはずだろうし……それじゃ、縄で縛っていたって事に

なるんじゃない？」

「でもそれだと縄の痕がつくんじゃ」と海雪が訊ねる。

「だからこそその火事なのよ。死体は焼け爛れていて、皮がボロボロになってた。それって遺体の身元をわからなくする以上に、縄の痕を消すためでもあつたんじゃない？」

「だったとしても、それをどうするかですね？ 全部が燃えきらなかつたら 煙々羅。シートベルト以外、不信なものは何もなかつたんですよ？」

瑠璃の問い掛けに煙々羅は頷く。

「若しかしたら……でもそれだつたら片方は気付くはず」

大宮巡査の小声が聞こえたのか、葉月がそれに対して問いかけた。

「いや、ちよつと思ひ出したんだけど」

大宮巡査は考えを臯月たちに説明した。

「その方法なら可能じゃない？ 転落したときはまだ被害者が眠っていた。そして車の中で火事が起きる。転落してドアは変形してしまつて出る事が出来ない。車の中に煙が蔓延してそれを吸い込んでしまつた」

「そして被害者を縛っていた縄にそれをしていたとしたら、なるほど、すべては燃えてしまうというわけですか？」

弥生と瑠璃が驚いた表情で納得する。

「でもこれは証明しようにも…… 他のやつなら可能なんですけど」

大宮巡査がその先を言おうとしたときだった。

「君かい？ 大宮巡査というのは？」

駐車場のあるほうから老人がゆっくりと臯月たちの方へと近づいてくる。

「え、ええ。そうですが…… あなたは？」

「そうじゃね。名乗るには先ず自分の名前を言うのが先か…… うちの名は野中虚空（のなかいくう）というものなんじゃがな、ちよつと話を聞く限りじゃと、そのトリックを証明したくても出来んようじゃな？」

老人、野中虚空は少しばかり笑みを浮かべながらそう訊ねる。

「え、ええ。大まかな部分は出来るんですが……」

「どうじゃろうな？ その犯人と思われる人物には後で遺体確認をしてもらって、殺害方法を証明する実験は明日すると言うことで」その言葉に大宮巡査はもちろん、皐月たちも驚いていた。

が、ただ一人、瑠璃だけは怯えた表情で野中虚空を睨んでいた。

「どうしてそんな事が出来るんですか？」と皐月が訊ねると、「いやいや、ただの余生がない爺の暇つぶしじゃよ」と野中虚空は笑って答えた。

その後、朽田健佑と政所涼子は遺体確認のため警官らに遺体が置かれている死体安置室へと案内された。

そして遺体は行方不明となっていた曾根崎歩夢本人であることが判明された。

拾・塵芥

その翌日の事である。大宮巡査と皐月はとある駐車場へと案内されていた。

そこには朽田健佑と政所涼子の姿があり、ふたりは一体何が起きるのかといった感じにそわそわしていた。

「あ、あんた……俺たちに何か用があるのか？ おれ、今日会社だったんだぜ？」

「わ、私だって、大切な用があったのに」

健佑と涼子がそう大宮巡査に訊ねる。

「いえ、僕たちもある人から来るようにと云われましてね」と大宮巡査は答える。それに同意するように皐月は頷いた。

すると四人に近づくように一台のワゴン車が駐車場へとやってくる。そして、まるでアクション映画のようなセットが組み立ていく。それは緩やかな坂となっており、それをワゴン車が上っていく。

皐月と大宮巡査はただただその光景を呆然と眺めていた。

が、健佑と涼子はまるで恐ろしいものを見んとばかりに体を震わせていた。

それもそのはずである。やってきたワゴン車は彼らが乗っていたワゴン車と同じ車種なのだから。

「ほう、集まっておるようじゃの？ それじゃさつさと実験しようかの」

昨日皐月たちの前に現れた老人である野中虚空が、あの時と同様に目を細めた優しそうな笑みを浮かべながら、ことを進めていった。

「それじゃ穢ちゃんや？ トリックの説明してくれんかの？」

野中虚空が臯月にそう云うや、臯月は首を傾げる。

「なんじゃ？ 自分の考えに自信がないのか？ それとも生身の間でないと証明することもできんというのか？」

そう云われ、臯月は坂道で停まっている車に近付く。

「まず、これは事故ではなく計画的殺人である事を前提に聞いてください」

「さ、殺人？ 歩夢は殺されたっていつのか？」

健祐が狼狽するように訊ねる。

「ええ。犯人はMT車の落とし穴を知っていた可能性があるんです。MT車にあつて、AT車にないもの。それはサイドブレーキなんです。AT車はギアをPにすれば車は停まります。ですがMT車の場合はブレーキをかけたあと、サイドブレーキをかけないと自然と車は勝手に走り出してしまうんです」

大宮巡査が健祐と涼子に説明する。

「つまり犯人がMT車にしたのは、車が勝手に動くようにするためだった。もちろん被害者が気付かないよう、車の中にいるときはサイドブレーキをかけた状態で」

「そのあと、睡眠薬か何かを飲ませ、被害者を眠らせる。そして被害者を運転席に座らせ、ある方法をした」

「ある方法？」と健祐が訊ねると、臯月が説明するので来てほしいと皆を車のところまで呼んだ。

車の中には被害者と同じくらい大きな人形が運転席に座らされていた。

「犯人は被害者を運転席に座らせ、足をアクセルのところに乗せようとした。だけどそれだと発進してしまうから、その間に氷を挟ん

だ

「氷？ そんなもので出来るのかよ？」と健祐は訊ねる。

「でもそれだと足の重みで溶け切る前に発進してしまう可能性がある。だから犯人はこうやって、被害者を縄で固定した」

臯月は人形の体にあるものを仕込んだ縄で縛った。

「ほう？ それなら被害者は転落しても運転席から動けんなあ。しかし燃えたあと縄が見つからなかったはずじゃろ？」

「縄にガソリンを含んでおくんです。そうすれば証拠は残らないと思いますよ」と大宮巡査が説明する。

「でもその後はどうするの？ 体は固定できても、犯人は急発進してふりとばされるんじゃない？」

涼子がそう訊ねる。

「同じように油を含んだ縄を足に結ぶんです。そしてそれを重みで壊れないほど太い氷柱に結びつけ、ハンドルに固定する」

臯月は説明するようにそれをおこなを行った。そしてエアコンをクーラーから、ヒーターに切り替える。

「こうすることで次第に氷が溶けて、足が落とされる。するとアクセルが踏まれた状態になるはずなんです」

臯月はちらりと野中虚空を見やった。野中虚空は横にいた男にエンジンをかけるようにと伝え、男は臯月をどかせるや、サイドブレーキを解除し、エンジンをかけた。

サイドブレーキが掛かっている状態なので車は勝手に坂道を下っていく。そしてゆっくりと平地まで下ると、仕組んでいた氷が溶けるや、急に車は猛スピードで走り始めた。

目の前にはガードレールがあり、それを突き破る。そして崖に立ってたジャンプ台に差し掛かり、車は飛び出し横転するや、炎上した。

車全体が燃えたあと、消火活動が行われ、人形は丸焼けとなり、おり、縄は発見されなかった。

「あ、歩夢が殺された方法はわかった。だけど、犯人は一体誰なんだ？」

健祐がそう訊ねると

「確かお前さんたち、夜中逢引をしておったそうじゃな？」

野中虚空にそう訊かれ、健祐と涼子は躊躇いながらも答えるように頷いた。

「その時なあ…… わしあんたらが茂みに入るのを見ておつてな、穢ちゃんからガソリンの臭いがしたんじゃよ。あの臭いはなあ簡単には取れんからなあ」

野中虚空がそう云うや、涼子は健祐の腕にしがみついた。

「あ、あんた、涼子になんか恨みでもあるのか？」

「怨みなんぞない。人を殺した人間なんぞ人間と思っておらんからな。怨むというのは人に対しての言葉じゃろうが？」

ふと臯月は野中虚空を見やるや、背筋が凍りつく感覚に陥った。

何ら変わらない目を細めた優しそうな顔なのだが、それは目だけで口元は大きく歪んでいた。

そしてなによりも先ほどの言動である。

「臯月ちゃん、どうかしたのかい？」

「あ、いや何も……」

大宮巡査の問い掛けに、臯月は曖昧に返事をした。

「や、やめてっ！ 離して！」

野中虚空の連れの男二人が、涼子を連れて行くこうとする。

「おい、やめろ！ まだ涼子が犯人だって決まったわけじゃねえだ

る？」

健祐が必死になって涼子を助けようとするが、体格の差もあつてか、それは無駄な事であつた。

「証拠なんぞ後で見つかるじゃろうよ。今はこの塵芥虫どもを嚴重チミムシに閉じ込める事が先決じゃろう」

野中虚空はそう言いながら、臯月と大宮巡査を見やった。

「それじゃあなあ、お穰ちゃん。今度は矢わんようにな」

そう云うや、野中虚空は車に乗り込んだ。その後には停まっていた車に涼子は無理矢理入れられ、健祐は共犯という形で、やはり同様に無理矢理連れて行かれた。

「臯月ちゃん？」

大宮巡査がそう臯月に声をかけた。

しかし、臯月はまるで幼子のように大宮巡査の腕を力強くギュッと握り締め、怯えるように体を震わせていた。

拾壹・逆鱗

事件解決から三日後の事であった。

身柄を拘束された政所涼子は曾根崎歩夢殺害の犯行を認めたと、三姉妹は大宮巡査から聞かされた。

元々は健祐と歩夢は付き合っており、涼子と本来くるはずであった翔太は、このキャンプに参加していたが、歩夢の度重なる我儘に嫌気が差し、とうとう堪忍袋の緒が切れたという。

涼子は歩夢に協力して欲しいと車の中で会話をし、睡眠薬の入ったジュースを飲ませた。

歩夢は眠りこけてしまい、涼子は犯行のために、皐月が説明したトリックを実行したと証言したと大宮巡査は説明した。

そんな事があったとは何も知らず、また証拠不十分となっていた健祐は、昨日釈放されたが、涼子に至っては死刑確定ではないかという事も説明した。

その日の夕暮れ、弥生に買い物を頼まれた皐月は、駅前の一パーで買い物済ませ、帰ろうとしていた。

「皐月ちゃん！」という大きな声が聞こえ、皐月はそちらに振り返った。

「大宮巡査？」と皐月は首を傾げる。

話を聞くと、大宮巡査は最近はじめたランニングの途中だと言う。理由は体力づくりだと大宮巡査は皐月に説明した。

「買い物かい？」

「はい。お肉とおしょうゆを。いいジャガイモが百姓の人からもらえたから、今日は肉じゃがだつて」

「へえ　　っ、僕もご馳走になつてもいいかな？」

大宮巡査がそう訊ねると、皐月は少しばかり笑みを浮かべ、

「多いにこしたことはないですし、日頃お世話になつてますから。大丈夫だと思えますよ」

「それじゃお邪魔しようかな」

大宮巡査はそう云うや、ジッと皐月を見つめた。

「どうかしたんですか？」

「いや、君が現場に来たとき吃驚したんだ。今回の事件、僕の力だけでやらなければいけないと思つていたから」

大宮巡査の言葉を聞くや、皐月は少しばかり視線を空へと向けた。

「瑠璃さんに怒られたんです。執行人である以上、自分のしたことも目を背けてはいけない。私が弥生姉さんや葉月を巻き込んでしまったことを」

皐月はそう云うや、少し躊躇いながら、ゆっくりと大宮巡査を抱きしめた。

「あの時、大宮巡査に抱かれたとき、凄く懐かしかったんです。まるでお父さんに抱かれてるような気がして」

皐月は悪い夢や恐い事があると、すぐに父親に抱きついてしまうほどの恐がりであった。

『寄らば大樹の陰』という言葉と同じで、そうすることで気が落ち着き、安心出来るからである。

しかし、今皐月が抱きしめているのは父親ではなく、大宮巡査であることだけは皐月自身わかつていた。

そんな皐月の行動に、大宮巡査は戸惑いを隠せないでいた。いや、

彼も臯月を同様に失った妹である彩奈に面影を重ねて抱きしめたのだから……

「臯月ちゃ……っ？」

大宮巡査が声を止めた。不思議に思い、臯月は大宮巡査の顔を見やった。

大宮巡査は目がカツと大きく開いており、口はワナワナと震えている。

「お、大宮巡査？」

臯月は声をかけるが、大宮巡査は視線を臯月ではなく、自分のうしろに向けた。

「はぁ…… はぁ…… はぁ……」と荒い息が聞こえてきた。

「お、お前は…… 朽田…… 健すうけえ……」

大宮巡査は震えた声で言った。

「ど、どうして？」

「あんた達が悪いんだ。せつかくせつかく殺して、あいつの持つてる金品を全部俺と涼子のものにしようと思ったのによお」

健祐は目を大きく開き、大宮巡査の背中に刺したナイフを引き抜いた。

血飛沫が飛び散り、健祐の顔は真っ赤に染まる。

「あんたらが悪いんだ。あんたらがあそこにいなけりゃ……」

「そんなの運が悪かったで済むんじゃないの？」

臯月がそう云うや、健祐は手に持ったナイフを高々と振り上げた。

「あいつがいないんじゃ、俺はこの世にいても意味ねえんだよ」

健祐は振り上げたナイフを臯月目掛けて切りつけようとした。

臯月は避けようとしたが、それが出来なかった。

切り付けられようとした皐月の目の前で、大きな背中が現れていた。

「くあああああああああああつ」

その声を聞くや、健祐はナイフを捨て、路地裏へと逃げていった。

「大宮巡查？ 大宮巡查あ？」

皐月が大声でそう呼びかける。

「だ、大丈夫かい？ 皐月ちゃん」

大宮巡查の体は痙攣しているにも拘らず、自分よりも皐月のことを心配していた。

「私は切られても、何日が経てば治るの知ってるんじゃないんですか？」

「ああ。だけど…… わかっていても守ってやらないといけないだろ？」

「そんな、そんな勝手な理由で！」

大宮巡查は皐月の頬を撫で、あふれ出している大粒の涙を指で拭いた。

「僕は妹を守れなかったんだ。助けられたはずなのに僕は……」

大宮巡查はそう云うや、ガクンと体を落とした。

皐月は自分の中にあつた忌々しい過去を思い出していた。

それは奇しくも六年前、転落した車の中で皐月が父親にされた時と全く同じものであったからだ。

「 大宮巡查？」

皐月は目の前で起きた事が理解できなかった。いや理解しようとしていた。

皐月の目の前には、大切な人の、真っ赤に染まった体が横たわっ

ていた。

「いやあああああああああああああああああああ
！！」

皇月は悲鳴を挙げ、大宮巡査の体にしがみつく。

「いやあつ！ 大宮巡査！ やだあ！ 死なないで！ 死なないで
え！」

皇月は半狂乱となっている。

皇月が顔を上げると、先ほどまで健祐が使っていたナイフが地面に捨てられていたのが視界に入った。

皇月本人の記憶はそこで途絶えた。

手を真っ赤に染めた健祐は逃げるように路地裏を走っていた。今はただ家に着くまで誰一人出くわしたくないからである。

「はあ…… はあ…… んっ？」

目の前に誰かが立っており、健祐はとっさに近くにあった電柱に隠れた。

息を殺し、気配が健祐に近付いているのを肌で感じる。

気配はスーッと消え、健祐はそれを確認し、一度深呼吸をして、その場から離れようとした時だった。

健祐は背後から誰かに押され、転倒する。

「な、なにしゃがるっ？」

健祐が怒鳴るが、それは有無を言わずに健祐の体を蹴り飛ばした。

「な、なんだよ？　なんだってんだよ？」

健祐は這い蹲りながら、ソレから逃げようとした。しかし、逃げれるわけがないのだ。人間とソレとは格が違いすぎるのだから。

健祐を決して殺そうとはしない。ソレは痛めつけるために態と殺そうとしていなかった。

身勝手な理由で目の前で大切な人を傷つけられて　　泉月が黙っているわけがなかった。

同じ事が以前あった。それは葉月が犯人に襲われようとしていたときである。

しかしこの時、泉月の瞳は殆どないといえた。曇っていたのだ。まるで濁ったコンタクトレンズを入れたかのよう
うに

「た、助けてくれ・・・　助けてくれえっ！！」

健祐の悲鳴とともに、グチャリという鈍い音が闇夜に小さく響き渡った。

泉月の帰りが余りにも遅く、心配になった弥生が遊火に様子を見に行くようにと命令し、遊火は神社からスーパーへの道のりを空から追っていた。

「あら、遊火じゃない？」

「エンちゃん？　どうかしたの？」

目の前に現れた煙々羅を遊火は親しく話をする。

「瑠璃様から大宮巡査は何をしているのかって、気配が消えたって

「いってたし」

「私は皐月さまの帰りが遅いから、弥生さまにお願いされて
遊火がそう言った時だった。」

ゾワツという、背筋が凍りつくほどの禍々しい気配を感じ、遊火
と煙々羅は気配がしたほうを見やった。

「い、今のって……妖怪？ ううん違う、この感じ瑠璃さまや浅
葱さまに近いものがあつた」

瑠璃は閻魔王であり、橋姫である浅葱は、『浅葱橋』に建てられ
た祠に祭られた神である。

「でも、こんなにいやな感じはしないはずだよ？」

遊火がそう言うや、煙々羅は急いで気配のしたほうへと流れてい
った。遊火もその後を追った。

煙々羅と遊火は気配がした場所へとやってくると、二人とも目を
背ける仕草を見せた。

直視できないのだ。

朽田健祐の骸はボロボロになっており、顔の骨はグチャグチャに
腫れており、腕と足はまるで別の生き物といわんばかりにありえな
い方向に曲げられている。

「あ、あああ……」

かすかに声が聞こえ、煙々羅と遊火は互いを見やった。
この状態で生きているとは思えなかったのだ。

「どうしてこいつがこんな目に？」

煙々羅が少しばかり考えるや、

「遊火っ！ 急いで拓蔵さんたちに知らせて！ 私は皐月さんを捜

してみる」

そう云うや、煙々羅はスーツと姿を消した。

煙々羅は皐月が遊火を見ることが出来ない事を知っており、遊火を向かわせても意味がないと判断しての事だった。

遊火は困惑しながらも、拓蔵を現場へと呼び、その数分後には警察が現場へと駆けつけていた。

警察が健祐のところに着く少し前の事である。

「あ、いた。皐月さ……」

煙々羅が皐月を見つけ、近付くや、その異様な空気に唾然としていた。

そこには血塗れになって倒れている大宮巡查と、それを膝枕している皐月の姿があった。

「お、大宮巡查？ どうして？ 一体誰が？」

煙々羅が血塗れになった大宮巡查に近付こうとすると、

「やあ…… こないでえ…… こないでえ……」

大宮巡查を抱きしめていた皐月が讒言を言う。その光景は幼い少女がくるものを拒んでいるようなものであった。

皐月の左手はグチャグチャに潰れており、そこからも血が流れていた。

「さ、皐月さん。私ですっ！ 煙々羅ですっ！」

そう声をかけると、皐月の瞳は徐々に光を取り戻していた。

「一体何があったんですか？」と訊ねるが、皐月はいま自分が置かれている状況がわかっていなかった。

そう…… 朽田健祐を襲っていたときの記憶などもっていなかった

た。

これは彼女自身が都合よく記憶をなくしているのではない。

もうひとつの

皐月の体に宿っている神の仕業なのだか

ら……

拾壹・逆鱗（後書き）

第十一話終了です。そしていい具合に最終回へと続きます。

巻・呪

夏特有というべきか、午前六時になる頃には、全国津々浦々、殆どの場所で雲に隠れていても、朝日が昇っているものである。

そんな中、朝のニュースで流れる天気予報を聞くたび、誰もが一度はその報道にぐったりとするはずである。

『今日のお昼頃から、気温は三十五度以上になると……』という天気予報士の言葉がテレビやラジオから流れるか、もしくは街頭の電子広告などで流れるように表示されるかのどちらかであろう。

兎にも角にも、こういう時期は最高気温を聞いただけで、気持ち億劫になる。

さらに云えば、湿気などで蒸し暑くなると余計にだ。

太陽が真上に昇り、いよいよ最高気温になろうとしていた昼頃、ある事件が起きた。

消防署に連絡が入り、消防車がやって来た現場は密集した住宅街である。

幸い発見が早く、小火程度で事は済んだが、その火災が奇怪なものであった。

それは家の周りに二米メートルほどの高さがある塀があり、猫がその上を歩かないようにと、鉄骨が食み出ている。

さらに云えば、その家はセキュリティー会社と契約しており、不審者が入れば、自動的に通報されるという仕組みである。

にも関わらず、通報は煙を発見した一般人が、一一九に連絡しての事であった。センサーが作動していなかったのか、煙を感知しなかったのである。

「これ、どう思います?」

西戸崎刑事と一緒に来ていた佐々木刑事に訊ねる。

「うーん。小火が起きたと思われる時間、家には人間が一人もおらんかったんじやる?」

佐々木刑事が確認するように鑑識員に訊く。

「はい。主人であるAは会社出勤。妻はお昼前からパートに出かけており、娘と息子はそれぞれ学校に出かけているので、小火が起きた時間、誰もいなかった事になります」

ガス栓の閉め忘れは?と西戸崎刑事が尋ねると、「確認しましたがしつかりと閉められていました」と、鑑識は説明した。

「小火が起きたのはリビングか。タバコの消し忘れによるものじゃないのか?」

リビングの設けられているテーブルの上が焦げており、そこから煙が出たものと考えられている。

「いえ、そのようなものはひとつもありませんでした。どうやら主人が禁煙をしているようです」

「つまりそれに関して火事の原因にはなっておらんのか……」

西戸崎刑事、佐々木刑事の二人は小火があつたりリビングを眺めていた。

すると西戸崎刑事が窓際にある金魚鉢に目をやった。金魚鉢の中を和金や出目金が二、三匹泳いでいる。しかし、特に気にも留めず、他の場所を見渡していた。

「うーん、子供の悪戯ってわけでもなさそうじゃなあ」

佐々木刑事はもう一度リビングを見渡したが、全くといっていいほど証拠になるものは「ひとつも見つからなかった」。

それから一時間後の事である。

別の場所でも同様に小火騒ぎがあり、またしても家には誰もいな

いときに起きていた。

今度は家の周りに井戸端会議をしていた奥様方が何人もいる状況のことだ。

しかし家に不審な人物が入った様子はなかったと、その時近くにいた主婦が警察に話しをしている。

小火が起きた場所は一件目と同様にリビングだった。その家の主人が風水を趣味にしており、窓際に水晶玉を置いていたとの証言もあった。

さらにその十分後、今度は小火ではなく、部屋ひとつを焼くほどの火事が起きた。

火災が起きた場所は厨房で、今度は窓際に水の入ったペットボトルが置かれており、火災原因は残った油に引火したものと判明されたが、引火原因は未だに判明されていなかった。

「阿弥陀警部、お疲れさまです」

刑事捜査一課にあるソファに座っていた岡崎巡査が、部署に入ってきた阿弥陀警部を見つけ挨拶をする。

「あ、岡崎くん。首尾はどうですか？」

阿弥陀警部も西戸崎刑事や佐々木刑事と同様に、今日起きた連続火災事件に回されていた。

「誰もいないのに火事が起きるなんて不思議ですね」

「まったくですよ。連続して三件も…… 冬じゃないんだから」

何か自動的に着火する仕組みでもあるんじゃないかと考えていたが、その様なものも見付からなかった。

「こりゃ、あの人たちに訊いたほうがいいんでしょうけど」

阿弥陀警部は少しばかり考えるや頭を振り、逃げるように鑑識課

へと向かった。

「っと、あれ？」

鑑識課の部署に入った阿弥陀警部は首を傾げた。

鑑識課は小火騒ぎどころか、他の事件でも出払っているため、科学研究などによる原因追求している班以外は殆ど部屋にいない。

阿弥陀警部は一連の火災事件のことを湖西主任に訊ねようと思いついてきたのだが、その本人がいなかった。

阿弥陀警部は湖西主任が戻ってくるのを願いながら、少しばかり待つことにした。

すると携帯が鳴り、阿弥陀警部は電話に出た。

「はい。阿弥陀ですが…… えっ？ 今度は全焼ですか？」

阿弥陀警部はふと、どうしてそのような報告を刑事課の自分が受けているのだろうか？と考える。

『それと…… 現場から男性の焼死体が発見されました』

それを聞くや、阿弥陀警部は慌てて現場へと車を走らせた。

阿弥陀警部が現場に駆け付けた頃には既に遺体が運び込まれていた後で、火は消沈し、残ったのは木片のみであった。

火事があった家は、コンクリートで建てられた家が殆どの閑静な住宅街には珍しい木造一戸建てで、その後あった連絡には、その家の主である『なかのあきひ阪野章』であるとわかった。

火災原因は遺体の近くにあり、発見された場所が寝室のベッドの上である事から、被害者は寝タバコをしていたのではないかという推測が出た。

が、阪野章は肺ガンの疑いがあり、医師からタバコを止めるようにと云われていたため、ここ最近、被害者がタバコを買ったと

いづ目撃証言は得られなかった。

それらの事から、火事は何故起きたのかという疑問視が出てくる。第一、焦げは『熱せられなければ、点く事はない』。

最初に発見された小火の原因となった、リビングのテーブルにあった焦げ。

二件目も最初と同様に、リビングに焦げが出来ていた。

三件目は全焼とはいかなかったが、厨房に置かれていた残り油に引火しての火事である。

これらに共通して、引火させる原因が見つからなかった。

翌日。阪野章に対する近辺の聞き込みが開始された。

警察は火事を寝タバコによるものと、何者かによる証拠隠滅のため起こしたものというふたつの考えがあった。

湖西主任ら鑑識課による検死結果によれば、死因は全身火傷によるものであったが、ひとつ奇怪なものがあった。

それは脹脛に焦げのようなものが発見されたのだが、それをつけるようなものは発見されなかった。

阿弥陀警部はその晩、稲妻神社へとやってきていた。例によって、葉月に霊視してもらおうと思つてのことである。

母屋の方に回ると、灯りが点いており、家に人がいることがわかる。

阿弥陀警部はチャイムを鳴らすと、一、二分ほどして応答があった。

『どちらさまでしようか？』

対応したのは弥生であつたが、声のトーンが低い。

「あ、阿弥陀です。いつもお世話になってます」

阿弥陀警部がそう返事をする、少しばかり間が空いた。

『今日はどのような案件で？』

弥生の声に阿弥陀警部は少しばかり違和感を感じた。

「実は先日、火事が四件ほど起きましてね。その中の一件に焼死体が発見されたんですよ。火事が起きた原因もわからないので、出来れば葉月さんの」

『そのようなことでしたら、お帰りください』

そう云うや、弥生は乱暴にインターホンを切った。

その様子に、呆気にとられていた阿弥陀警部だったが、ただで帰るほど素直ではない。

何度もインターホンを鳴らし、誰かが対応に出るが、阿弥陀警部の声を聞くや直ぐに切られる。

そのようなことが二十分ほど繰り返された。

「こつちだつてねえ？ わかんない事があつたら訊かないと、先に進め……」

阿弥陀警部が怒鳴ろうと、門の扉を開けようとしたときだった。

家の引き戸が開き、中から誰かが出てきた。

暗闇だったため、阿弥陀警部は少しばかり目を細くし、出てきたのが誰なのかを確認した。

するとギラツと何かが月光に当たり、暗闇に白く光った。

阿弥陀警部はそれが何なのかを知るために、身を乗り出すや、自分の顔の真下から、ピンという矢が当たったような音が聞こえ、それを見るや、背筋が凍るのを感じた。

戸に矢が撃たれており、阿弥陀警部は辛うじて助かったが、もう一度弓を引く音が聞こえ、阿弥陀警部は咄嗟に「わ、わかりました。今日は虫の居所が悪いようですし、失礼します」といい、その場を立ち去った。

そして翌日。阿弥陀警部は再び稲妻神社へとやってきた。今度は夕刻である。

が、またしても門前払いを食らってしまい、途方にくれていた。

吉・呪（後書き）

第一期最終回です。というよりは消化試合といった感じでしょうか。いつも通り、のんびりとお楽しみ下さい。

式・鬼胎（前書き）

鬼胎きたい：心中ひそかに抱くおそれ。

式・鬼胎

『今日の夕方、警視庁所属の刑事が、何者かによって襲撃に遭いました。犯人は朽田健祐（25）。犯人は逃亡中、何者かに襲われ、現場に駆け付けた警察によりますと、朽田健祐は瀕死の状態でしたが、辛うじて息をしていたとの事です。』

時計の針が夜十一時を回り、テレビに映っているニュースでは、淡々と記事を読んでいくキャスターが映っている。

それを弥生と葉月は睨むように見詰めていた。

『襲われた刑事は重傷を負っており、ただいま警察病院で治療中。

回復次第詳しいことを訊……』

葉月はキャスターの言葉を聞き終える前にテレビの電源を切った。

「大丈夫だよな？ 大宮巡査……」

葉月は今にも泣き出しそうな表情で弥生と拓蔵に訊ねる。

「湖西主任の話だと、大宮巡査が重症を負っているとは云っておつたが、問題は何故襲った朽田健祐が『生きていた』かということじやな」

拓蔵は朽田健祐を襲ったのが暴走した臯月であることに気がついてた。

「臯月さんが宿している摩訶迦羅が、何かしらの理由で呪詛もなしに現れたということでしょうか？」

煙々羅が聞き返すように言う。

煙々羅は大宮巡査が発見される前に臯月を神社に帰していた。

それは彼女が犯人ではないかという疑いから逃がすためであると同時に、グチャグチャになった左手の治療をするため、神霊の力が強い本堂へと早く連れていきたかったためである。

「臯月おねえちゃん、大丈夫なの？」

「何とか骨の形状、細胞組織の再構成を終え、今は修復した体に馴染みはじめたといったところですが」

葉月の問い掛けに、煙々羅は少しばかり俯いた。

「ただ、今回臯月さんは自分の意思で摩訶迦羅マハカーラの力を得ていないので、今後力を使おうとすれば、拒絶反応があるかもしれないんです」
その言葉に弥生と葉月は首を傾げた。

「その力が失っている危険性があるかもしれんということか？」

「今はご自身の部屋で安静されていますが、神霊の力はただ使うものの力が強ければいいというわけではありません。『心技体』という言葉があるように、今の臯月さんは大宮巡査が目の前で襲われ、自分のせいで重症を負ってしまったという恐怖心がありますから」
煙々羅はそう云うや、臯月の部屋がある方へと見やった。

「弥生。臯月が全快するまでは警察からの依頼を断ってくれんか？」

「わかってる。臯月はそうだけど、葉月も気持ち揺らめいていて、とても霊視が出来る状態じゃないしね」

弥生はそつと葉月をつしろから抱きしめた。

「大丈夫よ。大宮巡査はあの時、他の刑事たちが逃げていく中、ひとりだけ残っていたんだから。ああいうのは神様に護られているか、ただの馬鹿かの両極端しかないんだから」

葉月は直接見ていないのでわからないが、舞頸まいくびと臯月が川で対峙していたときの事を弥生は話した。それに付け加えるように「本当だったら掠り傷で済むはずがない」とも云った。

そんな会話を知ってか知らずか、臯月は自分の部屋の隅で布団に丸まり、膝を抱えて震えていた。

その姿はもはや見れるものではなく、近くで見張っていた遊火は、

自身も泣き出しそんな表情を浮かべていた。

「それじゃ、行ってくるね」

一両日経ち、皐月が家の玄関から学校へと出かけるのを弥生が呼び止める。

「皐月、怪我大丈夫なの？」

本当は怪我の事よりも精神を心配しての事であった。

「大丈夫よ。あれくらいの怪我、半日で治るから。それにあと少しで夏休みなんだから」

皐月は笑みを浮かべながら言うと、そのまま神社を後にした。

「遊火」

弥生にそう呼ばれ、遊火は姿を現した。

「あの子が元に戻るまで見守ってくれる？ 姉妹だからってわけじゃないけど、あなたも皐月が無理してるのわかるでしょ？」

そう云われ、遊火は頷き、無数の火の玉となって外へと出て行った。

皐月は力の弱い妖怪や幽霊を視野に入れることが出来ない。遊火なら偵察に出すには丁度いいと弥生は判断してのことであった。

その夕刻、何事もなく皐月は普段と変わらない様子で帰宅するや、誰もいない本堂で二天一流の稽古をし、夕食を終え、風呂に入り、自分の部屋で学校の宿題を終えていく。

が、寝る時だけは部屋の隅でガタガタと震えている。表情は虚ろで、唇は震え、讒言を呟いていた。

みんなの前では普段の自分を装おんぷっている臯月を見るに耐えない遊火は、大宮巡査が入院している警察病院へと消えた。

当然の事であるが夜中という事もあり、病室の電気はもちろん、窓も開いてはいなかった。

大宮巡査の病室が見える窓まできた遊火だったが、窓が開いていなければ中に入ることが出来なかった。

鬼火は霊とも云われており、それにより妖怪と幽霊の間に位置されていることが多い。

臯月の代わりに一目だけでも大宮巡査の容体を見たかった遊火は窓を睨みつけ、消えようとしたときだった。

「何をしてるんです？ 遊火」
病室の方から聞きなれた声が聞こえ、遊火はそちらに振り返った。何時の間にか病室の窓が開いており、遊火は恐る恐る病室を覗き込んだ。

「え、閻魔さま？」

月明かりに照らされた病室の中にはひとつのベッドしかなく、そこに大宮巡査が眠っている。

その傍らに丸椅子が置いてあり、瑠璃はそれに座っていた。

「臯月は……」と、瑠璃は臯月の様子を遊火に訊ねようとしたが、遊火の表情を見て、大丈夫ではない事を悟った。

「閻魔さまはどうしてここに？」

遊火は首を傾げながら、瑠璃に訊ねる。

「私は大宮巡査の監視をしているだけです」

「どういうことですか？」

遊火がそう云うや、瑠璃は掌を目の前に挙げた。すると何も無い空間が裂け、そこから大きな鏡が現れた。

「浄玻璃鏡？」と遊火は呟く。

「あなたも知つての通り、この鏡は死者が生前に行った全てのことを見る事が出来ます。それと同時に地蔵を通して見ることも出来る」
浄玻璃鏡の役目を知ってはいるが、それが何なのだろうかと遊火は思った。

「先ほど私は大宮巡査の監視をしているといいましたよね？ それは不意の事故だったとはいえ、彼が妹を殺した事に変わりはないんです」

その言葉に遊火は大宮巡査を見やった。

「彼は溺れ沈んでいく妹を見殺しにし、それを見ていないという妄語を吐いた罪により、閻獄第五条『大叫喚地獄・唐希望処』へ連行されることは決まっています」

瑠璃はその事を大宮巡査に話してはいないと言うが、彼が罪を償っていけば多少なりとも罪は軽くなるだろうと付け加えた。

「だから僕は妹が好きだったおまわりさんの道を選んだ」

その声を聞くと、瑠璃と遊火は大宮巡査を見やった。

「気がつきましたか？」と瑠璃は大宮巡査の意識を確認する。

「ええ。お陰さまで…… まあ、好い加減起きないと妹に怒られそうだったので」

「えっ？ っと……」

遊火は言葉の意味がわからず、釈然としない表情で首を傾げる。

「夢に出てきたんですよ。妹が…… いつも世話焼きでね。起こすとき、よく僕のおなかの上で跳ねながら起こしていましたから」

「いい兄妹ですね。だからこそ彩奈はあなたを怨まなかった。本当

に大好きだったのと、あなたは潜水が苦手で、だから自分を助ける事が出来なかったというのがわかっていてからでしょうね」と瑠璃は笑みを浮かべる。

地藏菩薩とも言われている閻魔王は、地獄裁判のないときは六道へと足を運び、救われない衆生や、親より先に死んだ幼い子供の魂を救っている。

賽の河原で獄卒たちに虐められている子供の霊を守るという、最も弱い立場の人々を最優先で救済する菩薩と言われている。

結局衆生は何かしらの罪を背負いながら、転生していくのを知っているからこそ、瑠璃はどんな形であれ、子供を見守る事が何よりも好きだった。

だからこそ、大宮巡査が見ていた夢の内容を聞き、自然と笑みが零れていたのだ。

「大宮巡査、怪我の具合は大丈夫ですか？」

「ええ。まだあちこち痛いですけど、もしかしてあの時、閻魔さまが護ってくれたんですか？」

大宮巡査は朽田健祐に襲われたとき、死ぬかも知れないと思っていた。

「いいえ、私は何も……ですが、人の想いを宿したのものには、不思議な力があるんですよ」

そう言いながら、瑠璃は視線を壁にかけられた上着へと向けた。

上着には財布が入っており、大宮巡査は体を起こし、それを出した。

「妹が助けてくれたんでしょうか？」

大宮巡査の問い掛けに、瑠璃はただ笑みを零すだけである。

大宮巡査の財布に一枚の写真が入っている。そこには楽しそうに笑っている兄妹の姿があった。

式・鬼胎（後書き）

HPとタイトルが違うのは、読み返して、当てはまらないと判断したからです。あと遊火が壁を通り抜けられないのはそういう力がないからです。ようするに風が壁の向こうにすり抜けられないのと同じ。

大宮巡査が目を覚ました翌朝、警視庁に意識を取り戻したという連絡が入った。

それを聞いた刑事課の刑事たちは安堵の表情を浮かべていく。

「一応命は取り留めたということか。まったく運がいいやつじゃない」

佐々木刑事は淡々と云うが、

「佐々木刑事、お茶が零れてますよ？」

岡崎巡査にそう言われ、佐々木刑事はハツとするや、自分のズボンを見た。

湯飲みの縁が唇に当たっておらず、ダラダラとお茶が下に零れて落ちている。

「これでは朽田健祐を襲った犯人が捕まれば、この一軒は万事解決じゃない？」

西戸崎刑事は阿弥陀警部を見ながら言うと、阿弥陀警部は少しばかり考え、

「すみません。ちょっと出かけてきます」

そう云うや、阿弥陀警部は刑事課の部署を出て行った。

阿弥陀警部が向かった先は、稲妻神社や、大宮巡査が入院している警察病院ではなく、全焼した阪野章宅であった。

瓦礫は撤去され、残っているのは無残な空気しかない。

その土地を見渡しながら、阿弥陀警部はどうして全焼したのかを考えていた。

他の三件と比べて、この被害だけが明白に大きいのだ。

もちろん最初の二件における小火騒ぎも、下手をすれば家を全焼

させるほどの危険性があり、油に火が点いての被害に関しても、部屋がひとつ燃えただけという、はつきり云って『運がよすぎる』と、いっていいほどの被害なのだ。

『誰かが意図的にやっていたか』と阿弥陀警部は考える。

家に誰もいない時間帯。そしてその周りに人がいたというのに、誰一人放火犯を目撃していない。

阿弥陀警部はこれがただの火の不始末によるものだとは考えていなかった。が、これが火の不始末ではなく、放火によるものだとすれば立派な事件となるが、放火や万引き、痴漢と云った『突発的犯行』は、犯人が現行犯である以外逮捕する事は出来ないとされている。

もちろん事前にそのような疑いがあり、後日本人に話を聞いたとしても、職務質問とされ、逮捕状がなければ、当然逮捕する事は出来ない。

『はたして阪野章は事故死によるものなのか』という疑問が、阿弥陀警部の脳裏に引っ掛かっていた。

「おや？」と阿弥陀警部は阪野章の家に背を向けた時だった。

目の前から一人の老人が阿弥陀警部の方へと歩み寄ってくる。

「まったく…… タバコの不始末つうんは、物騒なもんじゃなあ……
肺ガンになる危険性があるのに、未だに吸い続けておるからこ
うなるんじゃよ」

「失礼ですが、あの家にいた方のお知り合いですか？」

阿弥陀警部が老人にそう訊ねる。

「ああ。中毒者に止めると言って、素直に止める人間もいれば、馬鹿みたいにやり続ける人間もおるからなあ。隠れてやっていたなん

てのは日常茶飯事じゃろうよ」

老人はまるで事件の内容を知っているかのような口調である。

「一応皆さんに訊いたところ、ここ最近被害者がタバコを購入したという目撃証言はないんですけどねえ？」

「あんたも刑事なら、人間の言い分なんぞ信用してはならんぞ

阿弥陀如来？」

老人がそう云うや、阿弥陀警部は咄嗟に老人から問合いを広めた。

「何のことでしょうかね？」と阿弥陀警部は笑みを浮かべるが、その笑みはぎこちないものであった。

『阿弥陀如来…… 久し振りに自分の名前を聞きましたけど、あの人以外、その事は知らないはずじゃ』

阿弥陀警部はそう考えながら、老人を見やるや、ゾツと悪寒を感じた。

突然老人の顔が眼前に現れ、阿弥陀警部は咄嗟に身をかわした。

「ほうほう。こっちに長くいたせいで、体が鈍なまっておるかと思うたが」

老人が指を弾いた瞬間、阿弥陀警部は跪いてしまう。

「くうっ？」

阿弥陀警部は体勢を整えようとするが、立ち上がることが出来なかった。

それは彼の左足が『存在していなかった』ためである。阿弥陀警部は傍にあった壁に、寄りかかるように立ち上がった。

「それで…… この前、朽田健祐を襲った犯人を、警察が捜しているというのを小耳に挟んでなあ、あんた知らんか？」

「こちらもその犯人を探しているところなんですよ。あなたも何か知っていたら……」

阿弥陀警部が訊ねるや、老人は再び指を弾いた。

「阿弥陀警部の両足が『存在しなくなり』、ゆっくりと倒れるどころか、無理矢理体を地面に叩きつけられるように倒される。」

「あがぁっ!」

「好い加減、呆けるのは止めにせんか? 阿弥陀如来……」

「ご丁寧にどうも。あなたみたいなのが『こちらにいる』こと自体が可笑しいんじゃないんですか?」

阿弥陀警部がそう言うと、老人は三度指を弾く。

「げえほおっ!」

突然阿弥陀警部は吐血し、目を虚ろにさせる。

「がはぁっ! げえっ! ごほおっ!」

「人間の姿に権化するには、それ同様の組織細胞と、それを維持するほどの力が必要』じゃろうが? 権化になっっている状態では塵芥同然の存在じゃからな。五臓六腑のうちひとつでも意識から亡くしてしまっただけでその有様とはなぁ」

老人は笑みを浮かべながら説明する。その表情は禍々々まがまがしく、見るものを不安にさせるものであった。

「さて、わしの質問に答えてくれんかなぁ。朽田健祐を襲った犯人は誰なんじゃ?」

「…… さつきも云ったとおり、私たち警察も犯人の行方を」

「知っているから訊いておるんじゃろうが? ガタガタ理屈吐いておると、身を滅ぼすぞ?」

老人が再び指を弾こうとした時だった。何者かが近付く気配を感じ、老人は舌打ちをする。

「今日はこの辺にしておこうかの…… 何を理由にしておるかは知らんが、『わしの片割れがやったことを見てみぬふりをし続ける』のは好くないと思うがなぁ?」

そう云うや、老人はスーと姿を消した。

「はあ…… はあ……」と阿弥陀警部は荒い息を整え、ゆっくりと深呼吸する。

『足は…… よかった。忘れてはいないようですね』
阿弥陀警部は自分の両足を見て、ホッと息を吐く。

「阿弥陀警部？」

少女が阿弥陀警部に駆け寄り、容体を確認する。

「おや、自分の役割はきちんとした方がいいんじゃないですかね？
まだ大宮くんは安静にしていなければいけないんでしょう？」
阿弥陀警部はそう言いながら、地面に座りなおし、壁に凭れかか
った。

「一体何があつたんですか？」

「虚空蔵菩薩が…… あなたの片割れがやってきて、訊ねたんです
よ。朽田健祐を襲った犯人は誰なのかってね」

それを聞くと、少女 瑠璃は表情を強張らせた。

「虚空蔵菩薩が？ どうして今頃になって」

瑠璃はガタガタと肩を震わせる。

「先日のキャンプで、あの人と会っているとは思ってもしませんで
したが、もしかしたら大宮くんが襲われた本当の理由は……」

阿弥陀警部はそう言いながら、瑠璃を見やった。

「あの子達の精神を壊すため？」
瑠璃がそう訊ねるや、阿弥陀警部は少しばかり考え、小さく頷い
た。

「私はあなたが選んだことをとやかく言いませんし、死んでいない
弥生さんたちが賽の河原にいたのを助けたのは、『家族ならば助け
るのが道理』でしょうからね」

「わたしは 彼を愛していることだけは偽りを持っていませんが、そのせいであの子達を」

「あなたが六年前に起きた転落事故について全く調べられないのはやはり」

阿弥陀警部が訊ねるが、瑠璃は返答に困っていた。

「それはわかりませんが、おそらくそう考えてもいいでしょう」

瑠璃は手を握り締める。強く握り締めていたせいか、手の内から血が零れ落ちていく。

「どうして…… 罰を受けなければいけないのは私だけのはずですか？ だからこそ、私は自分が人間に権化していた時の記憶を拓蔵だけにしか残さなかった！」

瑠璃の目からは大粒の涙が溢れ出している。

「虚空蔵菩薩はその事を赦さなかったんじゃないんでしょうかね？」

阿弥陀警部にそう云われ、瑠璃は表情を歪ませた。

「それで、どうします？ 大宮くんが意識を取り戻したというのを報せに行こうと思っていたんですけどね」

「それは遊火にお願ひしてます。ただ、それを聞いた臯月がどう反応するかわかりませんが、嫌な予感しかしませんね」

その言葉に阿弥陀警部は表情を曇らせた。

瑠璃の心配は奇しくも的中する形となってしまった。

肆・視界

「それ、ほんと？」

寝巻きから制服に着替えていた弥生が驚いた表情を浮かべながら、遊火に聞き返す。

「それって、まだ葉月と皐月には云ってないんでしょ？」

「はい。閻魔さまから、弥生さまと拓蔵さまにだけ先に言うようにと云われましたから」

遊火はそう云うや、顔を俯かせる。

「本当だったら、皐月に云わなきゃいけないけど、あの子のことだから、無理して警察病院に行くでしょうね」

警察病院とはいえ、一般に開放されている病棟である。通院する事が出来、もちろん見舞いに行く事も出来る。しかし重要事件において、遺族が面接拒否をしている可能性だってあるのだ。

「皐月は朽田健祐を襲った事による重要参考人という形で目をつけられているでしょうしね」

「それを知っているのは 阿弥陀警部？」

遊火の問い掛けに「そうかもしれない」と弥生は云う。

「ただその事を知っているのは警察関係だと湖西主任もだろうけど」

「信用出来るんですかね？」と遊火が云うや、

「大丈夫じゃよ。湖西主任は口が堅いしな。閻魔さまのことも知っておるし」

拓蔵が部屋に入り、弥生と遊火に言う。

「爺様。まだ着替え中なんだけど？」

弥生はそう云うが、既に制服のリボンを結び終え、殆ど出かけられる状態であった。

「閻魔さまを知ってるって、どういう？」

「まあ、湖西主任とは数十年の付き合いじゃからな。昔の事も知っておるんじゃないよ」

拓蔵はそう言いながら、遊火を見やった。

「遊火は　知らんようじゃがな」

その言葉に遊火は首を傾げた。

「さてと、早く朝食の用意しないと……　　臯月はもう起きてるのよね？」

弥生は窓から本堂の方を見るや、威勢のいい臯月の声が聞こえてきた。

「もう大丈夫なんでしょうか？」と遊火は訊ねると、

「そう思っなら、後で臯月が切り落とした藁を確認してみることじやな」

拓蔵はそう云うや、部屋を出て行く。それを見届けると、弥生と遊火は互いを見やった。

臯月が本堂からいなくなったのを見計らって、遊火は拓蔵に云われたとおり、切り落とされた藁を見やった。

床に散らばった藁は綺麗に切れているどころか、切れていなかったり、藁が折れ曲がっていたりと、まるで力任せに切って千切れたとしか考えられないものが殆どであった。

臯月の刀は摩訶迦羅マハーカラの力によって作られたもので、それは彼女の精神を写したものとなっている。

精神が揺らぐことなく確りとしているものであれば、その刀は名刀と言えるほどの代物である。逆に精神が不安定であればあるほど、鈍なまくひ以下の代物ではない。

皇月が日課にしているこの稽古を終えた後、拓蔵は確認するように藁の切れ目を見ていたのだ。

不安定だからこそ、皇月に大宮巡査が目を覚ましたということが話せないのだ。

遊火がいなくなり、本堂には藁を掃除している拓蔵の姿があった。「やはり、今日も安定していませんでしたか？」

瑠璃は藁を一掴みし、掌に広げる。

「彼女に力を与えたのはいけなかつたんでしょうか？」

「今更後悔しても始まらんじやる、瑠璃さんや。それに皇月は決して逃げはせんじやるうよ」

拓蔵の言葉を聞き、瑠璃は少しばかり表情を曇らせる。

「わしが田舎の交番から、警視庁へ異動になつた時、そこで初めてあんたに逢つた。わしの一目惚れじゃつたからな。あんたを好きになつた事は一度たりとも後悔しておらんがな？」

「私だつて、あなたを好きになつた事……愛している事に偽りはありませんし、後悔はしていません。ですが、そのことで娘やあの子達を不幸にさせてしまった」

瑠璃はボロボロと涙を零す。

「わたしは十王が一人、閻魔王であり、地藏菩薩でありながら、ただ一人の人間を愛してしまつた」

拓蔵は瑠璃をつしろから抱きしめる。その光景は老人が少女を抱きしめているというものであつた。

「だからこそ、わしは遼子と弥生たちには、婆さんは『遼子を産んで直ぐ亡くなつた』と偽つておる」

瑠璃は拓蔵の腕をゆっくりと外そうとする。拓蔵は拒否せず、腕の力を緩めた。

「孫を見守るのは祖母として当たり前ですね。そして娘とその夫を心配する事も」

「すまん、大変な目に合わせてしもうて」

拓蔵が顎を摩りながら話すのを見るや、瑠璃は笑みを零した。

「本当に変わりませんね」

「人の癖はそう簡単には治らんもんじゃよ」

拓蔵は瑠璃を見やる。

「拓蔵、少しばかり身を屈めてくれませんか？」

瑠璃にそう云われ、拓蔵は云われたとおり身を屈めると……

本堂には二十歳ほどの女性が拓蔵の首に腕をまわし、唇を重ね合わせる姿があった。

それは一瞬の事であったが、二人にとっては永いものであった。

「はあ…… やはり子供を愛する菩薩という立場でしょうか？」

権化でない以上、大人の姿になるのは力の使いようが極端に違う

大人から少女の姿に戻り、瑠璃は溜め息を吐く。

「それでどうでしたか？ おおよそ七年ぶりに味わう唇の味は」

拓蔵が悪戯っぽく訊ねる。

「それを聞いてどうするんですか？ 昔みたいに、これ以上のことは出来ませんよ？」

瑠璃は照れくさそうに聞き返した。

「わしのわがままじゃがな。これからもあの子達を見守ってやってくれんかな？」

「云われずとも、私は子供や力の弱いものたちを見守る神仏ですよ」
瑠璃はそう云うや、スーと姿を消した。

夕食の時、拓蔵が大事な話があると言い、三姉妹に箸を止めさせる。

「大事な話って何？」と葉月が訊ねるや、拓蔵は弥生を一瞥する。

拓蔵が何を云いたいのかわかり、弥生は少しばかり顔を俯かせ、「今日の未明。大宮巡査が目を覚ましたそうよ」

それを聞くや、葉月は表情を明るくする。

「それ、本当なの？」

葉月の反応とは対照的に、皐月の表情は暗いままである。

それもそうだろう。大宮巡査は二度も切られ、大量出血による瀕死であったことは、誰よりも皐月が一番わかっている。

発見が遅かった事もあり、危険な状態であったことも……

だからこそ、目を覚ました事が信じられないでいた。

「もう少し、嬉しい顔したら？」

「私のせいで……私を守ったせいで、大宮巡査は」

皐月が慟哭するや、拓蔵は皐月の頬を引っ叩いた。

皐月は吹き飛ばされるように壁に背中を打ち、ズルズルと凭れ落ちていく。

「ちよ、爺様？」

「弥生の言う通りじゃ。もう少し助かった事を素直に喜べんのか、お前はあつ？」

「爺様落ち着いて、人が助かって嬉しくない人なんていないでしょ？」

弥生と葉月が拓蔵を宥める。

「いいかつ！ 警官はなあ、本来市民を守るために作られた組織なんじゃよ。大宮くんは当然のことをしただけじゃろ？ それを自分

のせいだと自惚れおってっ！」

拓蔵がそう怒鳴りつけ、皐月を見やる。が、皐月は拓蔵から視線を逸らすように、顔を俯かせいる。

それを見るや、拓蔵は顔を歪め、

「葉月！ 今日には皐月を見張っておれ！ わしはもう寝る」と怒鳴り散らした。

「ちょ、ちよつと！ 爺様？」

弥生は呼び止めようとしたが、乱暴に開けられた障子が壁に当たる音に驚き、それ以上声をかけることが出来なかった。

「皐月おねえちゃん？」

葉月が心配そうに皐月に声をかける。

「爺様の言う通りよ。大宮巡査が皐月を守ろうとしたのは警官として当然の義務でしかないでしょ？」

「でも、あの時私が一緒にいなかったら」

「あんたが恐いの！ 力を暴走させ、無意識のうちに朽田健祐を襲った事でしょ？」

弥生が確認するように皐月に訊ねるや、皐月は完治した左手を見つめる。

「煙々羅から聞いたけど、あんたの左手は、まるでコンクリートに『自分から打ち付けたもの』だったって。襲われていた時、無抵抗だった朽田健祐に出来るものではなかったって…… それって、あんたは大宮巡査に逢う事が恐いんじゃないかって、また暴走するのが恐いからじゃないの？」

弥生がそう訊ねると、皐月は口をワナワナと震わせながら、

「違う…… そんな簡単な理由じゃない…… 大宮巡査が私を守るうとしたのは…… 私を守るうとしたんじゃない」

皐月の言葉に、弥生と葉月は互いを見やる。

大宮巡査は確かに拓蔵の云うとおり、警察官として臯月を守ろうとしただけである。

しかし、臯月からしてみれば、大宮巡査は自分ではなく、大宮巡査が重ねている彩奈妹を守っただけで自分ではないと思えてならない。それが彩奈に対する嫉妬心によるものは、当の本人は気付いていなかった。

その晩のことである。葉月は拓蔵に言われたとおり、臯月の部屋にいた。

「葉月…… ごめんね」

「ううん、いいよ」

葉月は自分の部屋から持ってきた布団を床に敷いていた。臯月の布団は殆どその上で寝ていなかったため、綺麗な状態で敷かれたままになっている。

「わたしね。旧校舎でおねえちゃんに助けてもらったときと、今回の事って一緒じゃないかなって思ってるの」

「花子さんが出てきたときの話？」

臯月が聞き返すと、葉月は小さく頷いたが、「にてないわよ」と臯月は言い返した。

「あの時だって、私が犯人に襲われていたのを助けてくれた。大宮巡査が襲われた時だって、お姉ちゃんは助けようとしたんだよね？」

「それとこれとは違うでしょ？」

「一緒だよ？ 遊火が云ったもん！ 朽田健祐が襲われたとき、瑠璃さんや浅葱さんと同じ感じがしたって。それ……わたしも学校で感じたことがあった」

葉月はそう云うや、臯月を真っ直ぐ見つめる。

「遊火、凄く心配してるんだよ。ずっと臯月おねえちゃんが辛い顔してるのが…… だって遊火、臯月おねえちゃんのこと大好きだも

の。妖怪である自分を受け入れてくれている私たちが好きなんだから」

そう言いながら、葉月は皐月の手を握る。

「知ってる？ 力の弱い妖怪や幽霊は、『見る』んじゃなくて『視る』ことにあるんだって」

「……何それ？」

皐月が小さく口にする。

「瑠璃さんから聞いたことがあるの。そこにいると信じれば、必ずそのものは姿を見せてくれる」

皐月は薄らとある事を思い出す。

「私、遊火の声聞いたことがあって、だけどそれからずっと聞こえなくて」

「遊火はずっとおねえちゃんと一緒にいる」

葉月はふと何かを思いつき、皐月の手を離すと、立ち上がり、窓を開けた。

日中の暑さとは比べ物にならないほど、冷たい風が部屋に吹き込んでくる。

「遊火、ちよつと来て……」

そう呼ばれ、無数の火の玉が部屋の中に入り、ひとつに集まるや、少女の姿へと変わっていく。しかし、それを確認出来たのは葉月だけである。

「遊火、大宮巡査が入院してる病院知ってるんだよね？ お姉ちゃんをそこに案内してあげられる？」

それを聞くや、皐月はもちろん、遊火も驚いた表情を浮かべた。

「そ、そんなことしたら、葉月が」

「爺様つて、悪い事したら押し入れに閉じ込めなかった？」

皐月はハツとし、窓の方を見る。

「行きたいんでしょ？ だったらさっさとしないよ」

「弥生姉さん？と……」

皐月は部屋に入ってきた弥生に声をかけようとしたが、弥生に何かを投げられ、それを受け取る。それは皐月の靴であった。

「ほら、行かないで後悔するのと、行って後悔する。あんただったらどっちを選ぶ？」

皐月は少し考えるや、靴をその場で履き、窓から外へ出ようとするが、部屋は二階であり、少しばかり躊躇う。

「大丈夫でしょ？ いつもそれ以上の高さから降りたりしてるんだから」

「遊火。皐月おねえちゃんをよろしくね」

遊火は葉月にそう云われ、コクリと頷いた。

「ごめん二人とも！ 今度絶対美味しいケーキがあるお店に行つて、好きなの奢つてあげるから！」

そう云うや、皐月は窓から飛び降りた。

コンクリートの地面に足を叩きつけ、ふらりとするが、いつもそれくらいの高さを飛び降りていたため、外傷は殆どなかった。

（結局、私は幽霊や力の弱い妖怪が「見えない」っていう、それだけの理由で遊火も見えないんだって諦めていたんだ。あの子がそこにいるっていう、ただそれだけを信じればいいだけなのに、それが出来なかった。私が力の弱い妖怪や幽霊が見えないんじゃない。私がそれを拒絶していただけなんだ）

『そこにいると信じれば、必ずそのものは姿を見せてくれる』

皐月はさきほど葉月が云っていた言葉を頭の中で繰り返した。

そして遊火の気配を感じ、そちらを見やった。

すると、ぼんやりと霧が見え、次第に人の形となっていく。

「遊火！ 大宮巡査が入院している警察病院まで案内して。全速力でね！」

皐月は遊火を見ながら、そう告げる。

「は、はいっ！」

遊火は声を張り上げ、皐月を病院へと案内した。

そんな二人を、弥生と葉月は窓から眺めていた。

「これでやっと全部終わったのかな？」

「さあね。元々私たちの記憶は、皐月の恐ろしがり原因で無くなっただんだし、その原因となった本人は自分のトラウマに勝てなかったから、こんな事になってしまった」

弥生は目の前にいる海雪に目をやった。

「二人ともごめんなさいね」

「別におばあさんが謝る事はないでしょ？ 犯人が自分の罪を認めるのは当然でしょうが？ こっちだって、ずっとそれに合わせていかなきゃいけなかったんだから、そっちの方が大変だったわ」

弥生と葉月は既に六年前、転落事故に遭っていた事を思い出していた。

「でも、やっぱりお父さんとお母さんのことは思い出せないや」

葉月が愚痴を零すように呟く。

「それは閻魔さまが探してるから大丈夫でしょ？」

海雪はそう云うや、姿を消した。

「さてと、どうせ明日はお休みだから、皐月は友達のところ泊まるって事にしようかしらね？」

「でもそんなことしたら……」

葉月は自分が怒られると思い、涙顔になる。

「大丈夫よ。その時は私も一緒に怒られてあげるから」

弥生は葉月の頭を撫で、皐月の部屋で一緒に寝ることにした。

翌日、弥生と葉月は拓蔵に怒られると思っていたが、何事もなく挨拶され、呆気にとられていた。

伍・導

「はあ…… はあ……」

皐月が普段の状態で全速力で走ったとしても、風と火の妖怪である遊火に追いつくことは出来ない。

しかし韋駄天の力を使うことで、同等か、それ以上の速さで行動することが出来る。

だが、その力は十二分に発揮されておらず、皐月は力が途切れたように息を荒くしながら、警察病院へと案内する遊火を追いかけた。

「大丈夫ですか？ 皐月さま」

遊火は疲れを見せている皐月を気遣って、スピードを弱めようとしたが、

「私に構わないで！ 全速力でお願いっ！！」

皐月は遊火にそう云う。逢いたいという気持ちが直に伝わると同時に、言っても効かないと感じた遊火は皐月に気を使うように、スピードを気付かれないうように緩めながら、警察病院へと案内した。

警察病院が見えてくるや、遊火は止まった。

「どうしたの？」

遊火は指で病院の門を指さした。

そこには警官二人が門の前に立っており、遊火が裏側の方を見に行くと、そちらの方も同様だと皐月に伝えた。

「気配は消せないんですか？」

「ちよつとやってみる」

皐月は深呼吸し、精神を統一させる。ゆっくりと気配を消してい
き、病院の前を素通りしようとする。

「ちよつと、君？ こんな時間に何をしてるんだい？」

門の前に立っていた警官に呼び止められ、皐月は驚いた表情で警
官を見やった。

「えつと…… 今から帰るところで」

「君、まだ中学生だろ？ こんな遅い時間に外で歩いてるなんて……」

警官が皐月に職務質問する。もう一人いた警官がトランシーバー
を手に持ち、連絡を取ろうとした時だった。

皐月たちの前に一台の車が停まり、そこから見知った老人が姿を
見せた。

「お勤めご苦労さん。ん、どうしたんじゃ？」

「佐々木のおじちゃん？」

皐月がそう云うや、佐々木刑事は皐月を見るや、驚きを隠せない
でいる。

「皐月ちゃん？ どうしてこんなところに……」

佐々木刑事は少しばかり考えると、皐月が病院に来た理由を悟る。

「この子は私の知り合いの孫でな。多分ジョギングしておって道に
迷ったんじゃろうよ。私が家まで案内するから、お前たちは引き続
き警備の方よろしくな」

佐々木刑事はそう云うや、皐月の背中を押しながら、車へと乗り
込ませる。

車は走り出し、病院から少し離れたところで一度停まった。

「あ、ありがとうございます。佐々木のおじちゃん」

皐月がそう礼を言くと、佐々木刑事は皐月をミラー越しに見る。

「それにしても久しぶりじゃな？ もう会わなくなつて何年も経つというのに、私のことを覚えていてくれたんじゃない」

皐月は記憶を取り戻したことで、拓蔵が家に連れてきたことのある警官の事を思い出していた。佐々木刑事もそのうちの一人である。

「それで、病院に来た理由は大宮巡査のことじゃろ？」

そう云われ、皐月は答えるように頷いた。

「しかしこんな時間に来るとはな。もう面会時間は過ぎておるんじゃないよ？」

佐々木刑事は車のデジタル時計を指さしながら言った。時間は午前一時になるうとしていた。

「先輩は皐月ちゃんが病院に来ている事は知らんと言った顔じゃが、黙つて出てきたって感じじゃろ」

佐々木刑事は車の窓を開けるや、タバコを一本吹かした。

「朽田健祐を襲つたのは皐月ちゃんじゃな？」

佐々木刑事がそう訊ねると、皐月は一瞬途惑つたが、「はい」と小さく答えた。

「まあ、大宮君が襲われた事による逆上が理由ならば、正当防衛になるからなあ。下手をすれば皐月ちゃんだってただじゃすまなかつた状況じゃつたらうし」

佐々木刑事は車に設置されている無線の電源を切る。

「皐月ちゃんが朽田健祐を襲つたというのは、阿弥陀と私、湖西主任以外は知らんのじゃがな」

「どういう事ですか？」

「私たち三人は皐月ちゃんがした事とわかつていても、それは神様の力が暴走してのことじゃろ？ そもそもあれだけボロボロになつた朽田健祐が生きているはずがないんじゃないよ。それは最後の最後に皐月ちゃんが暴走を食い止めたということになるんじゃないか？」

そう云われ、皐月は自分の左手を見やった。

「朽田健祐が倒れておった場所にコンクリート塀があつてな。その塀に拳くらの大きさがあある血の跡が発見されたんじゃよ」

それを聞くや、皐月はハツとする。それならば自分の血液がそこに付着しているため、すぐに感付いても可笑しくないんじゃと思つたのである。

「しかしなあ。誰の悪戯か…… その跡は朽田健祐の血だつたんじやよ。まるで上塗りしたようにな」

「でも攪拌すればすぐわかることじゃ」

「湖西主任も当然そうしたんじゃがな、先日起きた連続放火事件の究明に回されておつてな、そつちに手がいつてないんじやよ」

それなら部下に頼めばいいんじや？と皐月が訊ねると、

「皐月ちゃんの言うとおりなんじやがな、まるで上自体が皐月ちゃんを庇つているとしか考えられんのじやよ」

「それつていつたい……」

皐月が考えるように俯くや、佐々木刑事は車を発進させる。

「野中虚空というのが上におつてな、その人物がどうも焦臭きなくさいんじやよ」

その名を聞くや、皐月は肩を震わせた。その異常なまでの震えを見て、

「やはり皐月ちゃんと大宮君を酷い目に遭わせたのは、それが原因か……」

佐々木刑事は少しばかり考えると、皐月に一枚の紙を渡した。車の天井に備わっているライトを点けると、橙色の光が車内に広がつた。

皐月は佐々木刑事から受け取つた紙を見るや、顔を歪ませた。

『野中虚空 名前以外詳細不明』という文字のみが書かれているだ

けである。

「これって、いったい……」

「先輩のコネでな、公安部の一人にお願いして調べてもらったんじやよ。そしたらな。そもそも野中虚空という名前以外、全くといっていいほど詳細が不明なんじゃ。むしろいるのかどうかもわからん」

佐々木刑事はゆっくりと車を警察病院の裏口に停めた。

「臯月ちゃんはちょっとそこで待つとれ、ちょっと話をしてくれるだけじゃから」

そう云うや、佐々木刑事は車から降り、門の前で警備をしている警官二人に話をする、警官二人はそそくさと正門の方へと駆けていった。

「よし。臯月ちゃん、降りてきてええよ」

佐々木刑事が車の窓を叩きながら言う。

「あの人たちは？」

「さつき臯月ちゃんが正門の方で職務質問されたじゃろ？ それをちいと利用したんじゃよ」

それって言い返せば、私にとっては不利なことになるんじゃ？と臯月は思ったが、伽藍堂となった裏門は誰もいない。

「ここの警備員は田原先生の知り合いでな、事情を話せば入れてくれるじゃろよ」

佐々木刑事はそう云うや、裏門を開けた。

「これ以上は私は見ておらんからな」

「ありがとございます。佐々木刑事」

臯月は背筋を伸ばし、深々と頭を下げるや、急いで警備室まで走った。

「まったく。一体誰に似ておるんじやろうか…… 行動に関しては爺さん譲りか、性格は婆さん譲りじやろうな」

佐々木刑事はそう云うや、タバコを一本吹かした。

「佐々木刑事？ 一体何があったんですか？ 表に行ったら、そんなのいないって」

警備していた警官二人が戻ってくるや、佐々木刑事に訊ねる。

「おや、それじゃ見間違いですかね。正門の近くを通ったとき、体長2mはある大きな虎猫が道路を横切ったんですけどね」

佐々木刑事がそう云うや、警官二人は呆気にとられた顔を浮かべていた。

皐月は佐々木刑事から教えてもらった警備室を探していた。

「あ、皐月さま。あれじゃないですか？」

遊火が指で示しながら言う。そこには窓からぼんやりとした灯りが零れていた。

皐月は意を決して、その部屋へと近付いていく。

コンコンと窓を叩くや、警備員がそれに気づき、窓を開ける。

「あ、はい。ええ、今来たところですよ」

警備員は電話越しにそう話し、皐月を見やる。

「ちよつと待っててね。いまドアを開けるから」

そう云うや、警備員は警備室のドアを開け、皐月を中に入れた。

「いいんですか？ こんなことして」

「ははは…… 伯母には敵かなわないからね」

そう言いながら、警備員は大宮巡査が入院している病棟への道順を教え、懐中電灯を渡そうとしたが、

「遊火…… 灯りお願いできる？」

「はい。任せてください」と遊火はドンと胸を叩き、威張りだした。

「そう云うことですから、後は自分たちでどうにかします」
皐月はそう云うや、病棟へと走っていった。

遊火の力で、皐月の周りにぼんやりと明かりが点っている。

「えっと…… 大宮…… 大宮つと」

皐月は病室ひとつひとつ入院している患者の名が書かれているプレートを見ていく。

「大宮…… あった！」

皐月はその扉前に立ち止まり、深い深呼吸をする。
そしてドアを引き、中に入るや

「あれ？」

皐月と遊火は部屋の中を見渡した。そこには冷たい風が吹いているだけで人の気配はしなかった。

ベッドの上は綺麗になっており、人が寝ていたという形跡が無くなっている。

引き出しやそれどころか、ベッドの金具にかけられている入院患者の情報を示したカードもない。

「大宮巡査？」

皐月がぼんやりと大宮巡査の名を言った時だった。

「だ、誰ですか？」

突然遊火以外の灯りに照らされ、皐月は目を細めた。

「ど、どうしてこんなところに女の子が？ け、警備員！ 警備員！」

部屋に入ってきた看護師の女性が、皐月に警戒しながら近づいていく。

「ちよつと待つて！　ひとつ訊きたいことがあるんですけど！」
皐月がそう云うや、看護師は何？と聞き返す。

「この部屋に大宮つて言う男性が入院していたはずですが？」

「大宮さん？　大宮さんだったら　亡くなつたわよ？　今朝、急にね」

看護師は淡々と説明する。

「……死んだ？」

皐月は看護師の言葉を聞くや、皐月はその場にへたれこむように跪いた。

「ちよ、ちよつと大丈夫？」

看護師が声をかけるようりも先に、皐月はスツと立ち上がり、部屋を出て行った。

「えつと？　ちよつと、待つて……　あら？」

何かにハツとするや、看護師はぼんやりとその場に立ち尽くした。

「あれ……　どうしてこんなところにいるんだっけ？」

看護師は首を傾げながら、開けられた窓を閉め、部屋を出て行く。

そして廊下を歩くや、目の前に皐月がソファに座っていたのを、まるでそこに存在していないと言わんばかりに、看護師は素通りしていった。

遊火がぼんやりとした光を臯月に照らす。その光は弱々しく、すぐにも消えてしまいそうである。

「ごめんね、遊火……」

ソファに座っている臯月が、譫言を呟くように、遊火に謝った。

「いえ、私は……」

遊火はその先を言おうとしたが、今の臯月を見るとその先が云えなかった。

遊火は確かに目の前で、大宮巡査が目覚めたのを確認している。

それが急に亡くなったとなると、少しばかり違和感があった。

「臯月さま？ 大宮巡査は確かに目を覚ましました」

「あんたが云ってるのは未明……夜中のことでしょ？ あの看護士は今朝亡くなったって云ってたじゃない！」

臯月は遊火に怒鳴りつけると。遊火が申し訳ないといわんばかりに顔を歪めたのを見るや、ハツとし、「ごめん。ちょっと言い過ぎた」と頭を下げ、そのまま項垂れる。うなだ

「やつぱり……わたしのせいだ」

「臯月さまは悪くないです！」

「慰めなんていいわよ！ 結局私が大宮巡査を殺したのと一緒にじゃない？」

臯月が遊火を睨みつけた時だった。

「あれ、臯月ちゃん？」

ふと声をかけられ、臯月は声のした方へと目をやった。

それは見知った声で、この一両日、皐月が最も聞きたかった声である。

が皐月は、それが夢現まぼろしのどちらによるものなのかが、頭の中ではつきりと出来ていなかった。

『えっ？』

皐月と遊火が同時に声を挙げる。

「ど、どうしたんだい？ こんな時間に。というかどうやって？」
男性がそう言いながら、皐月に近付く。

「う、嘘だ…… だって、さっき亡くなったって」

皐月は立ち上がり、男性から離れていく。

目の前にいる男性が誰なのかわかっている。それでもさきほど云っていた看護師の言葉が脳裏に焼きついて離れないのだ。

「おいおい、酷いなあ。そりゃ寝ていた間、お花畑が見えなかったわけじゃないけど」

男性はケラケラと晒う。

「さつきから皐月ちゃんの中じゃ、僕が死んでる事になってるみたいだけど、もしかして同じ苗字だったからかな？ 今朝、大宮っていう『おじいちゃんが息を引き取った』って聞いたからね」

男性…… 大宮巡査は笑いながら説明する。

「お、同じ苗字？」

皐月は驚いた表情で大宮巡査に聞き返した。

「あれ？ もしかして僕に逢いに来たのはいいけど、下の名前知らなかったとかそういうオチかい？」

大宮巡査にそう云われ、皐月はゆっくりと遊火を見る。

「大宮巡査の下の名前って何だっけ？」

「臯月さま知らなかつたんですか？」

「だって私、携帯に大宮巡査の番号登録してるけど、『大宮巡査』
ってしか入れてないもん！」

「わ、私に怒鳴らないでくださいよ！」

臯月が上空を見ながら、慌てふためいているのを見て、大宮巡査
は誰かと話しているのがわかった。

「それじゃ、臯月ちゃんの勘違いだったってことかい？」

そう訊かれ、臯月は顔を紅潮させる。

「まあ、いきなり亡くなつたって言われたら、僕が幽霊になって出
てきても可笑しくないかな？」

大宮巡査はゆっくりと臯月に近付き、頭を撫でた。

「ごめんね。辛い思いさせてしまつて。瑠璃さんやそれを通して遊
火って妖怪の女の子から、臯月ちゃんがどんな風になつていたのか
聞いていたんだ」

大宮巡査は臯月に謝ろうとしたが、その言葉を待たず、臯月は大
宮巡査を抱きしめる。

「あいたたた。ちよつとは手加減してくれないかな？」

「あ、ごめんなさい」

抱きしめていた力が強かつたこともあり、大宮巡査は疲れた表情
を浮かべながら、ソファに座つた。

「大宮巡査？　ちよつと目を閉じてくれませんか？」

「えっ？　どうして」

「いいですから」と強く言われ、大宮巡査は臯月に従つた。

臯月はゆっくりと自分の顔を大宮巡査に近づけていく。もう少し
で互いの唇が触れようとした時だった。

「あ、あの……　臯月さま？」

突然遊火が臯月に声をかける。全く空気が読めない……というわ

けではない。

「……な、なに？ これ結構勇気がいるんだけど？」

皐月は睨みつけるように遊火を見やった。

「抱きしめるのならばまだしも、接吻くちづけをするのはどうかと思いますけどね？」

声が聞こえ、皐月と大宮巡査は声が出たほうを見るや、

「え、閻魔さま？」「る、瑠璃さん？」

皐月と大宮巡査は声の主を見るや絶句する。

そこには瑠璃が立っており、目を細めた笑みを浮かべていた。

「あなたが神社から逃げ出した理由がそれでしたら、厳罰を与えないといけませんね？ それに大宮巡査？ 相手はまだ中学生ですよ？ 誑たぶらかされたのならまだしも、自分から惚れさせた罪は重いでしょうねえ？」

瑠璃が優しい口調で言うが、それはドスの効いた脅しにも聞こえる。

「い、以後気をつけます」

皐月と大宮巡査は瑠璃に向かって、深々と頭を下げた。

そんな二人を見ながら、瑠璃は溜め息ひとつ吐くと、

「さあ、病室に戻りましょう。大丈夫、大宮巡査の病室は個室ですから、皐月が来ても誰も気付きませんよ」

瑠璃はそう云うや、大宮巡査に肩を貸そうとしたが、身長は葉月と然程変わらないため、殆ど貸せていなかった。

結局大宮巡査は皐月の肩を借りながら、ゆっくりと病室へと歩いていった。

「それじゃ命に別状はないんですね？」

皐月が確認するように大宮巡査に訊ねる。

「ああ、傷は深かったけど、命に別状はないって、主治医から云われてね。全治二ヶ月だそうだ。ほんと、九死に一生を得た気分だよ」

ベッドに横たわっている大宮巡査が笑いながら説明する。

「でもどうして……」

皐月は大宮巡査が瀕死の状態であることは知っていた。それなのにたった二、三日で目を覚ますとは考えていなかったのだ。

「彩奈が守ってくれたんですよ。あなたを悲しませたくないと思っただんでしょね。彼女は大宮巡査の守護霊でもありましたから」

そう話す瑠璃は、遊火の光を借りて、リンゴの皮をナイフで剥いている。その切り方は実に美しく、リンゴの蒂へたからおしりまで、丸々ひとつ分の皮を切れる事無く剥き終えていく。

「そもそもあなたと弥生が舞頸を退治しようとしていたとき、大宮巡査はどんな行動をとりましたか？」

瑠璃の問い掛けに、皐月は首を傾げる。

「舞頸が旋風つむじかぜを出した時、皐月は吹き飛ばされましたよね？ それなのに、大宮巡査は頬を掠めただけだった」

そう云われ、皐月は思い出すように頭を抑えた。

「あ、云われてみれば……」

ハーフアンデッド

「ただ、あなたみたいに半身半霊ではないですからね。死ぬほどの苦しみがあれば、やはり死にますが、今回はそういう運命ではなかったということですよ」

瑠璃は八等分に切り終えたリンゴを皿に乗せるや、皐月に渡した。

「このリンゴ、結構美味しいですよ。皐月は甘いもの好きでしたね？」

「そりゃ、甘いのが好きですけど」と愚痴を零しながら、皐月はリングをひとつ摘み、口に頬張った。

シヤクツというリングを噛んだ音が聞こえるや、

「んみゅっっっ」と奇妙な声を出しながら、皐月は顔を綻ばせた。

「うん。やはり機嫌が悪いときの皐月には、甘いものを与えるのが一番ですね」

瑠璃は笑みをうかべながら、皐月を見やる。

「リング貰った時から閻魔さまの策略はわかってたけど、それに従う私って……」

「そして甘いものを食べただけで機嫌がよくなる自分って……と思っただでしょ？」

瑠璃の言葉に、皐月は何も言い返せなかった。

「さて皐月、皆に心配させていた責任は重いですよ。今、阿弥陀警部ら警察が捜査している事件は普通のとは違いますからね」

「どういふ事件なんですか？」

瑠璃の言葉に皐月は聞き返す。

「先日、連続して火災事件があつて、そのうちの一軒で男性の焼死体が発見されたんだ。しかもその小火騒ぎは誰一人放火犯を目撃していない」

「そういえば、大宮巡査が襲われた翌日から、阿弥陀警部が神社に訪ねに来てたっけ？と皐月はふと思ひ出す。

「放火だったら、誰もいないときにやるんじゃない？」

皐月が首を傾げながら訊ねる。

「それだったら阿弥陀警部だって苦労はしません。火災が起きたのは、家の中には誰もおらず、逆に外には人がいた状況だということなんです」

「それじゃ放火犯はいない？」

皐月はふと遊火を見た。遊火が驚いた表情を浮かべている。

「遊火、どうかした？」

臯月にそう訊ねられ、遊火はハッと気付くや、「いえ、なんでも
ないです」と首を横に振った。

瑠璃はそんな遊火を見るや、一瞬眉を潜めたが、

「拓蔵に黙って来たんでしょ？ 今度はちゃんと決められた時間に
訪ねなさい」

瑠璃はそういうや、病室の窓を開けた。

「ここは一階ですから、見つからないように」

もう少しいたかったが、一目見ただけでも満足しているので、臯
月は帰ろうとしたが、少し気になることがあり、瑠璃にひとつ訊ね
る。

それはキャンプのとき、六年前の転落事故を思い出し、震えて動
けなかった自分に、声をかけた瑠璃の様子によるものである。

しかし、返ってきた言葉は意外なものだった。

「それ…… 誰から聞きました？」

瑠璃の問い掛けに、臯月は聞き返した。

「わたしはずっとこの六年間、臯月の両親の行方を捜しているんで
すよ？ それはつまり！ 転落があったことや、動転した臯月が原
因だったとしても、それは本人しか知りえない！ 臯月がわたしに
その事を話していない以上、その事を知る術はないんですよ？」

その言葉に臯月と大宮巡査は瑠璃を見た。

「それに、わたしはずっとテントの近くで、煙々羅の報告を待つて
いました。あなたが出ていったのには知っていました。話しかけ
てなんていませんよ？」

「それじゃ一体？」

大宮巡査がそういうや、瑠璃はハッとした表情を浮かべた。

それと同時に手を上に翳すや、何もない空間から裂け目が現れ、そこから浄玻璃の鏡を取り出した。

浄玻璃鏡には、死者が生前でどのような生き方をしてきたのかを記した映像を映し出す役割を持っている。

瑠璃は神経を集中させ、臯月たちとキャンプに行ったさいの映像を映し出そうとしたが、鏡の表面には何も映ろうとしない。

「してやられた！」

瑠璃はその場に跪き、悔しそうな表情を浮かべながら蹲った。

「一体どうしたんですか？」

臯月が瑠璃に近付こうとした時だった。

瑠璃は臯月を見やるや、何かを感じ取る。

『大黒天…… あなたは臯月の心が乱れた事により、その力を暴走させてしまった』

瑠璃はキツと表情を変えるや、臯月の額に自分の額をつけた。

「え、閻魔さま？」

「心を落ち着かせなさい。犯人の狙いはあなたたち姉妹でしょうか」

「私を？」

戸惑っている臯月を無視するかのようになり、瑠璃は臯月の脳裏に話しかける。

「臯月…… もしも、あなたの力が及ばなくなった時『オン・カカカビ・サンマエイ・ソワカ』と心の中で呟きなさい」

そういうや、瑠璃はゆっくりと顔を離していく。

「この事件が無事に解決したら、美味しい料理をご馳走しますよ」
瑠璃はそういうや、臯月の背中を押した。

皐月は一度振り返ったが、大宮巡査が笑顔を見せると。頷き、神社へと戻っていった。

「本来なら皐月の守護神である大黒天の真言は『オン・マカキヤラヤ・ソワカ』なのですが、まだ彼女は未熟ですし、大黒天の力を十二分に発揮出来ないでしょうね」

瑠璃は大宮巡査にそう話す。

真言とは仏教の呪文を意味し、神仏それぞれに異なっただご利益を意味している。

皐月の守護神である大黒天にも真言はあるが、その力を十二分に発揮できないと判断し、瑠璃はあえて、自分の真言を教えた。

「少なくとも……私の力は濃く享けついでますけど」

瑠璃はそう言うや、もう一度浄玻璃鏡にキャンプをしていた時の映像を映し出そうとしたが、全くといっていいほどに何も映らなかった。

『虚空蔵菩薩が何を考えているのかわかりませんが。私たち仏や神は、人々に畏怖されると同時に、崇められる存在であり続けなければいけない。なのに虚空蔵菩薩がやっていることはただ恐怖に陥れようとしているだけ』

瑠璃はそう考えながら、ゆっくりと深呼吸をした。

臯月と遊火が神社に戻った頃には、外は暁で輝いていた。時間は
気付けば午前四時である。

「爺様怒ってるだろうなあ。もしかしたら昨夜のビンタじゃすまな
いかも」

「大丈夫ですよ。弥生さまや葉月さまが何とかしてくださいませでしよ
うし？」

遊火が励ますように言う。「そうだといいんだけどね」と臯月は
苦笑いを浮かべた。

「ところで、閻魔さまから何を耳打ちされていたんですか？」

「んっ？ ああ…… なんか呪文みたいだったけど、私が妖怪と対
峙して、敵かなわないと思ったときに使いなさいって。一種の切り札み
たいなものじゃないの？」

臯月はそう言いながら、遊火を見た。

臯月は気持ちに余裕が出来た事もあり、遊火の姿がすっかりと見
えていた。

その姿は十二、三の少女で、スラツと腰まで伸びた黒色の長髪。
前髪は切り揃えており、頭にはリボンを施している。服装はフリル
のついたミニ浴衣といったところである。

「それにしても、こうやって見ると、姉さんが遊火で遊んでたのが
わかるわ」

その言葉に遊火は首を傾げる。

「弥生姉さんがゴスロリ趣味なのは知ってるでしょ？ あれ、原因
は私と葉月なのよ。父さんと母さんがいなくなつて、爺様が男手一

つで育ててくれているけど、さすがに服だけはね。それでよく姉さんが服の綻びとかを裁縫で直してくれていたから、趣味はその延長線」

「ああなるほど」と遊火は理解する。

それにしても、それがどうしてゴスロリに繋がったんだろつかと、二人にとってはそちらの方が不思議でしかたがなかった。

「そう云えば、皐月さまってスカート履かないんですよね？ 学校の制服以外」

「布が引っ掛かって、動き難いのよ。まあ退治の時は巫女装束着るけど」

そう話しながら、神社の前に来た時だった。

携帯が鳴り、皐月はそれに出る。

「もしもし…… あ、弥生姉さん？」

電話の相手は弥生であった。

『大宮巡査どうだった？』

「うん。何とか一命を取り留めたって」

皐月がそう言っや、電話越しから葉月の嬉しそうな声を出している気配を皐月は感じた。

耳が不自由なため、電話をしている相手の声しか聞き取れないが大宮巡査が無事だという事がわかって嬉しそうな表情をしていたのが見えていなくても感じ取れたのだ。

『皐月、このまま本堂で稽古したら…… 丁度いい相手もいるし』

「それって、誰？」

そう訊ねたが、弥生は着いてからのお楽しみと言って電話を切った。

一体何のことだろうと、皐月と遊火は互いの顔を見ながら、首を傾げていた。

皐月と遊火が神社に戻り、拓蔵に見つかからないよう本堂に入ると、そこには海雪が正座していた。その右側には大鎌が横たわっている。

「おばあさん？」

皐月が小さく声をかける。

「皐月、さつさと竹刀を取って。これからあんたに稽古つけてあげるから」

海雪にそういわれるが、皐月は何のことだかさっぱりである。

「精神の乱れはそのまま力に反映される。精神を安定させる事はもっとも重要な事である」

突然海雪は鎌の長柄を左手に取り、鎌を振り払った。

すると、風の刃が皐月に向かっていく。

間一髪避けた皐月は体勢を整える。

「ちよ、ちよつといきなり！」

「凍雨つ！」

皐月の体に当たるか当たらないかといった場所に重たいものが落ちた音が本堂に響き渡った。

皐月の両足の間に冷たい氷となった鎌の刃が床に沈んでいた。

「ちよつと、私はまだやるなんて！」

皐月がそう叫ぶや、海雪は凍りついた刃を振り払い、氷を割るが、氷は落ちるところか、その場に留まっている。

「氷雨つ！」

海雪が叫ぶと同時に砕け散った氷が本堂の天井に激しく浮かび上がり、その場をグルグルと回転している。

「臯月さま？」

「遊火、あんたは弥生姉さんたちのところに戻って！ あの技出すってことは、遊びじゃないっていつてるようなものだから」

臯月は竹刀を手に取るや、

「吾神殿に祭られし大黒の業よ！ 今ばかり我に剛の許しを！」
そう叫ぶや、手に持った竹刀は真剣へと変貌する。

「我流一刀・雷電」

「不遣雨やいづのあめっ！」

臯月は稻妻を解き放すと同時に海雪の上空で漂っていた氷の粒は一斉に降り注いだ。

そのふたつがぶつかり合い、激しい衝撃音と眩しい光が二人を包んだ。

「我流一刀・松風」

怯むことなく、臯月は刀を大きく振りかざし、風の刃を海雪に放った。

「えっ？」

「相手をよく見ることに。目の前にいるからって、それが真実とは限らない」

うしろから海雪の声が聞こえ、臯月は振り返り、切りかかった。

が何の反応もなく、暖簾に腕押しと同様の感触しかなかった。

「無闇矢鱈に刀を降り続けても駄目。一点に集中して！」

海雪は大鎌を臯月に向けて切りかかる。間一髪それを避けた臯月は、チャンスといわんばかりに海雪に切りかかった。

「っ……っ！ やつとあたった」

海雪の服が切れ、大らかな胸の谷間が露になる。

「これくらいで喜ばないですよ？」

海雪は大鎌の柄を片手に持ち、自分の上空で激しい音を鳴らしながら振り回しはじめた。

「本当はこっちも時間がないから、粗治療だけど……」

オン ソラソバティエイ ソワカ

海雪がそう呟くや、皐月は顔を歪めた。

「な、なに？ この感じ…… 妖怪？ 違う……」

皐月は片手で持っていた刀を両手に持ち直し、構える。

「うわあああああああああああああああ……！」

皐月は声を張り上げ、海雪に切りかかったが、

「*adagio tranquillo step rhythm*

海雪は緩やかに皐月の切っ先を避ける。

「*leggero pizzicato*

そう告げるや、海雪は回し蹴りをし、皐月を蹴り飛ばす。背中から壁にぶつかり、皐月はズルズルと凭れ倒れる。

「はあ…… はあ……」

「どうしたの？ 神様の力を使ってその程度？ ほら、今が絶好のチャンスなのよ？ 私は足しか使えないんだから……」

皐月はゆっくりと立ち上がり、体勢を整えながら、海雪をキッと睨みつけた。

「その割には全然余裕って感じがするんだけど？」

「そういう文句は勝ってから言いなさいよ？」

海雪はそういうや、周りの大気を自分の中心に集め始めた。

「ちょ、ちよつと！ そんなことしたら、本堂どころか、こちら一帯ぶつ壊れるわよ？」

「だったら、それを食い止めなさい！ 閻魔さまから新しい力もらったんでしょ？」

海雪がそういうや、臯月は瑠璃から教えてもらった言葉を思い出していた。

オン・カカカビ・サンマエイ・ソワカ

臯月はそう頭の中で呟くが何も起きなかった。

それどころか、大黒天の力が消え、手に持っていた刀は元の竹刀に戻っていた。

「ど、どういうこと？」

「真言はね？ その神の力やご利益を得るために使う呪文なの。生半可な願いじゃ、神仏は答えてはくれない」

海雪は冷たい表情でそう言い放った。

「今、私を倒さなければ、こちら一帯が瓦礫の町になるわよ？」

海雪がそう叫ぶと、臯月はキツと睨みつけると同時に、

「そんなことさせない！ それだけは絶対させない！」

臯月は姿勢を正し、竹刀を左手に持ち構えた。

オン・カカカビ・サンマエイ・ソワカ

臯月はそう叫ぶや、急に風が止まり、振り回していた鎌はゆっくりと止まりかけていく。

「くっ！ Piu mosso Presto」

海雪は再び鎌を振り回すが、その速さは先ほどのものとは比べ物にならないほどであった。

（しまったっ！ 臯月がまだ力のコントロールが未熟だから、何が

出てくるのか、本人もわかってない。だけど私からしてみたら余計なご利益が出てきたんだ)

海雪がそう脳裏で悟り、後悔する。

「もらったあつ！」

皐月は竹刀のまま、海雪に切りかかる。

「くっ！ 霧雨っ！」

海雪は姿を霞め、切っ先を避けた。しかし、何時の間にか皐月は海雪の頭上から切りかかる体勢をとっていた。

「Presto step rhythm!!」

海雪は急速にうしろに退避するが、皐月はそのスピードに追いつき始める。

「はああああああああああああああつ!!」

皐月が声を張り上げ、竹刀を突いた。

轟音が本堂にで響き渡り、海雪は壁に凭れかかる。皐月の突いた竹刀の先は、本堂の壁に突き刺さっている。

それが海雪の顔をギリギリで逸れており、下手をすれば頭を粉々にされていたところである。

海雪はそれに気付くや、啞然とした表情でその場にへたれこむ。

それと同時に隣りで皐月が倒れたのがわかるや、海雪は少し深呼吸をした。

(閻魔さまが自分の真言を教えようとしてたのは知ってたけど、ご利益が多すぎるのよ)

海雪は溜息を吐いたように愚痴を零した。

真言とは、神仏の真名^{まな}を意味し、密教成立以前から用^{もち}いられており、古代インドから効能がある呪文として重視されてきた。

真言を唱えることで、発願を仏に直接働きかけることができる
されている。

先ほど海雪が唱えた真言は、弁才天のもので、弁才は芸能の神と
もされていることから、海雪の技はその時だけ、音楽用語と同じも
のとなっている。

臯月が唱えた真言は地藏菩薩のもので、そのご利益は二十八種利
益と七種利益され、異常なまでにそのご利益は多い。

圧倒していた海雪を悪感させるほどの動きを見せたのは『増長本
力』というご利益で、本来持っている力を増幅させるというものな
のだが……

「力がコントロール出来てないって云った感じね。譬えるなら、三
輪車にエンジンモーター付けたくて感じかしら。本当にここぞとい
う時にしか使えない諸刃の剣じゃない。体力の消耗も激しいみたい
だし、ちよつと考え物かもしれないわね」

海雪は呟きながら、臯月を起こそうとした時だった。

「ああがあつ？」

海雪は突然『首を上から縄で吊るされる』ような苦しみを感じた。

「だ、誰？」

海雪が振り向き様そう叫ぶや、

「ほうほう？ その子かい？ どうしてこんなところまで来たばつて
るんかねえ？ もしかして、まだつかまつらんとか？ いやいや、
人を殺すほどのことをしたのが、のうのうと逃げれるとは思えんが
なあ」

老人は顎鬚を摩りながら、ニヤニヤと薄気味悪い笑みを浮かべな
がら言った。

「あなた、確かこの前のキャンプ場にいた」

海雪は啞然とし、思い出したと同時に、大鎌を構えなおした。

「いったい何の用？ 返答次第ではたたつ切るわよ？」

「ほう？ わしに齒向かうか？ お前が従っている十王よりも上の存在であるわしに」

「上だろうが下だろうが！ 理不尽な理由で人を殺しちゃいけないでしょうが！」

海雪は大鎌を振り上げ、老人に切りかかったが、

「やれやれ、なにも利益がないというに」

老人は指を弾いた。それと同時に鎌が落ちる音が響き渡った。

「あがあああああああつ！！」

床に倒れこんだ海雪は悲鳴を挙げながらのた打ち回っている。

大鎌を持っていた左手が存在しておらず、大鎌はその場に転がり落ちている。

「さてと、邪魔者はおらんし、さっさとこれを壊す事にしようかのう？」

老人が気を失っている臯月に近付こうとしたときだった。

「好い加減にしなさいよ。虚空蔵菩薩っ！」

冷たい空気が本堂に漂い、老人 虚空蔵菩薩は声のした方へと向くや、歪んだ笑みを浮かべた。

「閻魔さま？」

海雪は声をかけるや、その風貌にゾツとした。

瑠璃の容姿は普段、三姉妹たちの前に現れるときと同じ、葉月と
同い年ほどの容姿であった。

しかし、その形相は禍々しく、般若のようであった。

「あなたの目的は、私への戒めではないのですか？」

瑠璃はゆっくりとした歩みで虚空蔵菩薩に近づく。

「はははっ！ どうじゃろうねえ？」

「私たち神仏は、時に畏怖され、崇められる存在でなければいけない。たとえあなたと私に対なるものだったとしても、どちらを信仰するかは人が決めること！ 私たちがどうこうと決めることではない！」

瑠璃がそう言うや虚空蔵菩薩は指を弾いた。

「残念ながら、私は権化状態ではないので、あなたの持っている記憶を殺す力は意味がありませんよ」

瑠璃がそう告げると、虚空蔵菩薩は焦るどころか、想定済みといわんばかりに溜め息を吐いた。

「そうかい、そうかい。今回は諦めるがなあ……………」

虚空蔵菩薩はそういうや、海雪を見やった。

「あなた……………」 『こつちにいたときも地獄』 じゃったのに、どうしてあの二人の監視なんてしとるんじゃ？」

虚空菩薩は海雪にそう訊ねる。その海雪は表情を暗くしていた。

「特に誰にも必要とされておらず、ただの慰めものでしかなかったお前が、どうして人の心を持ったまま妖怪になってるんじゃ？」

虚空蔵菩薩は首を傾げながら質問を続けた。

「泣いてくれたからよ……………」

海雪はそう呟くや、右手で大鎌の柄を掴み、虚空像菩薩に切りかかった。

「くうっ？」

突然の事で油断した虚空蔵菩薩は避け切れず、腹部を切った。そこからダラダラと何かが流れている。

「誰も……………実の母親ですら、私をただの邪魔者だっただけ思っていなかった！ 何回も何回も父親をコロコロと変えて！ そのせいで

私はその下衆共の慰みものにされてきた」

海雪の周りを漂っている大気が狂ったように荒れ、本堂の中で渦巻いている

「海雪っ！ それを思い出すのはやめなさい！」

瑠璃は海雪の話のを止めようとしたが、あまりにも強い風で、近付く事が出来なかった。

「でも、何もそんなことなんて知らない皐月と信乃は、そんな私を友達として、人として一緒にいてくれた！ 私が間違った事をしたとき、本気になって泣いてくれた！ 私を思っで！ 二人は本気で泣いてくれた！」

そう叫ぶ海雪の目からは大粒の涙が溢れていた。

「だから私は、その恩返しに二人を見守っているの！ 二人が幸せであつても、そうじゃなくても、私みたいに馬鹿としか言いようのない道を選んでほしくなんてないから」

海雪はそう告げるや、ゆっくりと跪いた。

彼女の周りで渦巻いていた大気は、次第に落ち着きを取り戻していく。

「海雪？」

瑠璃が声をかけるが、海雪は反応しなかった。

「心配するでない。真言を使っておったからな。余計に力を使って、こつちで体を維持できる力を使い果たしただけじゃろうよ」

虚空蔵菩薩がそういうや、瑠璃は睨みつけた。

「わからんなあ…… ちつともわからん。どうして皆こんな塵芥に手を貸そうとするのか」

「人も、神も、仏も、誰かが思うことで繋がりが出来る。人に思われなくなり、衰退していった神と仏は何の力を持たない。それは人とて同じ事」

「それがわからなんだ。自分の力のみで生きていける人間もおろくに……」

虚空蔵菩薩がそう言うや、瑠璃はその小さな体からは想像できないほどの力で、虚空蔵菩薩を蹴り飛ばした。虚空蔵菩薩は壁に背を当て、ズルズルと崩れ落ちていく。

「何を目的にしているのかはわかりませんが、今日のところは引き下がった方がいいんじゃないですかね？」

瑠璃は地面にてのひらを乗せ、虚空蔵菩薩を睨みつけた。

「今日は厄日ですねえ」

虚空蔵菩薩は笑みを浮かべるや、スーと姿を消した。

「臯月は直に目を覚ますでしょうけど、問題は海雪のほうね。思い出したくもないことを思い出させて」

瑠璃は顔を歪めたが、すぐに元の顔に戻し、海雪を抱えるや、姿を消した。

その日の昼頃、稲妻神社の境内を掃除していた巫女が、本堂の裏側にある庭園の掃除をしようと、そこを見るや悲鳴を挙げた。

その異常なまでに育った草が、あたり一面に蔓延うちはっていた。

漆・縊（後書き）

海雪が真言を使った後に放っている技名は全て音楽関係になっていきます。

速度だけでも結構種類があります。

捌・煙草

弥生と葉月がアリバイを作ってくれたお陰で、皐月は拓蔵から折檻されることはなかった。

昼になるくらいの午前十一時、自分の部屋で横になっていた皐月は、ふと何かを思い出し、遊火を呼んだ。

「何のご用ですか？」と遊火が尋ねる。

「確か遊火つて、爺様とは、ある事件で助けてもらったのよね？」

「えっ？ あ、はい。確かに私は七年前、拓蔵さまから助けてもらった礼がありますから」

遊火がそう言うや、皐月は体を起こし、

「そのときのこと話してくれない？ 漠然としか思い出せないから」
そう云われ、遊火は説明した。

今から七年前、稲妻神社の近くに小さなお寺があった。

遊火はそのお寺近くによく浮遊しており、そこで一人の小坊主を見かけたという。

その小坊主、名を長谷部与一はせべ よいちといい、大変優秀で、住職の命はよく聞くし、覚えもよかった。

遊火はそんな与一が墓場の掃除をしている時、よく話を聞いていたのだった。与一は遊火が妖怪である事には気付いていなかったという。

修行を積みば見えるという訳ではないが、与一はその資質があったのだと遊火は思ったと説明する。

そんな不思議な関係が続いた、ある冷たい冬の日であった。

与一が暮らしていたお寺で火災が置き、寺は全焼した。

火元の原因は台所にあり、火災があったと思われる時間、与一が台所で調理をしていたと、住職の妻 緋野重摩ひのえまが証言したという。当然の事ながら、与一は無実だと訴えるが、誰一人、重摩が嘘をついていること事態に疑問を持たなかった。というよりは、持とうとされしなかったのだ。

重摩は器量よく、気配りも出来て、与一を除いた誰一人、本当に彼女を疑う人間はいなかった。火災が起きた時間、疑われていた与一が買物に出かけていたのを遊火は知っていたのだが、それを証言する術はない。

だからこそ、与一を励まし、必ず無実を証明してあげると約束したという。

拓蔵と初めて会ったのも、その事件がきっかけであった。

通報を受けた警察の中に拓蔵がおり、住職たちから事情聴取をし、現場を見るや、台所に焼死体が発見される。

調べたところ、火災の原因はガス爆発によるもので、その引き金となったのは、焼死体の男がその場でタバコを吸った事だとわかった。それとなにやら変な臭いがしたとも言っていたという。

住職たちは発見された死体が、寺で修行していた坊主である事を知り、驚きを隠せないでいたのと同時に、その坊主がタバコを吸っていたことを知らなかったという。

重摩からその事を訊ねると、坊主は台所でタバコを隠れて吸っていたことを知っていたと同時に、あるうことが重摩と不倫関係にあったという。

「つまり、遊火が見えていた与一は、よく厨房に出入りしていた。

それを重摩が、アリバイ工作に利用したってこと？ でも、どうしてそんなことする必要があるのよ？」

「後々拓蔵さまから聞きましたが、まず事件には目撃証言などが必要になりますよね？ その証言に信憑性があればあるほど、その証言は有効になります。ですが、今回厨房を誰が入りしていたのかではなく、それを誰が見ていたのかという点にあるんだそうです」

遊火の言葉に、臯月は首を傾げる。

「一緒じゃないの？」

「私も最初そう思いましたが、厨房の入口付近には誰もいなかったそうなんです。むしろ火災があった時間、確かに寺に人はいましたが、何人かは本堂で修行をしていたということらしいですよ。妻はその時母屋にいたと説明してましたし、私が見えていた与一は買い物に行っていた」

「それって、言い返せば『亡くなった坊主以外、火を点けることはできない』ってことじゃない」

臯月はそういうが、少しばかり疑問が出来た。

「でも、火災があったとき、本堂で修行をしていたのよね？ それって自由参加？」

「私が見えていた与一は、買い物に行っていましたし、私もそれについていつてましたから、詳しくは」

遊火は表情を曇らせる。

「いや、遊火が悪いわけじゃないのよ。ガス爆発ってことは、当然部屋の中にガスがもれていないと起きないでしょ？ だけど、タバコを吸っていたのなら、換気扇を回すはずじゃない。つまり、原因がガス爆発によるものだったとしても、一番大きく燃えているのは焼死体と換気扇付近だと思っただけど？」

臯月がそう訊ねると、遊火は少しばかり思い出すように頭を抱えた。

「それにどうして与一を買い物に行かせたかよ。自分に得のあるア
リバイ工作なら、一緒に行動していたつてのが最善じゃない？ だ
けど、買い物に行かせたつてことは、その店か家に行っていたとい
うアリバイが出来るじゃない？」

「言われてみれば確かに」と遊火は感心する。

「それにタバコなんて、隠れて吸うものでもないんだけどね」

皇月がそういうや、遊火はキョトンとした表情で聞き返した。

「ええ。信乃のお爺さんが住職なのに、凄いヘビースモーカーだつ
たからね。四年前、ユズが襲われた事件が起きる前までは、よく遊
びに行つてたから、今でも覚えてるのよ」

「仏教では『不飲酒戒』という教えがあるが、信乃の祖父は仏教の
人間でありながら、拓蔵に負けず劣らずの酒豪である。もちろん修
行中は一切口にはしていない。」

また仏教において、煙草は禁じられていない。

その理由として、お釈迦様が存在していたとされていた頃、イン
ドには煙草という概念がなかったためという説がある。

が、当然未成年による飲酒喫煙は法律で禁止されている。遊
火の話では、亡くなった坊主は二十歳を過ぎており、法によって罰
せられる事はまずない。

話を『不飲酒戒』に戻すが、この戒は、お酒だけではなく、麻薬
など、人の精神を錯乱させるもの全般に適応されるという説がある。
この説でも、煙草にお酒や麻薬ほどの精神を錯乱させる効果があ
るのかといえは難しいところだが、結局のところ、酒も煙草も程度
に楽しむものである。

「重摩が犯人。亡くなった坊主は煙草を吸うためにライターに火を

点けた。それがきっかけとなって爆発が起きた……　そう爺様は考
えての推理だったんでしょね」

「恐らくそうだと思います。ただ、その女性は本当に素敵な人だっ
たので、最初、私もその人が犯人だとは思っていませんでしたけど」
「それって、どういうこと？」

話を思い出した皐月は、重摩を誰一人疑わなかったことは、その
人物の人柄によるものだと思い始めた。

「爺様は重摩をただ殺人容疑として連行したんじゃないかって、何かを
あぶりだそうとしていた。ガスの元栓は台所に入れる人間全員に出
来ることだし、殺された坊主が隠れて煙草を吸っていたことなんて
知ってる人間がいても不思議じゃない」

皐月は自分の知識の奥底にある何かを頭の中で手探りする。

事件が起きた日、与一は買い物に行っていたが、その目撃証言が
あるため、アリバイはある。

そして連行された重摩には人徳というアリバイしかなかった。

「結局はガスが漏れての火災で、坊主を狙ったの事なのかはわから
ないそうです」

「つまりそのことに関して、重摩は黙秘してるってこと？」

遊火は答えるように頷く。

「はい。焼死体には殺傷はなかったそうですから」

それじゃ何を理由に殺されたのかは結局闇の中である。

そもそも拓蔵は当時公安部に所属しており、事件は刑事課の仕事
におけるため、それ以上は関わろうとはしなかった。

「それにしても、どうして昔の話なんて聞こうと思ったんですか？」

遊火がそう尋ねると、

「いや、遊火は爺さまに助けてもらったから私たちのところにいるのよね？ でも話を聞いてると」

「誰も見えなくなっただんです。私のことが……」

「誰も？」

「臯月さまは私がそこにいると信じれば、必ず答えてくれると葉月さまから云われて、見えるようになったんですよね。その逆もまた然りなんです」

遊火はそれ以上そのことに関しては何も云わなかったが、臯月には痛いほどわかった。

与一が何らかの原因で、遊火が見えなくなり、遊火は居場所が無くなっていったのだ。

以前、沢口兄弟によって助けてもらっていた窮奇かまいたちに共通するものがあった。

どこにでもいける妖怪や幽霊は、逆に言えば、居場所を捜し求めているともいえる。

「ただ、拓蔵さまと一緒に女性がいたんですけど、それが誰なのか」
遊火は思い出すように云うが、それ以上は思い出せないでいた。

「臯月、起きてる？ 昼飯出来ただけど？」

弥生が襖越しから声をかける。気付けば午後十二時を過ぎていた。

臯月と遊火は話を切り上げ、居間へと下りた。

捌・煙草（後書き）

この話は今回の話に重要な部分となります。

玖・眼鏡

拓蔵から連絡を受けた阿弥陀警部は、急ぎ稲妻神社へとやってきた。

そして居間へと案内され、今回の事件について説明した。

「事件の詳細は以上です。何か質問はありますか？」

「事件も何も、放火殺人じゃないんですか？」

弥生がそう尋ねると、阿弥陀警部は首を横に振った。

「そう断言できれば苦労はしないんですけどね。その発火した原因がわからんわけですよ。」

阿弥陀警部は葉月を見やる。

「一応、遺体の写真は持ってきてますけど、どうします？」

「やらせてください。」

葉月がはつきりとそう言うと、阿弥陀警部は少しばかり表情を歪ませたが、写真を葉月に見せた。

葉月は一、二度ほど深呼吸をし、写真に手を翳そうとした時だった。

「っ！？」

まるで静電気に当たったかのように、葉月は写真から指を外した。その余りにも不可解な状況に、葉月は面食らった表情を浮かべる。もう一度写真に手を翳したが、静電気を食らったように手を弾いてしまう。

「……っ？」

「葉月、どうしたの？」

葉月がそう尋ねると、葉月は皆を見ながら、

「写真に触れない…… これじゃ声が聴けない」
葉月は少し表情を曇らせる。

「逆に考えたら、葉月が触れないんじゃないやなく、触れられないように呪いがかかっていると考えた方がいいかもしれんな。しかもかなり強力な」

拓蔵がそう言うや、葉月はもう一度写真に触れようとしたが、
「っ！ あっっ！」
そう叫ぶや、写真が一瞬にして燃え、塵チリひとつなく消えた。

「二重に呪いをかけておったようじゃな」
「ごめんなさい」

「いやいや、葉月さんのせいじゃないですよ。むしろこれで犯人が妖怪だつてことがわかったじゃないですか？」

阿弥陀警部がそう云うと、拓蔵は少しばかり怪訝な表情を浮かべる。

「いや、これは人の仕業と考えた方がいいかもしれんな。呪いを使えるということは、それだけ思考が高いという事じゃ。ただの妖怪がこのような業が使えると思えん」

拓蔵の言葉に三姉妹と阿弥陀警部は首を傾げる。

「ですが、今回の事件はまったく火元がわからんわけですよ。これを他殺と見るにはなんとも」

「情報不足つてことですか？」

臯月がそう尋ねると、阿弥陀警部は頷く。

「今回四件ほど火災事件がありましたね。先の二件はリビングが小火騒ぎになり、三件目は台所だけが全焼。そしてこの事件ですよ」
三件目の話を聞いていた時、臯月は遊火が話していた昔話を思い出す。

「しかもその三件、発火理由もまだわからん始末なわけですよ」

「一応説明してくれんかのう。何かわかるかもしれんし」

「ええ。一応共通して、窓際に何かを置いていた事なんですよね」

「窓際？」

「一件目はリビングに金魚鉢。二件目は同じくリビングなんですけどこちらは水晶玉。これはどうやら家の主が風水をしていたそうなんですよ。そして三件目は水の入ったペットボトル」

「確かに物が置いてあったっていうだけなら共通点になるわね？」

弥生がそう云うと、皐月は何かを思い出したような表情を浮かべる。

「あの、事件があった日って、ここ最近だと一番暑かった日でしたよね？」

「ええ。まあ、確か三十五度以上はあったと思いますよ」

阿弥陀警部が思い出すように言った。

「葉月、確かその日、学校から帰ってきて、境内で何かしてなかった？ ほら虫眼鏡出して」

そう云われ、葉月は少しばかり考える。

「うん。学校の実験で、太陽の光を虫眼鏡で……」

「太陽光を集めるってやつ？」

弥生がそう尋ねると、葉月は頷く。

「ありゃ？ なんか似たような事件を聞いたことがあるような」

拓蔵は腕を組み、うんと悩む。

「でも、それがどうかしたんですかな？」

阿弥陀警部が皐月に尋ねる。

「窓際に水晶玉。水の入った金魚鉢やペットボトルが置かれていたんですよね。それって火事になる危険があるって学校の先生に教えてもらって、確か光を吸収するから」

「あっ！！」

臯月が言い切るより先に、拓蔵が何かを思い出し、声を荒げた。

「爺様、どうかしたの？」

「思い出したわい。それ、七年前に起きた火事と似とるんじゃよ」
拓蔵がそう言つと、三姉妹と阿弥陀警部は首を傾げた。

「葉月、虫眼鏡は何レンズかわかるか？」

「えつと、確か凸レンズ。虫眼鏡が光を集めるのはそれが理由だつて、先生から教えてもらった」

「水の入った金魚鉢やペットボトルはそれと同じになつて、光を吸収しやすいんじゃよ。当てられた場所が熱を持つて、煙が出る。いっしか火となつていくのを、しゅっれん収斂火災と言つんじゃよ。水晶玉は元から光を吸収しやすいからな」

> i 2 7 7 7 5 — 3 2 4 8 <

「つまり、火災はそれによるものだど？」

「まあ、そうなるんじゃろうけど、収斂火災は暑い日というより、太陽が沈む夕暮れ時や、冬の寒い時期のほうが起きやすいんじゃがなあ」

拓蔵は少しばかり顔を歪める。

「爺様、遊火が昔いたお寺で起きた事件と何か関係があるんじゃないの？」

「まあ、あれは今考えれば、確かに同じ収斂火災だったとはいえ、ガス爆発じゃからなあ、ただ、どうも運が悪すぎるんじゃよ」

その言葉に臯月は首を傾げる。

「ガス爆発はガスや、気化したガソリンがライターの火に引火するもんじゃろ？」

「うん。遊火の話だと、それが原因だつて」

「それをどうして、あの小坊主が気付かんかったんじゃろうな？」
そう云われ、臯月とその上を浮遊していた遊火は驚いた表情を浮かべた。

「ガスとガソリンは無臭ではないからな。必ず違和感を持つはずじゃろ？ 当然そんなところで煙草なんぞ吸ってみろ。ライターの花だけでドカーンじゃろうが」

言われていれば確かにと臯月は思った。

「しかも、遊火が見えていた小坊主に話を聞けば、その寺なあ、台所に水の入ったペットボトルを置いておったんじゃよ。花を一輪ほど入れたな」

「それじゃ火災の原因って……」

臯月は咄嗟に遊火を見やった。

「いや、花を置いたのは、他ならぬ住職の妻だったんじゃよ。しかも、燃え始めたとき、勝手口の鍵は閉まっておって、廊下から台所に入るには戸を開けないかんのじゃがな、門が刺さっておった」

「それじゃ火事に見せかけた殺人ってこと？」

臯月がそう尋ねると、拓蔵は少し考えてから頷いた。

「でも、共通して窓に何かを置かって、風水か何かかしらね？」

「そう云えば、もうひとつ共通したものがあつたんですよ。家の住人がある占い師から窓際に水がはいったものや水晶玉を置くと運気が上がるって云われたそうなんですよ」

それを聞くや、三姉妹と拓蔵は呆れた表情を浮かべる。

これは別に阿弥陀警部に対してのものではなく、被害者に対してである。

「要するに、素人を騙していたってことだけど、それを狙っていたとは考え難いですね」

「阿弥陀警部？ その占い師、少し事情聴取出来んかのう？」

「まあ、やってみます。火災が起きた原因もわかったわけですが、やはり焼死体の原因もそれなんでしょうかね？」

阿弥陀警部がそう尋ねると、拓蔵は難しい顔を浮かべる。

「だといいんじゃないかなあ……」

その言葉に三姉妹と阿弥陀警部は首を傾げた。

翌日、阿弥陀警部は拓蔵から云われたとおり、事件があった家の人間に助言を与えたという占い師のところに来ていた。

占い師の店は商売繁盛、結構有名のようで、祝日という事もあつてか、行列が出来ている。

「これ、終わるのって何時くらいなんでしょうかね？」

阿弥陀警部が呆れたように、隣にいる佐々木刑事に尋ねる。

「わしは占いなんぞ信じんほうじゃからなあ？ まったく人に左右されて何が面白いんだが、神様仏様なんぞ云つとるがなあ、結局やるのは己の力じゃろうよ？」

佐々木刑事はそう言いながら、煙草を一本吹かした。

「ははは、その頼られる仏様がここにいるんですけど。まあ、私たち神仏は何をするわけでもないんですよね。ただ頼るのは何かに縋りたいからでしょうけど」

阿弥陀警部……いや、阿弥陀如来は苦笑いする。

夕方くらいになると、人も疎らになり、そろそろ店仕舞いだと判断するや、阿弥陀警部と佐々木刑事は占い師の店の裏側に回った。

店のドアから占い師が出てくるや、阿弥陀警部と佐々木刑事はそれに近づく。

「すみません。私警視庁の阿弥陀と申しましてね。ちょっとお訊ねしたいことがあるんですよ」

阿弥陀警部が警察手帳を見せ、占い師に話しかける。

「警察の人が何の御用でしょうか？」

「実は、先日四件ほど火災事故が起きましてね。その原因が収斂火災によるものなんですよ。で話を聞くと、被害にあつた家はあなたから占いの結果で、窓に水の入ったペットボトルやら水晶玉を置くようにと云われたそうなんですよね？」

阿弥陀警部がそう質問すると、占い師は

「ええ、確かに私はそういました。ただ……」

「ただ？」

「それもまた運命でしょう。占いとは本来相手に助言することですから。あの方たちには水と光が足りませんでしたからね。光を集めるという意味でしたまでのこと」

占い師が微笑するや、阿弥陀警部を一瞥する。

「その結果として、今回の収斂火災ですが、それは見通せなかったつてわけですか？」

「私の占いが原因で火災が起きたのなら謝りましょう。ですが、それを断言できるとは思えませんか？」

占い師はもう一度阿弥陀警部を見る。

その表情は先ほどの微笑とは違う、どこか禍々しいものがあつた。

「取りあえず、署までご同行願えませんか？ あなたには色々と言いたいこともありますから 特に七年前の事件に関してをね」

阿弥陀警部は佐々木刑事の車に占い師を乗せる。

阿弥陀警部と佐々木刑事は、占い師が抵抗すると思っていたが、占い師は素直に車に乗った。

拾・色香

「拓蔵？」

部屋で考え事をしていた拓蔵に、瑠璃が声をかける。

「瑠璃さん。七年前の事件、覚えておるかの？」

「あの事件ですか？ 人間がしたこと考えると、火災が大きかったことからガス爆発によるものと考えていましたが、やはりそうなる以前の問題ですよね？」

瑠璃は当時の事件を警察側として知っているからこそ、拓蔵が何に疑問を持っているのかがわかった。

「やはりガス爆発は無理があるやなあ？ 大体臭いでガスが漏れていたたり、ガソリンの臭いがしとるはずじゃろうからな」

「それに焼死体の形状も不可解でしたしね。あれだけ燃えていたのに、死体は黒焦げどころか、皮が焼け爛れたただけだった」

寺と一緒に燃えていたのなら、死体は黒焦げになっているはずである。

しかし、発見された焼死体は、まるで熱にあてられたかのように、焼け爛れていたのである。

それが今回の焼死体と似ていた事が、拓蔵にとって不可解だった。

「それに死因は全身火傷によるもの。火傷で済むわけがないじゃろうよ」

「それではあの時も、そして今回の事件も 妖怪の仕業？」

「葉月が霊視しようとした時、写真に弾かれておったからな、そう考えてもいいじゃろ」

しかし拓蔵はそれで納得しているわけではなかった。

「阿弥陀くんから話を聞いたんじゃがなあ、占い師に鑑定してもらったのは、その家の主人だったんじゃよ。占い師は結構美人らしくてなあ、まあいい女に騙されるのは、男の性^{さが}じゃろうて」
それを聞くや、瑠璃は頬を膨らませ、拓蔵を睨みつけた。容姿からして可愛らしく見えるが、拓蔵の妻だけあって、嫉妬の怨が感じられなくもない。

「あの事件、結局は証拠不十分で、緋野重摩は逮捕されなかったんだね」

「しかも誤認逮捕ってことで、結構娘たちには辛い思いさせてしまいましたしね」

拓蔵と瑠璃は表情を暗くし、はあっと溜め息を吐いた。

「拓蔵は緋野重摩が妖怪だという事に気付いて、そのようなことをした」

「ですが、やはり彼女が殺せた証拠はなかったですからね。結局あの事件は藪の中」

「芥川龍之介の小説でしたっけ？ 結局真相は誰も知らない藪の中」
瑠璃はゆっくりと天井を仰いだ。

芥川龍之介の短編小説である『藪の中』は、若い盗人に弓も馬も何もかも奪われたあげく、藪の中で木に縛られ、妻が手込めにされる様子をただ見ていただけの情けない男の話である。

語り部は妻の気丈さと若い盗人の男気を褒め称えて、話を締め括っている。

この情けない男を殺し、殺人事件に仕立てたのが『藪の中』である。

この作品では、藪の中で起こった殺人事件を七人の証言者が証言、告白するという形式でなりたっている。

捕らえられた盗人、清水寺で懺悔する男の妻、巫女の口を借りて現れた男の霊のそれぞれの当事者三人の証言は、藪の中で盗人が男を木に縛り付けて男の目の前で女を手込めにしたことは一致しており説得力はあるのだが、男の死因についてそれぞれ、「偶然」「他殺」「自殺」と見事に食い違っており、結局どれが真相なのか、誰が犯人だったのかは全て有耶無耶のままになっている。という作品である。

今なおこの作品の真相が研究されているが、真実に行き着いたものはない。

そのことから、事が不十分や有耶無耶というはつきりしない物事を表した言葉として使用されている。

「まあ、わかっていることとすれば、ひのえんま 緋野重摩……飛縁魔は坊主と不倫関係だったことと、その色香に惑わされて、住職は己の身を焦がしたということなんじゃがな」

飛縁魔は外見は菩薩のように美しい女性でありながら、夜叉のように恐ろしく、この姿に魅入った男の心を迷わせて身を滅ぼし、家を失わせ、ついには命を失うと伝えられている。

今回の火災事件も、結局はそれによるものであった。

「ただひとついえることは、今の皐月や信乃が、飛縁魔に勝てると思えないことですね」

瑠璃は溜め息を吐く。皐月に自分の真言を伝え、そのご利益による力を与えたとしても、今の皐月では諸刃の剣であると、海雪から報されていた。

飛縁魔の名称は『火の閻魔』という。即ち『火炎地獄の裁判官』を意味しており、同じ閻魔の別称を持っている地蔵菩薩だったことから、瑠璃はその力を知つての判断である。

「今回も証拠不十分。火災原因も占い師から助言を受けたことを実行してのことだったとしても、それを立証する事はできない。阿弥陀警部に逮捕ではなく、事情聴取にしたのは、自分が犯した過ちを味あわせたくなかったからですか？」

瑠璃がそう訊ねると、拓蔵は少しばかり考えるや、答えるように頷いた。

「結局、今回も逃がしてしまっただということですか……　しかも今回は飛縁魔がひとりと考えての事とは思えない」

瑠璃が発した言葉の意味を拓蔵は問う。

「事件が起きたのは、皐月が目の前で大宮巡査が襲われたことで暴走し、精神が不安定になっただけから然程経っていない時に起きた。それって余りにも偶然過ぎませんか？　まるでタイミングを見計らったように事件が起きている」

「それを知っておるのは、わしや弥生に葉月、瑠璃さんと脱衣婆以外だと、阿弥陀警部、佐々木刑事、湖西主任くらいじゃな」

拓蔵が言い切ると、瑠璃は険しい表情を浮かべた。

「いえ、今回の事件、裏で引いているものがいたとすれば、虚空蔵菩薩でしょうね。皐月を追い込んだのは虚空蔵菩薩でしたから。それに奴は六年前に起きた転落事故が皐月に原因があると云っていた」
その言葉に拓蔵は戸惑うが、結局のところ、転落事故も藪の中である。

しかしあの時、車を運転していた健介が見た車は、本当に『実在していたのか』。それは誰も知らないのだ。

瑠璃はこの六年間、五七日における地獄裁判出席、六道や賽の河原で弱い魂を救済していた最中、あの転落事故の真相を調べていたが、霧が覆ったかのようにわからないのだ。

四日後、阿弥陀警部から占い師は証拠不十分という理由から釈放されたとの連絡が入った。

留置期間は警察は四十八時間、検察側が二十四時間の計七十二時間 三日間とされている。

この時、勾留請求が行われ、裁判所がそれを認めれば、後十日は留置されるのだが、それが認められなかったのである。

拾巻・殺気

阿弥陀警部から占い師が釈放されたという連絡を受けた翌日。三姉妹は大宮巡査のお見舞いに、警察病院にきていた。

弥生と葉月は、大宮巡査が意外にも元気だったことに驚きを隠せないでいる。

彼が助かったのが、彼の守護霊である彩奈の想いによるものもあるが、その大半は瑠璃の力によるものであったのだから。

その事を知らない弥生と葉月が驚くのも無理はない。

「阿弥陀警部の話だと、事件は火災に巻き込まれたことで、殺人との関係性は薄く思っているそうだよ」

そう大宮巡査は話すが、誰一人それに納得していなかった。

もちろん、話した大宮巡査自身でもある。

「それで、どうするんだい？ またこの事件みたいに奇怪な事件が起きるかもしれない」

「心配しなくても、私たちは閻魔さまから命を助けてもらった恩義がありますし、何よりこの力を必要とされているのなら…… それを利用されていようといまいとね」

大宮巡査は、以前弥生が云っていた事を思い出す。

『力を利用するのと、助けてもらうのは違いますよ？』

「今でもそう思ってるのかい？」

大宮巡査は弥生に尋ねる。弥生は何事かと思い首を傾げるが、自分の云った言葉に覚えがあり、頷く。

「まあ、それもまたいいかなと思ってます。結局私たちのしてるこ

とって、妖怪退治というより、助けているって感じもしますしね」
執行人は妖怪を退治することが目的ではなく、妖怪に罪を償わせることが本来の役割である。

警察だつて一緒だ。逮捕は人生を終わらせることではない。犯人に罪を償ってもらふことにある。

それが冤罪ならば、その証拠を見つけ、被害者の無実を晴らしてやるのもまた、警察の仕事であり、執行人の仕事でもある。

「それじゃ、夏休みも入ったことだし、毎日来てもいい？」

葉月が大宮巡査に尋ねる。

「別に構わないけど」

大宮巡査がそう答えると、葉月は笑みを浮かべる。皐月と弥生も同様であった。

「そつだ。三人とも、これ……」

大宮巡査は一枚の写真を皐月に渡した。

「こ、これって お父さん？」

弥生が驚いたのも無理はない。写真は表彰台の一位に立っていたのは、三姉妹の父親である健介がまだ幼い皐月を抱きかかえている写真であった。

「昨日、阿弥陀警部にお願ひしてね。僕の部屋から、君たちのお父さんが優勝したレースの映像が録画されたビデオテープを持ってきてもらつて、鑑識課にお願ひして印刷してもらつたんだ」

皐月は写真をギョツと胸に抱き、「ありがとうございます」と涙を流しながら、大宮巡査に礼を言う。その目からは大粒の涙が零れていた。

その帰り、三姉妹は約束していたケーキバイキングを堪能し、家

路に着いていた時だった。

「今月の小遣い、すっからかん」と、皐月は財布の中身を確認しながら愚痴を零す。

「援助はしないわよ？」

弥生が冷たい口調で言う。「わかってる。二人に心配させてたからね。それに遊火にも」

皐月は頭上で浮上している遊火を見るや笑みを浮かべる。それを見ている弥生と葉月も。自然と笑みを浮かべた。

ふと、誰かの視線を感じ、三姉妹は視線の先を一瞥する。そこには阿弥陀警部が云っていた、占い師の店である。

夏休みに入ってることもあって、平日とはいえ行列が出来ている。

「占いは当たるも八景、当たらぬも八景ってね」

皐月がそう云うや、葉月は頷く。

「そうね。それに先の見える人生なんて、初見で攻略本読んてるよ
うなもんじゃない。わかんないところがあつたら読むけど、でも基本的にはないほうが……」

弥生が笑いながら云うが、次第に表情は硬くなっていく。

「さっ、早く帰りましょ」

まるで何かに取り憑かれたかのように弥生がそう云うや、皐月と葉月もそれに同意する。

遊火はそんな三姉妹を見るや首を傾げ、後を追いかけていく。

三姉妹の足並みは早く、何時しかそれは走りになっていた。

稲妻神社の近くに差し掛かると、三姉妹は荒い息を整える。

「な、なに…… なんなの？ 今の殺気」

弥生はガタガタと肩を震わせ、嗚咽する。

「あんなの、今まで感じたことない」

葉月に至っては、顔を歪め、大粒の涙を流している。

「はあ…… はあ……」

皐月は息を整えるので精一杯だった。

彼女たちの様子は、まるで火事が起き、煙の中を彷徨いながらも、漸く外に出て、新鮮な空気を吸っているといった感じである。

「ど、どうかしたんですか？」

遊火がそう尋ねると、三姉妹は信じられないといった表情で遊火を見やった。

「あんだ！ あれだけ強い殺気こもった視線を向けられていたのに、何も感じなかったの？」

弥生がそう怒鳴るように訊くや、遊火はビクツとし、肩を窄める。「やめて、弥生姉さん。あの殺気、ただの人間が持つてる怨念がこもった殺気じゃなかった」

皐月がそう云う。弥生自身もわかっていたこととはいえ、怒鳴らずにはいられなかった。

「わからないけど、人とは違う…… これだけは絶対いえる。あの殺気は『殺す』って、それだけの感情しか感じられなかった」

葉月は三姉妹の中でも一番霊感がある。だからこそ、あの殺気が特殊であると感じたのだ。

自分たちですら知らない力を持ったなにかがいることを、三姉妹は心のそこに恐怖する。

ふと皐月は空を眺める。夕日が沈みかかっていた。

その赫々とした風景が、まるで燃え盛る炎のように見えた。

拾巻・殺気（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。と同時にお疲れ様でした。これにて姦、第一部を終了します。

まだまだ回収し切れていない複線がありますが、それは第二部にて回収できればいいなと思ってます。引き続き、当作品をよろしくお願ひします。

「あつい、アツイ。暑い！」と、皐月はTシャツ一枚に、短パンというラフな格好で、扇風機の前に鎮座しながら、文句を述べる。「るっさいわねえ。そんなに暑いんなら、水風呂にでも入れればいいでしょうが？」

壁に凭れながら、裁縫をしている弥生がそう云うや、「蒸し暑い。乾涸ひからびる」と、皐月は聞く耳を持たない。それを聞いて、弥生は呆れた表情でため息を吐いた。

「はづきいゝ、氷ない？ かき氷」

皐月が厨房にいる葉月に声をかける。「あるわけないでしょ？」

この前買ってきたの、殆どあんたが食べてたじゃない」

弥生が呆れた表情でそう聞き返した。

弥生はだらしなく猫背になっている皐月を見ながら、縁側の方に目を遣ると、

「あ、猫……」と口走るや、皐月はビクツと体を動かし、居間の隅っこへと避難した。

その表情は恐怖に震えているといつてもいい。

「あ、ほんとだ。どっから入ってきたんだろ？」

厨房から麦茶を飲みながら出てきた葉月がそう言う。彼女の目線の先には、開けられた雨戸があり、そこから本堂と、庭園が見える。

縁側に白猫が上がりこんでおり、ニャア〜ツと鳴いた。

葉月が近付くと、猫は逃げる素振りを見せるどころか、ゆっくりと葉月に近付いていく。

「飼い猫かしらね。だいぶ人に懐いてる」

葉月は床にコップを置くと、中腰になり、猫を抱きあげながら、

「猫さん、どこから来たの？」と尋ねたが、猫が答えるはずもない。「な、何でもいいから、早くどこかにやって」と、皐月はへっぴり腰になりながら言う。

「別に恐くないでしょ？」

弥生がそう云うや、葉月も同意するように頷いた。

「だいたい、あんた自身は猫嫌いじゃなかったでしょ？ 大黒の神し使んしがネズミだからって、毛嫌いしすぎ」

弥生の言う通り、皐月自身が猫を嫌っているわけではない。

ネズミの天敵は猫である。ただそれだけの理由もあるが……

「それはそうなんだけど。猫アレルギーなの知ってるでしょ？」

皐月が涙目になりながら訴えると、玄関の方からチャイムの音が聞こえ、話は中断された。

「葉月い、今、手が放せないから、かわりに出て」

弥生に言われ、葉月は猫を抱きしめていた手を放すや、縁側からスリッパを履き、玄関の方へと駆けていった。

「ちよ、ちよっと！ 葉月い！ ねこっ！」

皐月が叫ぶや、猫は居間へと入ってきた。

「ちよ、ちよっと待って。こないで……」

皐月の懇願こんがんも空しく、猫は皐月の足元まで歩み寄る。

「っ！」

皐月の意識はそこで途絶えた。

「お邪魔します。 って、あら？ 皐月ちゃんどうかしたの？」

弥生の友人である片桐千夏が居間に入るや、気絶している皐月を見つけ、何事かと首を傾げる。

「気にしないで、そこにいる猫に気を失ってるだけだから」

弥生は裁縫の手を休めず、皐月を横目で見ながら、千夏に説明する。

皐月の近くには先ほどの白猫がおり、皐月の頬を舐めていた。

「　　っと、葉月い！　治ったわよ。ぬいぐるみ」

そう云うや、弥生は葉月に向かって、ウサギのぬいぐるみを放り投げた。

耳の付け根部分に縫い合わせた跡がある。

「ありがと。弥生おねえちゃん」と葉月は笑みを浮かべながらお礼を言う。

「もう少し大事にしなさいよね」

弥生にそう云われ、葉月は「うんっ！」と答えながら、ぬいぐるみをなおしに、自分の部屋へと戻っていった。

「で、千夏。頼んどいたやつ、出来上がった？」

弥生がそう尋ねると、千夏は自分のキャリーバッグから、服を取り出し、広げて見せた。

それはちょうど弥生が着れるサイズの、袖にフリルのついたドレスで、胸元には紐が交差され、色は黒が強調されている。

「しっかし、あの人のロリコン趣味も困ったものね？」と弥生は呆れながら言う。

「でも、こういう手芸趣味もあるから侮れないわよ。あの人、そういうの有名だから、頼みに来るコスプレイヤーも多いんだって」

ドレスのベースは弥生が作ったもののだが、テスト勉強で忙しかったせいもあり、フリルをつけるところまでは手が回らなかった。

千夏にお願いして、その人物　あきはつひ 穂原翔のもとへと送ってもらっていた。

「うし、これで今度のイベントでコスプレ出来る」

弥生はドレスをひろげるや、早速その場で着替える。

そして五分後……

「ふふふ、怒っちゃ駄目、血圧上がっちゃうわよ。乳酸菌取ってるう？」

と、妖艶な笑みを浮かべながら、弥生は言葉を発した。

「あー、似てる似てる。腹黒いところとかあんだそっくりだわ」

千夏は両手をペチペチと叩きあわせながら、賛美する。が、その声は棒読みであった。

「それ、貶してない？」

弥生がキツと睨みつけると「別に……」と千夏は視線を逸らした。

「それじゃ、衣装合わせもしたし、今日は帰るわ」

「ありがとう。後は自分で調整するわ」

弥生と千夏が玄関で一、二度ほど会話をしていたときだった。千夏の携帯が鳴り出す。

「はい。千夏ですけど…… あ、穂原さん。お疲れ様です」

電話の相手は穂原翔である。

「え？ あ、はい。一応訊いてみます」

千夏は弥生を見やる。

「あのさ？ 皐月ちゃんか葉月ちゃんのどっちかでもいいから、今度の日曜日、暇じゃないか尋ねてくれない？」

そう云われ、弥生は家の中に入り、皐月と葉月を玄関へと連れてくる。

その件は単調なので省略。

「千夏さん。何？ 用事って」

皐月がそう尋ねると、千夏は皐月の体を嘗め回すように見つめ、次に葉月の体全体を同様に見つめる。

「今度の日曜日、暇？」

そう訊かれ、皐月と葉月は互いの顔を見やる。

「別に特に用があるわけじゃないですけど」

皐月は、本当なら入院している大宮巡査のお見舞いに行きたいのだが、瑠璃から、後々の事があるので、学業に支障を齎してはいけないと、週に4回という決まりにしていた。

元々警察病院の面会時間は夕方になっているため、殆ど忘れてい
る事が多いが。

それ以外は特に用事という用事もないため、皐月は暇だと答えた。
「葉月ちゃんは？」と千夏に尋ねられ、葉月も暇だと答える。

「二人大丈夫です。一人は中学二年生、もう一人は小学四年生です」
千夏が電話の相手、穂原に伝える。

「な、なんかあるの？」

皐月は少しばかり引き攣った表情を浮かべながら、弥生に尋ねる
が、

「まあ、大丈夫でしょ」と自己解決し、皐月の質問には答えなかつ
た。

その当日、日曜日。

早朝から皐月と葉月は、弥生と千夏に連れて行かれるように、と
ある会場へと来ていた。

「えっと…… 皐月おねえちゃん、今何時だっけ？」

葉月がその光景に後退りながら、皐月に時間を尋ねる。

「あつ…… っと、9時だけど」

皐月も皐月で、この状況が理解できていなかった。

二人はイベントが始まるのは午前11時からと聞かされていたた
め、早く来たから、周りは伽藍堂になっていると思っていたのだが、
会場前は長蛇の列で人が溢れている。

「甘いわね二人とも。私たちは手伝いで来てるのよ。サークル参加
者はこの大イベントに参加する半年以上前から戦争なんだから」

弥生の力説に若干引きながらも、葉月はその事について尋ねる。

「まずはサークル参加における申し込み。この抽選に受かったサー
クルは、当日新刊を出す準備をする。いや、抽選する前から準備す

るサークルもいるわ。後はサークルでの売り子集め、大体知り合いが多いけど。時間に余裕が出来たら、突発でコピー本を出すサークルもいるし、行列が出来る壁サークルは必然的に人の流れが激しく……」

「まあ、要するに私たちは知り合いのサークルの手伝いをするって事」

「それと、私たちが呼ばれたのは関係あるの？」

皐月がそう尋ねると、

「ああ、弥生さんに千夏さん。今日はよろしくお願いします」

皐月と葉月の背後から、男性が声をかける。

「ああ、穠原さん。今日はよろしくお願いします」

千夏と弥生が挨拶するので、皐月と葉月も挨拶しようと振り向くや 絶句した。

穠原翔の身形はぼつちやりとしており、顔は脂汗をかいている。チエックのカッターシャツを着てはいるが、ボタンが開いているため、その下に着ているTシャツは、アニメキャラのデザイン柄であった。

お世辞にもカツコいいとはいえない身形である。

「あ、紹介します。こっちが次女の皐月で、こっちが三女の葉月です」

弥生は穠原に皐月と葉月を紹介する。

「お、おはようございます」と皐月と葉月は躊躇いながら挨拶する。

「ああ。おはよう」と穠原は返事を返したので、見た目と違って、いい人なのかもしれないと皐月が思ったときだった。

「ところで葉月ちゃんっていくつ？」

穠原が葉月に尋ねる。「へっ？ 九つですけど？」

それを聞くや、穠原は興奮するように「幼女萌えっ！」と叫ぶ。「葉月ちゃんがいれば百人力。いや、あのコスプレをすればもつと

「コスプレさせるたって、サイズ合うやつなんてないじゃないですか？」

千夏がそう云うと、弥生が不敵な笑みを浮かべた。

「こんな事もあるうかと、夜中こっそり部屋に忍び込んで、筆筒からこれをもってきました！」

弥生がキャリアバッグから衣服を取り出し、広げて見せると、千夏と穠原は絶叫した。

「ちよっ？ へっど？ はあ？ まっ！」

葉月は悲鳴を上げるように混乱する。というよりもこの状況が理解できないでいた。

弥生が見せたのは、葉月の体操服である。

「葉月の学校はデザイン服だからね。しかもパンツは短パンじゃなく、絶滅危惧されているブルマ！」

「おおっ！ なんとという、なんとという嗜好。弥生どの、おぬしも悪よのう」

「いえいえ、お代官様。これだけではありません」

弥生はキャリアバックからもう一枚取り出す。

「***のコスプレ衣装なんてどうでしょうかねえ？」

「おお。これはまた見事に…… 確かにこのキャラはびったりですなあ」

弥生と穠原の会話を見ながら、皐月は葉月に尋ねる。

私たち、生きて帰れるのかしらね？……と。

吉・集（後書き）

第十二話です。そういえば弥生の趣味はゴスロリだったなあと思いで出して書きました。

式・赤い靴

イベントが開始されるや、人込みが高波のように押し流されていく。

「危ないですから、走らないで下さい」という場内アナウンスも、ルールを守っていない人間には効果がない。

いち早く人気サークルの新刊を手に入れようと必死なのである。

既に先日出来上がったコスプレ衣装に着替えていた弥生と千夏は、サークルスペースからその様子を横目で見ていた。

「すみません。この本下さい」

女性が、飾り付けられたスペース（ひとつの机半分が1サークルのスペース）の上に積み重なった薄い本をひとつ手に取り、弥生に尋ねる。

「あ、はい。えっと…… 三百円になります」

弥生がそう云うと、女性はバッグから財布を取り出し、料金分の小銭を渡した。

「あ、それとよければ、スケブもお願いします」

「あっ、と…… 千夏、スケブ」

そう云われ、千夏は女性に声をかける。

「ありがとうございます。それで何にしましょうか？」

「えっと、****をお願ひします」

女性はそう言いながら、スケッチブックを千夏に渡す。

「わかりました。それじゃ10分くらいあとに、一度スペースまで様子を見に来てください。そのときくらいには出来てると思いますので」

千夏がそう云うと、女性は頭を下げ、人込みの中に消えていった。

千夏はパイプ椅子に座り、膝の上に先ほど女性から受け取ったスケッチブックを捲っていく。

そして何も描かれていないページに、女性から言われたキャラクターの絵を描いていく。

弥生は客の対応をしながら、たまに千夏へのスケッチ依頼を対応していく。

千夏はさすがに限られた時間内では多くをこなせないため、リクエストは開始1時間で締め切った。

「そういえば、皐月と葉月は？」

弥生はそう言いながら、辺りを見渡す。

弥生と千夏は、皐月と葉月と一緒に女子更衣室に入り、着替えていたが、弥生と千夏はサークルの手伝いがあるため、先に出ていた。

「ほんと、遅いわよね？ もう始まって30分経つけど」

千夏は時計を見ながら云う。イベントが始まったのは午前11時で、彼女たちは入場後、更衣室に行っている。

着替えが終わったのが午前11時10分。特別、皐月と葉月の衣装が複雑というわけではないのだが

「あ、穂原さん」

スペースに戻ってきた穂原を見つけた千夏が声をかける。

穂原の手には紙袋がぶら下がっており、その中には何冊かの薄い本が入られている。

「皐月と葉月見ませんでした？」と弥生が尋ねると、

「皐月ちゃんと葉月ちゃんだったら、さっき撮影されてたよ」

そう云われ、弥生は店番を穂原にお願いし、皐月と葉月を探し始めた。

コスプレ撮影はスペースが指定されているため、すぐに見つけたが、弥生は皐月と葉月の慌てぶりを遠くから見ながら噴出していた。

「すみません。ポーズお願いします」

カメラを持った女性が皐月をお願いするが、皐月は今自分がしているコスプレのキャラを知らない。

皐月の衣装はあるゲームの忍者衣装で、青の忍衣装に白のマフラー。それ以外は普段と変わらず、髪をうしろに束ねている。

「皐月、小道具にクナイあったでしょ？ それで忍者みたいなポーズすればいいのよ」

そう云われ、皐月はクナイを右手に持ち、ポーズをとった。それを見るや、周りのカメラを持った男女が写真を撮りはじめる。

「すみません、こつちに視線お願いします」

皐月は声をかけられたが、耳が若干悪い皐月はそれに気付かなかった。

それが引き金となったのか、男性は大声を出し、皐月は漸くそちらに振り返る。

「なんだよ。聞こえてるんだったら、さっさと反応しろよ」と呟く。皐月はそのことを知る由もなかった。

(さてと、皐月はとにかく、葉月は　　と)

弥生は再び辺りを見渡すと、

「かあわいい。こつちむいてえ！」

女性の黄色い声が聞こえ、弥生はそちらを覗き込む。

そこには頭に赤の兜巾とんを被り、白いもふもふとした首飾りをつけ、白のシャツに、巫女衣装の袖。黒と赤のスカート。そして犬耳を着けている葉月であった。

葉月は少しばかり照れながら、対応していく。

それがなんとも愛らしく見えるのか、カメラを構えているものたちしが、頻りに悶絶もんせつしていた。

弥生も弥生で、撮影スペースにいたせいか、写真を撮らせてほしいと頼まれる。

断るのは無粋だと思い、弥生もそれに応対する形となってしまった。

三人が解放されたのは、丁度十二時になるくらいであった。

「しっかし、何が面白くて、写真とか撮ってるのかしらね？」

皐月は襟元をパタパタとする。

「あのね。コスプレってのは、そのキャラになりきるってのが」「一応いっておくけど、姉さんの趣味に、私たちまで道連れにしないでよね？」

皐月はそう言いながら、背伸びをする。

「それで、穠原さんと千夏さんはどうしたの？」

葉月にそう尋ねられ、弥生は「スペースで客の応対してるから、私たちもそろそろ」と、立ち上がった時だった。

人の気配とは全く違う、かといって、妖怪ともいえない不思議な気配を、三姉妹は感じた。

「な、なにこの気配？」

葉月は皐月にピタツとくつつく。

「あの入込みから感じるけど……」

弥生の視線の先には人集りひとだかが出来ており、皐月は弥生に葉月をお願いし、その人集りの中に入っていく。

「うおーっ、テラかわゆす！」

「ちょっと、なに、この子？ 似合いすぎ」

という声が聞こえ、皐月は目の前にいる少女を見た。

少女は白と黒のゴスロリ衣装を着ており、頭に猫の耳、おしりに尻尾を着けている。

皐月はその少女に見覚えがあったが、少女が普段している衣装以前に、そもそもこんな場所にいるとは思えず、すぐには理解できな

かった。

「ってか？　なんで浅葱がここにいるのよ？」

皐月が声をかけると、少女　浅葱は皐月に気付く。

「なんじゃ？　皐月も面妖な服を着とるが、ここはそういう類の集まりか？」

浅葱は首を傾げながら、皐月に尋ねる。

「それは、弥生姉さんから知り合いの手伝いにつて、一緒に……それよりも、どうして浅葱がここにいるの？」

「私はただの暇潰しじゃよ？」

そう云うや、浅葱は権化を解き、皐月以外には姿が見えないようにする。

突然目の前に人がいなくなったことでパニックが起きるかといえ
ば　そうではなく、消える前に自分の姿を見ていた三姉妹以外の
記憶から、浅葱は自分の記憶だけを消した。

当然、写真を撮っていたものたちは互いに写真を撮っているだけ
の姿が写った写真だけがデータに残っていた。

「はあ　っ」と皐月はドツと疲れがでてしまい、溜め息を吐く。

イベントは無事終了し、その打ち上げにと、三姉妹と千夏、穠原
の五人はレストランへと来ていた。

「どうかしたの？」と千夏が尋ねると、

「あ、すみません。ちょっと知り合いにあつて」

皐月はそう言いながら、お水を飲む。

「それじゃ、今日は一日お疲れ様。皐月ちゃんと葉月ちゃんもあり
がとうね」

穠原はそう云うと、封筒を皐月と葉月に手渡す。

それを見て、皐月と葉月は封筒と穠原を交互に見た。

封筒の中身を見ると、それぞれの封筒に五千円札が1枚入っている。

「ちょ、いいですよ」と皐月と葉月は封筒を穉原に渡し返す。

「いやいや、今日はスペースに皐月ちゃんたちがいたお蔭で、いつもよりも売り上げがあったからね。新刊は完売したし」

そのお礼だと、穉原は皐月と葉月に言う。

「バイト代と思って受け取りなさい」と弥生に云われ、皐月と葉月は、穉原からの恩義に従う事にした。

「えっ？ あの時の人集りにいたのって、橋姫さまだったの？」

駅までの帰り道、皐月は弥生と葉月に、会場で浅葱に会ったことを話す。

「見間違いないじゃないの？ 浅葱さんがああいう場所にいるとは思えないし」

葉月が不思議そうに首を傾げる。そのことは皐月も同感であった。「まあ、またいつもの気紛れでしょうけどね」と、皐月は浅葱が会場にいた疑問を気に留めようとはしなかった。

駅の近辺に着くと、改札口の方に、小さな女の子がペンチに座っているのを、葉月が見つける。

女の子を見て、葉月は顔を顰める。

「どうかしたの？」と千夏が尋ねると、葉月は女の子を視線で示した。

千夏はその女の子を見るや、顔を歪めた。

髪は肩まで伸びており、赤い服を着ている、どこにでもいる女の子に見えるが、靴を履いておらず、足は泥塗れになっており、よくよく見てみれば、足の甲が赤くなっている。

「ねえ？ どこかに靴を忘れたの？」

葉月がそう尋ねると、女の子はキョトンとした表情で葉月を見つめる。

そして首を横に振った。

その仕草を葉月は理解出来なかった。

少女は葉月の問い掛けに答えただけである。

そう、少女は“靴を忘れたのか”という問い掛けに答えただけだ。首を横に振るといふ仕草は、“否定”を意味しているため、靴を忘れたといふ事にはならない。だからこそ、葉月は少女の仕草に理解出来なかった。

「ちょっと、李夢^{リム}。こんなところにいたの？」

30代くらいの女性が、怒鳴り声を挙げながら、女の子 李夢

の手を引っ張る。

「あつ！」と葉月が声を挙げると、

「なに、あなた？」と女性は葉月を睨みつける。

葉月はそれ以上何も聞けなかった。

「ちょっと、あんたあの女の子の母親なんですか？」

穂原が女性に尋ねると、

「ええ、そうよ。だからそこを退いてくれないかしら？」

「李夢ちゃんでしたっけ？ どうして靴を履いてないんですか？」

「それはこの子が勝手に家から出て行って」

穂原は女性の言葉に違和感があった。果たしてそうなのだろうか
と

李夢の容姿は、葉月よりひとつほど下に見える。それくらいだったら、外を出るときは履物を履くというのを知っていなければいけない。それが勝手に出て行ったとしてもだ。

「さあ、もういいでしょ？ そこを退いてくれない？」

女性は半ば強引に、穉原の横を通っていった。

穉原は李夢に靴を履かしてやらないのかと尋ねようとしたが、近くに車が止められており、母子おやごはそれに乗り込んでいくのが見えた。

「葉月、気にする事じゃないわよ」と臯月が声をかけるが、葉月はどうしても李夢のことが気になっていた。

そしてそれは穉原も同じである。しかし気に留めるだけで何もしなかった。

そう、事件が起きるまで……

参・定説

三姉妹が実家である稻妻神社に戻ったのは、ちょうど夜七時を回ったころだった。

玄関の引き戸を開けると、ほんのりとした甘い匂いがし、三姉妹は首を傾げる。

この神社の神主であり、三姉妹の祖父でもある拓蔵が、厨房で料理をしているのだらうと、一瞬思ったが、

「爺様つて、確か料理駄目じゃなかった？」

臯月が生唾を飲み込み、そう言うと、弥生も生唾を飲み込むや、頷いた。

「葉月がヨダレ垂らすくらいだからね。ほら、拭きなさいな」

葉月がダラダラとヨダレを垂らしている。これは美味しい匂いがした時ならば、誰だって起こりうることなのだが、弥生と臯月も、葉月と同様、ヨダレの分泌量が半端ではなかった。

原因を確認するため、三姉妹は匂いがする居間の方に行くと、長方形の卓袱台の上に、酒の肴が置かれており、拓蔵が酒を飲んでいった。

その隅には徳利とくひが二本置かれている。

「瑠璃さんや、もう一本作れんかの？」

拓蔵がそういうや、「少しはおさえたらどうです？ 最近飲み過ぎだつて、弥生が云ってましたよ」

厨房の方から、瑠璃の声が聞こえ、三姉妹は首を傾げると同時に、匂いの原因が何なのかを理解した。

臯月と葉月は、一度自分の部屋に戻り、残った弥生が厨房を覗くと、

「あら、お帰りなさい」

瑠璃にそう言われ、弥生は少し躊躇い、会釈する。

「今日は一段と暑かったでしょ？ もうちょっとで肉じゃがができますから」

（匂いの原因はそれか）と、弥生は思った。

小さな鍋の中には、大きく切られたジャガイモやニンジン、タマネギが入られている。

甘い匂いは、醤油や酒、味醂、そして砂糖を混ぜているからだっ

た。瑠璃の姿を翌々見てみると、普段は髪をお団子に纏めたヘアスタイルなのだが、それをほどき、髪を頭のうしろに掻きあげ、髪留めで止めているため、髪がうしろに跳ねている。

さらには割烹着を着ているため、傍から見ると、小さな女の子が一生懸命料理をしている姿に他ならない。

「何か手伝いましょうか？」

弥生はそういうが、まな板の上や、シンクなどを見ると、タマネギの食べられない皮の部分や、ジャガイモの皮が三角コーナーに捨てられていることに違和感を感じる。

瑠璃にニンジンの皮は？と尋ねようとすると、二つあるガスコンロのもうひとつには、金平牛蒡が作られていることに気付く。

なるほど、ニンジンの皮はそっちに使ったのかと、弥生は理解する。

「そうですね。それじゃ、味見してもらいましょうか？ 弥生は最近便通がよくないと聞きましたからね」

そう言うと、瑠璃は小皿に肉じゃがの汁を注ぎ、それを弥生に渡す。

鼻を近付けなくても、肉じゃがの甘い匂いがしてくる。

弥生は溜まらず、口の中に溜まった唾を飲み込んだ。

一口嚼ると、作りたてだというのに、熱くなく、それでいて暖かく心地のいい味わいだ。

一瞬にして、その日の疲れが癒されていく。

「瑠璃さん。今度、私にも作り方教えてくださいよ」

弥生がそう言つと、瑠璃はどこかホツとしたような表情を浮かべた。

「瑠璃さんや、酒の肴はないんかな？」

居間のほうから拓蔵が催促するように呼びかける。

「それだったら、金平牛蒡ができたので、持ってきますね」

瑠璃はそう拓蔵に云うや、背伸びをして、食器棚から小皿をひとつ取り出し、その皿の中に金平牛蒡を盛り付ける。

そのやりとりは、我侭な亭主に、呆れながらも、いやな顔ひとつ浮かべずに従っている妻のような感じであった。

それは瑠璃が、弥生に一瞬、困ったような表情を浮かべたと同時に、どこか幸せそうな表情でもあつたからだ

実際、瑠璃と拓蔵は夫婦ではあるのだが、三姉妹はそのことを知らない。

「葉月、それは何ですか？」

夕食を食べ終え、デザートにと作っていたわらびもちを食べている時のことだ。

葉月が食後に読もうと思ひ、自分の部屋から持ってきた一冊の本を見るや、瑠璃が首を傾げている。

その本のタイトルは『あかいくつ』である。

「たしかそれって、歌がなかった？」

臯月がそう言つと、「『赤い靴』はいたた女の子。異人さんにつれられて、行っちゃった』だっけ？」

と、歌いながら、弥生が聞き返す。

「赤い靴は、童謡と童話があり、童謡は日本が元になっていますね。」

童話は『人魚姫』や『マッチ売りの少女』で有名なアンデルセンな
んですよ」

瑠璃がそういうので、皐月は絵本の表示を見る。確かに原作者の
名前に『ハンス・クリスチャン・アンデルセン』と書かれている。

「それにしても、またどうしてそんなのを？」

瑠璃が首を傾げ、葉月に尋ねると、「それが、今日の帰り、駅の
ベンチに女の子が座ってて」

葉月が駅であったことを、拓蔵と瑠璃に説明した。

「なるほど、たしかに違和感があるな」

「靴を忘れたことに対して首を横に振った。それは素直に忘れてい
ないと解釈していいでしょうね。ただ、やはり年齢を考えると」

拓蔵と瑠璃は二人して考え込む。

「その李夢でしたっけ？　どんな女の子でしたか？」

「えっと、身形みなりは葉月の年がひとつ下くらいかしらね？　ただ、な
んか栄養がいきわたっていないのか、思った以上に小さかったけど」

「それになんか、母親の態度も可笑しかったわね」

皐月の言葉に疑問を持った瑠璃は、それを尋ねる。

「えっと、30代くらいの女性で、李夢ちゃんを見つけたとたん、
むりやり手を引っ張って連れ帰ってたんです」

「なんか、怒鳴り声を挙げてたけど、李夢ちゃんはなんともない顔
してたわね」

皐月と弥生の言葉を聞くと、瑠璃は一瞬寂しそうな表情を浮かべ
た。

「それで、その『あかいくつ』って、どんな話だったっけ？」

弥生がそう言っていると、葉月は絵本を手に取り、皆に読み聞かせた。

物語の概要を説明するところである。

少女は病気の母親と二人だけで貧しく暮らしていた。

ある日、靴を持っていない少女は、足に怪我をしたところを靴屋の女主人に助けられ、赤い靴を作ってもらう。

その直後、看病も虚しく母親は死んでしまい、少女は母親の葬儀に、赤い靴を履いて出席し、それを見咎めた老婦人が、少女の境遇に同情し、彼女を養女にした。

裕福な老婦人のもとで育てられた少女は、町一番の美しい娘へと成長したある日、靴屋の店先に綺麗な赤い靴を見つけた少女は、老婦人の目を盗んで買ってしまふ。

戒律上、無彩色の服装で出席しなければならぬ教会にも、その赤い靴を履いて行き、老婦人に窘められる。

それでも少女は赤い靴を履いて、協会へといく。老婦人が死の床についているときにさえ、少女はその靴を履いて舞踏会に出かけていた。

すると、不思議なことに少女の足が勝手に踊り続け、靴を脱ぐことも出来なくなってしまった。

少女は死ぬまで踊り続ける呪いをかけられたのだった。

少女は昼夜関係なしに踊り続けなくてはならなくなったため、亡くなった老婦人の葬儀にも出席できず、身も心も疲弊してしまい、とうとう呪いを免れるため、首斬り役人に依頼して両足首を切断してもらった。

すると切り離された両足と赤い靴は少女を置いて、踊りながら遠くへ去ってしまった。

「心を入れ替えた少女は、両足を失った体で、教会のボランティアに励む毎日を送った。ある日、眼前に天使が顕現し、罪が赦されたことを知った少女は、法悦のうちに、天へ召されていった」

本を読み終えた葉月が本を閉じ、皆の顔を見ると首を傾げる。

皆の表情がただ呆然としていたからだ。

「な、なんか改めて聞くと、すごい話よね？ エクソシストだったのかしら？」

弥生がそう言うのと、拓蔵が一口酒を飲むや、

「この話で重要なのは、欲に塗れて、目の前の小さな幸せを蔑ろないがしにしてはいけないという話なんじゃよ」

「絵本には残酷にみえて、実は哲学的なことも含まれていますからね」

瑠璃は拓蔵の横に坐り、お茶を飲んでいる。

「でもさ、童謡の赤い靴もそんな感じだっけ？」

「これから話すことは、童謡における定説での話に置き換えて、まず、童話と類似しているところがあるとすれば、主人公の少女が、童話と同じく母子家庭であったこと。童謡での少女の母親は再婚しています、ある理由によって、少女を育てることが出来ず、両親は少女を米人《アメリカ人》に預けた。ですが、少女は結核を患ってしまい、渡米することが出来なかった。少女は孤児院に預けられ、九つで亡くなった。そのことを少女の両親は知らず、渡米したものとばかり思っていた」

「つまり、自分の子供が死んだことを知らなかったってことですか？」

皇月がそう尋ねると、瑠璃は答えるように頷いた。

瑠璃は懐ふとろから煙管キセルを取り出し、口に啜くえるや、紫煙を噴出した。すると、その煙は見る見るうちに少女の姿へと代わっていく。

「お呼びでしょうか？ 閻魔さま」

少女 煙々羅は、畳の上に正座をし、瑠璃の前で頭を下げる。

「先ほど、葉月が話していた家族を少し調べてくれませんか？」

そう言われ、煙々羅は「了解しました」といい、その言葉どおり、煙にまかれるように消えた。

「何か気になることでもあるんですか？」

葉月が心配そうな表情を浮かべる。

「いえ、私の思い過ごしであってくれればいいんですけどね」
瑠璃の言葉に三姉妹は首を傾げた。

参・定説（後書き）

制約によって、歌詞の掲載は禁止されていますが、童謡『赤い靴』は1922年（大正11年）、野口雨情作詞・本居長世作曲で発表された童謡であり、著作権は切れています。

肆・辻

三姉妹が李夢と会った翌日の明朝、浅黄橋の河川敷で死体が発見された。

通報を受け、現場に駆けつけた、警視庁刑事課の阿弥陀警部と西戸崎刑事が、遺体の確認をする。

遺体は顔が青々と膨れ上がり、近くには鉄パイプが放置されていたことから、暴漢に襲われたものと考えられる。

「阿弥陀警部。被害者の身元がわかりました」

若い警官がそう言つと、「被害者の名前は？」と西戸崎刑事が尋ねた。

「被害者は【鈴崎司郎】^{すずき じろう} 58歳。浮浪者^{ホームレス}のようです」

「ホームレス狩りですかね？」

阿弥陀警部がそう訊くと、「まだそう断言は出来んやろ？ 財布

の中身はどうなつとつとね？」

「財布が土手の方に捨てられていました」

報告にきた若い警官の歯切れが悪い台詞に、阿弥陀警部と西戸崎刑事は首を傾げた。

「どうかしたんですかな？」

「それが、物取りでの犯行ではない気がするんです」

「物取りではない？ ちょっと見せてくれませんか？」

そう言われ、若い警官は、阿弥陀警部に財布を渡した。

ずぶ濡れになった財布は、ふたつ折りに出来るタイプのものである。

小銭入れには百円玉や十円玉が何枚か入ってはいたが、札入れ方にはレシートが入っているだけである。カード入れのほうには何も

入れられていない。

「綺麗過ぎませんか？」

若い警官に言われ、阿弥陀警部は少しばかり考える。

「確かに、妙に綺麗ですね。あまり使われていないし、札入れのほうも、水で濡れている以外、あまり汚れてませんし」

「浮浪者狩りをする人間が、物取りをするとは思えんがな？」

云われてみれば確かにそうだ。そもそも、金を持っていたら浮浪者とは云わない。

「浮浪者も好きで浮浪者になってはいませんよ。まあ、それから思考の転換で、大企業の社長になった人がいますけどね」

阿弥陀警部がそう言うと、若い警官が誰のことかと尋ねる。

「ほら、リサイクルショップの……」

そう説明すると、若い警官と西戸崎刑事は納得した。

死体を司法解剖した後のことである。

死因は、鉄パイプで後頭部を数回殴られた脳挫傷によるものだと判明した。

発見された鉄パイプから発見された血は、鈴崎司郎のものと一致し、凶器は鉄パイプと考えられた。

「それがどうも気に食わんですよ？」

阿弥陀警部が、鑑識課にある湖西主任の部屋で茶菓子を飲んでい

る。その表情はどこか不貞腐ふてくされているともいえ、湖西主任は呆れた表情で、

「何がそんなに気に食わんのじゃないな？ 人間いつ転落するかわからんじゃろつよ？ 阿弥陀如来」

深々と机の椅子に座り、お茶を啜りながら、湖西主任は尋ねた。

「いや、だってですよ？ 鈴崎司郎という人物を調べたら、とても浮浪者になるとは、思えませんし」

「はたから浮浪者じゃなかったんじゃないのか？ 普段は、キチンとした服装を好まなかったのかも知れんぞ？」

阿弥陀警部が違和感を感じていたのは、鈴崎司郎の詳細であった。

鈴崎司郎という人物は、お役所勤めで、殺された三日前まで会社に来ていた。

三姉妹がイベントに参加したのは日曜日である。その翌日、つまり発見されたのは月曜日になる。

金曜日に仕事場に来ていた人間が、一両日で馘首される事はない。「特に鈴崎司郎は、浅葱橋の近くにある公園を担当していたそんなんですよ」

「つまり、浮浪者による犯行……とでもいいたいんかな？」

湖西主任にそう言われ、阿弥陀警部は少しばかり考えると、

「いや、可能性としてはないとはいえませんが、あの人がそんなことを承諾するとは思えないんですよ」

阿弥陀警部がそう言うと、湖西主任は首を傾げた。

「いや、あの人だったら、公園一帯にいる浮浪者は言うこと聞くでしょうけど、もともとそういうのは嫌いな人ですからね」

警察病院の一角に、病室がある。

そこには、阿弥陀警部や、西戸崎刑事と同様、警視庁刑事課に勤めている、大宮巡査が入院している。

彼は数日前、朽田健祐に襲われ、重傷を負ったが、彼を守護している妹、彩奈と、地藏菩薩であり、彼を管理している瑠璃の治療能力あつてのことである。

しかし、大事をとって、一ヶ月ほどの入院を余儀なくされていた。そんな大宮巡査が、ベッドの上で正座になり、病室にいる臯月に謝っていた。

事の発端は数分前に遡る。

さかのぼ

見舞いに来た皐月が病室に入ると、大宮巡査はベッドで眠っていた。

起こさないようにしながら、皐月は大宮巡査に近づいたが、物に足をぶつけてしまい、物音を立ててしまった。その音で大宮巡査は起き上がったのだが、

「だ、誰だ？」

ビックリして起き上がった大宮巡査が皐月を見やる。

「え？ えっと……」

慌てて皐月が謝ろうとすると、

「き、君は誰だ？」

その言葉に、皐月はカチンときたのであった。

普段、皐月は長い髪をうしろに束ねているのだが、今日に限っては、髪をほどき、頭にカチューシャを着けていた。

耳には小さなイヤリングをつけ、唇はうっすらとピンクの口紅をつけている。

「ごめん。まさか皐月ちゃんだとは思わなくて」

必死に謝っている大宮巡査を、皐月は冷たい目で睨みつける。

「いつも会ってるのに、酷くないですか？」

それにこの髪型は初めてではない。以前、三姉妹が知り合いの結婚式に出席した時、皐月はこの髪型をしている。

さらに云えば、そこで事件がおき、大宮巡査は彼女と会っているのだ。

が、それよりも普段の髪型の方が印象が強かったので、大宮巡査は、最初、相手が皐月だと気付かなかったのだった。

「そりゃ、いつも髪は結んでますけど、私だって女の子ですから、お洒落には気を使って」

そう臯月はぶつくさと言うが、実はお洒落に無頓着のため、あまり身形を気にしたことがなかった。

ただし、会う相手が大宮巡査である。意識してしまうのは当然だ。はつきり云って、恋人とまでは云わないが、二人の関係はそんな感じで、平たく言えば、臯月は恋愛に対して初心であるし、大宮巡査に恋心を抱いていることを本人は自覚していない。

臯月は出かける時、普段以上の時間をかけてしてきたのだが「前も同じ髪型してるんですけどね？」

結構、根に持つタイプである。

「それで、体の調子はどうですか？ どこかわるいところは？」

「いや、大丈夫だよ」

心配そうに見つめる臯月にドキッとした大宮巡査は、視線を逸らし、ギクシヤクとした返事を返す。

普段とは違う髪型であったこともあり、臯月が妙に女性っぽく見えただ。

会話は特になかったが、二人にとってはそれだけでもよかった。

普段は警官と一般市民の二人あるが、一度、人間の犯行とはいえない事件が発生すれば、大宮巡査は阿弥陀警部と一緒に神社へとやってきて、臯月たち三姉妹に事件の参考を尋ねに来る。

大宮巡査は刑事課に勤めているため、あまり時間が取れない。

なので、不謹慎だが、こういう時でしか、人目も気にせずゆっくりと出来ないのだった。

そう、人目も気にせずに……

臯月は徐に、顔を大宮巡査に近付けた。そして、ちょうど膝のところ、顔を埋める。

「どうかしたのかい？」

大宮巡査がそう尋ねると、「なんでもありません」

皐月はそう答えるが、その表情は安心していた。

本当はキスがしたかったのだ。だが、その勇気がない。

二人の関係がそれ以上進行することを、皐月は本心で望んではいるが、逆に壊したくないというのも本心であった。

（ゆっくりでいいんだ。ゆっくりで。焦らなくてもいいって、瑠璃さんが云ってたし）

皐月は目を瞑り、頭の中でそう自分に言い聞かせた。

外はすっかり日が落ちている。

警察病院の入口で、頭を振っていた皐月は、ボーとしていた。顔を埋め、目を瞑ったあと、そのまま眠ってしまったのだ。

「んっ」

背筋を伸ばしながら、皐月は声を挙げる。そして、徐に携帯を取り出し、時間を確認した。

「うわ、八時……」

皐月は携帯の液晶に出ている時間表記を見て肩を落とした。

本当は六時前に警察病院をあとにしようと思っていたのだが、大宮巡査もそのあと眠ってしまったため、二人が起きたのは、見回りに来た看護師が部屋に入ってきてからである。

「あれ？」

皐月は髪を掻き揚げたとき、親指と人差し指の間が、耳たぶに当たった。

本来あるべきものがなく、もう片方の耳たぶに触れると、イヤリングが片方ないことに気付いた。

「顔を埋めたとき、ベッドの上に落としたのかな？」

皐月が着けていたイヤリングは、耳たぶなどに挟むタイプのものなので、ふとしたきっかけで落としてしまう場合がある。

皐月は警察病院を見やる。

(今度行ったときにでも尋ねてみよう)
そう考えながら、皐月は帰路に着いた。

路地裏を歩くと、皐月はふと足を止め、背後を見やった。
そして、気のせいかと思い、再び歩き出す。

カランコロンと、地面に木製バットや木片を引きずった音がしていたのだが、耳が悪い皐月はその事に気付かなかった。
そして、鈍い音が聞こえたと同時に、皐月はその場に跪いた。
それが合図となり、数人の男が皐月の暴行を加えた。

皐月はうつ伏せとなり、頭から血を流している。

「はあ、はあ、これでどうだ？」

男の一人がそう言う。

「おい、さつさとずらからろっぜ？　ここまでやっとならば生きてねえ
だろ？」

もう一人の男がそう言うと、「そうだな。さつさと」

「おい、どうした？　早くずらか」

首を傾げ、問おうとした男は、背筋が凍ったのを感じた。
それは他の人間も同様である。

「っ……」

ふらふらと皐月が起き上がったのだ。

「な、なんで？」

彼らが愕然とするのも当然である。本来の人間であれば、死んで
いても可笑しくなかった。

しかし皐月、もとい三姉妹は“閻魔王である瑠璃の血を、四分の
一ほど受けついている”ため、そう簡単には死なない。

が、皐月は意識が朦朧としていて、状況を理解出来ないでい
る。

「こ、この……」

男が皐月の頭をバットで殴ったが、受け止められ、押し返される。その衝撃で、男は倒れそうになるが、皐月はバットを手から離していないため、男の背中が地面につくことはなかった。

皐月がバットから手を離して、ようやく倒れこんだ。

「こっ、こいつうっ！」

もう一人の男が、皐月の背後から襲いかかるが、
「うぐうっ」

体をくの字に曲げ、その場に蹲った。気配を感じた皐月が肘打ちをしたのである。

他の男たちも皐月に襲い掛かるが、不意打ちでないため、普通の人間が、皐月に勝てるわけがなかった。

「それじゃ、その“ロワ”って人から、私を襲うようにつて命令されたわけ？」

頭にタオルを巻きながら、皐月は男たちに尋ねた。

男たちは正座させられており、皐月からぼこぼこに殴られたため、顔が腫れあがってしまっている。

「あ、はい。皐月さんに暴行を加えて、再起不能にしたら、一人頭五万円渡してくれると」

「ふーん。私の命つてそれくらいの価値なんだ」

皐月は小さく笑みを浮かべる。男の一人は気がついたときには、額を地面につけていた。

「人の命はそんな安くないでしょ？」

皐月は左手で拳を作っている。ムカツときて、殴ったのだ。

街灯に照らされた男たちは、若くなく、40から50代に見える。服装もどこか乱れており、無精ひげを生やしている。

「それで、その“ロワ”って人は外人なの？」

皐月がそう尋ねると、「いや、“ロワ”っていうのは、俺たち浮浪者を匿ってくれてる人の別称なんだけど、本名は知らないんだ。でも、日本人なのは間違いないよ」

そう言われ、皐月は首を傾げた。素性を知らない人間から命令されて、命を狙われた。

それで、「はい、そうですか」と赦せるわけがない。

「まあ、もう今日は遅いし、明日会いに行ってみようかしら」

皐月はそういうや、携帯で男たちを撮影する。その行動に男たちは目を疑った。

「一応襲われた証拠にね。婦女暴行で訴えるわよ？」

もし、彼らが暴行を加えていないと、嘘を吐かないとは考えられないため、念のための保険である。

「いえ、もうやりません」

男たちはそういう。その言葉は、恐怖で震えていた。

伍・王様

「お帰り って、どうしたの？ その頭」

神社に帰ってきた皐月を見るや、弥生が驚いた声を挙げた。

皐月の顔は、浮浪者たちに襲われたときに比べて、すっかりと腫れが引いており、青痣あおあざはあれど、普段と大差ないほどに回復している。だが、髪の毛についた血はこびりついており、赤くなっていた。

「んっ、ちよつと帰りに襲われた」

なんとも樂觀的に説明するので、弥生は首を傾げる。

「シャワー出来る？」

「ええ、沸いてるけど」

そう言われ、皐月は靴を脱ぎ、一度自分の部屋に戻って、着替えを取りに行くや、風呂場へ行った。

それから数十分後、風呂から上がってきた皐月が居間へと顔を出す。

「皐月、ちよつと座りなさい」

拓蔵に声をかけられ、皐月は正座する。

「今までどこに行っていた？」

「お、大宮巡査のところ です」

拓蔵の質問に、皐月は素直に答えた。

「知り合いとはいえ、未成年があまり夜回りしないほうがいいぞ。話を聞けば、帰りに襲われたそうじゃないか？」

拓蔵は怒ってはいいたが、それ以上に、皐月が襲われたことが心配なのだ。

「うん。最初死ぬかと思ったけど、やり返した」

あっさりいう皐月に、拓蔵は持っていたお猪口を手から零した。

「それに、どうやら私を襲うようになって、命令されてみたい」

「臯月？ あんた、なんか恨まれるようなことした？」

弥生にそう訊かれ、臯月は首を横に振った。

「相手はホームレスみたいで、顔も知らない人たちばかりだった。それに、その人たち、“ロワ”って人から命令されたって」

臯月の説明に、拓蔵と弥生は首を傾げる。

「“ロワ”？ なにそれ、外人？」

「ううん。なんかホームレスを匿ってる人みたいで、浅葱橋の近くに、ホームレスが集まってる公園あるでしょ？ 明日にでも文句に言いに行こうかなって」

臯月はそう言うと、拓蔵は少し考え、

「“ロワ”……か。臯月、明日わしも一緒に行ってもいいか？」

そう言われ、臯月は首を傾げる。が、特に断る理由もないため、同意した。

数時間前、午後四時。三姉妹の住んでいる町から、5駅ほど離れた場所にあるデパートの玩具売り場に、弥生の知り合いである穂原の姿があった。

穂原は階段近くに設けられている休憩用の長椅子に座った。

フィギュアや、ガチャガチャの景品が入った紙袋を横に置き、背負っていたリュックを脱ぐや、それからペットボトルを取り出し、口にしたときだった。

「あれ？」と、穂原は目の前にいる女の子に目をやった。女の子は先日の日曜日、駅で見た、李夢である。

その李夢は誰かを探しているわけでもなく、ジッと少女向けの玩具を見ていた。

穂原は立ち上がり、李夢に近づぐや、「李夢ちゃん、何してるの？」

そう声をかけるが、李夢は穠原を見るや、キョトンとした表情浮かべた。

それもそうである。穠原は知っていても、李夢本人は穠原のことを知らない。

しかも、傍から見れば、小さな女の子が見知らぬ大人から声をかけられている以外のなにものでもなかった。

「お母さんはどうしたの？」

穠原は腰を低くし、李夢と同じ視線になり、母親のことを尋ねた。
「……………」

穠原の問いかけに、李夢は反応を見せない。

「どこかではぐれちゃったのかな？」

穠原はふと、李夢の足元を見た。黄色いサンダルが目に入り、ホッと息を吐く。

だが、手首のところを見ると、ちょうど裾の中が見え、顔を歪めた。明らかに“虐待”を受けたような傷跡があったのだ。

「李夢ちゃん？ のど渴いてない？ お兄さんがジューズ買ってあげようか？」

そう誘つと、李夢は首を横に振った。

おそらく母親にきつく言われているのだろう。と、穠原は考える。そういうわけで、しつこく誘うのは逆効果である。

さつきから李夢はジッと展示されているアニメキャラの商品を見ている。

「李夢ちゃん、どのキャラクターが好きなんだい？」

穠原にそう言われ、李夢はゆっくりとそのキャラクターを指差した。

「それか、ちょっと待ってて」

そう言うや、穠原は長椅子に戻り、置いていたリュックからスケッチブックと筆記道具を取り出す。そして数分ほどして、李夢

が指差したキャラクターの絵を仕上げた。

その紙を破りとり、「李夢ちゃん、はいこれ」といって、李夢に渡した。

李夢は最初こそ、不思議そうに穂原とイラストを交互に見やっていたが、次第に笑みを浮かべていた。

「李夢っ！ 何でこんなところにいるの？」

李夢の母親がのぼりのエレベーターから降りてくるやパンツと、李夢の頬を叩いた。

「まったく、人の目を盗んで、なんて悪い子なんでしょうね？ ところはあんたを探してやる暇なんてないのよ？」

ヒステリックな声を挙げ、李夢の母親は、李夢の手を掴むや、その場から離れようとする。

「ちよつとあんた、今のはないんじゃないのか？ 李夢ちゃん、ジツとここで待ってたんだぞ？」

穂原がそう言つと、「あなたね？ うちの李夢に変な事してたのは」

そう言われ、穂原は顔を歪めた。

「なにいつて、俺は何もして」

「ほら、あんたみたいなオタクは、そうやって誰も弁護しない言い訳を言うのよ」

その言葉に穂原はカツとなるが、

「俺は、李夢ちゃんがあのアニメのキャラクターが好きなのを尋ねてただけで」

と、感情を押し殺し、懸命に説明する。

「そんなの口弁弁、いくらでもいえるでしょ？ だいたいねえ？ 大の大人がアニメ好きとか、現実を見なさい」

李夢の母親は、手を繋いでいた李夢が持っている紙に気付く。

「どうしたの？ それ」

そう尋ねるが、李夢は答えない。

「もう二度と、近付かないでください」

李夢の母親は、無理やり絵を取るや、自動販売機の横にあるゴミ入れに棄てた。

「あっ」

李夢が小さく声を挙げた。が、それは誰にも聞こえず、母親の手に引つ張られ、エレベーターを下っていった。

穂原は呆然としながら、母娘を見る。そして、ハッと我にかえるや、ゴミ箱に棄てられた自分の絵よりも、李夢が気になっていた。

翌日、夏休みということもあり、平日ではあるが、浅葱橋には人が行き交っている。

その近くに『山間公園』という、小さいながらも緑豊かな公園がある。

臯月と拓蔵は、昨夜臯月を襲った“ロワ”という人物に会いにきていた。

「ここはかわらんなあ」

拓蔵がそう言うのと、「もしかして、知ってるの？」

臯月にそう訊かれ、拓蔵は頷いた。

「少しばかりな」

拓蔵が曖昧に返事をしたときである。公園の反対側から、三輪自転車に乗った臯月たちのほうへとやってきた。

自転車は臯月たちの目の前で停まり、帽子を被った、初老の男性が自転車から降りて、二人を見るや、臯月よりも拓蔵を見て驚いていた。

「まだ生きとったのか？」

男性は拓蔵にそういうと、「そういうあんたこそ、こんなところに住んでてまだ生きとったんかね？」

二人の会話に臯月は首を傾げる。

そんな臯月に、老人は気付き、挨拶する。

「そうじゃ、王ちゃんや、この子は臯月といってな、わしの孫なんじゃよ」

「なんじゃ、久しぶりに会ったら、孫自慢か？」

老人がそう言うのと、拓蔵は少し顔を険しくし、

「じつはな、あんたに聞きたいことがあつてきたんじゃよ。昨夜、臯月は知り合いが入院している病院から帰っているとき、何者かに襲われたんじゃがな、どうもあんたが匿ってるホームレスと、襲った本人が言つておつたそうなんじゃ」

そう言われ、老人は顔を歪める。

「それはいつだい？」

「えっと、病院から少しはなれたところですから、大体8時30分くらいかと」

「それくらいの時間だと、みんな寝ていることが多いね。活発に動くとすれば十二時を回ったくらいだろうし」

その言葉に、臯月は再び首を傾げた。

「ホームレスはコンビニや、レストランから賞味期限などで出た残飯を目的にして、徘徊するからね。その時間だとまだお店は開いているだろ？ それに、いつでもあるわけじゃないから、あまり早い時間から行動するってのもないんだよ」

そう言われ、なるほどと、臯月は理解する。

「しかし、あんたから金を出されてともいつておつたそうなんじゃよ」

拓蔵がそういうや、老人はクククと笑った。

「人にやる金があるくらいなら、こんな質素な生活はしとらんよ」
老人は笑いながら、臯月と拓蔵を見た。

「久しぶりに会つたんじゃ、ちよつとうちによつていかんか？」

老人にそう誘われ、臯月は拓蔵を見た。

「臯月、この老耄爺が、ただの浮浪者だと思わんほうがいいぞ。そ

れに、どうして皆から“ロワ”と呼ばれているかもわかるしな」
拓蔵にそう言われ、皐月は三度首を傾げた。

老人のダンボールハウスの中を覗いた皐月は、その光景に啞然としていた。

畳三畳ほどあるその広さに、敷布団がひとつ。その近くには携帯ラジカセと、小さなコタツテーブルが置かれている。
奥のほうを覗くと、小さな二段式冷蔵庫があった。

話を聞けば、それらすべて、老人が趣味で直したものだど、本人が説明した。

「そうじゃ、ちょっと酒持ってきたんじやが、少しばかり肴を繕ってくれんかの？」

拓蔵にそう言われた老人は、ダンボールハウスの中に入り、冷蔵庫を漁る。

「うーん、チーかまがあるが、それでもいいか？」

「客にそのまま食わせるのか？ 帝國ホテルでコック長をしとった人間が」

「帝國ホテル？」

皐月が老人に尋ねると、「昔ちよつと働いてたんじやよ」と老人は答えた。

「皐月、ホテルの最高客室はなんと言うかしつとるか？」

そう訊かれ、皐月は少しばかり考えると、

「ロイヤルだっけ？」

「まあ、場所々で言い方は違うが、元の語源はフランス語で王室という意味なんじやよ」

老人が冷蔵庫から、チーかまと、細かく切られた野菜を、ガスコンロで炒めている。

「帝國ホテルで働いておったからな、それによく皆が持ってきた材料で、料理をしていることから、王様という意味の“ロワ”という

別称でいわれておるんじゃないよ」

拓蔵は持参した酒を飲みながら、そう言つと、
「それじゃ、爺様はこの人の本名知ってるの？」

臯月はそういだが、拓蔵は首を横に振つた。

「わしはこの爺さんの本名は知らんが、料理の腕は瑠璃さんに負けず劣らずじゃよ。なんせ、料理を教えたのはこの人なんじゃからな」

そここう話しているうちに、料理が出来上がり、それを食べると、臯月と拓蔵は舌鼓を打つた。

陸・ネグレクト

王様はダンボールハウスの屋根から深さの浅い籠を取り出した。その籠の中には、植物の根っこが敷かれ、乾燥されている。

その根っこを包丁で細かく切り、さらに発電機に繋げたミキサーで細かく砕くと、それをフライパンで炒める。

ご飯のおこげみたいな匂いがしてきた。

炒った粉をコーヒーフィルターに入れ、コーヒーメーカーにセットすると、漢方薬のような、独特の匂いが漂ってくる。

そして、それをコーヒーカップに注ぎ込んだ。

「ほい、食後のコーヒーじゃ。口に合うかわからんがな」

王様からコーヒーを渡された臯月は、息を吹きかけて少し冷ますと、それを口にした。

「あれ？」

臯月はコーヒーを口にしたが、作っている工程に違和感があった。確かに味はコーヒーである。苦味の中にも、ほんのりと甘みがあり、甘党の臯月はあまり言わなかったが、砂糖が少しばかり欲しいと思っていた。

しかし、普通コーヒーは“豆”から作るものであるにも拘らず、王様は植物の根っこから作っている。

味以前に、それが不思議だった。

「臯月ちゃんが飲んでいるのは、“ダンデライオン”というコーヒーなんじゃよ」

王様がそう言うと、「職業柄気取りたいのはわかるがな、平たく言えばタンポポの根っこで作ったコーヒーじゃよ。タンポポは多年草じゃからな、浅葱橋の河川敷にも咲いておるじゃろ？」

拓蔵にそう言われ、臯月は驚いた。

「こつという生活をしとるとな、昔の人が野草を食べていたのかが重

々わかつてくるよ。春の七草や、秋の七草、蓬よもぎにせんまい。生きていくにはそういう知識も必要になるからのう」

王様ロロはなんと楽しそうに説明する。それは自分が料理人であったこともあるが、なによりものを大切にするという気持ちを、ホームレスになつて初めて知つたのだ。

忙しかった現役時代とは違い、のんびりとした時間の流れで得た知恵であつた。

「そういえば、皐月、お前確か苦いものはだめじゃなかつたか？」

拓蔵ロロがそういうと、「砂糖がたしかあつたはずじゃがな」と王様ロロが冷蔵庫の中を探すが、皐月になかつたと答えた。

「あ、大丈夫です。これくらいだつたら飲めますから」

本当は飲めないのだが、コーヒの正体を知つた以上に、味が美味しいので、出来ればこのまま飲んでみたくなつていた。

「それで、さっきの話じゃが、皐月ちゃんを襲つた犯人は、本当にわしが仕向けたといつておつたんじゃな？」

王様ロロにそう言われ、皐月は頷き、証拠として撮つた画像を見せた。

「おやおや、えらくやり返されておるな。まあ、自業自得じゃろつて」

王様ロロは哀れむわけでもなく、ケラケラと笑う。

「しかし、わしは皐月ちゃんを襲うようになって命令はしとらんよ。しかも、昨日河川敷で死体が発見されたそうじゃしな」

王様ロロはそう言つと、拓蔵と皐月のうしろに立っている人物を見やつた。

「あら、お気づきでしたか？」

阿弥陀警部が笑みを浮かべながら、会釈する。

「それで、先ほど皐月さんが襲われたと話してましたけど、詳しく聞かせてくれませんか？」

「別に構いませんけど」

そう言つと、皐月は昨夜の出来事を阿弥陀警部と王様ロロに説明した。

「それでよくまあケロツとしておるな？」

王様が驚いたような呆れたような表情を浮かべる。

「しかし、一人頭五万円ですか、なんとも安い依頼金ですな。私でしたら、五千万くらいは出しますよ」

阿弥陀警部がそう言うのと、「ちよつと、物騒なこと言わないでくださいよ」

臯月がそう怒鳴りつける。

「いや、だって臯月さんを殺すくらいでしたら、それくらい出して、それこそ、その道のプロにお願いしないと殺せないでしょ？」

確かにそうだと拓蔵は笑った。それを見て、臯月は頬を膨らます。

「まあ、昨日起きた浮浪者狩りも依頼があつてやったのか」

「ああ、そういえば、昨日の夜、ニユースで言っていましたね。被害者の鈴崎司郎は浮浪者だから、襲われたとか何とか」

阿弥陀警部と臯月の話を聞きながら、王様は少しばかり顔を歪めた。そのことを拓蔵が尋ねる。

「いや、わしはこの公園で暮らしてるホームレスの顔と名前は知っておるつもりなんじゃがなあ？」

「知らない人なんですか？」

臯月がそう王様に尋ねると、拓蔵が「写真は持ってきとらんのか？」と、阿弥陀警部に尋ねた。

「ええ。王様さんの話を聞いた後、神社に伺おうと思ってましたから」

そういいながら、阿弥陀警部はカッターシャツの胸ポケットから写真を取り出した。

「どうですか？ 王様さん」

阿弥陀警部から写真を受け取り、王様は被害者を翌々見たが、

「いや、まったく知らんよ。そもそも、どうしてこの人がホームレ

スなんていう考えがでたんだい？」

そういいながら、王様は写真を阿弥陀警部に返した。

「まあ、こちらは詳しく調べないとわからないんですけど、所有していたものが質素だったんですよ。というより、無一文だったんですよね」

「無一文だから、ホームレスとな？ そりゃまた結滞な偏見じゃな？ よく空き缶を集めてるホームレスとかおるじゃろ？ あれをリサイクルしてくれる工場に売って、生計を立ててる人もおるんじゃないよ」

それは人から見れば、スズメの涙ほどだとしても、その日しのごいで生きていくだけでもいいのだと王様は説明する。

また、ホームレスが空き缶などの資源を集めていることで、自治体が黙って見過ごしてはいない。実際に京都市の条約で、回収業者以外のゴミの収集は禁止されている。

「まあ、一応知らないということですか？」

「なんなら、この公園で住んでるほかのホームレスにも聞くか？」

そう王様が尋ねると、「いや、結構です」と阿弥陀警部は首を横に振った。

「ただ、鉄パイプが発見されたので、それから指紋検出しようと思っただんですけど」

「手袋をはめていて、指紋が検出されなかったってことじゃないんですか？」

臯月がそう尋ねると、「それよりも、この鈴崎司郎の素性ですよ。阿弥陀警部が珍しく怒っているの、臯月と拓蔵は首を傾げる。

「いやですね。鈴崎司郎は浮浪者でもなんでもないんですよ。ただの役所勤めだったんですよ」

「それじゃ、どうしてさっきは王様に、知らないかなんて訊ねたんですか？」

臯月がそう尋ねると、「その鈴崎司郎は、地域課の人間で、ここ

らを調べていたそうなんですよ。それで調べたんですけど、ちょっと裏があるみたいなんです」

「裏？」と王様が険しい表情で尋ねた。

「町長がマニフェストで、よりいい地域生活をするために、とか何とか言つて、ここ最近、児童養護施設で暮らしてる子供たちを、親の元に返したりとか、ネカフェ難民でしたっけね？　そういう人たちを施設に送つたりとか」

「それって、横暴過ぎませんか？」

皐月がパンツとテールを叩く。

「だって、児童養護施設つて、親がいなかったり、理由があつて、親と暮らせない子供たちを、一時的に預かつてる施設でしたよね？」

「皐月、少し落ち着きなさい」

拓蔵は皐月の肩をやさしく叩き、気持ちを宥める。

「ただ、奇麗事で済ませないのも、ひとつの理由ですね。犯罪者を匿っているという矯正施設もありますから」

「二度とそうさせないように、更生させるのが、その施設の役目ですよ？　それに住民を説得してじゃないと作れないんじゃないんですか？」

「たしかに、ただ“綺麗な町づくり”には、そういう場所が必要ないつてことでしょうね」

阿弥陀警部がそう言つと、皐月は歯軋りを鳴らした。

「それじゃ、生きてる犯罪者は、法できちんと裁かれた犯人は、更生の余地なんてないつて言ってるようなもんじゃないですか？　殺人を犯した犯人は、死ぬまで更生しない？　盗みをした犯人は？　大切な人を奪われて、人を殺さなければいけない人は？　あんなたち、警察だつて！　市民を守るためとか何とかめかして！　傍から見れば、犯罪に手を染めてるじゃない？」

「皐月、少し落ち着きなさい」

拓蔵はゆっくりと皐月に深呼吸をしなさいと促す。

「すまん阿弥陀警部。今日はここで休暇するわ」

拓蔵は臯月に、帰るぞと耳打ちする。臯月は素直に立ち上がり、トボトボと拓蔵の後を追った。

「阿弥陀警部？ どうしてそんなことを？ あの子がどんな思いで、人ならぬものを罰しておるか知っておるじゃろ？」

王様がそう言うと、阿弥陀警部は少しばかり頭をかくや、

「人の世は、私たちが思ってる以上に奇麗事で済まされないんですよ。それに、鈴崎司郎がこの公園を調べていたのは本当のことですし、だからこそあなたに尋ねにきたんですよ」

「何度も言うが、わしはしらんよ」

王様はそういいながら、タンポポコーヒーを飲み干した。

「ほれ、アイス」

浅葱橋から少し離れた繁華街にあるコンビニの前で、臯月と拓蔵はベンチに座って、アイスを食べていた。

「どうじゃ？ 機嫌は直ったか？」

「機嫌も何も、私は」

「わかつておる。いろいろな犯罪者を見てきたお前じゃ。そう怒りたくもなるじゃろ？」

拓蔵がそう尋ねると、

「そうじゃないの。私たち姉妹も、爺様がいなかったら、養護施設に預けられてたんだろうなって」

臯月や弥生、葉月の三姉妹は、6年前、不慮の事故で、両親が行方不明になっている。

そして三姉妹を、母方の祖父であった拓蔵が引き取ってくれている。

「それに、親がいても、虐待とかの理由で、施設に預けられてる子もいる。親が更生して、自分から引き取りにきたのなら、まだいい

よ。でも、あの話を聞いてると、何か全部、町長の私利私欲のためだけに、ムリヤリ親元にかえしてるって気がして」

皐月がそういった時だった。

「皐月さん、拓蔵さま」

その声をかけられ、二人は声にしたほうを見やると、

「煙々羅？　どうかしたの？」

皐月が声をかけると、煙々羅は険しい表情を浮かべ、「浅葱橋の下に来てください」と伝え、皐月と拓蔵をその場まで案内した。

そこには瑠璃と浅葱の姿があった。

「閻魔さま？　それに浅葱も」

「皐月、怪我は大丈夫ですか？」

瑠璃がそう尋ねると、「え？　あ、大丈夫です」と皐月は答える。それを聞いて、瑠璃はホッと胸を撫で下ろした。

「それで、神様二人がどうしたんじゃ？」

「この前、李夢のことを調べてもらったんですが、やな予感ほどの中してしまいますね」

「い、嫌な予感って？」

皐月は瑠璃が見せた物悲しい表情に、言葉を発せなかったが、訊かないわけにもいかなかった。

「李夢は、イベントがあった二日前に、児童擁護施設から親元にかえされてるのよ」

浅葱がそう説明すると、

「それって、もしかして」

「ええ。今阿弥陀警部が調べている一連の事件と何か関係があると考えていいでしょうね。ただそれだけだったら、何とかなるんですけど」

瑠璃がそう言うのと、

「調べたところ、その母親は全くといつていいほど、李夢を育てていないんです」

それを聞くや、臯月と拓蔵はゴクリと、喉を鳴らした。

「それってつまり、育児放棄ネグレクトってこと？」

「子を持った母親は、自分の子供を、無償の愛で育てなければいけません。それは、人間だけではなく、他の動物でも一緒です」

瑠璃は閻魔王ではあるが、別名地藏菩薩といい、親より先に死んだ子供の霊を救う神と言われている。

「それじゃ、李夢ちゃんが怒られているときに何も反応しなかったのは」

「おそらく、感情が麻痺してしまったんでしょうね。子供は、大人のちよつとした反応でも、敏感ですから、泣いたら、親を困らせてしまふと思っただんでしよう」

瑠璃がそう説明すると「でも、それじゃどうしてあの時、李夢ちゃんの家から裸足で飛び出してるんですか？」と臯月が尋ねる。

「それはまだわかりませんが……」

煙々羅は申し訳なさそうに、顔を俯かせる。

「臯月、あなた、大禿おおかぶろって知ってる？」

痺れを切らした浅葱がそう言つと、臯月は少しばかり考えるが、首を横に振つた。

「大禿。その姿は小さな女の子のようであるが、齡幾百年も生きてるといわれている妖怪。その姿はよく禿かむろのように描かれている」

「あれ？ 禿かむろって……」

「ええ。今は橋姫として、この浅葱橋に祭られているけど……生きてる時は、私も遊郭で暮らしていた禿かむろだったからね」

昔、民宿街と繁華街を繋ぎ合わせるために、浅葱は、とある罪によつて、人柱となり、橋を建設した。

「まあ、それは別に自分が撒いた種だし、仕方ないって割り切つてるけど。今回の件はどうもね」

そういうや、浅葱はゆつくりと姿を変えた。

その姿は、遊郭の禿姿を思わせる和装というよりかは、最近の女子中学生が着るような、カジュアルな服装である。

「弥生の知り合いに、穉原という青年がいたでしょ？」

そう訊かれ、皐月は少し思い出し、頷いた。

「彼が昨日、デパートで李夢と接してるの」

偶然じゃないのかと、皐月は聞き返したが、

「その時の李夢、穉原に絵を描いてもらってたんだけどね。顔には出してなかったけど、楽しそうだった」

「先ほども云ったように、子供は大人が思っている以上に敏感ですが、また素直でもあるんですよ」

「それに、母親に描いてもらった絵を捨てられたとき、李夢はわずかにですが、感情を表に出していました」

それを聞くと、皐月は浅葱に何をするのかと尋ねる。

「瑠璃さんの話を聞いている以上、無視は出来ないでしょ？」

「それはそうだろうけど。でも、どうしたのよ？ やけに協力的じゃない？」

「私も孤児だったからね。姉女郎から色んなことを教えてもらってはいたけど、母親がいなかったから、何か母親から虐待を受けてるかもしれない李夢が他人みたいに思えなくなってる」

皐月はそれ以上、何も聞けなかった。

陸・ネグレクト（後書き）

皆さんも試してみよう。タンポポコーヒー。私は飲んだことないですけどw

漆・女衞（前書き）

女衞^{せげん}：主に若い女性を買い付け、遊郭などで性風俗関係の仕事を強制的にさせる人身売買の仲介業のこと。

漆・女術

夕暮れの繁華街。風俗街の一角に、人気のない裏通りがある。

そこには夏だというのに、暑苦しいスーツ姿の男性二人組と、女性 李夢の母親である、赤口華蓮せきぐちかれんが会話している。

「それで話はどうなってるの？」

華蓮は責め立てるように、黒服の男たちに詰め寄る。

「それは先日、きちんと入れられたはずだ」

「ええ。あの李夢れいむを引き取って、町長の言ってるマニフェストに協力しろって話だったでしょ？」

華蓮はそういいながら、煙草を啜え、紫煙を噴出す。

「そのあとのことはどうだ？」

「あ？ あの子だったら、勝手にしてるんじゃないの？ こっちは瘤がいるだけで、男が近づきやしないんだ。大体あの子だって、誰の子供なのかも知らないし」

華蓮が煙草の灰を落とすと、それが水溜りに落ち、ジュツと音が鳴る。

「それにね、あの子は私の子供でも、育てる義理はないんだ。あんなたち行政が、ああいうのを施設にぶち込んでくれればそれでいいんだよ。それをなんだい？ お金をやるから、引き取ってくれだあ？ ふざけるんじゃないよ」

「しかしな、実の親が子供を引き取るのは、道理だと思いが？」

「さっきも云ったけど、私はあの子を育てる義理はないって云ってるでしょ？」

黒服の一人が、呆れた表情で頭をかく。

「それだったら、支払ったお金を、全額返してもらうが？」

「そういうや、華蓮は慌て出し、」

「ちよっと、それは困る。こっちは、男に騙されて、多額の借金を

抱えちまってるんだ。それに、もらったお金は全部そっちに回しまったから、もう手元には」

それを聞くや、黒服の二人はため息をついた。

「それで、李夢さんは今、何をしているんです？　一応確認のために、家に行きたいのですけど」

黒服の一人がそう言うと、

「り、李夢は今昼寝中だよ。あの子が起きるくらいに家に着くだろうからな」

「そうですか？　それじゃ私たちも」

「いや、ちよつと困るんだ。部屋は荒れてるし、それに人様が上されるスペースなんてないし」

華蓮があまりにも慌てるので、黒服の一人が携帯で連絡を入れる。

「どこかに連絡してるのかい？」

「ええ。一応児童相談も兼ねているのでね。まあ、こちらは“何か”が起きなければ、動くことが出来ませんけど”」

黒服がそう云うや、華蓮はホッと胸を撫で下ろす。

「それじゃ、今日はこの辺で失礼します。近々、近況確認をしに、お宅まで伺いますので」

黒服の二人は頭を下げるや、華蓮とわかれた。

華蓮は齒軋りを鳴らすや、踵を返し、煙草の吸殻を捨てるや、家へと帰っていった。

「どう思います？　閻魔さま」

黒服の一人が、店の裏側で見張っていた瑠璃にそう尋ねる。

「ええ。ほんと、嫌な予感ほど、当たってしまいますね」

瑠璃は残念そうに、そして哀れむような表情で、自分の足元で倒れている黒服の男を見つめた。それは奇しくも、先ほど華蓮と

話していた黒服の男である。

「しかし、少しばかり遣り過ぎな気がしますね」

黒服の男 煙々羅は、少女の姿に戻り、瑠璃に話しかける。

「それは、私の遣り方がですか？」

瑠璃がそう尋ねると、煙々羅は首を横に振った。いや、本心では、瑠璃の遣り方に強引なところがあつたが、それを云うのはやめたほうがいいと、煙々羅は感じていた。

「しかし、不当な方法で子供を親元に帰していたとは」

「信じられませんけど、赤口華蓮の銀行口座に、百万ほどお金が入れられていましたよ」

路地の奥から声が聞こえ、瑠璃と煙々羅はそちらを見やる。

「やはり、そちらが調べている鈴崎司郎も関係してましたね？」

瑠璃が尋ねると、阿弥陀警部は被っていた麦藁帽子を脱いだ。

「ええ。町長の命令かどうかはわかりませんが、李夢さんが預けられていた児童養護施設の園長に訊ねたところ、李夢さんを引き取つたのは母親の華蓮ではなく、鈴崎司郎でした」

「施設の人は疑わなかったんですか？」

煙々羅が阿弥陀警部に尋ねると「子供の引き取りには裁判とか、そういうのが必要になるんですけど、その園長は何も聞かされなかつたそうなんですよ」

「それも不当な方法でってことでしょうか」

瑠璃は煙々羅に視線を送ると、「阿弥陀警部、子供は何のためにいるんでしょうね？」

その問いかけに、阿弥陀警部は答えられなかつた。

いや、何を答えても、すべてが正解ではないと思つたからである。

むしろ、何を云つても、瑠璃が納得するような答えは出てこなかつたといつたほうが正解である。

「ただ、今回の事件 どうして、浅葱はあそこまで協力的なの

か、それに、まだ妖怪の仕業だと」

「ああ。それなんですけどね。ちよつと気になることが
阿弥陀警部がそう言つと、瑠璃と煙々羅に耳打ちをする。
話を聞いている瑠璃と煙々羅の表情は見る見るうちに険しくなっ
ていく。」

「もし、児童養護施設に預けられた原因がそれだったとしたら、ま
た再発してるつて可能性もあるじゃないですか？」

そしてそれが、李夢が感情を麻痺している理由だとすれば、取り
返しのつかないことになる、阿弥陀警部は二人に伝えた。

赤口華蓮と娘である李夢が暮らしているアパートの近くに、小さ
な公園がある。

敷地内には、砂場やブランコ、滑り台と、極めて一般的な遊具が
置いてあり、李夢はそのブランコでゆらゆらとこいでいた。

「李夢ちゃん」

誰かに声をかけられ、李夢はそちらに振り向くと、

「お兄ちゃんのこと覚えてる？ ほら、昨日デパートで会つたでし
よ？」

話しかけた相手が穂原だとわかるや、李夢はブランコから降り、
そそくさと砂場へと走っていく。

そして、周りを見渡し、何かを見つけたのか、それを取りにいく。
拾ったのは木の枝である。

李夢はそれを手に取り、穂原を手招きした。

穂原は首を傾げながらも、李夢のところへ駆け寄る。

「なに？ ここに何かあるのかい？」

穂原がそう尋ねると、李夢は枝で砂場に何かを描いていく。

「えっと？ 何か描いてほしいの？」

李夢の描いたものはぐにやぐにやとしているが、何を描いてほしいのかはすぐに理解する。

「ちよっと待っててね。今お兄ちゃんスケッチブック持ってないんだ」

穂原はリュックを背負っていない。つまりは財布や携帯以外は、何も持っていないということになる。

それがわかるや、李夢は露骨に残念そうな表情を浮かべた。

「あ、ちよっと待って。李夢ちゃん、その枝貸してくれないかな？」
そう言われ、李夢は首を傾げたが、持っていた枝を穂原に渡した。

穂原は砂場の盛り上がった場所を靴で均し、描きやすくする。

「何を描いてほしいの？」

そう尋ねると、李夢は何かを描くような仕草をし、少し考えるや、ハツとした表情で、それを破り取る仕草をする。

そして、その紙を誰かに渡すというジェスチャーを見せた。

「えっと、もしかして、この前描いたやつ？」

そう言つと、李夢は激しく頷いた。

「そつか。それじゃ、ちよっと可笑しくなるけど」

穂原は杖を手に持ち、砂場に絵を描いた。

それはあの時、デパートで穂原が李夢に描いてあげた、アニメのキャラクターであった。

「これでいいかな？」

そう尋ねると、李夢は笑みを浮かべた時だった。

「李夢っ！ どこにいるの？」

アパートの方から、母親の声が聞こえてきた。

「李夢ちゃん、そろそろおうちに帰らないと」

穂原がそう言つと、李夢はポケットから手袋を取り出し、穂原に渡した。

「これは？」

穂原が尋ねようとするが、李夢は逃げるように、母親の元へと走っていった。

穂原は受け取った手袋を見つめ、それをポケットに入れたときだった。

手袋に膨らみがあり、その中身を見ると、白い粉が袋に入っていた。

穂原は首を傾げ、公園をあとにしようとした時である。

「その粉…… 警察に届けたほうがいいわよ。それにその手袋もね」少女がそう言つと、穂原は驚き、少女のほうを振り返ったが、すでに少女の姿はなかった。

ガラガラと、ものが雪崩落ちる音が、狭いアパートの中で響き渡った。

「ないっ！ ないっ！ ないっ！ ないっ！」

華蓮が、部屋の中をひっくり返すかのように、筆筒の中や、積み重ねたゴミの山を漁っている。

「どうして？ どうしてアレがないのよ？ アレがないとだめなのよ！」

半狂乱になりながら、華蓮はゴミを撒き散らしている。

「李夢っ！ あんた、白い粉知らない？ 小さい袋に入ったやつ！ そう尋ねるが、李夢は答えなかった。

「このゴミがあっ！」

怒りで我に忘れた華蓮は、李夢のおなかを思いつきり蹴った。

「げえ、ほおっ！ げほ、げほ」

李夢は横たわり、咳き込む。

「まったく、どこにいったのかしら？ 手袋もなくなってるし」
華蓮はそういいながら、李夢を睨みつける。

「まさか、あんた 私がない間に」

華蓮はそう考えるや、思考するよりも前に、李夢に手を出していた。

「あんたはやっぱり疫病神よ！ あんたなんて死ねばいいんだ！
ええ。そうよ！ 餓鬼はやっぱり餓鬼なのよ！」

その怒号を、もはや李夢の耳には聞こえていなかった。

『助けて』

小さな悲鳴は、聞こえなくなった。

阿弥陀警部は稲妻神社に訪れ、先の被害者である鈴崎司郎の遺体が写された写真を、葉月に渡した。

葉月は写真を卓袱台の上におくや、深呼吸し、写真の上に手を翳し、ゆっくりと摩り始めた。

「こども？」

葉月がそう言つと、その場にいた、皐月と弥生、拓蔵、阿弥陀警部の4人はキョトンとした表情を浮かべる。

「こどもの喚き声？ えつと」

葉月は困惑した表情を浮かべたまま、瞑っていた両目を、より強く瞑つた。が、それ以上聞こえないのか、葉月はゆっくりと写真から手を離れた。

「子供の喚き声つて、どういふことですかね？」

遊火が皐月にそう尋ねるが、皐月も首を傾げている。

「鈴崎司郎が殺されるような感じはあつたんですか？」

「地域開発で、公園に住んでるホームレスを撤退させる運動をやっていたみたいですから、逆にホームレスから襲われたという可能性も否定できませんね。でも、あの公園に住んでるホームレスは、王様さんが殆ど管理してますからね。王様に反旗を翻すのは、容易じゃないと思いますよ」

「私が襲われたことも、王様さんは知らないようだったし」

「にわかには信じられませんが、嘘を吐いていると思います」

鈴崎司郎が殺された時間、あの人コンビニにいたそうですし、その時間の防犯カメラに写ってましたから、アリバイはありますね」

王様には完璧なアリバイがあると、警察は見ているようだ。

「臯月を襲った犯人の身元はわかったんですか？」

「一応ホームレスには変わりなかったんですけど、あの公園には住んでなくて、繁華街の地下通路に住んでいたんですよ。それに、王様さんの写真を見せたら、皆さん首を傾げてましたよ」

阿弥陀警部がそう言うのと「それじゃ、依頼主を知らなかったってことですか？」

臯月がそう尋ねる。

「それに襲った後にお金をもらうことになっていたらしくて。まあ、彼らにしてみたら、骨折り損の草臥れ儲けですよ」

阿弥陀警部はそういいながら、葉月を見やった。

「霊視は一日一回までじゃよ。それ以上したら、この子の精神がもたん」

「わかってますよ。でもやっぱり子供の泣き声ですか。いくらなんでも子供と一緒にいたときに殺すとは思えませんし、なにより、そんな時間に起きてるとは思えませんかね」

「正式な死亡推定時刻はどうなつとるんじゃない？」

「死亡推定時刻は夜中の2時〜3時の間。近辺で暮らしているホームレスは殆ど寝てたそうですし」

「繁華街の人たちには訊かなかったんですか？」

「あの時間だと、盛り上がってて、誰がどこにいたとか、わかったもんじゃないですよ」

阿弥陀警部がそう言うのと、彼の携帯が鳴った。

「あ、はい。阿弥陀ですけど？ どうしたんですか？」

「あ、警部？ ちょっと戻ってきてくれませんか？ ちょっとへんな人が本庁に来てまして」

電話の相手は岡崎巡査である。

「えっと、落ち着いて、順をおって話してくれませんか？」

「それが、穠原と名乗る人物から、手袋と粉が入った袋を渡された

んです』

「穉原さん？」

弥生がそう言うのと、「お知り合いですか？」と阿弥陀警部に尋ねられ、「え、あ、はい」と弥生は答える。

「その穉原さんがどうして警視庁に？」

『今もってきたものを鑑識課に渡して調べてもらってるんですけどね。その、手袋は何なのかわかりませんが、白い粉はおそらく……』
電話の先にいる岡崎巡査が誰かと話している。

『ちよつと、電話変わるぞ。阿弥陀警部』

「湖西主任？」

電話が変わったのは湖西主任である。

『今鑑識結果が出たんじゃけどな、白い粉は覚せい剤じゃったよ』

「なっ！？ 覚せい剤？」

阿弥陀警部がそう叫ぶと、「どうして、穉原さんがそんなものをもってるんですか？」

弥生が電話の先にいる、湖西主任に尋ねる。

『いや、一応確認のために、その穉原という青年の血液を検査したがな、まったくの陰性じゃったから、安心せい。ただ、その手袋に付着していた血液なんじゃよ』

湖西主任がそう言うのと、「なにかわかったんですか？」と阿弥陀警部が尋ねる。

「手袋にわずかじゃが、血が付着しておつてな、それが鈴崎司郎を殺した凶器である鉄パイプについていた血痕が一致したんじゃよ」

「それじゃ、犯人は穉原さん？」

弥生はそういうや、崩れるように座り込む。

『阿弥陀警部、ちよつと弥生ちゃんに代わってくれんか？』

そう言われ、阿弥陀警部は携帯を弥生に渡す。

『弥生ちゃん？　なんか勘違いしとるようじゃから云っておくが、彼はある人から受け取ったと云っておるんじゃないよ』

電話越しで湖西主任が、弁解する。

「ある人？」

『それに、早くしないと、取り返しのつかないことになるかもしれないとも云っておったな。一応参考人として、一日、二日はこつちの世話になってもらうがな』

湖西主任がそう伝えると、電話を切った。

「湖西主任はなんと？」

弥生から携帯を受け取った阿弥陀警部がそう尋ねると、

「穠原さん、早くしないと、取り返しがつかないかもしれないって」

「穠原さん、誰にもらったんだらう」

皐月がそう言うのと、スーと、障子襖が開いた。

入ってきたのは瑠璃である。

「瑠璃さん、どうかしたんですか？」

皐月がそう尋ねると、瑠璃は阿弥陀警部を一瞥する。

「阿弥陀警部？　児童虐待の疑いがあった場合においても、現行犯じゃなければ連行することも出来ないんですよ？」

瑠璃がそう尋ねると、「ええ。それがどうかし」

「浅葱から報せがあつて、李夢の家から、変な気配がすると」

「それだったら、どうして浅葱が調べないの？」

皐月がそう尋ねると、瑠璃は怪訝な表情を浮かべた。

「李夢さんには、虐待された形跡があつたんです。それに母親である華蓮は、李夢の存在を疎ましく思っていました。そんな状態で、李夢さんはいったい何をしますか？」

阿弥陀警部にそう言われ、

「悲鳴を挙げることに出来ない？」

弥生がそう言うのと、「私もそう思ったけど、でも、穠原と接して

いた李夢は、心から喜んでいて。だからあの子は、穂原にすべてを託したのよ」

何時の間にかいたのか、浅葱がそう言うと、

「では、借金とかは」

「多分、薬を買って出来たんでしょうね。それに、自分の体を売っていたこともわかったわ。李夢はその中で生まれた子供だったこと」

浅葱がそう言うと、阿弥陀警部は少し顔を歪め、

「町長は綺麗な町づくりとして、李夢さんを児童養護施設から母親の元に戻した。その母親は娘を疎んじている」

「なによ、それ？ それじゃ、李夢ちゃんがかわいすぎるじゃない！」

臯月がそう云うや、「だから私は、李夢が穂原に助けを求めたのも理解出来」

浅葱が言葉を発しているとき、阿弥陀警部の携帯がもう一度鳴った。

「あ、はい」

『阿弥陀警部？ 至急現場まできてください』

「現場？ 何か事件でもあったんですか？」

『はい、火事が起きてるんです。場所は浅葱橋の繁華街近くにある』

場所を聞くと、阿弥陀警部は目を大きく開いた。

「臯月さん、急いでください！ 現場は李夢さんの」

「って云われても、場所知りませんよ」

臯月がそう云うや、「煙々羅っ！ 臯月を案内してあげてください！」

瑠璃がそう呼びかけると、煙々羅が姿を現し、臯月を案内する。

「臯月、これを！」

弥生が二本の竹刀を投げ渡すと、臯月はそれをもって走り出した。

「大禿おおかぶろ、あなたいったい何を考えているの？　あなただっいたらわかるでしょ？　同じことをされたあなたなら」
浅葱は苦しむような歪んだ表情を浮かべていた。

現場に駆けつけた皐月と煙々羅は、その光景に絶句していた。
赤々と燃え盛るその炎は、今にもアパートを燃やし尽くそうとしている。

パトカーやら、消防車のサイレンが聞こえ、消火活動が行われようとしていた。

「煙々羅っ！　中に入って、人がいないか確認してきて。遊火もお願い」

皐月にそう言われ、遊火と煙々羅は炎の中へと消えていく。
「危ない、崩れるぞ！」と誰かが悲鳴に近い大声を挙げると、崩れるような音が聞こえ、さらに炎は勢いを増していく。

「遊火っ！　煙々羅っ！」

皐月がそう叫ぶと、「皐月さま！　こちらに来てください」

炎の中から遊火の声が聞こえ、皐月はそちらに行こうとするが、

「駄目じゃないか、君！　これいじょう近づいたら」
男性が皐月を食い止めようとする。

「今大事な仕事してるんですから、邪魔しないでくれませんか？」

煙と化した煙々羅が、男にまきつく。その間、皐月は逃れるように炎に近づいた。

「そういえば、煙の妖怪だっけ？」

皐月が感心するように言う。

「皐月さま、中に子供がいました。ただ、気を失っていて」

遊火がそう言うと、と皐月は遊火を後ろに下がられるや、

「吾神わが殿に祭られし大黒の業いさむよ！　今ばかり我に剛の許しを！」

皐月がそう天に叫ぶと…… 両手に持っていた二本の竹刀が次第に刀へと変わっていく。

「二刀・赫破狩もみじがりっ！」

皐月は二本の刀を、水平にし、ドアに切りかかった。

ドゴンという爆発音とともに、皐月はドアごと吹き飛ばされた。その一瞬の光景に、遊火は唾然としている。

「皐月さん？ 何も考えないで、ドアを壊したら、バックドラフトが起きるくらい、学習してください」

煙々羅がそう皐月に声をかける。その皐月は、咳き込んでいる。「そ、そういうのを先に言ってくれないかな？」

皐月は遊火を一瞥すると、遊火は申し訳ないように顔を俯かせている。

「そつだ！ 李夢ちゃん」

皐月がそう言いながら、立ち上がった時だった。

ガラガラと大きな音を立てながら、アパートは崩れた。

玖・役割

翌朝のことである。

警視庁のソファに、弥生と拓蔵が座っていた。

「すまん、朝早くから」

湖西主任が、コーヒーを片手に、弥生と拓蔵に声をかける。

「まったくじゃよ。それで母親の容態はどうなんじゃ？」

拓蔵がそう尋ねると、「いまいち理解できんがな、火傷やらの外傷は多少あつたが、命に別状はなかつたよ。ただ、やはり薬をしていたことは間違いないようじゃな」

湖西主任の言葉に、弥生は首を傾げる。

「臯月ちゃんがドアを壊さなければ、二人ともあのままお陀仏じゃつたろうな。まあ、それがあの妖怪が伝えたかつたことじゃろつし」
湖西主任はそう言いながら、向かい合わせにソファに座った。

「それと穠原といつたかの？ 彼が李夢さんから手袋と薬を受け取つたのを供述してくれたよ。全く、わしらを少しは信用してほしいもんじゃな？」

「穠原さん、なんて？」

「児童虐待が減らないのは、あんたら警察や、行政が被害にあつてからじゃないと動かないから、減らないんだろつ？つてな」

湖西主任がそう言うと

「わしが子供のころは、近所の人当たり前に怒つたりしておつたからな。今じゃそんなのがないじゃろ？」

「どんな形であれ、人は繋がつておつたからな。今じゃ、隣の人は何する人ぞというより、家の人間は何する人ぞの時代じゃからな」

拓蔵と湖西主任の会話を聞きながら、弥生は背後に気配を感じた。

「あれ、弥生さん？」

声をかけたのはほかでもない、穂原である。その隣に阿弥陀警部が立っている。

「この度は、事件に協力していただき、ありがとうございました」
阿弥陀警部がそう云うや、穂原は思いつめた表情を浮かべた。

「どうかしたんですか？」

「あの、李夢ちゃんは、大丈夫なんでしょうか？」

穂原がそう尋ねると、「ええ。李夢さんは無事じゃったよ。ただ、精密検査なんかしないといけんから、すぐには会えんがな」

湖西主任がそう言っていると、穂原はホッと胸を撫で下ろした。

「それで、実は皆さんに相談があつて」

穂原がそう言つと、その場にいた四人は驚いた声を挙げた。

病室で眠っている李夢の頬を、瑠璃がやさしく撫でている。

「露世に漂いし、生命の魂よ。このものの傷を癒したまえ」

そう瑠璃が言つや、傷付いた李夢の傷は徐々に消えていく。

「これで、体の傷はなくなりましたが、心の傷はおそらく癒えないでしょうね」

瑠璃が病室にいる皐月と浅葱に声をかける。

「でも、どうしてあの時、アパートに、李夢ちゃんと、母親以外の人がいなかったのかしら？」

「多分、火事が起きたのを、誰かが教えたんでしょうね。だからみんな逃げ延びていた」

皐月の質問に、浅葱は答えながら、一辺を見据えた。

「そうでしょ？ おおかぶろ 大禿」

浅葱の視線の先には、小さな女の子が立っていた。

その容姿は、十歳ほどの少女であり、服装は紅い木綿の着物である。

髪型はおかっぱ頭で、まるい印象がある。

「李夢の境遇が、自分と同じだったからほっとけなかったという、あなたの気持ちもわかるけどね？ 下手をしたら、彼女を殺すところだったのよ」

浅葱はそう言いながら、大禿おおかぶろに言い寄る。

「浅葱。そのへんにしたら、あんたと違って、彼女は人に姿を見せられないのよ？」

皐月がそう言うと、

「だったら、どうして頼ろつとしないのよ？ 同じ遊女でしょ？ 姉女郎に甘えたっていいじゃない？ そりゃすぐに赦せとはいわないけど」

浅葱がそう言うと、大禿は李夢に近づき、髪を撫でた。

「浅葱、大禿はどうして妖怪になったの？」

皐月がそう尋ねると、「大禿がまだ人間だったころ、姉女郎が鉄漿ね、つまりお齒黒をしていたときに、うまくそれがつけられなくて、癩癩かんしゃくまわ回しの八つ当たりになり、鉄漿かねを禿かむろの口の中に入れたの。禿はその熱さに悶絶し、絶命した」

「つまり、李夢さんを庇った理由は」

瑠璃が大禿を見ながら言う。

「親の身勝手な虐待が、かつての自分の姿とダブったんでしょね」

浅葱はそう云うや、

「やっぱり、李夢さんを火事から護ったのは」

「妖怪だからといって、人を護る妖怪もいます。ただ、大禿は李夢さんだけを護りたかったようですけどね」

瑠璃がそう言うと、皐月は首を傾げた。

「李夢にとって、もっとも危険な存在は何ですか？」

「えっと、母親……」

皐月は瑠璃の問いかけにハツとする。

「それじゃ、母親が助かったのって」

「子供にとつて、どんな形であっても、母親は彼女だけだったといふことですね。これに懲りて、改心してくださると、地藏菩薩としてはありがたいんですけどね」

瑠璃はそう言いながら、空を眺めた。

虐待によって死んだ子供の数は、厚生省の発表によれば、平成20年（二〇〇八年）において、64例67人の児童が虐待死しているとされている。

そのうち、最も多いのが、0歳児といわれている。また、加害者の多くは実の母親であり、望まない妊娠が多くを占めていた。

瑠璃は昔、自分はどうして拓蔵を好きになり、その間に、三姉妹の母親である遼子を産んだのだろうか、後悔したことがある。

だが、地獄で地獄裁判の仕事をしながらも、その暇、拓蔵と遼子が楽しそうに暮らし、遼子が健介と結婚し、三姉妹が生まれていく。そんな幸せそうにしている姿が、強く印象に残っていた。

夫である拓蔵や自分と同じ十王、そしてそれを知るもの以外は、自分が皐月たち三姉妹の祖母であることは知らない。

「皐月、今回は閻獄を私に言い渡させてくれませんか？」

瑠璃はそう言うと、スツとお札を取り出した。

「わが子を痛めつけ殺そうとし、剩^{あま}れ、自分の利益のために利用した赤口華蓮を、閻獄・第一条『等活地獄・多^{たく}苦^く処^{じょ}』へと連行する」

条例を言い渡すと、お札は消え、別の病院で眠っている華蓮の額に付くや、燃え尽きた。

皐月は条例を言っていた瑠璃の表情を見ながら、齒痒く感じてい

た。

等活地獄は八大地獄の中でもっとも軽い場所である。だからこそ、瑠璃にとっては、それ以上の無間地獄に落としたかったのだ。

子供を殺すことは、確かに大罪ある。

しかし、仏教における、最も重い罪とされる『五逆』において、子供を殺すことは入れられていない。瑠璃にとってもそれが歯痒かった。

神とはいえ、禁忌とされている人との繋がりである。

それだけでも大罪だが、瑠璃はそのことを後悔してはいない。

自分が苦しい思いをして産んだ子供を、簡単に殺せてしまう人間の思考が理解できない。

それが、彼女は歯痒かった。

拾・引き取り

バシヤツと、何かが水にあたる音が、響き渡る。

「びつくりした」と葉月が声を挙げている。

彼女は薄着をしており、服の色が白いためか、濡れた服が肌につき、薄いピンク色の突起物が見えている。

「しかし、よくビニールプールなんてあるの覚えてたわね？」

ホースの先を摘み、水を飛ばしている弥生が、縁側で桶に水をはり、それに素足を入れている皐月に尋ねる。

「ちよつと思いで出してね。ほら、よくお父さんが忙しくて、海とかにいけなかったでしょ？　それで私が駄々捏ねちゃって、買ってもらったの思い出したの」

「あー、確かにそんなのあったわね。あなた、お父さん子だったから、よくお父さんと一緒に行くなんて言ってたっけ？」

皐月は真っ赤になるが、真実である以上、言い返せなかった。

「それで、穠原さんが言ってたことって実現できそうなのかな？」

「それはちよつと難しいわね。一度児童養護施設に預けられるけど

「
弥生はそう言いながら、あの時のことを思い出していた。

「り、李夢さんを引き取る？」

弥生がそう云うや、穠原は頷いた。

「あなた、いくらなんでも」

「いえ、あの子があんな目に遭っていたなんて思ってもませんでしたけど、どうして僕にSOSを出したのか、彼女に何時の日か直接聞きたいんです。でも、あの母親の元に戻したら、あの子は」

穂原がそういうと、

「確かに、二度としないという保障はないな。ただ、李夢さんは、もう一度児童養護施設に入ることになるんじゃないよ？」

湖西主任がそう尋ねる。

「わかってます。それに僕だって、すぐに彼女を引き取れるほどの経済力はないです。大学を卒業したら、働きます。いや、今からバイトを探して、地盤をしっかりとってからでも遅くないですよね？」

穂原がそう言うと、拓蔵が、

「あんたが本気でそう思っておるんじゃないやったら、立派な男になって、あの子を引き取ってやってくれんかの？ 他人を護りたいと思う気持ちは、容易なことではないがな」

「はい。覚悟はしています」

「後は児童養護施設との相談や、引取りにおける裁判云々、色々やらないといけないらしいわね」

弥生はそう言いながら、どこか楽しそうだった。

「どうかしたの？」と葉月が尋ねる。

「いや、李夢さんがどうして、あの日あの駅にいたんだろうって思ってたわね」

「そういえば、始めてあったとき、母親が家から抜け出したっていつてたわね？」

「子供が裸足で、遠くに行くのはつらいのよ」

弥生がそう言うと、

「それじゃ、李夢ちゃんは最初から」

「ええ。多分だけど、大禿があそこまで案内したんでしょうね。李夢さんを護ってくれる人が来てくれるって」

それが穂原だったのかは定かではない。

誰かが役場内にある町長室のドアを蹴り破った。
「いったい何をしてるんですかね？」

中に入ったのは数人の警察である。その中に阿弥陀警部も含まれている。

「き、君たち！ い、いったい何者だ？」

慌てふためく町長が、震えた指で阿弥陀警部らを指した。

「見てわからないんですか？ 警察ですよ。あなたを不当な方法を遣った疑いと、殺害を依頼したことに對してね」

「な、何を言っているんだ？ 私は何も知らんぞ」

「そうですか？ それじゃ、この二人をみても？」

阿弥陀警部はそう云うや、黒服の男二人を目の前に投げ入れた。

彼らはあの時、華蓮と話をしていた黒服の男たちである。

「彼らから聞きましたよ。あなた、自分の条約を実行させるためにお金を使って、ある家族を利用してましたね。それを不審に思った鈴崎司郎を殺害させるためにも利用した」

「い、いったい何を言ってるんだ？ 私はそんなこと知らんぞ？」

町長が慌てふためくと「好い加減にせんか？ 自分の思い通りにならんから、人生は面白いんじゃないやろうが？」

そう言いながら、王様^{ロウ}が町長室へと入っていく。

「お、お前はあの公園のゴミ虫ではないか？ こんなところに何のようだ？」

「人の名前を使って、少女を襲ったのもお前か？」

「い、いったい何のことだ？ いったい何の冗談だ？ 私は町長じゃぞ？」

町長がそう言うと、阿弥陀警部と王様^{ロウ}は顎を挙げた。

「あなたを最重要参考人として、連行します」

町長の周りに数人の警官が立ち、町長の腕を後ろに回す。

「や、やめる！ お前たち、こんなことしてなんになると思ってるんだあ」

町長は喚きながら、連れて行かれた。

「葉月さんの霊視は間違ってますね。手袋の裏に犯人の指紋が付いてましたよ」

葉月が霊視をしたときに聞こえたのは、母親を止めようとした李夢の泣き声であった。

ただ、声を知らなかったため、それに気付けなかったのである。

「しかし、犯人が手袋を捨てていなかったのは、まさに運だと思っただじやろうな？」

王様^{ロウ}はそう言いながら、阿弥陀警部を見たが、

「いや、おそらく李夢さんは、母親が遣ったことに違和感があったんでしょうね。だから、家が燃える前に、血の付いた手袋を、誰かに渡したかった」

いや、指紋がなくても、被害者と同じ血痕が付着していたのだ。

それだけでも十分証拠となった。

後日、町長は汚職と不当な方法で条約を果たそうとした罰によって、辞任し、刑務所に連行された。

鈴崎司郎殺害においては、町長に命令された華蓮が、実行犯であり、犯行を認めた。

しかし、臯月を襲わせたことに対しては、いまだに認めていない。

拾巻・子供

浅葱橋の手摺に、橋姫である浅葱が足をブラブラさせながら座っている。

彼女は、橋を行きかう恋人や家族を見ながら、彼らがこれから先も、幸せであってほしいと願った。

そうでなければ、自分が望んで人柱になったのか、わからなくなるのだ。

浅葱がこの橋を護る神となったのは、孤立していた遊郭にいる遊女たちが、見世物小屋にくる客以外の男と知り合い、あわよくば、結ばれてほしいと思った。

それはかつて自分が、民宿街の若旦那であった喜助を好きになったことに対する答えである。

ただ、今は、数年後の李夢と穠原が幸せであってほしいと心から願っている。

そうでなければ、大禿の思いが無駄になってしまうからだ。

大禿はあの火事の時、李夢だけを助けようとしたが、李夢はそれを拒否した。

大禿はその行為に理解出来なかったのだ。

自分を痛めつけている母親を護ろうとする李夢に困惑しながらも、大禿は二人を護ったのである。

「人は変わる。変われなかったら、またあなたが李夢を助ければいいでしょ？」

浅葱はそう言いながら、ゆっくりと姿を消した。

空は快晴。雲ひとつない。
人の心も、そんな風になればいいのと、浅葱は思っていた。

拾巻・子供（後書き）

はい。第十二話終了です。感想なんかありましたら、よろしく願
いします。

巻・序曲

「んっ」と、少女の淡い吐息が、男の耳元を掠める。

少女の顔は紅潮としており、口はだらしなく半開き。目はトロンとして、視点があっていない。

男はただ無我夢中に、少女を愛撫している。

少女は体をピクンツと硬直させるや、仰け反り、男性に巻きつかせていた腕をだらりと落とした。

男はベッドに腰を下ろすと、煙草を一本、口に啜え、紫煙をふかした。

月の光が窓から差し込み、部屋の中が滲んだように明るくなる。

余韻に浸るかのように、少女は肩で息をしながら、男性を見つめ、「今度のアレ、手筈通り進めてくれるんですね？」

少女がそう尋ねると、男は「大丈夫だ。それくらいでへマを起すわけがないだろう？」

男はそう言いながら、少女の上に寄りかかる。

「本当に、私を」

少女は言葉を濁らした。

そして、徐に起き上がると、背中が男の顔に当たる。

男は覆い被さるように、少女に押し掛かっていた。

「もう一回くらいいいだろう？ 君は上玉だからな。わたしの云うとおりになれば、いくらでも稼げる」

男はそう言いながら、少女の華奢な軀を嘗め回すように、触り始める。

少女は、先ほど絶頂した時よりも、深くどんよりとした虹彩を浮かべていた。

それは最早、希望を手に入れようとした『絶望感』に他ならなかった。

あるオフィス街の一角に、古びたビルがある。

その2階に『橋本芸能プロダクション』と書かれたプレートが貼られた部屋があった。

部屋の中は殺風景としていおり、あまり人が多くはなかった。

「はい。わかりました。それでは失礼します」

男性 河本秀隆こうもとひでたかが、携帯越しの相手に、頭を下げて対応する。

目の前に相手がいらないのに、頭を下げてしまうのは、日本人の性根なのだろうか？

兎にも角にも、電話先の相手はイベント主催者で、結構大きいイベントのようだ。

「やったな、燈愛あひ。今年の夏フェスに出れるぞ！」

秀隆は興奮気味に、ソファに座っている少女 燈愛に声をかける。

容姿は16歳といったところか、肩まで伸びた髪は、赤茶色でウエーブがかかっている。

幼い雰囲気がある以外は、どこにでもいる普通の高校生に見えるが、彼女はこの事務所に所属しているアイドルである。

「うん」と、燈愛は素っ気無い返事を返す。

「どうした？ あの夏フェスだぞ？ 人気があるとはいえ、まだデビューして3年しか経っていないお前が、こうやって出れるんだ。もう少し喜んだらどうだ？」

秀隆はそう言うが、燈愛はどこか上の空である。

夏フェスというものは、季節ごと開催されるロック・フェスティバルの俗称であり、夏に行われるものを言う。

ロックを中心とした音楽イベントであり、多数のアーティストが参加することから、集客数が多く、また、出演アーティストの人気のパロメーターを意味している。

ただし、ロック・フェスティバルと題しているので、ロックアーティストしか出ることには出来ない。

燈愛はアイドルであるゆえ、本来ならば出ることには出来ない。しかし、イベント主催者から、出演依頼がきてるのだ。

そのことから、秀隆はあまりにも大きなイベントであるがゆえの緊張感からきているのだらうと、それ以上のことは訊かず、今日の仕事についての打ち合わせを始めた。

「それじゃ、今日はTVの歌番組があるから、衣装と番組進行の打ち合わせ。それから少しばかり休憩してから、歌の練習」

秀隆が手帳を読みながら、燈愛を一瞥する。

その表情は真剣な表情で、話を聞いていたため、ホツとした。

「河本さん。どうかしたんですか？」

燈愛がそう訊くと、秀隆は、誤魔化すように、咳をした。

「今日の歌番組は、生放送だからな。失敗は許されないぞ」

「はい」

「よし。それじゃ、出かけようか」

そう言うのと、秀隆はかけていた上着を羽織り、ドアを開くと、そこには男性が立っていた。

「河本くん。これから仕事かい？」

男性がそう尋ねると、秀隆は頷いた。

「はい、社長。これからTV局に」

「そうかい、そうかい。燈愛はうちの稼ぎ頭がしらだからね。存分に売れてもらわないと」

社長である橋本隆平は、燈愛を見た。

「今日もまた、一段と可愛いな。アイドルはやはり、癒しの対象でもあるからな」

「あ、はい。今日も頑張つてきます」

燈愛はそういうや、深々と頭を下げる。

俯いたとき、燈愛は誰にも聞こえないほどの声で『死んでしまえ』と呟いた。

き・序曲（後書き）

はい。第十四話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0221r/>

姦～霊能三姉妹の怪奇事件簿～

2011年9月27日01時16分発行